
とある武術の対抗手段（カウンターメジャー）

neoblack

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある武術の対抗手段 カウンターメジャー

【Nコード】

N1558K

【作者名】

neoblack

【あらすじ】

東京西部の大部分を占める学園都市では、超能力を開発するための特殊なカリキュラムを実施している。

総人口約230万人。その八割を学生が占める一大教育機構に、一人の男が転入してきた。
男の名は字緒廷兼郎 あざおていけんろう。彼が学園都市に来た目的は超能力ではなく、武術だった。

科学と魔術と武術が交差するとき、物語は始まる。

『二人の舞月の住む世界』とのコラボとして、本作品の主人公、字緒廷兼郎がそちらの作品に登場しております。そして本作品には『二人の舞月の住む世界』の主人公、舞月外樹に登場しております。

匹夫之優：一（前書き）

当小説は『とある魔術の禁書目録』『とある科学の超電磁砲』の二次創作です。この二作品の世界観の中を、オリジナルキャラや独自の設定を盛り込みながら創作していきます。お楽しみいただけると幸いです。

匹夫之優：一

突き抜けるような青空を背景に、居並んだ風車はなだらかに回転している。まるでオランダのようだが、この風車はあくまで発電用であり、民家と一体になっていたりはいらない。だが、却って無機質な白い羽根であるからこそ、青空に映える。

字緒廷兼郎あまおていけんろうは、物珍しそうに風車を眺めていた。外の学校から学園都市に転校してきた彼には、この街に溢れる科学技術の全てが珍しく、とても新鮮なものに映っていた。前日には、警備ロボットに釣られて繁華街を一日中歩き回り、学校をサボってしまった。

はたと気がつくのと、風車を呆けて眺めてる廷兼郎ていけんろうを、通行人が白い目で見ている。この街では、科学を珍しがる人間こそ珍しい。バツの悪い顔をして、廷兼郎はその場を後にした。

学園都市に越してきて三ヶ月になるが、未だにああした最先端技術には慣れ親しむことはできない。廷兼郎としてはそうした技術は嫌いではなく、むしろ楽しいものだと感じているが、その技術のほうに拒絶されているような気がしていた。特に家電などは扱い得ない人間に対してとことん冷たい。あの甲高い電子音が「もう触るな！」という抗議にも聞こえる。

家に帰ってお昼ごはんをレンジで調理することを思って、廷兼郎は少し憂鬱な気分になった。こういうときは何も考えず、無性に体を動かしたくなる。

食べ終わったら近くの公園で立禅をしようと思いついた矢先、廷兼郎の携帯端末に通信が入った。

「はい、こちら字緒です」

廷兼郎は携帯端末に関しての習練だけは、学園都市に来る前から扱っているので人並みである。

「網丘よ。あみおか 字緒くんがいる場所の二ブロック先の公園で喧嘩が起こつてるわ。両者ともにレベル3で、周辺に被害が拡大中。可及的速やかに鎮圧しなさい」

「了解。至急向かいます」

網丘からの連絡を聞いてる間に、廷兼郎は現場へ向けて走り出していた。

「アンチスキル ジャッジメント 警備員や風紀委員の動きは？」

「当該能力者を包囲しつつ、一般人を避難させてる。鎮圧まで手が回るほどの人手は揃ってない」

「俺一人で相対する、理想的な展開ですな」

「ええ。私たちの点数稼ぎに丁度良いわ。間違っても返り討ちにならないですよ」

「そちらこそ、ちゃんとモニタリングしてくださいよ」

携帯端末を耳に引っ掛けて固定し、廷兼郎は現場へ急行した。

柵を一飛びで超えて雑木林を走り抜けると、公園の中に人影は皆無となっていた。避難はほぼ完了しているようだ。そして公園の中央では、二人の学生が自己の能力をフルに發揮して喧嘩をしていた。一方の学生が見えない力でブランコを解体し、鉄材を投げつける。もう一方は迫り来る鉄材に対して、前面に出現させた火球で迎え撃ち、爆発させて攻撃の悉くを弾いてみせた。

恐らくはテレキネシス《念動力》とパイロキネシス《発火能力》の能力者なのだろう。何やら相手に向かって罵り言葉を叫びながら、岩だの火だのを投げつけあう様は、遠めにはシユールにすら感じられる。

二人とも、目の前の敵以外に何も見てはいない。彼らがどういった経緯でこのように争うこととなったのか、事情は彼ら自身の口から聞くほか無いため、廷兼郎は二人から見える位置まで出てきてから、よく通る声で勧告した。

「公共施設での危険な能力使用、器物破損等の現行犯で逮捕、拘束する。ただち能力の行使を中止し、両手を頭の上に乗せてうつ伏せになれ」

突然現れた第三者に、二人は言われたとおり能力の行使を中止したが、その矛先は廷兼郎へと向けられた。

「何だよ。お前、ジャッジメント風紀委員か」

「そつだよ。無能力者《レベル0》だけどな」

「無能力者《レベル0》だと？」

「無能力者《レベル0》が、強能力者《レベル3》の俺らを捕まえるつてのか？」

「仕事だからな。しょうがないのさ」

「無能力者《レベル0》は引つ込んでな！」

パイロキネシスト《発火能力者》が大げさに腕を振ると、連動して炎が球状となって廷兼郎に飛来した。

向かい来る鉄材を吹き飛ばした、あの火球である。野球ボール大のものが十個ほど、廷兼郎目掛けて殺到するが、彼はその場から一歩も動かず、火球を黙視している。

火球が着弾すると同時に爆発し、土煙がもつもつと上がる。廷兼郎のいる部分を含めて、地面が吹き飛んだようである。

立ち上っていた煙が風に流されて消えると、そこには無残に砕かれた地面と、破れた衣服の破片が見えていた。

「うえっ!？」

二人は息もぴつたりに驚愕の声を上げた。そこにいるはずの人間がいないのだから、それも已む無しである。

パイロキネシスト《発火能力者》の彼としては、周りに着弾させて威嚇する意図だったが、もしや直撃して跡形も無く吹き飛んでしまったのかもしれない。とすれば能力使用による殺人行為を行って

しまったということであり、言うまでも無く重罪である。

一瞬、自分には背負いきれぬほど重い罪を意識したパイロキネシスト《発火能力者》は、無防備極まりなかった。

そんな学生の首に腕を巻きつけ、数秒も掛けずに失神させることなど、廷兼郎には造作もなかった。

倒れる体を支え、両腕に手錠を施すと、最早用は無いとばかりにパイロキネシスト《発火能力者》を放り捨てた。

二人から離れた場所にいたテレキネシスト《念動力者》は、突然パイロキネシスト《発火能力者》の後ろに出現した廷兼郎が、公園の藪の中から出てくるのが見えていた。

攻撃によって上がった煙を利用して姿を隠し、藪の中を進んで回り込み、相手の背後を突く。無音殺人術サイレントキリングの応用である。

今度は標的をテレキネシスト《念動力者》に定め、廷兼郎は身を撓たわめた。その時、緊迫したこの状況に似合わぬ電子音が鳴り響いた。興が削がれた廷兼郎は、舌打ちして耳元に付けた携帯端末の通話ボタンを押した。

「何すか、網丘さん。もう終わるところですよ」

「まだ仕留めてないのね、よかった。アンチスキル ジャッジメント警備員も風紀委員も到着が遅れるの。せつかくだから、もう少し時間掛けましょう」

廷兼郎には、その説明で理解するには十分だった。

「それじゃあ、正々堂々やりますか。そのほうが良いデータ取れるんでしよう」

「悪いわね、手間を掛けてしまって」

「特待生の辛いところすな。でも、嫌いじゃないですから、こういうの」

通話を切り、改めてテレキネシスト《念動力者》と相対すると、廷兼郎は軽く柔軟を始めた。能力者が今にも襲いかかるうという状況で、何とも余裕の伺えるパフォーマーだった。

その姿を見て、テレキネシスト《念動力者》が眉根をひそめる。

「お前、本当に無能力者《レベル0》か？」

テレキネシスト《念動力者》の問いに、廷兼郎は失笑を返した。

「お前ら黙らすのに、超能力なんて要らないよ。強能力者《レベル3》のテレキネシスト《念動力者》さん」

確かに見た目には能力を使っていないが、何かあるはずだとテレキネシスト《念動力者》は考えていた。というよりも、無能力《レベル0》が強能力《レベル3》をこつとも簡単に制圧できると言う事実を、受け入れたくない故の思い込みかもしれない。

警戒し、後ずさるテレキネシスト《念動力者》を見て、廷兼郎はがっくりと肩を落とした。

「ビビってんなよ、強能力者《レベル3》。学園都市は能力至上主義なんだろ。自分より低い能力者に舐められて黙ってるのは、どうかと思うね」

話しかけながら、別段構えを取ることもなく、廷兼郎は歩み寄る。そんな彼を振り払うように、ひしゃげた鉄材が真横に振るわれる。

廷兼郎は、まるで暖簾のれんでもくぐるような気軽さで頭を下げ、鉄材をやり過ぎした。風を巻いて襲い来る大きな鉄材に対して、恐怖はおろか、関心すら払っていない様子だった。

「あのさ、頭に当てるなら当てるで、ちゃんとやろうね。その度胸が無いなら、足とか手とかを叩いて怯ませればいい。そういうこと考えて戦おうよ」

「うるせえんだよ！」

両の指より多い鉄材が空中を舞う。それぞれが意思を持つように描く入り組んだ軌道の真っ只中で、廷兼郎はあろうことか、通話中であつた。

「どうですか、網丘さん。いいデータ取れました？」

「ええ。回避運動のパターンデータね。いい感じよ」

「そりゃあよかった。何というか彼、大能力《レベル4》に近いも

のがありますね」

「そうねえ。強能力《レベル3》からの発展途上、と言ったところ。そろそろ仕掛けていいわよ」

「ですね。敵さんも疲れてきたようだし」

通話している間、鉄材は廷兼郎の服に掠ることすら無かった。舞い落ちる木の葉のようにひゆるひゆると避ける廷兼郎の動きを、テレキネシスト《念動力者》は追いきれずにいた。

人が運動する際、必ずといって良いほど筋肉を可動させる。つまりは踏ん張ってから運動するものだが、廷兼郎の動きにはその踏ん張りが見られない。

これは先に体を傾け、その方向へ倒れるエネルギーを推進力に変えているためである。日本の武道では「無足」と呼ばれている歩法の応用である。勿論、本当に倒れてしまつては大きな隙が生まれるので、正中線を崩さぬ絶妙のバランス感覚と、敵の攻撃を予測する目の良さが無ければ成り立たない回避方法である。

特段に速いわけではないが、筋肉の踏ん張りが無いため、相手には何時どう動くかが非常に分かりにくい。武術の心得の無い、超能力を持つ以外は普通の学生であるテレキネシスト《念動力者》の彼には見切れない。

「何で、何で当たらないんだよッ！」

いらつきが焦りを呼び、徐々に近づく敵の姿が恐怖となつて体中に染み渡つてきた。それでも自分を奮い立たせ、彼は鉄材の操作を放棄した。

抛り所を失つた鉄材が、廷兼郎の体目掛けて次々と落下する。敵が鉄材の操作を放棄したことで機と判断した廷兼郎は、ここで一気に間合いを詰める。落ちてくる鉄材の下を潜つて、テレキネシスト《念動力者》に肉薄する。

廷兼郎の全身に怖気が走る。鉄材の操作を放棄したテレキネシスト《念動力者》であつたが、彼の目は断じてこれから縛ばくにつこうと

する人間のものではなかった。敵意を秘めた強い瞳が、廷兼郎をしかと見つめていた。

「ぐあッ！」

怒声と共に、何か目には見えない力の塊が、テレキネシスト《念動力者》から放たれた。

テレキネシス《念動力》とは、目には見えない力によって離れた物を動かす能力である。自分だけにしか感じられないもう一つの腕を自在に操り、自身では一切触れることなく対象に影響を与える。だが不可視の力場と言えど、何かを操作して攻撃しているのなら、その何かを避ければ大抵は無事で済む。先ほどの鉄材が良い例である。

そんな不可視の力場を、彼は敵に向けて一気に開放した。

鉄材を自在に振り回す力を、単に相手へと叩きつける。鉄材とは違って不可視なのだから、避けてみせることなど不可能だ。

当たれば吹き飛ぶどころでは済まさない。そのまま掴んで持ち上げ、地面に叩きつけてやる。

必勝の予感に顔を引きつらせたテレキネシスト《念動力者》が見たのは、即座に右へ大きく踏み込む廷兼郎の姿だった。

先ほどまで廷兼郎が居た場所から体一つ分ずれ、その場所を不可視の力場が空しく通過するのを、テレキネシスト《念動力者》は痛いほどに感じた。そして踏み込んできた廷兼郎が左足を振りかぶったところで、彼の意識はぶつっつりと途切れた。

匹夫之優：二

自分でも会心のブラジリアンキックをかまし、気絶したテレキネシスト《念動力者》に手錠をかけると、ようやく他の風紀委員ジャッジメントが到着した。空間移動レポートで現れた女学生は、既に収束している現場を見て、どういふことかと首を傾げた。

「風紀委員ですの。ここで能力者が喧嘩をしているという通報があったのですが……、既に終わっているようですよわね」

廷兼郎の腕章を見ると、おやつとまたも首を傾げた。

「あなたも、風紀委員ですの？」

「ええ、そうですが、何か？」

「この辺りの風紀委員にしては、見ない顔ですよ」

廷兼郎はここへ越してきて三ヶ月しか経っておらず、風紀委員ジャッジメントに登録したのは先月のことなので、見慣れないのも無理はなかった。

「風紀委員になったのが、先月からなんです」

「そうでしたの。ごめんなさい。失礼な言い方をしてしまって。最近、風紀委員ジャッジメントでもないのにこうした事件に関わろうとするおせっかいが多いんです」

「へえ。そんな人がいるんですか。正義感が強いというか、何とゆうか」

「違いますの。単なる野次馬根性ですよ。それに負けず嫌いだからとことんまで首を突っ込もうとするんです。わたくしがいくらお止めしても、まったく聞く耳を持ちませんのよ」

「知り合いの方のことなんですか。大変ですね」

「え、ええ、まあ……。それより、この方たちが喧嘩してた能力者ですよ。わたくしが運びますわ」

風紀委員ジャッジメントの女学生が手を伸ばすのを、廷兼郎は慌てて制止した。

「僕が運びますから。あなたに運ばせるわけにはいきませんよ」
それを聞いて、女学生がむっと顔をしかめた。

「そういう発言、女性差別の対象ですわよ。それにわたくしは空間テレ移動能力者です。一人運ぶのなんて、どうってことないですわ」

「そうじゃなくて、僕が気絶させたんだから、僕が運ぶのが義務でしょう。他人に運ばせるのは不義理だ。せめて警備員アンチスキルの収容車までは、運んであげないと」

そう言われれば、確かに幾分筋が通っている。女学生が考えている間に二人の能力者をひよいと担ぎ上げ、廷兼郎はそそくさと歩き出した。

その後を追うように、女学生が走り寄る。

「警備員アンチスキルの車は、確か公園の南に止まってましたわ」

「そうですね。じゃあそつちに」

二人の人間を抱えているが、廷兼郎の足取りは軽い。風紀委員ジャッジメントの女学生の歩く速さとはほぼ同じである。

「少し、お聞きしても良いですか？」

「何ですか？」

「あなたはもしかして、常盤台中学の白井黒子さんですか？」

突然、自分の名前を言い当てられ、白井黒子は鼻白んだ。

白井は能力レベル4という貴重な人物であることは確かだが、誰もが知っているなどというほどの知名度ではない。それが突然、初対面の人間に名前を呼ばれては些か恐縮してしまうというものだ。

「そ、そうですね……」

「やっぱり、そうですね。常盤台中学の制服で空間移動テレポートを使うとすれば、あなただけですから、すぐにピンと来ましたよ」

廷兼郎は「すごいでしょ」とでも言いたげににこやかな顔を向けた。だが、すぐにしまったと顔を曇らせた。

「すいません、こちらは名乗りもせず。僕は字緒廷兼郎と言いま

す」

「廷兼さん、ですか。随分お詳しいですね」

「ええ。仕事柄、能力者のことについて、調べることが多いんですよ」

「能力開発か何かの仕事ですか？」

「いいえ、そんな上等なことじゃありません。要は、喧嘩ですね」

「はあ？ 喧嘩が、仕事？」

要領を得ない回答は、やはり白井には意味不明だった。

「対能力者戦闘術って、ご存知ですか？」

「多少は。風紀委員ジャッジメントの研修で習いましたもの」

対能力者戦闘術とは、その名の通り能力者を相手にした場合の戦闘技術体系である。警備員アンチスキルや風紀委員ジャッジメントなどは、場合によっては能力者と直接戦闘を行うため、こうした戦闘技術を日ごろから学んでいる。

「僕は、対能力者戦闘術の研究開発に携わっているんですよ」

「戦闘術の開発、ですか」

「そう。武器を持たない平素の状態で、如何にして能力者を制圧せしめるか。それがテーマです」

白井は、どことなく嫌な予感を禁じえなかった。

「では、能力者を調べるといふのは……」

「戦闘になった場合の有効な戦術を編み出すためです」

要するに、どうやってこいつに勝つか、ということを考えていると廷兼郎は言ったのだ。

その対象にはレベル4の白井も含まれている。あなたと喧嘩して勝つ方法を考えていると言われて、良い思いのする人種は非常に稀有である。白井はそのような性格を有してはいない。

「大能力《レベル4》や超能力《レベル5》と戦って、勝つつもりですか？」

白井の知っている対能力者戦闘術は、柔道などの格闘技をアレンジした、護身術や捕縛術の色合いが強いものである。当該能力者になるべく傷つけずに拘束するものであり、素手でありながら高位能力者の打倒を行うというものでは、断じて無い。

「何故、勝てないと思うんですか？」

「だって、単なる格闘技では能力者に勝てるわけがありませんわ」

それは銃器を持った相手に生身で堂々と戦うようなものだ。それどころか、能力によっては銃器よりも汎用性と危険性に優れたものが多く存在する。それに対して素手で立ち向かって勝つというのは、御伽噺にもならない。

白井の答えに、廷兼郎はゆっくりと首を振って答えた。

「武術というのは、弱きが強きに勝つため、編み出されたものです。超能力があるうと無かるうと、人間は強いんです。絶対に勝てない、なんてことはありません」

廷兼郎の言い切る様に、白井は反論の余地を無くしてしまった。それほど真っ直ぐに、彼は能力者に「勝つ」と言っただけだ。

公園の南口には、到着した警備員アンチスキルがこれから突入を開始しようとしていた。それを手を振って制止し、廷兼郎は二人の能力者を車まで搬送した。

病院へ向かう車を見送り、廷兼郎は大きく伸びをした。これから支部に寄って事件の報告書を書かなければならない。買っておいた昼ご飯はパイロキネシスト《発火能力者》に爆破されてしまったので、支部の近くにある食堂ですませようと考えていた。

「お待ちになってくださらない、廷兼さん」

妙にしくりくる呼び方で、白井は廷兼郎を呼び止めた。

既に喧嘩をしていた能力者は警備員アンチスキルに渡したのだから、風紀委員ジャッジメントの彼女がこの場に留まる用は無いはずである。

「先ほどの、格闘技で大能力《レベル4》や超能力《レベル5》に

勝てるという言葉、やはり納得がいきませんの」

廷兼郎としては、それほど失礼なことを言ったつもりはなかったが、聞くほうにとっては看過できなかったのだらう。彼は迂闊な言い方をしたことを後悔した。

だが、謝罪の言葉は喉の奥深くに飲み込んだ。そうすることで、事態が自分にとって好ましい方向へ転ぶような気がしていた。

「あの二人も、格闘技で倒しましたの？」

「そうですね。と言っても見てはいないのだから、信じてもらえないだらうけど」

「そうですね。何かの能力を使ったと言う可能性はありますわ」

「ああ、そっちの心配か」

てっきり自分が武器の使用を疑われていると思っていた廷兼郎は、安心のため息をついた。

「僕は無能力者《レベル0》だから、能力はありませんよ」

白井の顔が一気に強張った。学園都市の生徒は定期的に、システムスキ身体検査で能力レベルを判定する。無能力《レベル0》とは、如何なる超能力も発現していない状態を示している。

はったりをかましている可能性もあるが、学園都市の総合データベースである書庫バンクに名前や身体的特徴を問い合わせれば、すぐに分かってしまう。ここで嘘をつくメリットは殆ど無い。

廷兼郎は腕を組み、ほとほと困り果てた様子で唸っていた。

「それで、納得しないと云うことでしたが、僕にどうしろというんですか？」

そう尋ねる廷兼郎の顔は笑っていた。彼は明らかにこの状況を楽しんでいた。

慇懃無礼な態度が、白井の神経を逆撫でる。

「わたくしに、勝つてごらんなさい。そうすれば納得しますわ」

売り言葉に買い言葉である。多少言わされた感は拭えないが、最初に絡んでしまったのは自分である。その始末も自分でつけなくて

はならない。

白井の言葉を待つてましたとばかりに、廷兼郎は手を叩いて寿ことほいだ。そして早速、彼は耳に掛けていた携帯端末で網丘に連絡を取った。

「字緒です。ええとですね、今白井黒子さんと……、ええ、はい。その白井さんです。大能力《レベル4》の空間移動能力者の。彼女がですね、対能力者戦闘術がどれ程のものか見たいと言うことで、はい。それですね、訓練場で模擬戦を行いたいので、場所の予約しといてくれますか？」

網丘と二、三言葉を交わして通話を切ると、廷兼郎は満面の笑みで白井に言った。

「模擬戦の予約取れました。すぐにでも始められますよ。訓練場は第二学区ですから、バスで行きましょうか」

まるで意中の女性をデートに誘ったときのように、うきうきしながら廷兼郎は白井を訓練場へと案内した。

匹夫之優：三

「ここが、訓練場ですのね」

訓練場は警備員アンチスキルや風紀委員ジャッジメントの訓練を行う施設である。銃の試射場や戦闘訓練用のホールに加え、最新のフィットネス機器も取り揃えており、警備員アンチスキルや風紀委員ジャッジメントならば無料で施設内の機材を利用できる。

「ここは初めてですか」

「似たような施設は風紀委員ジャッジメントの研修で利用しましたが、こちらの施設は初めてですわ」

戦闘訓練用ホールの前の控え室に付くと、白衣を着た科学者が何人も屯したむろ、白井たちを出迎えた。

「君が白井黒子くんだね。初めまして、網丘楊漣あみおかよつれんだ。この施設の責任者をしている」

妙齢の女性が代表して白井に挨拶し、釣られて白井も差し出された手を握り返した。

「廷兼郎と模擬戦を行うんだってね。着替えるなら、あっちの更衣室を利用してくれ。他にも何か要望があるなら、今のうちに言っただけ欲しい」

「いえ、要望はありません。今すぐ始めてもらって結構ですわ」

白井の勇ましい宣言に、網丘は感嘆の声を上げた。

「さすが風紀委員ジャッジメントだ。気風きっぷが良い。それじゃ、がんばってね」

称えるように肩を叩き、網丘は他の科学者と共に控え室を後にした。何故施設の責任者が自分に挨拶をしたのか、その答えはホールに入ってからすぐに判明した。

ホールの二階に当たる強化ガラス張りの部屋から、数人の科学者がこちらを伺っている。その中に、先ほどの網丘楊漣も見える。

突発的な模擬戦の申し入れだったのに、何故そんな準備が整って

いるのかは分からないが、要するに模擬戦で白井の能力判定を行うのだろう。

「気にしないでください。白井さんが珍しくって、舞い上がってるんですよ」

ガラスの方を指差し、廷兼郎が言った。明らかに舞い上がっているのは彼のほうだが、白井はそんなことをいちいち忠告する気は無かった。

ホールは三十メートル四方、高さは五メートルほど取っており、広々とした空間である。十メートルほどの距離を置いて、二人は対峙している。

見渡す限りの白い床と壁に囲まれ、遮蔽物は皆無である。この環境では、自身を移動させる大能力《レベル4》の空間移動能力者の白井を妨げるものは何も無い。壁にめり込まぬよう気をつけていれば、このホールのどこへでも一瞬で移動可能だ。

これでは勝負にならない、というのが白井の正直な感想だった。

「何か、ハンデを付けたほうがよろしいんじゃないやありません？」

白井は酷薄な笑みを浮かべながら、廷兼郎に助言した。せめて武器を持つなど、そうしたことをしなければ模擬戦にさえならないだろう。

「そうですね。ハンデか、何がいいかな……」

廷兼郎はごそごそと自分の服を探り、ポケットから一枚のハンカチを取り出した。そして何か思いついたようで、ハンカチを折り畳み、両目を塞ぐ形で顔に巻きつけた。

「これならハンデになるでしょう。どうですか？」

廷兼郎の返事に、白井は絶句した。廷兼郎は白井にハンデが必要だとして、目隠しをして戦うことを宣言した。

レベル4としての白井のプライドは、廷兼郎の気遣いによって粉々に打ち砕かれた。

頭にかあつと昇った血のおかげで、むしろ思考がまとまっています

きりする。目隠しがしたいのならすればいい。そのまま地面に這いつくばってしまえばいい。

「いいですわよ。最高のハンデですわ」

「よかった。それじゃ、始めましょうか」

廷兼郎がゆるりと構えを取った。それが開戦の合図となった。

太ももに用意してある金属矢ダーツを使うことも無い。背後へ空間移動テレポートして一撃を加えれば終わりだ。

三次元から十一次元への演算が終了すると、白井は十メートルの空間を一瞬で移動し、廷兼郎の背後に現れた。

このまま後頭部を思い切り蹴りつけて、昏倒させて押さえ込めば終わりだ。

空間移動テレポートの直後に白井が見たのは廷兼郎の頭の後ろではなく、彼の横顔だった。驚愕する間も与えず、彼の放った後ろ回し上段蹴りは白井の肩口に命中し、女子中学生の体を真横にすっ飛ばした。

回避のための空間移動テレポートも間に合わない、まさに丁度のタイミングで廷兼郎は後ろ回し蹴りを放っていた。予め来ることが分かっていたなければ、到底掴めないタイミングだった。

余りにも攻撃が正直すぎたと、白井は反省した。背後を取れば勝ちなどと、誰でも考える。蹴りを食らったのは、その安易な考えを読まれたからに過ぎない。だからこの被弾はまぐれに近い。

そもそも相手は目隠しをしているのだから、あえて背後から攻撃せずとも、真正面から掴んで投げてしまえばいい。そして金属矢で動けなくするなり、参ったと言うまで投げるなりすればいい。

今度は廷兼郎の正面に空間移動テレポートし、彼の左手首を掴んだところで白井の腹には左膝頭が深々と刺さっていた。

一瞬、自分の身に何が起こったのか分からなくなった白井は、思考を白色に変えてしまっていた。相手の体を空間移動テレポートさせることも掴みから態勢を崩して投げることも、一切間に合わせない膝蹴りで

あった。

「う、げはあ……」

胃の内容物を戻しそうになるのを必死に堪え、足でその場から離れる。咄嗟の空間移動テレポルトが使えるような状態ではない。

今のは先に手首を掴んだのが拙ますかった。それでこちらの居場所を知らせてしまい、カウンターを食らってしまった。

離れたところで息を整える白井をじっと待つように、廷兼郎が見つめている。

見えているのか、とも思ったが、荒くなった息が聞こえて居場所が分かるのだと考え直した。

後ろも駄目。前も駄目。それならば、人体の完全な死角である頭上から攻める。そこなら背後と違って回し蹴りを食らう心配はない。
(食らう心配はない。それは尤ももですが……)

ここで白井は気がついた。予想されていたとしても、それは凡おろその場所であり、白井が仕掛けタイミングまで分かるはずが無い。だがこれまで二度、廷兼郎は空間移動テレポルトしてきた白井に対して絶妙なタイミングで迎撃を行い、成功している。これは場所に加え、白井が空間移動テレポルトするタイミングを把握しているからに他ならない。

何故空間移動のタイミングがバレているのか、それが分からなければこの男には勝てない。

やはり本当は能力者で、恐らくは読心系サイコメトリーの能力者なのだろう。対象に触れずに把握するというのはかなりの高位能力だが、それでも穴はある。

息の整った白井は、演算速度を一気に高め、能力を開放した。

右横に現れたと思った次は後ろ、今度は斜め上、かと思えば十メートル近く遠い場所に現れたり、白井は矢継ぎ早に空間移動テレポルトを繰り返した。

立て続けに空間移動を行い、相手を混乱させる。こちらの消耗も激しいが、読心を試みればそちらの演算が追いつかなくなるはずである。その隙を突く戦法だ。

端から見れば分身でもしているかのようで、白井はここへ来て空間移動のラグをさらに縮めていった。

途中までは追えていた白井の動きも、最早把握できないと諦めたのか、廷兼郎は目線で追うのをやめた。そして構えを解き、腕も足も半端な位置に置いて佇んだ。

これほど移動の速い相手には、前面に対しての構えは意味が無い。前後左右のどちらにも対応できるよう、腕も足も自分の動かしやすい位置に置く、内野手のような構えが比較的有効である。

雀の涙ほどの違いだが、その違いを怠る者に、能力者の制圧など夢のまた夢である。

(脳天、がら空きですの！)

腕は先ほどよりも低い位置にある。防御が遅れる。こちらの攻撃が入る。

渾身の空間移動で頭上を取り、白井は全体重を足裏に乗せて、廷兼郎に向けて落下した。

軽いとはいえ、女子中学生の全体重で頭から踏みつけられれば無事ではすまない。悪くすれば首の骨がずれてしまいが、模擬戦中の事故ならばそれも致し方ない。

廷兼郎の頭を踏みつけることに、白井は何の躊躇いも見せなかった。必殺の手応え、ないし足応えを、白井は夢の中でいつまでも待ち続けた。

匹夫之優：四

「はい、模擬戦終了。廷兼郎、お疲れ様」

網丘は館内マイクで、廷兼郎に模擬戦の終了を伝えた。

後ろから白井を抱きかかえていた廷兼郎は、そのまま白井を肩に担ぎ上げて控え室に向かった。

最後に白井の放った決死の踏みつけは、もの見事に外れて廷兼郎の目の前に落ちる形となり、彼はそれを抱きかかえて即座に締め落とした。鶏を屠殺^{とぎつ}する農家の人の無慈悲さと練度で、大能力《レベル4》を制圧した。

控え室では網丘が廷兼郎を待つていた。彼女特製のスポーツドリンクを差し出し、飲むよう勧めてきた。控え室にあるベンチに白井を横たえ、網丘からそれを受け取った。

「どう？ 手合わせした感想は？」

「やはりハンデがありましたね。この状況で、彼女は能力を發揮しにくい」

苦虫を噛み潰した顔で廷兼郎は言った。彼が思うに、障害物があればあるほど、そしてルールが無いほど、空間移動能力者は強いと^{テレポート}考えていた。

障害物があるということは、空間移動^{テレポート}させる素材に事欠かないということであり、ルールの無い戦い、例えば敵を殺してもよいとされる状況なら、障害物を相手の体に直接テレポーさせるだけで、まず確実に相手は戦闘不能となる。そして言うまでも無く、移動のための距離と時間を殆ど無視できるため、逃避行動に入られれば仕留めるのは困難極まる。かような状況でこそ、空間移動能力者^{テレポート}は絶大な効果を發揮する。

今回は模擬戦ということで、ルールの無い殺し合いではないということ、そして障害物の無いホールでの戦いということで、空間移

動能力の強みを多分に台無し《スポイル》にさせたまま戦わせることになってしまった。

廷兼郎としても、より白井の能力が発揮できるような環境で彼女と戦いたいという思いはあったが、まさか自分で犯罪を犯したり、白井を殺そうと狙ったりするほどの倒錯は起こしていなかった。なのでこれが、廷兼郎と白井が行える限界の闘争と言える。

目を瞬かせて起き上がった白井は、先ほどまでホールにいた自分が、何故控え室にいるのか、まったく覚えが無い様子だった

「あれ？ 頭踏んづけたのに……、何で無事ですか？」

「とりあえず、VTR見ますか？ 先ほどの模擬戦、全部録画してもらってますから」

廷兼郎に促され、白井は二階の観測室に上がり、模擬戦のVTRを見せてもらうことにした。

テレポート 空間移動した瞬間に見事な打撃を食らったのたうち回る白井が、あらゆる角度から観測されていた。やはりVTRを見るに、現在の自分の居場所と空間移動先、そして空間移動を行う瞬間が把握されているとしか思えない手際だった。

「廷兼さん、実はあのハンカチ、見えるんじゃないですか？」

「中々疑い深いですね。これは常盤台の仕込みが余程に良いんだなあ」

廷兼郎は笑いながらハンカチを差し出した。試しに白井が自分の目に巻きつけても薄く光を感じるだけで、見えるとは言い難い状況だった。

VTRを見終えて、廷兼郎が言った。

「どうでしょう。納得してもらえましたか？」

元々は廷兼郎の「大能力《レベル4》や超能力《レベル5》に勝つ」という発言が気に入らず、白井が食って掛かったことから始まった模擬戦である。自分に勝ったら納得すると言った以上、納得せざるを得ない。

それでも白井には、どうしても聞きたいことがあった。

「何故、わたくしの居場所や空間移動先、それに空間移動を行うタ
イミングが分かったんですの？」
レポート

「負けたことは事実なので勿論認めるが、これだけはどれほど頭を捻っても分からない。手品が何かのようなタネがあるはずだと、白井は考えていた。

「ふむ。それは僕よりも、網丘さんに説明してもらったほうが良いでしょう」

同じくVTRを見ていた網丘が、巻き戻し終えたVTRを見ながらこくりと頷いた。

「簡単に言つとね、産毛と耳で感じたんだよ」

「網丘さん、それじゃ簡単すぎます。もう少し具体的に」

「具体的に言つとだな。白井君の周りに発生してる固有の準静電界が、電荷の移動などによる変化を起こし、体毛の先端と内耳の有毛細胞の振動で、廷兼郎は白井君の行動を察知したのだ」

「準、静電界。AIM拡散力場のようなものですか？」

「似てはいるが、AIM拡散力場は能力者にしか見られないものだ。準静電界は能力者であろうと無かろうと、生き物であれば普遍的に保有している、微弱な生体電位のことだ」

人間を含めて、あらゆる生き物の体内には微弱な電流が走っている。準静電界はそうした生体電流から生じる、弱い電界のことを指す。

「生体電位を察知するなんて、電撃使い《エレクトロマスター》でないと無理なのでは？」

「電撃使い《エレクトロマスター》どころか、ゴムの木だって犬だって、生体電位を感知できるよ。人間に出来ないわけが無い」

生体電位は行動することで変化する。歩いた際に接地した足裏で電荷のやり取りが行われたりするだけで、電界は変化を起こす。

電界は個人ごとにパターンが異なり、ゴムの木を使った実験では、

近くを歩いた人間の足踏みに合わせてゴムの木の生体電流が変化することが証明されている。犬もまた優れた感覚毛を持つ生物であり、何百メートルも離れた場所から飼い主の気配を察知する能力は、固有の電界を感覚毛で認識しているからだと言われている。

「武道に精通した人物の感覚が総じて鋭敏なのは、この感覚を研ぎ澄ませる訓練を行っているからだ、私は考えている」

「それでも、空間移動テレポートのことまで分かっってしまうのですか？」

「それは、戦った本人にしか分からないな」

ここで網丘は、後の説明を廷兼郎に委ねた。

「分かる、というほどの確信があるわけではないんですが、ここら辺に来るだろうなあ、ってことは感じてます」

「ですから、何でそんなことを感じるのかって聞いてますのよ！」

何とも説明しづらそうに一頻り唸ひしきつてから、廷兼郎は言葉を選びながらも喋り始めた。

「何というか、空間移動テレポートが来る直前、白井さんの気配が二つにブレて知覚されるんです。それで大方の場所とタイミングが分かったんで、迎え撃てました」

「ですから、それが何故出来るんですの？」

廷兼郎はそれ以上の説明の言を持たないため、あることに例えてみることにした。

「それじゃあ僕が、白井さんは何故空間移動テレポートが出来るんですか、と聞いたとしたら、どう答えますか？」

「それは、『自分だけの現実バーチャルリアリティ』において空間把握処理を三次元から十一次元に置き換えて演算し……」

それ以上の説明を、白井は続けなかった。説明が出来ないわけではない。『自分だけの現実バーチャルリアリティ』の理論と十一次元演算の方法は完璧に頭の中に納まっている。だがそれを、自分とは違う、ましてや無能力者《レベル0》に大能力者《レベル4》の『自分だけの現実バーチャルリアリティ』を伝えることは出来ない。そもそも言葉による説明で完全に『自分だ

『バーンナルリアリティ』の情報を伝達できるなら、世の中は高位能力者で溢れかえるし、学園都市で行われている能力開発の殆どがナンセンスなものになってしまう。

「僕に空間移動テレポートは出来ない。ましてや能力者でもないのです、いくら説明されてもやはり理解できません。ただどね、白井さん」

白井の目を真っ直ぐに廷兼郎が覗き込んでいた。あまりに力強い瞳に、白井は僅かだけ怯んだ。

「武術とは、『自分だけの現実』バーンナルリアリティに基づくものではない。どんな人間にも多かれ少なかれ備わっている機能を利用したものなんです。今は分からなくても、訓練次第では僕と同じことが出来るんですよ」

「同じこと、ですか？」

「はい。これだけ感覚が鋭敏なら、能力者との戦闘において、優位に働くとは思いませんか？」

「ええ、そう、ですわね。そんなことが出来たら、確かに便利ですよ」

「それが僕の研究している『カウンターメジャー対抗手段』です。ご納得いただけましたか？」

ここまでされては、納得しないわけにはいかなかった。

「分かりました。納得しましたわ」

「それはよかったです」

先ほど女子中学生に回し蹴りや膝蹴りを浴びせたとは思えない、満面の笑みで廷兼郎は答えた。

「そういえば、肩とかお腹は大丈夫ですか？ 目が見えなかったんで加減が効かなかったんですけど……」

「そう言われれば、ちよつとお腹のあたりが」

白井が自分のお腹を押さえると、くうつという間延びした音が部屋に響き渡った。天使が通ったような静けさに満たされ、やや間を置いて白井の顔が紅潮し始めた。

「い、いやあの、これは、違いますの。絶対に違いますの！」

白井が必死になって抗議していると、もう一回くうっとお腹が鳴った。

「すみません、僕のお腹の音です。お昼ごはん食べてなくて」

「紛らわしいことするなですわ！」

妙な日本語を話す白井は、割とマジでキレ気味で、一瞬だけ、首が切断されかねないと廷兼郎に予感させた。

匹夫之優：五

白井黒子との模擬戦を終えた廷兼郎は、訓練施設内の食堂で遅めの昼食を取っていた。半熟卵のカルボナーラに親子丼に卵チャーハンという、コレステロールに真つ向から勝負を仕掛けるメニューを、これまた嬉しそうに平らげていた。

その向かいには、模擬戦を行って見事に失神させられた白井が座っていた。廷兼郎が食堂へ行こうとしたら、何故か付いてきて、何故か向かいに座っていた。

その何故をいちいち聞くのも失礼な気がして、廷兼郎はとりあえず腹を満たすことにした。別に体に異常がないなら帰れば良いのとは、自身が絞め落とした手前、口が裂けても言えなかった。

廷兼郎は卵尽くしを、白井はサラダを黙々と食べていた。目の前の食べ物しか見えていないように思える廷兼郎だが、先ほどの模擬戦以上の頭脳戦を勝手に自分だけで繰り広げていた。

（何で帰らないで白井さんは飯を食ってるんだ？俺と同じでお昼食べてないのか。だとしても何故ここで食べるんだ？自分の家か寮に帰ってからでもいいじゃないか。そんなに我慢できなかったのか。そして何故俺の前で食べる？当てつけか？当てつけなのか？よくも腹を蹴り上げてくれたなっていうことなのか？言ってくれば謝るのに、何で言ってくれないの？

てかさつきから何も喋ってないよこの人。いや俺も喋ってないけど何か、こういう場面では男が先に話題振れってことか。いや、俺はそんな恋愛至上主義が生み出した悪しき慣習なんぞに引つ張られんそもそも気の利いたことなんて言えないよ。女子中学生と何話せてんだ。ある意味天国と地獄が両脇でタップダンスだよ！このままだと地獄に転ぶのは火を見るより明らかだぜ。

てかサラダだぞ。飯じゃない。バナナはおやつでも、サラダはご飯じゃない。まさか、これ昼ごはんなのか？ あれか、これが世に言うダイエットってやつか。それともベジタリアンなのか。そういう個々人の主義主張には首を突っ込みたくないが、もっと高カロリーなものを食べんといかん、いかんよこれは。天下の常盤台がこれではいかんですよ！)

こと闘いという要素が絡まないと、廷兼郎は単なる繊細で気を使いきるくせに肝心なことには頭の回らない面倒な男子高校生となってしまう。

「白井さん！」

ついには耐え切れず、廷兼郎は大声で白井を呼んだ。

「な、何ですか？」

「豆喰え、豆！」

白井は呆れた顔で「はあ？」とだけ漏らし、気の毒そうな目で廷兼郎を見つめていた。思ったような反応ではなかったため、廷兼郎もこれは悪手であることを瞬時に悟った。

「豆というのはですね、畑の肉と呼ばれるほど高い栄養素を含んでいましてね、それに食物繊維も豊富だからダイエットにも最適ですよ。ベジタリアンの方にも人気ですので是非……」

さらに白井は「はあ？」と返す。とても人間に向けるものとは思えない視線は、廷兼郎が墓穴を掘ったことは火を見るよりも明らかだということを実に現していた。

「別にわたくし、ダイエットしてるわけでも、ベジタリアンでもありませんの。あなたとお話したかっただけですわ」

「話、ですか。何でしょう？」

「負け惜しみではありませんが、やはり総合的な能力において、わたくしが廷兼さんに負けているとは思えませんの」

物怖じしたり、遠慮したりする素振りを一切見せず、白井は言い

放った。これほど正面から言われては、却って心地良さを感じてしまう。

「はい、その通りです。僕よりあなたのほうが優れている。それは覆りません」

廷兼郎も一切引かず、真っ向から白井を肯定した。

「ならわたくしが廷兼さんに負けたのは、偶然ですね」

「勝負事というのは、一回一回が決着です。そういう意味では、偶然といえます。だけど、もう一度僕と戦ったとして、白井さんが戦い方を変えないようなら、あなたは偶然、もう一度負けます」

「……どういうことですか？」

「簡単なことです。白井さんは僕に格闘を挑んできました。だから負けた」

「格闘？ テレポ空間移動を使ったあの闘いが？」

「僕に近づくまではテレポ空間移動を使いましたが、最終的な攻撃は蹴り、掴みと、まさに格闘でしたよ。それなら僕にも対抗する余地はある」
「確かに白井はテレポ空間移動で一気に間合いを詰めたり、連続でテレポ空間移動して目を眩ましたりしたが、肝心の攻撃手段は格闘技のそれであった。ならば、格闘技に精通した廷兼郎に負けるのもむべなるかな、ということだ。」

「それが、敗因ですね」

「……そう。より直接的な手段が使われていたら、僕は負けていた」
「直接的な手段、とは？」

廷兼郎は食べ終わったカルボナーラの皿を叩いて言った。

「例えば、この皿を僕の首にテレポ空間移動させる、とか」

二人の間に、こわい空気が張り詰める。互いに『死』を意識し、それが体中から滲み出る。殺気のようにうでいて殺気ではない。より単純な『死』という意識が濃密に漂う。

皿を空間移動させる。ただそれだけで、目の前の男が死ぬ。そんなことを言われては、意識せざるを得ない。

「嫌なことを言いますわね」

「すみません」

ようやく空気が通常に戻り、二人して大きく息を吐いた。

食べ終わった食器に視線を落として、廷兼郎が独り言のように呟いた。

「空間移動。素晴らしい能力です。無能力《レベル0》の僕から見れば、夢のような力だ。この能力の真価は、一対一の勝負で計れるようなものではないと思います。あなたが負けたのも、偶然と言えは偶然です。僕のような相手に格闘を挑むのが危険だと言うことが分かったのなら、同じことはしないでしよう」

「ええ。同じ轍は踏みませんわ」

「それならどうか、こだわらないください。目の前の勝負に囚われず、大局を見据えた能力の行使を心掛け、空間移動のアドバンテージを常に意識してください。そうすればあなたに、本当の意味での敵は存在しません」

黙って聞いている白井の様子を見て、廷兼郎は恥ずかしそうに顔を背けた。

「すみません。無能力《レベル0》が分かったようなことを言ってしまうって……」

「いいえ、そんな風に言わないでくださいませ。わたくし、目から鱗ですわ」

廷兼郎は「はあ？」と間の抜けた声を上げ、どの辺に感心する要素があったのかと顎に手を当てて考えた。

「思ってることを言っただけですよ。大げさだなあ」

そう言って廷兼郎が照れていると、彼のポケットから電子音が鳴り響いた。電話に出た廷兼郎は何やら先輩と話しているらしく、しきりに「はい」と「すみません」を連発していた。

「どうしたんですの？」

「先輩の風紀委員ジャッジメントに、早く報告書書きに来て怒られちゃって」
風紀委員は学園都市内の治安維持機構の一つである。多くは有志の学生で構成されており、主に所属学校周辺の治安維持に当たっている。そんな彼らにも、とかく書類というものは付きまとうようで、そもそも風紀委員ジャッジメントになるだけでも九枚ほどの書類を書き、他学区で活動しては始末書を書き、信号弾のデバイスを使っては始末書を書き、事件・事故に関与した場合はその顛末を報告書に書きと、「事務屋仕事のために風紀委員ジャッジメントになったのではない」を持論とする廷兼郎にとって、この書類地獄は全く以って不本意極まる事態であった。「報告書を書くなら、わたくしも同行させていただいてもよろしいですか？」

白井の妙な提案に、廷兼郎は訝しんだ。

別段断る理由もないが、報告書を書くのに同行して何か白井にメリットがあるようにも思えない。

「いいですけど、そんな楽しいもんじゃありませんよ」

「楽しそうとかではなくて、あの二人をどうやって倒したのか、個人的に興味がありますの」

廷兼郎は得心したように、何度も頷いた。

「そういうことですか。白井さんは真面目なんですね」

食べ終わった食器を片付け、二人は風紀委員ジャッジメントの支部へと向かった。

匹夫之優：五（後書き）

ここまで読んでくださった方、心よりお礼申し上げます。

『とある魔術の禁書目録』に武術を持ち込めばどうなるのか？ それ
れが知りたくて、このような作品を書きました。

オリジナルキャラで主人公の字緒廷兼郎くんは、スキルアウトの駒
場さんや黒妻さん、浜面さんにコンセプトが似ています。発条包帯
巻いたり拳銃使ったりはあるけど、大切なのは裸一貫で能力者に挑
むこと。これに尽きます。特に浜面さんは本当の意味でレベル5を
打倒してるので、廷兼くんの目標はとりあえず浜面さんです。

文章力の低さから読みにくく、冗長な構成になってはおりますが、
また続きを読んでいただければと思います。

軟紅花瓶：一

その日、初春飾利は風紀委員ジャッジメントの仕事が非番であるのを利用して、ケーキショップに買い物に出掛けていた。テレビ番組でも取り上げられた人気店で、常々行きたいと思っていた念願がようやく叶い、両腕いっぱい買い込んでいた。

「ざっはとるて〜。おいしいおいしいざっはとるて〜。私のお腹にざっはとるて〜」

焼芋売りのような節で歌いだしてしまうほど喜びを抑えきれない初春の頭の花も、心なしか楽しそうに咲き誇っている。

「ケーキと紅茶で素敵なおアフタヌーン。また一步、お嬢様に近づきました！」

こつした努力を怠らないことこそ、お嬢様への近道と言える。風紀委員ジャッジメントの同僚で、いつもお嬢様風を吹かせる白井黒子に対抗するため、初春は今日もお嬢様の星を目指してそれらしいことをするのである。

「あれ？ 白井さんだ」

噂をすれば何とやらで、件の同僚は向かいの道を歩いていた。

折角なのでケーキのお裾分けでもしようと考えた初春は、声を上げようとしたりとところでぴたりと止まり、頭の花を隠しながら急いで建物の影に隠れた。

頭の花に手を当てながら、そつと向かいの道を覗き見る。

そこには同僚の白井と、彼女に連れ添う形で歩く男の姿があった。背丈は一メートル七十センチほどだろうか。私服を着ているが成人している雰囲気はなく、高校生という印象だ。ちなみに彼の着ているジーパンやジャケットは、何故か所々に焦げ付きが見られ、非常に怪しい。しかし、高校球児よりも少し伸ばした程度に刈り上げた髪型が、何とはなしに誠実な印象を与える。

「し、白井さんが男性とデート!? こ、これは一大事なのですよ！」

早速初春は携帯端末を取り出し、友人に電話を掛けながら二人の尾行を開始した。

ジャッジメント 風紀委員の研修で習った尾行の心得を思い出し、離れた場所から様子を伺う。何やら男のほうが身振り手振りで説明しているのを、白井がいちいち頷いて聞いている。単に友人と街を歩いていると言えなくも無いので、デートという決め付けは早計だったかも知れない。

「うう〜うい〜は〜るう!!!」

二人の尾行に集中していた初春にとって、背後に迫る佐天涙子の挨拶代わりのスカートめくりは完全に不意打ちだった。

「ちよつと佐天さん、何するんですか！」

「何って、初春が呼んだんじゃない。それで、白井さんはどこ？」

きよるきよると大げさに見渡す佐天は、白井たちの姿を発見すると、安っぽいチンピラのように口笛を吹いた。

「中々の好青年じゃないの。ちよつと野暮ったいかな。身長は合格あとは収入と通ってる学校よね」

「三高なんかどうでもいいんです。あの白井さんが男の人と歩いているのが問題なんですよ。あのアメリカ人さえ引かせてしまうグロ―バルスタンダードな変態さんの白井さんが、私より先に彼氏を作るなんて……、御坂さん一筋なのはフェイクだったんですね！」

「落ち着きなさいよ。別に彼氏って決まったわけじゃないでしょう。ジャッジメント 風紀委員の同僚とかじゃないの？」

「あんな人、私知りません。ジャッジメント 風紀委員にあんな人いませんよ。お嬢様で大能力者《レベル4》でジャッジメント 風紀委員で彼氏持ちなんて、どんだけなんですか！ ねえ、どんだけですか！」

一人言を言っている間に、勝手にヒートしてしまった初春は本当に悔しいらしく、涙を流しながら佐天に抗議していた。

軟紅花瓶：二

泣きじゃくる初春を宥めつつ、佐天は白井の行方を窺う。

「まだ分からないからね。ほら、早く後を追わないと見失っちゃうよ」

慌てて通りに戻ると、随分遠くまで白井たちは進んでいた。急いで建物の影から飛び出すと、後ろから大声で初春たちを呼び止める声がした。

「やっと見つけた。初春さ〜ん、佐天さ〜ん」

「み、御坂さんも呼んだの？」

「当然です。超能力者《レベル5》がいれば怖いもの無しですから」
白井と同じ常盤台の制服を着ている少女は、名を御坂美琴と言う。その可愛らしい外見に似合わず、学園都市に七人しかいない超能力者《レベル5》の第三位、通称『超電磁砲』^{レベルガン}と呼ばれる能力者である。

最高最強の電撃使い《エレクトロマスター》と一緒になら、大能力者《レベル4》の空間移動能力者を尾行することなど児戯に等しい、というのが初春の主張だった。

「うわ、マジで男の子と歩いてるわ。あの黒子がね〜」

「御坂さん、何か思い当たることとか無いですか？ ていうか御坂さん知ってました？」

「知らないわよ。常盤台は女子校だもん。男の子と知り合う機会なんてそうそう無いのよ」

御坂や白井の通う常盤台中学校は、学園都市でも五本の指に入るほどの名門校であり、世界有数のお嬢様学校として内外に知られている。能力開発分野での英才教育を徹底しており、強能力《レベル3》以下の能力者はどれほどの権力者であろうと入学を許されない。学校の立地は、他の女子校と隣接して出来た『学舎の園』^{まなびやのそと}という

特殊な敷地内に建設されている。『学舎の園』は敷地内の生徒と特別な許可を得た人物以外の出入りを厳しく規制している上に、敷地内に女子校しかないこともあり、殆ど女性しか存在しないという、『学舎の園』というよりは『女の園』といった環境である。

「案外、風紀委員ジャッジメントの同僚とかじゃないの？」

「初春は知らないって言うんですよ。同じ風紀委員ジャッジメントなら、初春だつて知ってるはずだし」

「それもそうね。ま、後追つてればその内分かるでしょ」

三人仲良く物陰から顔を出して確認すると、白井たちはごくごく普通のコンクリートで出来た四角い校舎の中に入つていった。

「あれつて、ウチらの学校じゃない？」

「私たちの学校、ですね。というか、あそこ風紀委員ジャッジメントの第一七七支部ですね」

「それつて、やっぱり風紀委員ジャッジメントつてことじゃ……」

御坂に指摘され、むむむっと額に皺を寄せて初春が悩む。確かに初春は第七学区の風紀委員ジャッジメントの全てを把握しているわけではない。ここまでくると、何だか友達を巻き込んでまで騒ぐことではなかったような気がして、初春は恥ずかしい思いに駆られた。

「こうなつたら、直接確かめるしかありません。行つてきます！」

「ちよつと、行つて何処へ？」

初春は大きく息を吸い込んで覚悟を決めると、信号を渡つて白井の入つていった学校へ走り出した。釣られて佐天や御坂も後を追つて走つた。

玄関でスリッパも借りず、くつ下ではたばたとリノリウムの冷たい廊下を走り抜け、『風紀委員活動第一七七支部』というドアの横にある指紋、静脈、指先の微振動パターンを解析するセキュリティシステムに荒々しく手を当てて解除すると、ノックもせず勢いよくドアを開け放つた。

バーン！ という大きな音。

中に居た風紀委員ジャッジメントが、一斉に初春を見る。勿論、中に居た白井も「う、初春？ 今日是非番ではありませんでしたの？」と驚いた様子である。

そんな白井を一顧だにせず、ずかずかと大股で近づくと、初春は白井の横に座っている男に向けてずびしつと指を突き出した。

「白井さん、この人、誰ですか！！」

小さな室内を、飴を転がすように甘ったるい叫び声がこだました。

「全く、初対面の人に向かって指を指して「誰だ」とは、随分な言い様ですわね、初春」

「す、すみません……」

支部にあるディスカッションルームの中。向かいの席に座っている初春に、白井がざらりときつい視線を送る。入ってきたときの勢いはすっかり削がれ、初春は恐縮しきっている。

「まあまあ、そう怒らずに。支部に顔出してなかった僕も悪いんですから」

隣には好々爺とした顔で廷兼郎が座っている。成り行きで支部に来た佐天と御坂も、同じテーブルに座っている。

「この方は字緒廷兼郎さん。先月シヤツジメン風紀委員になったばかりなんですの。あまり支部に顔も出さないのが、初春が知らないのも無理ありませんわ。私だって知りませんでしたもの」

「そうだったんですか。私はてつきり……」

「てつきり、何ですの？」

白井の迫力に初春は次の言葉を告げられず、とりあえず笑って誤魔化した。とてもではないが、自分の野暮な妄想を言えるような雰囲気ではなかった。

「でさ、黒子は何でこの人と一緒にいたの？」

「え！？ いや、それは……」

言いよどむ白井を見て、今度は初春の目が輝きを取り戻す。

「何か言えない事情があるんですか？ 白井さんも隅に置けませんねえ」

「違いますの！ そんな下世話な勘繰りはおよしになってほしいですわ。私はただ、犯人確保の現場でたまたまお会いして……、模擬戦を行っただけですの」

どうして模擬戦をすることになったのか、というやりとりは意図的に抜いて白井は説明した。要点を抜き出しただけで、嘘は言っていない。

「模擬戦？」

気になる単語を見つけたとばかりに、御坂が興味を示した。彼女の戦いたがりのムシを、何ともくすぐる言葉だった。

「それで、どっちが勝ったの？」

何故一緒に居たのかという問いの答えは貰っていないが、御坂にとってはそちらのほうが重要だった。

「……勝ったのは、廷兼さんですよ」

御坂の『露払い』を自称する白井にとって、自分が負けたことを伝えるのは心苦しかったが、まさか当人がいる前ですぐにバレる嘘をつくわけにもいかなかった。

「大能力者《レベル4》の白井さんに勝っちゃったんですか！」

「すごい！ 字緒さんって、どんな能力持ってるんですか？」

案の定、初春や佐天は大仰に驚いてみせた。

「ウチの大能力者《レベル4》に勝てる能力か。興味あるわね」

オーバリアクションの二人とは対照的に、御坂は値踏みするように、一見大人しそうな瞳で廷兼郎を観察していた。廷兼郎は、そんな彼らの期待にはまず応えられないと思いつつ、本当のことを告げた。

「すみません。僕は無能力者《レベル0》なんで、能力は無いんですよ。勝ったのもまぐれです」

廷兼郎の一言で、場に沈黙が漂った。まず無能力《レベル0》であることに驚き、それに白井が負けたという事実を合わせて考えると、皆は軽々しい発言はしたくない心理状態となっていた。

その中で、御坂だけは嬉しそうに笑っていた。今度は獲物を見つけた猫のように危なっかしい目つきになっていた。

「へえ、黒子が無能力者《レベル0》にねえ……」

くるくると、マドラーを弄ぶ。自身の後輩が無能力者《レベル0》に敗れたという事実を、楽しげに転がしているようだ。

「一体どんな魔法を使ったのかしら？」

「魔法だなんて、単なる格闘技ですよ」

「ええッ!？」

廷兼郎の言葉を聞き、今度は佐天が突然立ち上がった。その勢いに、御坂はさらなる追求のタイミングを逸してしまった。

「佐天さん、どうしました？」

「格闘技で大能力《レベル4》を倒すって、それってもしかして、

カウンターメジャー
『対抗手段』ですか!？」

「何ですの、それ？」

「都市伝説ですよ。能力も武器も使わず、素手でどんな能力者も倒すっていう、無能力《レベル0》の格闘家がいるって噂があるんです。そのあだ名が『対抗手段』カウンターメジャーって言うんです」

「それって以前にもあった『どんな能力でも打ち消す能力』のあれですか？」

「それとは違うの。そういう能力すら無くて、己の鍛えた体だけで能力者と戦って勝つんだって」

興奮気味に話す佐天は、目をきらきらさせて廷兼郎を見ていた。

「本当のところ、どうなんですか？」と、言外に尋ねていた。

佐天の圧力に押され気味になりながら、廷兼郎は頷いた。

「『対抗手段』カウンターメジャーと言うのは、確かに僕の手伝ってるプロジェクトの名前ですけど……」

「やっぱり! 噂は本当だったんだ!」

都市伝説の真相を突き止められたのが嬉しいのか、佐天は手を叩いて喜んだ。対照的に、廷兼郎は難しい顔をしていた。

白井と行ったような模擬戦は、廷兼朗にとって初めてではない。

異能力《レベル2》、強能力《レベル3》や大能力《レベル4》の能力者との戦闘は、あのホールだけでなく野外などでも経験している。本来は学校側を通して要請してから、模擬戦という形で協力し

てもらおう。勿論、交通費や食費、怪我を負った場合の治療費も払い、さらに特別手当を支給している。

一応、協力してもらった能力者には他言無用であると含ませているはずだが、人の口に戸は立てられないということを、廷兼朗はまざまざと感じていた。

「さて、そろそろお暇いとましましょうか。これではいつまで経っても、廷兼さんが報告書を書けませんわ」

白井がおもむろに立ち上がり、友人たちの体に手を静かに当てた。

「それではごきげんよう」

「ちよ、黒子、私まだ話が」

白井とその友人たちは、次の瞬間にはその場から消えていなくなっていた。複数対象へのレポートを間近で目撃し、廷兼郎が感嘆の声を一人上げた。

軟紅花瓶：四

突然自分の了解無く部屋を出されたことに、御坂は不満を爆発させていた。

「何で勝手にレポートしたのよ。私、あの人にもつと聞きたいことがあつたんだけど」

無能力者《レベル0》にして大能力者《レベル4》を倒すほどの実力者と戦えば、自称無能力《レベル0》の、あのツンツン頭を倒すヒントが見つかるかもしれない、と御坂は踏んでいたが、その目論見を相方の白井は当然のように見抜いていた。

「どうせ丁度良い腕試しの相手が見つかったと思つたのでしよう。そうやって誰彼構わず突つかかるのは、およしになられたほうがいいですよ」

相も変わらぬ世話焼き女房ぶりが、火に油を注ぐ。唯だ善人のみ能く尽言を受くとはいうものの、人はそう単純ではない。

「誰彼構わずって、人を狂犬みたいに言わないでよ！ 私だつて相手くらい選ぶんだから」

「ですが、あの方はやめておいたほうがいいと思いますの」

「何だよ。私が負けると思つてるの？」

白井は力なく、首を左右に振つて否定した。

「お姉様が負けるなどと、露ほども思つていませんわ。だからこそ、お止めしているのです」

しおらしく顔を伏せ、白井は御坂に進言する。

白井に向かつて『直接的な手段』を助言した廷兼郎の眼は、冗談の色を含んでいなかった。あの時、本当に『直接的な手段』を行つたり、その素振りを見せていたら、彼は躊躇い無く白井に攻撃を加えていただろう。その手段は、彼の言うところの『直接的な手段』だつたかもしれない。

白井は、自分が廷兼郎に負けたとは思っていない。むしろ彼が言ったように、生殺与奪権は自分にあると考えている。だが、それ以外で彼を無力化する方法を思いついていないのも事実である。

「あの方に勝つには、殺してしまう以外にないと思いますの。それ以外の綺麗な勝ち方を、あの方はさせてくれませんか。今回は模擬戦でしたし、私はあの方を殺す覚悟が無かったので、負けてしまいましたわ」

白井と御坂では能力も、そのレベルも違う。戦い方も自ずと違ってくる。それでも白井には、電撃を受けて大人しく降参する廷兼郎の姿が浮かんでこない。

自分が廷兼郎に気絶させられたから、彼の戦力を過大評価しているのかもしれない。そうだとしても、二人が戦うところを見たくないというのが、白井の偽らざる心だった。

「お姉様にとって、あの方はそれほどの覚悟を以って倒す相手ですか？ 今日会ったばかりのあの方に、超電磁砲レベルガンを撃つて、体を粉々に吹き飛ばす必要があるのですか？」

自分はその必要を見出せなかった。見出せていたら、廷兼郎は死体になっていたはずだ。

それは果たして、白井にとって『勝利』なのか。もしくは、御坂にとって『勝利』となるのか。

「超電磁砲レベルガンを使わなかったって、無力化する方法は幾らでもあるわ。殺さなかったって勝てるわよ」

白井の進言も届かず、御坂はさらに対抗心を燃やした様子だった。この分では、二人が戦うことになるかもしれない。それは出来れば、模擬戦という枠組みであってほしいと、白井は切に願った。

脳髄盗取：一

旨い。旨すぎる。

綿飴のように繊細で滑らかな歯応えと喉越し。舌にいつまでも残るまるやかさと濃厚なコク。どれを取っても、いかなる料理に勝るものがある。

足りない。こんなものでは足りない。一キロ弱の量ではまるで足りない。もっと食べたい。もっともっと食べて、満たさなくてはならない。自分の能力を、自分の頭を、自分の精神を。

人間の脳髄は、かくも美味なるものだ。

第二学区にある訓練施設で、廷兼郎は男と向かい合っていた。屈強な体つきの相手は、ゆさゆさと体を振ってリズムを取り、踏み込む機会を窺っていた。

対する廷兼郎は、肩口から伸ばした左手を緩く開き、右手は臍の前で、掌を下に向けて置いている。

男は鋭いステップから、勢いを殺さずワンツートを放つ。踏み込んだ分伸びてくる拳が、廷兼郎の顔面目掛けて走る。

次の瞬間、男は右腕を伸ばしたまま、がくりと膝を突いて呻き声を上げた。廷兼郎は左ジャブを弾き、右ストレートを左手で受け止めると、そのまま手首を極めていた。

一瞬の攻防に、周りで見ていた学生からは称賛の声が上がる。

「このように、相手の手の甲をこちらに向けた状態で握り、親指で薬指の付け根を押さえます。ここにはツボがあるので相手は力が入らず、逃げることは出来ません」

空いた右手で関節技を極めている左手を細かく指差して説明する。

学生たちはその説明を熱心に聞いている。

廷兼郎はこの訓練施設で、戦闘技術の指導を行っていた。彼は高校に特待生として入学し、その入学条件に訓練施設での戦技指導も含まれているため、定期的に訓練施設での実技訓練を警備員や風紀委員ジメントに対して行っていた。

廷兼郎は、こうした仕事をこなせば学費は免除、そして生活費と家賃も保証されるとあって、むしろ労働することが楽しいとさえ思っていた。

「それでは二人一組になって、今までの動きを練習してください。仕手は顔ではなく腹を狙ったりと、色々工夫してみてください。受手は無理に綺麗に極めようとしなくて良いですから、初めはゆっくりやってみてください」

先ほどの屈強な男は「お願いします」と挨拶し、今度は廷兼郎から繰り出された右手を掴み、捻り上げてみせた。

「いいですね。藤原さんは体が大きいから、より力で押さえ込むようにしても有効でしょうね」

「プロレスの脇固めみたいに、押さえ込んだほうがいいですか？」

「相手が一人の場合は、それで大丈夫だと思います。ただ、複数居た場合は脇固めをして寝転んでるところを攻撃される可能性があるのです、どちらも憶えて、状況によって使い分けることが理想です」

「なるほど。分かりました」

そうしている間に訓練時間が過ぎ、チャイムが鳴り響いた。他の学生たちは既に手を止めていた。

チャイムが鳴り終わる頃には、皆その場に正座して、背筋をぴんと伸ばしていた。

「それでは、今日の訓練を終了します。お互いに、礼！」

「ありがとうございました！」

「自分に、礼！」

「ありがとうございました！」

「神前に、礼！」

「ありがとうございます！」

世界最高の科学技術を誇る学園都市の中であろうと、武道は礼に始まり礼に終わる。廷兼郎は開始と終了の礼を徹底し、それを行えない者には、絶対に自分の技を教えないということを堅く決心していた。

例えそれが観念的に過ぎず、非効率的だと言われても絶対に譲れないと、戦技教導官に就任する際の面接で宣言していた。

そんな廷兼郎の決心は、風紀委員と警備員の前では杞憂に過ぎなかった。彼らは皆、自分から志願して加入しただけあって、やる気とモラルは非常に高い水準にあり、廷兼郎の主張をすんなりと受け入れてくれた。

三つ指を立てた礼を終えると、皆はジャージから着替えるために更衣室へ向かった。

「字緒さん、さよなら」

「はい、さようなら」

「んじゃ廷さん、あばよ」

「はい、さようなら」

「字ちゃん、またね」

「はい、さようなら」

風紀委員の年齢層は小学生から高校生まで存在し、高校一年生の廷兼郎は、年下にも年上にも教官として接しななければならない。

廷兼郎としては、あまり教官面をしたくないので、『教官』や『先生』といった単語で呼ぶのは遠慮してもらっている。そのためかフレンドリーすぎて教官としての示しが見つからない場面が多々あった。

そこが例外的に未成年で訓練施設の戦技教導官になった廷兼郎の、唯一の泣き所だった。

「このままでいいのか。もっとビシツとしたほうがいいのか。示しが見つからないって言われても、同年代なんだからしょうがないよ。こ

の際ヒゲでも生やすか！」

「何を一人で喋っていますの」

「そげぶツ!？」

驚いた廷兼朗が振り向くと、そこには制服に着替え終わった白井黒子が立っていた。

「白井さんか。脅かさないでくださいよ」

「空間移動は神出鬼没が身上ですの」

「ここで発揮しなくてもいいでしょうに」

「ところで廷兼さん、この後何かご予定はありますの？」

「この後の予定ですか？ トレーニングに当てようかと思ってますけど……」

「つまりは暇ですね」

「何て身も蓋もない言い方！」

ガーンと衝撃を受けた廷兼朗の肩にぽんと手を当て、白井はにっこり笑った。

「さ、行きますわよ」

「ちょ、ちょっと待って。どこ行くんですか？ せめて着が」

廷兼朗が首に掛けていたタオルが、ふわりと道場の床に落ち、人の姿は掻き消えた。

脳髄盗取：二

「固法美偉は、同じ支部の風紀委員の学生たちと相談していた。警備員からの要請を受け、今動ける風紀委員の全てを動員するため、大慌てで可動人員の確認をしていた。」

「固法先輩、人手を連れて来ましたの」

虚空から現れた白井を見て、固法はほっと安心した顔を見せた。

「ありがとう。急に呼び出しちゃってごめんなさいね」

「お気になさらず。風紀委員として当然ですわ。ねえ、廷兼さん」

「はい。全く、その通りです……」

白井に促された廷兼郎の返事は、ほとんどか弱いものだった。彼の肩は、見るからにがくりと下がっていた。

「字緒くん、何その格好？」

「見ての通り、道着です」

「そんな急がなくてもよかったのに」

急いでいたわけじゃなくて、空間移動で有無を言わず連れて来られたんです、という説明さえ億劫になるほど、街中での道着姿は廷兼郎の精神をがりがりと削ってくれた。

「風紀委員だから、当然なのです……」

とりあえず廷兼郎は、白井の言葉に乗っかることにした。

「それで、人手が要る仕事って何ですか？」

「第二学区にある研究所から、治療を受けていた患者が脱走したそのよ」

「研究所で治療？」

「何でも高次の脳障害を患っているとかで、病院では手が付けられないんですって。だから一刻も早く見つけて、治療しないといけないのよ」

「どこに逃げたか、分からないんですか？」

「ええ。学園都市の監視システムにも、今のところ引つかかってこなくて。だから全学区の風紀委員と警備員を上げて捜索しているの」「それはまた、大捕物ですな」

事情を大方把握した廷兼郎は、難しい顔をしていた。

「どうしましたの？」

「いや、治療中に脱走したってことは、その治療がつかつたのかな、と思つて」

「夢遊病患者かもしれませんわよ」

「夢遊病で徘徊してるのに、監視システムを抜けられるとは思えないな」

「まあ、そうですね。でも治療がつかなくて逃げていては、治るものも治りませんわ」

確かに白井の言うとおりだ。廷兼郎の懸念は単なる杞憂に過ぎない。今の時点では、早く脱走した患者を捕まえ、治療に専念させることが大事である。

「患者の身体的特徴は？」

「研究所からデータを貰ってるから、携帯に送るわ」

「携帯、ですか……」

白井が口紅ほどの小さな携帯端末を出しているのに対し、廷兼郎は全身をくまなく探っていた。白井に突然空間移動させられたため、携帯端末は第二学区の訓練施設に置きっ放しであった。

「字緒くん、携帯くらいちゃんとしてなさいよ。急ぎの用があつても、所持品はしっかり確認しないと」

「まあまあ固法先輩、わたくしと一緒に捜索させますから」

そうして白井からフォローを受ける形で、廷兼郎は患者の捜索を開始した。

そこはかたなく納得のいかない廷兼郎だったが、風紀委員の仕事だ

から仕方が無いと諦め、白井とのツーマンセルで本格的に搜索を開始した。

「患者の名前は安治並甲佐あじなみこうすけさん。年齢は十五歳。身長は一五八センチ。体重五十三キロ。髪は黒。人相はこんな感じですよ」

白井の見せてくれた写真には、利発そうな青年の顔が映っていた。脳障害の治療中ということだったが、写真を見た限り肌の色艶は健康体そのもので、一見ただけでは病人と思えない。

「脱走当時の服装は？」

「脱走したのが夜半だったので、紺のパジャマだそうですわ」

「パジャマですか。それなら歩いていればすぐ分かりますな」

「ええ。道着くらいに目立ちますものね」

廷兼郎がしかめた顔を向けるが、白井は何処吹く風といった様子で笑っていた。

「まずはこの路地から探しますわよ」

あらかじめ決められた搜索範囲に従い、白井たちは建物の間にある路地へと入っていった。

たまに学生が近道に利用するだけで、人通りなど殆ど皆無の路地である。脱走した患者が、学園都市の水も漏らさぬ監視システムをすり抜けていることを考えれば、こうした場所に逃げ込んでいると言ふことは想像に難くない。

細いながらも入り組んだ路地を、二人で手分けして搜索する。白井は空間移動テレポートを行いながらほとんど搜索範囲を消化していく。

廷兼郎は軽く「俺いらなくネ？」と思っただが、そんな気持ちは、薄暗い路地の奥に人がうつ伏せに倒れてるのを発見した時に、一瞬で吹き飛んだ。

身形から女子学生であることが分かった。ただならぬ事態を予感した廷兼郎は、すぐさま走り寄った。

「どうしました？ 大丈夫ですか？」

呼びかけても返事がない。それどころか身動きみじろ一つ起こさない。

廷兼郎は女性を抱き起こした。

ぎくりと、廷兼郎は一瞬だけ硬直した。

「どうかなさいましたの？」

廷兼郎の異変に気付いた白井が、すぐ傍に空間移動テレポートで現れた。

「白井さん、すぐ警備員に連絡してください。あと一応病院も」

「その方、気絶していますの？」

白井の問いに、廷兼郎は力なく首を振った。

「死亡しています」

白井が息を呑む。駆け寄って女子学生の左手の脈を取り、瞳孔の開き具合を観察する。こういうことは風紀委員だけあって、対応は迅速かつ正確である。

そして白井は、女子学生が生存反応を示さないことを確認した。

もはや脱走した患者探しどころではない。急いで警備員に連絡し、白井は彼らを誘導するために路地の入り口へと向かった。

いきなり死体に出くわすなんて、ミステリー小説さながらの体験である。これも学園都市故か、という変な納得の仕方をする廷兼郎は、女子学生の頭部を抱えている右手に妙な違和感を覚えた。

（何だ、これは？）

頭部が軽すぎる。まるでボールでも抱えているような感覚だ。尋常な人間の頭の重さではない。

人間の頭部と言うのは、成人ではおよそ六キロほどの重さがある。成長期の女子学生といえど、それなりに重いはずである。

職業柄、人間の頭部を叩いたり、抱えて締め上げたりすることが多い廷兼郎は、敏感にその違いを察知した。

「……失礼」

物言わぬ女子学生に一言詫びて、廷兼郎は彼女の頭部を軽く揺すった。そして彼女には申し訳ないが、廷兼郎は吐き気がこみ上げるのを禁じ得なかった。

「こちらですの。女子生徒が一人、死亡しているのを発見しました

の

到着した警備員を引き連れて、白井が現場に戻ってきた。

「君が第一発見者かね？」

「はい。ここにこう、うつ伏せの状態でした。起き上がらせて確認したのが、十三時二十五分のことです」

「分かった。では詳しく事情を聞きたいので、同行してくれたまえ」
「了解です。それと、気になることが……」

女子学生が数人の警備員に取り囲まれる様を見ながら、廷兼郎は苦々しい顔をして言った。

「恐らく彼女は、脳が無くなっている」

廷兼郎の話を聞いていた警備員が、怪訝な顔で廷兼郎を見ていた。

脳髄盗取：三

アンチスキル
警備員への状況説明はすぐに終わり、開放された廷兼郎は一旦第二学区の訓練施設へ私物を取りに戻り、その後、風紀委員の支部で報告書を作成していた。

「それにしても、まさか死体を見つけてしまうとは、思いもよりませんでしたわ。学園都市では何が起きても不思議ではないとはいえ、ああいうことがあるなんて思いませんでしたわ」

白井が冗談めかして言っても、廷兼郎は黙ってパソコンをにらみ付けている。やはり先ほどのことが堪えているのだらう。神妙な面持ちをして、報告書の作成もはかどらない様子だ。

「警備員から連絡が来ましたよ」

オペレーターをしていた初春飾利が呼びかけると、廷兼郎はすぐに彼女のパソコンへと向かった。その画面には、被害にあった女子学生のパーソナルデータが映し出されていた。

名前は公咲明之。こしなきあけの 中学二年生。十四歳。

さっと目を通してから、廷兼郎はぐつと目を瞑った。

「死因は何でしたか？」

「はい。脳組織の喪失によるショック死だそうです」

やはり脳が無くなっていったことに、廷兼郎は難しい顔で頷いた。

「欠損や傷害ではなく、喪失ですの？」

初春の報告に、白井が疑問を投げかけた。

「はい。大脳皮質や脳幹まで、ごっそり無くなってるって……」

「外傷は……、恐らくありませんわよね」

現場で被害者の様子を見ていた白井は、諦めるように言った。

「外傷は倒れた際に出来た顔の傷だけだそうです。犯人は、空間移動能力者の可能性が高いそうです」

外傷が無いと言う事は、外科的な手段で被害者の脳を取り出した

わけではないということであり、それを可能とするのは、物体を任意の場所へ転送させる空間移動能力者であるということは、自明の理だろう。

「人間の脳だけを空間移動させるなんて。間違いなく、高レベルの空間移動能力者ですわね」

「白井さん、参考までにお聞きしたいんですけど、本当に空間移動能力者にこのような犯行が可能なのでしょうか？」

「本当に、とは、どういうことですか？」

「今回のように、脳を体外へ空間移動させるとするのは、とてつもないストレスになるんじゃないですか？」

直接相手の死傷に繋がる能力使用は、良心や常識といった観念に阻害される。それでも無理に行うことは能力者に多大なストレスを与えらることになる。場合によっては心的外傷後ストレス障害を患い、その後の能力使用が制限、あるいは不可能となるケースも存在する。「確かに、ものすごいストレスですわ。私には正直、出来る確信はありません。ですが仮に、そうしたストレスを感じない精神状態なら、可能であるとも考えていますの」

「他人の脳みそを取り出して、平気でいられる精神、か。十中八九、病気ですな」

「ええ。同じ空間移動能力者としては、犯人を早急に拘束して精神病院にブチ込みたくて仕方ありませんわ」

「でもこの事件、警備員の管轄になるから、僕らはもう関われないでしょう」

廷兼郎の言葉に、白井も勢いを削がれてしまった。

風紀委員に対して、警備員はその上に位置する。危険な事件や任務の際には、警備員のみで対応するのが常である。これには風紀委員の生徒を危険に晒さないことと、より強大な能力の行使を未然に防ぐという目的がある。

「それが、それでも無いんです」

「どういふことですか？ 初春」

「警備員は第二学区から脱走して行方不明になった患者の捜索に当たっているため、それが終了するまでは、第一発見者の字緒さんが所属する第一七七支部の風紀委員が、捜査を行うようにとの要請がありました」

「何だと!？」

廷兼郎は初春のパソコン画面に映る警備員からの報告書を読み、愕然とした。

「人が一人死んでるんだぞ。そんなに患者が大事なのか？ ふざけやがって……」

捜索が終わるまでの間とはいえ、殺人事件の初動捜査を学生に任せるとはどういう見か。廷兼郎は無機質な文字の羅列に今にも食って掛からんばかりの敵意を向けていた。

その脱走した患者、安治並甲佐あじなみこうすけがどのような立場の人間か、廷兼郎には分からない。もしかすれば、やんごとない身分を持つVIPなのかもしれないし、一刻も早く見つけねば命に関わる病を患っているのかもしれない。そうした已むに止まれぬ事情があり、警備員も上層部からの指示を受けて仕事をしているだけということは十分に想像できるし、理解もする。

それでも、廷兼郎はやるせない気持ちでいっぱいだった。

このような仕打ちは被害者である公咲に対して、あまりにも無情である。

「やりましょう。捜査」

廷兼郎は覚悟を決め、白井と初春に顔を向けた。

被害にあつた公咲の無念は、風紀委員が汲み取る。患者探して忙しい警備員になど、一指たりとも触れさせはしない。

その決意を表すように、廷兼郎はぐつと拳を握り締めた。

「警備員が患者を探し出す前に、僕らで犯人を捕まえましょう」

「勿論ですわ。警備員の対応は腹に据えかねますが、正直なところ、渡りに船ですわね」

白井も握った拳を突き出し、廷兼郎の拳にトンと押し当てた。白井は白井で、同じ空間移動能力者を捕まえたいという意志があるのだろう。

初春だけは、そんな二人のやり取りを冷めた目で見つめていた。

「もう、女の熱血なんて流行りませんよ」

カタカタと小気味よくキーボードを叩いて、ひたすらパソコンの操作に集中している。

「初春、ここは空気を読むべきですよ。一人で斜に構えるのがカツコイイとか言って、和を乱さないでほしいですわね」

「分かりました、分かりましたから、お花いじくるのやめてください！」

頭の花を取ろうとする白井の手を避けている間も、初春の手はキーボードから離れなかった。

「既に事件の概要と警備員からの要請を、支部の風紀委員の皆さんに送信しました。これから方針を決めるため、ミーティングを行うようにも伝えてあります」

「ミーティング？ 皆ここに来るんですか？」

「いいえ。そんな必要はありません。何故ならここは学園都市ですから！」

どうだとはかりに胸を張る初春に、廷兼郎は少し気圧された。

「集まらないなら、どうやって会議するのです？」

「携帯端末を利用して、ボイスチャットによる会議を行います」

初春の説明に、廷兼郎はぐぐぐと大きく首を傾げた。どんなに頭を回そうと、携帯端末で会議する仕組みが彼には分からなかった。

そうこうしている間に、廷兼郎が覗き込んだパソコンの画面に、固法美偉このしみいの顔が小さなウィンドウで表示された。

「今何人ぐらい集まってるかしら？」

「まだ私たちと固法先輩だけです」

「そう。あと七、八人集まったら始めてしましましょう」

そして間を置かず、次々と第一七七支部のメンバーの顔が表示される。その様子に、廷兼朗はこれでもかというほど目を真ん丸く見開いていた。

「すごい。これが初春さんの能力だったのか」

「いや、これは能力じゃありませんわよ。パソコンと携帯電話を繋げただけですの」

「だから、そういう能力じゃないんですか？」

白井は目を細めて、横ではしゃいでいる無邪気な男子高校生を見つめていた。彼のように、最先端科学を驚いてみせる反応は、学園都市に慣れ親しんだ白井にとって新鮮に映った。そして同時に、科学に囲まれた都市における彼の生活が、非常に不安だとも感じた。

「集まったみたいなので、会議を始めますよ。字緒さん、そのホワイトボードを持ってきてください」

「え？ ホワイトボードをですか？」

「はい。このカメラでホワイトボードを映しながら会議をするんです」

廷兼朗が今までに輪をかけて驚き、本当に映せるのか早く確かめたくて、急いでホワイトボードを移動させた。

「それじゃ字緒さん、進行、お願いします」

「あ、はい。それでは、まず今回の事件と、その後の経緯について確認します」

おう、だの、はい、だのという声が返ってくるたび、廷兼朗は「ホントに会議が出来てる！」と感動したが、事件に対する責任感でそれを押さえ込んだ。

「既に資料が送られているので省略しますが、私が遭遇した殺人事件の捜査が、警備員ではなく我々第一七七支部の風紀委員に委ねられたということで、その捜査方針を話し合いたいと思います」

廷兼郎は、巨大なうねりのようなものへと抗う感覚をひしひしと
感じながら、会議を進行していった。

脳髄盗取：四

会議の結果、こりの固法率いる数人で被害者の友人知人関係を調べ、白井は他のメンバーと共に殺害現場の引き継ぎを担当し、初春は参加可能な風紀委員のシフト作成や、捜査情報の整理などの裏方を引き受けることになった。

現場に遭遇した廷兼郎は、一番事件に詳しいとして『フレイムステイブル脳髄盗取』事件統括本部長なる肩書きを初春から拝命仕ったが、「柄じゃない」の一言でバツサリと返上し、検死結果を確認するついでに、学園都市の医師に質問したいことがあったため、被害者の運ばれた病院へ向かった。

そして個人的に、事件の調査を風紀委員が担うことになったと、被害者である公咲こつききに面と向かって伝えたかった。

「本部長、勝手に行動されては困ります」

すっかりその気の初春は、廷兼郎に電話で支部へ戻るよう伝えしたが、彼にその気は全く無かった。

「統括するのは初春さんに任せますよ。僕はもう一度、被害者の検死結果を確認してきます」

「確認つて、データはもう届いてますよ」

「データだけではなく、直接会って分かることもあると思うんです」サイン「メトリ」「読心でもするんですか？」

初春の的外れな言葉に、くすりと廷兼郎が表情を綻ばせた。「そんなところですよ」と曖昧に返答し、病院へ向かうバスに乗り込んだ。

病院のカウンターに用件を伝えると、カエル顔をした初老の医師が出迎えてくれた。

「君が例の風紀委員さんだね。話は聞いているよ？」

「はい。よろしくおねがいします」

「うむ。こっちだ」

薄暗い階段を下りると、検死室に通された。

「親御さんや友人への連絡は？」

「両親には伝えたよ。だが遠地に住んでいてね。電車を乗り継いで、こちらに着くのは夜になるだろうね。そのころには霊安室に移せるだろう。友人との面会も、その後ということになるかな？」

今ごろ公咲の両親は、仕事を休んで取るものも取りあえず電車に乗り込んだことだろう。嘘であつて欲しいと、呪文のように繰り返しながら。

じくりと胸が痛む。肉親を失くしたことで被る苦しみは、一年ほど前に両親が他界した廷兼郎にとって他人事ではなかった。

今回の場合は、腹を痛めて生んだ子供が先に亡くなってしまったのだから、世の無情を痛感せずにはいられない。

程なく通された検死室は、えもいわれぬ匂いが立ち込めていた。

強力な洗剤で隅々まで清潔に保っているからこそ、『死』の芳香がこれでもかと浮き彫りにされていた。

医師が壁に取り付けられた取っ手を引くと、あの女子学生、公咲明之の体がするすると滑り出てきた。

発見当初よりも血の気が失せているものの、体には傷らしい傷が見られず、死体であると伝えてもらわねば、睡眠中だと誤解しかねない。

「死んでいるとは、とても思えません」

「ああ。とても綺麗だね」

廷兼郎は公咲の姿を見てみると、おもむろに手を合わせて祈り始めた。

「警備員アンチスキルではなく、風紀委員があなたを殺した犯人の捜査を担当します。非才の身ながら全力で捜査し、必ず犯人を見つけ出しますので、どうか安らかに眠ってください」

力むあまり、祈りを上げる両手は震えていた。その震えが止まると、廷兼郎は大きく息を吐きながら手を下ろした。

ようやく伝えるべきことを、伝えるべき相手に伝えられた。ここ

から本当の意味で、廷兼郎は犯人探しを始めることができる。

「先生。検死結果について、もう一度詳しく教えていただけませんか？」

強い決意を込めた瞳を、医師は笑顔で歓迎した。

「ああ。いいとも。聞きたいことは何でも聞きたまえ」

公咲の死体を元の場所へ戻し、医師は廷兼郎を資料室に案内した。

「まず、直接の死因である脳組織の喪失は、どのように行われたのでしょうか？」

「非常に正確に行われているね。くも膜の内側にある脳組織と脳幹が見事に喪失している。ほぼ即死だろうね？」

くも膜の内側、大脳皮質や小脳だけを狙いましたような正確さで体外へ空間移動したらしい。

「このような事例というのは、過去にあるのでしょうか？」

「人体の空間移動は、空間移動能力者にとってはそう難しいことではないと言えるが、今回のように相手を死亡させる意図があったと思われる事例は少ない。そして、脳組織のみを空間移動するというのは、今回が初の事例だね？」

専門家の意見に、廷兼郎は大きく頷いて納得した。脳を体外に空間移動させるなんて、やはり尋常の事態ではないようだ。

「知り合いの空間移動能力者の方が、仮にこのような犯行を行うとすれば、能力で相手を殺してもかまわないという、ある種の倒錯した精神が必要だと言っていたのです」

「ふむ。確かに、モラルや常識などを無視することが必要だね？」

「能力者がそうした精神状態に陥るには、どんな条件が必要なんでしょう？」

医師は口を潤すための緑茶を淹れながら、諭すように説明した。

「能力者とはいえ、人間だよ。常識や良識の観念は一般人と何ら変わらない。生まれつきそのような精神構造をしていたり、トラウマを受けるような体験をしたり、精神的に追い詰められたり、何らか

の洗脳を受けたり、精神に影響を与える薬物を服用したりするなど、原因はいくらでもあるね？」

「原因、か」

素人考えを晒すのは恥ずかしいが、そんな体裁など、先ほど誓った決意の前には取るに足らないものだった。

「先生。これは僕の推測なんです。犯人は彼女を殺したかったのではなく、脳組織が欲しかったのではないでしょうか？」

「なるほど。能力者の脳が目的であり、死亡したのはその過程に過ぎないというわけだね？　だとすれば、まさか外の研究機関の作業かな？」

「それも可能性がありますが、外の研究機関とか、とにかく能力者について研究したい連中だとしたら、脳を取り出すというのは迂遠な手段だと思います」

能力者を研究するために脳を取り出す。確かに能力者は自分だけの現実に基づく脳内の演算によって超能力を発揮しているのだから、バイナルリアリテイ脳を調べればそれが分かると考えるのは自然である。だからといって、本当に脳を奪うと言うのは、ナンセンスと言うほか無い。

「今回の場合、脳は取り出したが、被害者の体は残っています。つまり現場に証拠を残している。あえて超能力を使って、高い精度で脳組織を取り出す苦勞をするよりは、能力者自身を拉致したほうが遥かに容易だと、僕は思います」

「確かにそうだね。ならば、どうして犯人は脳を取り出したんだらうね？」

ここまででは既に、支部の会議で話された、というよりは廷兼郎が話したことであった。外の研究機関の作業だというゴシップめいた意見に、廷兼郎はそうして苦言を呈した。

それでは何故、脳だけが取り出されたのか、という疑問が当然なされたが、それについて廷兼郎からは答えようとしなかった。彼自身、自分なりの推測は持っていたが、それが合ってるかどうかの保

障は何処にも無い。そして、敢えて能力者の前で話すことでもないと判断していた。

能力者のいないこの環境にならないと、廷兼朗は打ち明ける気にならなかった。

脳髓盗取：五

廷兼朗は意を決して、自身の仮説を披露することにした。

「例えば、先ほどの話に出ていた洗脳や薬物によって、食人欲求のようなものが刺激され、このような行為に至ったとは考えられないでしょうか？」

「カニバリズムの発現か。面白い説だね？」

「そうでもなければ、何故脳だけが抜き取られたのか、説明がつかないと思うんです」

食人欲求、あるいはカニバリズムとは、人が人を食すことを表わす。特定の文化を持った社会では、対象の肉を食すことで特別な力が得られると言う信仰があり、例えばアフリカの先住民の間では、勇者の肉を食べた者は勇者になれると信じられ、勇猛さを誇った人間の肉を食べるという祭祀が行われていた。中国でも、漢方という同種同食、病気になる部分と同じ部分を食べることによって病気を治すと言う、治療行為としての食人も行われる場合があった。

カニバリズムは文化的社会的意味を持つ場合もあれば、山や海で遭難し、必要に迫られて行うもの、特殊なフェティシズムを持つ人間による殺人行為に付随して見られるものなど、さまざまなケースが存在する。

能力者の脳組織。それはある意味、超能力の発現しない者にとって憧れである。どうなってるのか、自分と何処が違うのか、といった嫉妬じみた欲求が、カニバリズムとして発露する場合があるのではないかと、廷兼朗は考えていた。勿論これは、低位能力者と高位能力者の場合にも当てはまるだろう。

廷兼朗自身、能力者に羨望の眼差しを向けている無能力者《レベル0》だからこそ、こうした意見が頭をよぎった。

「ちょっと待ってくれ。少し、思い当たる節があるんだね？」

廷兼郎の推測に刺激されたのか、医師は席を立って棚にある資料を探り始めた。

「確か、数年前に禁止された薬に、似たような副作用があるという研究結果が発表されたような……」

「本当ですか！！」

「ああ、これだ。見たまえ」

医師がすぐに見つけてくれた資料に、廷兼郎は食い入るように顔を向けた。

「服用者には共通して、他人に噛みつき、千切った肉片を好んで食すなどの行動が見られ、気性は極めて獰猛となる……」

文章を指でなぞりながら復唱する。カニバリズムの発露と言えなくもない現象だ。

「脳、というわけではないが、その薬を服用した患者は非常に獰猛となり、嗜好が変化して、人間の肉を食べたがる傾向が見られたというんだ。これは危険だとの判断がなされ、五年前に禁止されたんだよ。望み薄かもしれないが、調べてみる価値はあるんじゃないかな？」

「はい。幾ら能力が上がるとはいえ、こんな薬の服用は御免被りませぬ。その薬品を扱っていた病院などは、分かりますか？」

「わかん 輪館薬科研究所、と言う所が研究していたようだね。これが住所と電話番号だよな？」

「いや、僕に聞かれても……」

件の研究所の住所と電話番号を書いたメモを受け取り、廷兼郎は深く頭を下げた。

「早速調べてみます。貴重なご意見、ありがとうございました」

「また聞きたいことが出来たら、いつでも来たまえ」

「はい、そうさせていただきます」

丁寧に資料室から辞した廷件郎は、廊下を駆け足で進みながら、ブレイクスタイル『脳髄盗取』事件特別捜査本部である風紀委員活動第一七七支部に

いる初春へ連絡を取った。

「本部長、何してるんですか？ こっちは大変なんですよ」

「何か進展があったんですね」

「いいえ、そうじゃないんです。身辺捜査の進み具合が芳しくなくって。被害者が死んだことを、風紀委員からの聞き取りで始めて知るケースばかりで、聞き取りどころではないんですよ」

「思えば、そうした対応は警備員アンチスキルの担当だった。にわか捜査本部の風紀委員では対応しきれないのも無理はない。

「今は何とか落ち着いて、話をしてくれる人がちらほら出てきてますが、やっぱり一支部だけでは手が足りませんよ。現場の管理には三人ほどの警備員が残ってくれまして、余った人員を身辺捜査に回してるんです。字緒さんも聞き取りに向かってください」

「それなんですが、医師の先生から貴重な意見を頂きまして……」

「廷兼郎は言葉を選びながら、先ほど医師と話した内容を初春に伝えました。」

「つまり、この事件は能力者の脳を食べたがってる人の犯行で、その人は禁止された薬を服用している可能性がある」

「はい。その薬品を扱っていた輪館薬科研究所という所に、これから向かおうと思っんです」

「え？ 輪館、薬科研究所、って言いました？」

「ええ。輪っかに館で、輪館と言うそうですが、それが何か？」

「あのですね、この事件の捜査をする前に、研究所から患者が脱走したって事件、あつたじゃないですか」

「はい。その患者を探してて、遭遇しましたからね」

「その患者さん、安治波甲佐あじなみこうすけさんが治療を受けていたのは、輪館薬科研究所なんです」

「……おやまあ」

奇妙な符合に、どう反応すれば良いのか、廷兼郎は分からずじまつた。

「これでその安治並何とかが犯人だったら、僕の警備員に対する不信感はストツプ高ですな」

「まあ、そんなうまいことにはならないと思いますけど。でもそうすると、患者の搜索で忙しくて対応してもらえないかも」

「いやむしろ、安治並とやらの搜索の件でなら、対応してもらえらんじゃないですか。僕らはともかく、他の風紀委員は彼の搜索に当たっているわけですから」

他の風紀委員と聞いて、初春が何か思いついたのが、廷兼郎には電話越しでも分かった。

「それは変装ですか？ 変装ですね！ 他の風紀委員に変装して、一人で敵地に潜入しちゃうんですね！」

「潜入ではないし、敵地でもないと思いますが……」

「分かりました。そういうことなら仕方ありません。単独での作戦行動を承認します！ これから字緒さんは、統括本部長兼潜入工作員なのです！！」

もはや何をする人が全く分からなくなってしまったが、ともあれ行動が認められたようなので、廷兼郎は一安心だった。

「それじゃ僕はこのことを調べてみますので、何か分かったら連絡します」

「あ、待って！ コードネームはやっぱりスネ」

通話を切り様、何か不穏な単語が聞こえた気もするが努めて無視し、廷兼郎は第二学区へ向かうバス停へと急いだ。

脳髄盗取：六

結論から言えば、門前払いを食らった。

「こちら患者の捜索で忙しい。情報は全て警備員アンチスキルのほうに渡してあるので、そちらに問い合わせてほしい」

変装してどうなる問題ではなかった。支部を偽って窓口で問い合わせると、定例句のような対応を受けた。五年前に禁止された薬剤についても、「今は忙しくてそれどころではない」と突っぱねられた。

「取り付く島もないとは、このことですな」

この線は完全に行き詰った。世の中そう優しく出来てはいないと言うことだろうか。またも世の無情に打ちひしがれていると、よく知っている声が聞こえてきた。

「何しとるんだ？ こんなところで」

「網丘さんこそ、何でここに？」

網丘は廷兼郎の横に座り、自作のスポーツドリンクを飲み始めた。「大学時代に心理学を学んだ教授の依頼で、脱走した患者の逃走ルートルートの割り出しを行うチームに配属させられたんだ」

CIAとかFBIが行うプロファイリングのようなものか、と廷兼郎は納得した。

「それで、見つかりそうですか？」

「全然。情報が足りなくてね。それで掴まらないから、警備員や風紀委員ヤッジメントを動員して大げさにローラー敷いてんのよ」

「へえ。そういう事情もあったのか」

「それで、廷兼郎は？」

「実はですね」

廷兼郎はこれまでの事件の経緯を、丁寧に説明した。学園都市において研究者として働いている人間の意見を、ぜひ聞いてみたかつ

た。

「ふうん。そういうこともあるんだ」

「いや、普通は無いですよ。病院の先生もそう言ってたし」

「その五年前の薬とやら、私のほうで調べておこう」

「いいんですか!？」

貴重な示唆はもらえなかったが、それよりも重要な仕事を請けてくれたので、廷兼郎は網丘の手を握って喜んだ。

「ああ。どうせ今から、もっと情報を超越せつて、チームでせつつきに行くところだったんだ。ものはついでさ。あの中、荒らしまくつてやるよ」

相当腹に据えかねているのか、持っているペットボトルをぐしゃぐしゃに握り潰して、網丘は笑っていた。

訓練施設の所長にして、古今東西あらゆる格闘技を収集・研究し、対能力者戦闘術の開発研究を目的とする『カウンターメジャー対抗手段』計画の創始者でもある網丘楊漣あみおかようれんが、齒を剥いて輪館薬科研究所をにらみつけていた。彼女自身は格闘技の類は身に付けておらず、身体能力も平均的な女性のそれだが、廷兼郎は彼女と戦うことだけは避けたいと考えていた。

これだけ網丘が本気になっているのなら、自分が横からどうこう言うことは何も無い。もう一度、薬の調査を依頼して頭を下げ、その場を後にしようとした時、携帯端末に連絡が来た。

「はい、字緒でございます」

「廷兼さん、一体何をしてらっしゃいますの？」

「白井さんですか。何といわれましても、僕なりに捜査をしていたんですが」

「初春に聞いたなら、潜入捜査がどうだの特殊工作員がどうだのと言つてましたわよ。全く、警備員より早く事件を解決するという意気

込みはどうしましたの。遊んでる場合じゃございませんのよ」

あのハイテンションなオペレーターがどのように説明したのか、
廷兼郎はまぶたの裏に浮かぶようだった。

「それで、今何処ですの？」

「第二学区の輪館薬料研究所です。これからバスに乗って第七学区
に向かいますよ」

「いいえ。結構ですの」

廷兼郎が疑問の声を上げる間もなく、後ろから肩を叩かれた。

「今度は驚きませんのね」

「何となく予想できてたんで」

「それでは、調査に向かいますわよ」

「バス代が浮いて嬉しいなあ」

今度は所持品を欠損することなく、廷兼郎は空間移動させてもら
った。

鎧袖一触：一

廷兼朗^{ていけんろう}が次に目にした風景は、荒廃したビルの立ち並ぶ、スラム街のような場所だった。最先端科学で統治された学園都市に、このような場所は僅かにしか存在しない。

「ストレンジ。ということは、第十学区？」

学園都市の管理が行き届かず、廃棄同然の扱いを受ける場所を、通称してストレンジと呼ぶ。確か第十学区内に存在していると、廷兼朗は記憶していた。だがそれは同時に、第七学区の風紀委員が他学区で活動することを意味していたため、廷兼朗は心配そうな顔を白井に向けていた。

「ここは第十学区ではありませんの。第七学区内のL地区ですわ」それを聞いて、今度は違う心配が廷兼朗の頭に浮かんだ。学校施設の密集するこの第七学区にもストレンジがあるというのは、気持ちの良い話ではなかった。

「L地区って、ウチの高校にわりと近いな。こんなのがあったなんて、気付かなかった」

「廷兼さんは、高校一年生なのに世間を知らなすぎではなくて？」格闘能力は確かにずば抜けているのだろうが、それ以外のことがまるでなっていないと、白井は他人ながらに廷兼朗を心配していた。特に科学に対しての知識は、学園都市において致命的と思えるほどに低い。

「手厳しいなあ。でも僕、学園都市に来てから三ヶ月しか経ってないんですよ。まだこの町のことか、よく分からなくて」

「三ヶ月？」

それは確かに短い。外から来た人間なら三ヶ月でここに慣れるとというのは少々酷な話だが、そういう事情は別にして三ヶ月という期間は短すぎる。

「三ヶ月って、先月から風紀委員^{ジャッジメント}になったと言ってましたけど、風

紀委員になるには四ヶ月の研修が必要なんですよ」

「そうなんですか。学校のほうからは非入りなさいと言われて入っただけでなんで、細かいとこまで調べてないんですよ」

風紀委員の研修をパスすると言うことは、それほどの身体能力が既に備わっていると言うことを現しているのかもしれない。白井は廷兼郎との模擬戦を思い出し、身体能力に関しては彼女の常識外にあることを改めて確認した。ならばこうした特例的な対応も有り得るのか、と白井は納得した。

「そういえば、廷兼さんはどこの高校ですか？ 校章もつけていらっしやらないですし」

「えっと、何て言ったかな。長くて変な名前だから、未だに覚えてないんですよ」

廷兼朗は携帯を取り出し、電話帳を確認した。その中には、自分が通っている高校の電話番号と名前を登録していたはずだ。

「ながてんじょうきそうそう。長点上機学園です」

「長点上機学園！？」

思わず白井が声を上げて驚くほど、その学園の名前は学園都市に影響を渡っていた。

長点上機学園。能力開発において学園都市随一を誇る超絶名門高校である。強能力《レベル3》以上の能力者しか入学を許されていない常盤台に対して、長点上機学園は能力者以外にも門扉を開いている。だが能力者以外の枠で入学する彼らは、生半な能力を持つ学生を遥かに上回る技能や知識を有している。例えば、最先端科学が集まる学園都市の、その開発分野において第一線で活躍できる程度の人材が、無能力の場合でも入学を許可される。

ちなみに、白井の通っている常盤台は、学園都市における体育祭『大霸王祭』において長点上機学園に敗北しているという、因縁浅からぬ相手でもある。

隣で歩いているとっばいニーチャンが、どういった理由で長点上

機学園への在籍を許されているのか。まさか科学分野においてだつたら、もうこの都市は終わりだと、白井は一人で学園都市の未来を憂いた。

「ど、どうやって入学しましたの？」

「強いて言えば、スポーツ推薦というやつですな。僕の家は、天羽あま根流ねっていう古流柔術を継承してきましたね。その長点上機学園の関係者を名乗る人がスカウトに来まして、折角だから受けてみたんです。

その試験がまたすごかったんですよ。空手、柔道、ボクシング、ムエタイ、バリートワードにレスリングと、他にも色々な格闘技者の方たちと手合わせして、その人たち全員に勝ったら入学できるという形でした。百人組手を想像してもらえたら、分かりやすいかな」

白井は色々な意味で、それはもうスポーツでも推薦入試でもない気がしていたが、その様子を語る廷兼郎の顔はこれまでにない恍惚さを宿していた。

「試験と言われて緊張したけど、あれは楽しかった。オリンピックの強化選手や現役のムエカッチャーも呼んでもらって、一日丸々試合三昧でした。本場ムエタイのローキックとか、空手の体躲わし突きとか、食らってみると効くんですよ、やっぱり！ レスリングのタックルなんて、本当にすごいですよ。打撃の速度で踏み込んでくるから、もう堪らないんですわ」

興奮気味に話す廷兼郎を宥め、白井は携帯端末で資料を見せながら、これまでの捜査の進捗を説明した。

「この辺りに、被害者の友人が住んでいると言う情報がありましたの」

「彼女は、スキルアウトだったんですか？」

「というよりは、スキルアウトが友人にいただけのようですよ。彼女自身はレベル2の能力者ですもの」

「……そうですか」

被害者の友人を探して、ストレンジを闊歩する。先ほどから嫌と言うほど視線を感じるが、それも無理からぬことだろう。ただでさえ見たことのない連中が歩いているのだし、そのうちの一人は常盤台の制服を着用している。常盤台の制服は、それ自体が高位能力者の証である。

学園都市からあぶれ、ストレンジに住み着くようになった住人が、高位能力者をどう見るか、廷兼朗は容易に想像できた。

ここの住人が不必要に絡んでこないよう祈りながら歩いていると、廷兼郎の携帯端末に連絡が入った。画面には、網丘あみおかの文字が表示されていた。すぐさま通話ボタンを押すと、焦りながらも押し殺した声が聞こえてきた。

「廷兼郎？ あなたに頼まれてた薬の件だけど、えらいことになってるわよ」

「もう分かったんですか。さすがだなあ。それで、えらいこととは？」

「五年前に禁止された薬なんだけど、その研究はここの中だけで続けられてたみたい。より効能を強力にした新薬の開発に成功したと書いてあるわ」

「より効能が強くとは、具体的にどんな？」

「文字通り効き目が上がって、副作用も少し変化したようね。他人の、それも能力者の脳を食べさせるように要求してくるようになり、それが叶わないと暴走を起こすこともあるってよ」

「何て無茶苦茶な薬だ。てか薬かそれ？」

「薬に関してはこんなところ。それでね、研究所の連中がようやく情報出したから、患者の行動予測も済んだわ。ローラーで今のところ見つかってないことを考えると、第七学区のL地区が第一候補かな。もう警備員が向かってるから、先越されちゃうかもよ」

廷兼郎は警備員より先に犯人を捕まえようとは考えているが、別に安治並甲佐あつちのみいさを発見したくないわけでもない。安治並の搜索が、犯

人確保に繋がらないというだけである。

安治並の行方など聞いても仕方なかったが、網丘の言った座標だけは気になった。

「第七学区の、L地区ですか？」

（どうしたんですの？）

（どうもあの脱走した患者、この辺りにいるかもしれないそうです）
白井が通話中に小声で話しかけ、廷兼郎も小声で答える。

「網丘さん、今その第七学区のL地区にいるんですが……」

「あらそうなの。じゃあついでに捕まえちゃえば？」

いたずらを思いついた子供の無邪気さで、網丘が薦めてきた。

廷兼郎が安治並を発見・保護したとなれば、警備員に対して最高の意趣返しになるが、それでは本末転倒と言うものである。

「まあ、病人ですからね。早く見つけるに越したことはないけど……」

網丘との通話中に何気なく覗いた廃墟の一室を見て、廷兼郎は硬直した。そして釣られるように、その暗い室内に走っていった。

「もしもし、廷兼郎、聞いているの？」

紺一色のパジャマを目撃してから、網丘の声などいちいち聞こえていない。

廷兼郎が黙ったのは、安治並を発見したからではない。発見した安治並の行動が、彼を釘付けにした。

「やつぱり、網丘さんはすごいんだなあ」

「はあ？ 何のこと？」

感動に震える声で、廷兼郎は網丘に言った。

「安治波甲佐を発見しましたよ。……野郎、目の前で、脳みそ食ってやがる!!!」

淡い灰色のそれを、安治並は大事そうに抱え、ゆっくりと愛でるように咀嚼していた。

鎧袖一触：二

廷兼郎ていけんろうの後を追って来た白井の顔が強張る。人間が、人間の脳を食らっているようにしか見えないその状況は、風紀委員として数々の修羅場を潜り抜けた彼女にとっても異質極まるものだった。

「食うな……」

静かに、厳かな声音で廷兼郎が言った。

「それを食うんじゃないねえ！！」

次の瞬間には、胆力の限りを以って目の前のカニバリストに警告した。

廷兼郎の声で、夢から覚めたように安治並あじなみが顔を上げた。髄液と脳組織をべったりと付けた口をあんどりと開けている様は、有名な絵画を思わせる。

「……食わせる」

フランシスコ・デ・ゴヤ作『我が子を食らうサトゥルヌス』である。

自分の息子に殺されるという預言を恐れ、五人の息子を一人残らず喰らい殺したローマ神話の神。それを題材にした、『黒い絵』の中で最も有名な一枚。

「お前の脳を、食わせる！！」

安治並は一直線に、白井に向かって飛びかかった。彼の軌道上に割って入ろうとした廷兼郎をすり抜け、白井は前進した。

もう先ほどの動揺は、白井の中に無い。安治並は脳を食べている。その事実だけでも彼を拘束するに十分な理由となる。

（空間移動テレポートで体位を入れ替え、地面に叩きつけますの！）

触れただけで相手の体を空間移動テレポートさせ、任意の場所に出現させる。それが傍目には、白井が相手を投げているように見える。柔道家にとっては夢のような能力だ。

強引に掴みに来る安治並の右手を取り、十一次元座標演算を完了する。

そしてなす術も無く、白井は安治並によって地面に押し倒された。
(空間移動が出来ない!?)

演算に間違いはなく、白井は十分に落ち着いていた。それでも、転送は起こらない。

白井の顔から、一気に血の気が失せる。

「白井さん!」

廷兼郎は、押し掛かる安治並の腰を前蹴りで強打し、白井から引き剥がした。

白井の前に立ちほだかり、安治並に対して構える。

「何をポーっとしてるんだ」

「あの方に空間移動が効きませんの」

一瞬疑念が浮かんだが、警備員からの報告や会議でのことを思い出すと、すぐに得心がいった。

「そういえば、犯人は空間移動能力者だったな。空間移動能力者は、同系統能力者の身体を移動出来ないって聞いたことがある」

「ええ。恐らく、各々の持つ十一次元座標が干渉し合い、空間移動をキャンセルさせてしまうのでしょう」

まだその分野の研究は進んでいないが、その事実が分かれば今は十分である。

「体は空間移動できなくとも、体に空間移動は出来ますのよ」

白井は太ももに巻きつけた革ベルトから、金属矢を取り出す。

安治並は、今度は飛びかかるうとはせず、じいっと白井を見つめていた。

「危ない!」

突然、廷兼郎は白井の肩を押し弾いた。思わぬ方向からの攻撃に、白井は転びそうになりながらたたらを踏んだ。

「な、何するんですの!」

抗議する声に、廷兼郎は応えない。そんな余裕は、彼に一片も残っていない。

廷兼郎の視線の先、安治並の手には、茶色い帯のようなものが見える。白井にとつてそれは、とても身近な色と質感だった。

右側頭に手を当て、白井の顔が引きつる。彼女の自慢のツインテールの一房が喪失していた。

大抵の空間移動能力者は、白井のように、自分の体を起点に空間移動を行う。それは慣れ親しんだ自分の体の座標が、最も演算しやすいためだ。しかし中には、己の体以外の座標を起点として空間移動を行う能力者も存在する。

「手に触れているものを遠くへ動かすのではなく、遠くのものを手元へ動かす。まるで詭計あいつえたような能力ですわ。そうやって、他人の脳を取り出しましたのね、安治並甲佐！！」

白井が声高々に相手の能力を喋っている。相手が尋常な理性の持ち主なら、それも威嚇行為になるだろうが、目の前の能力者は明らかに特殊な精神構造を持っていることが伺える。

（『脳髄盗取』たあ、ぴつたりなネーミングだったってわけだ。初春さんのセンスはたいしたもんだよ）

それでも廷兼郎は、安治並の能力が彼の嗜好に合致していることだけは、心の中だけで大いに賛同した。

基本的に廷兼郎は、闘いの間は無口になる。勧告などの必要性があったり、会話することによって相手を操作する意図がない限り、滅多なことでは戦闘中に喋らない。

素手で、しかもたった一人の無能力者《レベル0》が能力者と戦う上で、喋ることは非常に危険な隙となる。そのような隙を晒すことを極力控えた先にこそ、単独にして無手の無能力者《レベル0》による、能力者の打倒という結果が見えてくる。

決意というより、最早それは信仰と言っている類の心理状態だった。

廷兼郎が幼少より習得している天羽根流あまはねりゅうでは、相手とは一触、一

合の間に、一手を放ち、一撃にて決する。これは、隙を作らぬよう初撃で倒し、戦う時間を短くするという意味合いもあるが、戦闘という濃密な事象のなかでは、初撃のみでは終わらない場合がままある。それでも戦闘を終わらせる際には、相手との一触一合の間に放つ一手一撃を大切にし、勝負所を見誤らぬようにすると言っ心構えを表している。

安治並は既に標的を廷兼朗に絞っているらしく、血走った目できつと睨み付けていた。息を荒く吐きながら、両手は何かを掴むように掲げられていた。

廷兼郎の体が、前触れなくふわりと揺れる。そのまま彼は止まることなく、ゆらゆらとその場で踊り始めた。

まさか踊りで相手を混乱させるつもりなのかと白井は心配したが、ここに至ってその冗談を真に受けることは無く、不気味な行動の目的をすぐに看破した。

あの踊りは、安治並からの攻撃を避けている、もしくは狙いを逸らしているのだ。人間の脳を取り出せるほど正確な空間移動レポートを行える能力者である。無能力者《レベル0》の廷兼朗は、本来なら一瞬で体の部位を切り取られ、致命傷を負っているはずだが、その瞬間はいつまで経っても訪れない。

安治並の放った遠隔空間移動レポートが発動していない。もしくは発動しているのに成功していない、と言っべきか。

白井は既に傍観の体であった。この状況で横合いから攻撃を加えることは、廷兼郎のリズムを阻害する恐れがあった。そして何より、自分を倒した無能力者《レベル0》が、この程度の能力者に負けるはずはないと確信していた。

動きながらも体幹を崩さず、静かに構えを取る廷兼朗は、正に抜き身の刀だった。周囲にいる人間を緊張させずにはおかない、冷ややかで致命的な気配。それでいて彼自身に緊迫した様子は見られず、

その挙措はあくまで緩くしなやかだ。

むしろそのしなやかさこそ、危ういものを感じさせる。

臍の前に置いていた右手が、いつの間にか掌を上にしていた。次の瞬間、白井は音を聞いた。琴の弦を弾いたような旋律は、断じて人間の腕を振るって発生する音ではなかった。

廷兼郎が右手刀を下から振り上げた形で静止していた。まるでコマ送りの映像の途中を取り除いたように、いつ近づき、いつ放ったのか、一部始終を目撃していたはずの白井には皆目見当がつかなかった。

少し間を置いて、安治並の喉から一滴の赤い雫が垂れてきた。

天羽根流当身、喉断ち。斜め下から振り抜かれた手刀が、相手の喉の薄皮を裂く。だが、この技の目的はそれではない。全身のスナップを効かせ、高速で振り抜かれる手を顎に擦過させ、確実に脳震盪を誘発する。

顎の先端を狙う関係上、まるで喉を断ち切るような軌道を描くため、この名が冠せられた。

廷兼郎の一撃で、完全に意識を喪失した安治並は、まるで軟体動物のように力を抜いて、その場に崩れ落ちた。

人間を一撃にて昏倒せしめる打撃は驚嘆に値するが、何より白井が驚いたのは、廷兼郎が、目には見えない能力行使を完全に把握していると思えないことだった。

安治並が廷兼郎の体に向かって行った空間移動を、彼は風船のように揺れ動く体術を駆使し、全てを未遂に終わらせていた。

白井の空間移動蹴りや、報告書で読んだテレキネシストとの戦闘、そして今回の特殊な空間移動による攻撃も、この無能力者《レベル0》の体に触れることすら叶わなかった。

(いいえ、触れるだけなら、私がやってみせましたの。でも……) 確かに白井は模擬戦の際、廷兼郎の左手を握るに至ったが、むし

るそれを利用され、左手を引かれて体が流れたところに、入れ違いの膝蹴りを食らった。だからあれは触れたのではなく。

(触れさせたに、過ぎない)

カウンターで、より威力の高い蹴りを与えるための布石に過ぎないのなら、白井はそれを触れたと表現する気にはなれなかった。

「これが、『カウンターメジャー対抗手段』……」

単独で無手の無能力者《レベル0》による、能力者の制圧。目の前の男は、それを非常に高い次元で体現している。

横たわる安治並に手錠をかけ、二人は警備員の到着を待った。

鎧袖一触：三

胸に花束とジュースの入ったペットボトルを抱え、廷兼郎は町を歩いていった。

薄暗い路地に入ると、廷兼郎が抱えているものに似た花が置いてあった。恐らく公咲明之（こさきあけの）の友人たちが置いていつてくれたのだろう。

廷兼郎はここで、殺人事件の第一発見者となった。あの時抱えた被害者、公咲の頭部の軽さは、これからも忘れることは出来ない。

花をそつと置き、ペットボトルを添えると、廷兼郎は静かに手を合わせた。

殺人事件の犯人である安治並甲佐（あじなみこうさ）は廷兼郎によって拘束され、警備員（チスキル）に引き渡された。学園都市を上げての捜索が完了し、一件の殺人事件が異例のスピード解決を迎えた。

危険な副作用のために禁止されていた薬を、さらに改良した薬を服用していた安治並は責任能力が欠如していたと考えられ、現在は療養施設に送られている。

安治並が入院していた輪館薬料研究所は、危険な薬剤の開発研究をしたとして警備員の査察を受けることとなった。

研究所で治療を受けていた六十七人にも例の薬の服用が認められ、準備が整い次第、彼らも療養施設に送られてリハビリを受けることになる。

一つの研究所が招いた災禍は、六十八人の精神を壊し、一人の脳と命を奪った。その全員が未成年だった。

祈りを終えて目を開けると、隣には白井黒子がいた。いきなり気配が現れたところから察するに、空間移動（レポート）してきたのだろう。

「あれ？ 髪の毛、どうしたんですか？」

白井は、いつものように茶髪のツインテールをなびかせていた。

廷兼郎の記憶が正しければ、白井は安治並の空間移動攻撃によって右の髪を切除されていたはずだ。

「これはウィッグですよ」

「ああ、カツラですか」

「カツラではありませんウィッグですよ」

「だから、カツラでしょ」

「違いますの。カツラとウィッグとは全然違いますの！ 焼き飯とチャーハンくらい違いますの！」

カツラの別の言い方がウィッグだと思っていた廷兼郎は、白井の説明を受けて納得した。

どうやらムエタイのローキックと空手の下段蹴りくらい違うものらしい。これは確かに、一括りにして語るのは失礼に当たるだろう。

「白井さんも押んでいきますか？」

「昨日の内に済ませましたの。その花も私が置いたものですわ」

置いてある花束の一つを指して白井が言った。廷兼郎の菊とは違い、色鮮やかなカーネーションである。同性ならではの気遣いだろう。

廷兼郎は、まぶしそうに目を細めている。

「どうしましたの？」

「僕は、菊しか考えてなかった」

自分の持ってきた花束と、白井の花束を見比べる。

「女の子に贈るんだから、菊よりもこれのほうがいい。そんなことすら、思いつかなかったなあ……」

「そんな、落ち込むことではないと思いますわよ」

「落ち込んだんじゃないんですよ。そういうのもアリなのかって、気付かされたんです」

ほうと息を吐いて立ち上がった廷兼郎は、白井の前まで来て、ぺこりと頭を下げた。

「ありがとう、白井さん」

それだけ言うと、廷兼郎は白井を通り過ぎて、どこかへ向かって歩いていった。

ジャッジメント
風紀委員の仕事を手伝うように言っつもりだった白井は、声を掛けられなかった。通り過ぎる一瞬に廷兼郎が見せた冷やややかな気配は、戦闘中に感じたものと同じだったからだ。

鎧袖一触：四

第二学区訓練施設の地下、本来は使用されない区画に廷兼郎はいた。

「不機嫌そうね」

「そう、見えますか」

廷兼郎は会議室のような小さな室内で、あみおかようれん網丘楊漣と向かい合っていた。テーブルの上に置いてあるパソコンの画面をじっと見つめ、椅子に深く腰掛けていた。

「要件は分かっていたわね」

「ええ、まあ……」

言いながら、既に目を通した画面をスクロールさせ、一番上に戻すと『輪館薬科研究所の元研究員による学園都市外への逃亡』というメッセージが表示されていた。

「何か言いたいことがあるんでしょう？」

網丘の言葉には答えず、廷兼郎は眠るように瞑目している。少なからず自分が関わった事件にまつわる以上、平常心で受け入れるのは難しかった。

輪館薬科研究所の元研究員が脱出計画を企てている。六十八人と一人の人生を狂わせておきながら、その責任も取ることなく逃げを打つ。あまつさえ、学園都市の貴重な技術を流出させて

この事態を知って泰然自若としていられるほど、廷兼郎の頭はおめでたくない。

「作戦決行は今日の午前零時よ。それまで休んでなさい」

「……はい」

気の無い返事をして、廷兼郎は部屋を出た。

「まったく、素直じゃないんだから」

網丘はくすりと微笑んで、自作のスポーツドリンクに口をつけた。「嬉しいのなら、嬉しいと言えればいいのに」

まだだ。まだ。終わっていない。

まだ、事件は終わっていないかった。

『脳髄盗取』事件は、これから終わる。この拳で終わらせる。その機会がまさに到来する。

その感動を押し隠すことに精一杯だったが、ここへきて抑えきれず、体中の震えとなって現れる。

『対抗手段』計画の一部。対能力者戦闘術の、もう一つの側面。単独で無手という状態で、無能力者が能力者を制圧する方法を確立・発展させることは別に、廷兼郎にはある任務が課せられている。

極力証拠を残さぬよう、単独で無手という状態で任務を遂行する能力、あるいは武器・兵器の使用が著しく制限された状況下で、任務を遂行する戦闘技術を開発すること。それこそが『対抗手段』カウンターメジャー計画である。

無力な一般人でも能力者と対等に戦える方法を探すことと、能力も武器も使えない状態での作戦遂行能力を確立すること。その二つを合わせて、『対抗手段』カウンターメジャー計画は完全な姿を現す。

今回は、研究者たちの逃亡を阻止すると言う任務を遂行しよう、カウンターメジャー『対抗手段』計画の開発協力者である廷兼郎に要請があつた。

このような任務への従事は、廷兼郎が長点上機学園への入学の際してあらかじめ説明されていた。廷兼郎は十二分に納得して、『対抗手段』カウンターメジャー計画への参加を決定した。

作戦行動の中には殺人行為も含まれているのだが、廷兼郎はそれも容認した。

廷兼郎が幼少より父から手解きを受けた戦闘術である天羽根流は、あまはねりゅう天羽流と根来忍法を統合し、改変して出来た流派である。

武術であり忍術である天羽根流の後継者が、人を殺すことを回避してはいけない。武術も忍術もその本質は、他人を殺すための技術である。他を排し自を生かす、生存本能に根ざした目的がある。

これもまた、武か。いや、これこそが武、なのか。

それを知るため、廷兼郎は引き受けた。自分の『武』を築き上げるため。より『武』の深遠に辿り着くため。

瞑想から目を開けると、道場の戸を網丘が叩いた。

「時間よ。準備なさい」

敵かに頷き、廷兼郎は任務遂行のための準備に向かった。

用意された黒尽くめの服一式は、夜戦仕様の装備である。着用者の動きを妨げぬよう、防護は最低限に留めてある。そのため銃弾も炎も電気もまるで防げないという、市販の防弾ジャケットを下回る性能を持つ。そもそも『カウンターメジャー対抗手段』計画には、致命的な能力や武器・兵器の行使を真つ向から受け止めるという発想は無いので、装備に防御力など求めない。暗闇に溶け込む視覚効果が得られるならば、夜戦においては十分である。

最後に顔を隠す布を受け取り、それを括り付けた。

目鼻立ちは完全に隠されている。廷兼郎の体術で暗闇を味方につければ、まず見分けることは出来ないだろう。

準備は万端整った。今日こんにちこれにて、『ブレインステール脳髄盗取』事件は完全に幕を閉じる。

「行つて参ります」

「武運を」

訓練施設の裏口からずりりと抜け出した廷兼郎は、学園都市の夜に紛れて姿を消した。

収容施設からの脱出は、まず成功と言って良かった。外の組織は、実に巧みに収容施設から元研究員たちを連れ出した。

学園都市の監視システムの死角を突き、警備員アンチスキルからの追跡を振り切り、彼らは熟練された手際で、確実に学園都市からの脱出を達成しつつあった。

外の世界よりも、三十年は進んでいる科学を有する学園都市の技術を欲しがっている人物・団体は枚挙に暇が無く、それは薬学分野においても例外ではない。

輪館薬科研究所の一部の研究員は以前から連絡を取っていた外の組織に、学園都市からの脱走幫助を条件に全面的な技術提供を約束した。

二つ返事で了承した外の組織は、もつとも警戒の緩む真夜中に収容施設へ潜入し、三人の研究者を連れ出した。彼らは今、学園都市の隔壁周辺の倉庫で、外の仲間による隔壁を越えるための工作準備が整うのを待っていた。

神経質そうな研究員は、ジェルミンのケースを抱えながら、しきりに親指の爪を噛み潰していた。

研究所の患者が脱走し、研究所の不正な薬物開発も露見したことで、彼の研究の場は取り上げられてしまった。あのまま大人しくしていたら良くて執行猶予、悪くて即実刑。どちらにしても前科者として扱われる。学園都市市内での再就職は絶望的だ。

この甚だ不本意な扱いは、自分の頭脳に対する最高の侮辱である。その研究者は考えていた。能力開発に薬学分野で貢献した彼を、学園都市は一顧だにせず切り捨てた。

これは由々しき事態である。聡明な研究者は、この浅薄極まる判断を覆す義務がある。そのためには外の組織と協力し、自分への扱いが誤りであったことを学園都市に認めさせなければならぬ。

「まだか、まだなのか」

「あと二十分ほどだ」

外の組織から派遣された潜入作業員は落ち着くように研究員を諫めた。警備員の追跡が気になるのは分かるが、ここで騒がれて、万が一所在がバレては元も子もない。

「輪館薬科研究所の、元研究員の方々とお見受けします」

突然、闇の中に声が木霊した。

「あなた方の行動は外患誘致に抵触し、優れた技術が学園都市外へ漏洩する恐れがあるとして、当方はこれを如何なる手段を用いても阻止いたします。なお阻止行動には、対象の殺害も含まれております」

全員が辺りを見回すが、積み上げられたコンテナに遮られた漆黒で塗りつぶされているだけで、警告者の姿は確認できない。

「外部協力者も含め、十秒以内に両手を頭の上に置き、うつ伏せになりなさい。以上の行動が確認されない場合、さらなる逃走、あるいは抵抗の恐れ有り」と判断し、阻止行動を開始します」

その言葉を最後に、警告は止んだ。作業員は拳銃を取り出し、周囲の警戒を始めた。長い筒がバレルの先に取り付けられたプラスチックポリマー製のそれは、サプレッサー対応のシグ・ザウアー・プロ現行モデル『SP2022』である。フランス内務省やアメリカ陸軍でも採用されている拳銃である。

9mmパラベラム弾を使用する場合はオーバーサイズだが、むしろその余裕ある設計が射撃時のコントロール向上に繋がっている。コンシールド性は決して高くないが、射撃精度と動作の信頼性において非常に高い性能を持っている。

拳銃を持って辺りを伺う作業員に対して、研究員は恐々と強ばる他無かった。

十秒を超えたにも関わらず、さらなる警告は無い。そのことがさらに焦燥を煽る。

先ほどまで聞いていたのは、何かの間違いだ。研究員の一人は、

そんな気さえしてきた。

怖がるばかりで何をしようとしもない、もやしのように細い頂を廷兼郎は驚掴み、後ろ髪を引く。ただし、頸椎がずれてしまうほどの強さで。

枯れ枝を折ったときの、乾いた音響が開戦の合図だった。

「ひ、ひあああ!!」

狼狽する研究員に対して、工作員は速やかに迎撃動作を取る。拳銃を即座に構え、敵に向けて発砲する。

先ほど殺した研究員の体を盾に、廷兼郎は突進した。一瞬、工作員たちは動揺し、発砲に間断が生まれる。

研究員の体を放り投げ、近くの工作員にぶつける。律儀に研究員を抱えた工作員の両手が塞がっている。耳がから空きだ。

中指を立てた両手を工作員の耳に勢いよく差し込む。二本の中指が根元まで吸い込まれ、工作員は気絶した。

すぐ後ろにいた工作員が、廷兼郎の肩を掴んで銃身を突きつけてきた。掴む猶予を撃つ動作に変えていれば、勝機があつたかもしれないものを。

憐憫を込めた瞳のまま、廷兼郎は右足の向きを変えるだけで相手の懐に入り込み、右肩を押し付けた。

中国拳法、八極拳が套路の一つである鉄山靠てっざんこうに似た動作だった。

廷兼郎が地面を踏み割る音が響くと、工作員は優に五メートルは吹き飛び、背中をコンテナに叩きつけて停止した。肩による打撃を食らった胸部が、不自然に凹んでいた。彼は胸に手を当てたまま、涎を垂らして地面に突っ伏した。

三人目の工作員は銃を構えたまま、あろうことか仲間がすっ飛んでいく様を阿呆のように眺めてしまった。廷兼郎は度し難い隙を晒した彼の足に、躊躇無く下段回し蹴りを敢行した。

右脛すねが左の膝関節の外側を直撃し、工作員は痛みのみならず声も上

げずに崩れ落ちる。

廷兼郎が打撃した場所は『足陽関』あしよっかんと呼ばれるツボで、筋肉の境目であるために防御が薄く、的確に打撃すれば骨と神経へ効率的に衝撃を伝えることが可能となる。

彼我の身長差は消えた。さすれば急所は目の前。

返す刀の左膝で、しゃがもつとしている作業員の体が仰け反るほどに突き上げた。

噴水のように口中から血を吹き上げ、作業員は仰向けに倒れこむ。モロに衝撃を受けた下顎は、真ん中から二つにばつくりと、骨ごと断ち割れている。

今更痛みがこみ上げてきても、声を上げられるような口ではなかった。

ここまでは、最初の研究員の絶命からきっかり十秒の出来事だった。

この惨状をどう受け取ったのか、残り二人の研究員は虎に魅入られた鹿のように突っ立っていた。

「わ、分かった。投降する……」

そのうち研究員の一人が、今更になって手を頭の後ろに当ててうつ伏せになった。

「これでいいんだろう。た、頼む、殺さないでくれ！」

廷兼郎は言い募る彼に歩み寄り、手が置いてある後頭部へ速やかに下段の踵蹴りを見舞った。堅く尖った踵が正確に湾曲頸部の一番低まっている部位を蹴打し、研究員の頭が脚気検査の要領で跳ね上がった。

「あ、が……」

痛みに耐えかねて声を上げるが、頸部と共に咽喉も踏み潰されたため、明瞭な発音は望むべくも無かった。

阻止行動開始後の降伏は、廷兼郎にとって全く意味を持たない。

既に勧告は行っている。そして十秒の猶予も与えている。それでも降伏しなかつた時点で抵抗の意思は確認済みである。阻止行動の遂行は覆らない。

対象を殆ど制圧し終え、最後の研究員を探すと、彼は降伏した一人を殺害している間に、倉庫の奥へと逃げていた。

「く、来るな、来るなッ！」

口角泡を吹いて逃げる彼の尻を、廷兼郎は追いつき様、強烈に蹴り上げた。運動不足の研究員の体が、ゆるやかな放物線を描いて、コンテナの上に乗った。股間から夥しい血を漏らして、彼は痙攣を繰り返した。

尻と鞆丸の丁度真ん中、足の付け根には「会隠あいいん」と呼ばれる急所がある。これは両足に広がる動脈の分岐点であり、先ほどの廷兼郎のように正確な位置へ衝撃を与えれば、コンテナの上に寝転がる研究員のように、失血性ショック死を被ることになる。

研究員三名の殺害、および外部工作員の無力化に成功。対象人物の逃走を阻止。然るに技術流出の危険性は皆無。これにて作戦目標の達成を確認。

「任務終了。これより帰還します」

それだけ連絡し、廷兼郎は夜の倉庫街を後にした。

武

「全く、とんでもないことですわ」

第一七七支部の中、テレビ画面に映ったニュースを見て、白井黒子は義憤に駆られていた。

違法な薬物の開発・投与を行っていた輪館薬料研究所の研究員三人が、収容施設から脱走を図った。その後、研究員たちは倉庫内で死体となっているのを警備員アンチスキルによって発見された。現場には学園都市の住人ではない人物も重傷を負っている状態で発見され、三人は外部協力者を頼って脱走を図ったと考えられる。

「あれだけのことを起こして、何の責任も取らずに逃げるなんて」「でも、何で殺されちゃったんですかね？」

パソコンを操作しながらニュースを聞いていた初春が、疑問の声を上げた。

「大方、仲間割れでも起きたのでしょうか。小悪党らしい末路ですわ」「確かに、能力の行使や学園都市にある武器の使用の痕跡は見つかってないけど、死んだ研究員たちの傷、何かすごい力が加えられたとしか思えない傷らしいですよ。駆動鎧パワードスーツでも使ったんじゃないかって、警備員の先生が言ってました」

「連中、そんなものを所持してましたの？」

「外の人たちがそんなの使うなんて、怖い世の中になっちゃいましたね」

外の勢力が学園都市に与える影響は、学生でも感じ取れるほど身近になってきている。そしてその逆、学園都市が外の勢力に与える影響も強まっている。

「こんちわ……」

二人が世間話に興じていると、廷兼郎が支部に顔を出した。

明らかに覇気が無く、低い声での挨拶だった。

「字緒さん、大変ですよ」

「輪館薬科研究所の研究員が逃げ出して、仲間割れで殺されちゃってたんですって」

「……へえ、そりゃあ、ざまあないですな」

「淡白な言葉を返して、廷兼郎は支部の中を軽く見回した。

「固法先輩はいませんか？」

「まだ来てませんよ。書類なら渡しときましようか？」

「それじゃあ頼みます、初春さん」

初春に書類を渡し、用が済んだ廷兼郎は支部を後にしようとしたが、ドアに手を掛けたところで、はたと立ち止まった。

「初春さん、参考までに聞きたいんですが……」

「何ですか？」

「女の子に贈る花って、どんなのがいいんですか？」

「え？ 女の子？」

女性に花を贈るといふ行為と、それを話す廷兼郎のあまりにも沈んだ顔のギャップに、初春は混乱をきたした。

「えっと、と、とにかく贈る気持ちが一番大事ですよ。どっついう花とかは、後から自然とついてきますよ！」

「そう、ですか。ありがとうございます」

なぜか痛々しい笑顔で礼を告げて、廷兼郎は風紀委員の支部を後にした。

「字緒さん、何かあったんですかね？」

「さあ？ 知りませんわ」

「……喧嘩でもしたんですか？」

一瞬、白井の姿が虚空に消え、初春の頭に衝撃が走る。座っている状態から空間移動レポートで初春の背後を取り、頭頂へ一撃を見舞う。刹那の早業である。

「そついう発言は甚だ失礼ですわよ」

「別に白井さんと、とは言ってますんよーだ」
たんこぶを押さえながらべーっ舌を出している初春に、白井はさらにゲンコツを見舞った。

廷兼朗はもう一度、事件の現場を訪れていた。近くの花屋で購入した花束をそっと立て掛け、黙禱を始めた。

ここで女子生徒を殺した犯人を生み出した研究者の一部は、彼が手ずから屠^{ほぶ}った。他の研究員が脱走を企てている様子は無く、このまま事件は収束していく様子だった。

これで、殺された公咲明^{トキアカ}之の無念を、少しは晴らせただろうか。その一助に、自分はなれただろうか。

研究員を殺す前に、懺悔でもさせるべきだったろうか。謝罪と命乞いの言葉を有りつ丈吐き尽くさせたあとで、五感からたつぷりと『死』を味わわせるような殺害方法を取ったほうが、彼らの罪には相当だったろうか。

(それは、出来んなあ……)
彼らを拷問に掛けるのが目的ではない以上、あの時の廷兼朗にそのような行動は許されていない。それに拷問染みた殺害方法を取ったとしても、自分の良心を充足させるだけだ。

(それは、武術では無いのか。それとも、武術なのか)

『武』という言葉は、『矛』と『止』という二文字で構成されている。このことから『矛』を『止』める。長じて争いを治めることが『武』であるという俗説が紀元前百年頃から蔓延しているが、実際に『止』とは足跡を表し、歩くことや進むことを意味する。それと『矛』を合わせ、『矛』を執つて『止』^{すす}む様を形容している。

どちらの説を支持しようと、それは各々の解釈として胸の内に秘

め、人生の指針とすれば良い。

廷兼郎は、その二つの解釈を合わせて『武』であると信仰していた。争いを止めることも、進んで争うことも、切り離せない『武』の一面なのである。

なら、廷兼郎が行ったことは『武』だろうか。争いを止めるでもなく、進んで争うでもなく、命じられたことを達成するために繰り出した拳は、蹴りは、果たして武術なのか。

「他人の命令を唯々諾々と受け入れ、淡々と作業をこなす。そこに『武』はあるのか？」

違つと、心の中で声を上げる。ならば、それを行った廷兼郎は武人ではなく、彼の技は武術ではない。

殺された女子学生の無念を晴らそうと繰り出す拳にこそ『武』は宿るのか。廷兼郎は、確たる自信がなくなっていた。

まだ自分は、自分の『武』さえ見つけてない。自分の学んできた技術は、武術になっていない。まだ、武人になりきれしていない。

『カウンターメジャー対抗手段』計画。この計画を進めていけば、少しは『武』の何たるかを理解できるかもしれない。雲を掴むように儂い希求だが、無いよりはマシである。

廷兼郎はいつの間にか堅く握り締めていた拳を解き、自分の置いた菊の花束に向けて一礼した。彼が颯爽とした足取りで路地を去ると、風になびいた菊が他の花束に混じって、ふわりと揺れた。

武（後書き）

第一章終了です。ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。

一応ここまで科学サイドが舞台だったので、第二章では魔術サイドと絡ませてみようと思います。

柔を習う：一

「一つ山越しや灯りが見える。二つ山越しやあと少しっ！」
時代がかった歌を口ずさみながら、あさおていけんろう字緒廷兼郎は日も昇らぬ内から山中を縦横無尽に走り回っていた。

自然の中を走破する、ファルトレック・トレーニングである。山の草や岩を分けながら走り、木を登るなどすることで、バーベルなどの用具では得られない粘りのある筋肉を造る。

この登山こそ、『カウンターメジャー対抗手段』計画の発案者であるあみおかよつれん網丘揚蓮に命じられた早朝トレーニングだった。

木登りをさぼったり、ショートカットをしようものなら、廷兼郎の衣服に装着してある観測機器がいち早く伝えることになっている。同時に、それはトレーニングの効果解析の役割も持っている。

総距離約十キロほどを二時間かけて走る。決して早いペースではないが、道なき道を飛び跳ね、昇り降り、転がりながらの運動量は平坦な道を守る行為に比べて格段に密度が高い。

仕上げに山頂の大樹に登攀する。登れるだけ登ったら、早朝トレーニングは終了である。

終了するのは丁度日の出の時間に当たる。大樹から望む太陽が、遠く地平線から競り上がってくる。裾野に広がる町並みからは、そろそろ生活の気配が漂い始めている。

藍色の世界が橙色へ移り変わる様を眺めている間に、トレーニングで乱れていた息はすっかり整っていた。

「廷兼郎、そろそろ道場に向かいなさい」
「分かりました」

ヘッドセットのように耳に装着した携帯端末から連絡を受ける。これからは山を降り、道場での稽古を受ける。

廷兼郎は身を翻して木を滑り降り、道場へと急いだ。今回彼は、柔術を習いに来っていた。

柔術において最も普遍的な流派は、恐らく大東流合気柔術だろう。大東流合気柔術は、現在普及している合気道の源流に当たると言われ、会津藩の御留流おとめりゅうだった流派である。御留流とは諸般の理由から、その流派を藩外への流出を禁じることである。御留流だったころの大東流合気柔術については、今も研究がなされているが、詳しい実態ははっきりしていない。

大東流合気柔術が歴史の表舞台に上がるのは、明治からのことである。それを担ったのは、『会津の小天狗』と恐れられた中興の祖、ただそうかく武田惣角である。

明治から昭和にかけて活躍した武田惣角は、幼少より武術を修め、大東流合気柔術の他に小野派一刀流、宝蔵院流槍術、手裏剣や鎖鎌なども習得し、武術全般に精通していた。

武田惣角は生涯道場を持たず、請われれば全国何処へでも赴き、自身の武芸を教授していた。

廷兼郎がいる奈良県飛鳥市にも、大東流合気柔術を習得した武道家があった。今回彼は学園都市を離れ、件の武道家の元へ一週間の出稽古に来ていた。

「遅くなりました、練公先生！　すぐ用意します！」

山の麓にある道場の戸を、勢いよく開ける。早朝トレーニングでテンションの上だった体が、早くしると急かしてくる。

ここ数日の柔術三昧で、体のほうが柔術を求めてしまっていた。

「朝から元気なこつ。そげん急がんとよ、わしゃ逃げんて」

不思議な方言で廷兼郎を諷めた老人は、この道場の主にして大練流合気柔術師範の練公三國れんこうみくにである。今年で齢八十に届く老翁だが、その挙動に怪しいところは無く、実に矍鑠かくしゃくとしている。

「それじゃあ、始めるべさ」

道着に着替え終わると、練公老人は廷兼郎を伴って道場裏手の山へと向かった。

大鍊流合気柔術に道場はあれど、主な習練の場は雑木林だった。道場のように平坦な場で戦うことで実戦性は養われないと豪語する鍊公老人は、雑木林や岩場、草むらなどで習練することが多かった。それは鍊公自身が積んできた武者修行での経験において、整備された場所よりも、自然の中で立ち合う機会が多かったことに由来する。

互いに正面にて向かい合う態勢から、廷兼郎が僅かに踏み込み右手を下から振り上げる。無足から顎への当身、喉断ちである。

それを十字で受けられ、鍊公老人が左足を振り上げる。受けた手を取り、相手の腰を蹴って引き倒す、山陰やまかげという技の入りだ。

廷兼郎は右腕を曲げ、さらに踏み込む。足で蹴る間合いを殺しつつ、曲げた右腕の肘で胸板を刺す、と見せかけての左掌底掬い打ちだ。相手に右腕を取らせ、空いた肝臓を突き上げる。

振り下ろす腕刀部分が、掬い打ちを弾く。鍊公老人は右の虚を読み、左の実を的確に見抜いた。

両腕を開いた状態になった廷兼郎は、さらに体を前に出して頭突きを敢行した。

鍊公老人は廷兼郎の右腕を握っていた左手を引き、後ろ足を引くことで体を捌きながら廷兼郎の突進をやり過ごした。

勢い余った廷兼郎が止まる頃には、二人の位置関係が入れ替わり、間合いは先ほどの倍に離れていた。

「ほっほっほ。元気なこつたべよ」

(元気なのは、全くどつちだか……)

廷兼郎は右の脇腹を押さえながら、心の中で毒づいた。右への体捌きの最中、鍊公老人は左の鉄鎚と呼ばれる肉厚の部位で、廷兼郎の右脇腹を打っていた。

これまでの六日間、廷兼郎は技の読み合いにおいて鍊公老人に先んじたことが無かった。武術の素人である学園都市の超能力者を相

手にするとき、彼の洞察力は十分な機能を発揮していたが、武術に精通した人物に通じるだけの性能を持ち合わせていなかったようだ。それに学園都市には、廷兼郎の師に相当する人物が存在しないため、技を掛けられることに体が対応できなくなってしまっていた。

敵意ある攻撃を受け流すには、実際に技を掛けられるのが一番である。出来れば自身よりも実力のある人物が好ましい。網丘と共に色々工夫してはいるが、技を掛けられて食らう。あるいは受け流し、外す醍醐味は、最先端科学でも容易に再現できない。

このままでは、武術に精通した超能力者が出てきたとき、廷兼郎は為す術も無く敗北することになる。さらには武術の素人ながらも、喧嘩に長けた者に遅れを取るかもしれない。

（武術を修め、超能力を操る。まだ、俺は勝てない）

そんな人間に、廷兼郎は勝てるという自信が湧かない。湧くようにならないければ、勝てるという確信を抱かせるに足りうる技術を開発しなければならないのに。

『カウンターメジャー 対抗手段』計画の根幹である対能力者戦闘術の確立。素手にて能力者を制圧するには、まだまだ盤石とは言えない。

「そろそろ昼だの。道場に戻って飯食うべさ」

「はい！」

日の出から正午までひたすら行っていた組み手を打ち切り、食事のために二人は下山した。

帰って早速、廷兼郎は網丘らの検査を受けた。血中の乳酸値を調べたり、脳波計を持ち出したりと仰々しい有様だったが、学園都市にいるときよりも幾分簡易な検査となっていた。

『対抗手段』計画は、超能力者を制圧するのに最適な戦闘技術を研究するという目的に付随して、超能力者を制圧するのに必要な技術を身につけるための、最適な訓練方法も研究している。そのため廷兼郎が行う訓練は逐一、網丘率いる技術班が記録・解析し、廷兼郎の体を以て訓練方法の効果検証を行っている。

研究している訓練方法で得られる身体向上、被る苦痛の程度や怪我などのリスクを比較し、武術に精通しない人間でも習うことが出来るものに落とし込んでいく。

三十分ほど掛けた検査が終わり、廷兼郎はようやく食事に戻りつけた。勿論、食事管理も網丘が手ずからプロデュースしている。

ご飯に鶏のささみとキムチの炒め物。デザートに大豆を添え、ドリンクも豆乳である。鶏のささみは脂肪が少なく、キムチには脂肪の燃焼を促すカプサイシンが含まれている。そして大豆は良質なタンパク質を取り入れることが出来る。

廷兼郎はサプリメントやプロテインの類は摂取しない。『対抗手段』計画は無能力の一般人が主なターゲットであるため、特別な食料や薬品を使わずとも健康的に能力者と戦える体作りが出来なければならぬ。そのため食料は特別なものではなく、普通の経済状態の人でも再現できるものが主である。

基本的にご飯さえあれば文句のない廷兼郎は、ささみとキムチの炒め物をおかずにしてご飯をかつ込み、大豆を嚙りながら豆乳で流し込んでいった。

柔を習う：二

網丘^{あみおか}たちの用意した機材が自分の道場に搬入されるのを、鍊公三^{れんこうみ}國^{くに}は事前に快く了承していた。「わしも若い頃に、こういう扱いを受けたかったのう」と廷兼郎を羨みもしていた。

鍊公は齡十四を迎えたとき、生家を飛び出し全国へ武者修行の旅に出たそう、日本だけでなく外国まで立ち合いを行うために出掛けたという経歴を持つ。他流派との実戦を繰り返し、闇討ち紛いの仕掛けを行うこともあったらしいが、それだけに彼の持つ技術の実戦性は独特で、海外の軍隊からインストラクターとして招かれることもしばしばである。

一週間とはいえ、一学生に過ぎない廷兼郎が本来教えを請えるような身分の人物ではないが、それを実現してしまうのが学園都市の力というものだろう。

廷兼郎が食事している傍ら、鍊公は日本刀の手入れをしている。柔術に留まらず、剣術や槍術、杖術や手裏剣術を修め、長らく滞在していた海外で銃器の取扱も習得している。

『^{カウンターメジャー}対抗手段』計画では素手を前提にしているが、それは武器を使用しないということではない。むしろ武器に関しての習練も、廷兼郎は積極的に取り組んでいる。それは武器を用意しないが、利用はするというコンセプトだからである。

素手の状態から、あらゆる状況に合わせて武器を見つけ、持ち替え、組み換えて使用することで技術の汎用性を底上げする。

そういう意味で鍊公は、廷兼郎にとって最適の師範であると言える。

「にしてもよお、その歳でこれだけの柔を身に付けおるとは。戦う

相手を探すのも苦勞するだろに」

茎を取り出し、目釘を整えながら、嬉しそうに鍊公が話しかける。「戦う相手は網丘さんが連れてきてくれるんで、事欠きませんよ。

それに学園都市の人たちはプライドが高いからなのか、好戦的な一面がある」

「学園都市のお。火い吹いたり岩投げたりしちやる相手とバチバチやり合えるなんて、羨ましいこつたど。わしも行きたか」

「ぜひ一度お越しください。驚きますよ」

学園都市への出入りにはパスポートが必要で、学園都市内にいる学生の肉親や関係者、あるいは搬入している業者などにしか発行されないが、網丘に頼んで出してもらおうと廷兼郎は考えていた。

会話の内容は少しばかり不穩当だが、二人の雰囲気は祖父と孫そのものといった和やかさだった。

廷兼郎の言葉にしみじみと頷き、鍊公は日本刀を鞘へと納めた。

「今日で最終日じゃが、このまま内弟子になってもよかあよ」

「えー!? 内弟子!?!」

内弟子とは、師に付き共に生活しながら指導を受けることを許された弟子のことである。つまり、人生を掛けてその流派を学ぶことが出来ると言うことである。

大鍊流合気柔術の内弟子。どれほどの人間がその立場に憧憬を抱き、目指してきたことか。廷兼朗は、身が震えるのを禁じ得なかった。

箸を置き、正座して正対し、三つ指を立てて礼を取った。

「誠に勿体無きお言葉をいただき、有難うございます。先生の教えは、私の目的である対能力者戦闘術の完成に、多大な示唆を与えてくれました。そのご恩、深くお礼申し上げます。その上、内弟子の名誉に預かれるは光栄の極みと存じます。しかしながら、学園都市に住まわれる一般人の方々が、危険な能力の使用に怯えることなく身を守る術を模索するには、やはり学園都市を拠点に活動すべきで

あると、私は確信しております。よって内弟子のお誘いですが、今回は謹んでお断りさせていただきたく存じ上げます」

自分ひとりの『武』を追求するためならば、大錬流合気柔術の内弟子になることは、最短の道の一つだろう。だが廷兼郎の参加している『対抗手段』計画は、能力を持たない人間が素手でも能力者を制圧できるようになること、つまり能力者から身を守る術を研究することでもある。

超能力の研究が進み、能力者の全体人口やレベルが底上げされ、中には心無い能力行使をする能力者もいる。そうした危険を回避する一つの手段として、武術が必要であると廷兼郎は確信していた。

今は一人でも多くの能力者と戦い、対能力者戦闘術の完成を目指す。そのため、出稽古で教えを請うことはあっても、特定の師に付く訳にはいかなかった。

「ほっほ。振られてしもうた。相変わらずの石部金吉だべ。そいじや、組み手の続きをしようかね」

「はい！」

快活に返事をし、廷兼郎は急いで食器を片付け、また裏山へと向かった。

「はあ。そんじゃ、ここらで終わろうかね」

そうして日の入りまでを組み手で過ごし、廷兼郎の出稽古は終了した。自分の中にあるあらん限りの力を振り絞り、錬公が終了を告げると同時に廷兼郎はその場で膝を突いた。

「よう耐えなすった。字緒くん」

「……ありがとうございます。錬公先生」

「最後に、見せたいものがある」

錬公は静かに言うと、ゆっくり構え直した。誘われるように、息を整えた廷兼郎も構える。

既に大錬流柔術の手解きは受けている。これ以上、何を見せてくれると言うのか。

(まさか、奥義秘伝か何かを?)

奥義や秘伝とは、その流派の技術の集大成であり、権威そのものである。それを伝授するのかと、廷兼郎は慄いた。

武術の奥義秘伝は獲得が容易でないことから、よく誤解を受ける。それは、『秘伝とは秘密兵器であり、敵にバレれば破られてしまうため隠している』というものだ。もしこれが本当なら、日本の武術は衰退の一途を辿ったことだろう。

実際のところ流派間の交流は盛んに行われ、江戸時代においては、他藩からの修行者は非常に歓迎されていた。各藩は他藩にある優れた武術を自藩士に進んで習得させるため、わざわざ派遣していたのである。その逆もまた然りだ。

確かに秘伝の方法論を丸裸にし、破ることは可能だろう。しかし、秘伝だけがその流派の攻め手ではないし、手の内が分かっているも避け得ぬ技というものは存在する。『秘伝がバレたら負ける』というのは、一面的な捉え方に過ぎない。

流派の交流が盛んだった江戸時代では、秘伝は対外的に意味を持つものではなく、むしろその流派を習得したことを証明する許可証の意味合いが強くなっていった。その許可証こそが、藩内での出世に繋がるのである。

長く苦しい修行に耐えた者が得るはずの許可証が、一般に漏れてしまえば効力を失う。秘伝を一般から隠すのは、そうした意味からである。故に秘伝を獲得したのも、みだ妄りに他言をしなかった。

激しく、そして濃密だったとはいえ、廷兼郎は一週間しか大錬流合気柔術を学んでいない。そんな人間に秘伝を見せていいのか。見せるべきではないが、見れるものなら見たい。

その葛藤が、慄きとなって現れた。

見せると言っただけ、鍊公は動かない。どうやら見せたい技というのは、返し技の類のようだ。こちらが見に徹する必要は無い。

左の当身を繰り出す。弾かれたが、そのまま引かず袖襟を取る。いやに簡単に取れたことに、むしろ廷兼朗は動揺する。だが技を止める訳には行かない。

相手の左袖を引きながら、顔面への右肘打ち。これが当たろうと当たるまいと、既に技の仕掛けに入っている。

予想通り外れた右肘で相手の左腕を巻き込み、自分の体を浴びせるように引き倒す、外巻込である。

（掛かった！！）

ここ一週間には無かった技の掛かりである。会心の投げがついに達人を捕らえた、次の瞬間だった。

一瞬の浮遊感に襲われ、廷兼朗の内臓が競り上がる。ここ一週間、嫌と言うほど味わった感覚だ。

咄嗟に体を丸めた廷兼朗は、背中から地面へと投げ落とされていた。

「ぐはっ！」

廷兼朗は、転がりながらえずいた。組み手での疲労も相まって、このまま一晩眠ってしまいたい気分だった。だがそれは、彼の好奇心が許さなかった。

投げようとしたのに投げられる。相手の力を利用して倒す柔の思想から言えば、至極当然とも言えるが、これほどの高次元で行われるのは、廷兼朗にとって初めての経験だった。

自分の頭の中にある技術のデータベースを総覧し、巻き込んでいた左腕を中心にして、引き倒そうとする力をずらされ、投げられたような感覚をしつこく反芻する。

(強いて言えば、隅落としのようだが……)

黑白写真でしか見たことの無いような、もはや色褪せてしまった記憶を、廷兼郎は引き出した。

「まさか……、空気投!？」

廷兼郎の回答に、鍊公がふわりと微笑む。

「模倣、じゃがな」

「どうということですか？」

「空気投のように見せているだけじゃき。わしのこれは本来、武器を持つ相手を想定したものである。長物の柄を掴んで投げ、奪った武器で止めを見舞うのじゃ」

鍊公の手を借りて、廷兼郎はようやく立ち上がった。

「空気投は、三船久蔵氏一代限りの名人芸よ。真似ることは出来ても、再現するというのはこれで中々……」

鍊公は鼻を掻きながら、「どうじゃ、役に立ちそうかの？」と聞いてきた。

「いいものを見せていただきました。ありがとうございます」

流派の秘伝というわけではなかったが、十分これからの財産になるであろう技術を体感し、廷兼郎は感激したまま出稽古最終日を終えた。

武神に拝する：一

一週間の出稽古を終えた廷兼郎は、網丘から休暇をもらい、一路奈良へと向かった。目的は白鳥三陵の一つ、琴弾原陵である。

白鳥三陵とは、記紀神話に登場する大英雄、倭建命やまとたけるのみことを祀った三つの陵墓である。何故陵墓が三つ存在するかというと、それは倭建命の神話に由来する。

父である景行天皇からの勅命である蝦夷・熊襲討伐えみし くまそを果たした倭建命だったが、伊吹山の神の不興を買って傷を負い、大和へと帰る旅の途中、今の三重県亀岡市で息を引き取る。その後倭建命の魂は白鳥と化して大和へ上り、奈良県琴弾原を経て、大阪府羽曳野市に下り立ち、そこからさらに東方へと飛び去ったと言う。

それに因み、倭建命を祀る白鳥稜は三箇所に鎮座している。

この琴弾原稜は陵墓の中でもマイナーで、交通の便も良くない。そのため廷兼郎以外に琴弾原陵に参拝する人間は見当たらない。

廷兼郎はこうした神域に身を置くと、一人であることが理想的だと考えていたため、この静けさは好都合だった。

砂利を敷き詰め、整備された階段を昇る。その音色が耳を心地よく弾く。琴弾原の地名は、その昔、旅人が疲れて休んでいると、そこからともなく綺麗な音色が響いてきたので、彼が辺りを見回すと、水溜りに水が滴り、それが岩に響き、まるで琴を弾く音だったからだという。

琴と比べるには値しないだろうが、踏みしめる砂利、擦れる枝葉、側溝を流れる水も、耳を楽しませるのには十全である。

日本を代表する神代の武人、倭建命の陵墓を訪ねた廷兼郎の感慨かんがいは一入ひとこだった。大鍊流合気柔術の出稽古を経たこともあり、心身ともみに充溢みしていた。

それ故に、今の廷兼朗の感覚器官は冴え渡っていた。

余程に心身が充実していないと到達しない境地で、廷兼朗は陵墓に蟠^{わたかま}る敵意を敏感に察知した。

俱風となつて山を駆ける。整備された階段を横切り、雑木林を一
直線に登る。英霊の墓で敵意を放つ、そんな人間を是非見てみたい。

山頂に居たのは数人の男女だった。年の頃は廷兼朗とそう変わらない。だが彼らは、廷兼朗が見てきたどんな人間とも違っていた。なまじ今時の若者らしい服装なだけに、その異常が際立つ。

廷兼郎と同じように武術を嗜んだ雰囲気もあるが、それ以外にも、彼らは何かを身に付けていると、廷兼郎の感覚が訴えていた。超能力と言つ尋常ならざる力に幾度も相対してきた彼だからこそ、その直感を思い過ごしと断ぜず、忠実に従つた。

見れば彼らは、大勢で白鳥陵を荒らしていた。無論ここは禁足の地である。大勢の若者が入つて良い場所でも、ましてや荒らしているでもない。

一瞬、廷兼郎の内から敵意が弾けた。

「今、何か？」

「まさか、もう天草式の奴らが来たのか？」

急いで気を静め、気配の遮断に集中する。

(何たる愚劣だ！)

心の中で叱責する。僅かに気を漏らしてしまった自分も自分だが、その僅かな気配を的確に探り当てた彼らの感覚も尋常ではない。

何も手にしていなかった若者たちは、各々が下げていたバッグから、武器を取り始めた。

レイピア、スピア、ブロードソードと、西洋武器の展览会さながら

らである。まだナイフや拳銃のほつが似合つたろう。

ここへきて古式ゆかしい騎士の武器を持ち出したことに、廷兼郎は感動すら覚えた。

彼らは武器を取った。己の武をかざして寄り来る。ならば、こちらも武を以つて返すほか無い。

覚悟を決めてから、廷兼郎の行動は早かった。

草むらに隠れるほどの低身で若い男に近づき、腕を素早く振り上げる。男性を戦闘不能にするには、金的を撫で上げるだけで事足りる。

倒れこむ男を押し退け、今度はスピアを持つ女へと一気に走る。

まだ連中は、突然の襲撃の混乱から立ち直っていない。その間に立て直すのが困難な損害を与える。

既に槍の間合いの内側に入っていた廷兼郎を見て、スピアを持った女は咄嗟に自分の目の前に掲げた。スピアの長い柄が、彼女をがっちり守っていた。

その柄に向けて腕刀を横から叩きつける。当然、彼女の顔前で腕は停止する。

槍は、掲げて守るには確かに優秀な盾だが、拳が届くほどの近間での取り回しには向いていない。

槍を掲げて空いた右脇腹に、左の拳を横殴りに叩きつける。肝臓を守る肋骨が碎け、内臓に衝撃が突き抜ける。

肝臓打ち《リバーブロー》の勢いを殺さず、廷兼郎は体を一回転させて彼女の後ろに回りこんだ。

狙いは背面。他の肋骨と結合していない、腎臓の裏に位置する脆弱な浮動肋骨を打撃する。

近代ボクシングにおける禁じ手、腎臓打ち《キドニーブロー》である。

肋骨を二度も粉砕され、彼女は泡を吹いて卒倒した。

これで戦線復帰の可能性を断った。だが、その代償は大きかった。

既に廷兼郎を囲い込む形で包囲が完成されている。二人を倒す間に、奇襲のアドバンテージを使い果たしてしまったらしい。

たった二人を制圧する間に状況を立て直した。やはり、若者が興味本位で墓を荒らしているというわけではなさそうだ。

幾重の刃物を突きつけられて、それでも廷兼郎の心は穏やかだった。これよりも致死性の高い武器を、廷兼郎は知っている。重い鉄骨を縦横に振るい、かぎろう炎熱を生み出し、敵の首を瞬時に切断せしめる。そんな能力者を相手取る『カウンターメジャー対抗手段』は、対武器・兵器戦にも応用できる。

相手は五人。例外なく武器を所持している。

廷兼郎は徐に両腕を開いた。防御を捨てたわけではない。己の武器を突きつけ、威嚇している。

後ろの敵に右手を、左の敵には左手を、右の相手には目線をそれぞれ突きつけている。

敵がどこにいるか、どんな態勢か、どこを見ているのかまでありありと見て取れる。自身の持つ準静電界を広げ、より敏感に相手を感じ取る。

びりびりと皮膚が焼ける。産毛の先端が相手の敵意を伝える。

「お前、天草式の回し者か？」

目の前の一人が問いを發した。

廷兼郎の知識によれば、天草式とは日本における十字教の派閥を指す。正確には天草式十字凄教と称する。

日本の宗教派閥と自分が、一体何の関係があつて誤解されるのか。廷兼郎には答える義務も手段も無い。

せめて首を傾げてみせるくらいしか、廷兼郎には反応のしようが

なかった。答えらしきものが返ってこないことに、皆少なからず動揺を隠せなかった。

そんな中、背後の一人がスピアを突き出し、廷兼郎の尻の辺りを狙ってきた。

一見して無防備な背中に、彼の攻め気が耐え切れなかったのだろ
う。

テレポート
空間移動能力者の攻撃さえ把握できる廷兼郎に対して、その突撃はあまりにも実直すぎた。

背中越しに憐憫さえ浮かべて、廷兼郎は槍の穂先を外して柄を右手で捉えた。その瞬間、大練流合気柔術が炸裂した。

槍を突き出した男が、真横にすっ転んでしまった。

槍の柄を持った瞬間、廷兼郎はその柄を押し返ししながら、端が持ち上がるように力を加えた。

これは『合気上げ』と呼ばれる技術である。相手の手首を小指側へ曲げるように力を加えることで、相手は反射的に肩上がり、重心が高くなって不安定になる。

その状態で柄を軽く腰で押してあげれば、重心の不安定な相手は、柄に押されて倒れてしまう。『合気上げ』と腰の動作を連動させ、殆ど一瞬で態勢を崩すため、相手は何をされたのかさえ把握できない。

さらに腰で柄を押す動作は、体を反転させる動きへと繋げることが出来る。

何が起きたのか分からないまま立ち上がるうとする相手の顔を、サッカーボールキックで思い切り跳ね上げた。そうしてから、廷兼郎はまた敵へと向き直った。包囲の一角を崩し、見事に脱出を成功させた。

集団戦において気をつけるべきは、囲まれないこと、背後を取ら

れないこと、全ての相手を視界に収めることである。

先ほどの廷兼郎はその全てを守れなかったため、あのような起死回生の策を取るほか無かった。だが今は包囲を抜け、背後に敵はおらず、全ての敵を視野に収める位置に居た。

手近にいたレイピアを持つ女が踏み込んでくる。二連続の突きが廷兼郎の頬を抉り、二条の赤い平行線が刻まれる。

廷兼郎にレイピアとの対戦経験は無く、似たようなコンセプトの武器にも出会った試しは無かった。そのため、あの細く撓る穂先を目で捉えるのは不可能だった。僅かな手の挙動で驚くほど多彩に撓るため、腕や肩の挙動から軌道を察するのも困難だった。

初見の相手には、こうした不利も働く。時間をかければ太刀筋も読めてくるだろう。だが今この瞬間に、そんな猶予は無い。

眉間に寸分無く突き出されるレイピアに向けて、廷兼郎は右手を押し出した。

右の掌を、細長い刀身が貫通した。

下手に防ごうとすれば、レイピアの穂先は容赦なく人体を抉る。

刃物に対して、軟い肉は何ら障害とならないが、廷兼郎は右手をかざすことで、眉間への刺突を回避しているのも事実である。

天羽根流柔術、中手受。手を構成する中手骨の間に、敵の繰り出した刃物を通す荒技である。

穂先が貫通する右手を強く握り締め、刀身を固定し、廷兼郎はそのまま振り下ろした。

刃物とはいえ棒状である以上、槌子の原理が働くのは当然で、先端を振るわれれば、持手はその力に抗えない。

レイピア越しに相手の腕を決め、空かさずこちらに向けられた背中左のつま先をねじ込む。勿論そこは、腎臓の位置である。

駄目押しとして、極まっている状態の肘を踏み、脱臼させる。右手に刺さっていたレイピアを引き抜き、遠くへ放る。

右手の傷は上手く中手骨の間を抜けたため、骨に以上はない。握りこむのは億劫だが、平手なら問題は無い。
敵の数は残り三人。

武神に拝する：二

さすがに息が荒くなる。ここは調息する時間が欲しい。先ほどの返事の意味を込めて、廷兼郎は会話を試みることにした。

廷兼郎はよく通る声で、三人に話しかけた。

「お前らは何者だ？」

「なに？ 知ってて来たんじゃないのか？」

「刃物を持ってこられたため、これを迎撃した。先ほど、天草式がどうか言っていたが、俺には関係ない。ただの参拝客だ」

三人が疑り深い目つきになるが、どう探られようと知らないものは知らないとして、廷兼郎は堂々とした佇まいを崩さなかった。

「なら、見逃してやる。とっとと失せろ」

「その前に、あんたらが何者かと、ここで何をしているのかを教えてください」

「関係の無い輩に、言うことなど無い」

説明してくれないのなら、交渉は決裂である。こちらにも言うこととは無い。そして既に息は整っている。

返事さえせず、廷兼郎は三人に近づいていく。『無足』により、文字通り足音一つ立てず間合いを殺してゆく。

「何をしてる。久那くな」

その台詞を聞くと同時に、廷兼郎は横に大きく飛び跳ねる。それは新手の存在を感じたからが一つ、そして新手が、異常な殺気を放っていたが故である。

「菊池さん！！」

菊池と呼ばれた男は、じろりと辺りに目を配る。

「不様に伸されやがって……」

汚らわしいものを見たときのように、吐き捨てる言い様だった。

「すみません。こいつ、やたら強くて……」

「言い訳すんな。霊装も魔術的記号も身につけていない、丸腰の素人だぞ。一端の魔術師が遅れを取る相手じゃねーな」

久那と呼ばれた男に容赦ない言葉を浴びせつつ、菊池は廷兼郎の前に立ちほだかった。

「で、どういう用件かな？」

「もう話した。仲間に聞け」

「久那、言え」

「は、はい。俺たちの名前と目的を教えろって言ってきたまして……」

「ほう。天草式、というよりは十字教徒にすら見えんが……、お前は誰だ？」

「倭建命のファンだよ」

冗談とも本気ともつかぬ声音で、廷兼郎は答えた。

「墓が荒らされてるのを見て、ちよっかい出したのか。何だよ、マジで一般人かよ。そんなのにお前らやられたワケ？」

うんざりだと言わんばかりに、菊池が呆れる。

「おいおい頼むぜ！ 何のためにためーら連れてきたと思って」

ガゴンという、骨で骨を叩く、くぐもった音が響いた。

半端な台詞のところ菊池は言葉を切った。正確には、廷兼郎の後ろ回し蹴りによる側頭への打撃が、言葉を切らせた。

仲間との会話に集中していたようなので、廷兼郎は躊躇無く彼を蹴り倒した。敵の前で隙を晒していたのだから、当然の帰結である。改めて、廷兼郎は残りの三人に相対する。

「……待てよ、おい」

三人に仕掛けようとしたとき、蹴り倒したはずの菊池が、何事も無かったかのようにすらりと立ち上がった。

「対衝撃用術式を挟んで、この威力かよ。お前、本当に魔術師じゃねーのか？」

「意外とタフなんだな、あんた」

「タフつてのとは違いよ。それが分からねえなら、マジで素人確定だぜ」

菊池は背中から取り出した二本の棒を連結し、斧刃を取り付けた。ポールアームやハルバートと呼ばれる種類の長物である。

「寝てるのを片付けて、見張りに戻ってる。こいつは俺がやる」

有無を言わさぬ菊池の言葉を受け、三人は打倒された仲間を急いで運び出した。

「名前くらい教える、素人」

大きな段平を突きつけ、菊池は名を問うてきた。

先ほどから質問ばかりで、廷兼郎は辟易しながら答えた。

「字緒、廷兼郎」

「聞かない名だ。やはり魔術師じゃない」

「あんたは魔術師なのか？」

菊池は、含むような笑顔を見せた。

「ああ。魔術は嫌いかい？」

しばらくの間、二人の間に沈黙が漂った。刃を突きつけ、機に備えているにも関わらず、不思議と心地よい時間だった。

「……あるのならば、見てみたい」

くつくつと、菊池は声を出して笑った。

「言ったな。素人風情」

敵の得物はハルバート。斧、槍、鉤爪の三つの要素を一つに集約した、長柄武器の完成形の一つである。十三世紀にはその原型が出来上がり、十五世紀に完成し、西洋諸国で広まっていった。

斧による力強い薙ぎ払いと、槍の鋭い刺突を自在に使い分け、縦

横に振るう空間さえ確保すれば、その動きを制限するのは至難である。

中でもハルバートの汎用性を決定付けているのは、鉤爪の一体化である。ハルバートの前身に当たるポールアームにも鉤爪は付いていたが、穂先との一体成型ではなく、形状も鉤爪というよりは鋸に近いものが多い。

鉤爪を一体成型にすることにより剛性を上げ、鉤を引っ掛けて馬上の敵を引きずり下ろすなどの動作を可能としている。

そうしてハルバートは、歩兵の主力として三百年間君臨することになる。銃の登場後も、儀礼用使用する軍隊も存在している。

廷兼郎は、既に槍の間合いに入っていた。踏み込んでの斧や鉤爪は届かないが、槍なら届く。そういう位置に身を置いていた。

多機能である分、通常の槍よりも穂先が重い。殺気さえ捉えれば銃弾さえ避け得る廷兼郎は、その一撃を沈思ちんしして待ち受ける。

(来い。その鋭く長い穂先で、俺を貫いてみる……)

敵の気迫の高まり様を察すれば、自ずから機先を得る。それを逃さぬよう、恐怖を殺し、勝気を殺し、己を殺し尽くす。そうして空虚と化した己で戦況を俯瞰ふかんしてこそ、敵の有様が浮かび上がる。

いよいよ気が高まる。初動は近い。

体を刺し貫かれ、致命の傷を得る幻に、全身の毛がよだつ。立毛筋が総毛を逆立たせ、皮膚感覚をさらに鋭敏にする。

(得物が、体が、静か過ぎる……)

気は高まりこそすれ、菊池の体にその兆しが無い。自分の動きを最小限にして相手に隠すことは可能だが、無にすることは出来ない。幾ら隠したとて、廷兼郎の慧眼は見逃さない。

体の傾き、それを支える足、あるいは蹴り足。突きの溜めを作る僅かな腕の引き、握り。そして全ての要となる正中線の動き。それらが伝える言葉に、廷兼郎は従った。

己の眼が狂っていないければ、目の前の男の攻め手はハルバートではない。

（これほどの得物以上に、振るうべき武器を持っているのか）

菊池の体に力が凝る。超能力ではない。だが、武術の練気とも違う。超能力者との戦闘を経験している廷兼郎はその差異こそ発見していたが、差異の正体までは理解できてない。

「もう遅い。見過ぎたな」

菊池がふつと力を抜いたとき、何かが破裂した。

そして、閃光が廷兼郎を刺し貫いた。

風船を破裂させたよりも激しい音は、空気中の水分が一瞬にして蒸発したときの音である。

穂先から放たれた電撃は、数ミリ秒のうちに廷兼郎を貫き、身体の隅々にまで行き渡ってから空中に霧散した。

感電により筋肉の麻痺が起こり、痙攣した足腰が抜け、廷兼郎はその場に崩れ落ちた。

槍から電気を発する。見紛う事なき超常現象である。廷兼郎は自分の直感が間違っていないかったことを喜んだが、被った被害は甚大だ。

（超能力、なのか？）

菊池が起こしたのは超常現象だったが、超能力だとは思えなかった。超能力を繰る者にしては、学園都市の能力者と毛色が違いすぎる。

（まさか、本当に魔術師？）

そういえば、彼らはしきりに魔術師という言葉に気にかけていた。この現象は超能力ではなく、魔術によって引き起こされたのか。そして自分は、魔術に負けたのか。

（負けたのか。俺は。これは、負けなのか？）

菊池が能力者であろうと、魔術師であろうと、廷兼郎が打倒され

た事實は動かない。

何が対能力者戦闘術か、何が『カウンターメジャー対抗手段』か。相手の能力が分からない程度で後れを取っているようでは、素手による能力者の制圧など語れる身分にない。

（それでも、否、だからこそ！！）

筋肉が痙攣する。足が笑って腰が抜ける。それを無理やり押さえ込むが、生まれたばかり小鹿より頼りない。

つたない口で息吹を行い、肺に残る空気の全てを吐き尽くす。そして一転、収縮させた横隔膜を解き放つ感覚で呼吸する。足は踏ん張るのではなく、自身の足裏を水平に保ったまま持ち上げるよう心掛ける。

深く大きい吸気で体の筋肉を引き絞り、中国拳法で言う『平起平落』の教え、足裏を意識し、体幹深層筋を効率よく使って体を起す。

随意運動の麻痺が襲うなか、廷兼郎はもう一度菊池の前に立った。相手が如何なる能力を、魔術を用いても、それに幾度膝を折られても、廷兼郎は屈しない。どれほど苛烈で、予測不能で、尋常ならざる攻撃を受けても、『武』は廷兼郎を裏切らない。積み重ねてきた修行が、信仰が、彼を突き動かす。

否定させるなど、己の武術を他人に、超能力に、魔術に否定させるなど、身を賭して証を示せと攻め立てる。

「マジで痺れるぜ、お前」

感激し、熱を帯びた瞳で菊池が廷兼郎を見つめている。

「素人扱いは、もう止めだ。本身で行かせてもらおう」

ハルバートの周囲がバチバチと爆ぜる。紫電が空気を弾き、獰猛な獣の喉鳴りを思わせる。

「菊池さん、天草式の奴らがこっちに向かっています！！早く移動しないと」

構え合う最中、林から新しく出てきた一人が菊池に呼びかけた。水を差されたことに気を悪くしつつも、菊池はその諫言は見過ごさなかった。

ハルバートを手下に向けて放り投げ、菊池は身を翻した。

「じゃあな。倭建命のファンとやら」

菊池に続き、若者たちは素早い身のこなしで山を降りていった。

「待、て……」

ここへきて気力の限界を迎え、廷兼朗は片膝をつく。感電のショックは、未だ抜けていない。

後ろからぞろぞろと靴音が鳴り響く。何やら怒号らしき言葉も聞こえるが、廷兼朗の意識は沈みつつあり、よく聞こえていなかった。

「……大丈夫？ 返事できる？」

自分を強く抱き支える感覚がある。瞑りかけた眼に映った金髪の女性は、心配げな顔でこちらに呼びかけていた。

この場に遅まきながらも駆けつけたことを考えても、彼女が菊池らと似たような存在であることは見当がついた。

「魔術、師……」

それだけ呟き、今度こそ廷兼朗は意識を手放した。

武神に拝する…三

「兄さん」

呼ぶ声ができる。懐かしい音声が、心地よく自分の名を包む。

「兄さん、起きて」

起きなければ。起こす声に応えなければ。

「起きて、闘いなさい」

みちりと、右腕が音を上げた。脱臼した音だ。腕を極められ、折られた音だ。筋と筋がぶつりと断たれ、骨と骨がずれる音だ。

「みぎゃあああああああああ！！」

豚にも劣る悲鳴を上げた。

「闘いなさい、兄さん。あなたは、天羽根流を継いだのでしょう」
次に音を上げたのは、膝だった。鶏の足のように手折られ、膝の裏が破れて、赤く濡れた骨が飛び出した。

「ひぎいいいいいいいい！！」

起き上がれない。起き上がりたくない。闘えない。闘いにすらならない。一方的な嗜虐。

「闘えと言っているのよ。痛がれと言った覚えはないわ」

のたうつ顔を下段蹴りが引っこ抜く。仰け反るほど起き上がり、今度は仰向けに倒れる。

「お、おご、ごぼ……」

悲鳴を上げたいのに、うまく上げられない。下顎が割れてしまつて、ついでに舌も潰された。止め処なく口から溢れる血が喉に絡んで、息が苦しい。

股の辺りから、ばちんと弾ける音がした。踵を落とされて、睾丸が破裂したのだ。それを確認してから、痛みが脳天まで走りぬけた。股が焼けるように熱い。血だけではない。小便も精液も、みどろになつてはしたなく溢れる。

「お、俺の負けだ、許してくれ!!」
渾身の雄叫びだった。

「もう嫌だ!! 殴らないでくれ!! お前の勝ちだ!! 許してくれ!!」

あらん限りの言葉を言い募る。自分の習った武术も、矜持も、何もかも投げ出して、高らかに自分の敗北を謳いあげる。

そうまでしてでも、今自分の被る痛みを回避したかった。今日まで練り上げてきた覚悟は、容易く霧散した。

武人にあるまじき、醜態だった。

その姿を満足げに眺める目があった。上から見下ろす両の眼は、優しげでさえあった。先ほどまで自分に破壊の限りを尽くした人間のものとは、到底思えなかった。

顔が背く。背中が、遠ざかってゆく。

不意に寂しさを覚えた。ずたばろに砕かれた隙間だらけの心に、寒からしめる風が容赦なく入り込む。

だからと言って呼び止めるのか。そんな権利も、責任も、勇気も、何もかも今しがた投げ出したと言っのに。寂しいと思いを馳せることすら、自分には許されないのに。

「
」
単純な打倒など、真の意味での敗北ではない。体を幾ら破壊され、這い蹲るうとも、その心が敗けを認めぬ限り、そこに敗北は無い。

だとすれば、廷兼郎は間違いなく、敗北した。

意識がゆっくりと浮上してくるのに合わせて、目蓋を開く。静かながら、最悪の目覚めである。

もう忘れたと思っていたが、そんなことは有り得なかった。人生

最初にして最大の敗北を、忘れられるはずが無かった。

今回も廷兼郎は打倒された。だが、あの時のように心が折れるようなことは無かった。本当の意味での敗北を喫してはいない。

(……どうでもいいか、そんなことは)

敗北か否か、それが本当かどうかなどという、哲学的な問題は捨て置いて構わない。それよりもやらねばならぬことを、敗北した廷兼郎は知っている。勝負は一度一度が決着である。敗北を覆すことは出来ない。

それでも廷兼郎は、もう一度菊池という男に会わねばならないという使命感に駆られていた。

「目が覚めたようね」

気がつくと、傍らに人が座っていた。ふわふわと揺れる見事な金髪は、気絶する寸前に見た人相と一致していた。

その女性が、何気なしに手を添える。それだけで、痛みどころか感覚さえ消し飛び、天に昇る心地を得る。

「あなたが、助けてくれたのですか？」

「私だけじゃないわ。他の仲間も治療したのよ」

女性が顔を向けた先に、多くの人が居る気配がした。徐々におぼろげだった視界が開け、廷兼郎が居る場所の全体像が浮かび上がった。来た。

そこは木で出来た箱のようだった。目算で奥行きが三十メートルほど、幅はおよそ八メートルある。高さは幅と同じくらいだろう。壁と天上がゆるやかに丸みを帯びているが、木と木が隙間なく組み合わさり、見るからに頑丈そうである。

地下室か、と廷兼郎は考えたが、それは彼の感覚によつてすぐに否定された。

木製の室を包むように、若干ながら水の流れる音が聞こえる。そして彼の体には慣性が働いて、僅かに傾いている。

(木製の船なのか?)

山の中で気絶した自分が、何故こんな場所で倒れているのか。自分のことなので非常に気になるが、まずは何をおいても言わねばならないことがある。

廷兼郎は正座に座りなおし、船に居る人間全てに目を配った。

「この度は山中で行き倒れているところを助けていただき、ありがとうございます」とうございます」

言い終えて、深々と頭を下げた。体に一本の筋が通った、惚れ惚れするほどの土下座だった。礼を重んずる廷兼郎の所作に、周りの者から少なからず感嘆の聲が上がった。

十秒を過ぎたところで、ようやく廷兼郎は顔を上げた。

「そう畏まらんでもいいことよ、字緒廷兼郎くん」

集団より一步前に出ている男が、廷兼郎の前に片膝を付いて名を呼んだ。

その異彩を放つ身形に、廷兼郎は心の中で声を上げた。

上着もズボンも、サイズが合っていないものの、まだ常識的だろう。だが、アフロのようなポリウームの髪形は、明らかに異常だった。グリスか何かで固めているのか、甲虫のような光沢を放っているのも不気味だった。

そして首には、何故か小さな扇風機を四つ下げていた。

「俺は建宮斎字だ。よろしくな」

「よろしく願います。ところで、何故僕の名前を？」

建宮と名乗った大柄の男は、いたずらっ子のような笑みを浮かべた。

「すまん。悪気はなかったんだが、ちよろつと財布の中身を調べさせてもらったのよ」

それを聞いて、廷兼郎は気を悪くすることはなかった。むしろこちらから説明する手間が省けて、助かるくらいだ。

「学園都市の学生さんだそうだが、何であんなここにいたんだ？」
「遺跡や寺社を巡るのが趣味なんです。近くまで来る用があったので、せっかくだから白鳥陵に詣でようとしたら、妙な連中が墓を荒らしてました。しかも武器を持ってたので、これは危ないと思って迎撃したら、逆に倒されてしまって……」

淀みなく喋り、事のあらましを伝える。話している廷兼郎でさえ、腑に落ちない部分が多々あったので、これはあらぬ誤解を受けても仕方ないと覚悟していた。

武神に拝する：四

建宮の反応は、意外にもため息一つだった。

「念のために確認したいんだが、あんた一般人だよな？」

「学生という身分ですが、一般人でも合っていると思います」

廷兼郎がそう答えると、横合いから小柄な男が顔を出した。

「建宮さん、そいつはマジで一般人すよ。誰が見たって魔術師には見えないす」

建宮が「そうよな、香焼こうややく」と同意して、もう一度深く息を吐いた。

「またも聞いた、『魔術師』という単語。確か、白鳥陵しろとりやまで争った連中も口にしていたことを廷兼郎は思い出した。白鳥陵にいた連中と彼らを繋ぐのは、どうもこの単語らしい。」

それでも、まるで情報が足りない。廷兼郎は、自分の与り知らぬことが怒涛のように押し寄せてくる気分だった。

「とりあえず、帰ったほうがいいのよ。字緒くん」

「はい？」

ただでさえ混乱しているので、脈絡なく話されてもまるで意図が掴めない。

「詳しくは言えないが、一般人の君が関わるべきことじゃない。それだけは確かなのよ」

具体的な説明はなされていないが、言いたいことは十二分に伝わった。廷兼郎は建宮の言葉をよく咀嚼し、おもむろに顔を上げた。

「助けられた身分で厚かましいのですが、謹んでお断りします」

にこやかながらもきっぱりとした口調で、廷兼郎は言った。

「口ぶりから察するに建宮さんは、墓を荒らして、僕を襲った連中を知っているんですね。そして彼らを追っている」

建宮はそれと分からぬ程度に、眉根をひそめた。

「何でそう思うのよ」

「奴らが逃げたタイミングと、あなたたちが駆けつけたタイミングが丁度良すぎる。それと、あなたたちの装いは、彼らによく似ている。言い方は悪いかもしれないが、僕には同類に見えます」

悪びれる様子もなく、廷兼郎は思ったことをずけずけと言いつつ、おどおど言ったところで内容は変わらないのだから、まだ堂々としているほうがいい。

「いいや、悪くない。その通りなのよ。あいつらは、俺らの仲間だった」

胸倉でも捕まれるかと思っていた廷兼郎に対して、建宮はあっさり同意した。

「確かに言うとおりのよ。だからって、連れて行くわけには、やはりいかんのよな」

そう言われて「はい分かりました」と引き下がるわけにはいかない。廷兼郎には廷兼郎なりの目的があるのだから。

「彼らは、恐れ多くも倭建命の墓を荒らししていました。絶対に許せません。一言、言つてやらねば気が済まないんです！」

とりあえず正論のような事をのたまってみたが、単に建宮たちを呆れさせる効果しかなかった。

「だとしても、一般人を巻き込むわけにはいかないんよ」

「僕は確かに一般人ですが、彼らの仲間を四人まで倒しましたよ。それでも、役には立てませんか？」

何とか食い下がるため、廷兼郎が言いつのる。自分の手柄を殊更に言い挙げるのは彼の気性ではないが、この際そんなことは言っていられない。

一瞬、これまで以上の鋭い目つきを建宮が向けてきた。ようやく興味を持ってもらえたようだ。

「倒したって、あいつらと戦ったのかよ？」

「はい。あちらから仕掛けてきたので。殺してはいません」
わざと挑発するように、不遜な口ぶりで言う。建宮はやはり、廷兼朗の言葉が信用できないのか、じろりと睨み付けていた。
「何をくだらないことで揉めてるんだか」

その睨み合いの中に、廷兼朗を看病してくれた、ふわりとした金髪（きんぱつ）の女性が苛立ち紛れに進み出る。

「何する気なのよ？ 対馬（つしま）」

「イギリス清教が連れてきてた、あの彼ならともかく、こんな素人のわがままに私たちが付き合う義理はない。自分の足で出て行かないなら、放り出せばいいでしょう」

挑発的な言葉を吐き、鋭い目で廷兼郎を威嚇する。女性にしては身長が高い部類だ。腰に差しているレイピアの射程が加われれば、彼女のリーチは驚くほど長くなるだろう。

女性を前にして、まず戦力を分析してしまうのが、廷兼郎の性分だった。

「そうですね。力づくって、嫌いじゃないですよ」

自分の好きな方向に事が進み出し、廷兼朗はにこりと微笑んだ。

他の皆も止める気配はなく、二人を囲んで傍観した。

構えてみると、容易に体が動いてくれた。自分でも驚くほど、体力が回復している。電撃によるダメージは残っていない。

右手に刺突も食らっていたが、既に出血は止まっている。力を加えればまた傷が開くだろうが、大きさ自体が大したものではないので、戦闘になれば気にしないで済むだろう。

対馬と呼ばれた女性は、右手でレイピアを引き抜く。左手を腰に当て、真半身で切っ先を長く長く突き出す。

互いに構えを取ったのを確認すると、廷兼郎はすぐさま踏み込んだ。

菊池との対戦では、見に徹しすぎて痛手を被った。恐らく『魔術師』という手合いには、先手を取るのが有効なのだと言兼郎は学んでいた。

突然の仕掛けに、対馬はすぐさま反応した。

レイピアの切っ先を払うように振るった。剣というよりは鞭に近い動作で、レイピアは廷兼郎の両目を払いに来た。

レイピアの刀身が肉を打つ。但し打たれたのは、廷兼郎のこめかみである。そして打ったのも切っ先ではない。

攻撃がはずれたことに対馬は焦るが、既に廷兼郎はレイピアに負けぬほど右腕を撓らせ、手刀を彼女の顎先に擦過させていた。

冗談のように対馬はその場に座り込み、薄く目を開けたまま佇んだ。

廷兼郎は、目を払おうとしたレイピアの切っ先に対して、さらに踏み込んで切っ先の着弾点をずらしていた。元よりレイピアは斬撃ではなく刺突を主眼に置いた武器である。そのような武器の刀身部分であればさらに切れ味が落ちる。肉が打たれはしても、切れることはあり得ない。

打たれた右のこめかみに、赤い筋が浮かんできた。目を切られるのに比べれば、まるで障りにならない負傷である。

「同行させて、もらえないでしょうか？」

廷兼郎が、よく通る声で建宮に言った。

建宮は戦慄していた。対馬は素人ではない。れっきとした天草式十字凄教の魔術師である。その彼女に魔術を唱える間も与えず、廷兼郎は素早く打倒した。

天草式十字凄教では、何気ない動作などや普段の服装に魔術的意味を付け、魔術行使の痕跡も残さず、また行使の瞬間さえ隠して詠唱を完了する。例外なく武術を修めている天草式は、闘う動作と魔術の組み上げを直結させている。その詠唱速度は、呪文の読み上げ

や魔方陣の作成に比べて格段に速い。

廷兼郎の攻撃は、そんな天草式の詠唱速度さえ間に合わせなかった。対馬が油断していた可能性はあるが、それを差し引いても、彼のほうが数段速い。

より間合いを置いたり、予め魔術行使の準備をしておけば、廷兼郎に対して魔術を使うことは可能だろうが、至近距離まで近づかれたら、魔術を行使する時間は無いのかもしれない。

そして武術の実力においては、まるで底が見えない。刃物を全く恐れず、それどころか身を投げ出して機先を制してみせた。自らも大身のフランベルジュを得物としている建宮は、魔術を行使しないでこの男とは立ち合いたくは無いと、素直に認めていた。

確かにこの戦力は本物だ。菊池の一派にいた魔術師を四人も倒したと言言葉も、今なら素直に信じられる。それでも廷兼郎は学園都市の人間である。ある例外は除いて、魔術師と学園都市の人間が関係を持つのは忌避すべきだ。

こうして悩んでいる間にも、木造船はどんどん目的地へ進んでいる。

黙り込んだ建宮を救うかのように、彼の懐から電子音が鳴り響いた。

「元気になっているか？ 教皇代理」

「その声はステイルか。助かったのよー！！」

電話はイギリス清教『必要悪の教会』ネセサリウス所属の魔術師、ステイルⅡ マグヌスだった。

天草式十字凄教は、ある事件を境にイギリス清教の組織『必要悪の教会』ネセサリウスに所属することとなり、こうしてイギリス清教の人間とも連絡を取り合っている。

この際、野郎だろうと救いの主には違いない。この妙な空気を打破する何かを授けてはくれまいか、と建宮はステイルに期待を寄せ

た。ステイルはそんな思惑など毛ほども知らず、自分の仕事に徹する。

「何だかよく分からないが、伝達事項があるから読み上げるぞ。学園都市から派遣されるエージェントと同行し、真伝天草式の鎮圧に当たられよ。以上」

その瞬間、建宮は素っ頓狂な声を上げた。

「はあああああ！？ な、何なのよその命令は！？」

「さあ？ どこで落ち合うとか書いてないが、もしかして接触済みかい？」

「接触してるといえば、してるような気がしなくてもないような……」

「ならそいつを連れて行けば事は済む。元は学園都市からの要請らしいから、死んだってこちらの責任じゃない」

ステイルは、「伝えることは伝えた」と言つて唐突に通話を切つた。一人取り残された建宮は、忘我の体だった。

狙い済ましたようなタイミングでの同行命令。しかも科学サイドの総本山、学園都市からの要請である。先ほどの廷兼郎と同じく、建宮にはまるでこの現状が把握できなかった。

「いいのではないですか、教皇代理」

「諫早……」

初老の男が、廷兼郎の近くに寄つて肩を叩いた。

「若い。身の安全は保障できんが、それでも良いな」

「委細、承知」

諫早の問いに、廷兼郎は厳かに頷いた。廷兼郎の力強い返事を聞いて、建宮は「もうそれでいいならいいのよな」と、投げやりになっていた。

魔に遭う：一

廷兼郎は、天草式が向ける自分への疑念をありありと受け取っていた。突然現れた一般人が仲間を打ち倒し、半ば無理やり行動を共にしているのだから、心中穏やかではないはずである。

成り行きに流されるままの廷兼郎は、彼らの疑念を打ち消すことが出来ず、さらに疑わしく思われてしまった。そんな彼らの態度を「俺の知ったことか」と突っぱねられるほど、廷兼郎は強くなかった。

自分が打倒した対馬つしまと呼ばれる女性の傍らで、廷兼郎はじっと身を固めていた。まだ脳震盪による気絶から目が覚めないようで、今は眠るように休んでいる。

自分が気絶させたのだから、せめて介抱だけでもと思い、気絶した対馬を横に寝かせ、正座のまま制止していた。

その姿はまるで、飼い主を阿る犬のようだった。針の筵むしりに座らされた廷兼郎には、それぐらいしかすることがなかった。

廷兼郎の精神は、勝手に土俵際まで追い詰められていた。

（同行を許してもらったはいいけど、やっぱり部外者がいるの、皆さん嫌なんだろうなあ。めっさ見られてるし、何か話してる。そりゃあ怪しいもんなあ。俺自身、白鳥陵からこっちまでの展開に、頭が付いていってないんだから、周りの人が怪しく思うのも無理ないよ。魔術師って何だよ。何で墓荒らしてんだよ。ああ、こんなことならあの時絡まなきゃよかった！！正義感丸出しにした結果がこれだよ！！ああ、これでこの対馬って人に何かあったら、俺どうなっちゃうんだろう……）

体面を気にしなければ、廷兼郎はその場で頭を抱えて唸りたい気分だった。

「そっ心配しなさんな」

諫早という初老の男が、廷兼郎に話しかけながら、傍らに座った。

「対馬も一端の魔術師だ。この程度でどうこうなったりせん。その内に目を覚ます」

「そうですか。よかったです」

第三者からの言葉に、廷兼郎は心底安心し、肩を撫で下ろした。

「同行を許していただいて、ありがとうございます」

「礼には及ばんよ。自分の身は自分で守るのだしな。それに、例え拒否しても、お前さんはわしらと一緒に行動することになったらうよ」

「そうなんですか？」

「ああ、そうなのよ」

携帯で話していた建宮が、いつのまにか廷兼郎を見下ろしていた。彼の話では、天草式の上位組織であるイギリス清教から、廷兼郎を連れて行くように命令がきたらしい。しかも命令は、元を辿れば学園都市からの要請であると言う。その要請があったからこそ、廷兼郎は追い出されずに済んだようだ。

イギリス清教と言えば、文字通りイギリスにおける十字教の宗派だ。それが何故学園都市と連絡を取っているのか。そして彼らと廷兼郎が出会ったことを、何故学園都市が知っているのか。

廷兼郎の携帯端末は電撃によって故障したため、網丘と連絡を取ることすらままならない。

ますます増える疑問に、廷兼郎は半ば思案を巡らせるのを諦めていた。どれだけ周囲が騒がしかろうと、自分だけの目的が定まっているのだから、それに迎合する必要は無い。そう自分に言い聞かせて、ようやく気持ちが一番落ついた。

「そう言えば、お前さん、敵のことはどれだけ知ってる？」

「僕が見たのは、十人ほどです。確か菊池と、久那という人が居ま

した。他は、分かりません」

「何と言う集団か、何をする集団かさえ、知らんのか？」

諫早は呆れたと言わんばかりの口調で言った。廷兼郎も自身の迂闊さは自覚していた。

「如何せん、出会いが突発的だったので。聞き出そうにも武器を突きつけられてたから、自分の身を守るので精一杯でした」

「お前を襲った奴らは、今は『真伝天草式』と名乗っている、少数の魔術結社だ」

「真伝、天草式？ あちらが本物なんですか？」

「本物か否かで言えば、こちらなのよ。あいつらは、数年前にここを抜けた人間で作った、まだ新しい組織だ」

「昔は女教皇プリエステスがいたんだが、その方が天草式を抜けられたとき、彼らも抜けたのだ」

そう語る建宮と諫早の表情は、どことなく重苦しい。かつての間を追っているのは、仲直りでもしようという目的ではなさそうだった。

「じゃあ真伝天草式のリーダーは、その女教皇なんですか？」

「いや、女教皇はこの件に関わっておられない。奴らは、女教皇が抜けた天草式には居たくないと言って、抜けたに過ぎないのよ」

建宮たちの説明が本当なら、天草式から枝分かれした組織と考える間違いないようだ。

「そうですね。天草式の分派ということですね」

「そう考えてもらって構わないのよ。それで俺たちはこれから、あいつらを止めに行く」

覚悟を決めた表情で、建宮は宣言した。確かに真伝天草式の連中は、貴重な陵墓を荒らすという犯罪行為を行っていた。袂を分かつたとはいえ、彼らの行為を見過ごせないのだろう。

「あのまま墓荒らしに手を染めていては、よくありませんからね。埋葬品を転売する気なんでしょう」

「いや、違ふんよ。あいつらは別に転売とかしてるんじゃない、
親魏倭王しんきわおうの金印を集めているのよ」

廷兼郎はそれを聞いて、思わず建宮の顔を二度見した。

「親魏倭王の金印って、卑弥呼が貰ったという、あの金印紫綬きんいんしじゆですか!？」

建宮は大きく頷いて肯定した。

魔に遭う…二

親魏倭王の金印とは、三国志で有名な魏^まが、当時の邪馬台国^{やまたいこく}へ贈った宝物の一つである。

古今の中国において、金印などの印章を授けることは、非常に大きな意味を持つ。印綬^{いんじゆ}を授けると言うことは、官職に就くことが条件だったからである。そして印の材質や綬の色によって、階位や役職を区別する。

その印綬を他国に授けると言うことは、魏国と同盟関係にあることを示している。

魏は当時、呉^しや蜀^{しやく}との分裂国家であり、三国は非常にデリケートな状態にあった。そのため魏は、他国との同盟を積極的に結ぶ政策を進めていた。邪馬台国へ金印を授ける以前にも、のちのクシヤナ王朝である大月氏国^{だいがつしこく}に対して『親魏大月氏王』と刻んだ金印紫綬を贈っている。

魏は邪馬台国に対して、金印紫綬だけでなく、奴隸や反物、五尺の宝刀や銅鏡百枚なども贈っている。なかでも銅鏡は、中国において馴染みの薄いものだったため、特別に作らせたものと思われる。

中国で使用されていた銅鏡は、小振りな手鏡程度のものが殆どで、それが日本のような権力の象徴になるようなことは無かった。勿論、それを贈り物とする習慣も無い。つまり魏は、わざわざ日本人好みの大きな銅鏡を百枚も鑄造したことになる。それだけ魏は、邪馬台国との同盟関係を重要視していたのだろう。

そんな遺物が埋まっているという確信があるなら、確かに墓荒らしに手を染めるのも無理はない。廷兼郎どころか、多くの考古学者が直ちに行動を移すだろう。何といっても、邪馬台国論争を決着させるに足る物証なのだから。

そこまで考えてから、廷兼郎は、はたと気が付いた。

「待つてください。金印紫綬は卑弥呼に贈られたものでしょう。何で白鳥陵に埋まってるんですか？」

白鳥陵は、倭建命に縁の深い場所に建てられた陵墓である。卑弥呼と直接的な関係は無いはずだ。従って、金印紫綬が埋まっている道理も無い。

「……さあ？　そこは俺らも分からんのよな。というか、どうでもいいし」

「ど、どうでもいいってことは無いでしょう」

「それが分かったとて、俺らのやることに変わりはないのよ。分かっているのは、奴らが金印を狙っているということ。そしてどうやら、金印は分割して埋まっているらしいのよ。あいつらは埋まってそうな古墳を片っ端から掘り返してるのよな」

「き、金印を、ぶ、分割！？　しかも、古墳を片っ端から掘り返すなんて！？」

廷兼郎は博物館で見た金印のレプリカを思い出した。只でさえ小さいそれが、分割されている様を想像して、彼は悲しくなった。

そしてさらに聞かされたことの、何と恐ろしい所業であることか。真伝天草式の連中は、貴重な古墳を幾つも荒らしていると言つ。日本の宮内庁を蔑ろにするにも程がある。廷兼郎は、同じ日本国民として、彼らの行いが恥ずかしかった。

「盗掘までして金印が欲しいのか。そんな手段で手に入れても、学会で認められるわけが無い！」

「学会に持ち込むのが動機じゃない。あいつらの目的は、日本を支配することなのよ」

義憤に駆られる廷兼郎を宥める口調で、建宮は言った。

「日本を、支配？　金印が手に入ると、日本が支配出来るんですか？」

卑弥呼に授けられた金印紫綬は、魏が邪馬台国を国として認めた

ということであり、卑弥呼は邪馬台国を含めた日本の支配者に相当する。

だが、それはあくまで古代に限られたことであり、象徴的な意味ではない。

「軍事的に制圧するとか、そういうものではなく、あくまで呪術的に、なのよ。具体的にどう作用するのか、まだ分かってないが、座して見守るわけにもいかんよな」

建宮の説明を、廷兼郎は大人しく聞いていた。考古学的には未だ研究の途上であるため何とも言えないが、建宮を含めた天草式や真伝天草式の考え方が、おぼろげながら理解できるようになってきていた。

「まあ、日本を支配というだけで、十分物騒ですからね。それを止めるため、天草式は真伝天草式を追っている、ということですか」

宗教にも色々あるんだなあ、と廷兼郎は感心していた。水面下でこんなことが進行していたとは夢にも思っていなかったが、訝しむよりも素直に驚く気持ちのほうが大きかった。

「あの、今更聞きにくいんですが、よろしいですか？」

「おう。何でも聞いていいのよ」

「魔術って、何ですか？」

近くにいた建宮や諫早だけでなく、周りにいた天草式の皆々様まで、一様に「え!？」と声を合わせた。

何で今更そんなこと聞くの？ と問う目が、廷兼郎には痛かった。

「知らないの？ ていうか、知らないで戦ってたのかよ!？」

「言葉は聞いたことがありますよ。呪文を唱えたり、変な絵描いたりとか、そういうことするんだろうなあ、と思っていましたけど、皆さんが使う魔術というのは、どうも違う気がするんです」

建宮は「そっか!。初めてなら、それもしょうがないのよな」と

軽い感じで受け答えした。

「いやあ、菊池ともやり合ったって言うから、てつきり魔術師じゃなくても魔術は知ってる人なのかと」

それはどんな人だろうか、という突っ込みを入れられるほど親しいわけではないので、廷兼朗はその言葉を飲み下した。

「ちなみに、武器から電気出したりとか、そういうのも魔術なんですか？」

「そうそう、そうなのよ。菊池は特に雷を操るのが得意なのよな」
菊池に食らわされた攻撃はやはり超能力ではなく、魔術ということになる。やはりあのときの直感は正しかったことを、廷兼朗は再確認した。

具体的な理論など理解できなくても、それだけ分かれば戦うには十分である。

直感で捉えられたということは、慣れれば兆しも見えてくるはずだ。この次に繋がる情報をどう闘いに生かすか、それこそ思案せねばならない事柄だ。

雷を操るなら、電撃使いとの対戦経験が役に立つかもしれない。
廷兼朗は、ジャックメン風紀委員の同僚のシロク白井黒子が、超能力《レベル5》の電撃使い《エレクトロマスター》、御坂美琴と友人だったことを思い出し、こんなことなら無理にでもお願いして、手合わせさせてもらうべきだったと悔やんだ。

そこでピタリと、廷兼朗は考えを一旦止めた。

建宮は確か「特に雷を操る魔術」と説明した。敢えて強調するということは、他の種類の魔術も存在するのだろうか。そして思い出してみれば菊池も「対衝撃用術式を挟んで」とか、不穏なことを言っていたような気もする。

「あの、建宮さん」

「ん、何なのよ？」

「魔術って、どんな種類があるんでしょうか？」

「そうよな。さつき字緒が言ったのも、魔術に含まれるのよ。他にも身体を強化したり、万象を操作したり、天使の力を借りたり、次元に干渉したり……。出来る出来ないを置いておけば、無限に存在するのよな」

大分大雑把な言い様だったので、廷兼郎は「はあ……」としか返事が出来なかった。

明らかに分かっていなさそうな反応の廷兼郎に、諫早が助け船を出す。

「魔術というのは、才能の無い人間が、才能ある人間と対等になる為に編み出した技術のことだ。乱暴な言い方をすれば、お前さんのいる学園都市とやらの超能力者に対して、普通の人間が対抗するための方法なのじゃよ」

諫早の言葉は、廷兼郎の頭の奥まで染み込んでいった。

「能力者に、普通の人間が、対抗する……」

それは正に、『カウンターメジャー対抗手段』計画の根幹そのものである。そのアップローチが、武術か魔術かの違いでしかない。廷兼郎の鼓動が知らぬ内に高まる。『対抗手段』計画の答えが、こんな形で提示されるとは夢にも思っていなかった。

(……違う。これは答えじゃない)

努めて気を落ち着かせ、冷静に考える。超能力でもないのに電撃を発生させたり、身体を強化したり、万象を操作したりなどが出るとしても、それが果たして普通の人間に許される現象だろうか。

少なくとも廷兼郎には実感のない、あくまで本や物語の世界である。超能力というオカルトを間近で体験している身として、頭から否定することはしなくとも、魔術が『対抗手段』計画に成り代わるとは思えなかった。そして、思いたくもなかった。

超能力に対して、同じ超常現象を起こして対抗することは確かに有効だろう。だが、廷兼郎が研究しているのは、五体一つのみを糸

件として超常現象から自己を護る術である。相手が火を噴いたから、こちらで火を噴いてみせる。そんなことのために、彼は武術を修練しているのではない。相手の火を掻い潜り、その場から離脱する。あるいは一撃を見舞って戦闘を終了させる術こそ必要なのだ。超能力も魔術も必要とせず、自分の体だけで窮地を打破する術となれば、武術しか無いはずだ。

固く握りしめた拳を、額に当てる。

試されていると感じた。自分の身につけた武術が、それに対する信仰が、己の強さが試されている。

魔術という得体の知れないモノに対して、自分がどれだけ対抗できるか、試されている。

（魔術であろうと、超能力であろうと……）

対抗してみせる。自分自身にそう誓い、握った拳をようやく解く。菊池と再会することは、廷兼朗個人の雪辱以上の意味を持つようだ。

魔に遭う…三

大阪に到着した一行は、浜とは名ばかりの岸壁をよじ登り、三十人ほどが夜陰に紛れて疾駆する。堺の賑やかな繁華街を避け、眠りにつこうとしている住宅街をすり抜けていく。

大阪の地理に詳しくない廷兼郎は、彼らの通った後に従って、後から付いて行く。塀と言わず屋根と言わず、天草式の面々は物音を立てず進んでいく。その忍者さながらの身のこなしに、廷兼郎は素直に感心した。

これが建宮たてみやの言っていた『身体を強化』する魔術なのか、訓練によつて得た運動能力なのか、その両方なのかは廷兼朗の目にも判ぜられない。ただ、彼らと自分の身体的性能にそれほど差がないと言ふことだけは確信した。

天草式は天草式で、「何でこいつ魔術使っていないのに付いて来れるの?」と、疑念を通り越して恐怖染みたものを感じ始めていた。単に民家の屋根から屋根へ飛び移るのにも、脚力を増す、あるいは風を生み出し、それに乗って移動するなどの魔術を駆使し、着地後の音を外部に伝えぬよう、魔術によつて空気の振動を遮断する。彼らは厳しい訓練を積み、さらに魔術によつて身体の力を高めたり、体が発する音を消したりもしている。

同じような動きで天草式に付いていく廷兼朗だが、魔術師である彼らから見ればあまりに異様である。一連の行為を、廷兼朗は魔術の補助無しにやってのける。しかし、その動作に目立った部分は見られない。天草式と同じように飛び、同じように着地し、同じように走っているだけに過ぎない。

端からは同じ動作に見えらるとも、その作用には大きな差が生じている。それはつまり目に見えない部分、身体の使用方法の差違を表わしている。

全く変わらない動作だったとしても、そこに違ったイメージを持つていたりするだけで、その効果が違ってくる。初心者と熟練者の間に横たわる差は、型や技の精度も然ることながら、動作に対する理解やイメージでもある。ただ拳を突き出す動作も、漫然と拳を握って前に出すのと、踏み込んだ足から体重を軸足に移動させ、股関節を鋭く回転させ、下半身の出力を上半身へスムーズに伝達し、腰から上る力が体の真ん中、鎖骨の付け根の辺りから腕へ伝わるように発射するのでは、恐らく速度、威力、リーチまでも違ってくる。目で見ることの出来ない自分の体のことをよく理解し、それに根ざしたイメージで体を動かすことで、目には見えない大きな差が生じる。

常につま先を立たせる、いわゆる猫足立ちの態勢で、走るときに起こる衝撃を柔らかく吸収し、音を殆ど立てない。飛び移る際には腕まで使い、四点にバランスよく体重を振り分けることで消音を可能としている。

人々の眠りを妨げぬよう、廷兼郎たちは細心の注意を払って目的地へと急いだ。

白鳥陵に治定されている軽里大塚古墳は、多くの古墳と同じく周りに堀があり、湖の中に浮かぶ見た目となっている。その西方に辿りついた建宮は、軽く舌打ちをした。

「間に合わなかったか。もう白鳥陵に結界みたいなものが張られている。馬鹿正直に突っ込むのは拙いだよ」

「しかし、猶予はありませんぞ」

「ああ。数ではこちらが勝っている。ここは押し切るのよな!!」
結界がどのとか言われてもまるで分からない廷兼郎は、とりあえず進軍することだけ理解した。

だが、次に建宮たちの取った行動は、彼の常識を遥か彼方にすっ飛ばして余りあるものだった。

水音一つ立てず、彼らは湖面を走破していた。

「んんんー！ー！ー！」

この場で大声を出すのは良くないと判断した廷兼郎は咄嗟に手で口を塞ぎ、驚嘆の声を押し殺した。

（水の上を走ってる！？ どゆこと？ 水蜘蛛でもあんな速くは無理だ。これも魔術か？ マジで何でもありだな。てかここ宮内庁の管轄だから、無断で入ったらかなり拙いって！！）

ちなみに水蜘蛛とは、水面を歩くための忍具のことである。

そうこうしている内にとつとことつとこと、天草式は水面を走って白鳥陵へと向かっている。あわわあわわと右往左往する廷兼郎に構ってる余裕はないらしい。

水の上を走るのは無理。ここで待つのも論外。結果として、真つ暗な夜の闇で底の見えない、薄く緑がかつた湖へと身を投げるしかなかった。

覚悟を決めた廷兼郎は柵を乗り越え、湖面の淵に立つ。そしておずおずと、右足を差し出す。

「屁の突つ張りは……」

（右の足が沈む前に左足を出して左足が沈む前に右足を出して右の足が沈む前に左足を出して左足が沈む前に右足を出す！！）

「要らんですよおおおお！！」

腿力たいりよくの限りを振り絞って行った水面歩行は、どばーんという盛大な水音と、よく分からない奇声を上げる結果となった。

それでも優に五歩は進んでみせた廷兼郎を見て、「あいつ人間じやねえよ……」と、その隣で湖面を走っていた天草式は、背筋に薄ら寒いものを感じていた。

残りの距離は、仕方がないので泳ぐことにした。水音をこれ以上立てぬよう、日本古来の伸泳のしほをしながら、急いで白鳥陵へと向かっ

た。

白鳥陵に張られた結界の中で、建宮たちは苦戦を強いられていた。その結界は今まで見たことのある術式ではなかったことに加え、術式の影響で魔術の行使が困難になっていた。

おそらく術者の体に負担をかけ、魔力の流れを阻害しているのだろうが、対する真伝天草式しんでんあまくさしきの連中は同じ結界の中に居るにも関わらず、奔放に魔術を行使していた。

建宮たちが一回魔術を成功させる間に、彼らは二回、三回と魔術を重ねて攻撃してくる。数では上回っているため、何とか均衡を保つてはいるが、突破口がないのも事実だった。

「いつの間にこんな術式を開発したのよ、菊池」

建宮が毒づくくと、ハルバートを構えた男は、先頭に立って天草式を威嚇した。

「おもしれーだろ。てめーら天草式の連中には百年経ったって出来ねー芸当だ。これこそ真伝天草式の力よ」

「笑わせるなよ。女教皇ブリエステスの帰りを信じもしなかったチキン野郎が、吠えてんじゃねえ！！」

「……んだと？」

バチリと、ハルバートの穂先から紫電が走り、辺りを照らす。

「忠犬ぶつてんじゃねーよ！ てめーらの頭はとっくに取れちまつてんだ。いい加減に気付け！！」

頭上に構え、斧部分を一気に振り下ろす。紫電を伴った斬撃を建宮はフランベルジュで受けるが、その刃を通して彼の体に電撃が迸る。

「あがああああ！！」

防御術式が組み上がらない。真伝天草式の結界が、建宮に魔術の行使を許さない。為す術もなく電撃に身を焼かれ、斬撃の威力で吹き飛ばされる。

「俺は信仰を行動で示す。待つだけが能のお前らとは違う!!」
波打つ剣ごと両断せんと、菊池がさらに圧力を掛ける。

電撃で痺れる体を奮い立たせ、建宮は抗う。

「俺たちだって、待ってるだけじゃないのよな。天草式を守ってんだよ。女教皇の帰る場所を守ってんだよ。逃げ出したお前と違ってな!!」

屈しそうになる足腰を叱咤し、齒を剥いて菊池を睨み付ける。二人がカチ合わせているのは刃ではない。互いの信念、信仰そのものである。

立ち上がるうとする建宮に、容赦なく電撃が見舞われる。力を失った体がかろうじて斧を防ぐが、足腰の踏ん張りは全く効かず、水際まで軽々とはね飛ばされてしまう。

菊池は無理に追おうとはせず、ゆっくりと歩を進める。あまりに隔絶した彼我の差に優越を感じているのではない。相手が手負いとなったからこそ、確実に仕留めんがため、油断無く様子を窺っている。

「……確かに俺たちは、女教皇の帰りを信じられなかった。それは事実さ、建宮」

菊池の口調から、先ほどまでの刺々しさが消える。代わりに、聞く者の心まで重苦しく沈む重圧が宿る。

「皆が皆、女教皇を信じ抜けるほど強くはないし、それを押し付けることの醜悪さといったら、語るに落ちる。だが、そういう奴らも救えないで、何が信仰か、何が宗教か、何が天草式十字凄教か!!」
溢れる激情が紫電となって辺りに散る。菊池の目に宿るのは、自分の信仰一つである。他の一切合財、叩いて潰す覚悟の目だ。

止めを刺すべく、菊池がハルバートを背負う。他の仲間は乱戦の只中にあり、建宮からの救援に伝えられる状態にない。

「終わりだ、教皇代理。安心して逝け」

フランベルジュを掲げたとして、寝そべる態勢では防ぎきれない。
即座に叩き折られ、容赦なく建宮の肉は引き裂かれることだろう。
断罪の鎌の如く振り上げられたハルバートを、防ぐ手立てはない。

魔に遭う：四

「菊池イツー!!」

耳を劈く怒声こゝろが響き、名を呼ばれた菊池の注意が、僅かに声のした方へ逸れる。

何もなければずの暗闇から飛び出した影が、菊池の顔に突き刺さった。打撃音というよりは軟骨の潰れる破裂音を響かせて、菊池はハルバートを掲げたまま黒い水面へと吸い込まれていった。

影が建宮の傍らに立つ。天草式の人間ではない。勿論、真伝天草式でもない。

「……字緒？」

「ここまで泳いできたので、遅れました」

莞爾と笑いながら手を差し出し、建宮は助けを借りながら立ち上がった。

「何はともあれ、助かったのよ」

「そのようで。お役に立てて何よりです」

ようやく参戦できた矢先に菊池への借りを返し、とりあえず廷兼朗は溜飲を下げる事が出来た。そして森の中へ視線をやると、怪訝そうな顔で言った。

「どうやら苦戦していますな。こちらの天草式だけがやりづらそうだ」

「奴らの結界のせいだ。あちらは魔術を好きに使えても、こちらは思うように使えないのよ」

魔術師ではない廷兼朗には、影響のない現象なのだろう。いまいち実感に欠けるが、今はそれをとやかく言う場合ではない。

「なるほど。そういう事情もあるんでしょう。ですが僕には、手心を加えているようにも見えますが」

廷兼郎はじろりと、追い立てると言っている目つきで建宮を睨む。「そういうことは先に言ってもらわないと困ります」と、言外に諫めていた。

「天草式は、真伝天草式を殺してでも止めるといふ訳ではないんですな？」

「ああ。出来れば殺したくはないのよ」

「……すごいなあ」

廷兼郎は失笑しながら言うが、その表情は曇っていない。殺しに来る相手を、殺さずに制圧する。それもまた、武の顕現の一つだ。

「やれるだけ、やってみましょう」

痺れの取れてきた建宮から離れ、廷兼郎は白鳥陵の森の中に身を投じた。

攻めあぐねる天草式を嘲笑うかのように、真伝天草式の魔術が炸裂する。彼らは決して深追いせず、一定の場所に留まっている。その後ろにある盗掘現場へ立ち入らせないためだろう。

真伝天草式に数で倍する天草式は、かつての仲間を前に防戦を強いられていた。

「何で、魔術が使えないの？」

肩で息を切らし、海軍式船上槍フリウリスピヤを構える少女は、焦りに顔を歪めた。

相手も同じ天草式である。手の内は互いにばれている。その状況で一方は魔術の使用を制限され、もう一方は好きに行使できる。魔術で身体能力を底上げされるだけでも、倍する人数でも埋められない戦力差が存在する。

覆し難い状況だと、皆が一樣に感じていた。

それでも、彼女は膝を付こうとしない。かつて、天草式とともにローマ正教の隠密部隊と戦った少年は、どれほどの苦境に立たされようと立ち向かっていた。目に焼きついたその姿が、この場に座り

込むことを許さない。

学園都市から来た彼は魔術など使えなくても、その右手だけで強大な敵に抗っていた。なのに、魔術を使える自分がここで諦めたら、彼に合わせる顔が無い。

そんな彼女に斟酌せず、真伝天草式は魔術を繰^くる。

手先から伸びる炎が、舌のような滑らかさで人の群れを撫でていく。そのたびに天草式の人員がごっそりと削^けられる。

「何で、何で私たちが戦なくちゃいけないんですか！ 同じ、天草式なのに！！」

立ちほだかるように構えた海軍式船上槍が、風に吹かれて舞い上がる。大気操作術式による武器落とし《ディスプレイ》である。

「あ……」

目にも煌びやかなドレスソードが、彼女の頭を割るべく振るわれる。自分と変わらぬ細腕がバネのように弾かれ、剣先が脳天へと吸い込まれてゆく。

狙いは丁度体の真ん中、どう避けても裂傷は免れない。そもそも、武器を弾かれた動揺が残る体では、満足に動くことも出来ない。

悲鳴を飲み込む暇さえなく、彼女はじっと切っ先を見つめていた。その眼前が、暗闇に閉ざされた。

次に彼女が見たのは、自分の後方に飛んでいく、ドレスソードを持った真伝天草式の少女だった。

目の前に立っているのは、あの彼と同じく、学園都市から来た人間。同じく、魔術を知らない人間。字緒廷兼郎と名乗っていた、あの男だ。

「あ、あの……」

助けてくれてありがとう。それだけの言葉が吐き出される前に、
廷兼郎は一切視線を移さずに言った。

「口より先に手を動かして。早く武器を拾いなさい！」
敢えて厳しい口調で言い放つ。ここで会話などしていられるほど、
廷兼郎に余裕はない。先ほどの攻防も、一歩間違えば間に合ってい
なかつた。

大錬流合気柔術、太刀捕の一、潜獅子くくりじし。刀を振り下ろす相手の肘
を押さえながら股に潜り、踏み込んできた勢いを殺さぬまま、後方
へ投げ捨てる。

贅沢を言えば投げ捨てず、そのまま押さえて止めを刺しておきた
かつたが、彼の前にいる真伝天草式の面々がそれをさせなかつた。
とどめをさす一動作の後、自分の体がどうなっているか、想像する
だに恐ろしい。

とどめは他に任せ、自分を情勢を崩すことに専念すればいい。
天草式は諸般の事情で思うように戦えない。均衡を崩すには、イ
レギュラーが必要となる。廷兼郎は喜んで、その役目を負うことに
した。

突然の闖入者やちんに戸惑う真伝天草式が立ち直る前に、近くにいる相
手の下腹部に、右鉄槌から左膝蹴りへと繋げ、髪の毛をむしらんば
かりに掴んで後方に投げる。

気が付いたように今更繰り出されたレイピアの刀身を捌き、握り
手を取って引き込み、巴投げを行う。太刀捕の場合は、車投げと称
する。

まずは立ちはだかつている真伝天草式を分断し、確固撃破に持ち
込む。ゆっくり一人ずつ対処できる状況を作つてあげれば、今度は
天草式の持つ数の優位が物を言う。

廷兼郎が止めまで行つ必要は無い。少しずつ切り崩していけば、
それで用は足りる。

眼前の敵が突然、建宮のものより小振りなフランベルジュをこれ見よがしに掲げる。気のせいか、刀身の周りが明るく光っている。そして間を置かず、刀身の根元から炎がうねうねと競り上がり、フランベルジュを彩った。

フランベルジュはその語源を、フランス語で火炎を意味する『フランボワヤン』から取っている。その刀身からして既に、炎を表しているのだ。

炎を纏うフランベルジュが、廷兼郎に向けて突きつけられる。その様相に、彼は戸惑ってしまった。

炎の剣という意味を持つからといって、本当に火を吹いてどうするのだろうか？ と廷兼郎は半ば呆れていた。フランベルジュの波打つ刀身は、切りつけた際の傷口を癒着しにくくするという、刀剣として素晴らしい機能を元から有している。つまり火を纏うまでもなく、非常に優れた武器なのである。

確かに炎を纏った剣は太刀捕を行う際に厄介だが、傷口を炎で焼いてしまったら、むしろ止血の助けになるのではなからうか。ならばあの炎は、フランベルジュの機能を減衰させかねない。やはり廷兼郎には、剣が火を吹くことの意味が分からなかった。

「いやあッ！」

相手が気合を乗せてフランベルジュを振り上げる。速度や姿勢、間合いの取り方は確かに優秀だが、それを言えば琴弾原に居た者たちや、先ほどのドレスソードの少女にも言える。

フランベルジュが上段に構えられた瞬間、廷兼郎は低空からのタックルをかました。そのまま押し倒し、掴んだ相手の太ももを脇に抱えて持ち上げる。

「そおいッ！」

フランベルジュを構えたまま、相手は真後ろに倒れこむ。それだけに留まらず、廷兼郎は背を仰け反らせて相手の体重を引っこ抜い

た。

廷兼郎の背が綺麗な曲線を描き、相手もまた見事な放物線を描いて、天草式の真っ只中へと放り込まれた。足を掴んでのパワー・スープレックスと言ったところだろう。

投げた姿勢から後転して、素早く起き上がる。構えた廷兼郎がじりと間合いを詰めるが、今度は応じることなく、真伝天草式は僅かに退いた。

既に三人の仲間が、魔術師ではない人間に倒されている様を見て、当然のように警戒した。

皆、体力強化用術式や対衝撃用術式などを満遍なく使い、常人よりも数段上の性能を有していたはずだったが、魔術を使用していない只の一般人は、それをものともせず倒してのけた。

徒に突っ込めば、天草式の陣営の中へ投げ込まれる。ここは一気に囲んで制圧したいが、天草式の連中が睨みを利かせているなかで、これ以上牽制を行う人員を減らしたくない。

八方塞がれたか。このメンバーにおいて一番の年長である久那くなは、ままならぬ状況に齒噛みした。

そんな彼の耳に、福音が届いた。甲高い口笛の音は、掘削作業終了の合図。それは撤退と、作戦の成功を意味していた。

他の者にも聞こえていた。久那が下知を下すまでもなく、一様に撤退を開始した。

天草式も追いつがるが、魔術が思うように使えない結界内にいるうちに、真伝天草式は白鳥陵の湖を越え、大阪の町に溶け込んでいった。

いち早く飛び出していた廷兼郎だったが、彼らのように湖の上を

走れないのため、そこで追跡を断念した。湖の向こうへ走り去って
いく彼らを、廷兼郎はぎっと目を凝らして見届けた。

金印を示す：一

羽曳野はひきので真伝天草式を取り逃がした天草式と廷兼郎の一行は、ひとまず拘束した真伝天草式の面々を連れて木造船へと戻っていた。

真伝天草式から情報を引き出そうとしているが、一向に事態が進展する気配は無い。廷兼郎はその様子を、呆れ返った様子で眺めている。

それも仕方の無いことだろう。てつきり拷問でも掛けるのかと思いきや、天草式が行っているのは、単に協力を頼んでいるだけに過ぎないのだから。

殆ど泣き落としと変わらない説得方法である。

「何で拷問なり何なりして、情報を引き出さないんです？」

隣に立っている対馬に尋ねると、彼女は苦りきった顔をして、きつい視線を返した。

自分から喧嘩を吹っかけた後ろめたさからか、彼女は廷兼郎の近くに来て話し相手になってくれた。

「仲間に、そんなことをしたくはないのよ。それに、痛みで強要した自白の信憑性は疑わしいわ」

「とはいえ、事は一刻を争うのでは？ 日本全体を巻き込んだの事態に発展する可能性があるのでしょうか？ 日本国民の僕としては、早々に解決方法を探っていたいただきたいのですが」

対馬はそれを聞いて、払うように軽く笑った。

「……外野は暢気なものね」

その言葉には、さしもの廷兼郎も色を失った。何か言い返そうとしたが、彼はその言葉をぐっと飲み込む。代わりに、自分を落着けるためか、深く息を吐いて、

「なら、内野に回るとしましょう」

と言って、険しくなった顔のまま、尋問をしている建宮たちの元へ歩いていった。

「どうする気？」

対馬の言葉に、廷兼郎はこれ見よがしに失笑してみせた。

「天草式が手を拱こまねくなら、天草式じゃない僕がやるしかないでしょ」

真伝天草式の面々は、建宮たちの説得も空しく、一向に協力する素振りを見せなかった。

同じ天草式十字凄教徒として、自分たちに協力してくれと再三要求しているが、彼らは黙秘し続けていた。

このまま事態が膠着すれば、真伝天草式が次の行動を起こしてしまふ。白鳥陵というヒントを使い果たした今となつては、次に真伝天草式が向かう場所を特定することは出来ない。

拘束した真伝天草式の人間に、直接聞くしか方法はない。

建宮の焦りを受け流し、真伝天草式は黙りを決め込む。それはまるで、真伝天草式と天草式の隔たりを体現しているかのようだった。

「建宮さん。尋問、交代してもらえませんか？」

膠着した場の空気を破るため、廷兼郎は建宮たちの輪の中に入っていた。

「お前さん、尋問なんか出来るのかよ？」

「仲間を慮うあなたたちよりは、上手く出来ると思います」

挑発的な言葉に、諫早いんそうが反応する。

「天草式の問題に、口を出すのか？」

「日本が支配されるのだと、煽つたのはあなた方だ。僕はこの事態を憂い、非才の身ながらもお力添えしたいと考える、一日本国民に過ぎません」

間髪入れず、そして有無を言わさぬ口調で答える。
敵かな低音が、静かに周りを威嚇する。

「それほど酷なやり方はしません。僕は尋問官ではありませんから
ふいに力を抜き、廷兼朗が淡く笑って見せた。その柔さのまま、
気軽に真伝天草式の男の肩に手を置いた。

「まず、名前を教えてくださいませんか？」

「……」

相手が変わったとて、真伝天草式の覚悟に変わりはないようで、
言葉を返す代わりに反抗的な視線を向ける。

「分かりました。では真伝天草式の方、少し、お付き合ってください」
言つて、廷兼朗は男の鼻に中指をするりと突っ込んだ。その鮮やかな手際に、食らった本人も、周りの人間も一拍置いてから事態を把握した。

小さな鼻の穴に、中指が根元まで飲み込まれていた。首を振って逃げようとする男の頭を、左腕でがっしりと抱え込む。

「んんんがあああああああああ！！」

捕まつてからこつち、一言たりとも漏らさなかった男の口から、
木造の船を割らんばかりの絶叫が鳴り響いた。

その声は、およそ人間の発する声ではなかった。獣にも似た咆哮
は、人間であることをやめてこそ出せる声だ。

人の尊厳、勇氣、愛情、その他諸々が、頭の芯まで真っ白になる
ほどの痛みを受けて、自分の体の外に追いやられてしまつてこそ、
吐き出せる声だ。

かつて、廷兼朗も上げたことがある。この声を上げた人間が立ち直るのは至難を極めることを、彼は経験から知っている。

「五、四、三、二、一、零」

カウントを終えると同時に、廷兼郎は指を引き抜いた。べつとりと粘性の高い血が、長い中指に纏わり付いている。

「ルールは簡単です」

男の耳に口を押し当て、耳元で囁く。

「十秒間、猶予を与えます。その間に自白してください。自白の内容は、既に説明されていますね」

睦み事を営むような優しさで、廷兼郎が男に語りかける。

「その間に自白がなされない場合、十秒間、あなたの鼻に指を入れます。たったそれだけの、単純なゲームです」

左の鼻の穴から、止め処なく血が溢れる。男は腕を縛られているので、それを拭く事も許されない。

「ゲームですので、こちらもルールは守ります。鼻以外の場所には指を入れません。では、再開しましょう」

そして廷兼郎は、男を掻き抱いたまま、右の鼻に中指を差し入れた。

「んぐうううううううう！」

肩を顎に押し当て、左腕で押さえているため、今度の悲鳴は音量が低くなっていた。その分、声を上げたくとも上げられない喉が、はちきれんばかりに力んでいた。

頬が削げるほど筋張り、歯がバキバキと、砕けてしまいそうな頼りない音を発する。

それで廷兼郎は、何ら姿勢を変えようとしなない。

「三、二、一、零」

血みどろの中指を引き抜き、蛇口を開いたように鼻から血が流れ出す。

「十、九、八、七……」

自白の猶予が刻々と過ぎてゆく。がくがくと揺れる半開きの口が、
かろつじて言葉を結ぶ。

「言う、言うから！ やめ、やめてくれ！」

鼻血どころか涎も涙を垂れ流し、男はなりふり構わず懇願した。

最初の悲鳴を聞いたときから、それは廷兼郎の思惑の内だった。

「よくがんばりましたね。あなたの勝ちですよ」

満面の笑みを返しながら、労うように男の肩を叩き、廷兼郎は先
を促した。

金印を示す：二

「それでは、真伝天草式の行方を教えていただけますか？」

真伝天草式の男は顔をくしゃくしゃに歪め、荒い呼吸を繰り返す。ぬらりと赤く光る指を見せつけると、痛みで痺れた頭をフルに使って言葉を吐き出した。

「それは、知らないんだ。俺たちに詳しい行き先は知らされなくて、ただ菊池さんに付いていつてるだけなんだ」

「……嘘を言うようならペナルティがあるのは、言わずとも分かると思いますが？」

「本当だ！ 嘘じゃない。俺は、俺たちは、菊池さんに従ってただけなんだよ……」

最後は懇願するように泣き崩れ、項垂れたまま身を震わせる。「嘘じゃないんだよお」と小さな声でいつまでも呟き、彼は大人しく廷兼朗の返事を待った。

彼の言葉が本当だとしたら、リーダーである菊池という男は、中々の強かさを持っている。情報の統制を徹底し、言いたくても言えない状況を作り出している。自分一人で組織を引っ張る覚悟と強さが無ければ出来ない芸当だ。

典型的なワンマン上司なのだろう。

「では、質問を変えましょう。何故、白鳥陵を盗掘したのですか？」

「それは、菊池さんが」

「二言目には菊池菊池と、よほど好きなんですな」

男の話を、廷兼朗は柔和な語り口で遮った。「菊池に従った」という類の言葉は、もう聞き飽きていた。

男は震えながら、必死に自分の頭の中から役に立つであろう情報をかき集める。

「ええと、確か……。そうだ！ 大昔に、倭建命が金印を奪ったつて、そう言っていた。なあ！ そうだよな！」

他の仲間にも同意を呼びかけ、三人は阿呆のように首をかくかくと縦に振った。

「倭建命が奪った、ねえ」

なかば呆れた声を上げる。

金印紫綬などと言うものが関わってきていた時点で、廷兼郎は相当にうさん臭さを感じていた。なので、今更そのことに口を出す気は失せていた。

それに、金印紫綬を賜った卑弥呼と、真伝天草式の言う倭建命では、年代に差がある。

卑弥呼が死亡した年代として有力なのは二世紀頃、倭建命が活躍した年代は、諸説入り乱れているが、四世紀から六世紀ごろと見られている。

古代のことで未だ解明されていないとはいえ、直接に二人が出会ったとは考えにくい。

「倭建命は、誰から金印を奪ったのか。それは分かりますか？」

「誰、か？ 誰からとは、言ってなかった。菊池さんが、『俺の生まれ故郷から奪われたんだ』って、話してくれたんだ」

「菊池さんの生まれ故郷とは？」

「あいつは熊本県の菊池の出なのよ」

「即座に後ろの建宮が答えた。」

その答えに、廷兼郎は感心の声を上げる。

「菊池の出身で、姓も菊池とは。まるで菊池彦ですな」

菊池彦とは、魏志東夷伝倭人条に登場する狗奴国の長を指し、正確には狗古智卑狗と紹介されている。

この狗奴国は、後の熊襲に当たり、朝廷に幾度も反抗したと伝えられ、魏志東夷伝倭人条が書かれた頃にも、邪馬台国と敵対してい

た。

「なるほど。菊池さんの考え方が、なんとなく分かってきました」
廷兼郎の中で、卑弥呼と倭建命が一本の線で繋がった。

卑弥呼の国と争っていた狗奴国の子孫である熊襲は、景行天皇の
勅命を受けた倭建命によって討伐されている。ちなみにこの討伐の
際、倭建命は目麗しい美少女を装い、宴を催して油断させたところ
を切りつけたという。

その見事な手際を熊襲の弟建おとたけは死に際に讃え、それまで倭男具那
命ことと名乗っていた彼に「建たけ」の名を譲った。

つまり、卑弥呼の国と戦争をしていた狗奴国が金印を何らかの方
法で奪い取り、それを後に、倭建命が熊襲を討伐して手に入れたの
だろう。だからこそ、彼の墓と言われている白鳥陵に埋められてい
た。

ならば他に金印が埋まっているのは、他にある倭建命所縁ゆかりの地か、
あるいは元々、金印のあった場所か。

「どうでしょう、建宮さん」

一般人の推論を、魔術師は神妙な面持ちで吟味していた。

「畿内の線も捨てがたいが、やはり向かうべきは九州みたいよな」

「はい。九州の邪馬台国候補地のどれかに、彼らは向かっていると
思います。中でも熊襲のいた菊池が玉名。そして阿蘇」

建宮が、ふと湧いた疑問に首を傾げる。

「何故、阿蘇なのよ？ 魏志東夷伝倭人条では、狗奴国は邪馬台国
の南に位置すると書かれてるから、北の宇佐や甘木が怪しいのよ。
いや、熊襲のことを考えれば、薩摩だって宮崎だって」

「魏志東夷伝倭人条より時代は下りますが、七世紀に書かれた中国
の史書『随書ずいしよ』には、

「阿蘇山有り 其の石故無くして火起り

天に接する者 俗以って異と為し

因つて禱祭とらいさいを行う』

と書かれています。中国にも知れ渡るほど、阿蘇山は日本にとって重要な祭祀施設だったはずです。何せ、世界最大級の火山ですから金印紫綬を賜った邪馬台国が九州にあったとしたら、優れた巫女である卑弥呼が、これを放っておくはずは無い」

廷兼郎の論に、建宮は黙考を決め込んでいた。

「……最後の金印が、埋まっていると？」

「そこまでは言えません。だからやはり宇佐辺りから上陸して、西南方向へ降りて行くのはどうでしょうか？」

廷兼郎の提案を、ほうほうと頷きながら建宮は聞いていた。

「それならいいのがあるのよな！」

急にテンションの高くなった建宮が取り出したのは、古めかしい日本地図だった。

「たたりらつたら〜ん。『縮図巡礼』！」

何やってんだ？ と怪訝な顔をしていた廷兼郎だったが、建宮の持ち出した地図を見て思わず「んごツ！」と変な驚き方をした。

「こ、こここ、これ、伊能図じゃないですか！？ 本物ですか！？

材質が古ツ！？」

伊能図とは、伊能忠敬が作成した日本地図のことである。正確には、大日本沿海輿地全図と記す。

その膨大な情報量は、伊能忠敬が存命の間に完成を見ることはなく、彼の死後三年経った一八二一年に伊能図は完成している。

「彼は元々、天草式と親交があったのよ。持つべき者を友達ということよな」

船の床にいそいそと地図を広げる。今時の地図のように綴じられていない、一枚一枚が分かれた地図である。

国会図書館か伊能忠敬記念館に行かねば見れない代物を目の当たりにして、廷兼郎は打ち震えた。

広げ終わると、建宮たちは満足そうにしていた。事情の分からない廷兼郎は、首を傾げるばかりだった。

「それで、地図を広げてどうするんでしょうか？」

「ここから、ここへ行くのよな」

そう言っただけで指を差したのは、大阪の難波の辺りから、熊本県の阿蘇付近だった。

「……あ、あー。魔術、ですか？」

流石にもうこの状況に慣れてきた廷兼郎は、建宮の大雑把な説明ですぐに納得した。自分の物分りの良さを羨む反面、考え方が毒されているのを感じた。

「そうなのよ。『偶像の理論』を用いて地図、つまりはミニチュアサイズの日本から、本物の日本へと干渉するのよな。ただし、この特殊移動法は、伊能図が観測の際に星を利用して作成されたことから、『星の位置』が合わないと思えないのよ」

「『星の位置』？ 星辰のことですか？ グランドクロスとかそんな感じの？」

「そこまで大げさじゃない。日付が変わってから五分くらいなのよな」

「じゃあ、毎日使えるんですか。いいな」

どうやら空間移動に近い効果を得られるようだ。これが使用できるなら、先ほど大阪から向かった真伝天草式に先んじることが出来るかもしれない。

しかし真伝天草式は、天草式の分派である。ならば奴らも、これを使えるのではなからうか。

「真伝天草式も、これが使えるんですか？」

「いんや、そんなことはないのよな。あいつらこの地図持ってないから、もつどこに『渦』があるか正確に把握していないはずだし」

建宮の説明を聞いて、廷兼郎は安心する。真伝天草式は、この魔

術を行えないらしい。

「三つの白鳥陵では悉く先手を取られたが、今度はそうはいかないのよ」

建宮が胸の前に拳を握る。その闘志が周りにも伝わって、皆が引き締まった表情になる。

「『渦』が発生するまで時間がある。皆休んで、英気を養っておけ！」

「『オオツ！』『オオツ』」

一様に力強い返事をして、天草式の意志は固まった。

それを邪魔しないよう、廷兼朗はするりとした身のこなしで、船の奥へと身を退いた。

金印を示す：三

船の壁に一人で佇む廷兼郎に、対馬が歩み寄る。怒っていると表現して差し支えない形相で、彼女は廷兼郎を睨んでいる。

「何をしたの？」

言葉の足らない問いに、廷兼郎は困惑した。

「真伝天草式の行き先を、話し合っていましたけど……」

「その前よ。あなた、何をした？」

ようやく合点のいった廷兼郎は、先ほどまで赤く染まっていた中指を、対馬の前に突き立てる。

「鼻腔を指で刺激しただけです。大した傷ではありません」

「たったそれだけで、ああなるとは思えないわ。あいつだって、腐っても天草式の人間よ。拷問とか痛みには、人一倍耐性がある」

対馬の主張に、廷兼郎がにこりと微笑む。

「それは、鼻に指を突っ込まれたことのない人間の言葉ですな」

「あなたは、あるってどういうの？」

「……鼻どころか、口にも、耳にも、臍にも、尻にも入れられたことがありますよ」

さらに口角を上げて、廷兼郎は笑う。

「あれは、初めてならば耐えられない。鍛えているとか、腕っぷしが強いとか、そういうことが一気に霧散するんです。これまで自分が培ってきた技術、築き上げてきた自信。その在り処が、痛みで見えなくなってしまうんですよ」

それは殴打や蹴撃などの、外から来る痛みではない。文字通り、自分の中のデリケートな部分を弄られて発生する、内からの痛みである。

「抛り所を無くした状態で、人間が痛みには耐えられる道理はない」
「抛り所がなければ、人は容易に屈する。何の支えもなければ倒れ

るのは、物理的なことに限らない。

人の心でさえ、その法則には逆らえない。

「女性に話す内容ではありませんな。失礼しました」

中指を仕舞い、対馬に謝罪する。こんな拷問の方法を話されて、気を良くする人間など居ない。ましてや自分の仲間に向けられたことである。もう少し殊勝な態度を取ればいいかと廷兼郎は悩んだが、すぐにその考えを打ち消した。

どう取り繕ったところで、彼は異分子なのだ。ならば表面で媚びるような真似をせず、我を貫いて、批判や反論を浴びせてもらうほうが潔い。

天草式にも、廷兼郎の覚悟が少なからず伝わっているのだろう。事実、彼の行動は先の作戦で大いに役に立っている。

今の尋問や行き先の推測にしても、突破口を開いてみせた。それだけに、大つぴらに文句を付けるのは気が引けるらしい。

やはり自分は自分なりに、出来ることをしなければならぬ。自分に出来ないことは彼らに任せ、彼らが出来ないことを、自分が担えばいい。

そこでふと、廷兼郎は何故ここに自分が居るのかを理解したような気がした。

学園都市の誰が要請したかは分からないが、もしかすればその人物は、天草式の現状を予想して、自分を遣わせたのかもしれない。

天草式の面々は、自分の武器を整備したり、型の練習に励んでいた。建宮に休めと言われているのも関わらず、落ち着きの無い様子だった。

廷兼郎はその様子を、食い入るようにして眺めていた。真伝天草

式と立ち合ってから感じていたことだが、どうやら天草式が会得している剣術は独特のものらしい。日本的な部分もあれば、西洋の剣捌きも見受けられる。

天草式は、日本にあった十字教が幕府の弾圧を避けるべく、神道や仏教などを取り入れて偽装をこらしてきた信仰が母体となっている。

その気質から、武器や武術に関しては、洋の東西無く取り入れてきたのだろう。

世界中の武術を取り入れている『カウンターメジャー対抗手段』と、コンセプトが似ている。何か参考になる動きはないかと思ひ、廷兼郎は彼らを注意深く観察しているのだ。

廷兼郎は、特に対馬が操るレイピアの動きに注目していた。

レイピアのような運用をする武器は、日本に無い。当然、廷兼郎はレイピアを操ったことが無い。軽さと細さを生かした突きだけでなく、その撓りしなを生かした操剣は剣術というより、中国の硬鞭術に通じるものがある。だが手首から先の操作は、より精妙にして緻密を極めている。

「……さつきから、何見てるの？」

廷兼郎の視線に気付いた対馬は、文句でもあるの？ と言いたげな口調で話しかける。

無論、そんな意図などなかった廷兼郎はぶるぶると首を横に振る。

「レイピアが珍しくって、それで見てただけです」

「そうね。日本人には馴染みの無い武器だわ。でもあんた、これ捌いてたわよね？」

言われてみれば、廷兼郎はここの三日で三人のレイピアの使い手と戦っていた。レイピアとの対戦には慣れてきたが、扱うとなると勝手が違う。

「向けられるのには慣れましたがね。自分が扱うとしたらどうしようかなあ、と思ひまして」

「ふうん。じゃあ扱ってみる？」

くるりと刀身を回し、対馬はレイピアの柄を突き出してきた。

「え！？ いいんですか!？」

「壊したら承知しないわよ」

「大丈夫です！」

対馬からレイピアを受け取り、しげしげと興味深く観察する。

「軽ッ！ 持つてる気がしない。逆に心許ないな」

対馬はその様子を、ほくそ笑んで眺めている。

素人がいきなり扱える代物ではない。剣とは言いつつも、その運用方法は独特過ぎる。だからこそ、対馬は廷兼郎にアドバイスなどする気は無かった。

ピピピッ！ 空気を裂く音が、立て続けに響く。

「やっぱり難しいなあ。結構楽しいですね、これ」

対馬の思惑をよそに、廷兼郎は何故かこなれた手つきで、レイピアを操作していた。

熟練している対馬から見れば、まだ無駄の動きは多い。それでも、軽妙なレイピアの刀身を振り回す様に、危なげな様子が見えなかった。

普段から寸鉄身に帯びることのない廷兼郎だが、武器の扱いも一通り習得している。武器を用意することは無いが、武器を利用すべき状況に陥ったとき、すぐに対応できるようにするためだ。

構造が複雑な近代兵器でなければ、すぐに対応できるよう、準備を怠っていない。

ひとしきり振り終えた廷兼郎は、レイピアをくるりと回して柄を対馬に向けた。

「ありがとうございます。いい勉強になりましたよ」

何故かムツとした顔で、対馬はレイピアを受け取った。

「使えるのなら、そう言いなさいよ。意地の悪い」

「そんな、使えませんよ。初めて手に持ちましたよ」
頭を掻きながら、恥ずかしそうに顔を背ける。

「ふん。少しは筋がいいみたいね」

珍しく誉め言葉のようなものを掛けられた廷兼郎だったが、返した表情は深く沈んでいた。

「……筋なんて、僕はよくありませんよ」

謙遜と言うよりは諦観してるような、淡く綻んだ顔をしていた。

「武術の基本と言うのは、そう変わりませんから。たまたまそれを押さえていたから、こうして出来たんです」

まるで他人のことを話しているような空々しい口調だったため、筋がよくないことを指しているのか、武術の基本は押さえてあることを指しているのか、対馬には分からなかった。

金印を示す：四

特殊移動用術式『縮図巡礼』の『渦』に飛び込んだ廷兼郎と天草式の一行は、瞬く間に大阪から熊本は阿蘇山へと移動した。

白井黒子の空間移動テレポートに付き添ったことのある廷兼郎は、殊更に抵抗無く『渦』の中へ入っていった。

真夜中の阿蘇山は、不気味なほど静まり返っている。『縮図巡礼』で移動してきた場所は、中岳なかだけの火口と思われる。周りには一切の草木は無く、赤茶けた土に黒ずんだ溶岩が転がっている。そして今なお続く火山活動の証として、火口から噴煙が立ち上り、月明かりを受けて夜空に白く浮かび上がる。

まずはここから下山しなければならぬ。大層な手間だが、大阪から一瞬で移動してきたことを思えば安い代償である。

「よし。宇佐へ向かう班と菊池へ向かう班に分かれて、搜索を開始するのよな」

「おいおい、俺の故郷に何の用だ？」

全員の視線が、山頂に釘付けになった。

肩掛けに担いだハルバートの刃が、一際大きく紫電を放つ。

「菊池!？」

建宮が驚きの声を上げる。それも無理かならぬことだ。ここで遭遇するとは思っていなかった、黒い外套を羽織った大柄な男が、長得物を携えて目の前に現れたのだから。

折れた鼻を固定するためか、顔にはバツの字を描いて包帯が巻かれている。折れた鼻骨が痛むのか、白い布から覗く目は充血気味である。

「こつちから出向いて、手間減らしてやったぜ。感謝しな!!」
菊池の声に合わせる形で、残りの真伝天草式のメンバーが現れる。

山頂から大きく陣営を広げ、天草式を見下ろすように取り囲んでいる。

「どうやって、ここに？」

「こちとらためーらより少人数だからな。小振りのチャーター機使えば済むんだよ」

掌で飛行機を模して、子供が遊ぶときのように振るう。その無邪気さが余裕となって、天草式に伝わる。

「んなことよりも、聞きてーことがあんだろ？ 建宮、たてみや恥ずかしがらずに言ってみ？」

「……金印は見つかったのかよ？」

「それがよお、聞いてくれよ。阿蘇山だと思ってたはずれでな。影も形も見当たんねーんだわ、これが」

大きく手を広げ、菊池は大仰に嘆いてみせる。舞台俳優のようにメリハリのある動きだ。その仕草がいちいち、こちらの神経を逆撫でる。

「だから、ゆっくりじっくり、金印を探したいんだわ。おめーらにこそこそ後ろから付いてこられつと、気が散るんでね」

肩に置いてあったハルバートを振り下ろし、手近な岩を打ち砕く。均衡を失った岩の残骸が、下にいる建宮たちに降り注ぐ。

「ここで、ためーらとの因縁を断つ。後顧の憂いなく、俺たちは日本を支配する」

一歩、菊池が降りてくる。合わせて、真伝天草式が動き出す。

対する天草式も負けてはいない。既に各々の武器を構え、臨戦態勢は整っている。

「その人数で、何が出来るのよ、菊池」

上を取られたからといって、臆する天草式ではない。それに相変わらず、人数は天草式が上回っている。

「ふん。大阪でのこと、もう忘れてるようだな」
言うに早いか、菊池が真上に掌をかざす。そして大きなボタンで押すかのように、軽く手を伸ばした。

菊池の体から、何かが爆ぜた。得体の知れない不可視の力場が、爆発と形容していい速度で広がり、近くにいた建宮たちを瞬く間に飲み込んだ。

瞬く間に通り過ぎた違和感を、建宮ら天草式は正確に感じ取った。
「これは!？」

「大阪のと似てるが、規模も威力も段違いだぜ。金印の欠片を三つ足し合わせたんだからな」

菊池は腰に手を宛がい、結び付けてあるアクセサリをこれ見よがしに振ってみせた。

紫の帯で括られた小さな金の塊。一部分欠けてはいるが、まさにそれは、教科書などに載っている金印紫綬きんいんしじゆと相違無い代物だった。

「駄目、出来ない。魔術が全然使えない!？」

突然、対馬が半ばヒステリックな声で叫ぶ。

真伝天草に油断無く構えている廷兼郎を他所に、天草式は慌てふためきながら、魔術の行使が不可能であることを確認し合っていた。一人の例外も無く魔術が行えないことは、間を置かず明らかとなった。

大阪のときとは違い、一切の魔術が発現せず、身に纏っていた防ディフェンスベル御術式も解呪ディスペルされてしまったという言葉を、廷兼郎は歯を軋ませながら聞いていた。

建宮はかつての仲間を、苦りきった顔で見つめていた。

「これが、金印の力なのか!？」

「そうだ。この日ノ本、金印紫綬を司る者の許可無くして、魔術呪術の類を禁ずる。それこそが、金印紫綬の力だ!！」

親魏倭王の金印紫綬は、魏国より賜った日本支配の象徴である。剣や槍のような、直接的な武力による支配を意味しているのではない。あくまで象徴であり、建前であり、形であり、偶像である。

鬼道という呪術で日本を支配していた卑弥呼に渡された時点で、金印紫綬は鬼道による日本の支配を肯定したことになる。卑弥呼以外の魔術呪術の一切を制御し、真の意味での支配をもたらす。能く民衆を惑わすのは、金印紫綬を賜った一人で十分ということだ。

何も出来ない天草式に対して、真伝天草式の魔術が進る。雷が、炎が、風が、水が、各々得意とする魔術が所狭しと駆け巡る。

任意の対象の魔術を禁じるも許すも、今や菊池の胸先三寸に委ねられている。

「まだ一欠片集まってないが、お前らを潰すには十分だ。今やこの阿蘇一帯が、俺の支配下だからな」

魔術を使える者と、使えない者。その差はあまりに深く、抗い難い。魔術を知る者なら、より実感していることだろう。

真伝天草式が前進するのに合わせて、天草式が後退る。

「喝ッ！！」

夜空をどよもす一声が、阿蘇の山に響き渡った。それは魔術を使えず、魔術も知らぬ者が上げた対抗の勝鬨だった。

両陣営は思わず歩を止める。

気炎を挙げて一転、ふわりとした口調で廷兼郎は言った。

「吞まれていますよ、皆さん。そんなへっぴり腰では、逃げるも戦うもままならない」

自分の足腰を見せ付けるように、こたけいったい金剛搗碓を行う。打ち下ろした震脚が溶岩を踏み割り、ずしんと重い音響を放つ。

腹の深いところが、力強く揺すられる。

「建宮さん、何か策はありますか？」

優しく、確固たる声で問いかける。 廷兼朗は魔術に関して門外漢であるため、魔術を前提にした戦い方は建宮に仰ぐのが得策だ。

建宮は何とか自制心を取り戻し、この場で最良の方策を割り出す。「……まず、この場は退く。このままじゃ、なぶり殺しなのよ。そして遠距離から、魔術で菊池を狙撃する」

廷兼朗には、それが有効かどうか確かめる術はない。それ以上聞くような無粋はせず、建宮ら天草式を信じ、自分に出来ることに徹する。

「そうですね。では僭越ながら、殿を勤めさせていただきます」

まずこの場は戦うこと以前に、見せることが大事だ。気迫で負けた状態では、何をしても遅れを取る。窮地にあるときこそ、己のほうから気を放たなくてはならない。

「……頼めるか？」

「御意に」

それだけ言葉を交わすと、建宮率いる天草式の面々は一目散に下山を開始した。それを追おうとする真伝天草式の前に、当然のように廷兼朗が立ちふさがる。

限界まで吸い込んだ呼吸を、相手に浴びせかけるように吐き出した。

「これより七生を以って、天草式十字凄教の御方々、ご守護勤めさせていただく！！」

時代がかった口上を、身を震わせながら叫び立てる。その気迫のみで、天草式を追う動作を止めてみせた。

「殿こそ武人の誉れ！！ なれば真伝天草式の皆々様、用があるうと急ぎだろつと、お立ち合い願おうぞ！！」

山肌を舐めるように、廷兼朗は下から高速で間合いを詰めた。ここで取るべき『対抗手段』を、彼は知っている。骨身に沁みて、憶

えている。

金印を示す：五

フランベルジュの穂先から、真つ赤な舌が伸びる。剣の軌道に合わせて振るわれる炎が、斜面をなめ尽くし、廷兼郎の居た場所をも飲み込む。

燃える舌に包まれる前に、廷兼郎はその場に倒れ込んだ。重力に逆らわず、余計な力を入れず、体が地面と平行になるまで落とす。落下する力を、そのまま前に出る力へと変換する。

炎と斜面に出来た僅かな隙間を、ゴキブリのように伏せながら突進する。刈り上げた髪の毛が僅かに焦げるも、体が焼かれることはなかった。

敵の魔術師の足元に忍び寄った廷兼郎は、地面に手を付いて水面蹴りを放つ。それは膝の裏を的確に狙撃し、確実に機動力を奪った。呻きながら崩れ落ちる魔術師の頭を、今度は腰を入れ替えて蹴り上げる。円弧を描く足の甲が頭を跳ね上げ、さらに伸びて反り返る。廷兼郎は蹴りの勢いに逆らわず、くるりと後転して立ち上がった。

斜面に寝そべる仲間を見て、他が警戒を強める。これまで二度に渡って真伝天草式の魔術師を打ち倒してきたことを踏まえ、容易に近づくことが出来ずにいた。

「何やってんだ！！ てめーら！！」

最も高い位置にいる菊池が一喝した。

「そうやってお見合いすることが、こいつの魂胆だって分かんねーのか！！」

菊池の言つとおり、これこそ廷兼郎の望んだ展開だった。

気迫で相手を押し返し、身構えさせ、慎重な態度を取らせる。そうして労せず、天草式の逃亡時間を稼げるという寸法だ。

「全員とつとと天草の連中を追いかけろ！！」

菊池の怒声を押されて、蜘蛛の子を散らすように真伝天草式のメ
ンバーが下山を開始する。もう廷兼郎になど目もくれない。
「くそッ！」

通り過ぎる相手を逃さんと、横合いから腕刀を繰り出す。その手
を払うように、ブロードソードが振るわれる。単なる払いとはいえ、
それは刃である。むやみに腕を叩きつけていい代物ではない。

相手がこちらの攻撃に反応したのを確認し、腕刀を袈裟斬りに降
ろす軌道の途中で、廷兼郎はさらに刃に向かって踏み込む。右腕は
その流れに逆らわず、力を抜いて折り畳み、代わりに肘を突き出す。
振り下ろす直線的な動きから、ぬるりと滑り込む緩い動きへと変
化する。

腕を切り払うはずだったブロードソードを掻い潜り、がら空きの
脇腹に硬い肘を叩き込む。八極拳が套路の一つ、外門頂肘である。
打撃音を上回る震脚を響かせ、真伝天草式の一人が真横に突き飛ば
される。彼は登山道を外れ、急斜面へと吸い込まれていった。

すぐに通り過ぎた連中へと目を向ける廷兼郎だったが、その背中
にぞわりと悪寒が走る。

山の頂近くにも関わらず、廷兼朗の後ろから激しい水音が届いた。
水脈など皆無の土地である。いったい何事かと振り返ったとき、
廷兼郎は改めて魔術の恐ろしさを体感することになった。

大質量の波濤が、こちらに向かって押し寄せてくる。途中にあっ
た岩や石を飲み込んで、もはや土石流となっている。吞まれば麓
まで流されるどころか、押し潰しかねない。

流れに身を任せるのは、この場を離れてしまおう上に危険なため却
下。地面に伏せて張り付いても、恐らくは土砂に潰される。

退くも必死。留まるも必死。となれば活路は一つ。

山津波に向かって、廷兼朗は斜面を駆け上がった。そして波頭を越える形で、彼は土石流の中へと飛び込んだ。

飛び上がりながら、足下に迫るに土石流を観察する。要は、兆しを見つけることが肝要である。

眼下で荒れ狂う波濤とは逆に、平らかな水面の如く己が気を整え、流れる岩を見定める。

何がどう動き、自分はどう動くべきか。それさえ理解していれば、あとは余計な動きをせず流れに身を委ねる。

激流の上に顔を出す岩の上に、廷兼朗は降り立った。

土石流を生み出した真伝天草式の魔術師がせせら笑う。水に押されて転がる岩の上に乗れば、バランスを崩して巻き込まれるだけだ。

だが、彼女の予想に反し、廷兼朗は土石流に巻き込まれることはなかった。

岩から岩へと、まるで飛び石の上を歩くような軽やかさで跳ねまわる。回転を見越して着地し、瞬時に次の足場を見つけて移る。土石流をやり過ぎどころか、徐々に魔術師へと近づきながら。

「はッ！」

廷兼朗は一際大きく飛び立ち、回転しながら魔術師へ飛び蹴りをかます。必殺の魔術を突破されて動揺した真伝天草式の魔術師だったが、迎撃するために剣尖から水流を放つ。

岩をも動かす水の勢いを廷兼朗はモロに食らい、バランスを崩して前のめりになる。

そのまま水に流されるはずだった体が、前方宙返りを行いながら間合いを詰めてくる。

魔術師が自分の悪手に気づいた時には、回転して威力を増した踵が彼女の脳天に突き刺さっていた。

頭蓋に浸透する衝撃が意識を寸断し、ようやく水流が停止した。

久方ぶりに地面に足をつけた廷兼朗は、自分を落ち着けるべく深呼吸を繰り返す。努めて気を静めている間は大丈夫だったが、切り抜けたところで疲れがどつと押し寄せた。

咄嗟のこととはいえ、山津波を回避できたのは奇跡に近い芸当だ。もう一度やれと言われて出来ることではない。

「これが、魔術か……」

学園都市にいる水流操作能力者でも、これほど大規模な干渉は難しいだろう。魔術とはこれほどなのかと、廷兼朗は素直に感心し、危機を逃れて安心した心を引き締める。

「ウチんとこの女教皇も常識外れだったが、お前さんも相当だな。倭建命のファンさんよお」

無人の野を行くが如く、悠然と降り来たる。真伝天草式教主である菊池は、鼻面を嬉しそうに擦っている。

「大阪でのあれは効いたぜ。自慢の鼻が潰れちまったよ」

よく見れば、鼻の軟骨がひしゃげ、鼻頭が赤黒く変色していた。

「男前が上がってますよ。羨ましい限りだ」

「それなら、てめーの鼻も潰してやらにやいかんな」

「そうしていただけると、本当に助かります」

「ふん。いけすかねー野郎だ。大阪での借り、ここで返す！」

左の掌中に凝らせた紫電が、一直線に放たれる。廷兼朗の後ろにあった岩に直撃し、瞬時に爆ぜ割れる。

「同じ手は食わねーってか」

元居た場所から五メートルほど移動した場所に、廷兼朗は立っていた。

「はい。琴弾原いんじやまはらで倒されてから、あなたのことばかり考えていまし

「だから」

「俺のことを考えると、電撃が避けられるのか？」

「電撃を避けたんじゃない。あなたの殺気を避けたんです」

「下らないとも言いたげに、菊池が大きく鼻を鳴らす。

「そういうのは良く聞くが、信用ならんな」

「魔術なんてものを嗜んでおいて、その言い様は無いでしょう」

「魔術はれっきとした技術さ」

「僕の武術も、れっきとした技術です」

互いに一步も譲らず睨み合う。元より語らいで相手に理解を促す行為は、この場で無粋なのかもしれない。

「これ以上話しても仕方が無い。ここからは、本身で行かせてもらいます」

「かつこつけやがって。脅しにもならんぞ」

「敬意を表したまです。では、参ります！」

廷兼郎がゆっくりと前進する。砂を踏む音も、石を転がす音も立てず、蛇のしなやかさをで間合いを詰める。

金印を示す：六

幾ら巧妙に足音を消し、動きを隠しても、電撃より速く動ける人間などいない。ましてや魔術も扱わぬ者に後れを取るなど、以ての外だ。

「二度目は無い!!」

ハルバートの穂先に電荷を蓄える。スタンガンに匹敵する威力を秘めたそれを、目の前の人間に放つ。

「うぐあッ!!」

次の瞬間、痛みに身を仰け反らせたのは、菊池だった。

左脇腹を抉る衝撃で、体がくの字に折れ曲がる。衣服どころか、全身くまなく施してある対衝撃用術式を貫いて、廷兼郎の繰り出した右の抜き手が内臓を抉る。

それに留まらず、吹き飛ばぼつとする菊池の体は、肋骨にめり込んでいる指に捕獲されていた。

肉を破って直接骨を握られる感覚に菊池は怖気を感じつつも、まだ冷静さを失っていないかった。

(掴んだ。動きを止めやがった!!)

むしろこれは好機。ハルバートの槍から『雷』の属性を拾い上げ、今度は全身に纏う。密着している状態なら、幾ら殺気を読もうと避けられない。

菊池の顔が必勝の感触に引きつる。敵を打ち倒す多幸福感が、脇腹の痛みを打ち消す。

密着状態からの攻撃方法は、何も魔術に限ったものではない。

足裏から昇る力を腰、背中で増幅させ、一切のロス無く、肋骨を

捕獲している右の掌に伝達する。正しい姿勢から、正しいタイミングで、正しく放つ。そこに僅かな齟齬も許されない。

元より廷兼朗は、それしか出来ない。基本に忠実に、愚直に倣う。学園都市に移ってからは、網丘の指導の下、あらゆる武術の基本を徹底的に習得した。それはむしろ、体力強化や模擬戦闘よりも重点的に行われた。

全ては基本から。基本にこそ、武術のコンセプトや思想が色濃く表れる。そして、それをさらに突き詰めると、人の体こそが基本であることに行き着く。

それは体力を強化することだけではない。極限状態にあっても、冷静に自分の体を俯瞰して鑑み、真つ直ぐに正すことの出来るバランス感覚こそ重要である。その追求は、『カウンターメジャー対抗手段』計画の目的の一つでもある。

『対抗手段』計画の成果を、廷兼朗は着実に身につけていた。体を寸分も動かさず、廷兼朗は二撃目を放つてみせた。

単按。按とは掌あひによる打撃を指す。そして殆ど体を動かさない静止状態から力を生み出す技法は暗勁。密着状態の場合は寸勁と呼ぶ場合もある。

脇腹に食らった二度目の打撃で、とうとう菊池の体が廷兼朗から離れた。全身から紫電を放ちながら勢いよく登山道を転がり、斜面の縁にある岩に体をぶつけてようやく停止した。

衝撃で肋骨は砕け、廷兼朗の指が食い込んでいた部分から、湧き上がる血に混じって僅かに白く覗いている。体を起こす動作だけ、全身が引きつるように痛む。

魔術を介した刃さえも通さないはずの術式が、只の人間の打撃によってもたやすく破られた。その衝撃は体の芯まで残り、内臓が悲鳴を上げている。琴弾原と大阪で相見えたときから薄々感じていたことだったが、何故か目の前の一般人の攻撃は、魔術による防

御が意味を成さないらしい。

「……てめーのは、よく効くな。こりゃ、倒されても仕方ねーよ。打ち方に、秘密でもあるのか？」

話しかける菊池に、間合いを計りながら廷兼朗が近づく。肋骨を折られて膝を負っている相手に、微塵も油断を見せない。

「まるで自分には、打撃など効かないとでも言いたげだ。秘密が無いと、打ち倒されるのに納得がいかないのか」

小馬鹿にしている様子を隠そうともせず、廷兼朗は漏らした。何ら遮る物のない空間では、よく通る呟きだった。

「お前だつて、ここに来るまでに少しは魔術を見知ってきただろーが。なら分かるはずだ。普通の人間など、魔術師の敵じゃない。実際、魔術が使えなくなった天草式はどうした？ 一目散に逃げちまつたじゃねーか」

菊池の言葉に、廷兼朗は汚らしいものをみるようなしかめ方をした。

何をか況んや。要するに『俺は強いから戦う前に降伏するのが当たり前だ』と言いたいらしい。

いつそ清々しいほどの口上であるが、その意図に反して何とも反抗心を刺激する内容でもある。廷兼朗は、先ほど自分の回避方法を鼻で笑われた仕返しに、これ見よがしに失笑した。

「彼我の実力差など、立ち合いとなれば瑣末事。単なる条件の差異に過ぎない。それを論い、敵の戦意を殺ぐも兵法ながら、あまりに美德を欠く」

実に静かな語り口で、廷兼朗は諭すように言う。

「僕のやっていることに、秘密などありません。『先ず身体の中心正す可し。中心崩れる時身体弱く、業自ずから速ならざりけり』」

これは武術において、正中線を意識するための言葉である。正中線とは身体を垂直に貫く線であり、人の重心のあるべき場所と言え

る。この線を正すことこそ、あらゆる武術の基本と言っても過言ではない。

武術における技は、身体を中心を正した状態でこそ、最大の効果を発揮するよう設計されている。

廷兼郎の言うように、彼の繰り出す技には魔術や超能力という類の効果は付随しておらず、単に正しき姿勢から正しき型に従い、正しく放っているに過ぎない。

だが、その正しさの追求は常軌を逸している。学園都市の科学設備を用い、鍛錬や成長で生じた骨格の歪みをマイクロメートル単位で割り出し、筋肉量や左右半身の体重の差をナノグラム単位まで算出し、そのデータを常にフィードバックさせ、鍛錬だけでなく日常の動作に取り入れ、僅かな歪みを体から取り去ってゆく。

型の追求は、構えは元より足先に掛かる体重、筋肉の緊張と弛緩の割合、咬合の仕方などに留まらず、血流やリンパ液など体液の循環、横隔膜に代表される呼吸器官の動作、他の内臓器官の自律運動まで計測し、常に開発協力者である廷兼郎に、それらの意識させた状態で行われる。

その分析は、地球上に僅かしか存在しないレアアース《希土類》やレアメタル《希少金属》を探す作業にも似ている。あるいは不純物含有率を限りなく0へと近づける純鉄の精錬とも言える。

理想としては、正中線の一致率が100%となることだが、それは理論上のことに過ぎない。だからこそ『対抗手段』が目指すのは一致率99.99999999999999%《トウエルブナイン》まで近づけた、言わば『近似正中線』と呼ぶべき代物である。

それは修練と言うより、あらゆる武術の基本をコンピュータによって算出し、導き出された理論値という枠に、人間という不定形を押し込める作業と形容すべきだろう。しかし、科学の粋を凝らしたその作業は、奇しくも廷兼郎の武術の根底を確固たるものにする作

業でもあった。

基本だけを修練することは、実戦的な技を幾つも会得することに勝るとも劣らない。中国拳法には『千招有るを恐れず、一招熟するを恐れる』という言葉がある。千の技を持つ者など恐れることは無く、たった一つの技を熟練した者こそ恐ろしい、という意味である。基本を学ぶということはあらゆる無駄を捨て去り、『絶対なる一』へと近づく作業である。『絶対なる一』に近づいてこそ、技が活かされてゆく。

「理想だな。絵に書いた餅に過ぎん。演武で人が殺せるか？」

実際の人对人の争いの最中に、基本がどうの構えがどうの立ち方がどうのと、言っていていられる訳も無い。

「そういうのを半解一知というんです。それに、理想ですって？」

魔術なんてものを嗜んでいる輩の言葉とは思えない」

「……何？」

話しながらも、廷兼郎は摺り足で斜面を降り、菊池に近づいている。

「基本とは、言わば根です。そこから派生する枝葉や花を弄いつよりも、大地に根をしっかりと生やすことのほうが大事なのは明白でしょう。魔術と言えど、それが術ならば、要訣は変わらぬと思えますが？」

突如、それを聞いた菊池が哄笑した。肋骨が折れているにも関わらず、腹の底から声を張り上げた。

「魔術師でもない只の人間に、まさか魔術のことで説教を受けるとは思わなかったぜ」

「説教などと。ただ、あなたを含めて自称魔術師の方々は、どうも魔術師じゃない人間を見下す傾向があるらしいので、その認識を改めてほしかったんです」

考えてみれば、そんなことは幾ら言葉を重ねたところで、空しい

平行線を辿るばかりだろう。

「それじゃ、ご教授賜ろうじゃないか」

「……肋骨を折ってやったのに、まだ見せると言うのか」

呆れた声を出しつつも、廷兼郎の口角は釣り上がっていた。

目の前の男を一刻も早くぶちのめして地面に這わせたいという思いと、実力のあらん限りを出し尽くしても勝てるかどうか分からない死闘を長く味わいたいという思いが、二律背反ふりかへんとなって彼を苛むこら。それが笑顔という形で、顔に表出していた。

金印を示す：七

油断無くハルバートを構えながら、菊池はそつと脇腹に手を添える。治療用術式を組み上げ、骨折箇所を施す。

それを見咎めたかのように、廷兼朗が踏み込んでくる。すぐさま治療を中断し、穂先から前方に向かって放電する。

廷兼朗のいた場所を電撃が空しく弾く。既に彼の姿は無い。

菊池は僅かな直感を頼りに、体を左に向ける。廷兼朗は電撃を避ける間に、菊池の左横へと移動していた。

彼の頭目がけて、廷兼朗は左足を振り上げている。それを見て湧き上がるのは驚きではなく、呆れに近い感情だった。

先ほどは前方から攻撃されたが、今度は側面から踏み込んできた。ここに至って、僅かだが移動距離が伸びている。

少しでも気を抜けば、背後に回り込まれるかもしれない。廷兼朗の攻勢は、一切の余裕を与えようとしない。魔術師という、常識の埒外に身を置く輩の精神を、廷兼朗の体捌きが徐々に蝕んでいく。

菊池は上体を仰け反り、上段蹴りをやり過ごす。

「けやッ！」

菊池の回避を見越して、廷兼朗は軸足を蹴って踏み込み、腰をさらに深く捻る。

蹴りを放つ動作の途中でさらに踏み込み、退く相手を追いかける蹴りは、ムエタイの高等テクニックである。

赤黒く変色した鼻頭に足先をねじ込まれ、またも菊池の鼻梁が粉砕された。その一瞬、菊池の頭は痛みに関われた。

菊池の意識が痛みで真っ白に覆われる。眼前に敵が迫っている状況で、それは致命的な隙となる。勿論、それを見越しての鼻狙いである。

左足が地面に下ろされ、蹴り足がそのまま踏み込み足となる。強く響く震脚とともに、今度は右半身が加速する。掌が、湾曲する肋骨に対して垂直に突き刺さる。

右掌底掬い打ち、右肘打、右膝蹴り、そして間合いは離れたところで左後ろ回し蹴り。それら全ての着弾箇所は、菊池の骨折した左脇腹である。

砕けた肋骨をさらに粉碎し、破片を内蔵にめり込ませて余りある四連撃である。そこで終わらず、さらに駄目押しの右鉤突きを大きく踏み込んで放つ。

ガシツ！ 廷兼郎の右腕に強い衝撃が走る。右前腕を、ハルバートの柄が押えている。

廷兼郎の背を、怖気が走り抜ける。

脇腹から昇る痛みに耐える菊池が、歯を剥きながら笑っていた。ハルバートの帯びた紫電が、接触している廷兼郎の体まで伝達する。琴弾原で食らったものと変わらず、それは体の奥の奥まで貫き通る。

筋肉が麻痺し、動けなくなった廷兼郎を差し置いて、菊池をすぐさま術式を整える。足裏に集約させた風の流れに乗って、菊池の体が舞い上がる。大気操作術式で強力な気流を瞬時に発生させ、離脱を図る。

一派の教主を務めるだけあって、菊池の使える魔術は雷撃に限られない。

大気操作術式によって逃げたように見える菊池だったが、それは見た目ほど消極的な策ではなかった。菊池は一気に十メートル近く上昇して体を入れ替え、天地を逆にしながら廷兼郎にハルバートを向けた。

上空ならば、今までのように間合いを潰すことは出来ない。近づ

けさえしなければ、圧倒的に菊池が有利である。体術で如何に勝ろうとも、何の足場もない状態で十メートルも飛び上がるなど出来はしない。それを叶えるのは、魔術只一つである。

人体の死角である頭上を取り、なおかつ相手を痺れさせたまま離れた菊池だったが、次の瞬間には顔を引きつらせていた。

電撃を食らって動けないはずの廷兼朗は、既に菊池の着地地点に向かって走り出していた。

すぐに動けるような電撃ではない。それでも廷兼郎の走りは、力強いものだった。

電撃から素早く立ち直ったのは驚きだが、間合いは離れてしまっている。廷兼朗の拳は菊池に届かない。

絶対的に有利な条件を並べ立て、己を叱咤する。恐れることはない。躊躇うこともない。ただ目の前の、魔術師でもない格闘マニア一匹に雷を落とせばいいだけだ。間違える方が難しい。一端の魔術師である自分が、それを行えないはずはない。

「終わりだ、素人ッ！！」

今度こそ到来した必勝の機に、菊池の精神が高ぶる。

既に術式は完成している。電撃が空気を爆裂させながら、山肌へと降り注ぐ。

対する廷兼朗は、登山道の途中にある石を走りながら菊池に向かって蹴り上げる。

空から降り注ぐ雷が、廷兼朗の頭頂から足先まで貫いた。そして菊池の顔面に、一抱えもある石が衝突していた。

首までもげるかと思うほどの衝撃を顔面に、それもよりにもよって潰された鼻面で受け止め、菊池の意識が寸断される。

雷に打たれる刹那、咄嗟に放たれた最後っ屁に過ぎない。倒れる

のはあいつのほうだ。自分は勝ったんだ。

激痛で混濁した頭の中には、勝利を確信する情報が火花のように爆ぜて回る。菊池は朦朧とした思考の中で、自分は勝ったと思いつ込んでしまう。

そう思いたいから、そう思っているに過ぎない。裏付けるものなど、何も無いのに。

石が弾かれて視界が開けたとき、目の前には廷兼朗がいた。

これから地面に落ちようという僅かな間、時が止まったように二人は見つめ合う。菊池はゆるゆるとハルバートを顔面までかざす。その合間を縫うように、廷兼朗の拳が菊池の顔を捉える。

着弾の音は聞こえない。そんなものよりも、頭蓋の歪む音の方が力強く鼓膜を揺さぶる。

顔面の中心、鼻梁に拳面を潜り込ませるように、手首が返るまで執拗に衝撃を捻じ込む。

致命的な威力で顔面を殴打されて吹き飛ぶ菊池は、既に意識を手放していた。

五メートルほど斜面を駆け上り、菊池の体が無造作に横たわる。その脱力の様は、立ち上がる力すら残っていないことを意味していた。

菊池が動かないのを確認してから残心を解き、拳を戻して廷兼朗は片膝をついた。今更になって、体の奥底から震えがこみ上げてきた。

非常に危険な、紙一重の勝利だった。彼らの勝負を分けたのは、

攻撃を食らう覚悟だけだった。

電撃を食らいながらも前進した廷兼朗と、石を食らって意識が飛んでしまった菊池。攻撃を覚悟していた者と、覚悟していなかった者の差が如実に表れた。

菊池と立ち合うことになった時点で、廷兼朗は電撃を食らう覚悟をとくに決めていた。菊池はここに至ってまで廷兼朗を侮り、勝利することに酔ってしまった。故に自分が何らかの攻撃を食らうことなど想定していない状態で、抗いがたい苦痛を被った。

抛り所を無くした状態で、人間が痛みには耐えられる道理はない。

そして意識が断たれた僅かな秒間に、致命的な距離まで廷兼朗の接近を許した。

急ぎ呼吸を整え、廷兼朗が立ち上がる。震える脚で何とか菊池の傍らまで寄り、彼の腰に巻かれている紫の紐をぞんざいにむしり取った。

親魏倭王の金印紫綬。全ての発端となった呪具を菊池から取り上げると、今まで満ちていた圧力のようなものがふいに和らいだ。無くなって初めて気がつくほどの、淡い気配だった。

驚いたことに、菊池はまだ生きていた。廷兼朗は確かに、殺すつもりで拳を放っていたわけではない。だがそれは、単に殺害することにと頓着していなかっただけに過ぎない。無論力の限り、精魂の限りを収斂させた、網丘に見せられないのが惜しいほどの一撃である。魔術師という人種の底知れなさに、改めて廷兼朗は身を震わせた。念のためハルバートを崖から投げ落とし、両手両足を破いた服で縛っておく。

菊池が起きても対応できるよう、彼の頭の近くに座り込む。建宮たちが気がついて戻ってくるまでの間、廷兼朗は阿蘇の夜風で体を

冷やすことになった。

信仰に殉ずる：一

「字緒！！　おーい、無事なのよな！！」

大振りなフランベルジュを担ぎ、建宮が手を振りながら上っていく。その動作は元気そうだが、服には焦げ痕や切られた傷が見え、血のにじむ箇所もある。後ろに連なる天草式のメンバーの姿もそう変わらない。

彼らは彼らで、壮絶な逃亡劇を繰り広げたのだろう。

「一人で解決しちまいやがって、おいしいところを独り占めされたのよ。全く大したもんだ！」

一人で解決したというのは、とんでもない誤解だ。真伝天草式を上手く分断させた作戦。自分との一騎打ちを望んだ菊池の気性。一般人を見下す魔術師の性癖。それらに助けられて、ようやく掴み取った勝利である。

そう言おうかと思った廷兼朗だったが、うれしそうに自分に絡んでくれる建宮や諫早を見てみると、そんなことで水を差すのが申し訳ない気持ちになってしまった。

「建宮さん。早く菊池さんに、回復魔術とやらを掛けてあげてください」

再会を喜ぶのもそこそこに、廷兼朗は建宮たちを菊池のほうへ案内した。

廷兼朗に打撃された鼻骨は粉碎し、赤く腫れ上がっている。同じく右の頬骨が砕けており、眼球が下に落ちかけていた。

そして左の脇腹はどす黒く変色し、腹部が少し盛り上がっていた。恐らくは内臓からの出血で、腹腔内に血が溜まってきているのだろう。

それでも廷兼朗は血抜きや止血を施していたのだが、そんな応急処置では焼け石に水だった。

建宮ら天草式は、手分けして菊池の治療に当たった。脇腹を切開して腹腔から血を抜く様子は外科医さながらだが、顔面骨折に関しては数人で掌を当てているだけだった。

それで治るのか？ と訝しむ廷兼朗だったが、魔術というのはそういうものなのだろう、と無理矢理に自分を納得させる。どのみち、応急処置ぐらいしか出来ない廷兼朗が口出しできる状況ではない。

「建、宮……」

意識が回復するまでになった菊池が、傍らで治療している建宮に呼びかける。

「こっぴどくやられたな、菊池。待ってる、ちゃんと治してやるのよ」

「……やめ、ろ。余計なこと、すんじゃねーよ……」

治療魔術を施していた建宮に対して、菊池は電撃を放った。呻く建宮から離れるように、菊池が頂上へ向かう。

大きな事件の終了を迎え、穏やかな雰囲気だった天草式に緊張が走る。

斜面を登る菊池の足取りは、健常者のそれではない。満身創痍と言った顔で、今にも崩れ落ちそうである。

「早く、治療を！」

フリウリスレリア海軍式船上槍を持った少女は、堪らず菊池に向かって走り寄っていた。

「来るな、五和……」

怪我人のものとは思えない、画然とした声が五和の足を止めた。

「菊池、さん……」

「俺は真伝天草式の教主だ。お前らとは袂を分かつたんだ。今更、慈悲は受けられねーよ」

菊池は振り返り、ゆっくりと首を振って天草式の全員を眺めた。

「お前らは女教皇を信じ、俺は信じなかった。これは、その信仰の

結果だ」

子供に言い含めるように、優しげな口調で語る。脇腹を痛め、顔の骨を砕かれながらこの振る舞いを可能としているのは、彼自身の魔術か、それとも精神の為せる業か。

「建宮。俺の下に居たのは、屈強な信徒ではなかった。小さくて未熟な、迷える子羊だ。俺が彼らを、無理矢理に巻き込んだ。今更頼める義理は無い。だが、奴らだけでも拾ってやってくれ」

「元よりそのつもりなのよ。菊池、お前も……」

力なく、菊池は首を振った。

「俺にそんな価値は無い。信じぬ者は、救われないんだ。宗教で身を立てる者が、それを体現しないでどうする？」

その言葉に不穏な気配を感じ取ったのか、建宮の顔が一層険しくなる。

「……駄目だ。菊池、早まるな!!」

言い継る建宮を見て、今度は力強く首を横に振るった。そんな願いを聞けない。菊池自身の信仰がそれを許さない。信じるべき女教皇を信じなかった結果は、既に出てしまっている。

信じないという信仰を遵守することこそ、菊池に残された宗教家としての矜持だった。

「建宮齋字!! 俺のように、短気を起こすな。起こさせるな。女教皇の帰りを待たない不信心者の末路を、しかと目に焼き付けておけ!!!」

「菊池、やめろ!!」

建宮の叫びも空しく、裁きは下される。

「これが、異端の死に様だ!!」

中岳の頂上を、目を潰さんばかりの輝きが包んだ。一瞬の明滅に過ぎない光が収まると、頂上はこれまで通りの静けさに戻っていた。

天草式を見下ろす形で立っていたはずの菊池は、僅かな匂いを残して、その場から消え失せていた。

鼻孔をツンと刺激する、それは人脂の焼けた匂いだった。彼は自らが放った電撃で、自分の体を跡形も無く蒸発させた。灰すらも残らない、死に様だった。

「うあああああああああああああ！！」

呆気にとられている天草式の中から、男が一人飛び出す。久那と呼ばれていた男だ。

「菊池さん、嘘だろ？ こんな、こんなのって……」

菊池が居た場所に平伏し、探すように土を掻き分ける。その滑稽な様子を笑える者は、ここにはいない。

やがてそれも無駄なことだと悟ると、放心しながら立ち上がり、背中に担いでいたポールアームを引っ掴む。

「……お前さえ、お前さえいなければッ！！」

ポールアームを掲げ、廷兼朗に向かって一直線に駆け下りる。建宮たちの心配を振り切り、申し合わせたように廷兼朗も歩み出る。

降りかかる斧刃へ向かって、自ら首を差し出すように踏み込んでゆく。そして何気ない動作で右手をふわりと挙げる。

まるで力感の伴わない右手ごと頭をかち割るはずだったポールアームが、見事に空転する。

疑似空気投げ。攻勢に出た相手を瞬時に制圧する妙技である。

会心の突きを放ったはずが、いつの間にか地面に寝そべっていることに、久那の思考は追いついていかなかった。自分を見下ろしている人間が、一切の拳措を許さないということだけ、彼は理解していた。

「まるで、茶番ですね」

朗らかに笑いながら、廷兼朗は言った。

「日本中を巻き込んで、陵墓を荒らして、国宝級の遺物を盗み、暴れるだけ暴れて、負けたら後事を敵に託して自殺。その上、逆恨みのおまけつきかよ」

「……お前に、菊池さんの何が分かる！」

気炎を吐いて怒る久那を、廷兼朗は髪を掴んで引き上げる。

「分かるとか、分からないとかいう問題じゃないだろう。あんたは、人が死を覚悟して吐いた言葉を、踏みにじっているんだぞ」

あくまで静かな声音だったが、そのよく通る低音は、久那の腹の底まで響き渡った。

「『鳥の将に死まきなんとするや、其の鳴くや哀し。人の将に死なんとするや、其の言うや喜よし』。菊池さんが何故、このような騒ぎを起こしたのか、僕は知りません。知ろうとも思いません。ただ、死を覚悟した人の言葉は尊い。それくらいは、僕にも分かります」

髪から手を離し、久那を地面に降ろす。座り込む彼と同じ視線まで、廷兼朗はしゃがみ込む。

「その遺志を受け入れることが、手向けに相応しいでしょう。違いますか、久那さんとやら」

久那は声押し殺し、静かに呻く。もう彼に敵意は無い。事態の終結を確信した廷兼朗は彼に肩を貸し、斜面を下りる。

建宮のところまで近づくと、廷兼朗は彼に金印紫綬を差し出した。「元の場所に、戻しておいていただけますか？」

「あ、ああ。もちろんなのよ」「頼みます」

大勢の天草式を伴って、廷兼朗は早々に下山した。

噴煙が風に揺れる。まるでそれは、彼らを見送る大きな手のようだった。

信仰に殉ずる：二

薄暗い部屋の中心に、ガラスの筒がぼつねんと佇んでいる。その中は、成分の知れない真っ赤な液体で満たされている。

時折、呼吸するように泡がこぼりと立ち昇る。それもそのはず。ガラスの筒の中で、人が呼吸しているのだから。

「元は天草式に所属していた魔術師を一蹴したか。想定よりも費用対効果が高いようだ」

緑色の手術衣を着ながら、液体の中を逆さに浮く人間は、ほんのり嬉しそうに呟いた。

学園都市統括理事長『人間』アレイスター・クロウリー。その見た目や声からは性別も、老若も、貴賤も伺えない。

「あれは何でありけるのよ？」

設置されている液晶モニターに、煌びやかな金髪に彩られた貴婦人が映される。

科学分野の総本山とも言うべき学園都市の、それも統括理事長に謁見の叶う人物が、そこらの町娘であるはずがない。

見た目十八歳ほどの彼女、ローラ・スチュアートが務めるのは、イギリス清教の最大教主である。現在の天草式十字凄教が所属する必要悪の教会ネセサリウスの最高責任者でもある。

「人間だ。普通の、どこにでもいる人間だ」

「それで通ると思うてか」

流暢ながらも、どこかおかしい古文調で問うてくるローラは、その苛立ちを隠そうともしない。

「あれは魔術のように、くどくどと隠すようなことはしない。見て目ありのまま、あれが全てだ。それでも分からないと言うのは、研究の程が足りないと言わざるを得ない」

教師が生徒に教えを諭すような口ぶりで、アレイスターはモニタ

ーに向けて語りかける。

それを遙か西の彼方、イギリスはロンドンの聖セントジョージ大聖堂に置いてある説教壇で受け取ったローラは、自身の不勉強を指摘された子供のようにむくれている。

「只の人間が、無手にて魔術師を倒してのける。そんな御伽おとぎ噺は、『幻想殺し《イマジンプレイカー》』で間に合っているのによ、自分で言った言葉に、ローラのほうがはっとした。

「あれは、第二の『幻想殺し』?」

「まさか。『幻想殺し』を複製などしない。あくまで擬似的に、似たような結果を生み出したにすぎん」

「『幻想殺し』を擬似的に再現して、何をしようと言いきるの?」「あれだけでは何も起こらん。今回のような事態になれば、適宜投入する。『幻想殺し』の手が空いてないときには、いつでも貸し出すぞう」

ローラは不信感も露に、その端正な顔を歪めた。彼女のことを知るシスターが見れば、思わずあどずさるであろうしかめっ面だ。

「只の人間を魔術師とぶつけて、一体何を企みけるのか?」

「単に戦闘経験を積ませているだけだ。君らはあれを使い潰せばいい」

相手の不満も不審も振り払う、高慢な言い様だった。

「……なら、せめて有効に使わせてもらいけるのよ」

画面を切る寸前にそんなことを言い捨て、ローラの映っていたモニターは回線を途絶した。

一室が暗澹たる闇に包まれ、アレイスターの姿もまた、暗い影に包まれる。

外部との交通がほぼ遮断されている学園都市には、バスで直接向かうことは出来ず、途中まで天草式に送ってもらった廷兼朗は、十数キロの道のりを徒歩で進むことになった。

自分の信仰に、文字通り身も心も捧げ尽くした菊池の姿が、目に焼きついて離れない。

廷兼朗もまた、一つのことにも身も心も捧げようとしている。『武』の一文字の探求に、生涯を捧げようと決意している。形は違えど、それもまた信仰の一つなのかもしれない。

残暑のきつい日差しの中、廷兼朗は早く着きたくて走り出していた。帰ってから網丘に伝えたいことを整理しているだけで、学園都市への道のりはあつという間に走りきってしまった。

ゲートの前では、網丘が仁王立ちして待ち構えていた。自作のスポーツドリンクを入れていたであろうベッコベコのペットボトルを持ちつつ、腕を大仰に組んでいた。

そんな網丘に向かって、廷兼朗は爽やかな笑みを浮かべながら、手まで振って走り寄った。

「いろいろと、説明してもらおうかしら？」

「はい！」

廷兼朗としても、網丘に話したいことが沢山あったので、快活に返事をした。てつきり悪びれるものと考えていた網丘は、廷兼朗の明るさを疑問に思った。

「何かあったの？」

「ええ。とても良い体験をしました」

魔術との邂逅は、思い返せばこれ以上ない実地訓練だった。魔術師のと戦闘は、廷兼朗にとって新たな発見の連続であり、技術の精練に大いに役立った。

「強くなったのね」

網丘の一言に、廷兼朗は力強く頷いた。

「はい。以前より数段」

「それなら、構わないわ」

網丘はそれ以上何も言わず、労うために肩を叩いた。色々と聞かねばならないことはあるだろうが、廷兼朗の実力を向上させる出来事であったのなら、それは網丘にとって喜ばしいことあり、それ以外のことに目くじらを立てる必要はない。

『対抗手段』計画の一助になることなら、廷兼朗の身に何が起ころうと構わない。

信仰に殉ずる…二（後書き）

第二章終了です。ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。

次は科学サイドのお話です。トーナメント編ですので、バトル展開が多くなると思います。

大霸王祭と最強の敵：一

電灯はない。月明かりのみが畳を照らす。雲間が晴れ、するすると伸びる柔い光が、足をそろりと撫でる。

今日も今日とて訓練を欠かさない廷兼郎は、道場で立禅を行っていた。

「廷兼郎、ちよつといい？」

廷兼郎の訓練は基本的に邪魔しない方針の網丘が、神妙な面持ちで道場に入ってきた。

立禅を解き、畳の上に座る。ただ事ならぬ様子に、廷兼郎も不安が募る。

「何かあつたんですか？」

正座で向き合った網丘だったが、それでも言い難そうに目を伏せていた。

あまり動じることの無い網丘が、このような態度を取る事は珍しい。

「いえ、こればかりは、廷兼郎に相談しても……」

ここまで来ておきながら、何を言ってるのだろう。と突っ込んでいては話が先に進まない気がしたので、廷兼郎は押し黙って先を促すのみだった。

「今回はかりは、字緒も勝てないかも」

「僕は超能力者《レベル5》が相手だって、立派に戦ってみせます！ 信じてください！」

「いや、そうじゃなくてね。ウチんとこの計画、切られそうなんだ。切られるとは、何を指しているのか、廷兼郎は素直に首を傾げた。

「何が？」

「予算が」

「どこの？」

「……」

「……マジで？」

「マジ」

「……そら勝てんわ」

シヨックのあまり、関西弁が飛び出した廷兼郎であった。

「宣誓！！ 我々は、スポーツマンシップに乗っ取り、正々堂々競い合うことを、ここに誓います！！」

九月十九日。能力者の祭典が始まる。総参加学生百八十万人以上となる体育祭の開会式である。

未だに厳しい残暑が残る日差しが照りつける、巨大なグラウンドの中、所狭しと学生が詰め込まれた芝生の上で、字緒廷兼朗は直立不動のまま瞑目して佇んでいた。

十五校の校長によるスピーチリレーや、各方面から寄せられた五十通の電報が続き、いい加減だれてくる生徒が大勢だったが、廷兼朗は最初から最後まで、鉄の棒でも背中中に差し込んだように、見事な姿勢を保っていた。

それは校長たちの言葉が琴線に触れたからでも、電報の内容に感動していたからでもない。これから始まる競技に向けて、内功を練っているのだ。

氣息を整え、丹田に溜めた気をゆっくりと回転させ、増幅させる。最大のパフォーマンスで身体を操作するため、入念に準備を施している。

『能力者同士の大規模干渉データ』を収集するという目的を持つ大覇星祭では、普段はとかく制限されがちな能力の使用が、大いに推奨されている。

多少の干渉制限は存在するが、あくまで一般客への被害を防ぐ意

味合いでしかない。つまり無能力の廷兼朗は、この大規模な能力者による祭典において、殆ど意味のない存在と言える。

それでも、廷兼朗の気合いは十分だった。むしろ反骨精神を刺激され、普段以上の氣息の充溢ぶりを、自身でも感じていた。

そのテンションを後押しするかのようには、彼の所属する長点上機高校は出場する競技スケジュールを予め決めておいてくれた。

それはご丁寧に、開始から終了まで出突っ張りのスケジュールが設定されていた。各競技会場の移動時間まで秒単位で計算し尽くされた、機能美さえ感じる予定だった。難とえば、移動時間以外にインターバルが設定されていないことくらいだろう。

厚生労働省に問い合わせたなら文句が来そうなお実働時間は、長点上機高校からの廷兼朗への期待度を意味している。それは単純に、競技で良い成績を納めることではない。大覇星祭の主役はあくまで能力者であり、目的も能力者のデータを取ることである。

廷兼朗が所属高校から期待されているのは、能力者のデータ収集をなるべく邪魔しない形で、長点上機高校の生徒を勝利へ導くことである。

要するに、体のいい『露払い』を任せられている訳だが、これにはのっぴきならない事情がある。

学園都市では、能力開発の企画が色々と進行している。中でも有名なのは、幻の絶対能力者《レベル6》を生み出そうとした『絶対能力進化《レベル6シフト》』だろう。

樹形図ツリーダイアグラムの設計者の使用は元より、多くの研究所と研究員が協力・提携して行われた大規模計画である。

残念ながら樹形図の設計者が、原因不明の攻撃により破壊されてしまったため、計画は無期凍結となり、その後関わっていた研究員の起こした不祥事により、完全な中止となった。

『カウンターメジャー対抗手段』計画は、はっきり言ってマイナーな計画である。その計画の中心が無能力者《レベル0》な時点で、学園都市における

計画の重要性は推して察するべきである。

当然、下りる予算はそう多くない。学費や生活費に関しては、提携している長点上機学園が持ってくれている。とはいえ、一人のモニターに対して最新機材を用意し、インストラクターを招き、能力者との模擬戦を組むのは、経費としては馬鹿にならない。

決して優遇されているとは言えない『対抗手段』計画だが、その計画への協力を条件に特待生として長点上機学園に通学している廷兼郎にとって、『対抗手段』計画の頓挫は、自分の食い扶持の消滅に直結している。

廷兼郎は、裸一貫で能力者と戦う覚悟はとうに出来ていたが、何の社会的保障のないまま、学園都市で暮らしていく自信はなかった。

世知辛い命題を突きつけられていた廷兼郎と網丘だったが、そんな彼らに、狙い済ましたようなタイミングで、ある申し出が入った。長点上機学園の執務室に呼び出された二人に与えられた依頼とは、『長点上機学園を優勝させる』というものだった。

「先生、それは、どういう……」

事態を飲み込めない二人に対して、廷兼郎の担任を務める教師は、淡々と説明してくれた。

「知っていると思うが、我が長点上機学園は大覇星祭において、優秀な成績を収めている」

「はい。去年は優勝したそうぞ」

「我が生徒たちは、第一線で活躍できる有望な人材であるため、学園の優勝は必然である。勿論、目指すは連続優勝だ」

この担任独特の話し方である。最初に正論を言ってから、むき出しの本音を切り出す。

「君にはその連続優勝を、さらに盤石なものとするために働いてもらうぞ」

「盤石とは、具体的にどのような？」

「君は、超能力者に対抗するため、非常に優れた運動能力を有して

いるが、あくまで無能力《レベル0》だ。大覇星祭においての注目度は皆無と言っている」

「まあ、能力者のための祭典ですから」

「その注目度の無さと運動能力を生かして、長点上機の生徒を勝たせるんだ」

「勝たせるということは、僕は活躍するなということでもいいのですか？」

「不満かね？」

担任の囃るような言葉に、廷兼郎は挑むような笑顔を返す。

「むしろ期待していただいていると、解釈します」

大方の話を理解した網丘が、廷兼郎の後に続く。

「ここで働きが認められれば、当然、予算の申請が通りやすくなると考えてよろしいのでしょうか？」

「勿論。働き如何では、我が学園の裁量で追加予算を付けさせていただきます」

つまり学園都市執行機関への予算申請を待たずに、予算が下りると言うことである。それを聞き、網丘が廷兼郎をぐっと見つめる。

あとは廷兼郎の返事次第だが、担任も網丘も、あえて聞かずとも明瞭に察することが出来た。

金を出すから仕事をしろ、という単純明快で余計な感情の入り込む隙間も無い依頼を、廷兼郎は快く引き受けた。

大霸王祭と最強の敵：二

能力者を立て、自分は裏方に徹しつつ長点上機を勝利へ導く。『
カウンターメジャー
対抗手段』計画の縮小・閉鎖に繋がる岐路という意味で、非常に重
要な任務である。一瞬たりとも油断は出来ない。

開会式が閉幕する。参加者以外の学生は下がり、空いたスペース
で着々と準備が進む。

まずは棒倒しからだ。火炎に電撃、氷柱に念動力と、何でもござ
れの団体競技である。

勝利は当然。求められるのは勝ち方。隠然と暗躍し、母校を勝利
させる。

とは言つものの、廷兼朗はそれほど気負っていなかった。只でさ
えエリート校の長点上機には、優秀な人材が揃っている。彼らの実
力を最大限に発揮できるよう、廷兼朗はほんの少し手助けをすれば
いい。

それに、大霸王祭最終日には廷兼朗が楽しみにしているイベント
が待っている。そのことを考えるだけでますます息が高まり、今
すぐにでも体を動かしたくて堪らなくなる。

「第七学区・高等学校部門・第一種目・棒倒し。競技開始まであと
十分三十秒です」

アドバルーンから下がるスクリーンにメッセージが映し出され、
勧告が響き渡る。白組の証である白帯を額に巻くと、自然と身が引
き締まる。

「行くつぜ、字緒」

後ろからはしんと肩を叩かれる。同じ長点上機学園の生徒で、風
ヤッシュメント
紀委員でもある荒涼阿刀次だ。（こうりやうあとうじ）強能力《レベル3》の能力者であり、
自身もレスリングを習っている。その体つきは廷兼朗より一回り大

きい。

彼は風紀委員として廷兼郎の教導を受けているため、先輩であり生徒であるという難しい関係だが、気さくに廷兼郎のことを慕ってくれている数少ない友人の一人だ。

「お前が本気出せば、ウチの首位は揺るがないだろ。頼むぞ」

荒涼が太い笑いを見せると、廷兼郎はそれを受け流すような淡い笑顔で返した。

「大覇星祭の主役は、荒涼さんみたいな能力者ですよ。無能力《レベル0》の僕はお呼びじゃない」

「ああ。そっぴやお前、カリキュラムも受けてないんだってな」

廷兼郎は参加している計画柄、能力開発カリキュラムを受講していない。

素手による能力者の制圧を掲げる『対抗手段』計画のモニターの条件の一つに、『無能力者《レベル0》』であり、以前に能力開発を受けていない者』というのが挙げられている。

対能力者戦闘術の研究・開発をするにあたって、能力使用を前提とした戦闘術は、当たり前ながら普通の人間には行なえない。それでは汎用性に問題があるため、モニターは無能力者《レベル0》であることが望ましい。そう言った意味で、以前には学園都市外で暮らしていた廷兼郎は、適任であると言える。

「これからカリキュラムを受ければ、お前でも超能力が身に付くんじゃないか？」

「ははっ。そうですね。可能性はあります。可能性はね……」

軽口で答えたものの、廷兼郎は毛ほどもそんなことを思っていないかった。

廷兼郎は一度、長点上機学園への入学が決まった日、システムスキャン身体検査を受けていた。

結果は勿論無能力《レベル0》。その報告は廷兼郎にとって何ら驚きではなく、素直な気持ちで受け止めた。

元より自分に、超能力など備わっているはずはない。そんな才能らしきものは、生まれたときから根こそぎ取られてしまっている。

「まあ、要はお祭りですからね。僕みたいな普通人は、怪我無く過ごせれば重畳じゅうじょうです」

「どの口が言うんだか。相手はスポーツエリート校だと。あんまり凹くぼませるなよ」

「僕はスポーツマンじゃない。どちらかと言えば、武術家ですからね」

軽口を叩いている間に、棒倒しの競技が開始する。

開始直後からのみくちなやな膠着状態を見て、思いつき飛び蹴りをかましたい衝動に駆られた廷兼郎だったが、あまりに目立ちすぎるのでさすがに自制した。

「はいはい。ちよろくと通りますよ、すいませんね」

言うに早いか、蛇のような身のこなしで味方の人ばかりを泳ぐ廷兼郎は、すぐに棒に触れられるほどの最奥部までたどり着いた。

そして両掌を宛がうと、軽く前足を上げ、短く息を吐く。

七メートルの棒が、一メートルほどズレた。問答無用で迫る棒に押しされ、敵陣営が崩れる。既に棒を支えられる状態ではなくなった。

その後は取り付いていた長点上機生徒の重みを受けて、棒は横倒しになった。

震脚の音は、能力者が放つ攻撃に紛れるので気にしないでもいい。多くの人を取り付いた七メートルの棒を弾くという所行も、念動力テレキネシスの仕業と思われたことだろう。

廷兼朗が棒の倒壊を確認した時点で、競技の終了を知らせるアナウンスが流れた。長点上機高校の完封勝ちである。

相手校が一樣に頂垂れる中を、長点上機の生徒は特に感慨もなく撤収する。昨年に続いて学校部門首位を目指しているのだから、初戦ならばこんなものだろうと、皆喜ぶことすらしない。それが却って相手校の気持ちを貶める。

廷兼朗にも次の仕事控えているので、一喜一憂している場合ではない。用意していた細長い棒を携え、彼は長点上機の陣営に走る。

「字緒、何してんだ？」

廷兼朗の姿を見つけ、荒涼が近づいてくる。

「あ、荒涼さん。早く並んで並んで！」

「だから、それ何？」

廷兼朗は長い棒を持って、何やら長点上機の生徒にストレッチを施しているようだ。よく見れば彼の他にも、スポーツトレーナーのような人間が同じようなことをしている。

「スタビライゼーションです。ただのストレッチじゃないですよ」
スタビライゼーションとは、複数の筋肉を同時に収縮させ、筋肉のバランスを整え、姿勢を正す訓練である。人間の体は疲労や筋肉痛などで背骨などが曲がり、正中線が歪んでしまう。それを整え、肉体的な疲労や筋肉痛を治し、ストレスの解消にも効果を持ち、さらに高いパフォーマンスを引き出すことの出来るトレーニングである。

廷兼朗は淀みなく講釈を垂れながら、真っ直ぐの棒を使って、荒涼の姿勢の歪みを客観的に捉えて正している。

「それは分かったけど、何でお前がやってるの？」

「トレーナーの人だけじゃ、手が足りないんですって。それにこの訓練、僕は毎日やってますから。あ、腰はもつと右にずらして、そう、その辺りです。首までぴったりと棒に貼り付けるような感じで」

正中線を整える訓練を徹底している廷兼朗にとって、他人の正中

線を整えることなど朝飯前だ。ある意味でこれも、点数稼ぎの一環と言える。

次の競技に備え、本職のトレーナーに混じって生徒の体調管理も行う。そのための知識も『対抗手段』計画で得たものであれば、計画自体の評価となるのは自明の理だ。

「やばッ！ もうこんな時間！？ ああ忙しい忙しい！」

荒涼のスタビライゼーションを終えると、わざとらしく携帯の画面を見て慌てだし、廷兼朗は棒に鞘を括り付け、逃げるように会場を後にした。

今度の競技は借り物競走。ライバル校の常盤台も出場している以上、長点上機としてはぜひとも勝っておきたい競技だ。

とは言つものの、やはり廷兼朗自身にはこの競技で勝利する意図はない。

相手に気取られぬよう黒目を動かさず、出場選手の顔を見渡す。

廷兼朗以外で、長点上機から出場するのは三人。そのいずれとも面識はない。間違つても面が割れることはないだろう。

こちらはどの生徒がどの競技に出るのか、独自のルートから情報を仕入れている。顔どころかパーソナルデータまで把握済みである。借り物を書いた紙を受け取り、開始線に並ぶ。長点上機の生徒の後ろに忍び寄り、さりげなく借り物の内容を覗く。

廷兼朗が三人のそれを確認し終わると、競技開始のアナウンスが掛かった。

皆が一斉に会場を飛び出し、学区内へと向かう。

出遅れてしまった廷兼朗だったが、慌てる様子は無い。

「さてと、必殺仕事人の時間だ」

愉快そうに呟き、一足遅れる形で、廷兼朗は雑踏の中に身を投じ

た。

大覇星祭と最強の敵：三

襟原折江えりはらおりえは、借り物が書いてある紙を握りしめ、おろおろと人だかりの中で視線を泳がせていた。

彼女が渡された紙には、『アスコットタイ』とだけ書かれていた。『アスコットタイ』とは、スカーフのように幅広な生地をした男性の昼間正装用ネクタイである。

その由来は、ロンドンのウィンザー城に近いアスコット村で開かれる競馬大会において、貴族たちはこの幅広のネクタイを着けて観戦していたことに端を発する。

美術分野の才能を買われて長点上機に入学した襟原は、『アスコットタイ』を見てすぐに思い至ったが、それ故に半ばこの競技を投げていた。

今時『アスコットタイ』を身につけている人を見つけるのは至難の業だ。

確かに今は大覇星祭という、ある意味でお祝いの場である。自分の子供の雄姿を見るために、もしかしたら正装をしてくる父兄もあるかもしれない。

だが、『アスコットタイ』自体、今時の人には人気が無いし、三十代でもきちんと身につけている人は珍しい。

「はあ。何で『アスコットタイ』なのよ。学生に対する課題にしては、マニアック過ぎないかしら」

このまま腐っけていても仕方が無い。今度は第八学区に向かってみよう。

そう思いながら待つ信号は、いつもより長く感じる。

「動くな」

ぱたぱたと交差点で足踏みしていると、冷やかな声音で静かに話しかけられた。背中に走る冷気と、有無を言わさぬ声で自然に体

が固まる。

「だ、誰？」

襟原の問いに、後ろの気配は答えない。

「喫茶店の辺りを見る」

「喫茶店って……、ッ！！」

そこには借り物として指定された『アスコットタイ』を身につけた男性が、優雅にコーヒーを嗜んでいた。

「奴を連れて、会場へ向かえ」

「だから、あんた誰よ！？」

思い切って後ろを向くと、そこには誰もいない。通り過ぎる人の波だけが流れてゆく。先ほどまで背後にあった気配は、もの見事にかき消えていた。

「え？ あれ？ 何なのよ、一体？」

信号が青になったが、得体の知れない恐怖で足が竦み、しばらくその場に立ち尽くしていた。

その調子で長点上機の生徒に、こっそり優しく借り物の場所を教えてあげた廷兼朗だったが、競技の結果は常盤台の一位で終了した。それもなんと一位の選手は、超能力者《レベル5》の御坂美琴嬢であった。二位に七分以上の差を付けての勝利だったので、これは盤石と言う他ない。

さすがに超能力《レベル5》には勝てなかったか。廷兼朗は自分の見識の甘さに齒噛みした。廷兼朗がサポートした生徒たちが、何故か戦々恐々としながら競技を続けるようなことがなければ、あるいは一矢報いることが出来たかもしれない。

より綿密に計画を練り直す必要があるようだ。もちろん搦め手で

干渉数値で能力を制限されているとはいえ、学園都市最強を相手取るのは、得策ではないかもしれない。

「将を射んとせばまず馬を射よ、ということか」

周りから切り崩すのが順当か。幸いに貴重な大能力《レベル4》の一人である白井黒子は怪我で参加していない。つまり戦力が万全ではなく、廷兼朗の知り合いは、常盤台には白井と御坂しかない。それに御坂との面識は一度だけである。

これは大きなアドバンテージである。自分の正体が相手に分からないのだから。こっぴつ状況でこそ、『カウンターメジャー対抗手段』の隠密性が最大限に発揮される。

不敵な笑みを浮かべながら予定表を確認する。次は男子五百メートル走である。

能力を使わず、武器も使わず、その痕跡を残さず長点上機に有利な状況を作り出す。ここからが『対抗手段』の本領だ。

今度の競技場へは、バスに乗るのが一番早いと予定表に書いてあったので、廷兼郎はその案内どおりの停留所へ向かった。

一分一秒の狂い無く、バスが停留所に入ってくる。スタビライゼイションに使う棒をぶつけぬよう気を付け、廷兼郎はバスに乗り込んだ。

「ひょー、すつずしー」

急に体を冷やすのは良くないとはいえ、この炎天下が少しでも和らぐとあっては、緊張を解かずにはいられない。

廷兼郎以外に乗客は無く、車内は広々としている。

「いやあ、今日も暑いですね」

運転席に話しかけるが、何の返事も返ってこない。乗客は廷兼郎一人なのだから、世間話くらい興じてもよさそうなものである。

感じ悪いなあ、と首を伸ばした廷兼郎が運転席を覗くと、そこには彼の想像を大いに上回る出来事が起きていた。

ハンドルが、レバーが、シフトが、ひとりでに動いている。運転席に、人の姿は影も形も見えない。

一般客でこつた返す大通りを走るバスの中から、廷兼郎の「ヒヤ〜〜〜」という間の抜けた叫び声が出た。

白井黒子という女生徒がいる。

普段からお嬢様然とし、それを体現している女の子だが、そんな彼女でも落ち着きの仮面を脱ぎ捨て、感情の赴くままに身を委ねることがある。

それは、同じ空間移動能力者と戦い、体中包帯だらけにされるほどの傷を負ったときでも、友人に涼しい病院内から連れ出され、スポーツカーな車椅子に乗せられているときでもない。

それは、憧れの御坂美琴お姉様が、借り物競争において見事一位に輝いた雄姿を大スクリーンで拝んだときであり、何故かその隣にいる男子生徒と手を握って会場まで走ってきて、男子生徒の体を自分のスポーツタオルで拭き、あまつさえスポーツドリンクを男子生徒に飲ませている様子を大スクリーンで見せ付けられたときである。

「こうなったら、風紀委員がジャッジメントしてやるうじやありませんの！ 被告、間男！ 判決、死刑、死刑、死刑！ 死んだ間男だけがいい間男ですよ！」

「落ち着いて白井さん！ 間男も何も、御坂さんと白井さんはまだ始まっていませんから！」

道端でギヤアギヤアと騒いでいる二人を、通行人はあくまで女学生同士の戯れと判断し、生暖かな目で見守っていた。

「ア、アヒイイ！ ウヒ、ヒヤアアア！？」

そんな二人のところへ素っ頓狂な悲鳴を上げて、男が一人、バスの出口から転び出た。

短く刈り上げた頭をしたその男は、二人の同僚だった。

「あ、字緒さん」

廷兼郎の只ならぬ様子に、二人のほうが無気に取られてしまった。「う、初春さん！？ 違うんですよ、全然違うんですよ？ 全くそういう意図はなくてですね？」

何かを取り繕っていることだけしか伝わらないジエスチャーで慌て出すが、先ほどの悲鳴と同じく声が震えていた。

「まだ何も言ってますわよ」

「白井さん！？ 出歩いて良いんですか？ 大怪我したって聞いてましたけど」

「病院の中ばかりだと滅入ると思って、私が連れ出したんです」

「そうですか。たまにはいいでしょうね。でも人が多いから、気をつけてくださいよ」

「それで廷兼さん、何を慌ててらしたんですの？」

「もしかして、何か事件ですか？」

「え！？」

びしりと音を立てるような、見事な硬直ぶりだった。この辺りは身体操作に長けた廷兼朗ならではのである。

「いやまあ、事件と言えば事件、かなあ？」

「バスの中に運転手が居なかった、とかは無しにしてくださいませ」

「ぎゃふん」

「……別に車椅子に座ってても、空間移動は出来ますのよ？」

「待つて待つて待つて！！ てか怪我人なのに何で金属矢仕込んでるんですか！？ しかも体内に転送する気満々じゃないですか！！」

矢継ぎ早に空間移動で繰り出される金属矢を、廷兼郎はあれよあれよと避けながら携帯で時刻を確認すると、素っ頓狂な声を上げた。

「はッ!? もう次の競技が始まってしまっ! それでは失敬!」
服に何本かの金属矢を括り付けたまま、廷兼朗は全速力でその場を離脱した。

「字緒さん、忙しいみたいですね」

「ぐぬう。手負いでなければ仕留めていたはずですよ」

「いいじゃないですか。代わりに服と鞆に当たってましたから」

会場に着いた後、廷兼朗は毬栗のようになっていて鞆を見て身悶える羽目になった。

白井が刺していった金属矢を取り除いて、通気性と透明性を格段に向上させた鞆から、難を逃れた白八チマキを取り出す。

次の競技は大玉転がし。

全面をアスファルトで舗装してある校庭は、あまり広いとはいえない。合戦を前にした武士のように、大玉を挟んだ両端に能力者たちがいざなりと立ち並んでいる。

計五十個にもものぼる大玉を、先に半数以上を相手の陣地へ入れたほうが勝ちである。

二メートル近い直径の大玉に手を添え、廷兼朗は呼吸を整えている。

この大玉を押ししていけば、校庭の中ほどで相手とすれ違うことになる。この競技の要は、そのすれ違う瞬間に敵の大玉を妨害し、自分の大玉を如何にして無事に通すことに掛かっている。

試合開始のホイッスルが鳴り渡り、皆が勢いよく大玉を転がす。怪しまれない程度に大玉に手を添えて、廷兼朗も出発する。

いよいよ敵が近づく。大きな玉がごろごろと目の前に迫ったと思ったら、次の瞬間には盛大にぶつかった。

(今！)

周囲の注意が逸れた瞬間を、廷兼郎は見逃さなかった。

大玉と大玉の隙間。試合観測カメラにも決して映らぬ角度へ、廷兼郎は滑り込む。

そして乱戦ならではの死角に潜み、一人、また一人と、的確にツボを突いてゆく。

親指で丁寧な膝の『足陽関』、太ももの『中流』^{くわい}、肘の尺骨神経などを突付き、あるいは軽く押しつぶす。

文字通り寸分の狂いも許されない、精緻を極める作業である。

突かれたのを感じたころには、既に廷兼郎の姿は無い。そして自分でも気付かず、体は変調を訴える。

勝手に膝が抜け、腰が落ち、肘から先が震える。とても大玉を押しせる状態ではなくなり、敵の動きは目に見えて鈍ってゆく。

その間に長点上機の大玉は、笑えるほど簡単に敵の陣地へ放り込まれてゆく。

父母の暖かな応援が疎らになってきたころ、ようやく終了のホイッスルが鳴った。

二十五対八で、長点上機学園の圧勝だった。

一事が万事。そんな調子で、廷兼郎は長点上機を優勝に導くため、あらゆる競技に参加しては他校の生徒にちよっかいを出し続けた。

最終日のお楽しみ：一

「ぼけ〜〜〜」

九月二十五日。大覇星祭最終日。廷兼郎は出店の並ぶ公園の木陰で阿呆のように、というか阿呆そのものの体で口を半開きにしたまま座り込んでいた。

武人にあるまじき姿だが、一週間続いた『長点上機学園連続優勝 確実化作戦』への従事がようやく終わり、思わず油断してしまっていた。

未だ昼前で、競技もいくつが残っているが、ライバルである常盤台中学校を大きく引き離し、すでに学校部門での長点上機学園の優勝はほぼ決定していた。

廷兼郎の仕事は、もう片付いた。ここからは完全なプライベートというわけにいかないが、とてもとても楽しいことが起こるのは間違いない。

胸のポケットからチラシを取り出すと、それまで開いていた口がきりりと締まり、背筋もすくつと直された。

上半身裸の男たちがひしめくごつい表紙のなかには、廷兼郎の姿も混じっていた。

G 1トーナメント。学園都市最強決定戦を謳い文句としているワンデイトーナメントである。本人の了承と学校からの推薦を受けた一六名の選手によって競われる。

眼球、金的への攻撃と噛みつきを禁止し、それ以外は何をやっても良い。一見危険なルールだが、そもそも大覇星祭では百人単位の能力者がぶつかり合う祭典である。この程度は危険のうちにも入らない。

それでも、数人の『衝撃拡散』ショックアブソーバーなどの能力者によって観客席と試合場を防護するなどの対策を取っている。

残念ながらG 1トーナメントは、大覇星祭の得点とは関わりのないレクリエーションイベントであるため、あまり認知さらわれておれず、選手層も厚くない。

廷兼郎が無能力者にも関わらず、長点上機学園からの推薦を貰えたのも、単に推薦枠が余っていただけのことである。

しかし、却ってその知名度の低さがアングラの人気に拍車を掛け、特別に開放された第二学区の訓練ホールは異様な盛り上がりを見せていた。

『やっぱり』スーパーソニック井上で決まりだろ』

『いやいや、今年こそ荒涼がやってくれるぜ』

『二人とも分かってないね』アイシクルオナー絶対低温』なら、誰が敵でも関係ないんだよ』

などという超能力格闘談義が至るところで展開されていた。

そんなむさい男ばかりの空間に、無駄にスポーティなデザインの車椅子が入ってくる。その上に乗っているのも、それを押しているのも、まだあどけなさの残る少女である。

「何か面白そうですね」

初春飾利は興味津々といった様子で、車椅子に乗っている同僚の白井黒子に話しかける。

「こんな大会があつたなんて、初めて知りましたわ」

たまたま風紀委員の仕事に余裕のあつた二人は、廷兼郎が前々から「僕、今度トーナメントに出るんですよ。チケットはけないとフアイトマネーもらえないんで買ってください！ ホントお願いします！ 絶対面白いですから！ 安くしときますから！」と必死になつて風紀委員の同僚たちに売り込んでいた『G 1トーナメント』ジャツジメントなる大会の観戦にきていた。

何でも学園都市最強を決めるといふ大会らしく、能力者同士のガ

チンコバトルが学割でリーズナブルに見られるとして、一部の格闘ファンに大人気らしい。

「ハア……。私、このように野蛮な見世物は、正直好みではありませんの」

「まゝたまた。白井さん、そういう振りはいいりませんから」

「いえ、別に振りとかではありませんのよ」

「そんなこといって、体調が良かったら自分が出たかったんでしょ？」

「それは私ではなく、お姉様に言うべきことですわよ」

とは言うものの、この大会の存在を御坂に知らせる気は、白井には毛ほども無い。むしろ知られてはいけないと考えていた。

何故ならこの大会には、廷兼郎が出場している。

「おい」

あの二人を会わせてはいけない。それも戦うことが肯定されているような場では、絶対に同じ空間に置いてはいけない。

「おいこら」

美琴の好戦的な性格では、廷兼郎に焚きつけられるのが目に見える。そして廷兼郎は、対能力者戦闘術の研究者である。その彼が、超能力《レベル5》という格好の研究材料を前にして、以前のように大人しくしている保証は無い。

「聞けっつてんだこらあ！」

少女の憂いが、野卑な叫びによって妨げられた。

いつの間にも集まってきたのか、いかにも不良然とした若者たちが白井たちを取り囲んでいる。

「白井さんの知り合いですか？」

「いいえ。全く記憶にございませんの」

「んだと！？ こちとらてめえに捕まっただよ。あんときの借り、きっちり返してやるぜ」

「きやあっ！？」

男は初春の手を引つつかみ、男はぎらりと白井を見下ろす。

「妙な動きすんなよ」

いかにもか弱そうな友人を人質に、男は白井の動きを牽制する。

「卑怯ですわよ！」

「能力者自体、卑怯の塊みてえなもんだろつが。これくらいしたってバチはあたんねえよ」

「へえ。そういうもんかね？」

男の言葉に、鷹揚な老人の声が応じた。

皆が注目するなか、その視線を気にもせず、杖を突き突き、不良たちの中心へ歩み寄る。

「かあ。学園都市ちゃ、こつたなおつかないとこだったんか」

「何だ？ じいさん、どかねえと怪我するぜ」

不良の一人が老人の肩を掴み、力任せに引つ張る。

「そうかい、それは嫌だのう。怖い、怖い」

老人が淡々と呟きながら、すつと肩の力を抜くと、肩を掴んでいた若者は、老人の方を支点にしてくるりと宙を舞った。

「ごはッ」

自身の身長とそう変わらない高さから落ち、まともに呼吸が出来ないのか、口をパクパクと動かして呻いている。

「正当防衛じゃ。すまんのう、あんちゃん」

そうは言いつつも、特に気にしていない様子で彼をまたぎ、老人は白井の車椅子を押さえている若者に杖を突きつけた。

「ほれ、離さんかい」

「関係ねえだろ。じじいは引つ込んでろ！」

「いちいち関係が無いと、おまんは何も出来んとか？ 赤子に勝る受身だのう」

「んだと！？ このじじ……」

威嚇の言葉が半端なところで止まる。

首にぐるりと巻かれた腕は、彼が言葉を言い終わる前に、意識を脳の外へ締め出していた。

若者がぐらりと倒れると、そこには廷兼郎が敵つい顔をして立っていた。

「字緒さん！」

叫んだ初春を見、取り囲まれている白井を見、最後に老人と目を合わせる。

何に呆れたのか、「はあ……」と重たいため息を吐き、もう一度不良たちを睨みつける。

「風紀委員に絡むとは、豪気じゃないか。元気が余っているのなら、俺が相手になるうか？」

挑むような台詞に、不良たちも黙っていられず反応する。とは言うものの、いきなり飛びかかる勇氣は無く、体を廷兼郎の方に向けただけだった。

「次から次へと……。何なんだよてめえは！！」

「おい。こいつG 1に出る、字緒とかいう奴だ」

「能力者かよッ」

吐き捨てるように、中心人物らしき若者が言う。

「ちがえよ。こいつ、無能力者だぜ」

「無能力なのに、G 1に出るのかよ。ばっかじゃ」

「悪いかい？」

笑い声が上がろうとしたのを、廷兼郎は一瞬にして沈ませた。それは彼が敵かな低音の声をしているからではなく、台詞を言ったときには既に不良たちの中心、白井のすぐ横に出現したからだだった。

「無能力で悪いかって、聞いてるんだよ」

周りの誰とも無く語りかける。この中の誰一人、先ほどの廷兼郎の接近を察知出来てはいなかった。

ますます固く身構える不良に対し、今度はふっと顔を和らげ、寿ぐように見回した。

「ここに来たってことは、G 1を見にきたんだろ？俺も出るから、楽しんでいってくれよ」

そう言っつて、廷兼郎は白井の車椅子を押し、初春を掴んでいる手を離し、そそくさと会場に入っつていった。

不良たちは虚を突かれたまま、呆然と立ち尽くすほか無かつた。

最終日のお楽しみ：二

何だか白井黒子と一緒にいると、ろくな目に出くわさないということに気が付き始めた廷兼郎だったが、それを本人に面と向かって言う勇氣は無かったので、やはり喉の奥へと飲み込んだ。

「鍊公先生、来られていたのなら連絡くらい下さいよ」

先ほど白井たちを助けた老人に向かって、廷兼郎は少しだけ責めるようなことを言った。

その老人は、名を鍊公三國ねんこうみくにと言う。大鍊流合気柔術の師範を務める武術家である。廷兼郎は先ごろに行なわれた出稽古で、鍊公老人に手解きを受けている。

「お前さんの活躍を見ようと思つての。揚連よつれんさんに頼んだんじゃ。んで街ん中さぶらりしちよつたら、面白そうなこつただやつとう。しかもお前さんも出るつち聞いたき。こりゃ師匠として見んわけにはいかんちゃ」

聞いたところによると、鍊公老人は北海道の出身らしいが、明らかに北海道以外のものも混じつた方言は、本当に日本の生まれかどうかさえ怪しく思えてくる。

「このお爺さん、廷兼さんのお知り合いでしたのね」

「はい。この間の出稽古で、柔術の指導をしてもらいました」

そう言うと、白井は眼を丸くして驚いた。

「廷兼さんも、人から教わるんですのね」

「ほえ？ 何で？ 教わるのなんて、当たり前じゃないですか？」

「だって廷兼さん、風紀委員の教導訓練を指導なさっているではありませんか」

しばらくクエスチョンマークを頭に抱えていた廷兼郎だったが、その言葉の意味するところを自分なりに解釈して、何故だが急に落

ち込み始めた。

「ああ。まだ人から教わっているような奴が、教導の仕事なんかするなっでことですか……。ええ、自分でも分かってるんですよ。まだ早いって。そりゃ高一ですからね、未熟なのは当たり前じゃないですか。でも、仕事だからそんなこと言っちゃられないですよね。やめたら、長点上機からの奨学金も切られちゃうし。だから今ある手札で、何とかやりくりするしかないんですね。でもそれじゃ、限界来るの目に見えてるんだよなあ……」

聞き取れるか取れないかの小声で、廷兼郎は呪詛のように呟いていた。

白井はただ、いつも教導で柔術や捕縛術を覚えてくれる廷兼郎が、さらに人から教わっているという様子が想像できなくて、素直に驚いただけだったが、期せずして廷兼郎の精神はダウンーに入ってしまったらしい。

いちいちフォローを入れるのもだるいので、白井は廷兼郎を放っておいて自由席のゾーンへと向かった。

「あの、白井さんに初春さん。錬公先生のこと、お願いできませんか」

早速立ち直った廷兼郎は、そんなことを二人に頼み込んできた。

「錬公先生は、学園都市に来るの初めてなんです。二人が付いていてももらえると、とても助かるのですが……」

「わたくし、本当なら病院で休んでいるはずですよ」

「そこを何とか。お願いしますよ。ザバスのミルク味プロテインおごりますから！ ココアパウダーを混ぜるとめっちゃ旨いですよ！」

その台詞の後、十秒ほど沈黙が漂ったのは言うまでも無い。

「うわあ。ある意味流石です、字緒さん」

「え？ 違った？ そういっうんじゃないんですか？」

「……廷兼さんがわたくしをどう思ってるのか、問い質す必要があるみたいですね」

「そ、そんな、白井さんのことをどう思ってるかだなんて……。言えるわけないじゃないですガハッ！」

無駄にしなを作って頬を赤らめる高校一年生の頭に自由席を一つ落とすことで、とりあえず白井は手打ちにした。

「仕方ありませんわね。一般来場者の案内も、ジャケット風紀委員の立派な業務ですから」

「僕の頭に座席を落とすのも、業務なんですか……」

「女性にプロテインを勧めるうつけを可及的速やかに制圧するのも、立派な業務ですわ」

席に向かう三人を見送り、廷兼郎は試合の準備のために、控え室へと向かった。

控え室には、既に他の選手が入っていた。皆一人ではなく、それぞれ知り合いの人間を連れてきていた。恐らくコーチかセコンドなのだろう。

部屋の隅にスペースを見つけた廷兼郎は、穴だらけのバッグを置いて道着に着替え、手足にテーピングを施した。

入念にストレッチをしながら体の調子を探る。調子は悪くない。ここ数日の競技で多少は消耗しているが、まだまだ体力は残っている。

何気なく周囲に目を向けると、コーチに手伝ってもらいながらストレッチする者や、シャドーで軽く流している者もいる。学園都市最強を決めると言うには小規模な大会だろうが、皆気合いの乗りは十分のようだ。大覇星祭の得点にもならない大会に望んで出るくらいなのだから、相当腕に自信のある連中が集まっているのだろう。

「だははッ！ できー、そいつが言うにはよー」

（ああいう人って、どこにでもいるよなー）

試合に向けて精神を集中させるはずの控え室に、大きな笑い声が

響く。

努めて無視していると、声の主はこれ見よがしに廷兼朗のことを話題にし始めた。

「そついやこの大会、無能力者《レベル0》も出てるらしいぜ。マジ勘違いしすぎじゃね？ 無能な奴が来ていい場所じゃねえつづの。ぎやはは！」

聞き流して、廷兼朗はシャドーを始めた。軽く体を温め、感触を確かめる程度に止めておく。

「てかさ、学園都市最強とか言ってるけどよお、超能力者《レベル5》出てないんだよな。おかしくね？ 優勝しても別に最強じゃないんじゃ、マジ意味ねえよこの大会」

折角試合に向けて集中している心に、水を差すようなことをズケズケと言う。

「あゝあ。こんな大会で勝っても嬉しくねえけどよ。超能力者《レベル5》が出ねえんじゃ、俺が優勝って決まったもんだよな。無能力者《レベル0》なんかと当たったら、間違っつて殺しちまうかもしねえけど。ぎやはは！」

（ああ。もう、駄目かも……）
精神修行も怠らずにいた廷兼朗だったが、もはや我慢の限界だった。

「おい、その」
自分の至らなさを痛感しつつ、廷兼朗は声の主の前に仁王立ちした。

最終日のお楽しみ：三

「何だ、てめえは？」

「あなたに殺されるかもしれない、無能力者《レベル0》だよ。どう殺してくれるのか、一つ見せてくれないか？」

他の選手に迷惑を掛けぬよう、抑えた声で問いかけた。『殺されるかもしれない』と言いつつ、殺気を宿らせているのは廷兼朗のほうだった。

廷兼朗の気迫に見下ろされた相手は、座ったまま居竦んでいた。

「あなたがさつき言ってたことは、皆承知している。それでも自分の強さを試したい、強い相手と戦いたいと思う人が、ここには来ているんだ。それを馬鹿にする暇があるなら、管を巻いてないで、とっとと出て行けばいいだろう」

G-1トーナメントには、これといった出場制限は存在しない。

学園都市の学校に所属している健康な生徒ならば、年齢、性別、体重さえも問われない。ただ、その能力レベルのみが制限されている。

能力レベル5の生徒は、その出場を禁止している。あくまでG-1トーナメントは学生や一般の観客に、能力を使用した一対一の戦いを楽しんでもらうのが目的である。その中に超能力《レベル5》が出場した場合、同じ超能力《レベル5》でない限りはあまりにも実力に差が生じるため、観客が楽しめる試合展開にならないとの判断から、大能力《レベル4》から無能力《レベル0》の生徒に出場が限られている。

例え超能力者《レベル5》が出ていなくとも、自分の力を試したい、確かめたい、高めたいと思っている人間だけが、G-1トーナメントには出場している。

「……んだと！ 調子ノんなよ、無能力者《レベル0》のくせにッ！」

廷兼朗の注意に、逆上した相手が立ち上がり、太い右腕でがしり

と道着の胸襟を取る。

一七五センチの廷兼朗が見下ろされている。一八〇センチと少しと言ったところだろう。よくビルドアップされ、全体的に大きな体をしている。ウェイトトレーニングで鍛えたのだろう。特に大胸筋と上腕二頭筋の発達が著しい。

「どうした？ ビビってんのか？」

胸倉を掴んでいる相手は、それだけで勝った気になっているようで、それ以上の動きを見せない。

胸倉を掴むという行為は、一見して掴んでいるほうの有利に見えるが、冷静に見れば、捕まれている方は両手が自由に動かせるのに対し、掴んでいる方は既に腕が塞がった状態となる。捕まれている方は両手で攻撃してもよし、掴んでいる方は胸倉から崩しに掛かってもよしと、あくまで対等な状態だ。

折角胸襟をくれてやったのに、崩しさえ行わないので、仕方なく廷兼朗は相手の右手にひたりと手を当て、左足を退きながら逆に捻り上げた。

右腕を引き込まれてつんのめった相手の足を払い、手首に加えて肘関節も極めて地面に倒す。

だいらんりゅうあいきじゆつじゆつまるびえんま
大錬流合気柔術の転閻魔である。似たような技法は他の流派にも見られるため、そう珍しい動作ではない。

「いでででッ！ この、やめるッ！！」

藻掻いている相手の右脇に左手を通して引き上げ、言われたとおりすくつと立ち上がらせる。

驚くほどあっさり解放され、呆けている相手に向かって、何も言わずに笑いかけた。

「てめえ、ふざけんなッ！！」

廷兼朗の笑顔をどう受け取ったのか、今度はタックルを仕掛けてくる。僅かに腰を落とし、それに備える。

そのとき、廷兼朗と相手との間に何かが入り込んだ。鋭い風切り音が上がり、タツクルの体勢に入っていた相手は、突然勢いを無くしてその場に倒れ込んだ。

自分の攻撃ではない何かの存在を受け、廷兼朗がその場から素早く飛び退く。

「あ……、あ？」

何故自分が倒れているのか、分からない相手に対して歩み寄る人がいた。悠然と傍らにしゃがみ、耳元で囁く。

「ここは、無能力者《レベル0》が来ちゃいけない場所じゃない。そして残念ながら、学園都市最強を決める場所でもない。彼の言うとおり、自分自身の強さを試す場所だ。出たくないのなら、出なくてもいい。出場はあくまで自己推薦だからな」

先ほどの攻撃の主であろう彼は、相手の額に拳を押しつけた。

「それとも、試合に出られない体になりたいなら、また大声を上げればいい」

「……ッ！　よ、余計なお世話だ……」

尻すぼみな捨て台詞を吐きつつ、相手は定まらない足でふらふらと自分のスペースへと帰って行った。

それを見届けると、彼も自分のスペースへと戻っていった。

「あ、あの！　助けていた দিয়ে、ありがとうございます」

戻ってしまうところを呼び止め、廷兼朗は礼を述べた。自分一人に対処出来た事態とは言え、助けてもらった以上は、しっかり伝えることは伝えねばいけない。

「気にしないでくれ。字緒くん」

「僕の名前、よくご存じで」

「そんなのパンフに載ってるから、知ってるのは当たり前だよ」

言われてみれば当然だが、名前を覚えてもらうほど注目されているということこそ、廷兼朗には不可解だった。

「前回優勝された、『音速突破』の井上駿馬さん、ですよな？」

廷兼朗を助けたのは、前回のG 1トーナメントで優勝した井上だった。大能力《レベル4》の風力使い《エアロシューター》で、ボクシングの選手でもある。

先ほどタックルを仕掛けてきた相手を倒したのは、彼の右ジャブだった。右ジャブで正確に顎の先端を打ち、脳震盪を起こさせたのだろう。

「……『音速突破』ってのは、周りが言ってるだけだよ。何か名前負けしちやいそつで、嫌なんだけど」

そう言つと、井上は照れながら鼻を搔いた。廷兼朗は勝手なイメージで、居丈高な人物と思っていたが、その考えを改める気になつていた。

「ところで、さっきのは柔道の技かい？」

話しながら、その場でシャドーをし始める。軽く流す程度なのだろうが、その拳が恐ろしくキレている。あの速さがあれば、先ほどのように切つて落とすような打撃も可能となるだろう。

「はい。柔術を少々嚙つていまして」

「柔術か。俺は見ての通り、ボクシングやってるんだ。君のは、何て流派なのかな？」

「先のは大錬流合気柔術の、『転閻魔』という技です」

「先のは？ 他にも習ってるの？」

「他には、それこそボクシングも習いましたし、ムエタイとか、中国拳法なども習っています」

「へえ、色々やってるんだね。こりゃあ楽しみだ」

「楽しみ、ですか？ 無能力者《レベル0》の僕が？」

そう廷兼朗が言つと、井上はやっぱりと微笑んだ。

「無能力者《レベル0》でありながら、こういう大会に出る。相当な勇気だと思うよ。だから、どんな戦い方をするのか楽しみなんだ」
井上は本当に楽しみなようで、子供のように純朴な顔で言う。何

ら含むところのない、心からの言葉であることがその表情から伝わってくる。

廷兼朗もこういう誠実な人柄は好むが、同時にやりにくい相手だと悟った。

廷兼朗の主な戦い方は、無能力者《レベル0》であるということ、つまり能力を使わないと言うことを逆手に取って油断を衝くやり方が殆どである。無能力者《レベル0》であると知りながら、なお楽しみだと言つてのける井上に、油断を誘うやり方は通用しないかもしれない。

そして先ほどのシャドーから察するに、井上のボクシングの技術は相当な次元にある。そこに大能力《レベル4》の能力が合わされば、戦力はさらに相乗する。

「字緒選手、入場の用意をしてください」

井上と話していると、係員が呼びに来た。廷兼朗は一回戦の第一試合からである。

「おっと、呼ばれたようだね。がんばって」

励ますように軽く肩を叩かれ、今度は廷兼朗のほうが笑った。

「期待を裏切らないよう、精一杯やらせていただきます」

拳を握つて応え、廷兼朗は控え室を出た。通路に出た時点で、会場からの歓声が鳴り響いていた。

G・1トーナメント開幕！：一

廷兼郎は会場へ入り、ぐるりと辺りを見回した。

観客は全部で三千人程だろうか。それでも根を入れて向き合わねば気圧されるような熱気が会場に充満している。

試合場上がる。既に相手選手が立っている。かやまあきつく香山昭次。空手の

有段者であり、異能力《レベル2》の念動能力者テレキネシストでもある。

試合場は二十メートル四方の舞台である。遠距離攻撃を得意とする超能力者のために、広めの設計がなされている。

一度試合場の中央まで行き、主審のチェックとルールの説明がなされる。主審は万が一攻撃を加えられても大事がないよう、警備員も兼ねている屈強な教師が務める。

それを終え、ようやく開始線へ戻る。開始線は中央から五メートルほど離れた場所だ。つまり、互いに十メートル離れた場所で向き合うことになる。

「ジャッジ！ ジャッジ！ ジャッジ！ レディ……、ファイ！」

カーン！！

小気味よい鐘の音が、試合の開始を告げた。

香山はアップライトに構えながら軽くステップを踏んでいる。空手だけではなく、キックボクシングなども学んでいるのだろうか。

リズムと言い重心と言い、とても安定している。

五メートル程まで近づき、廷兼郎も構える。左手を肩から緩く伸ばし、右手を臍の辺りに添えた自然体。

念動力ならば広い射程を持つはずだが、未だ動きはない。どうやら香山は、廷兼郎の出方を伺う気であるようだ。

そんな静かな立ち上がりを、観客は水を打ったように大人しく見守っている。野次の一つでも飛ぶかと思っていたが、意外に心得て

いるようだ。

それではなおのこと、盛り上げないと申し訳がないだろう。

廷兼朗は、いつものように力みを感じさせぬ動作で一気に踏み込む。ぎよっとする香山だったが、すぐに反応し、前蹴りの体勢に入った。

「はッ！」

下腹部を狙う蹴りを、廷兼朗は跳んで避け、前方宙返りから蹴りを浴びせかけた。

真上から降り注ぐ蹴りを、片足で立った状態で防いだ香山は、バランスを崩して後方に転がる。

一拍置いて、会場から歓声が沸き上がった。

空中からの胴回し回転蹴り。隙が大きいため、滅多に見られる技ではない。

「うおお！ いいぞレベル0！！」

「調子乗んな！ 香山、ブツ殺せ！！」

廷兼朗の派手なアクションを受けて、観客が盛り上がる。

いい感じに会場を暖めることが出来た。人と人が戦う様を見せているというのに、大人しくされては選手も冷めてしまうというものだ。

しかし、当の香山は静かに立ち上がり、何事もなかったかのように構え直した。

（あわよくば逆上してくるかと思ったが、会場の雰囲気にも飲まれていない。虫が良すぎたか）

それでも、これ以上黙ってお見合いなどという真似はしないだろう。

軽いステップから左が走る。空手の突きではない。ボクシングのジャブに近い動きだ。

廷兼朗も前を出してある左でジャブを捌き

顔面に衝撃が走った。

ジャブは防いだはずだったが、まるで衝撃だけが突き抜けたかのように顔を殴られた。

的確に鼻頭を殴打され、僅かに血が滲む。

香山のコンビネーションは止まらず、ジャブで距離を測り終えてから右の正拳突きを繰り出す。今度は防ぐのではなく、廷兼朗はウエービングして、拳の軌道から完全の体を逃がしながら横へ移動する。

香山が足を入れ替え、回り込まれるのを防ぐ形で左中段蹴りを放つ。

「ッ!？」

蹴り足が命中した後、それを追うように同じ場所へ衝撃が来る。

蹴り二回分の衝撃を食らい、廷兼朗は体勢を崩しながら大きくバツクステップする。

(それが、あんたの能力か)

「ダブルエフェクト二重影撃か。実際に見るのは初めてだわ」

白井たちと合流し、一緒に試合を観戦していた網丘が頷きながら漏らした。

「ダブルエフェクト? そんな能力がありますの?」

「香山選手の能力よ。念動力の一種なんだけど、その性能が限定的なの」

念動力は、手を使わずに遠くにある物を動かす能力である。時には実際の手よりも器用に、そして力強く作用する。

「よく能力者は、手や体の動きと合わせて能力を発現させるけど、それはもつとも意識しやすい、つまり演算しやすい方法だからだと言われているわ。二重影撃の場合、自分の繰り出す攻撃と合わせた状態じゃないと発現しないのよ。そして多くの念動力者のような、

掴むなどの器用な動きは出来ず、単に押すだけ。レベル自体は低いけど、単純な分、出力が大きい。恐らく通常のキックと同じ衝撃を発生させているはずよ」

網丘の説明を聞いていた錬公老人は、好々爺とした顔で面白そうに笑った。

「この街には、こんな連中がゴロゴロ居るのか。こりゃあ字緒は退屈せんわな」

ほっほっほと笑いながら、攻め立てる香山をじっと見据える。彼も武術家である以上、敵との対戦した場合というものを必ず考えってしまうのだろう。

廷兼朗は、追い打ちを掛ける香山の攻勢を、丁寧に外していた。防御はしない。受け止めれば二重影撃で否が応でも動きを止められてしまう。念動力が飛んでくる打撃の軌道上から、完全に体を移動させるしかない。

打撃が当たるほど近くににいるのに、当たらない。拳、蹴りを満遍なく繰り出しているにも関わらず、その合間から敵がすり抜けていく。

外れていく打撃が、当てねばならないという香山の気持ち加速させてゆく。

一度体勢を整え、今度はいきなり右から入る。左ジャブからの組み立てだったコンビネーションのリズムを変える。

それは理想的な打突だった。香山にとっても、廷兼朗にとっても、繰り出される右拳を、廷兼朗は飛びつくように迎えに行く。

放たれた右腕を引き込み、両足で捕獲する。そのまま香山を仰向けに転がし、廷兼朗は下腹部に力を込める。

バンバン、と香山が床を叩く。ギブアップの合図である。

カンカンカンカーン！！

静まり返った会場に、空しい鐘の音が反響した。腕拉ぎ逆十字固めを解き、もう終わったのかと聞きたげな香山に手を貸しながら立たせる。

香山は自身でタップしておきながら、狐に摘まれた表情を廷兼朗に向けていた。

主審が廷兼朗の勝ち名乗りを上げ、彼は一礼して会場を後にした。

G・1トーナメント開幕!：二

試合を終えた廷兼朗は、鍊公老人と網丘の座っている席へと向かった。先ほどの試合の感想を聞くためだ。

第二試合の最中にある会場は、良い具合に盛り上がっている。

「先生! 網丘さん!」

声を上げる観客と一線を画し、押し黙って観戦している二人に呼びかける。

「初戦突破、おめでとさん」

「はい。ありがとうございます」

鍊公老人からの労いの言葉に、素直に頷く。対照的に、網丘は渋い顔だった。

「楽しんでるようで、何よりね」

「ええ。そりゃあお祭りですから、楽しいですよ」

「でも万が一、負けたらどうなるか、分かっているわね?」

含むような笑みに、廷兼朗は表情を崩さずに応える。

「すぐに荷物まとめて、和歌山に帰りますよ」

網丘と並んで座っていた白井と初春が、「え?」と声を上げる。

「帰るって、どうしてですか?」

「この程度の大会で後れを取るようであれば、対能力者戦闘術への開発協力の資格無しとして、奨学金を切られるから和歌山に強制送還です」

さも当然と言わんばかりの口調で、廷兼朗は説明する。

学園都市は学生の街と呼ばれるほど学生が多く、教育機関が所狭しとひしめいている。そのため、学生への奨学制度はとても充実している。その充実ぶりが、置き去り《チャイルドエラー》という社会問題を引き起こしているという側面もある。

しかし、奨学制度はあくまで学生への投資である。リスクを負う

のだから、それ相応のリターンを要求されるのは当然である。多額の補償の見返りに、能力開発に従事する学生は少なくない。むしろその構造は、学園都市全体に当てはまる。

廷兼朗の場合、それが能力開発ではなく、戦闘術の開発だっただけに過ぎない。開発に不適切な人材であるという判断がなされれば、『対抗手段』カウンターメジャー計画との提携を前提にしている奨学制度は当然打ち切りとなる。

学園都市にいられないとなれば、生家のある和歌山は根来に帰るしかない。

「そうになったら大錬流の師範代に雇ってやるから、安心しろい」

そう言っつて、錬公老人は声を上げて笑った。

高等学校卒業という選択肢が抜けてしまうのは甚だ残念だが、そうする以外に身を立てる選択肢が、廷兼朗には今のところ無い。

「大錬流、というのが、このお爺さんの流派ですよ？」

「そうですよ。大錬流合気柔術の師範をなさっているんですよ」

そう言われてもピンと来ないのか、白井は「はあ……」とだけ頷いた。

「でも廷兼さん、確かご自身でも流派を持っていると言ってますでした？」

「天羽根流のことですか？ あれはもう断絶したようなものですか。それに多くの師から習うことは、悪いことではありませんよ」

断絶という言葉が気になったが、白井がそれ以上聞く前に、廷兼朗の意識は第二試合へと向いてしまった。

勝った方が自分の次の対戦相手になるので、注意深く観戦する。

一方は火炎放射能力者なのだろう。かざした手から勢いよく炎が走る。

それをもう一方が避ける。遠距離での攻撃方法が無いのだろう。炎の軌道から逃げ、間合いを詰めていく。その光景は、ボクシング

のインファイターとアウトボクサーの試合を見ているようだ。

間合いを詰めていく方には、予め場所が分かっているのか、手をかざした時には既に炎の軌道から外れている。既に一ラウンドが終わり、二ラウンドの半ばだが、炎を一切食らっていない。見事なまでの眼付けである。

廷兼朗は、その挙措を静かに見守る。彼にとって、非常に参考になる試合だ。

無能力者《レベル0》の廷兼朗は遠距離攻撃を仕掛けてくる能力者に対して、遠距離で対抗するのは非常に困難である。必然、攻撃を避けながら自分の間合いまで近づくと戦い方となる。そこで必要なのは、相手の攻撃を見切る眼付け、致命的な攻撃を恐れず飛び込む勇氣、そして一度間合いに入ったが最後、必ず仕留めるという自信と技術である。

徐々に均衡が崩れ始め、危ういまでに距離が狭まってきている。恐らく、一瞬の挙動で決着する。

火炎放射能力者が、振り払うように横一線を炎で薙いだ。既に二、三メートルまで近づいていた相手には、回避しきれない広さを持つ攻撃だった。彼は頭部を両手で守り、炎の中へ突進した。

横に振るった分、炎の密度が薄れたため、脅威ではないと判断したのだろう。そう考えていたのは、火炎放射能力者も同じだった。今度は自分から踏み込み、炎の中に向かって思い切り右足を蹴り上げる。炎で煙幕を張り、今まで見せていなかった蹴り技を相手の頭目がけて放つ。

「 終わりだ」

廷兼朗は、ぽつりと呟いた。

炎が晴れると、そこには右上段蹴りの応酬がはつきり見えた。火炎放射能力者の顎に、右足甲がめり込んでいた。

炎で前が見えない状態で、火炎放射能力者の右上段蹴りを最小限

の動きで避け、事前に打ち合わせたような見事さでカウンターの蹴りを命中させていた。

火炎放射能力者が後方に倒れ、主審がカウントする。立ち上がる意思は見えるが、如何せん体がついてきていない。絶妙な角度で顎を蹴打され、脳と体の神経が分断されているが、ありありと分かる。

結局、テンカウント中に立つことは出来ず、火炎放射能力者が頂垂れる。主審が一方の選手の腕を上げ、第二試合が終了した。

「あの人が、次の相手か」

口元を緩ませ、廷兼朗が言った。能力による攻撃、そしてフェイントも全て見透かし、的確なカウンターを決める。対能力者戦闘の理想の一つである。廷兼朗は、自分以外にもこれほどの技術を持っている相手に対して戦慄していた。

彼も無能力者なのだろうか。淡い期待を込めてパンフレットを確認してみると、先ほど勝利した選手、久遠くんとけんは、強能力サイコメトラー《の読心能力者とのことだった。

通常、読心能力者は対象に手で触れることで情報を読み取るが、久遠は手を触れず、離れた状態で読み取ることが出来るのだろうか。そうであれば、あの察知能力の高さも納得がいく。

無能力者でないことは少し残念だったが、それでも廷兼朗にとって手強い相手には違いない。

遠距離攻撃は無いものの、心を読まれると言うことは近接戦闘で圧倒される可能性を秘めている。あらゆる挙措と思考を完全に読み取られれば、さしもの廷兼朗も手の出しようはないのかもしれない。全ては相手次第だ。心を読み切れれば久遠の勝ち。読み切れなければ廷兼朗の勝ちである。

G・1トーナメント開幕！：三

一回戦の最終試合となり、井上が試合場に現れた。

一際大きな歓声上がる。観客が井上の試合に期待を抱いているのが伝わってくる。一八〇センチのすらりとした長身は、立っているだけで人を惹き付ける。

廷兼朗も、惹き付けられている一人だった。

井上は、不思議な佇まいを有していた。刺々しい殺気も無ければ、緊張も怯えも見られない。それでいて爽快な活気が充ち満ちている。格闘技者と言うよりは、スポーツマンらしい雰囲気である。

井上の相手は、はやたみつりのり羽屋田光則。強能力《レベル3》の電撃使い《エレクトロマスター》の総合格闘家である。

体躯が全体的に厚く、井上よりも大きい。

「ファイツ！」

主審の掛け声とゴングが鳴り響き、試合が開始した。

井上は早速構えた。右足を前に出し、僅かに斜はすに体を向け、拳を肩の高さに上げている。サウスポースタイルだ。

対する羽屋田は両手でがっちり頭部を守り、前傾姿勢になっている。懐に飛び込みたいという意志が見て取れる。

（電撃使い。そして総合格闘。ならばセオリー通り電撃で痺れさせて、その間に近づいてより強力な電撃を見舞うか、関節を取って極める。あるいはその両方か）

二十メートル四方の空間であれば、どこにでも電撃は届く。井上に逃げ場はない。

廷兼朗の体がびくりと震える。先頃に食らった電撃を体が思い出す。あれは超能力ではなく魔術だったが、生み出す結果にそう変わりはない。

自分ならばどう戦うか。やはり廷兼朗は考えていた。

遠間からの電撃を見切って踏み込み、次の電撃が撃ち出される隙に一撃を入れる。若し食らったとしても、耐えて即座に反撃する。廷兼朗は菊池との戦いを、脳内で再現していた。

相当な覚悟と正確な身体操作を行わねば、電撃を食らった隙を突かれる。そのくらいのごときは、井上も心得ているはずである。

(やはり、最初は遠距離で能力の差し合いになるか……)

これまでの試合でも、そうした展開は何度かあった。お互い遠距離から攻撃できる以上、廷兼朗のように無理矢理懐を取ろうとする必要はない。

だが、そうした能力を全面に出した戦いでは、レベル差が如実に表れる。それをどう補い覆すかが、この大会の見所でもある。

井上は大能力《レベル4》の風力使い《エアロシューター》である。強烈な烈風や真空波を生み出して、遠距離から攻撃も可能だろう。

強能力《レベル3》羽屋田は大きく足をストライドさせ、タツクルの用意をしている。電撃で麻痺させてタツクルを成功させ、一気に勝負を決める気なのだろう。至近距離での攻防に絶対の自信がなければ、行える作戦ではない。

羽屋田が摺り足で寄る。防御した腕の間から、電撃を放つ機会を窺っているのだろう。額からバチバチと、紫電の爆ぜる音が聞こえる。

井上は軽く体を揺らし、リズムを取っている。こちらにはまだ、明確な能力の行使が見られない。

「前に出て！ ファイツ！」

主審がアグレッシブなファイトを呼びかける。それを受けてか、井上が大きくステップインする。

次の瞬間、井上は羽屋田の左横に現れた。支えを無くした板のように、羽屋田がその場にばったりと倒れた。

廷兼朗は驚きのあまり、席から立ち上がった。ステップインのために右足が浮いた瞬間に間合いを殺し、防御の隙間へ顎を巻き込むような右フックがねじ込まれていた。廷兼朗が目で追えたのは最初の踏み込みと、最後の右フックだけだった。

空間移動ではない。風力使いの彼が、そんなことを行えるはずはない。

だとすれば単純に、加速したのだろう。井上の能力、風力使いによって、自身の体を視認さえ難しい速度で運動させる。そして相手の側面を取り、腕の僅かな隙間から顎を狙撃する。

僅かな能力の行使も許さない、圧倒的な速度だった。

腹の底から震えが昇る。優れた能力と、それに裏付けされた技術。それらが高い次元で融合している。ボクサーとしても能力者としても、非常に完成度が高い。

これこそ廷兼朗と網丘が求めていたものだ。こういう能力者を相手取ってこそ『カウンターメジャー対抗手段』である。

震えが全身に伝わり、それを逃がすように、廷兼朗は大きく息を吐いた。『対抗手段』の成果を試すに相応しい相手の登場に、廷兼朗の心臓は早鐘となって追いついて立てる。

戦え、戦え。倒せ、勝て。そんな声が、自分の内から漏れ出てしまっただけだ。

「相変わらず気障な野郎だ。全く遊ばない」

「……荒涼さん」

試合を終えていた荒涼が、廷兼朗の側へと寄ってきた。

「調子は良さそうだな、字緒」

「荒涼さんも、初戦突破おめでとうございます」

「胴回しなんて派手な技、らしくないじゃないか」

「派手だろうと、ちゃんと使えば然るべき性能を発揮します。要は

熟練の程と、使いどころです」

「そうだね。でもああいうのは、もうやめたほうがいいよ」
突然割り込んできた声に、二人は敏感に反応した。

「……井上」

「久しぶりだね、荒涼」

気さくな様子で手を挙げて応える。そんな何気ない素振りにも、井上の好漢ぶりがよく表れている。

「お知り合いだったんですか？」

「……今まで二回、やり合ったことがある」

「一昨年の二回戦と、去年の決勝戦だよ。二回とも、俺の勝ちさ」

井上は嬉しそうに説明する。その喜ぶ様が、荒涼との戦いの充実ぶりを伝えているため、却って鼻に突く所のない台詞となっている。

「……今年こそは、負けない」

荒涼が小さく、重たそうに呟く。井上の爽やかさも、彼の毒気を抜くまでには至らなかった。口を閉じてはいるが、中で歯を軋ませているのがよく分かる表情だ。

それも当然だろう。井上の言葉が正しければ、荒涼は井上に二敗していることになる。その心中は穏やかならざるものだろう。

「ああ。楽しみにしてるよ」

軽く手を振って、井上がその場を後にした。何気ない仕草がいち様になっている。その整った顔立ちも相まって、女性からの人気も高いのだろう。後ろを見れば、井上のファンと思われる観客たちが集まり始めていた。

これまでの試合のダイジェストを挟んでから、二回戦第一試合が始まる。廷兼朗は控え室に向かうため、網丘たちに挨拶してからその場を辞した。

G・1トーナメント二回戦!!!

二回戦第一試合。廷兼朗は久遠険と対戦する。久遠は強能力《レベル3》の読心能力者である。特定の格闘技を習っているわけではないが、体格には恵まれており、遠距離からの読心で敵の攻撃を読み、近づいての乱打で一気に相手を押し切るといった戦い方を旨としている。

いざ目の前で相対すると、その肉体の大きさに惚れ惚れする。格闘技など習わずとも、持ち前のフィジカルと能力で負けを知らないケンカ自慢なのだろう。廷兼朗を見下ろす久遠は、何とも負けん気の強い顔をしている。

「お前、無能力《レベル0》らしいな」

「私語は慎むように！」

主審の注意を無視して、久遠は話しかける。

「スキルアウトにも能力者とタイムンする奴がいるけど、お前は何だか毛色が違うな」

「そんなことありませんよ。僕は、スキルアウトの方々と同類です」
「まあ、強けりやどうでもいいか。せいぜい頑張ってくれよ」

すっかり見下されてしまったが、特段言い返すこともなかったのだ。廷兼朗は大人しく開始線に戻った。

試合開始のゴングが鳴る。廷兼朗はいつも通り構える。久遠は開始線に突っ立ったまま、無造作に歩いてくる。肩で風を切るいかつい歩き方である。

廷兼朗は動かない。久遠は遠距離からの攻撃方法を持たない以上、自分から間合いを詰めなくても構わないので、珍しく完全な待ちの体勢でいる。

だからといって、先手を打たないわけではない。

「あの、網丘さん」

「何かな？」

観戦していた白井が、興味本位で話しかけた。

「廷兼さんは、勝てますの？」

「さあ？ 知らない」

悩む素振りも見せず、網丘はすげなく言い切った。

「読心能力者ということは、廷兼さんの攻撃は全て読まれてしまうのでは？」

そしてそれは、廷兼朗の敗北を暗喩している。

「それはどうかしら？ 遠距離から読心出来るのは凄いけど、何でもかんでも分かっってしまうという訳じゃないでしょう。それじゃ読心というより予言フアーレシジョンだわ。いいえ。予言でさえ、完璧に未来を言い当てるとは限らない」

「それでも、不利なことに変わりはないですよ」

白井のその言葉を、網丘は鼻で笑った。

「それを言ったら、彼に有利な戦いなんて、この学園都市には皆無だわ」

確固たる言い切り様に、白井が少し気圧される。網丘はその場を繕うように軽く咳払いをした。

「まあ、来るのが分かっけていても防げない攻撃というのはあるから、多分大丈夫でしょう」

久遠が警戒する素振りを見せないのは、自信の表れなのだろう。

やはり廷兼朗は、舐められているようだ。

今正に心を読まれているのか、手応えのようなものがないため分らない。読まれる感触でもあれば、あるいは避けられるかと期待していたが、それは体の良い願望だったようだ。

心を切り替えて、攻撃に転じる。心を読まれていようと、廷兼朗のすることに変わりはない。

久遠が近づいてきたのに合わせて、廷兼朗が前足を狙って右下段回し蹴りを繰り出す。

久遠は軽く左足を上げる。ローキックの防御である。

無手勝流だが、ローのカットは身につけている。久遠は街のケンカで慣らした自分の技術は、決して格闘技者にも引けを取らないと自負している。事実、一回戦は見事にKOで突破している。ローキックなど、心を読むまでもなく防げる。

反射的に素早く左足を上げた瞬間、久遠の顔に衝撃が走った。

読めていたはずなのに、ローキックを防いだはずなのに、何故自分の顎にレベル0のつま先が入っているのか、久遠に考える暇はなかった。

朦朧とした頭へ加えられたさらなる打撃が、久遠の意識を完全にはじき飛ばしてしまった。

たった一触での決着に、会場は騒ぐと言うよりもどよめいてる様子だった。一体何が起こったのか、きちんと把握している者が少ないためだろう。

「何か、字緒さんの足が、変な風に曲がったような……」

白井の隣で観戦していた初春も、頭を抱えながらうんうんと唸っていた。

どうも言葉では形容しがたいのだろう。ジエスチャーも混じえているが、説明している本人がさらに混乱してしまった。

「よう見とるのう、お嬢さん。あれは捻り蹴りという蹴り技じゃき見かねた鍊公が、助け船を出してくれた。」

「捻り蹴り？」

「テコンドーのピットロチャギという技で、内側から外側へ、捻るようにつま先で蹴るのよ」

網丘が後を継いで解説する。

廷兼朗は右下段回し蹴りを、その途中で膝に引き付け直し、くりりと反転させて上段捻り蹴りへと変化させた。そして腕と腕の間を縫う軌道で、ほぼ無警戒だった久遠の顎をつま先で蹴り上げた。

柔軟な股関節と膝関節がなければ、こつも滑らかに行なえるものではない。

「他人の心を読めるとしても、目から入る情報には逆らえない。咄嗟のことなら、なおさらね。単なるケンカ自慢には勿体ない蹴りよ」「分かっていても避けられない攻撃、ですのね」

右下に意識を向けておいて、間髪入れず左上を襲う蹴り。例え来るのが分かっているも、避けるのは難しい。

未だ気を失っている久遠が担架で運び出され、廷兼朗は試合場を後にした。

G・1トーナメント二回戦!!：二

二回戦第三試合。 廷兼朗の先輩である荒涼は、強能力者へレベル3の錦見智順との試合に臨んだ。

彼は『水蒸気流』という能力の持ち主である。念動力で空気中の水蒸気を集結・流動させることが出来る、水流操作の派生能力だ。

試合開始と同時に、錦見の体表面を白い靄が覆う。早速能力を發揮し、水蒸気を集結させている。

濃密な水蒸気の膜は、傍目には分からないが常に激しく流動しており、それ自体が強固な鎧の役目を果たしている。

生半可な攻撃でその鎧は破れない。だが、まず攻略しなくてはならないのは、水蒸気による噴射攻撃である。

錦見がゆっくりと右手をかざすと、掌から勢いよく白い煙が吐き出された。顔に向かって伸びる煙を、荒涼はサイドステップで躲す。体を覆っているものと同じ濃密な水蒸気を相手に噴霧することが、錦見の攻撃方法である。もし噴霧された状態で相手が少しでも呼吸すれば、水蒸気が口や鼻に入り込み、たちまち溺れることになる。

一度水蒸気に捕まれば、白い煙に巻かれてのたうち回ることになり、絵面的にかなり地味な負け方を喫する。これまでの錦見の対戦相手は、たかが水蒸気どれほどのものか、と若干舐めた対応をしたため、ほぼ一撃でノックアウトされていた。

「荒涼さん、落ち着いて！ ゆっくり様子見て！ 飛び込むのはそれからですよ！」

廷兼朗の声が届く。彼の言うとおりだ。炎や電気のように分かりやすい威力ではないが、水蒸気は十分に脅威である。ゆっくり、落ち着いてタイミングを計る必要がある。

(そろそろか)

噴射されるタイミングさえ掴めば、あとの作業は単純である。

「荒涼さん！」

廷兼朗の掛け声とともに、荒涼は顔面を両腕でしっかりと覆って一気に走り出す。息を止めるのも忘れていない。

水蒸気噴射をもともせず、むしろ向かっていく形で突進する。

「止まらないで！ 煙の出てる方向に走って！」

息を止め、目もろくに開けられない状況だが、頭に当たる水蒸気が敵の位置を伝える。

攻撃の先に敵がいる。薄目を開けて下を向いている荒涼が、錦見の足先を捉えた。

足が目に見える位置。接近戦の間合いである。

荒涼はさらに加速し、身を低くしてタツクルをかました。前に出した足に伸ばした手が、勢いよく弾かれた。

『ライデンフロスト水蒸気流』の鎧に触れた瞬間、荒涼の手は力を逸らされてしまい、捕獲は失敗した。

それでも諦めず、何度もタツクルを敢行するが、その度に荒涼の手が水蒸気の膜に弾かれる。

水蒸気とはいえ、急激な速度で流動しているものに触れ続けた荒涼の掌は、べろりと赤い筋肉を剥き出しにするほど削られていた。

水蒸気の流れに赤いものが混じり始めるが、荒涼はまるで頓着することなく、執拗に足を刈ろうとタツクルを続ける。

「ひどい……」

観戦していた初春が、苦しそうに目を伏せる。それほど荒涼の怪我は痛々しい。主審も荒涼の戦意が削がれば、すぐにでも試合を止めることだろう。

だが肝心の荒涼に、試合を投げる様子はない。常にアグレッシブに攻撃しているため、試合を止めることは出来ない。

「荒涼さんには、遠距離での差し合いを行える能力はない。策はあれしかないんです」

初春の言葉を打ち消すように、廷兼朗が返す。リーチに差があるなら、少しでも埋めるために前進するしかない。相手が退くならば、なおのことだ。

「でも、あれじゃ……」

勝てませんよ、とまでは、さすがの初春も口に出来なかった。

「勝負事は終わってみるまで、何も分かりはしません。それに、先ほども言いましたが、試合を制御しているのは荒涼さんです」

廷兼朗は確信を込めた強い言い方をする。荒涼の試合展開に、一切の不安を感じてはいないようだ。

「初春さん。あんな姿の荒涼さんを見て、どう思いますか？」

「どうって……、すごく、痛そうです」

「そうですね。痛そうで、かわいそうで、何だか怖いでしょう。それは人間として当然の心理です。人が傷ついているのを見れば、痛いと思う。それはストレスとなって、確実にここに表れる」

廷兼朗が親指で、自分の額を指した。

「幾らルールに則っていても、人を傷つけることにはストレスが伴うものです。無論、訓練によって抑制することも出来ませんが、根本的には取り除けない」

共感覚という言葉がある。一つの刺激で、複数の感覚を刺激することを指す。例えば風鈴の音を聞くと、体感温度が下がって涼しく感じるなどがこれに当たる。

それと同じように、傷ついている人が居れば、その傷を勝手に共感してしまう。殴ったり蹴ったりすれば、その感触から痛みを想像してしまう。

その感覚は克服して無くしていくものではなく、正面から受け止め、自分のものにしていかねばならない。相手の傷や痛みに頓着せずに攻撃を行なうのは、明かりの無い崖の際を全速力で走る暴挙に近い。

傷や痛みを想像出来なければ、相手の攻撃能力の有無を把握できない。それは格闘技者として、それ以前に人間として致命的な欠陥である。

「そして、この会場で一番ストレスを受けているのは、錦見選手なんですよ」

ここまでの戦いぶりから見て、錦見は非常にセンスのある選手だ。水蒸気を全身に纏って、攻撃と防御を兼ねる発想は秀逸と言っている。

そんな彼の鋭い感覚が、荒涼の状態を見て何も感じないはずはない。

「僅かな、ほんの僅かな齟齬です。あるかどうかなんて分からない。でも、あると信じて、前に出るしかないんですよ」

最後の言葉が掠れるほど、廷兼朗は歯を噛み締めていた。それは荒涼に向けた激励でも、初春に対する説明でもない。同じく前に出るしか能のない、普通の一般人の呻きである。

自分の身が傷つくのも省みず突進し、相手を威圧して捕らえる。たったそれだけの単純な作業。

つらいでしょう。苦しいでしょう。もうやめてしまいたいでしょう。水蒸気から逃れるためにろくに呼吸も出来ないまま、タックルという全身運動を何度もこなし、掌が剥かれることの繰り返しに、嫌気が差すでしょう。

(でも、それが唯一の対抗手段だ)

機は必ず来る。既に人事は尽くした。あとは天命を待つのみ。

もう幾度タックルをかましたことだろう。一ラウンドは五分のはずだが、一時間は戦っているような気がする。酸欠気味の頭は、目の前の敵を見ているだけで精一杯で、電光掲示板なんか意識の端に

も掛からない。

(作戦を間違った)

これでいい。間違っていない。これが俺にとっての最良だ。

(力量が足らなかった)

そんなことはない。もう一度井上と戦うため、鍛えに鍛えた。こんなところでへばるような鍛え方はしていない。

(端から敵う相手じゃなかった。レベル4とレベル3がぶつかれば、結果は明白だ)

違う。断じて違う。レベルはあくまで超能力の程度を表わす指標だ。人の強さを表わしたものじゃない。

『超能力があるうとなかろうと、人は強いんですよ』

俺の近くにもいるじゃないか。レベルなんて関係なくとも、強い人間が。

彼はそもそも無能力《レベル0》だ。レベルの高低すら語れる身分じゃない。それでも彼は、自分の身につけた技で、超能力者を打ち倒している。

あいつに出来て、俺に出来ないわけがない。やってやる。こいつを倒して、俺は井上の前に立つ。

「うおおあああー!!」

水蒸気噴射の下を潜り、唸りを上げて突進する。前に出した左足を抱え込もうとする。またも掌が抉れるかと構えたが、その瞬間は訪れなかった。

左足が無い。これは

真下から突き上がった足の甲が、荒涼の顎を直撃する。タツクルに來た相手の死角から飛んでくる、見事なカウンターの蹴りだ。

無理矢理体を起こされ、視界が急速に流れる。

「っっしゃあー!!」

その片隅で、立ち上がってガッツポーズを取る廷兼朗の姿が微かに見えた。

この大観衆の中で、彼の声は殊の外よく通った。

タックルに行くところを迎え撃たれたのに、何で喜んでいるのだろうか。俺を応援してくれていたのは、上辺だけだったのか。俺がやられて、喜んでいるのか。

（それは、ない）

廷兼朗は、そんな器用なことが出来る人間ではない。彼と関わるようになったのは最近のことだが、学校での生活や、訓練場での姿を見ていて、それだけは確信できる。

（ああ、そうか）

ならばこの状況は、荒涼にとって非常に喜ばしいものなのだろう。コンマ数秒、意識が分断され、体が下に崩れ落ちる。

G・1トーナメント二回戦!!…三

錦見の蹴りが、荒涼の顔面に命中した。その打撃こそ、垂涎すいぜんの的だ。天からの福音と言っても良い、唯一無二の機だ。

荒涼の体が前に倒れ込む。だらりと弛緩し、つま先の踏ん張りが効かないため、前のめりに顔から落ちる。

絶妙な手応えと、相手の倒れる様に、錦見がほくそ笑む。水蒸気噴射に気を取られていた所への蹴撃は、見事に成功した。

既に主審は、荒涼の方へと駆け寄ろうとしている。

「荒涼さん、行けッ！」

途切れた意識に、果たして聞こえたのか。それとも蹴りの威力が足らなかつたのか。何れにしても、荒涼は床に突っ伏す寸前に意識を回復した。

目の前に床が迫る。倒れている。顔を蹴られて、脳を揺らされた。体が痺れて、上手く動かない。

(そんなこと、どうでもいい!!)

言い訳は後でいい。今はとにかく、相手を捕まえることが重要だ。動くとか動かないとか、痛いと痛くないとか、そんなことは関係ない。

倒れながら、荒涼は無理矢理タツクルの体勢へ移行した。

腰が落ちる。膝が抜ける。つま先が踏ん張ってくれない。重心が、自分の管理下から逃げていくのが分かる。まるで磨かれた氷の上にいるようで、体の操作が心許ない。

「ぬあああ!!」

逃げていく重心を何とか取り戻そうと、荒涼は倒れそうなバランスに追従するように、左足を滑らせて前に出した。

滑ってゆく。足も、体も、どこまでも滑っていつて、突き抜けていくような感覚。

倒れる力と足の力が合わさり、今まで体験したことのない速度で、荒涼は相手に接近した。

錦見が気がついたときには、荒涼の首が彼の脇の下に入っていた。典型的な胴タツクルの体勢である。

「やった！」

荒涼が先ほど行ったタツクルは、紛れもなく歩法『無足』を応用したものだ。相手の蹴りによって脳を揺らされ、体の操作が覚束ないことが、偶然にも吉と出たようだ。

(いや、それだけじゃない)

『無足』は、体をリラククスさせ、倒れ込む力をバランス感覚によつて保ちながら、推進力に変える歩法である。単に脳が揺れて、体が痺れていれば行えるものではない。日頃から体の使い方に気を配り、バランス感覚を鍛えねばならない。

荒涼が教導訓練官としての廷兼朗からのアドバイスと訓練を真摯に受け止め、怠らず取り組んだからこそその結果である。

嬉しさのあまり、思わず涙が滲む。自分が訓練を課し、生徒がそれに応える。指導者として、これほど嬉しいことはない。

だが、まだ気を緩めることは出来ない。胴タツクルを成功させたこの状態で、ようやく五分。ここまでは、最初から傾いていた天秤を正す作業に過ぎず、勝負は何も決まっていけない。

セオリー通り頭を脇の下に押し当てる。腕の付け根に頭を差し込んで腕の自由を封じ、両手でぐるりとクラッチする。

「耳を当てちゃ駄目だ！」

そんな基本を無視して、廷兼朗は叫んだ。

錦見の能力は『水蒸気流』ライデンフロスト。水蒸気を念動力で操作する。その水

蒸気流は最低でも、タツクルに來た手を跳ね返すほどの威力を有している。

クラッチするためとはいえ、そこに体を押しつけなければどうなるか。錦見の体から立ち上る霧が、量を増す。観客席まで、はつきりと聞こえるほどの風鳴りを生み出す。

水蒸気の微細な粒子が、荒涼の皮膚にぶち当たり、削り取っていく。

一瞬で錦見の周囲が真っ赤に染まり、凄惨な様相を呈していく。クラッチしている腕や顔、首からの出血が水蒸気に巻き上げられ、周囲を高速で流動する。

「ひっ……」

初春が思わず目を背ける。まさに血風舞う戦いに、観客は言葉を失っている。

だが一向に、主審が試合を止める様子はない。まだ荒涼は錦見から離れておらず、戦意を失っていない。

体の肉を削ぎ取られ、それでも荒涼は錦見から離れない。それどころかクラッチを狭め、錦見の胴体にさらに密着する。体全体で力んでいるのが、傍目にも分かる。

「んがあッ!!」

気合一閃、ここへきて荒涼が勝負を掛けた。水蒸気の攻撃を食らいながら、錦見の体を引っこ抜いた。

背中がぐるりと綺麗な曲線を描き、錦見の脳天を床に叩きつける。「行けッ! 決めるッ!!」

廷兼朗は祈るような気持ちで叫ぶ。敵の腰をクラッチしての投げは、ノーザンライト・スープレックスと呼ばれる技である。

ガゴン!! 錦見の頭が、堅いマットに突き刺さる。

荒涼の動きは、そこで止まらなかった。

ノーザンライト・スープレックスから横四方に体を動かし、錦見の片足を掴んでもう一度持ち上げる。

フィッシャーマンズ・スープレックス。相手の首と片足を腕で抱え、後方に投げる。

まだ終わらない。今度は錦見を肩車の体勢に持っていく。プロレスで言うファイアーマンズ・キャリアである。

「だらあああ!!」

そして助走を付け、またも錦見を頭から床に叩き落とした。

ドスンと重い肉の弾む音が、会場の中で反響した。

デスバレー・ボムと呼ばれる、ファイアーマンズ・キャリアからの派生技である。

怒濤の投げ技三連撃が終わり、錦見が微動だにせず横たわる。勿論、レフェリーは即座に錦見に駆け寄り、戦闘続行不可能と判断して試合を止めた。

一ラウンド三分四十八秒TKO。決まり手はデスバレー・ボム。典型的なプロレス技である。

三回も首から落とされた錦見は、すぐには意識が戻らず、急いでやってきた担架に乗せられた。大会運営委員は一瞬ぎよつとしてから、荒涼も担架に乗るよう薦めたが、彼は謹んで辞退した。

大会運営委員が担架を薦めるのも無理はない。荒涼の着ていた半袖のシャツの前面は、彼の皮膚ごと消し飛ばされていた。顔の半分もやすりを当てたようにべろりと剥げ、瑞々しい筋肉の隙間から沸々と血が滲み出ている。理科室にある人体模型に近い様相は、心臓の悪い人には堪ったものではないだろう。

しかし荒涼自身は、自分の痛々しい傷など頓着していないようで、試合場を降りながら息を整えていた。

そしてようやく、荒涼の能力が発揮された。

血みどろだった肉体が、見る間に肌色の膜に包まれてゆく。それは水面に垂らされた油のように広がり、彼の体が元の健康的で筋肉質な肉体に戻ってしまった。

「あれ？ 傷、治ってる？」

それを目の当たりにした観客たちは、初春と同じように虚を突かれたような反応を示した。

「あれが荒涼さんの能力ですよ。『オートリパース肉体再生』の、確か強能力レベル3オートリパース」だったかな」

『オートリパース肉体再生』とは、肉体的損傷を回復する能力である。レベルが上がるにつれ、その効果や速度が増してゆく。皮膚組織の再生は勿論、筋繊維の回復も常人の比ではない。荒涼の屈強な肉体は、過酷な訓練で断裂・破壊された筋肉や骨を即座に回復させ、確実に血肉に変える事が出来る。『オートリパース肉体再生』に支えられている。

「でも、そんなの今まで使っていませんでしたよ」

「なるべく使わずに戦いたかったのでしょう。能力を使わない状態での、力量が知りたかったのかもしれない。

それに今の戦い、能力を使わないことが功を奏した」

廷兼郎は感慨深そうに、何度も頷いて言った。

『オートリパース肉体再生』を使わず、掌の肉が破けるままに放っておいた。血まみれになりながら迫ることで、相手にストレスを与えた。それを嫌ったからこそ、錦見選手はあそこで蹴りを放った」

「蹴りつて、あのダウンを取れそうだったものでしょう。それが悪かったんですか？」

「命中の仕方は絶妙でした。しかし、あそこで蹴りを放つこと自体が失策です。錦見選手は荒涼さんのタックルから逃げるため、逃げ腰の状態だったから、十分な威力だったとは言い難い。」

それでも蹴りを出したのは、相手は早く倒したいという、焦りの心象の表れです。もし能力を使っていたら、錦見選手はより慎重に立ち回ったことでしょう」

その焦りを引き出したのは、荒涼の粘り強い気迫であり、引き出した隙を逃さなかったのは、偶然とは言え『無足』を行えたからこそである。

そして歩法『無足』を教えたのは、他ならぬ廷兼郎だった。

試合を終え、控え室へ向かう荒涼を、通路で待っている人がいた。

「井上」

呼ばれた男は、軽く手を上げて挨拶する。

「いい試合だった。派手で、見ていて楽しい」

「別に、楽しませる気はない」

それを聞いた井上は、目を丸くして驚いた。

「それなのに、あんなプロレス技を使うのか？」

「プロレスの技だって、ちゃんと使えば然るべき性能を発揮する。

要は熟練の程だ」

「殊勝な言い方だな。お前、少し変わったな」

先ほどの物言いは、確かに廷兼郎の受け売りの部分がある。自分らしくないと言われれば、確かにそうかもしれないと、荒涼は気が付いた。

「そうだな。お前に勝てるなら、いくらでも変わるさ」

それを聞いた井上の雰囲気、ぐっと強まる。闘気が体中に満ち、それでもなお溢れるものが荒涼に伝わってくる。

「次は俺の試合だ。見てくれるよな」

「ああ。見させてもらおう」

入れ違いで通路を歩いていく井上の背中を、荒涼は眩しそうに目を細めて見送った。

G・1トーナメント二回戦!!：四

二回戦最終試合。井上の相手は異能力《レベル2》テレパスの念話能力者かみありこうし神在幸吾だった。

対策はこれと違って無い。念話能力者であるならば離れた相手と意志の疎通を可能とするのだからうけど、異能力《レベル2》ではそれも満足に行なえまい。

今までの戦い方からでは、能力の詳細までは知れないが、実際に食らう前に切って落とせばそれで済む。

つまり、開始と同時に勝負を掛ける。

「ファイツ！」

主審の掛け声と共に、井上が前のめりに倒れた。

「井上ッ!!！」

思わず身を乗り出して、荒涼が叫ぶ。

「井上、起きろ！ 寝てんじゃねえ!!！」

荒涼の声に反応し、井上の体が僅かに起き上がる。その間にも、主審のカウントが進んでゆく。

エイトカウントで何とか立ち上がった井上だったが、見るからに体が重い。向き合った時からか、試合が始まる直前かは分からないが、神在から攻撃を受けたのだから。

精神系に該当する能力というのは、傍目には判じにくい。もしかすれば、食らった本人すらもその詳細は分からない場合もある。

かろうじて構え、主審が再開する。しかし井上は、目の焦点さえ定かではなかった。

まるで脳髓を万力で締め上げられるような感覚が襲ってきた直後、井上の体は平衡を失い、為す術もなく倒れ込んだ。

眼前は明滅する光で塗りつぶされ、焦点を合わせるところの話ではない。

(……これで、異能力《レベル2》だと!?)

これほど攻撃的な念話能力を、井上は味わったことがなかった。満足にまとまらない思考の中で、自分の脳が無理矢理に掻き回されてることだけを理解していた。

その原因は、間違いなく異能力《レベル2》の念話能力である。

「能力で、異能力《レベル2》が大能力《レベル4》を圧倒してる

……」

白井が驚くのも無理はない。能力のレベルはすなわち、能力の強さである。単純な能力の比べ合いで、レベル2がレベル4に勝てる道理はない。

その法則が、目の前で覆っている。

「どうやら、相当に尖った念話能力のようね。でなければ、レベル2の説明がつかない」

「尖った？ 限定的ということですね」

白井の言葉に、網丘は大きく頷いた。

「レベル2ということは、満身に思考を伝えることも出来ないはず。脳波が生体電流を伝達するのかしら？」

むしろ言語化するまで整えられていない信号だからこそ、相手の脳波や神経伝達物質を混乱させるのか。そして異常な信号を送られた相手にも、その異常な信号が駆け巡り、あるいは脳震盪と同じ現象を引き起こせるかも知れない……」

網丘も完全には看破出来ないのだろう。試合場を睨みながら、じつと思考を巡らせている。

頭が割れるように痛い。出血していないのが不思議なくらいだ。疼きたびに目の前が閃光に包まれる。とても戦える状態ではない。

神在は井上から離れた場所にじっと佇み、賢明に睨み付けている。

「井上、動け！ 止まってちゃ駄目だ！」

荒涼の言うことももつともだが、両足は今にも破裂しそうな頭を支える作業で手一杯だ。踏み出して、相手に一撃を加えるには心許ない。

眩むような光の中に、僅かだけ見える神在へ一歩踏み出すが、勝手に膝が抜けてしまった。

「ダウン！」

またも主審のダウン宣告が響き、カウントが開始される。今はまだ井上に戦う意志があり、体も少しは動くが、スリーノックダウン制のG 1トーナメントでは、もう一度ダウンすれば自動的に敗北となる。

「井上さん、井上さん！」

今度は別の方向から名前が呼ばれる。声の主は、今大会唯一の無能力《レベル0》である、字緒廷兼朗だった

「あと少しです！ あと少しで勝ちです！ 立てば勝てますよ！ だから立って！！」

何を言っているのだろうか。あと少しで勝てる？ どこをどう見れば、これが優勢に見えるのだろうか？

「諦めるんですか！？ 荒涼さんと戦わなくて良いんですか？ あんたレベル4だろ！ レベル2に負けて悔しくないのか！？」

悔しいに、決まっている。レベル2だろうがレベル5だろうが、負ければ悔しいに決まっている。そんなことは、レベル0に言われることではない。

「お、おおおおッ！！！」

レベルなんて関係ない。ただ、負けたくない。目の前にいる相手に負けたくない。念話能力で頭が弄られようと、そのせいで人事不省の一步手前に陥ろうとも、絶対に負けたくない。意識が少しでもあり、体が僅かに言うことを聞くうちは諦めたくない。

いちいち戦意を確認してくる主審に構わず、神在に歩み寄る。風を伴う華麗なフットワークは見る影もない。

頭痛に奥歯を食いしばり、もの凄い形相で神在を睨み付ける。神在も負けじと凝視する。試合開始直後から眉間にしわを寄せ、必死にいきつっている。その表情を片時も崩そうとしない。

「井上が次倒れれば負けだぞ。どうやって勝つってんだ？」

荒涼は苦い顔で廷兼朗に問い質す。

先ほど廷兼朗は、井上が勝てる就叫んでいた。だが荒涼には、井上が勝てるような状況には見えなかった。

「確かに、変わった念話能力ですな。井上さんの体調を顕著なまでに阻害している。目に見える攻撃よりも耐え難いでしょう」

ですが、と廷兼朗は一拍置いた。

「自分が苦しいときは、相手も苦しいのです。戦いとはそういうものだし、またそうあるべきだ」

廷兼朗はついと指を上げ、神在を差した。

「決着は一瞬です。ちゃんと見ないと」

その言葉を受けてから荒涼が試合場を向いたとき、井上の拳が、何故か神在の顔面に突き刺さっていた。

まさに、一瞬の出来事だった

突然、脳内を満たしていた激痛が嘘のように晴れた。体の感覚も、

目の焦点も元に戻っていた。

「うおおッ！！」

頭痛の余韻が残る体で、一発の右ジャブを奔らせる。

戻すことは考えない。出したきり、肩が外れても構わないほど渾身の拳打。

そのままどこまでも、どこまでも飛んでいけばいい。敵の急所目掛けて、ひたすらに進めば、それでいい。

今、この一撃のみが、彼の根限りだった。

苦渋に歪んだ神在の顔が、またも引き締まる。井上の脳内に閃光が瞬き、神在の姿も、自身の右腕さえも見失う。

風を切る拳の感触が、手応えを告げる。拳の先からつま先まで痺れるような衝撃は、会心の打撃の証明だ。

膨らみかけていた頭痛が消え、視界が晴れる。目の前には、目を見開いて睨み付ける神在がいた。

(フオローを……)

相手はまだ立っている。急いで左を被せないといけない。

返しの左ストレートを放とうとしたとき、ストンとリングが木から落ちるように、神在の体が拳から離れた。主審が駆け寄り、カウントを取ろうとしたが、全く反応がないのを確認して試合を止めた。

試合の開始から極度に集中していた神在が、念話能力を緩めた僅かな隙に、右のリードブローで的確に顔面を打突した。まさに寸分の際に放たれた、果断の一撃だった。

「拳面が人中に入っていた。あれは堪らないな」

人体の急所である人中を射抜かれれば、如何なる人間も昏倒を免れない。井上の指の付け根は神在の上唇と鼻の間に、見事に命中し

ていた。

「おめでとうございます。井上さん」

試合を終えてきた井上を労うように、廷兼朗が声を掛ける。

「ああ……」

挨拶もそこそこに、井上は控え室へと戻っていった。そんな余裕さえ無いのだろう。足取りもやはり重い。

廷兼朗は井上の勝利を確信していたが、それは決して楽な勝利ではなかった。

念話能力が緩む隙を見出すまで粘り強く辛抱した井上と、ほんの一瞬だけ緩めた以外は、人中を打突される瞬間まで集中していた神在。能力如何というよりは、互いの精神力の争いだった。

殆ど能力による戦闘だったが、こういう、人の本性を剥き出しにして競わせるような戦いは、廷兼朗の非常に好むところだった。

次は準決勝である。

これまでの試合のダイジェストを挟んでから始まる。それまでに、よく体を休ませ、備えねばならない。

G・1トーナメント準決勝！！！！！！

準決勝第一試合。廷兼朗の相手は、控え室で絡んだ、あの口の悪い能力者だった。名前は柏尾手塩かしおてじおという。

ここまで勝ち上がると言うことは、それなりの実力者なのだろう。控え室でのやり取りは一先ず忘れ、平常心で臨まねばならない。

「よく勝ち上がったな、レベル0。どんな手品を使ったんだ？」

柏尾の顔や口ぶりに品性の欠片も感じられないのは、廷兼朗が無意識に彼を見下しているためか、あるいは本当に、そういう本性の持ち主だからか。

「それはこれから、お見せしますよ」

「ふん。少し格闘技を習ってるようだが、所詮はレベル0だってことを思い知らせてやる」

「ありがとうございます。人間、初心を忘れてはいけませんからね」
「言ってる。レベル0が」

吐き捨てるように言い、柏尾は開始線に戻ってゆく。

よほど「レベル0」という言葉が好きなのだろう。この短いやり取りの間に三回は聞いた。案外悪い人じゃないのかも、などという妄想が過ぎり、廷兼朗は一人で吹き出した。

どうやら自分はきちんとリラックス出来ているようだ。これならば良い試合が出来るだろう。

「ファイッ！」

主審の掛け声で試合が始まる。試合場の気温が一気に下がり、冷気が廷兼朗の肌を撫でる。

幻覚ではない。実際に気温が下がっている。それが柏尾の能力、

『絶対低温』アイシクルオーレベル4である。対象の温度、主に低温域を自在に操

ることが可能な能力である。

早速自身の周囲の温度を低温にしているのだろう。だが、そんなものは柏尾にとって兎戯にも等しい。さらなる能力行使の軽い準備体操ではない。

急に冷気が濃くなる。皮膚にそつと触れるようなものではなく、肉の奥まで突き刺すようなものに変わる。

咄嗟に身を翻し、廷兼朗はその場から離脱する。元居た場所で、ガラスの割れるような音が響く。

ちょうど廷兼朗の首から上の位置に、突如氷が発生していた。冷気の変化を察せなければ、今頃頭が氷付けになっていた。

空気を含んで白く染まった氷が、床に落ちて碎ける。

対象領域の気温を零度以下にまで操作し、空気中の水分を一瞬で氷結させる。『絶対低温』アイシクルオナー ならではの攻撃である。

柏尾は続けざまに、避けた廷兼朗の体に氷を発生させる。滅多矢鱈にガラスを割るような甲高い音が、ひっきりなしに鳴り響く。

何千人もの人間が居て、これまでの戦闘でふんだんに汗を含んだ会場の空気は、十分な水分を帯びている。柏尾にとっては戦いやすい状況であった。

それでも、氷が廷兼朗の体を捉えることはなかった。力感の無い動きで縦横無尽に試合場を走り回る廷兼朗の行動を予測することは、柏尾には困難だった。

荒涼や井上の素晴らしい試合を見て、改めて気合いを入れ直した廷兼朗の感覚は鋭敏となり、体の隅々まで氣息が充溢していた。

少し気を凝らせば、相手の攻め気はおろか、自分の内蔵や血流、毛髪一本の動きまで手に取るように分かる。

電荷が交換され、電界が変化する。ほんの僅か、千分の一ミリだけ、産毛が反応する。

(……遅い)

何と遅いことか。電荷の交換を感じ取ってから攻撃が届くことの、何ともものんびりとしたことか。

絶好調の廷兼朗の目付けは、柏尾の氷結攻撃を完全に把握していた。

廷兼朗の回避が冴え渡り、会場が静まりかえる。致命的な攻撃に晒されていることを微塵も感じさせないディフェンスに、皆が見惚れていた。

そんな中、白井は苦虫を噛み潰したような顔で観戦していた。

「どうしたの？」

隣に座っていた網丘が声を掛けると、白井は躊躇いがちに切り出した。

「相変わらず、廷兼さんは避けるのがお上手ですわね」
フアービジョンサイコメトリ

予言か読心を使っているとしたか思えない、あまりにも見事な回避は、かつて白井も目の当たりにしたことがある。

「以前、皮膚感覚で準静電界を感じているということをお話しされましたが、本当にそれだけなのですか？」

皮膚から生える微細な毛髪は、大気中の電気にも反応する。それを感じ取り、離れた相手の動きを読む。

理屈は分かる。だが、それだけでこうも能力者の攻撃を避けられるとは、やはり白井には思えず、この際だからと網丘に質問をぶつけてみた。

「それだけ、ではない。勿論、五感をフルに活用しているわ。問題は、そこから得られる情報の受け取り方」

要領を得ない様子の白井に、網丘が優しく語りかける。

「正中線、という言葉は知っているかしら？」

「正しい姿勢の線ですわよね」

「そう。人の重心のあるべき場所であり、真に姿勢を正した、人としてあるべき理想の形の一つ」

網丘は頷きながら、空中にすつと一線を引いた。

「『カウンターメジャー対抗手段』でも、正中線の体得には力を入れている」

自身の正中線を正すことは、多くの武術が取り入れていることから分かるように、非常に重要な訓練である。人体の根本に関わることである分、完全に極めることは至難だ。

正しい身体運用法を身につけ、その状態で武術の型を習得する。それが出来れば、技は自ずから速まり、攻守共に万全となる。

正中線を正すことは、身体の歪みを取ることであり、体を動かす際のエネルギーのロスを限りなくゼロにする作業である。身体に一切の歪みのない状態で技を行使すれば、それはつまり力の齟齬が存在しないので、自分が発生させた力を百パーセント発揮することが可能となる。

正中線の効果は、それだけに留まらない。

「『人の振り見て我が振り直せ』という諺ことわざがあるけど、その逆もまた然り。自分が優れた正中線を有していれば、相手の正中線の歪みが浮かび上がって見える」

相手の正中線が分かれば、それは相手の姿勢や重心を把握することであり、自ずと相手の次の行動や意図まで逆算できる。

「体の歪みが分かれば、重心の在処が分かる。敵の狙いが分かる。敵の攻め気が分かる。敵が動く遙か前にそれらを察知するのだから、申し合わせたように躲せるのは道理よ」

五感に加え、準静電界、正中線などを組み合わせ、多角的に相手を観察する。それを戦闘の最中に行うのだから、殆ど無意識に、反射的でなければならぬ。

「ちゃんとしっかり練習すれば、誰でもこういうことは出来るし、多かれ少なかれやっているのよ。廷兼朗は、特別な人間ではないから」

白井は以前にも、廷兼朗から似たようなことを言われていたが、彼女にはそれが途方もないことであるように思えていた。

「超能力者ではない、ということですか？」

「超能力に限った話ではない。例えばスポーツをやっていて、筋が良いとか表現するでしょう。人より早くコツを掴むような、そういうちょっとしたことさえ、彼は出来ない。骨の髄まで普通の人間なのよ」

どうやら網丘は、白井の考えていたこととは違う意味で、廷兼朗は普通の人間だと言いたいようだ。

語る内容とは違って、網丘はにやりながら明るく笑っている。

「普通であるが故に、彼の身につけた技術は誰にでも通用する。無能力者にも、能力者にも、誰にでも普あまねく通じる」

だからこそ、『カウンターメジャー対抗手段』に協力する資格がある、と付け足した。

体から失われる熱量が生成される熱量を上回り、血流が緩慢になると、体全体の活動が鈍り、思考さえも停滞し始める。

そして体温の低下がある一定を超えると、筋肉の痙攣が治まる。これは昏睡状態に陥る一歩手前の症状で、進行すれば心停止に至る。

低体温症では、二十八度がデッドラインと言われている。だがそれはゆっくりと静かに体温が低下した場合であって、恣意的に気温を操作する相手の存在は想定していない。

体が動けなくなるだけなら、三十一度ほどまで冷やせば十分だろう。その時点で、他人と戦う、などと言える体調でなくなるのは確実だ。

試合場に舞うダイヤモンドダストの量が増え出した。柏尾はあくまで気温を操る能力者であり、念動能力者テレキネシスのように氷を動かすことは出来ない。それでも急激な気温の低下によって気流が変化し、風に巻かれてキラキラと細氷が瞬いている。

廷兼朗の吐く息はとつくに白い。動くたびにバリバリと、道着や袴が音を立てる。吸った汗が凍りついてしまっているのだろう。同じく汗のついた皮膚には、冷たさと共に突き刺すような痛みを感じる。

今は激しく運動しているため、失う熱量よりも生成される熱量のほうが多いが、その均衡もいつかは崩れる。

柏尾の狙いは、最初からこの展開だったのだろう。氷で直接攻撃するのではなく、全体の気温を低下させて活動を緩慢にする。大規模な能力行使が可能なら、大能力《レベル4》ならではの力業である。

このような戦略は、廷兼朗にとって観面だ。どれほど相手の意図を読み、気配を察しても、気温からは逃れられない。生身の人間が

防ぐには余りに広範で、寒々しいほどに容赦がない。

どれほど鍛え、技を磨いても、普通の人間が気温を変えられる道理はない。廷兼朗は為す術もなく、零下の世界で耐えるほか無い。

(そうだ。それでいい……)

しばれる体に鞭打って、ステップワークをさらに研ぎ澄ます。霜が降り始めた床を滑るように縫い、自分に向かって発生する氷をすり抜ける。

途方もなく強大な力に対して、何の変哲もない、普通の人間が抗う。それこそ『カウンターメジャー対抗手段』の本懐である。ならばこの状況こそ、その運用に適していると言える。

霜が降り、水蒸気が凍り、大気が熱を失う。その程度で人が屈すると思うのか。本当に倒したいのなら、とつとつその手で触れて、氷漬けにしまえばいい。

俺が近づくことを恐れるお前も、等しく同じ人間に過ぎない。自分の力を誇示したくて仕方のない、一人の人間に過ぎない。

その程度の覚悟では止められない。止まりもしない。俺は弱いものだから。超能力の一つもなく、才能の一つもない、普通の人間に過ぎないのだから。

か弱い俺は、例え超能力者にとっては撫でると変わらぬ力でも、過剰に反応しなければならぬ。全身全霊を以て返さなければならぬ。それが無能力者から、能力者への最大の礼儀だ。

低体温症・凍傷を防ぐには、血行の悪い部分を作らないことが重要である。筋肉を全方向に動かし、こわばらせないよう心がける。

つまりは、動き続けるしかない。

廷兼朗はさらにギアを上げる。動いて動いて動きまくって、熱を

生成するしかない。寒さに凍えて止まったとき、廷兼朗は敗北する。

遠距離から観戦している観客でさえ追うのが難しいほどの速度で、一瞬たりとも一所に留まらず、二十メートル四方の空間を駆ける。

間近に対峙している柏尾や主審は、見失うこともしばしばだった。

「速い、ですわね」

思わず、白井はそう漏らした。

「速度は大したことはない。あれくらいで動ける能力者だっている。確かに能力によって、身体の高めることは出来る。事実、風力使い《エアロシューター》の井上はそれを第一回戦で見せていた。空間移動と見紛う井上のステツプインに比べれば、若干目劣りはする。」

だが、廷兼朗の移動は能力を伴っていない。生身の身体能力のみで超能力を回避している。

「単に速いだけなら、柏尾選手にとっては攻めやすいでしょう。でも廷兼朗のステツプワークは、合間にフェイントを入れているのよ」

「フェイント？」

「ステツプイン、肩や手足を入れる動作、目線などを高速移動に組み入れると、面白いことが起きる」

網丘が含みように笑いかける。

「速度が増すのよ」

「速くなるのですか？」

ふるふると首を振り、網丘がゆっくりと言う。

「相手の体感速度が跳ね上がる。自分で勝手に、速く感じてしまう。フェイントの技術は、格闘技者ならば珍しいものではないだろう。足を少し上げてみたり、手を動かしたり、肩を入れたり、目線を動かしたりといった何気ない動作を無数に積み重ねた先に、ようやく相手と接触するという段階を踏む。」

フェイントすら無駄と断じ、余計な動きを一切見せず構えると言うのも一つの手段だが、廷兼郎はまさにその逆を行っていた。

巧みに相手の死角へと動き、フェイントによってプレッシャーをかけ、さらに視野を狭窄させる。自然、相手は廷兼郎の姿を追いながら、フェイントも処理することになる。当然、反応が後手後手となり、姿を見失うのは時間の問題である。

「自分のことを観ていない相手を倒すことなど、失敗する方が難しい」

予測していない方向からの攻撃に、人は脆い。それは能力者と言えども例外ではない。

「そろそろ、仕掛けるわよ」

網丘が言うと、廷兼郎は体に張り付いていた氷を溶かし、湯気を上げながら突進していた。単純な直進ではなく、小刻みに体を揺すりながら最大戦速で接近する。

白い煙を伴ったの突進は、まるで陽炎が吹き寄る様に似ている。

井上とは違うやり方で、廷兼郎は姿を消した。

G・1トーナメント準決勝！！！！三

柏尾の予想通り、彼の攻撃は廷兼朗を止めるに至らなかった。

どのような絡繰りか分からないが、奴は能力による攻撃を全て把握している。その体を狙った攻撃では捉えきれない。

口惜しいが、そういう部分ではあの無能力者《レベル0》に軍配が上がる。しかしそれは、決着を意味していない。

(もう、やり方は分かってるぜ)

攻撃を見切り、避けるのが上手ならば、避けきれない攻撃に巻き込んでしまえばいい。実際、試合場全体の気温の低下は堪えたように、必死になって体を動かして、凍えないようにしている。

(その分、動きがあり得ないくらい速くなっちまったが……)

どちらにせよ、速いだけでは避けきれない攻撃を行うのだから関係はない。『絶対低温』アイシクルオナーの最大出力で、奴を氷漬けにする。

廷兼朗の姿が白い霧に紛れて消える。来るのを確認してからでは遅い。その前に、一気に発動させる。

「食らえッ！！」

演算終了とともに、柏尾は吼え上げた。

氷点下八十九度。それは一九八三年、南極のヴァストーク基地で観測された地球上で最も低い温度とほぼ同じであり、あらゆるものを凍結させるには十分な温度であり、柏尾が生み出せる、最大低温度でもある。

柏尾の周囲が瞬時に凍りつく。急激な温度変化に耐えきれず、試合場の床が断ち割れ、氷結した水蒸気が爆発するように広がる。

爆裂音と白煙が、試合場を包み込んだ。

瞬間的とはいえ、氷点下八十九度の極低温を発生させた空間にいて、無事で済む生物は存在しない。それはつまり、大能力《レベル4》が無能力《レベル0》に負けるはずはないことを表わしている。「レベル0にしては、やるほうだったな」

まさか無能力《レベル0》に全力を出すことになるとは思っていなかった柏尾は、白い霧の中で呟いた。

すぐにでも主審が氷漬けになった無能力《レベル0》を発見し、試合を終了させることだろう。それとも、防護スーツに身を包んだ審判もくたばってしまったか。

「お褒めに預かり、光荣ですな」

ひんやりとした、鉄の刃を押しつけられたように、全身を寒気が走った。

柏尾が声を上げる間もなく、首の周りに何かかするりと巻き付いた。道着の冷たさも相まって、柏尾の頸動脈は即座に鈍り、眠るように昏睡した。

氷結した水蒸気の霧が晴れると、ようやく主審が試合の終了を宣言した。

延兼郎が勝ち名乗りを上げて、観客は呆気に取られたままだった。

白い靄に紛れながら延兼郎が突進し、それに反応して柏尾が爆発したと思いきや、霧が晴れてみれば、倒れているのは柏尾のほうだった。

何が起こったのか分からない観客が、VTRを要求する。

程なくして、スロー編集された映像が巨大スクリーンに映し出される。

VTRでも明確に映されていないが、爆発が起こる寸前、廷兼郎らしき影がその範囲から飛び退いていた。次に廷兼郎が確認されるのは、柏尾の背後に現れたときだった。

「文句の付けようが無いわね」

嬉しそうに、網丘が漏らした。

近づいて相手の攻め気を誘い、攻撃が来た途端に有効範囲から退き、油断するのを待って背後から締め落とす。

凍傷は負ったが、これ以上なく理想的な勝ち方だった。大能力者《レベル4》を相手に最低限の被害で、最高の戦果を上げてくれたのだから、網丘としては喜ばしい限りだった。

「それだけのことが出来るなら、ここまで長引かせる必要は無いのでは？」

苛立ち紛れに、白井が言い放った。

「どうして？」

「あんな簡単に背後に回れるなら、さっさと回ればいいと思いますの。いちいち相手の攻撃を待つ必要がありますの？」

白井のその言葉を、網丘はくすりと笑った。

「簡単について言うけどね、あの子はあなたと違って、テレポートが使えるわけじゃないのよ。ああして最大の攻撃力を誘発させてこそ、背後を取れる隙が生まれたの。逆に言えば、そうでもしないと背後に回れないほど、廷兼郎の足は遅いのよ」

諭すように説明する網丘の口調には、何とはなしに責めるような棘があった。

廷兼郎が息を尽くして行なったステップワークを、簡単に、なぞと言っただけはなかった。特に能力者には、言ってもらいたく

なかった。

零下十度前後という極限状態でなお体を動かした技術に、一切の超能力は使用されていない。平時と変わらず、普通に運用することを証明して見せた廷兼郎に、網丘は頭を下げたい気分だった。

自分の教えを信じ、自分の理論を証明してくれるというのは、指導者としてこの上ない幸せである。

試合が終了すると同時に、廷兼郎は急いでシャワー室へと向かった。

そこらに道着を脱ぎ捨て、シャワー室に飛び込む。体温に近い温度に設定し、全身をもみしだきながらお湯を浴びる。

「あ、あぎい……ッ！」

声にならない声を上げながら、廷兼郎は熱湯を浴び続けた。痛むのは当然である。真つ白だった廷兼郎の皮膚は、湯を浴びることに赤みを取り戻し、それに伴って赤く腫れ上がり、焼けるような痛みを訴え始めた。

典型的な凍傷の症状である。『絶対低温』と戦うと分かったときから、当然許容すべきことだと覚悟していた。氷点下の空間で動き回り、焦った相手からの最大低温攻撃を誘発し、活動できるギリギリの気温まで落ち着かせてから、背後を取ったの裸締め。

あと半径一メートルほど有効範囲が大きかったら、確実に廷兼郎はその場で絶命していたことだろう。それほどに最後の低温攻撃は致命的だった。だが、能力者の多くは自分の体を基点にして演算を行なうことが多い。威力の高い攻撃ほど、その射程が短くなることは織り込み済みである。

先ほどの戦いを振り返りながら、廷兼郎は熱湯を体にくまなく浴

びせていた。

凍傷を受けた部位は、早急に暖める必要がある。理想的なのはマツサージなどを施しながら、徐々に温度を上げる方法である。いきなり熱湯の中に患部を浸すのは薦められないが、それ以外に方法がない場合は、その限りではない。

じんわりと体に熱が浸透し、感覚が蘇ってくる。特に冷えの酷かった足裏の部分は、ようやく地に着いた心地になった。

この鈍痛と灼熱感、すぐには抜けないだろう。恐らく皮膚の感度は　　平時に倍するものとなるはずだ。

「く、くく……」

焼けるような痛みの中で、廷兼郎は薄く笑う。

この全身を覆う痛みは、廷兼郎の味方である。痛みは、感覚を阻害するものではない。むしろ痛みが感覚を増幅する。問題はそれを受け取る側にある。然るべき覚悟を整え、皮膚が訴える情報に真摯に向き合えば、必ずや応えてくれる。例え凍傷で傷ついていたとしても。

そんな状況において、廷兼郎は笑うしかなかった。

「字緒、いるか？」

シャワー室のガラス戸を叩きながら、野太い声が響く。共にG1グランプリに参加している荒涼阿刀次こうりょうあとうじの声だ。

「荒涼さん？　試合はどうしたんです？」

「お前らの戦闘で、試合場の床が壊れてな。改修が終わるのを待つてるんだ」

廷兼郎が「そうですか」と答えたり、会話が途切れる。

荒涼がこの後に臨む試合は、彼にとって因縁浅からぬものである。これまで二度も負けた相手への雪辱戦である。時間を持て余しているとはいえ、こんなところで油を売っていいはずがない。

何か重大な用件があるのだと感じ、廷兼郎は荒涼自身が切り出してくれるのを待った。

「セコンドに、付いてくれないか？」

「いいですよ」

「対戦相手にこんなことを頼むのも、おかしいと……、あれ？」

「いいですよ、セコンド。やりますよ」

うきうきした声で廷兼郎が答える。荒涼が続けようとした言い訳が、そこで断たれてしまった。

「お前なあ、少しは躊躇えよ。頭ひねった俺が馬鹿みたいだろ」

「荒涼さんがちゃんと僕の教導を受けていたか、きちんと見れるいい機会なんで、一番近くで見せてもらいますよ」

荒涼は風紀委員として、廷兼郎の教導訓練を受けている。確かにその教導の中には対能力者戦闘術も含まれているので、それを荒涼がどれほど身につけたのか、廷兼郎はこの際間近でみてやるとうい気になっていた。

「そつちかよ！」

「そつちですよ」

二人はガラス越しに笑いあう。勿論のこと、それだけが理由ではない。

「頼むぜ、字緒。俺、あいつに勝ちてえよ」

ため息のように、荒涼が重く言った。その思いを、廷兼郎は真っ向から受け止める。

「勝てますよ。荒涼さん」

それは安請け合いと言うには、あまりに画然とした語調だった。

残すところあと二試合となったG-1トーナメントの控え室は、当然ながら荒涼と、彼のセコンドを務めることになった廷兼郎しかない。

荒涼は一応廷兼郎の教え子であるため、荒涼に勝ってほしいというのが正直な心境だった。だからこそ、荒涼からセコンドについてほしいという要望を受けたとき、二つ返事で了承した。

どちらが決勝に上がるとしても、その戦いぶりを間近で観察できることも魅力的だった。

廷兼郎が提案した作戦は、頭部を守って足にタックルすること。それだけである。

荒涼の反射神経とバランスでは、井上の打撃を見切ることが期待できない。ならば最初から被弾覚悟で防御を固めるべきである。そうすれば、荒涼の『オートリバース肉体再生』が生きてくる。頭部を打撃されて意識を寸断されない限り、ダメージは『オートリバース肉体再生』が即座に治癒させてくれるので、普通の人間では考えられないタフネスを発揮するだろう。

「審判の勧告は無視していいです。こちらからは手を出さないでください。元よりポイントじゃ勝てません。迂闊にガードを外せば、切って落とされます」

「ああ。分かってる。焦れてでかいのを放ってきたら、タックルして、投げる」

肩を解しながら、廷兼郎は首を振る。

「飛びつくと同時に投げの体勢に入るのが理想です。井上さんに間断を与えてはいけない」

「……分かった」

荒涼に入念なストレッチを施しながら、対策を話す。

「なあ、字緒」

それを神妙な面持ちで聞いていた荒涼が、自分から口を開いた。

「この作戦は、井上がポイントアウトを取らないことが前提だよな」

G 1トーナメントの試合形式は、五分三ラウンド制である。それでも決着が付かない場合は、三人のジャッジによる採点形式の判定で決着する。これによって勝つことをボクシングの用語に倣^{なら}って、ポイントアウトとも言つ。

「……前の、俺と井上の試合、見たか？」

「いいえ。見ていません」

そうか、と残念そうに漏らし、荒涼はゆっくりと話し始めた。

「一番最初に、お互い高一のころやり合ったときは、出会い頭のタツクルにカウンターを合わせられた。二度目は、判定負けだった。勿論、フルマークだった。手も足も出なかった。少しだけ、あいつの服の裾に、指が掠った。それだけは、よく覚えてるんだ」

静かな語り口にも関わらず、荒涼は段々と息を荒げていく。

「あいつは速い。能力が無くたって、俺は追いつけないかも知れない。この一年、あいつだって鍛えていたんだ。あの気が狂ったようなスピードに、さらに磨きが掛かっている。風に乗って逃げられたら、俺は、また……」

「服に触れたのでしょう」

震える荒涼の押さえつけるように、ぐっと肩を握りながら、廷兼朗はびしやりと言いつ放った。

「試合を見ていないので、如何せん細かな展開は分かりかねますが、聞く限りでは、井上さんのフットワークに荒涼さんが追いつけなかったようですね」

これから試合に赴く選手の負けた試合について語るなど、モチベーションを下げるだけである。

しかし、廷兼郎は戦っているときと違って、こういうときにずりと身を避けることが出来ない。

雪辱に臨む人間の激情を、受け流すことは出来ない。それが大切な友人ならば、なおさらである。

「最初の立ち会いでは、タックルへのカウンター。タフネスに自信のあるブルファイターを黙らせるには、最良の戦略です。可能な限り行うべきだ。では何故、二戦目は長引いたのですか？」

「カウンターを警戒したから、食らわなくなった。あいつの拳の質は軽い。見えないほど速いけど、これというもの以外は効かない」
荒涼の答えに、廷兼郎は頷いた。

井上の超高速拳打を可能とするのは、持ち前の『風力使い』《エアロシューター》による加速である。恐らくは自分の周囲の気流を高速度で運動させ、体を後押ししているのだろう。

そのために犠牲になっているのは、打撃の要である体重移動だ。

井上の能力による加速は、人間の限界を容易に超えた速度を生み出している。だからこそ、風に押される体の速さに体重移動が追いつかない。初弾などのこれと決めた拳打でなければ、まず腰は入らない。連打を意識すればするほど、手打ちになってしまう。

「あの速度と回転で腰の入った打撃が来たら、俺は首を括るしかないな」

「そのときは、僕も一緒に括りますよ」

話を戻しますけど、と断り、廷兼郎は続けた。

「つまり二戦目は、井上さんが荒涼さんへの決め手を欠いていた、と考えた方がいいでしょう。あの速度で動く相手を十五分間追いかけるなんて、誰にでも出来る作業じゃありません」

ああ、と低く荒涼は唸った。

頭では分っていた。この一年間、片時も忘れていなかった。その可能性は勿論考慮していた。でもそれは、善戦したんだという自己満足にしかならない気がして、心の奥の奥へと仕舞い込んで、自分の至らなさにしか目を向けていなかった。

自分が分かっていることを、人に言われることの、何と安心することか。小憎らしいほどに、こいつは戦う人の心というものを分かっている。

廷兼朗にセコンドを頼んで良かったと、荒涼は改めて実感した。

「一回目はカウンターを食らわせたが、二回目はそれが出来なかった。だから、判定勝ちを狙った」

「……三回目。どうなるかな？」

「それを、見せてもらいに行きましょう」

「応!!」

雄雄しく頼もしい気合で応え、二人は試合場へと向かった。

準決勝第二試合。いのうえしゅんま こくりょうあつじ井上駿馬対荒涼阿刀次の試合である。ちなみに、
今年のG 1トーナメント決勝戦と同じカードである。

試合場で対峙している二人は、顔を俯かせて互いに顔を見ようとしない。昨年に負けている荒涼の心境は、並々ならぬものだろう。

「まずいか……」

廷兼朗が苦い顔で呟く。荒涼は気合いが入りすぎている。念願の雪辱戦へ臨むにあたって、平常心でいることは確かに難しい。それでも気負いすぎれば体が鈍り、百パーセントのパフォーマンスが出せなくなってしまう。ますます勝利が遠のいてしまう。

井上と荒涼のスピード差は、確かに絶望的なものだが、廷兼郎はそれほど悲観してはいない。何故なら今の荒涼には、井上を捕まえる武器がある。二回戦で見た無足からのタツクルが使えれば、井上を捕獲できる。

あれが行なえれば、最初の一触で捕獲することも夢ではない。

(それでも、盤石じゃない)

荒涼の無足タツクルは、あくまで偶然の産物に過ぎず、完全に習得したわけではない。欲を言えば廷兼郎のように、間合いを詰める動きにも無足を応用出来ればいいが、そこまでは望めない。

(……くそっ！)

こんなことなら、もっと荒涼に『対抗手段』を教えておけば良かった。

先輩とはいえ、自分の教導を受けてくれている生徒である。出来れば勝たせてあげたい。もっと力を貸してやりたい。

ライバルであり、先輩であり、教え子でもある人間のセコンドを務めるに当たって、廷兼郎もまた戦っていた。

「ファイッ！」

試合が始まると同時に、両者が構える。井上は開始直後から仕掛けてくるかと思われたが、意外にも静かな立ち上がりを選んだようだ。

(警戒、しているな)

勝っているとはいえ、二度までも戦った相手である。手の内は把握されているという考えが、井上を急がせない。

荒涼は手を軽く曲げて前に出し、低く腰を落とす。分かりやすいほどのタツクル狙いである。

その構えを見て、廷兼郎の背筋が震える。

廷兼郎は頭部のガードを固めるよう伝えたのに、荒涼は殆ど顔をガードしていない。神速を誇る井上を前にして、それは見ているものさえ危なげな気になるほどの無防備さである。

緊張のあまりの不注意ではない。明らかに意図してのことである。

（大丈夫なんですね、荒涼さん）

誘っている。頭部の急所に打ち込んでこいと、井上に叫んでいるのだ。防御よりも、相手の攻撃を誘発することを優先したようだ。それもまた面白い。廷兼郎はそう思い直し、見守ることにした。

こつもあからさまに晒されて、すんなりと打ち込むと言うのは難しい。不自由な二択と同じような状況だろう。

他人の思惑に乗るのは、人間誰しも嫌なものである。僅かな逡巡が躊躇いとなり、体を硬直させ、リズムを崩してゆく。悪くない作戦だ。

そうこうしている間に、荒涼は少しずつ間合いを詰めてゆく。その倍以上の速さと距離で、井上は即座に離脱する。

あつという間に射程圏内から逃げられても、荒涼に動揺は見られない。このような事態は一年前から想定しているので、心も体も全く揺るがない。

とても良い傾向である。相手を追跡する準備は既に整っている。

逃げるのならば十五分間フルに使って、プレッシャーをかけながら追い詰めればいい。

十五メートルほど離れたところで、井上は逃げるのを止め、体を揺すり始めた。

（……覚悟を決めたか）

井上のリズムの取り方が、縦揺れから横揺れに変わっている。十五メートルも離れたところから、拳を打ち込むタイミングを計っている。

相変わらず常識外れの射程距離である。球技のように離れた場所から打突の思案をするなど、廷兼郎には想像もつかない。

初弾を打ち込む覚悟を、ようやく決めたのだろう。遅きに失してはいるが、やらないことには展開に変化は訪れない。

荒涼も察したのだろう。無理に距離をつめようとせず、ゆっくり静かに、今までと同じように進んでいく。相変わらず、顔の防御は乏しい。

試合開始から、ようやく一分が経過したとき、井上の姿が掻き消えた。踏み込む力に自身が発生させた気流を上乗せし、彼の体が前方に射出される。

一回戦で見せた、あの踏み込みである。観客席から見たときさえ見失ったが、セコンドとしてより近い位置で見ると、それは人体の運用を根底から覆すものと改めて思い知らされた。

見てから対応するのでは、あまりにも遅過ぎる。気を読み、体を観ていないと間に合わない。

これまで二度戦っている荒涼ならあるいは、井上の踏み込みを事前に察知できるかもしれない。出来るからこそ、タックルに集中するため顔のガードを緩めたのだろう。

そんな廷兼郎の期待を裏切るように、二つの打撃音が木霊した。

音速に限りなく近い速度で襲い来る右拳が、荒涼の左腕をすり抜け、真横から顎を叩く。拳を戻すと同時に、顎が反対方向へ跳ね上がり、首が派手に抜ける。

会心の手応えだ。まず脳震盪は確実。意識さえ喪失しているかもしれない。井上はくるりと体を入れ替え、バックステップで遠ざかる。

今度も勝った。二戦目のような逃げ延びる勝ち方ではない。真っ向から、力で捻じ伏せた。これほど嬉しいことは無い。

井上はこれまで一度たりとも、荒涼を舐めたことは無い。むしろ彼こそ、もつとも警戒すべき相手だと認識していた。

『オートリパース肉体再生』による無類のタフネス。それに物を言わせた、一見強引にも思えるタツクル狙い。そして自分の筋繊維が破断しても一向に構わないことから生まれる、脱出不可能の頑強なクラッチ。あのパワフルな前進を受け止められる能力者は、決して多くないと井上は評価している。

そんな荒涼を、自分の拳で打ち倒した。それはつまり、一年前からの力関係がほぼ変わっておらず、自分の行ってきたことが正しかったのだと証明されたに等しい。

勝利は麻薬に近い。他人を負かし、自分が勝つということは、自己の存在が全面的に肯定されたと言うことである。少なくとも当人にとっては、そういう意味合いがある。

認められる、許されるなどという次元ではない。自分の全てが、幾らの瑕疵もなく、満遍なく肯定されているのだ。その状態が生み出す多幸感は計り知れない。それが強いと認めた相手ならば、なお

さらることである。

(勝ったぞ、荒涼！ 見ろ、お前に勝った、俺を！！)
歯を剥いて笑顔を作る井上の心の声を聞いてか、荒涼がぐるりとこちらを向いた。

尻の穴が窄み、舌先が甘く痺れる。踏み込んだ勢いのまま、敵を通り越す僅かな間。荒涼は井上を真正面に捉えていた。

本来ならば後姿を見ながら、遠ざかっていくはずなのに。

荒涼の体が沈み込み、額が鳩尾を勢いよく打つ。その腕がぐるりと井上の腰に回るのを、彼は甘んじて受け入れた。

その攻防を見ていた廷兼郎は、涙を堪えるのが精一杯だった。

廷兼郎は、荒涼がガードを下げていた意味を履き違えていた。井上の攻撃を捉える自信があったのではない。むしろ無かったのだ。だからこそ、為す術も無く食らった。

荒涼が考えたのは、その後の展開だった。井上の打撃をわざと受け、意識を喪失し、先ほどと同じ展開を作り出した。無足タツクルを成功させた、あの展開に。

あの時、荒涼はカウンターで蹴りを食らい、意識を寸断され、それがむしろ体をリラックスさせる効果を生み、足で地を蹴らない歩法、無足を成功させた。

井上の拳が、一撃で意識を喪失するものだという確信と、意識を喪失させた後でこそ相手を仕留めるといふ覚悟が生んだ、執念のタツクルである。

(そこまでして、勝ちたいのか)

当然だ。勝ちたいに決まっている。二度も負けた相手なのだ。今

度こそ、今度こそ勝ちたいに決まっている。

敵の攻撃を受け止める不安。意識を喪失する不安。それらを乗り越えた荒涼の決意に、廷兼郎は感極まっていた。

「荒涼さん、投げて！　ここで決める！！」

歓声に負けないよう、声を張り上げる。自分が出れることは、見届けること。そして、応援すること。

「ずあッ！」

満を持して行われる第一投。二回戦と同じ、ノーザンライト・スープレックスだ。背をいっばいに伸ばし、高くリフトさせて、鋭い角度で首から落とす。

バシン！！　空気が割れるような派手な音が炸裂する。大技が決まり、一層歓声が高くなる。

そんな中、廷兼郎はひゅうと息を呑む。そのせいで応援していた声が止まってしまふ。

荒涼は淀みなく、次の投撃へと移行する。負けてからの一年、何度もイメージして練り上げてきた動きは、見惚れてしまふほどスムーズだ。

クラッチを外さぬまま、体を井上に被せ、またも引つ張り上げる。もう一度ノーザンライト・スープレックスの態勢だ。持ち上げられぬよう井上も抵抗してはいるが、荒涼の背筋はそんな動きをもともせず、殆ど寝ている態勢から一気に引き抜く。

今度は高く上げず、小さく巻き込むように、素早く回転させて叩きつける。

それはまたも、大きく派手な炸裂音を響かせる。

廷兼郎と荒涼が、同時に唸った。それは感心した声であり、苦渋の音でもあった。

通常、投げることによって大きな音上がるのは、背中から上手

に落ちたときである。首から落ちた場合は、背中であつたときよりも音は小さい。その代わり、聞くだけで不安が募るような鈍い音がある。

荒涼の投げは、一貫して首狙いである。よほど実力に差があると確信しない限り、彼は相手を背中からは落とさない。

首から落とす投げは、プロレスでは禁止されるほど危険だが、荒涼は自分が認めた相手に、そのような気遣いはしない。むしろ気遣うことこそ失礼に当たると割り切り、殺すことも辞さない投げを行っている。

その荒涼の投げが、派手に音を立てているということは、背中から綺麗に落としてしまっていることを意味していた。

(風、か)

井上の姿勢に妙な箇所は見受けられなく、むしろぎこちないくらいである。ボクサーである井上は、受身を身につけていないのだろう。自然、井上の受身は能力によるものだと推察できる。

気流を操り、荒涼の姿勢や落ちるスピードを崩し、あるいは自分の姿勢を正し、首から落ちるはずだった軌道を外しているのだろう。さすがは大能力者《レベル4》である。その能力は、応用力も優れている。

それでも、荒涼は投げ続ける。投げのダメージが削がれているとしても、投げていることには変わらない。そしてクラッチを成功させている状況を逃すのは、荒涼にとって得策ではない。

自分か、相手か、どちらかがくたばるまで投げる。クラッチを成功させた荒涼の選択肢はそれだけだ。当然、荒涼の狙いは井上にも伝わっている。ここは力で捻じ伏せるしかない。

荒涼が三投目に突入する。投撃への防御策が風による受身だけならば、このまま押し切つて勝てるかもしれない。

(それは、無い)

これまで超能力者との戦闘を重ねてきた廷兼郎の経験が訴えていた。ここまでの展開は井上にとって、一年間の空白を測るための差し合いにすぎないだろう。

何故ならば、大能力者《レベル4》の能力行使は須らくダイナミックで、パワフルなものだからだ。

投げられた状態から、気流のみで受身の態勢を作るという芸当には、細緻を極めるコントロールが必要だろう。それもまた能力レベルの高さの証明である。だが出力としては、恐らく本来の十分の一にも満たない。

このままでは終わらない。容易ならざる戦いの本質を、廷兼郎は的確に見抜いていた。

三度目のノーザンライト・スープレックス。荒涼が寝転がる井上をリフトする。背筋をピンと正し、綺麗な姿勢のままどこまでも伸び上がる。

近くで見ていた廷兼郎は、その光景に息を呑み、目を剥いていた。

二人の体が、宙に舞い上がっていた。

傍目には、荒涼が井上を抱え上げて跳躍したように見えるが、彼の脚力では有り得ない高さである。

十中八九、井上の『風力使い《エアロシューター》』が引き起こした現象だ。

(何てことを!)

荒涼が全力でリフトするタイミングを計り、体全体に上昇気流をブチ当て、今度は井上のほうが荒涼の体重を引っこ抜いた。

一見して危険な高さである。肉体再生のある荒涼よりも、井上のほうが落下の際のリスクは高い。

しかしそれは、荒涼が井上を落とせたらの話である。

不意を突いた急激な上昇、これまでと違う高度の不安に、不動のクラッチがついに緩む。

荒涼の胸の間に出来た僅かな隙間に、井上が腕を差し込む。井上の両腕が、荒涼の肘にぐるりと巻きつく。

反射的に荒涼は腕を退いた。そうでなければ、両腕の脱臼は確実だった。

「だらあッ!」

これまでの試合で挙げたことの無いような気合を吐き、井上は荒涼の体をさらに高く投げ飛ばした。

相手の両肘を捕つての投げはダブルアーム・スープレックスと呼ばれているが、廷兼郎は地上五メートルから、さらに五メートルほど真上に投げ飛ばすダブルアーム・スープレックスなど、見たことも聞いたことも無い。

恐らく投げられた荒涼にしても、初めての経験だろう。

(投げを受けたのは、このためだったのか！)

近代ボクシングは、拳による打撃を追求してきた競技である。体を捕えようとする相手への選択肢は多いが、胸を押し当てるほどきつく抱きついている相手への選択肢は少ない。

ボクシングで言えば、その状態はクリンチに相当し、アグレッシブなファイトを促すため、レフェリーによって引き離されるのがルールである。

井上はボクサーである以上、投げへの対策に割く時間は少ない。ましてや、自分が投げ技を練習することはない。打撃と投撃では体の使い方も、使う筋肉も違う。荒涼ほどのタックルが行える学生は、学園都市には恐らくいないだろう。ある程度の対策を講じて、破られる可能性は高い。

ならばいつそ対策は行わず、自分のボクシングを突き詰める。それが最良の選択だ。

(それでも、もし掴まったら？ 受身が通用しなかったら？)

投げには投げ。相手が投げに来たとき、投げてしまえばいい。

井上はボクサーである。その彼が投げ技を行うとなれば、相手の虚を突ける可能性がある。メリットは確かに存在する。

だがリスクが高すぎる。ボクサーがレスラーを投げるといふ時点

で、相当に無理がある。超能力だけではない、他の力が必要となる。「天才、か」

レスラーの投げを食らい、試合の中でその要訣を掴み、模倣する。

大能力《レベル4》でありながら、高い学習能力も有する。もしくはその感性を含めての、大能力なのか。

荒涼を投げるために、荒涼の投げを食らったのだらう。荒涼の執念を、井上の天啓が上回った。

「荒涼さん、臍へそ！」

それでもまだ、勝負はついていない。地上三階に相当する高さから落ちるだけだ。一般人ならば深刻な傷害は免れないが、荒涼は一般人ではない。井上と同じ、能力者である。

廷兼郎の声を受けて、荒涼はぐっと体を丸めた。受身の態勢である。自分の臍を見るようにして体を畳み、両腕でがちりと首を挟みこむ。

廷兼郎は、自分が担当している教導訓練において、まず生徒に「転がる」ことをさせる。

体を転がすことで、全身運動を理解してもらうことと、咄嗟に体を丸める癖をつけてもらうことが狙いである。

本来人は、予想外の衝撃を受けたとき、本能的に身を縮ませる。それが身を守るのにもっとも適した態勢だと、体が知っているためだ。

荒涼は風紀委員ジャッジメントとして、廷兼郎の教導を受けてきた。まだほんの数ヶ月だが、その教えは確実に浸透していた。

背中を丸めたまま落下した荒涼は、試合場の縁まで転がり、場外となる手前で仰向けになった。

「ダウン！」

駆け寄った主審が宣告する。即座に試合を終了しなかったということは、荒涼が死に体ではないことを意味している。主審がカウントを始めると、廷兼郎は大きく息を吐いて肩を撫で下ろした。

柔道などに見られる、体が地面に付く前に手で地面を叩いて衝撃を和らげる受身は、残念ながら十メートルからの落下を想定してはいない。

高所からの落下において有効な手段は、スカイスポーツの選手やスタントマンが行っている五点接地転回法での着地だが、残念ながら廷兼郎の担当する教導の科目に『高所落下時における安全対策』は無く、荒涼が自力で五点接地転回法を習得している可能性は殆どない。

体を丸めて転がり、体を受ける衝撃を分散させることが、精一杯の受身だった。

それが出来なかったら肉体再生オトリバースを持つ荒涼でも、テンカウント以内に立つ事は出来なかっただろう。

まだ荒涼は起き上がらないが、それでいいと廷兼郎は判断していた。

強能力《レベル3》の肉体再生を以つてすれば、外傷内傷を問わず、驚異的なスピードで治癒してしまう。今はカウントいっぱいまで休むべきだ。

「セブン、エイト！」

今まで寝そべっていたのが嘘のように、荒涼が跳ね起きた。地に足がついている。震えもない。

「よしッ！」

落下のダメージは回復している。肉体再生とはいえ、さすがにスタミナまでは元に戻らないが、絶望的な状況ではないことも確かである。

まだやれる。いける。闘える。一ラウンドの残り時間は三分と少々。追い詰めるには十分だ。

「フアイツ！」

主審の掛け声で試合が再開する。

荒涼がゆっくりと腕を挙げ、ようやく頭部をガードした。そして間合いを詰めるべく踏み出し

荒涼の顎が、縦に跳ね上がった。

荒涼が踏み出す前に、井上のリードブローが彼の顔面を捉える。マシンガンの速度とショットガンの密度で、井上の拳が荒涼を切り刻む。いくら手打ちで軽いいえ、その速度と密度は異常である。僅かに拳骨が皮膚を掠めただけで、たやすく引き裂いてしまう。

裂傷など肉体再生を持つ荒涼には物の数ではないが、時折絶妙な角度で拳が入っている。ろくに狙いが突いているとは思えない連打だが、下手な鉄砲数打つちや当たるを地で行っている。

下顎を叩いてガードを上げてから脇腹。側頭を防がせて横に動いてストリート。上下左右への丁寧な揺さぶりで、ガードの隙間への確に拳を届かせる。一撃が入ったように見えたときには、もう数十発そこに連打されている。それから荒涼がかるうじてガードすれば、今度は空いた箇所を打撃が散る。

ボディを防がせて上を叩いたり、フックでガードを広げさせてサイドステップからストリートなど、クラシックとさえ言えるほど基本に忠実なボクシングである。井上が行なっていることは二つの拳面で相手を打倒するという、ボクシング以外の何物でもないのだが、風力使い《エアロシューター》を以って行なわれるそれは、ボクシングというのはあまりに歪な運動だった。

いつそスタンディングダウンを取ってくればいいのに、こうい
うときに限って主審は取るうとしない。

応援するにも、何を伝えればいいのか分からない。その圧倒的な
物量を前に、廷兼郎はひたすら荒涼が倒れないことを祈るばかりだ
った。

一ラウンドが終了し、荒涼が自コーナーに帰ってくるのを廷兼郎
は待ちわびていた。

「役に立ったよ、お前の授業」

「そんな、僕は何も……」

「でも、駄目だ」

息も切れ切れに、荒涼は用意した椅子に座ると、廷兼郎にだけ分
かるように右腕を軽く上げた。

その拳動の不自然さを、廷兼郎は即座に見て取った。

「脱臼してたんですか!？」

「審判の目は誤魔化せたが、あいつには気付かれた」

いくら肉体再生とはいえ、万能ではない。傷を元通りに戻すこと
は出来ても、脱臼のようにずれた骨を元に嵌め直すことは出来ない。
むしろその回復速度が災いして、ずれたまま組織が癒着してしまう
危険さえある。

廷兼郎は急いで荒涼の右腕を持ち、診断する。さすがは肉体再生。
先ほど脱臼したというのに、赤みや腫れが殆ど見られない。既に筋
肉組織の再生が始まっているのだから。

「早く直さないと! 痛みますからね、我慢してください」

そう言っただけで廷兼郎が脱臼を直そうとするのを、荒涼が腕を退いて
拒絶する。

「もういい。もう、分かった」

何がいいのか。何が分かったのか。それは荒涼の悲しそうな顔を見れば、一目瞭然だった。

もう戦わなくてもいい。もう井上に勝てないのは分かった。それ以外に意味の取り様が無い。廷兼郎の瑞々しい感性は、悲痛なまでにその心情を理解する。

「……この程度ですか？」

だからこそ、言わねばならなかった。伝えなければならなかった。違つと、まだ決着じゃないと。まだよくない。まだ分からない。何もかも全てが振り出しで、明らかではないことを。

「超能力だ何だと言われていても、所詮はそこらにいる高校生と変わらないな。少しばかり怪我しただけで、びびっちまうのかよ」

試合を諦めた選手へ鞭打つ言葉を、廷兼郎は泣きながら言う。まるで鞭打たれているのは、自分だとも言うかのようだ。

「字緒、お前……」

「見せてくださいよ。能力者が、弱くないってところを。荒涼さんの力を、見せてくださいよ」

後輩にこれだけ心配を掛け、こんなことを言わせる自分の弱さを、荒涼は心から恥じた。

対能力者戦闘術の開発協力者として、常日ごろから能力者の強さを研究している廷兼郎が、能力者を弱いなど思っているはずが無い。能力者の恐ろしさ、そして強さを、彼は骨身に沁みて理解している。

本当に、情けない。そんなことを言われる自分は、本当に弱いのだと実感できる。

「ああ、見せてやるよ。だから、この腕を治せ、字緒」

もう十分情けない思いをした。自分の弱さもはつきり分かった。これ以下はないんだと、いつそ堂々と開き直れる。例えば心が弱くたって、相手があまりにも強くたって、自分はまだ動ける。だからまだ戦える。

脱臼を直すには、もう一度関節を限界まで外し、入れ直す必要がある。その痛みは折れたときと同じか、それ以上のものである。

舌を噛まないよう丸めたタオルを口に咥え、荒涼がぐつと構える。「いきます」

言ったときには、既に荒涼の関節は外されていた。来ると分かっていたても、やはりそれは耐え難かった。まるで右肘が灼熱と化し、自分の肉を焼き焦がそうとしているように感じる。

それでも肉体再生を持つ荒涼は、一般人に比べれば激痛の続く時間は少ない。だからこそ彼は泣き言一つ言うことなく、じっと痛みが治まるのを待った。

巻いたタオルを噛み締める間に赤みが引き、腫れも治まっていく。
肉体再生を持つていて良かったと実感できる場面だ。

「字緒。あれ、もう一回教えてくれないか？」

「あれ、とは？」

タオルで荒涼の背中を拭きながら、廷兼郎は首を傾げた。

「確か、居捕いとりって言ったか」

廷兼郎の手が止まり、慌てた様子で荒涼の前に躍り出る。

「荒涼さん、いきなりでは無理だ。ぶつつけ本番で、しかも井上さんを相手に成功するわけが無い」

居捕とは、正座した状態で敵を制圧する妙技である。日本は古くから座ること、そして正座の姿勢を儀礼の場での正式な姿勢として取り入れていたため、その状態でも戦闘を行なう必要に迫られた。そうして発展したのが居合と、この居捕という技術だろう。居合が静から動への移行に生じる間断を消し去ることを突き詰めた術理ならば、居捕は静を以って動を制することを突き詰めた術理と言える。

立っている状態よりも行動の自由は奪われるが、それだけに無駄な動きがなく、より間合いをシビアに捉えることが必要となる。

その技術を、廷兼郎は風紀委員ジャッジメントの前で披露したことがあった。柔の一つの形を、生徒たちに身をもって知ってもらいたかったためだ。荒涼はそのときに受けた衝撃を忘れていなかった。

「ぶつつけだろうが何だろうが、もうそれしか策がないんだよ！俺のレスリングは、あいつには通用しなかった。だから、一か八かに賭けないと駄目なんだ……」

悲痛なまでに顔を歪ませて、荒涼が言い募る。

いきなりそんなことを行うなんて、無謀以外の何物でもない。本来なら同じ動作、単純な動作から繰り返して体に覚えさせ、薄皮を張り重ねるが如く丹念に練り上げていくものである。

しかし今更、廷兼郎はそんなことを荒涼に諭すことはしない。何故ならその認識は、とある一面にしか過ぎないためであり、今しがた荒涼自身が、その常識が覆る瞬間を味わっているからだ。

天性のひらめき。人より物事の要訣を深く、そして早く捉え、自身の行動に反映させる。言うは安し、行なうは難し。そして直面したときに見せ付けられる圧倒的な差は、そのまま絶望の大きさとなる。

レスラーの投げを試合中で覚え、返す。ぶつつけ本番で余計な要素が無い分、井上本来の天性を存分に感じさせてくれる。

残念ながら廷兼郎に、そのような経験は無い。彼は他人に天賦の才を感じても、自分の中にそのようなものがあるとは微塵も夢想していない。

(いるものだな。こういう、天才ってのは)

廷兼郎は胸に手を当て、そんな自分の心と、落ち着いて向き合う。自分の個人的な、自虐を含む思い込みだけで否定していいほど、荒涼の言葉は軽くない。

(俺が出来ないからって、荒涼さんが出来ない理由にはならない) 井上は確かに非凡な存在だろう。だが荒涼とて、その才能では決して劣っていない。何故なら彼もこの大会の最中、歩法『無足』を体得してみせた。

彼なら出来るかもしれない。可能性はある。それを自分の劣等感で払いのけていいわけがない。

それでも居捕は、薦められる策ではない。あの速度を持つ相手に

対して座りながら戦うなど、正気を疑われて当然の行いだ。

廷兼郎の言いあぐねる様を見かね、荒涼が廷兼郎の頭を抱えて額を突き合わせた。

「グダグダ考えんな。もつと自分に素直になれ。」

俺が勝てないまでも、奴に手傷を負わせたら、お前の戦いが有利になるだろ？」

「……荒涼さん」

こんなことを選手に言わせるセコンドが、果たしてこの世にいるだろうか。

(ずるいな、俺って……)

その申し入れを断るほど、廷兼郎は強くはないし、自分の良識を振りかざすつもりもない。自分はセコンドだ。選手が戦うのに必要なものを用意するのが仕事だ。思う存分、根限りを振り絞れる状況まで持っていくのが、自分の仕事だ。

「分かりました。腕の一本、お願いします」

覚悟を決め、廷兼郎は残り少ない時間で居捕に関して伝えられるだけのことを、荒涼に詰め込んだ。

サイレンのような音が鳴り響く。試合開始直前の合図だ。名残惜しそうに廷兼郎が試合場から降りると、荒涼はおもむろに立ち上がり、開始線へと歩き出す。

「荒涼さん！」

その大きな背中に、廷兼郎は叫んだ。

「やりましょう、決勝で！」

その言葉に、荒涼は奮い立たずにはいられなかった。あれだけ情けなく喚いた自分の勝利を信じてくれる、最高の後輩の言葉が、背中を強く押し、進ませてくれる。

「応ッ！」

脱臼した腕を高く掲げ、上腕を見せ付けるように応える。太くて強い、力の象徴のような二の腕の逞しさが、何よりの返事だった。

第二ラウンドが始まると同時に、荒涼は開始線の上に正座した。

プロレスや総合格闘技のルールも取り入れているG 1グランプリは、戦う姿勢に関しての細かな制約は無い。如何なる姿勢であろうと、選手が積極的に攻撃するのなら構わないのだ。だが、荒涼は全く動かない。当然、主審が勧告する。

それでいい。ポイントなんて幾らでもくれてやればいい。

主審だけでなく、観客までもが、荒涼の消極的な戦法にブーイングしていた。

荒涼の戦い方は、一見してずるい戦法である。競技という限られた空間、限られた時間を逆手に取り、相手の攻めを無理やり引き出す。

だからといって、必ずしも盤石な戦法であるはずが無い。そもそも先手を相手に明け渡している時点で、相当なリスクを背負っている。

荒涼を見つめる井上の顔は、苦り切っていた。

観客のように、消極的な戦法に嫌気が指しているわけではない。その戦法のやりにくさに、嫌気が差しているのだ。座っている状態は、前面投影面積が立っているときの半分ほどに押さえられている。そして打つべき急所の多くは、井上から見ると腰から下にある。

打ちにくいというよりは、打ち方が存在しない。座っている相手を打突するのは、もはやボクシングではない。例えボクシングの技

術が応用出来るとしても。

ボクサーの井上にとって、非常に戦いにくい姿勢だ。勿論、それを知ったうえで戦法である。

序盤と同じような睨み合いが続く。もしかすれば、これまで使っていなかった真空の刃を飛ばしたり、烈風で遠方から斬りつけてくるかもしれない。

（問題は、度胸があるかどうか）

座り込んでいる相手に近づくことさえせず、遠くから能力を使って倒すことを許せる度胸がなければ、とてもではないが恥ずかしくて行える戦法ではない。

（ボクシングを取るか、能力を取るか）

ボクシングに自信があるならば、ボクシングで倒したい気持ちがある。能力に自信があるなら、能力だけを使って倒すことに何の抵抗も持たないだろう。

これまでの戦い方から見て、井上はとことんボクシングにこだわっている。そして荒涼は因縁の相手だ。これまで二度も勝っている彼から逃げるつもりなら、序盤の睨み合いの時点で逃がっている。

（来い！）

（来いッ！！）

二人は心の底から叫んだ。井上の打撃を、心から待ち望んだ。

井上は落胆していた。もっと、もっと長い時間、あの痺れるような攻防を過ごしていたかった。打つか捕るかの際でせめぎ合うのが、たまらなく愛しかった。

並みの能力者では、井上を捕まえられない。捕まえられるのは荒涼だけだ。彼だけが井上を捕まえて、投げてくれる。そのために、何もかもを賭けてくれる。自分のありつたけを全て晒して、喉元に食らいつくまで追ってきてくれる。

ボクサーとして、格闘家として、能力者として、人として、これほど幸せなことは無い。

自分のためにあらゆることを擲^{なげ}つて、それをぶつけてくれる人間がいる。自分もそれに、全身全霊で応える。

元より倒して勝つ所存だ。去年の、あの無様な判定勝ちなど、もう味わいたくない。

このまま座り込むと言うのなら、それでも構わない。座っている相手も打ち倒せないほど、井上の心と体は軟くない。

自分は立っていて、相手は座っている。その状態でどう負けると言うのか。思い切り腰溜めした左のボディストレートを、顔面に叩き込むだけだ。それだけで井上の勝利は確定する。

勝てる。荒涼に勝てる。俺が勝つ。俺のボクシングが、あの男を打ち倒す。

(行くぞ、荒涼!)

左拳を手の甲が相手に見えるまで捻る。利き腕をこれでもかと折り畳み、力を蓄える。

井上はこの大会で初めて腰を落とし、両足の踵まで使って床を踏

んだ。

試合の流れの中で敵を狙撃する、これまでのスタイルではない。足を落とし、腰を落とし、流れも何も一切無視したスタイル。

自身の最大攻撃力を、たったの一撃に注ぎ込む。それが井上から、荒涼への返答だった。

風が巻く。井上の周囲を、とぐろを巻いてうねる。その余波は観客席に至り、衝撃吸収ショックアブソーバーを持ってしても僅かに漏れてゆく。

荒れ狂う豪風の中で、井上は穏やかな面持ちで静止している。

「いい、構えだ……」

思わず、廷兼郎は呟いた。見事に姿勢が正されている。正中線に閉しては一家言持ちの廷兼郎をして見事と言わざるを得ない、一本筋の通った立ち姿だ。

渦巻く風が中心へ、井上の体へ吸い込まれ、まるでジェットエンジンを吹かしているかのように、佇んでいる井上の背中から空気が高圧で排出されてゆく。

排気音に負けぬよう、荒涼が腹にぐつと力を入れ直す。これから被るであろう打撃を受け止める覚悟を固めた。

油断など微塵もない充実した精神が、ある境地に達しようとしていた。

荒涼の世界から、音が消えていた。

よく通っていた廷兼郎の応援も、観客の歓声も、井上が起こしていた竜巻の音も、すっかり聞こえなくなっていた。

感覚が余計な情報を遮断しているのだろう。戦うことに必要なこと以外を切り捨て、全神経を目の前のボクサーに向ける。

気が付けば、井上が目の前にまで迫っていた。腰溜めに構えた左拳が、顔面に走る。

なのに、音がしない。踏み込む音も、拳が走る音も、何も聞こえない。

捻転する拳が左頬を掬い上げるように命中するのを確認してから、荒涼の耳に爆音が鳴り響いた。

交通事故に似た破砕音と共に、荒涼は衝撃拡散《ショックアブソーバー》の防御を突き抜け、観客席手前の壁に叩きつけられていた。強能力《レベル3》の肉体再生オートリパースを持つ荒涼の体が血みどろに染まり、無様にひしゃげた壁にぶちまけられ、まるで車に轢かれた力エルのようにぐったりと背を壁に預けている。

無類のタフネスを誇る荒涼が、僅かな身じろぎすら起こさない。

それは外傷を塞ぐのが始まらないほど、荒涼の内部が損傷していることを意味していた。

壮絶な決着に観客が沸く中、廷兼郎は先ほどの絶対低温アイシクルオーナーに劣らないほどの寒気を感じていた。

廷兼郎の反射神経は、井上の踏み込みが明らかに音を追い越していたことを確認していた。

音速で突進しながら打突。その勢いのまま、相手を轢き倒す。音速に近い速度で約七十キロの物体が運動し、それに巻き込まれるのだから、いくら肉体再生を持っていようと無事で済む道理はない。

あれをこれから、自分が相手することになる。それを思うと、廷兼郎は震えずにはいられなかった。

とにかく今は荒涼の元へ走る。俄かセコンドとはいえ、その責任を果たさなければいけない。

廷兼郎が歩み寄っても、井上は荒涼から離れなかった。既に主審が試合終了を宣告しているにも関わらず、拳を突き出した姿勢のまま固まっている。

「あ、あの……」

廷兼郎が話しかけると、井上がじろりと目線だけを寄越した。これまで好漢ぶりからは、想像できないほど険しい目つきで。

「君が、助言したのか？」

「え？」

「君が作戦を立てのかつて、聞いたんだよ」

何故か苛立ち紛れに、井上は問い質してくる。

「そ、そうですけど、何か？」

廷兼郎の返事に、井上は食って掛かった。

「そうまでして、勝ちたいのか？」

井上のその言葉を受けて、廷兼郎が井上の怒りの種が何であるかを理解した。

井上は、この決着に納得していないのだろう。それどころか荒涼の負けは、廷兼郎に原因があるとさえ思っている。

ありがたい、と廷兼郎は感じた。その批判を、甘んじて受け止めることを覚悟した。

「……当然でしょう」

ともすれば滑り落ちてしまいそうな感謝の言葉を飲み込み、廷兼郎は不敵な物言いで答えた。

未だに井上の腕を握り締めている荒涼の腕を、労わりながら丁寧に外す。

井上の左腕には、赤黒い手形がくつきりと現れていた。

「では、決勝にて」

廷兼郎は遅れてきた担架を断り、荒涼を背におぶってその場を後にした。

準決勝まで終わり、残すところあと一試合となった控え室で、荒涼は回復に集中していた。

「悪い。取れなかったよ。お前の授業、ちゃんと聞いときゃよかった」

すでに口が聞けるほど回復しているのは、さすが肉体再生能力者と言ったところだろう。

それでもダメージは深刻で、傍らにいる廷兼郎に視線が上手く合わせられていない。まだ意識が朦朧としており、目線を固定することさえ重労働なのだ。

「全くです。荒涼さん、サボリ屋だから」

「今度からは、もうサボらない。ちゃんと受ける」

そう言っただけで荒涼は、廷兼郎の腕をやんわりと握り締めた。今の彼の、精一杯の力で。

「だから、見せてくれ。お前の授業を受ければ、何が出来るのか、ちゃんと見せてくれ。俺、ちゃんと、見てるから」

その手を握り直し、廷兼郎は決意を新たにす。

負けられない。自分の生徒が見ている手前、決して負けるわけにはいかない。

「お見せしますよ。だから、ちゃんと見ててください」

荒涼の手を握る力を強めると、そこから熱く、何かが伝わってくる。荒涼の体温が廷兼郎の中で混ざり合い、腹の底が強く揺さぶられる。

荒涼に、井上に、そして会場に來ている学生たちに、何が出来るのか、とくとく覽じてもらおう。
それだけが、廷兼郎に許された唯一の対抗手段だ。

にも言えることだったようだ。

そして今度は、自分にその感情が向けられている。

(いかな。色気が出ている)

歪んだ頬を直し、顔を引き締める。体を落ち着けて、気を静める。余計なことは考えなくていい。事ここに至っても廷兼郎のやることに変わりはない。

超能力者を倒す。それは仕事であり、彼の理想である。

にたにた笑っていたかと思えば、今度は能面のように無表情になった。纏っている雰囲気もがらりと変わり、まるで日本刀がぼつねんと、そこに佇んでいるかのようだ。

その立ち姿は、美しいとさえ感じる。機能美と言っている。余計なものを削ぎ落とし、一つの目的のために鍛え抜く。単純明快であるが故に凄然としている。

(なのに、こいつは……)

井上が荒涼を倒した倒された最後のラウンド、荒涼はついに座ったままだった。そして一步も動かぬまま、井上の腕を掴んで気絶した。

あれは戦いじゃない。荒涼はあんな負け方をする男じゃない。

(何を言ったんだ。お前は！)

彼がセコンドについて、荒涼にアドバイスしたのだろう。「座って戦え」と。

およそ勝つためのアドバイスとは思えない。あの座った態勢で、一体何が出来ると言うのか。

そんなアドバイスさえなければ、荒涼はもっと良い戦いが出来た。奴がセコンドに付かなければ、自分と荒涼の因縁の対決を邪魔され

ずじ済んだ。

それを思ったたびに、残念でならない。一年前から再戦を楽しみにしていたのに、それを卑しい無能力者《レベル0》は、土足で踏みにじった。

(許さない)

許すも許さないも本来は無いのだが、井上個人としては、廷兼郎を許す気は毛ほども持ち合わせていない。

しきりに右手を開いては握るを繰り返す。許さないといっても、弄るようなことはしない。一瞬、一撃、右のリードブロー一発で沈んでもらう。手も足も出せないまま這い蹲るのを見れば、この溜飲も少しは下がるだろうか。

主審が手を振り上げる。あれが降ろされたとき、試合が開始される。つまり、試合が終わる瞬間だ。

「ファイツ！」

声が掛かると同時に踏み込み、背面から圧縮した気流を噴射して突進する。突如として空気が粘性を帯び、井上の体を押さえつける。そんなに速く動くなと、必死になって説得してくる。

慣れ親しんだ感覚だ。高速運動下では、空気は普段のそれ以上に堅く粘りものとなり、推進力を浪費させる壁になる。

そんな空気さえ自身の周囲に纏わせながら、さらに加速させた拳を走らせる。右拳の周囲に発生させた気流が空気を掘削し、抵抗を殺す。踏み込みと風圧の力を乗せたまま音速へと近づいてゆく。

一回戦で見せたものとは違い、回り込もうとせず正面から最短距離で迫る。たったの十メートルなど、まさに一瞬で通過してしまう。

井上が気付いたときには、既に拳が廷兼郎を叩き、試合場の外へと突き飛ばしていた。

音速に近い速度で動く人間の拳を正面から浴びたのだから、まともを受ければその場に立っていられないだろう。

主審が急いで廷兼郎の元へ駆け寄る。続行可能か不可能を判断するためだ。

「場外！」

主審が宣告したのは、ダウンでも試合終了でもなかった。場外とはその通り、試合場の外に出してしまったことであり、プロレスと同じく20カウント以内に戻れなければ、試合続行不可能と見なすことになっている。

つまり主審は、20カウント以内に廷兼郎は試合場に戻る可能性がある状態だと判断したことになる。

「ワン、ツー、スリー」

カウントが進む。20カウントまでまだまだあるが、それまで井上は待っていられなかった。

カウントを進める主審の後ろで、井上は音も無くその場に寝転んだ。

何かが倒れる気配を感じた主審が振り向くと、そこには井上がマツトに突っ伏していた。

明らかだダメージダウンである。何故かは分からないが、井上は攻撃を受け、そのダメージで立っていられなくなったのだ。

「ダ、ダウン！ワン、ツー、スリー」

廷兼郎のカウントを取り止め、急いで井上にダウンを宣告し、カ

ウントを始める。その間に廷兼郎は、悠々とした足取りで開始線へ戻っていく。

先ほどの攻防。残念ながら井上の攻撃は、廷兼郎に届いていなかった。彼の拳は、廷兼郎の左腕を叩くに留まっていた。

前に出していた左腕を折り畳み、右手を添えて顔面を覆い隠す。予め防御していたところへ、井上が手を出したに過ぎない。

確かに井上の打撃は速い。敵にとっても、井上自身にとっても、それは速すぎるのだ。人間の反射神経を追い越すということは、井上の反射神経さえ置き去りにされていることを意味している。

確かに井上は能力によつて、人間では有り得ない速度を手に入れたが、反射神経までも能力によつて増幅させることは出来ない。

何故なら井上の能力は風力使い《エアロシューター》。気流を操作することに終始する。反射神経を人間以上の速さで運用することは、彼の能力の範疇ではない。

だから井上は、予め決めておいた行動を能力で後押しし、驚きベキ速度で実行しているに過ぎない。行動を決める思考の速さ、判断する速さといった『心の速度』は極端な話、凡百の人間と何ら変わらない。

むしろ超能力と言う恩恵を授かり、身体の速度ばかりに気を取られていた井上は、『心の速度』など全く眼中に無く、それも視野に入れて訓練を積んできた廷兼郎に比べて明らかに退化していた。

優れた力と云えど、然るべき運用を怠れば持ち腐れする。要は使い方の良し悪しでしかない。それが一見して悪く作用するのは、当人にとって過ぎた力だからかもしれない。

エイトカウントに至つて、ようやく井上が立ち上がる。未だに体中がブルブルと震えて、二本足で立つことが既に重労働のようだ。

それも当然である。廷兼郎が井上に打撃された瞬間、井上は文字

通り脳と神経を断ち切られたのだから。

「井上つて子、よく立ったわね」

網丘は能力者の打撃を防いでみせた廷兼郎ではなく、ゆっくりと立ち上がる井上のほうを称賛した。

遠距離では上手く視認できなかったが、廷兼郎が何をしたかを、網丘は正確に理解していた。

あれほどの高速で運動する人間を相手にして、対抗できる手段は限られている。自ずとそこから廷兼郎が行なった技を推測できる。

何せ廷兼郎に『カウンターメジャー対抗手段』を叩き込んでいるのは、他ならぬ網丘だ。

「相手の拳の軌道に足を隠し、思い切り膝に引き付けて背後からつま先で打ち抜く。あんなに速く動いてちゃ、見えるなんてことは有り得ない蹴りだ」

テコンドーのピットロチャギの応用で、外から中へとつま先で強かに打ち抜く。それを相手の背面から後頭部へ行なったのだ。

誰に言うでもなく、網丘が呟く。自分の考えた『対抗手段』が正しく運用され、そして通用した事実は、何回味无穷でも新鮮な喜びとして網丘を潤す。

ある意味その蹴りは、高速で動く井上だからこそ決まったと言える。速く動くことばかりに気を取られ、その状態の自分が攻撃されることなど、露ほども想定していなかったのだらう。

打撃に押されながら蹴りを放つたため、一撃で昏倒させるほどの精度は持っていなかったが、運動機能を低下させるには十分である。

井上の翼は折れかけている。それを完膚なきまでに拉ぐか、ここで即座に試合を終了させるか。全ては廷兼郎の胸先三寸に掛かっていた。

G・1トーナメント決勝戦！！！！：二

テンカウント以内に立ち上がった井上の闘志を確認し、主審が試合を再開する。

ここで落ち着かれては、非常に困ってしまう。演算に割く心の余裕さえ奪ってしまおうと、廷兼郎は構えを変えた。

前に出していた左腕を窮屈に折り畳み、右手を顎の下に置く。それはまるで、井上の構えと鏡映しにしたようだった。

ダウンのショックから立ち直りきっていない井上の顔が、複雑に歪む。驚いたらいいのか、怒ればいいのか、それとも嬉しければいいのか、全く判断がつかない。

それはボクシングの右構え《オーソドックススタイル》だった。

これまでの試合、廷兼郎はそんな構えなど見せなかった。なのに今、彼は事もあるうかボクサーである井上の前で、ボクシングの構えを取っていた。

(何だ、こいつは?)

動揺が怒りに変わる前に、廷兼郎は立ち上がったばかりの井上の間合いへと踏み込んだ。

目にも留まらぬ左のトリプル。一撃目で距離を測り、二撃目でガードを割り、三撃目が井上の顔面に到達する。

リズムに乗ったまま右のボディストレート、伸び上がって左のダブル。角度を変えて襲う二発のフックがガードをすり抜ける。

面食らった井上に、面白いほど打撃が入ってゆく。

(まさか、こいつ……)

俺に、ボクシングで挑む気か。ボクサーの俺に。

ここまで舐めた態度を取られて、平気でいられるはずがない。に

わか仕込みのボクシングなど、すぐに馬脚を現すだろう。

井上が右を走らせる。トリプルどころではない。風による加速を合わせれば、一息で十や二十の打撃を繰り出せる。

散弾のようなジャブが右腕の外外、完全な視界の外から現れた左拳に寸断された。

クロスカウンター。左構え《サウスポー》対右構え《オーソドックス》だったため、通常の右に被せるクロスカウンターよりも出足が早い。

井上自身も判然としないほどの連打の中から、廷兼朗はたった一つ、カウンターに最適なものを選択して迎撃してみせた。

まだジャブだったため、踏み込みが少なかったのが幸いした。カウンターのダメージは浅い。しかし井上にとっては、カウンターを取られること自体がとてつもないダメージとなっていた。

空いた右脇腹を抉るため、廷兼朗の右ボディフックが襲う。

(甘いッ！)

気流で加速できるのは攻撃だけではない。超高速のパライニングがボディからテンプルへの右フックを弾く。

今度は廷兼朗の体が空く。井上の左腕が掻き消え、ボディと言わずテンプルと言わず、廷兼朗の右半身に拳打をばら撒く。

今度は右も加えて連打しようと考えた井上は、意識の端に何かを感じ、バランスが崩れるのもお構いなしに、右後ろへとスウェーバツクした。

井上の顔面のすぐ上を、廷兼朗の足先が通過していく。横からではなく、殆ど真後ろからの軌道を描いていた。

(さっきはこれを食らったのか)

相手の体で軌道を隠し、背面からつま先で蹴り込む。よほど柔軟な足関節と、相手の視界を見切る勘の良さがあってこそその技だろう。

先ほどは阿呆のように食らってしまったが、一度味わったからは対処できる。

スウエーから体を起こす力を利用して、右フックを顔面に引っかけた。

右フックを食らいながらも、廷兼郎の振り上げた足が、今度は逆に振り下ろされる。

加速する井上は、踵落としの下をダッキングして、廷兼郎の右横を取った。

伸び上がりながら左のストレートを十五発、一呼吸のうちに放つガードしている顔面に向けて、集中打を浴びせかける。

廷兼郎は足を入れ替えたため、構えがサウスポーになっているにも関わらず、左ストレートに対して左ストレートを返す。

井上は下から一直線に昇るそれを、右肩の上に置いた。わざと顔の近くを通したのは、先ほどの意趣返しである

左ストレートの外から襲う軌道で、右拳を打ち出す。クロスカウンターである。

打ち下ろし気味のそれが、掌を強かに叩く。左ストレートを放った時点で、廷兼郎は右手で顎を防御していた。

(読まれた!?)

動揺する井上が、廷兼郎の左膝が僅かに上がるのを見咎める。さすがに蹴りへの注意は怠っていない。

蹴りを避けるため、左に回りこむ。足を上げて放って体勢が不安定になったところを、一気に連打で押さえ込む。

すでにKOシーンまで井上は想定している。元よりそこまで先を考えていなければ、風力使いの速度に追いつけない。

井上は廷兼郎の左横から狙撃する意図だったが、何故か彼が見て

いるのは、廷兼郎の背中だった。

屈んで背の低まった廷兼郎の頭を、右拳が掠る。しっかり狙ったはずなのに、それは目標の上を空しく通り過ぎた。

勝手に体が傾いでいく。　　どんどん右から体が沈み込んでいく。このままでは折れてしまう。みちみちと腱が伸びてゆくのに、右足が上半身の動きに付いてきてくれない。

井上の右膝に、廷兼郎の右踵が刺さっていた。折れてしまうのではなく、折れているから付いてこれない。

折れた右膝を支点に、井上は豪快に頭を地面に打ちつけた。ダンブにでも轢かれたような勢いで、試合場を転げまわった。

「ダウンッ！」

当然のように、今ラウンド二度目のダウン宣告がなされた。

右膝に全く力が入らない。それでも痛みだけは一丁前に訴えてくる。折られた足をかばいながら、覚束ない様子で立ち上がる。

今回のダウンは、先ほどのものとは内容が違っている。何故ならボクサーにとっての生命線、サウスポーの軸足である右足を殺された上でのダウンだからである。

先ほどの攻防。ボクシングの構えを取って挑発しつつ、高い蹴りを意識させてからフェイントを入れて下段を撃つ。全てはこのための布石だったのだろう。

ボクサーの下段を狙うのは、非常に有効な対策だ。ボクシングのルールでは腰から下への攻撃は禁止されているため、見慣れない上に、打たれ慣れてもない。

いきなりダウンを取られ、自分の得意分野で挑まれ、井上は冷静さを失っていた。そこへ周到に上を意識させてからの下段後ろ回し

蹴りである。

これ以上ない見事な角度で、鋭利な踵が井上の右膝を断ち割った。
(すごいな。まったく)

自分でも驚くほど素直に、井上は廷兼郎を心の中で称賛した。自分を手玉に取った手練手管もさることながら、それを可能とする技術が素晴らしい。

相手の死角から襲う蹴り。井上の行動を事前に見抜く洞察力。ボクサーである自分と対等に打ち合えるボクシングの力量。

一体どんな鍛錬をすれば、これだけの技術が一つの肉体に宿るのだろう。ボクシングだけを研鑽してきた井上には、理解の及ばない範疇だった。

どうやら、体の速度はこちらが大いに上回っているが、思考する速度はあちらに分があるらしい。何度も攻撃を防がれていることが、その証拠である。事前にこちらの動きを読んで先回りしなければ、スーパーソニック音速突破の通り名を持つ自分が打ち倒される説明がつかない。

軸足をやられたため、仕方なく足を入れ替える。付け焼刃の右構えである。

格好だけそれらしく整えても、やはり違和感は拭えない。自分でもこれだけ感じているのだから、それが周りに伝わらないはずがない。

音も無く廷兼郎が間合いを詰める。相変わらずのボクシングスタイルである。

それを舐めているとか、おこがましいとか批判する権利は、今の井上に無い。井上はこれまで二度も倒されて、廷兼郎はほぼ無傷でいる。その結果が全てである。

下段回し蹴りを食らって、ようやく目が覚めた。目の前にいるの

は無能力者《レベル0》だ。井上と同じように、超能力者を打ち倒してここまで昇ってきた、単なる無能力者《レベル0》だ。

前回優勝者にとって、最高の挑戦者だ。

恐らく心のどこかで、彼を見下していたのだろう。所詮は無能力者《レベル0》。幸運にも決勝まで昇ってきたところで、自分には通用しない。そのような油断があったようだ。

しかし結果はどうだろうか。むしろ自分のほうが通用していない。小気味よいほど掌で踊らされている。

ぬるりとした、それでいて鋭い動きで、廷兼郎は井上の目の前に迫っていた。荒涼が見せた無足タツクルに近い動きだが、あれよりも柔らかく、そして速い。

左ジャブを顔面に散らして引き剥がしに掛かるが、まるで意に介さず廷兼郎は踏み込み、下から腹を突き上げる。

防御している右腕がめり込むかと思うほど、その拳は井上の体に重く突き刺さる。受けた右腕より、奥の脇腹と肝臓が痛む。

息が詰まる。手足が痺れる。たったの一撃で、体の動きを止められてしまった。

内臓に集中している神経群が痛みで混乱をきたし、正常な機能を失う。一時的とはいえ、戦いの場においてはあまりに長い時間である。

右膝は折れ、ボディブローで足が痺れる。とても打ち合いに耐えられる状態ではない。だからこそ、廷兼郎は打ち合いを敢行する。

くの字に折れた体を右アッパーで起こし、井上に頭部を守らせたところで、もう一度腹部を突き上げる。今度は鳩尾ソイラー・フレキサスを直接叩き、完全に呼吸を阻害する。

喘ぐ口が上を向くのを待ってから、それを上から狙撃する。咬合
していない浮ついた下顎に、打ち下ろしの右を叩きつける。
チョッピング・ライト

顎の骨を砕く硬い手応えに混じって、弾力のある筋がぶつりと切
れる感触があった。顎が急激に移動したため、頬の筋肉が引っ張ら
れて断裂したのだろう。

井上の打撃とは比べ物にならないほど遅い攻撃で、廷兼郎は丹念
に井上を破壊していく。

G・1トーナメント決勝戦！！！！：三

これほど自分は弱かったのかと、井上は清々しさすら感じていた。廷兼郎の打撃は、井上以上の精度で彼の体を打ち抜く。腕でガードし、風で威力を弱めても、体の真芯まで深く衝撃が突き抜ける。しっかりと体重移動シフトウェイトされた、正しい打撃を行なっている証拠である。インパクトの瞬間の拳の握り、腰や肩の入れ方。足の踏み込み。どれを取っても、拳打を専門に研鑽してきた井上を遙かに上回っている。

ボクシングに能力を応用するようになって、いつの間にか、ボクシングを超えたものを身に付けている気でいた。

それは大きな間違いだ。俺は単に、俺の未熟なボクシングを、能力で埋め合わせただけに過ぎない。体重移動も、姿勢も、拳速も、インパクトも、『風力使い《エアロシューター》』でごまかしただけの、半端なボクサーだ。

もしかすれば、ボクサーですらない。自分のやっていることは、ボクシングですらないのかもしれない。何故なら、目の前のレベル0が繰り出す拳のほうに、よほどボクシングと言えるからだ。

(ボクシングじゃ、ない)

ボクシングでないならば、ボクサーでないならば、自分は一体何者なんだ。少しばかりボクシングを齧っただけの、単なる能力者か(俺のボクシングは、この程度なのか)

その問いに答えるものは誰もいない。誰にも答えられない。井上にも、答えられない。

廷兼郎の拳が、肝臓を突き上げる。今度は右腕の防御はない。

ボキリと、木枝の折れる音が体内から響く。
それが肋骨の折れる音なのか、心の折れる音なのか、井上には分からなかった。

崩れ落ちようとする井上と廷兼郎の間に、急いで主審が割って入る。これで三度目のダウンだ。廷兼朗の勝利である。

しかし主審が告げたのは、廷兼郎にとって驚くべき内容だった。

「コーナーへ戻って！ 一ラウンド終了だ！」

何を言っているのか聞き返そうとした廷兼郎の耳に、ゴングが鳴り響く。どうやら一ラウンドが終了したようだ。

「……そっか」

残念そうに漏らし、廷兼郎は主審に言われたとおり自コーナーへと戻っていった。

勝利を確信した耳には、割れ響くゴング程度では気が付かなかったようだ。その事実が、廷兼郎の心にそっと降り積もる。

インターバルの間に呼吸を整え、氣息を万全にしている廷兼郎に對して、井上はこれ以上試合を続けるのがかわいそうなほど消耗していた。

最後の肝臓打ちを食らう前から、井上の目は死に始めていた。わざとボクシングで圧倒し、過剰なストレスを与える作戦は見事に功を奏したようだ。

別段廷兼郎に、井上を馬鹿にしたり、井上をボクシングで倒して勝ちたいという意図があったわけではない。彼なりに権謀術数の限りを尽くしての、ボクシングという選択肢である。

ボクサーが、ボクサーでないものにボクシングで挑まれて、そう背を向けることなど出来ない。これはプライドやこだわりの問題ではない。ボクサーという人種の持つ条件反射である。

『風力使い《エアロシユーター》』による高速機動は、この時点で相当制限される。退くという選択肢を殺したのだから、あとは愚直に近づくだけである。

近づく機会が増えれば増えるほど、廷兼郎と井上の間にある戦力が拮抗し、打倒できる確率が加速度的に上がってゆく。

あとはこちらのボクシングを見せつけ、対応してきたら上段の蹴りを見せて揺さぶり、満を持って下段を放ち、ボクサーの生命線である足を殺す。

機動力と戦力を同時に奪い、より確実に仕留められる環境を作ってから、もう一度ボクシングの構えを見せて対抗心を芽生えさせ、逃げるという選択肢を潰す。

ボクサーの井上に、ボクシングで応対するのは相当な賭けであったが、その見返りは大きい。

何せ自分が誇る矜持を折ってやったのだ。体力があるうとなかろうと、心を折られてしまつてはまともに戦えない

(戦えない。戦える理由が無い)

さんざん内臓を打たれて満足に呼吸はできない。そもそも肋骨が折れている。ついでに右足も膝から折れている。顎だって砕け、頬肉が千切れ、まともに噛み合わせる事すら出来ない。今の井上には、対抗する武器が残っていない。

廷兼郎の勝利は動かない。その事実を、廷兼郎は努めて振り払う。能力者を相手に、勝負が着く前から勝ちを見越してほくそ笑むなど、もつとも唾棄すべき行為だ。

廷兼郎は、ラウンド終了のゴングを聞くことが出来なかった。それはつまり、井上を打ち倒すことに囚われすぎて、意識が狭窄してしまったということだ。

（勝気が『居付』いてしまっていた）

『居付』とは、一つのことに関われ、他のことまで考えが回らない窮屈な状態を言う。この状態は、武術において悪手と言われている。

一つのこと集中することは確かに必要なことだが、そればかりに気を取られ、柔軟な発想を自ら殺してはいけない。対能力者戦闘術を研究・開発している『カウンターメジャー対抗手段』では、発想の固定化が敗北、あるいは死に直結するとして、特に厳しく諫めている。

なのに、それを守れなかった。素手による能力者の打倒を掲げる者として、あるまじき失態である。

自分の至らなさに嫌気が差す。鏡があつたら一も二も無く拳を叩きこんでいるところだ。

自分というものは、案外と思い通りにならない。手も足も、腰も背中も腹も、目鼻に耳に口、それこそ頭の中なんて、自分の思い通りに動かすことなんて出来ない。

そんなことが出来れば、それは武の顕現と言って良い。

（武の顕現。人の身には余る、はず）

廷兼郎は知っている。手足どころか、自分の内臓器官、体液の流動に留まらず神経の伝達さえ思い通りにする能力者を。

静かに目蓋を閉じる。まるでつい先ほどのことのように、それは思い出される。完全でいて、非の打ち所の無く、一切の瑕疵もない、純然たる敗北。

手足を折られ、顎を割られ、股間を砕かれ、人とは思えぬ悲鳴を上げて、なりふり構わず自分の負けを宣言して許しを請うた。圧倒的な力の奔流を前にして、心が、自分の中から遠くへと逃げてしまった。

「……」

一言、その名を呟こうとして、声になる前に口を閉じた。自分にはまだ、名を呼ぶ覚悟が備わっていない。

それでも、廷兼郎は戦い続けている。逃げてしまった心を取り戻し、もう一度挑むために。今度こそ、倒すために。

そろそろ一分が経過する。インターバルを終えれば、すぐに第二ラウンドが始まる。

心機を新たに、廷兼郎は立ち上がる。自分はもつと強くなりたい。『対抗手段』計画に参加したい。そのためには、この大会で優勝しなければならない。

実に単純な話だ。全てか無か《オールオアナッシング》。手に入れたければ、勝つ。思いを叶えたいのなら、勝つ。強くなりたければ、勝つ。

目の前にいる超能力者をぶちのめすことに、全ては集約されている。

G・1トーナメント決勝戦！！！！：四

第二ラウンドが開始される。廷兼郎はもうボクシングの構えはやめ、左腕を緩く突き出し、右手を臍の前に添えるいつもの構えを取っている。

右足を後ろに引きながら、廷兼郎に遅れて井上が構える。右足を庇うため、本来の左構え《サウスポー》ではなく、右構え《オーソドックス》である。

だらりと下がった口から息をするたび、右の脇腹が引きつる。風の操作よりも、まずは自分の体を支える作業をしなければならぬ。そんな井上を気にも留めず、主審は時間通りに開始を宣言する。

「ファイッ！」

掛け声と同時に廷兼郎が踏み込む。前のラウンドで既に手は尽くしてある。これ以上の様子見は必要ない。万が一の事態も起こさないためには、迅速に勝負を着けるのが英断だ。

無能力《レベル0》であればこそ、さすがにそうしたことは弁えている。ここで能力者を休ませるほどの甘さを、彼は網丘からは教えられていない。

「ぐあっ」

身構えた井上が、いつものくせで右足に体重を乗せてしまった。痛み顔に顔をゆがめている間にも、廷兼郎は井上の間合いを占有してゆく。

軸足を浮かせて放たれる中途半端なジャブの連打を防ごうともせず、左足を下段に振るい、草でも刈るように井上の右膝を痛撃する。

「いぎあっ」

折られた膝への攻撃に、思わず叫び上げるが、既に碎けている顎

に放たれた右アッパーがそれを断ち切った。

右膝、顎と来て、次に狙われる場所を井上は知っていた。

両腕で十分に固めて備えた防御ごと、廷兼郎は全身を使って突き上げた。

腕の向こうの肝臓、その奥の背骨を狙い、両足を伝って昇る力を腰と背中を増幅させ、角度を決めたボディアッパーで拳面から衝撃を注ぎ込む。

井上の体が廷兼郎の拳に乗って、高く浮く。『風力使い《エアロシューター》』で逃げようとする動きを、さらに追って深く打ち抜く昇撃に、背が自然とくの字を描いていた。

廷兼郎が素早く拳を引いて残心を取っている間に、井上は足先から流れるように崩れ落ちた。

「ダウン！」

今試合三度目のダウンだった。

二ラウンド開始僅か五秒でのダウン。レフェリーストップが掛かっても文句の言えないダメージダウンだ。

右膝、顎、右脇腹。どれも先ほど廷兼郎に傷を負わされた部分だった。

それを卑怯卑劣と罵るのを許されているのは、外巻きに眺めている観客だけだ。床の上で這い蹲る井上に、そんな権利は無い。

前回のチャンピオンなのに。あの荒涼を真つ向から倒したのに。相手は無能力《レベル0》なのに。俺は大能力《レベル4》なのに。

そんな愚にも付かない驕慢は、とっくの昔に残らず剥ぎ取られてしまった。ここにいるのは重傷を負った、ただのボクシング好きだ。

そして目の前にいるのは、能力者を倒すことに全てを賭けた無能力者《レベル0》だ。

井上のレベルがまだ低いとき、高位の能力者に対して憧れに似た憧憬を抱いたことがあった。あれと同じ類の感情が、目の前の無能力者《レベル0》を見ていると湧き上がってくる。

（羨ましいのか、俺は）

大能力《レベル4》になって久しいこの頃、自分が憧れるのは超能力《レベル5》だけだと思っていた。

（そうじゃない。彼は、俺に勝っているとしても、優ってなどいい）

無能力者《レベル0》と大能力《レベル4》。その間には如何ともしがたい差が確かに存在する。廷兼郎はこと戦闘という一点において、そしてこのG 1トーナメントという状況において、井上に勝ちつつあるに過ぎない。

相手は強い。だがそれは、自分が弱いことを意味しない。

そもそも、大能力《レベル4》の『風力使い《エアロシューター》』という能力を授かっておいて、弱いだの負けるだのと弱音を吐くことすら憚れるのではないか。

無能力者《レベル0》だって、あんなに強くなれるのだ。大能力者《レベル4》が強くなれないはずが無い。

そう思うと井上の体に、再び熱が籠り始める。

強くなりたいと思い、強くなれる道が示されている。

眠っている場合ではない。このまま試合を終わらせるべきではない。強くなる手段は、目の前に用意されている。

無能力《レベル0》の強さが、井上を急き立てる。早く立て。立って、戦って、強くなってみせろと囁す。

廷兼郎の強さは、一体なにを根拠としているのか。それが分かれば、さらに高みへと昇れる。

「セブン、エイト」

しかし、その根拠となるものが、井上には分からない。もう少し考えたいところだが、今はやはり時間が無い。とりあえずすべき事は、立つことだ。

立ち上がらねば、何も始まらない。

(そうか。立つ、か)

ふと、井上は思い立った。一ラウンド開始直前、開始線で向き合ったときに感じた、あの感動を。刀剣と見紛うばかりに正された立ち姿は、あの怒っていた心にも感極まるものがあつた。

人間の『立つ』という行動は、揺れ動く重心を常に戻し、傾いてはまた戻すことの集積に過ぎない。一本の樹木のように揺るがないことなど、本来ならば有り得ない。人間に出来るのは、それに限りなく近づくことだけ。

その愚直な努力を積み重ねたからこそ、『立つ』だけで人の心に訴えかけるほどの何かを得る。

自分はそれを感じ取れた。ならば、その先にも行けるはずだ。

確信はある。井上は大能力《レベル4》で、廷兼郎は無能力《レベル0》だ。無能力者《レベル0》に出来るのなら、大能力者《レベル4》にだって可能なはずだ。

怪我を負った急所の三つを痛打し、僅かながらに勝機を確信していた廷兼郎だったが、すぐに気持ちを切り替えた。それほどまでに、ダウンから立ち直った井上には、力強い光が宿っていた。

井上がふわりと立ち上がる。煙が起こるような儚げで頼りない立

ち姿に、廷兼郎は見入っていた。それは明らかに、これまでの井上の構えとは一線を画していた。

何故なら井上の体は、完全に宙へ浮かんでいた。

(レビティーション、というよりはホバリングか)

人間ほどの質量を一定の高度に浮かせ続ける出力とバランス感覚は、諸手を上げて称賛すべきものだろう。だが、廷兼郎にとっては何の脅しにもならない。

浮いていると言っても、足先が地面から十センチほど離れているだけに過ぎない。恐らくは右足の負傷を庇って高速で移動するための、苦肉の策だろう。

確かに軸足を痛める心配は無いが、地に足をつけないでどう戦うつもりなのだろうか。このまま宙を舞って烈風でも放つてこようものなら、手間は増えるだろうが与し易い。じっくりねっとり重圧を掛けてから、飛べなくなったところを仕留めるだけだ。

(さて、ここからは追いかけてこだな)

そう身構えた廷兼郎の唇に、固い感触があった。次の瞬間、廷兼郎の顎が上下左右に激しく揺さぶられる。

(な、に!?)

顔を攪拌する連打の中で、ようやく廷兼郎は自分が殴られたことを知った。

初動や兆しすら、感じさせなかった。あるいは感じたとしても、回避を判断することが打撃に対して緩慢だったということか。

頭部の急所だけではなく、その連打は腹部にまで移行し始めた。

肝臓、脾臓、胃、横隔膜を横から、前から、あるいは下から突き上げる。これまでの手打ちなどではない。ずしりと重く肉の中へ響く、しつかりと体重移動が為された打撃だ。

それが何故か、あの速度と密度で運用されていた。まるで遠心分離機に入れられてる心地だ。これは決して、殴られている感触ではない。これが人間の打撃であるはずがない。超能力を身につけた者にしか許されない、圧倒的で理不尽な攻撃方法である。

一発一発に、見事に腰が入っている。もはや足が利かないはずなのに。体重がしっかりと移動され、拳面に乗せられたベクトルがインパクトの瞬間に放たれる。頻繁に体位を入れ替え、あらゆる方向と角度から狙撃する。

それは紛うことのない、ボクシングだった。そしてその行動の一つ一つが、さらに音速へと近づいていた。

（括るしか、ないよ。荒涼さん）

井上の速度と密度で腰の入った打撃を浴びせられて、立っていられる人間などいない。何か超能力の類を身につけていたなら、人智の及ばぬ力で防ぎ得たかも知れないが、残念ながら廷兼郎に超能力は備わっていない。

恐らくは一生分に相当するであろう打撃を、たったの一分に凝縮して食らう。未だに自分の体が人の形を保っているのが、心の底から嬉しいと思える。

それ以上を望むのは、欲が過ぎると言うものだ。

打撃から逃れるように、廷兼郎は半ば自分からマットに頭を打ちつけた。彼は今大会初のダウンを、決勝戦にて喫した。

G・1トーナメント決勝戦！！！！：五

まるで自分の中の筋肉という筋肉、骨という骨、内臓という内臓がじつくりコトコト煮込まれて、とろりとおいしいスープになってしまったようだ。

（ああ、スープ食いたい……。あれ？ 飲みたい？ どっちだったっけ？）

それほど今の廷兼郎は脱力していたし、体と脳の感覚が危うかった。強烈な痛みと衝撃で混乱をきたした体は、時間の概念すら捨て去り、ただその場に佇んで涙ぐましい回復を待つ。

それこそが敗北への近道だと言うことは、傷ついた体の知ったことではない。

このまま眠りたい。とつぷり日が沈んで、また朝が来ても、このまま横になっていたい。

今日も眠って、明日も眠って。何もしないで、ただ眠って。

（違うよ。それは、違う）

負ける。勝てない。弱い。強い。おかしい。無理だ。

だって、無能力者だもの。

練習したのに。頑張ったのに。勝てなくて当然だ。無能力だから。能力者は強い。自分は弱い。当たり前だ。無能力だから。

それでも十分やった。ここまで来れた。以前の自分なら、こんなことは出来なかった。よくやった。大したもんだ。いっぱい練習したもんな。よく頑張った。

（何を考えてるんだ、俺は！！！）

超能力？ 無能力？ 練習した？ 頑張った？ だからどうした？
それが何だ？
相手と自分の優劣を論^{あげつら}つて、無理して劣等を受け入れる。それどころか自分の習練を、頑張りを思い返して悦に入る。そして安穩と眠るつもりか。

能力者に勝てない俺に、幾ばくの価値も無い。両親もいない俺は、置き去り《チャイルドエラー》と何ら変わらない。噂では、置き去り《チャイルドエラー》の子供たちは、危険な人体実験の材料にされているらしい。

元からにして、学園都市という機構がそういった事情を内包している。その中であって俺は、実験に使う価値さえ無い。
ならば何故、学園都市にいられるのか。

(戦えるからだ)

能力者を倒す、対能力者戦闘術の研究開発に携わっているからだ。対能力者戦闘術は、学園都市内で専有されなければならない。外部へ漏れれば、外の組織が超能力に対抗できる力を付けてしまうかもしれない。

だから俺はここにいます。ここで飼い馴らされる。生かさず、殺さず、ただ置いておかれる。

それでいい。納得づくだ。全て知ってる。

強くなれる。それさえ叶うなら、全てを賭けていい。自分は元より、自分の敵も味方も、関わるもの全てを質草に入れてやる。

勿論、目の前にいる風力使いも例に漏れない。

能力者を倒す。俺が倒す。俺の武術で倒す。

その使命感、あるいは闘志が、時間さえ失せた体を駆け巡る。碎けて折れかけた心が、徐々に補填されてゆく。

心と体のひびの中へ、身を焦がすほどの熱を持った何かが沁み込んでいく。

立て。戦え。そして示せ。『カウンターメジャー対抗手段』とは、对能力者戦闘術とは、無能力者《レベル0》とは、字緒廷兼郎とは。

その何たるかを、己が身を以って証を立てる。それだけが、敗北を退ける唯一の手段だ。

「ファイ、ブ……」

何事も無かったかのように、ぬるりと廷兼郎は立ち上がった。頭頂から何かに引っ張られているように、体がピンと突き立っている。

目は井上の方を向いたまま、塑像の如く微動だにしない。まるで彼の周りの空気が固着してしまったようで、ピタリと型にはめ込まれている。

危険な倒れ方だったとはいえ、カウント以内に立ち上がったのだから、戦う意志有りとして続行するしかない。

「ファイティングポーズを」

そう言われ、廷兼郎は徐にしゃがみ込んだ。左手をするりと前に伸ばし、殆ど床に張り付きながらゆっくりと前進する。まるで獣の真似事としか思えない、妙な仕草だ。

天羽根流、四足しよくの型。四足獣の格好を真似た構えである。

猫が威嚇するように身を撓め、そろりそろりと這う。下から舐め上げるような視線のまま、廷兼郎はファイトの声が掛かる前に、これ以上ないほど低空から接近する。

廷兼郎の突然の奇行に、井上はひとまず見に徹することにした。どのみち身体の数には異常な開きがある。その差が四本足で埋ま

るとはとも思えない。

だが、異常なまでに低まった構えは、人を馬鹿にしているように、いざ向けられると厄介この上ない。まず前面投影面積の狭さ。そして急所の遠さ。どれをとってもボクサーである井上には相性が悪い。

宙に浮いた井上が、ぐらりと揺れる。

（ホバリングの制御に、もうガタが来てる……）

人間一人を常に浮かせておくほどの大出力にして精妙な能力行使は、井上の演算容量の大半を占めて行なわれている。ほんの僅かでも動揺して心を乱せば、この奇跡は井上の掌から容易にすり抜けてゆく。

精神を集中し、自分の体の中に一本の柱が貫いているイメージを形作り、噴射方向と出力を一定に保つ。

これまで以上に気流を体に纏わりつかせ、体の動きに気流を追従させるのではなく、気流と共に体を動かすイメージ。そしてそのまま、自分自身が気流となって、身も心も能力に委ねるイメージ。

井上は自分の足の動き、体重移動の要となる運動まで気流に任せること、人間では到底不可能な速度と密度を持った打撃を可能とした。

今の状態で身体検査を受ければ、もしかしたら超能力者《レベル5》に認定させるのではないだろうか。そう思えるほどに、井上は充実していた。

（これが、俺だ。俺の、力だ！）

逆巻く風に飛ばされぬよう、廷兼郎は四足で必死になって床にしがみつく。背筋を伸ばし、両手を広げて宙に浮く井上とは、小気味良いほどの対比だった。

狼が月に吠えるが如く、廷兼郎は井上へと挑みかかる。力感を感
じさせない動きは、四本足による『無足』タツクルである。

足首を捉えるかと思われたが、次の瞬間には、廷兼郎の手は虚空
を握っていた。

咄嗟に顔を床に貼り付けるほどしゃがみ込む。背中の肉を抉るよ
うな、際どいボディーパーが通り過ぎる。

切れた道着に遅れて、背中から血の飛沫が上がる。丈夫な道着を
引き裂くほどの烈風に、人の素肌が耐えられる道理はない。

道着の背中が三条に切り裂かれた。どうやら先ほどのボディアッ
パーは、左右の連打だったらしい。血が背を伝い、汗と共に顎先か
ら垂れる。あの音速連打を顔に食らうことに比べれば、この程度は
取るに足らない負傷だろう。

切り裂かれていると言うことは、井上の拳が纏う超高压の気流が
掠っただけであり、井上の拳は廷兼郎の背中を通過しただけに留ま
ったと言うことだ。

(ちゃんと、読み切れている)

圧倒的速度の体重移動が可能に成ったとて、井上の『心の速度』
が跳ね上がったわけではない。単に井上の捨てパンチが無くなり、
あの密度の打撃を全て外さなくてはならなくなっただけのことだ。

そのための四足の型である。お互いに立ち上がった状態を前提と
するボクシングの攻撃範囲から、徹底して体を逃がすこの構えなら
ば、被弾の危険性を大幅に減らすことが出来る。

焦ることはない。むしろ時間を掛けることが、今の井上には有効
だ。

突如として編み出した新たな能力の使用方法は、確かに強力であ
る。だが、所詮は付け焼刃であることを忘れてはならない。

慣れない能力の使い方である上に、明らかに演算容量を大幅に食う派手な効果は、ここまで異常もなく運用できていることが奇跡である。

いずれは脳が過負荷に耐えられず、能力が暴走を起こすか、失神するかどちらかだ。G 1トーナメントのルールでは失神は勿論、暴走状態も試合続行不可能と見なされる。自動的に廷兼郎のTKO勝ちである。

必定、井上は見に徹するほど、自分の首を絞めることになる。否が応でも前に出て、廷兼郎に拳を打ち込まねばならない。

先手をくれてやる。その代わりに、初動をじっくりと見させてもらう。そして、初手の一撃を見切る。

(そう。たったそれだけだ)

たったそれだけの単純な作業だ。やることは何ら変わらない。体を正し、心を正し、波一つ立たぬ水面の如く、平らかな心地にて万事に臨む。

ここには自分も、自分の敵も味方もいる。複雑で、煩瑣で、だからこそ面白く躍動し、常に変化を求められる。

しかしそこには、自分も、敵も味方も関係の無い、清なる世界が広がっている。自分と言う広漠な箱は、だからこそ何もかもを受け入れる。

いつも通り。何も変わらない。不変にして普遍の境地。

二ラウンド、残り十五秒。

廷兼郎はゆっくりりと、四足の型を解いた。しかし、立ち上がったわけではない。

膝を畳み、背筋を立てて、廷兼郎はその場に正座した。

G・1トーナメント決勝戦！！！！：六

先ほどのタツクル以後、廷兼郎は動こうとしなかった。ホバリングが長引けば井上にこそ勝ち目が無いことを、既に見切ったらしい。（何から何まで、お見通しかよ）

これほどの力がありながら無能力《レベル0》というのだから、ある意味能力者よりも出鱈目な存在だと、井上は心の中で吐き捨てた。

井上が睨んでいると、廷兼郎は何を思ったのか、徐に座り込み、その場で正座した。

もはや驚くことさえする気が起きない。その姿を見れば、彼の狙いは瞭然である。

（荒涼と同じことを、するつもりか）

この状況は、準決勝第二試合の最後に酷似していた。荒涼もまた、今の廷兼郎と同じように、井上の前に座り込んだ。

そして、井上の打撃を真っ向から食らった。

あれをもう一度やれと、廷兼郎は言っている。待っていれば、あるいは逃げに徹すれば、こちらのほうが自滅するというのに、あえて動きを止める。常人の神経で行なえることではない。脳の回路が致命的にずれている。

安全な勝利よりも、真っ向から奪い取る勝利を選んでのことが。この大能力者《レベル4》からボクシングだけでなく、その能力さえも奪おうというのか。

煮えたぎる頭に反応して、気流が泡立つ。ボコボコと破裂する気泡を急いで沈める。ぐらりと揺れる体が、寸でのところで元に戻る。こういう細かな駆け引きの一つ一つに対して脳細胞を切り売りしながら、井上は何とか心と体の平衡を保つ。

（何が、何が狙いなんだ！？）

完膚なきまでに相手を打ちのめし、誇り高き勝利を得たいのか。それをちらつせて、動揺を誘っているだけなのか。それともこれこそが、勝つための唯一の手段だと言うのか。

井上には、それを知る術は無い。知れたところで彼に出来ることは限られているのに、今正に戦っている最中なのに、そんなことを考えてしまう。

廷兼郎には、井上から仕掛けるしかないことが分かっている。だからじつくりと、大人しく座りながら上目遣いで待っている。

待たれている。自分から動くしかないという状況は、かなりのストレスとなる。自分が相手の思惑通りに動かされているような気分になるからだ。

「はあ、はあ……」

井上の体が小刻みに揺れる。気流の流れに、自分の意識の行き届かない部分が現れ始めた。もう能力の限界が近い。

（行くんだ。だからこそ、行くんだ！）

相手にどんな思惑があるかと、ここで尻込みすれば、自分が負けに近づくだけだ。結局はいくら能力があっても、才能があっても、前に出ることにしか活路は無い。心が退いた者には、能力者だろうとそうでなかつと、敗北の道しか用意されていない。

むしろそれらは、前に踏み出すための理由に過ぎないのかもしれない。

（覚悟を、決めるんだ）

思えば荒涼との試合でも、似たような状況を味わっていた。あのときもすぐには決断できなかった。

もう迷わない。否、迷えない。井上の能力は、そんな遅延を許さ

ない。例えそれが自分自身のことだとしても。

井上は半身に構える。左腕を引き絞り、右腕を照星に見立て、延兼郎に向かって一直線に突き出す。

荒涼を仕留めた、あの打突だ。最大戦力をたったの一撃に込める、音速に限りなく近づいた踏み込み。

荒涼に放ったときと同じようにすればいい。自分と言う存在をこの空間に染み渡らせて、全ての気流を支配下に置く。逆巻き、くねり、うねらせて、一つの方向へと導いていく。

殴る。ただのそれだけのために、膨大な気流を自分に向かって傳かすかせる。

全ては、この一撃のために。超能力も、ボクシングも、自分も、全てをこの拳に捧げ尽くす。

「行くぞ、レベル0ッ!!」

この気流では聞こえるはずの無い叫びを挙げ、井上は最後の能力行使に臨む。

自分の体を一つのジェットエンジンだと考える。全身で絶え間なく吸気し、全身で思い切り排気する。急激なGから体を守るため、緩衝材としての高圧空気も纏わせておく。

ニラウンドの残り時間、十秒弱。『スーパーソニック音速突破』には、長すぎる。

背面からの排気を最大出力。同時に前面のエアブレーキを完全開放。その二つを淀みなく行い、井上は分厚い空気の壁へとめり込んでいく。

「え
」

遅い。井上はそう感じた。

ゆっくりと。時間が流れている。

速く動こうと能力の限りを尽くしたのに、廷兼郎の元へ近づくまでの距離がゆったりと感じられる。

（ああ。そうか）

自分が遅いのではない。空気が、周りが、世界が、遅いのだ。

これまで知覚できていなかった音速移動が、十分に把握できている。いつかそうなりたいと思いつけていただけに、その達成はあつけないとさえ思えた。

余裕のある感覚で左腕を意識する。そして空気の粘性などまるで無いかのように、するりと左ストレートが伸びていく。

自分の放つ打撃が、今でははつきりと感じ取れる。これまで置いてきぼりにされていた反射神経が、嘘のように満ち足りている。

井上の動きに反応してか、廷兼郎は膝の上に置いていた両手をゆるると掲げる。まるで蝶でも捕まえるときのような、慎重すぎて欠伸の出る動きだ。

（遅い！！）

すでに拳は打ち出されている。荒涼と同じく、このまま顔面に突き刺し、後ろの壁まで轢き倒す。

例えその拳が、捕まれたとしても。

あとは廷兼郎の顔に拳を打ち込むだけの刹那、井上の左腕を冷やかな何かがふんわりと包む。

その儚さが、むしろ怖気を誘う。

井上は加速した感覚で、左腕が捕獲されたことを理解した。

廷兼郎に拳を捕らわれてから、ようやく井上は炸裂音を聞いた。

「どうやらこの一撃、とうに音速を超えていたらしい。ついに井上は、『スーパーソニック音速突破』の名に恥じない力を手に入れたようだ。」

「なのに、負けるのか」

超音速の状況下で、井上は悔しそうに呟いた。

左拳を支点に、くるりと体が巻き込まれてゆく。音速を突破するまで加速した態勢は、一度崩されると立て直すのは困難極まる。

どうしようもなく、体が流れていく。体重が、気流が、自分の支配からすり抜けていく。

せつかく新しい能力の使い方を憶えたのに。これまでやりたかったことを、ようやく達成できたのに。

自分はもう、自分の言うことを聞いてくれない。

勝ちたい。こんなに充実した状態で、負けたくない。強くなったのに。強くなれるのに。こんなところで躓きたくない。

「そんなもんですよ。喧嘩なんて」

井上の呟きが届いていたのか。答えるような廷兼郎の声を聞きながら、井上は遙か後方へとすっ飛んでいった。

二ラウンド終了を間近に、主審は試合を止めた。

二ラウンド四分五十五秒。廷兼郎のKO勝ちである。

倒し倒されの派手な試合展開に、終了した今でも観客席は大いに盛り上がっていた。そんな中、観戦していた網丘の頬を、前触れ無

誰にともなく、問う。その答えを聞く前に、
廷兼朗は正座したまま瞑目し、眠るように失神した。

G・1トーナメント決勝戦！！！！：六（後書き）

第三章終了です。ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。

長かった魔界トーナメント編がようやく終わりました。オリキャラばかり出してしまつて申し訳ありません。

次回も科学サイドのお話です。今度は原作キャラとの掛け合いを大事にしていこうと思います。

気になるレベル5? : 一

朝靄も晴れぬ早朝。一人の男が走っている。時折りズミカルに繰り出される拳は、明らかにボクシングのそれである。

彼の名は井上駿馬^{いのうえしゅんま}。大能力《レベル4》の『風力使い《エアロシユーター》』であり、『音速突破^{スーパーソニック}』の通り名を持つ能力者だ。

ボクシングを習っている彼は、こうして毎朝ロードワークを欠かさず行なっている。ダッシュとジョグを交互に繰り返して、瞬発力と持久力を養う。その際は勿論の事ながら、能力は使用しない。

G 1トーナメントでは準優勝を果たした上に、これといった負傷も無かった井上は、次の日からトレーニングを再開していた。

そんな彼の前を、同じくらい速度で走る人影がある。その後姿を見つけ、井上は足早に人影の横に並んだ。

「字緒くんじゃないか!」

「井上さん。おはようございます」

前を走っていたのは、字緒廷兼郎だった。彼はG 1トーナメントの優勝者であり、井上とは決勝で雌雄を決した仲である。

「もうトレーニングを始めてるのかい?」

G 1トーナメントで優勝した廷兼郎だったが、負傷の程は井上をそれと比べ物にならなかつた。準決勝では酷い凍傷を全身に負うことになったし、決勝戦でも当の井上に頭と言わず腹と言わず、しこたま殴られている。

「お医者さまには嫌な顔されましたがね、いつまでも休んでいるほうが体に悪いんで」

そう言って軽く振るわれた拳は、確かにキレていた。調子は取り戻しているらしい。

「井上、さんもツ、ジョギングですかッ!??」

「ま、まあ、そうだけど……」

「ここら辺はッ、車の交通量もッ、少ないからッ、いいですよねッ！」

「……あのさ、ちょっと聞いていい？」

「はいッ？ 何ですかッ？」

「それ、何やってんの？」

井上と併走している間、廷兼郎はビルの壁だのガードレールだのに手や足を掛けては飛びはね、無駄にくるくると体を捻って回転しまくっていた。

「ただのッ、ロードワークですけどッ」

「いやそれもロードワークじゃなくてスタントだから！」

井上の言うとおり、廷兼郎は走っているというよりは跳ねていると形容したほうがいい動きをしていた。

こういう風に屋根とかを走り回る映画があつたなあ、などと思いつながら、井上は廷兼郎の動きをいつの間にか真剣に観察していた。

ジョギングしている井上と同じ速度でありながら、その合間にバク転や前宙などを組み込んで、歩道の空間を縦横無尽に駆け回る。その運動量は、単に走っている井上に数倍していることだろう。

これだけの瞬発力と持久力を備え、あらゆる武術に精通してその技を臨機応変に使いこなし、フアービジョン予言能力者がサイコメトラー読心能力者に匹敵するような洞察力を持ち合わせる。

格闘技者としての理想を体現している。少なくとも井上にはそう感じられた。

「字緒くんは、対能力者戦闘術を研究しているんだってね」

「はいッ！ そのためにッ！ 学園都市に呼ばれましたッ！」

「それじゃあ、目標は『超能力《レベル5》』かい？」

飛んで跳ねていた廷兼郎の動きが止まり、ふわりと地面に降り立

った。

超能力《レベル5》。学園都市に七人しかいない能力者の頂点。無能力者《レベル0》とはいえ、その言葉を、廷兼郎が知らないわけが無かった。

「まあ、確かにビッグネームではあります」

「やりたくないのかい？」

廷兼郎は特に悩む様子も無く、首を横に振る。

「僕がやりたくても、許可が下りんですよ。僕は掃いて捨てても惜しくない、ただの無能力者。あつちは七人しかいない能力者の最高峰、超能力《レベル5》。重要性は比べるべくもないでしょう」

「……すごい自信だな」

それを決して謙遜の言葉ではないことを、井上は正確に読み取った。

戦いたくないどころか、刺し違える覚悟はとうに決めてある。ただ、無能力《レベル0》の悲しさ。超能力《レベル5》とはその戦略的、学術的にも価値に大きな開きがある。

つまり、万に一つでも無能力者《レベル0》が超能力者《レベル5》を殺したとあつては、その影響は計り知れないということだ。廷兼郎が超能力《レベル5》と立ち合わないのは、そうした体裁に配慮しているからに過ぎない。

「でもさ、超能力者《レベル5》の第一位、『一方通行』^{アクレレーター}が無能力者《レベル0》に負けたって噂が一時期流れたの、知ってるかい？」

「……そういえば、そんな話もありましたね」

「あの噂が本当なら、君が今更超能力者《レベル5》を倒しちゃっても、大した影響は無いんじゃない？」

夏の一時期に流れた噂の中に、『絶対能力進化』^{アクレレーター}計画が頓挫したのは、超能力者《レベル5》の『一方通行』が一人の無能力者《レ

ベル0』に敗北したためだ、というのがあった。

無能力者『レベル0』が超能力者『レベル5』を倒す。実に夢のある話だが、それだけにまともに取り合う輩などほぼ皆無だった。この噂を真に受けてしまったのは、少々頭の回転に難のある不良少年たちだけだろう。

「……それが噂であること自体が、大した影響なんですよ」

「え？」

「僕はこつちなんで。それじゃ」

軽く手を挙げ、廷兼郎は井上とは違う道へと走り出した。彼の発した呟きは、どうやら井上には聞き取られなかったようだ。

「……レベル5、か」

能力開発を行なっている学園都市にとって、レベル5というのは避けて通れない命題である。レベル5は、その能力の希少さは元より、戦闘能力や対外的価値において、未だに研究がなされている。

廷兼郎が開発協力している『カウンターメジャー対抗手段』計画においても無関係ではないはずだが、直接に模擬戦を行なったり、戦闘能力を解析出来るほどの権力も予算も無く、せいぜいが『絶対能力進化』計画の下請けで、少しばかり関わった程度である。

だからといって簡単に諦められない。廷兼郎にとっても、レベル5は惹かれる存在なのだ。崇拜していると言い換えてもいいかもしれない。

レベル0が何を、と能力者には一笑に付されてしまうだろう。それでも廷兼郎は、強い『能力者』への憧憬と興味を抑えきれない。それが無ければ、そもそも廷兼郎はこの学園都市に来ていない。

だが、廷兼郎の覚悟とは裏腹に、計画の規模や予算などを理由に、レベル5との距離は遠ざかるばかりだった。

大覇星祭における廷兼郎の活躍が長点上機学園から認められ、特別予算を組んでもらえることになったが、レベル5にオファーを出したりしたら、その時点で今ある予算が軽く吹っ飛んでしまう。

あの炎天下の中を駆けずり回った苦勞が、たった一回の模擬戦で消費されるといのは、廷兼郎としても勘弁してもらいたかった。

（お金を掛けず、合法的にレベル5と戦う方法があればなあ）

などと栓の無い妄想を、廷兼郎は幾度も繰り返している。なるべくこちらから喧嘩を吹っかけるようなことはしたくない。風紀委員が喧嘩をして捕まるなど、いい物笑いの種である上に、悪くすれば長点上機から退学させられるかもしれない。

「何というか、誰か目の前で暴れてくれないかなあ」

レベル5が何らかの犯罪行為を行い、そこに自分が立ち会えば、風紀委員として鎮圧行為が許可される。そうすれば例え殺してしまっても、業務上の過失なのだから言い訳は立つ。

廷兼郎が風紀委員を勤めているのには、そうした理由もあった。

そうした願望が思わず口を突いて出てしまう辺り、廷兼郎は相当に切羽詰っていた。

「あ！ 白井さんに頼めばいいじゃん！ 俺って天才！ 風紀委員やっててよかった！！」

廷兼郎の同僚である白井黒子は、あの御坂美琴とルームメイトだったはずだ。かくいう廷兼郎も一回だけ、直接会う機会があったのをすっかり忘れていた。

あのときは満足に話も出来なかったが、今回は用件がはっきりしている。

「持つべきものは同僚だな。久しぶりに支部に顔出すか」

善は急げとばかりに、廷兼郎はロードワークを急いでこなしていた。

気になるレベル5?…二

「だから、先ほどから言っていますの。そんな頼みは聞けませんと！」

その日、固法このりみい美偉は風紀委員の仕事のために支部に入ると、そこには学園都市の警察機構の要たる風紀委員ジャッジメントにあるまじき光景が展開されていた。

「一回だけでいいですよ。頼みます！ほんの少しでいいですから！」

女子中学生に縋りつく男子高校生の囃は、固法の頭を痛めるに十分な威力を秘めていた。風紀を守る風紀委員がこれでは、なんとも示しがつかないというものである。

「一体何やってるのッ！」
「ねばしッ！」

背中からつま先で巻き込むように、的確に脇腹を抉り上げる。如何な能力者でも、これほどの蹴りを食らえばただではすまない。まさに廷兼郎の教導の賜物だった。

固法もまた、廷兼郎の教導訓練を受講しているので、この程度の決るような回し蹴りは問題なく繰り出せる。

自分の仕事の成果を自分で食らい、ある意味で感無量の廷兼郎は、何故かにやけながらその場に蹲る。

「……ブーツでお腹を蹴られるのは、さすがにキツイですよ、固法さん」

「ウチの大事な風紀委員に言い寄って、何しようっていつの？ 場合によっては十八学区に帰ってもらうからね」

実はこの廷兼郎、第七学区の正式な風紀委員ではなく、正確には長点上機学園がある第十八学区の風紀委員である。

能力開発関連において抜きん出て素晴らしい長点上機学園や霧ヶ丘女学院のある第十八学区よりも、多彩な学校施設や病院などがひしめく第七学区のほうが、風紀委員の担当する事件の発生率が高く、その内容も多様である。

そのため協力派遣という形で、廷兼郎は第七学区の風紀委員として活動している。

これには事件を通して能力者との戦闘経験を積みませ、かつ模擬戦の費用を浮かせるという『カウンターメジャー対抗手段』計画絡みの目的も存在する。

「僕も風紀委員なんですけど、まあいいや。白井さんにちょっとした頼みごとをしてただけですよ」

むうう、と疑う視線を向けて固法は白井を庇うように抱きかかえている。ここでは完全に廷兼郎が悪人の体だ。

「頼みごとって?」

「御坂美琴さんと会わせて下さいって、それだけですよ」

「確かあなた、一回会ってるわよね」

「あのときは話とか出来なかったんで、少しお話がしたいだけなんです。野次馬根性かもしれませんが、超能力者《レベル5》というのは、やはり懂れます」

「……そうね。やっぱり超能力者《レベル5》って聞くと、どうしても興味が湧いちゃうわよね」

「何を言ってるんだか。わたくしは騙されませんわよ!」

同意しかけていた固法の言葉を遮るように、白井がぴしゃりと言う。

「美琴お姉さまに、喧嘩を売るつもりなのでしょう」

先ほどから白井と廷兼郎のやり取りは、このように堂々巡りしていた。

御坂に会いたいのは、戦うためだ。廷兼郎は対能力者戦闘術の研

究をしているから、そのデータを取るために超能力者《レベル5》に喧嘩を売る気だ。

そんな白井の主張を、廷兼郎は必死に否定していたが、内心は冷や汗ものだった。

何故なら廷兼郎の思惑は、ばつちりと見抜かれていたからだ。

白井はやはり、廷兼郎が御坂美琴と死闘を演じるつもりだと考えているらしい。

（全く。常盤台の仕込がいいんだな。十五歳で世界に通用する人材を育成するってのは、こういうことも含むのか）

だとしても廷兼郎は、白井と本音で語らうつもりはない。

「白井さんの大切なご友人に喧嘩を売るなんて、そんなわけがないでしょう。僕は確かに、ある意味で喧嘩をすることが仕事ですよ。だからこそ、どこで誰と喧嘩するかは、きちんと弁えているつもりです」

自分でも鼻が曲がるような建前をいけしゃあしゃあとのたまってみせるのも、如何なる状況でも気を静める訓練が活きているからなのだろう。

「だいたい僕は無能力者《レベル0》ですよ。超能力者《レベル5》と喧嘩して、勝てるわけが無いでしょう。悪くすれば殺されちゃいますよ」

学園都市での常識に則れば、その通りだろう。勿論喋っている廷兼郎こそが、そんな常識を屁とも思っていない。

「ちゃんとわたくしの目を見ながら言っただけですの」

ずいと、白井が廷兼郎を睨みつける。そんな廷兼郎の本音まで見透かそうと、必死に探りを入れてくる。

「そんなに見つめないでください。は、恥ずかしいですよこドッ！」

「やはり喧嘩を売っているんですね。ようく分かりましたわ！」

鳩尾を革靴のつま先で思い切り蹴り上げ、白井は勢いよく支部のドアを閉めて出て行った。

「いやあ、僕の教導が役に立っているようで、なによりですなあ……」

固いブーツによる脇腹への二連撃には、さしもの廷兼郎を膝を折るより他無かった。

閑散とした川の辺で、廷兼郎はジヨグとダツシュを繰り返しながらも途方に暮れるという、器用なトレーニングをしていた。

（白井さんからの伝手は駄目。となると……）
「手詰まりだな。どう見ても」

『レベル5とお近づきになりたい！』大作戦は、開始直後から暗礁に乗り上げたため、方向性の見直しを余儀なくされた。

（常盤台のある『学舎の園』には許可が無いと入場できない。突破できないこともないが、さすがにそれは悪手だろう。）

白井さんも駄目だから、多分初春さんも駄目。同じ理由で初春さんの友達の佐……、佐藤？ いや、もつと珍しい苗字だった気がするけど、あの人の連絡先は分からないから駄目だろうなあ）

知り合いに頼る方法は完全に潰された。他の方法を考えなくてはならない。

「どうしよっかな〜」

とは言うものの、何の取っ掛かりも無い以上、案の出しようが無い。

「あのお、字緒さん、ですよな？」

「はい？」

ジヨグで軽く流しているところに、後ろから話しかけられた。か

すかに聞き覚えのある声だったので振り向くと、そこにはやはり見覚えのある少女が立っていた。

「えっと、あなたは確か、初春さんの友達の……」

「佐天涙子です」

そうだ佐天さんだ、と納得した廷兼朗は手を大きく叩いた。

「前に一度お会いしましたね。風紀委員の支部で」

「はい。そうですね」

会話がそこで途切れる。

別段、廷兼朗は佐天のことを嫌っているわけではない。単に『友達達の友達』という微妙な距離感を、廷兼朗が把握していないだけである。

仲が良いわけでも悪いわけでもないし、そもそも会うのがこれで二度目の女の子を相手に、さて一体どうやって場を取り繕ったものかと廷兼朗が思案していると、佐天のほうの話が振ってきてくれた。

「あの、字緒さんって、レベル0なんですよね」

「ええ。いやもうこれが、才能の欠片もなくなってる」

いきなり聞くにしてはどうかと思う話題だったが、紛れも無い事実なので廷兼朗は特に文句も無く、佐天の話に乗っかることにした。

「佐天さんは、能力レベルはどれくらいなんですか？」

軽い調子で廷兼朗が聞くと、佐天は何故か答えに詰まったように俯く。

「実は私も、レベル0なんです」

ぴしりと、廷兼朗が固まった。何故に自分が墓穴を掘ったのか、彼には分からなかった。

少しばかり世間話に興じただけで気まずい空気を作って見せるのは、廷兼朗ならではの要領の悪さが為せる技だろう。初めて会ったときはもつと快活な印象を持った女の子だったが、あの活気は見事に削がれている。

「レベル0は、嫌ですか？」

墓穴をあえて掘り進む蛮勇は、単なる考えなしか、それとも故あってのことか。

「嫌じゃ、ありません。能力が無くたって、出来ることはあるからそれに答える佐天も、ある意味で並の神経ではないのだろう。」

「達観してるんですね」

「でもやっぱり、能力があつたらいいのについて思うときはありますよ」

「学園都市は、そういう場所ですからね。能力が高ければ、やはり色々と優遇される」

廷兼郎はこの短いやり取りの中で、少しだけ佐点と心が通じ合う気がした。お互いにレベル0であることの共感を持ったのかもしれない。

「それで、字緒さん。お願いがあるんですけど」

「はい……、はい!？」

少し距離が近まった気がしたとはいえ、いきなりお願い事をされるとは廷兼郎も思っていなかったが、佐天の神妙な面持ちを見てただ事ではないことを感じ取り、そのお願いとやらが切り出されるのを待った。

気になるレベル5?…三

「……『カウンターメジャー 対抗手段』を、私に教えてください!」

俯き気味だった佐天は、今度は打って変わって廷兼郎の顔を真正面から見据えた。その気迫を伴う言葉に、廷兼郎も敏感に反応する。

確固たる決意を秘めた強い瞳だ。どうやら今まで俯いていたのは、デターミネーション単に気まずかっただけではないらしい。

「何故、『対抗手段』を身につけたいのかな?」

努めて柔らかく包み込むような声音で、廷兼郎は訊ねた。

「私、能力が無いから、いざってときは友達に守られてばかりでも、それじゃ駄目だって思ってた。だから私も、強くなりたいんです!」

『強くなりたい』という言葉が、殊更に廷兼郎の体に心地よく染み渡る。

まるで親和性の高い物質同士を合わせたように、それは何の抵抗も無く結びつく。

「一応年長者として、言うべき事は言わせてもらいます」

だからこそ、廷兼郎は気を落ち着かせ、佐天の覚悟を見定めなければならぬ。

「強くなる方法は『対抗手段』だけではないし、学園都市における『強さ』とは、とかく能力レベルで計られることが多い。そういう意味で、能力開発を頑張るほうがいいと、僕は思いますよ」

『対抗手段』は、あくまで能力者と戦うための方法論である。学園都市が推進している能力開発とは、言わばそのコンセプトを真逆アンチスキルにしている。ジャッジメント

警備員や風紀委員といった、特殊な役職に付いている人間以外に、

みだりに吹聴していいものではない。

「『対抗手段』は白井さんや初春にも教えてるんでしょ。だったら能力者でも使えるってことですよね」

「それは、勿論ですよ」

「能力開発はちゃんと受けます。勉強もします。だから、教えてくれませんか？」

むうつと、廷兼郎は深く考え込んだ。

佐天の申し出をどう断ろうか思案しているのではない。むしろ佐天の思いに、自分はどうかやって貢献してあげられるか、真剣に悩んでいた。

能力者と戦うことにおいて、『対抗手段』は最適であると廷兼郎は自負している。そこは問題ではない。肝心なのは、どの程度まで『対抗手段』を教えるべきかということである。

廷兼郎とて『対抗手段』を完全無欠に身につけているわけではない。それに『対抗手段』自体が研究の途中であり、廷兼郎自身の力量も未だに発展途上である。

それでも彼の習練の程は、女子中学生が易々と肩を並べられるような次元ではないので、まさか廷兼郎も佐天をその道に引き込む意図は無かった。

しかし、簡単な護身術を教えるのみというのも気が引ける。勿体無いということではなく、小手先で生半に身につけた技術というのは、却って自分を危険へと導くことになりかねない。

『対抗手段』の精神をしっかりと身に付けられて、かつ女子中学生の体にも負担にならない程度が一番好ましい。

(風紀委員の人たちに教えているのと、変わらないかもな)

廷兼郎が教導訓練を行なっている風紀委員には、下は小学生から、上は高校生まで存在する。警備員に教える場合は、大人の相手をしなければならぬ。年齢も体力も違う彼らにも効果的に教えるため、

『対抗手段』はより修練しやすく、早く強くなれて、体を壊すリスクの少ない練習方法を模索してきた。

佐天に悪い気もするが、平均的な女子中学生にも身につけられる『対抗手段』の練習方法を確立するには、好都合な出来事かもしれない。

「出し惜しみするようなものでもありませんし、僕で良ければ手解きしますよ」

「ホントですか！？　ありがとうございます！！」

佐天は初めて会ったときの快活さで喜んだ。それを見てみると、何だか廷兼郎まで嬉しい気分になってくる。

そのとき、天啓が廷兼郎の体を打ち貫いた。佐天と初めて会ったときを回想しながら、別のところで違う歯車が流れるように回転している。

「佐天さんて、御坂さんと友達ですよね？」

「まあ、よく一緒に遊んでますけど」

佐天と初めて会ったとき、確かに御坂がその場にいた。自分の記憶違いではないことを確認してから廷兼郎は切り出した。

「いやあの、交換条件、つてわけじゃないんですけど、出来れば御坂さんに会わせてもらえないかな、なんて、言ってみたりしちゃったり……」

「別にいいですけど」

「ホントですか！？　ありがとうございます！！」

佐天に負けない活気で、廷兼郎は喜んだ。

超能力《レベル5》への道が、僅かながらに開けてきたのだから、これは喜ばずにはいられなかった。

佐天と会ったその日の夜、廷兼郎は網丘の決めたトレーニングメニューに従い、街中でのジョギングを行っていた。

まだG 1トーナメントが終わって日が浅く、廷兼郎の体からは完全にダメージが抜け切ったわけではない。今日か明日までは、メニューを抑えて体力の回復に努めるようにと、網丘から命じられていた。

体の調子を確認するために、軽く走りながらそこら中を飛び跳ねる。井上に殴られたダメージも、凍傷も治りかけ、調子は上がってきていた。

今すぐ能力者と戦っても構わないと、廷兼郎は息巻いていた。それは体の調子が元に戻ってきたことに加え、レベル5の御坂美琴と戦う機会が得られるかもしれないと思っっているからだ。

だが、勿論今は大事を取って模擬戦を組んでもらえない。それに模擬戦をまともに行なうと、結構な出費となる。そうそう行なえないのが現状だった。

「お前、G 1に出たレベル0だよな」

おろっ？ と変な声を上げて、廷兼郎は後ろを向いた。どうやら今日の廷兼郎は、走れば呼び止められる運勢らしい。

廷兼郎は半身のまま、呼び止めた男を見る。

中肉中背の、これといった特徴の無い体つきだ。どこのかは分からないが、学生で間違いはないだろう。しかし服装だけは破けたジーンズに革ジャンと、どこか退廃的な感じがする。

見た目の大きさから言えば廷兼郎もそう大差ないが、彼の場合は見えやすい外側ではなく、体の奥にある内側の筋肉を発達させ、体脂肪率も抑えに抑え、高密度に凝縮した上での線の細さである。

「何だよ？ 少しは口きいたらどうなんだ？」

黙って自分を見つめる廷兼郎を奇異に思ったのか、男はそんなことを言った。

彼の言葉を、廷兼郎はこれ見よがしに鼻で笑う。

「俺とお話がしたいのかい？ 悪かったよ。まさかファンがいるとは思わなくてね」

敵意を漲らせ、眼光鋭く睨む相手に思ってもいないことを告げる。それは相手にとって挑発以外の何物でもない。

「寝ぼけてんのか？」

「そうかもな。あんたの能力で覚ましてくれるとありがたい」

そう言っつてようやく、廷兼郎は男に対して構えを取った。

廷兼郎がやる気になったのを受け、男が何かを捧げ持つように右の掌を掲げると、そこに突如として闇を明るく照らす光が灯る。

「バイロキネシスト発火能力者か」

廷兼郎の言葉に、男はにこりと笑って返す。

「「」名と」

その顔に、手刀が横殴りに叩きつけられた。

情緒も風情もケレン味もない、単なる一撃だった。

顎を打ち抜いた手刀を返し、掌で男の顔をがっちり握り、寸分の間も入れず発勁。

廷兼郎の左手はそのままに、男の顔だけが隣の壁にぶち当たる。

台詞を言い終えた直後に左の二連撃を食らった男は、舌を噛み潰してしまっただが、そんなことに気が付くような意識はすでに無かった。

「今日は気分が良い。本来、街中での危険な能力行使を取り締まるのが風紀委員だが、見逃してやるよ」

実のところG 1トーナメントが終わってから、廷兼郎がこのような輩に絡まれるのは、一度や二度では済まなかった。

そしてそれは、廷兼郎や網丘の思惑のうちだった。

一応は最強の能力者を決めると謳っている大会で優勝した無能力者。己の強さに自負を持つ能力者ならば、これを放って置くわけがない。

そんな能力者の心理を逆手にとって、廷兼郎は労せず、そして法も犯さず能力者との戦闘を経験できる。

模擬戦を組むのは無理だが、突発的な衝突に関しては、全て廷兼郎の裁量に任されている。

「だから、また来い。また、相手をしてくれ」

聞こえてはいないだろうとは思いつつ、廷兼朗はそれだけを話しかけ、トレーニングを再開した。

構ってレベル4? :—

「はいッ。いいですよ。ラスト!」

「はあ、はあ……」

佐天がひたすらに頑張る様を、廷兼郎は見守っている。といつても、別に徒競走をしているわけでもないし、組手をしているわけでもない。

廷兼郎はひたすら、佐天が転がる様をじつと見ていた。

体操着の女子中学生が前転や後転を繰り返す様子を見ていとうのは、忌憚の無い言い方をすれば変態以外の何者でもない。ここが第二学区の訓練場でなければ、廷兼郎はもれなく警備員アシキスギルのお世話になっていたはずである。

「はい。お疲れ様です」

「……ふはあ!」

廷兼郎の声を聞いて、佐天が転がったまま床に突っ伏した。今日は朝から廷兼郎に言われたとおり、走らされたり、軽くパンチやキックをやらされたりときた上で、何回も床をぐるぐると転がされたのだから、少しは休みたい気になるのは当然である。

「ふむ。佐天さんは運動が得意なんですねえ」

「体動かすのは、好きですよ」

「そうですね。これなら結構なことまで教えてあげられそうです」

「まずは何ですか? 正拳突きとか、一本背負いとか」

「やる気があるのはいいいけれど、まだまだ攻撃は教えられませんよ。まずは受身から」

第二学区の訓練施設内にある道場に、廷兼郎はいそいそとホワイトボードを持ってきた。今度は座学らしい。

「極端な話、攻撃というのは誰にでも出来ます。だけど防御というのは、そうはいきません。まあ、まれに異常に勘が冴えてる人つてもいるけど、他所は他所、ウチはウチ！」

オカン理論で天才的な防御を否定し、黒ペンでキュッキュツと何かを書き始めた。

「というわけで、まずは体の使い方を覚えてもらうためにも、受身をやってもらいます。僕の教導で行なってる受身は、『転がる』ことです」

「それだけ？」

「細かく言えば、着地する場所や高さで方法も変わってきますが、それは基本の受身を覚えてからです」

「それで、基本の受身って何です？」

柔道家がやってるバーンて鳴るやつを習えるのかと思い、佐天はわくわくしていた。

「さっきやってたじゃないですか。前回りと後ろ回り」

「……あれ？」

「あれです。あと横回り」

えー、と佐天は不平を漏らす。

「そんなので強くなれるんですか？」

「ふむ。こういうことは最初に聞いておくべきだったな」

言いながら、廷兼郎はホワイトボードを反転させ、まだ使っていない白い面に字を書いた。

「佐天さんの考える『強さ』とは、何ですか？」

書かれたのは、『強』の一字だった。

「腕が太いこと？ 足が速いこと？ 火を出したり、電気を出したりすること？」

「え、えっと……」

改まって問われると、意外にすんなりと答えは出てくれなかった。しかし廷兼郎は嫌な顔一つせず、先を続ける。

「すみません。意地悪な聞き方をしてしまって。でもね、先ほど上げたことだったら、『カウンターメジャー対抗手段』では身に付きませんから、そこは了承してくださいね」

そう言って、『強』の一字から派生させたそれらにペケを付け出した。

「『対抗手段』は腕が太くなるわけでも、足が速くなるわけでも、ましてや能力が身につくわけでもない。能力者と戦うにあたって、何をすべきか、どうすべきかを理解することが、『対抗手段』だと言ってもいいでしょう。そのために色々な武術や格闘技の要素を取り込んでいるんです。

結果として、少しは腕が太くなったり、ちよつと足が速くなったり、僅かに脳が刺激されて、もしかすれば！ 万に一つ！ 飛ぶ鳥の影を踏むように途方も無い！ 気が遠くなるほど矮小な可能性ですが！ 能力が発現するかもしれません。でも、あなたがこれから習うのは、そういったものとは本来無縁であるということをご理解ください」

まさに教師のような口ぶりです。廷兼郎は佐天に言い聞かせる。こういう喋りは、教導をしている間に身に付いてしまっていた。

「今日一日は、『転がる』という運動を体に覚えさせましょう。それが終わったら、ゆっくりと組手の中で転がり受身を使ってみて、投げの受身はその後になりますかね」

「そんなに受身をやるんですか」

佐天が思わずそう漏らし、はっとして口を手で押さえる。しかし廷兼郎は気分を悪くすることなく、神妙な面持ちで返した。

「受身や防御は本当に大事です。能力者の方たちと戦っていて、本当にそれを実感しています。僕自身、防ぐ技術を身に付けていたことで助かった場面がたくさんあります。そして、防ぐ技術を身に付けていない能力者の方に、何とか対抗できています」

そう語る廷兼郎の顔は、意外にも悲しそうに俯いていた。

「相手の攻撃を防ぐ術を知っていれば、もっともつと強くなれるのに。僕みたいな無能力者《レベル0》になんか、負けないのに」

困ったような笑みを浮かべて、廷兼郎は独り言のように呟いた。本来は無能力者よりも強いはずの能力者に廷兼郎が勝てるのは、知っているかどうかの僅かな差異にすぎない。

だからこそ、廷兼郎は自分の実力が盤石ではないことを十二分に理解しているし、それがもどかしくもあり、嬉しくも感じている。

「でも、佐天さんが習いたいことも取り入れていきますよ。受身ばかりじゃ詰まらないでしょう。やはり習い事というのは、どこかで楽しまなくちゃ、ね」

何を習いたいですか？ 大抵教えられますよ。あ、でも銃の扱いとかは無いですよ。僕、ああいう難しい作りの機械は苦手なんです。廷兼郎は嬉しそうに、佐天をまくしたてた。

「それじゃ、えっと……」

佐天は躊躇いがちに、道場の壁に立てかけてあった木刀を掴んで言った。

「この使い方を、教えてください！」

「武器術、それも剣術ですか」

「駄目、ですか？」

男ならば思わず「そんなことない！」と即座に言いたくなる絶妙な角度で、佐天が見上げてくる。

「むっ……」

多少世間離れしているとはいえ、廷兼郎も男は男。その絶対の法則には抗い難い。かといって安請け合いできるわけもなく、必死に気を落ち着かせてから佐天と向き合う。

「何故、剣術を習いたいと？」

「これなら棒さえあれば、どこでも使えると思うんです」

佐天の正直な答えに、廷兼郎はにっこりと笑った。

「確かに剣術家が棒を持てば、それ即ち刀となる。棒という普遍的に存在するものを得意とするのは、とてもよい考えです」

ですが、と廷兼郎は言葉を切った。

「剣術以上に、棒の扱いに長ける術があるなら、それを習ったほうが良くはないでしょうか」

「まあ、あるならそのほうがいいですけど」

「杖術というのを、ご存知ですか？」

佐天が首を傾げる。確かに聞き慣れた単語ではないだろう。

「杖という、まさに棒を操る術理をとことん突き詰めた技術体系です。僕は、そっちのほうに佐天さんには似合ってると思います」

まるでファッションを誉めるような感覚でそんなことを言っているのだから、当の佐天はどうリアクションを取ったらいいのか分からない。

佐天が手に持っていた木刀を受け取り、廷兼郎は軽く振るってみせる。

「突けば槍、払えば薙刀、持たば太刀。杖はかくも外れざりけり、つてね」

「何ですか、それ？」

「杖術を現した格言です。杖術には、槍、薙刀、刀の要素が混在しているんです。しかし、それらとは決定的な違いがある」

廷兼郎は木刀を杖に見立て、くるくると器用に振り回す。

「それは、刃の有無です。槍の如く突き、薙刀の如く払い、太刀の如く持てども、その身に刃を帯びぬ。それが杖です。故に杖術とは、神武不殺の道でもあるのです」

「しんぶふさつ？」

「敵を殺さずに勝つ、理想的な決着、あるいはそれだけの實力を表します。友達を守りたいあなたには、ぴったりではありませんか？」

「でもそれって、すごく難しいんじゃない……」

困った顔で問いかける佐天に、廷兼郎は深く頷いた。

「はい。難しいです。絵に書いた餅と言っても良い。完璧に体現できたら、それはもう神様と言っても過言じゃない。しかし」

廷兼郎は木刀を置き、その横にあつた本物の杖を手にして、

「例え無駄だとしても、それをやらないわけにはいかないんです。それは能力者でも、無能力者でも同じことだと、僕は思います」

佐天の小さな手に、優しく杖を握らせる。

「友達を守りたい。とても立派な心がけだと思います。僕は佐天さんの、その思いに応えたい。つらいこともあるかもしれない。やめたいこともあるかもしれない。そんなときは」

「私、絶対諦めません！最後までやり通します」

「そんなときは、すぐにやめましょう」

すたとんと音がしそうなほどあっさりと、廷兼郎は言ったのけた。

「な、何ですか？」

「友達を守るのと同じくらい、自分のことも守ってください。強くになりたいのに、怪我をしちゃっては意味が無いでしょう」

「でも強くなるためには、無理もしなくちゃいけないじゃないです

か

「確かに、致し方ない部分というのがあります。痛い思いをしなれば、技の怖さや威力が分かりませんから」

佐天と同じ杖を振り、廷兼郎は感触を確かめる。まるでよく懐いたペットをあやすように、体中に杖を纏わりつかせていた。

「でも僕は、あなたに怪我をさせるつもりはないし、危険なことをやらせるつもりもない。あくまで健康で、怪我なく、安全に強くなってもらいたい。そして、あなたの人生を少しでも手助けできたら、それでいいんです」

これは佐天に限らず、廷兼郎が受け持つ生徒全員に向けての思いと言つてよかつた。『対抗手段』を習った人の人生を、少しでも幸多いものに出來たら、それは廷兼郎にとって望外の喜びである。

「今はそんな、夢のような方法を模索してる段階ですが、少しくらいは、佐天さんの人生において良い働きになるかもしれませんから」まさか、自分の人生ということまで考えてもらえていたとは。決して軽い気持ちで頼んだわけではないが、自分にはまだ覚悟が足りていなかったのではないか。

佐天はそんなふうに決意を新たにし、ぐつと杖を握り締めた。

「それじゃ、がんばりましょう。次は横転がりですよ」

まだ転がるの！？ と声を上げた佐天を、廷兼郎はにこやかに急ぎ立てて練習させた。

構ってレベル4? : 二

佐天は思いのほか運動神経が良く、そしてひたむきなこともあり、
廷兼郎の教えたことを貪欲に吸収していった。その上達の程は、風^{フウ}
紀委員^{ヤッジメント}の学生達と比べても遜色ない。

そろそろ組手も始めるかと思案する廷兼郎は、やはり嬉しそうだった。自分が教えたことに応えてもらうというのは、この上ない喜びだ。そこに余計な感情など入り込む余地は無い。

何か忘れていているような気がしなくてもないが、廷兼郎の心は清らかさに満ちていて、そんなことには頓着していなかった。

「そういえば字緒さん。御坂さんとは何時会いますか？」

「ほえ？」

だからこそ、佐天のその台詞が何を意図しているのか、一瞬判じかねた。

「……あ、ああ。そっかそっか」

廷兼郎は徐々に思い出し、そもそも佐天に『カウンターメジャー対抗手段』の手解きをしているのは、御坂美琴への挑戦権を獲得するためだったことに気が付いた。

「この稽古は、御坂さんのためにやってるんだからね。べ、別にあなたのためなんかじゃないんだからね。勘違いしないでねほしッ！」

佐天の払い打ちが見事に顔面に決まり、廷兼郎の顔が横にすっ飛ば^ぶ。

今のは廷兼郎が悪い。杖の素振りを見ている途中で余計なことをくつつちゃべっているのだから、舌を噛んでのたうつのが相応だろう。

「だ、大丈夫ですか？」

「はい。大丈夫です。ちょっと血が止まんないけど」

口からどばどばと血が溢れている。人はそれを『大丈夫じゃない』
と言うものだが、廷兼郎にとっては違うらしい。

「そう言えば、そんな約束もしてましたねえ。僕はいつでもいいで
すよ。割かしスケジュールは融通が利くんで」

「じゃあ、今週の日曜とかどうですか？」

「分かりました。空けときます」

そして佐天は、言いにくそうに杖をもじもじと動かしながら、上
目遣いを寄越してきた。

「あと、字緒さん。私が格闘技を習ってること、皆には内緒にして
くださいね」

「ええ、ええ。分かっています。他言は無用ということ」

それは最初から佐天に言い含められていたことだった。自分が格
闘技を習っていることを知られるのは何だかこっ恥ずかしいようで、
もつと形になってから自分で伝えたいそうだ。

「日曜かあ。楽しみだびぶるちッ！」

今度の日曜に思いを馳せて、またも佐天の振り打ちが廷兼郎の顔
面に炸裂した。彼女は順調に『対抗手段』を習得しているようだっ
た。

今日は楽しい日曜日。教導訓練の仕事も午前中に終わらせ、午後
は学生らしく友達と遊ぶ予定である。

「御坂さんに会うぞ。会ったら会うぞ」

もうG 1トーナメントで負った傷は回復した。あくまで廷兼郎
的には、である。

廷兼郎は元々あまり感情の起伏が激しいほうではないし、訓練に
よって如何なる状況でも平静を保つことを身につけている。その彼

が、鼻歌交じりにスキップしながら街を闊歩していた。

廷兼郎の数少ない友人である荒涼阿刀次こうりょうあとうじが見たら、ちよつと引くくらいの浮かれっぷりだった。その上彼のスキップは、何故か一回で二メートル近く前に進むため、気持ち悪いくらいの速さで移動していた。

靴に何か仕込んでいるとしか思えない新手の移動方法に見えるため、『ああ、どっかで開発されたおもちゃでも履いてるのか』と周囲に変な誤解を与えていた。

サボボボボボ！ サボボボボボ！

廷兼郎が最近気に入っている教育番組のキャラクターの着信音が鳴り響いたので、スキップしながら携帯を取り出した。

「もしもし字緒です」

「廷兼さん、緊急事態ですよ！ すぐに来てくださいますか？」

「え？ 白井さん？ 緊急？ 何事ですか？」

「とにかく来てください。今地図を送りますから」

終始慌てた様子の白井が一方的に通話を切り、程なくしてメールで地図情報が送られる。

路地裏を通った先の、あまり人気の無い場所が示されている。確かその場所は取り壊し予定のビルや倉庫がひしめき、スキルアウトや不良能力者の溜まり場になっているという話を、廷兼郎は風紀委員の同僚から聞いたことがあった。

何があったかは分からないが、白井の様子は尋常ではなかった。

佐天との約束の時間までかなり余裕を持って出掛けたことだし、同僚が困っているのなら助けるのが筋というものだろう。

とにかく廷兼郎は、先ほどのスキップを凌ぐ速度で入り組んだ路地を進んでいった。

「ここだな」

白井の示した場所を寸分違わぬ場所は、荷物も全て出し終えて用を終えた廃倉庫だった。

警戒しながら、抜き足でゆっくりと倉庫の中に入る。ささくれたコンクリートに、赤茶けたむき出しの鉄骨。なるほど不良が好みそうな場所だが、肝心の不良が一向に見当たらない。

「白井さん、来ましたよ。何の御用ですか？」

廷兼郎の問いかけに応じて、白井が虚空から現れた。空間移動能力者ならではの心臓に悪い登場の仕方だが、廷兼郎に動揺の色は見られない。

「分かっているでしょう。わたくしの誘いに乗ったと言うことは」「誘い、とはまた……」

可愛らしい言い方だ、と廷兼郎は小さく付け加えた。

佐天のセツティングによる廷兼郎と御坂との会合は、まんまと見抜かれていたらしい。でなければあのタイミングで、あんな不自然な通話をしてこないだろう。

それを知りつつも、廷兼郎は白井を放っては置けなかった。

やはり白井は委細承知の上で廷兼郎を呼び、廷兼郎も万端整えた上で罷り越した。

故にあとは互いに、最後通牒を突きつけるだけである。

「諦めて、もらえませんか？」

「賽はもう、投げられたんですよ」

噛み合っているとは言いがたい会話が、二人の隔たりを如実に表していた。

既に、立ち合う他無し。

「なら、わたくしを倒してごらんさい」

ガンベルトに見立てた革帯から、弾丸のような金属矢を取り出し、両手に掴み持つ。

「目隠しは、しなくていいんですか？」

赤子を櫛るような弱さで、廷兼郎が軽口を叩く。

「ええ。ハンデは無しですわ」

いい言葉だと、廷兼郎は素直に思った。御坂と戦う前に、白井と戦うのも悪くない。それどころか、メイスイベントに相応しい。

それ相応の対応が、廷兼郎に求められるだろう。

白井が廷兼郎と戦うのは、これが二度目である。あのときはあくまで模擬戦闘だったが、今回はそのような制約のある戦いではない。お互いの我を通すための単なる喧嘩であり、それ以上でもそれ以下でもない。

廷兼郎から目線を外さず、白井はゆっくりと太ももの革ベルトから取り出した金属矢^{ダット}を握り締める。

廷兼郎の体術を持ってすれば、瞬き程度の際でさえ突いてきかれない。テレポートするにしても、迂闊には行なえない。

正直言って白井の目では、近距離での廷兼郎の動きを追うことは出来ない。無闇にテレポートをすれば、むしろその瞬間に打撃され、次手を潰されてしまう。

空間移動能力者にとって、攻撃を受けることは致命的だ。痛みで集中を乱されると、テレポート自体が不可能になる。

出来れば打撃を食らう前に、廷兼郎を戦闘不能に追い込みたい。つまりは初手にて決着するのが望ましい。

ならば身体部位のどこを狙うべきか。懸命に思案する白井の耳を、突然の雷鳴が突き上げる。

目が覚めるほど体を震わすそれは、廷兼郎が行なつた震脚によるものだった。

「見に徹しすぎですよ、白井さん。確かに状況の把握は大事なことです。しかしそれで動きを止めるくらいなら、いつそ飛び込んでしまいなさい。それが嫌なら、その状況は自分の手には負えないものとして退きなさいと、お教えしたでしょう」

コンクリートの床を苦も無く踏み割つた廷兼郎が、無造作に歩み寄る。

何ら警戒するところの無い、まるでいつもの挨拶をするときと変わらない歩き方が、白井には異常に映つた。

殺されるかもしれない状況で、ここまで普段と変わらぬ平素な姿勢でいられることは、ある意味で一種の能力である。

「ほら、早く決めなさい。逃げるか、戦うか。それとも、殺すか」
ぎりりと、白井が奥歯を噛み締める。相変わらず嫌な言い方をすると、文句の一つも言いたい気分だった。

「その金属矢だと末端に当たっても、即座に戦闘能力を奪える可能性は低い。

狙うなら動脈か、面倒なら的の広い胴体でも構わないでしょう。内臓を傷つけられたら、さすがに動けないですからね」

世間話のような軽い調子で、効果的な攻撃方法を分かりやすく解説してくれる。どんどん詰まってゆく距離と相まって、それは白井の神経を圧迫してゆく。

「より確実性を重視したいなら、頭部でしょうな。脳漿に達するの

が理想でしょう。顔を刺されても、まあ、動けるといえば動けますから。目を狙うのは、あまりお勧めしません。的が小さいので、当てた効果当たる確率に見合わない。極端な話、目が見えなくなつて、動けませんから」

(殺すしか、ないんですの?)

足を断ち、手を切り、目を刳り貫いたとしても、廷兼郎は生きています。生きている限り、五体満足ではなくても、彼は諦めないのではないか。それほどの覚悟で、臨んでいるのではないのか。

だとしたら、今すべきことは何なのか。白井は今更そんなことを、延々と考え続けていた。

殺せ。

同僚を手に掛けたくない。

お姉さまに手を出す気だ。

まだ出してない。止めてみせる。

止めるには、殺すしかない。

そんなことはまだ分からない。

分からない。何も分からない。自分が今ここで、何をどうするべきなのか。白井には分からない。

白井に向かって歩いて歩いていた廷兼郎は、五メートルほど手前でその歩みを止めた。

先ほどよりもずっと近い位置で、二人は見つめ合う。

見られている。さっきよりも細かく、具に観察されている。その感覚が、白井の緊張をさらに高める。もはや一挙手一投足に間違いは許されない。それを見つけた瞬間、廷兼郎は白井の隙を突いてくる。

じつと機を伺う白井を前に、廷兼朗はだんだんと顔を曇らせていった。

「何をするのか決めてないなら、とつとと失せろ！」

風紀委員の仕事でも、教導訓練中にも見せたことのない顔で、廷兼朗は白井を睨む。

「う、失せません！ 諦めてくれるまで、わたくしはここを離れません！」

廷兼朗の気迫に呼応して、白井も気炎を吐く。離れないという言葉を体現するため、両の足に力を込め直す。

「廷兼さんは、わたくしに言いましたよね」

何のことか思い当たらず、廷兼朗は首を傾げる。

「わたくしのほうが優れている。それは覆らない、と」

挑戦的な物言いに、廷兼朗はにんまりと破顔する。それは初めて白井と戦った後、彼が送った言葉だった。

「はい。今でもそれは変わらないと思っていますよ」

いつでも飛びかかれるよう身を僅かに撓めながら、ぬけぬけと廷兼朗は言つてのける。

「構えないのですね」

「構えてほしいのですか？」

僅かな間を置いて、廷兼朗は右手を臍の前に、左手を肩口から軽く前へと出した。

廷兼朗の、普段の構えであった。

「ここからが、本番と言うことですよ」

本来の構えを取り、晴れやかな顔のまま、廷兼朗は白井に言った。彼女の精神を磨耗させたやり取りは、まだ戦いですらなかった。

構ってレベル4?…三

「そんなにしゃっちょこばってると、いざって時にテレポートできませんよ。ほら、もっとリラックスして」

自分はきつちりと構えておきながら、廷兼郎は白井にそんなことを言った。

ここまで廷兼郎を観察してきて、白井には分かったことがある。それは、戦闘中の廷兼郎と会話してはいけないということだ。それどころか、何らかの意思の疎通すら遮ったほうが良い。

口を利いたらその瞬間、彼のペースに乗せられてしまう。残念ながらこと戦闘という概念を、廷兼郎は白井よりも研究し尽くしている。

せめて話すにしても、自分のペースを守りながらでなければいけない。

この膠着をどう崩すべきか、白井はまだ考えあぐねている。

いや、すでに答えは出ている。それも、廷兼郎に出してもらった答えが。

『もう一度僕と戦ったとして、白井さんが戦い方を変えないようなら、あなたは偶然、もう一度負けます』

廷兼郎と模擬戦を行なった後、白井はそう助言された。そしてその後、彼が提示した作戦は、この場合でも非常に有効なものだった。

『例えば、この皿を僕の首に空間移動させる、とか』

テレポートを使いながらも、素手での制圧にこだわった白井は、あえなく廷兼郎に失神させられた。

一回でも接触を許せば、白井に勝機はない。やはり離れた場所から体内へのテレポートを行なう以外に、勝つ手段が思いつかない。

(違う。そんなことはありません)

それはあくまで、廷兼郎の意見である。無能力者が知恵を絞って出した、一つの視点に過ぎない。参考にはなるだろうが、丸々乗っかると言うのは、能力者のプライドが許さない。

(そう。わたくしは、空間移動能力者でしたの)

空間移動能力者の強みは、移動の際に時間も障害物も、あるいは距離さえ無視できることだ。

距離も時間も飛び越えて、どこへでも行ける。誰も追いつけない。追いつかせない。

そして、逃がさない。

突如、白井の目の前に、廷兼郎が迫る。意識の隙間を突いた、見事な踏み込みだった。

前に出した左手による、喉断ち。初動を殺しに殺した、不可視の一撃。自身より身長も年齢も下の相手に、幾ばくの猶予もない初撃だった。

「当たった、と思ったんですが……」

顎への手刀を振りぬいた形で、廷兼郎は静止していた。その二の腕には、深々と金属矢が突き刺さっていた。

「いや、空間移動能力者の感覚では、そこに『置いた』と言っべきですか。白井さん」

先ほどと立ち位置を逆にする形で、廷兼郎の背後に白井が立っていた。

廷兼郎の言葉に答えず、白井は金属矢を握ったまま、先ほどと同

じように佇む。

完全に気配を消して行なわれた打撃を寸でで見切り、廷兼郎の踏み込みに合わせて背後へ移動、間髪居れず、右腕に金属矢を転送。自身の持つ物質と自分自身へのテレポートを、ほぼ間断なく行う。単なる能力の高さだけではない。風紀委員として養ってきた判断力が、理想的な形で能力を発揮させたのだろう。

「空間移動能力者の面目躍如、と言ったところですね」

皮肉ではない。揶揄の色が込められていない、素直な称賛の一言だった。顔を見れば、それくらいのこととは白井にも読み取れる。

その実直さが、戦いの最中にあっても白井には心地よい。

「優しいですね、廷兼さん」

だからこそ彼女も、稚気を含まずに廷兼郎を誉めた。

「わたくしを試していたのでしょうか。そのために、無駄話をしてくれたのですわね」

「無駄と言われては、立つ瀬が無いなあ」

恥ずかしそうに頭を掻きながら、余った手で金属矢を引き抜く。それをくるくると手の中で弄び、すつとその掌の中に収めたまま構え直す。

「能力者と戦う方法を探る。それが僕の目的ですが、例え能力者とはいえ、その方法を実践し、役立ててくれるのは、やはり嬉しい。ついつい、その姿を見たくなくなってしまっ」

一瞬、廷兼郎の視線が外れるのを、白井は見逃さなかった。

キンツッ！　空間移動独特の音響が、廷兼郎の耳元で鳴り響く。僅かに首を横に振っていないければ、今ごろ顔の真ん中に杭が突き立つところだった。

話の途中であろうと、晒された隙はきちんとその場で突く。『対^{カウ}

抗手段』が身に沁みていることがよく分かる攻防だ。

すぐに歩法『無足』で間合いを詰める。今度は腕を振り上げる前に、白井の姿が消える。

即座に廷兼郎は横へ転がる。前足の力を抜き、かくんと落ちる力を横へ流す。その真上に金属矢が殺到する。何れも急所ではなく末端狙いだったことまで瞬時に読み取り、改めて後ろに現れた白井に向き直る。

今度はさらに速く、さらに低く『無足』タツクルを敢行する。

茶色いローファアを掬い上げようかという瞬間、コマ送りの間を抜いたように、目の前から目標が消える。

その直後に来る、確かな殺気。

今度は真上から降り注ぐ。正確に言えば、上空に空間移動した白井が、下にいる廷兼郎の体に金属矢を置いていただけである。

タツクルを外した態勢から、低空で前宙しつつ捻って後方にまたも向き直す。

トン、と軽い足取りで白井はむき出しの鉄骨の上に立つ。

高いところから見下ろすレベル4と、地に這い蹲るレベル0。何とも身に抓まされる絵面ではないか。能力者が本気を出せば、こんなたった一人のレベル0などひとたまりもない。

ここに来て、空間移動能力者が本当の意味で牙を剥いてきた。あの模擬戦のときのようにはいかない。

高位能力者のさらなる成長を、レベル0として妬むべきか、教導訓練官として胸を張るべきか。明確に判ぜられるほど、廷兼郎は大人ではなかった。

分っているのは、今この場で、どう戦うべきか。それだけである。

見下される廷兼郎の体が、さらに低まる。とうとうそれは地面すれすれのところで止まった。

「天羽根流、四足の型」

井上との決勝戦でちらと見せた、あの構えである。自身を四つ足の動物に見立て、地に這い蹲る構え。

高い場所にいる白井は、まるで足元から覗かれるような視線を感じていることだろう。無論、そういった効果も四足の型は狙っている。

ひとり、ひとりと、廷兼郎は指を這わせる。天井近くにいる白井に近づくにしては、あまりに鈍くて小さな動きだ。

そもそも相手は距離も時間も無視して移動する空間移動能力者である。物理的な間合いの概念など殆ど意味が無い。重要なのは心の間合いである。一挙手一投足を判断する『心の速度』こそ、廷兼郎は競おうとしている。

間合いを詰めるのではない。心を削るのだ。心の余裕を詰めに詰めて、演算領域を狭めて能力行使を遅らせ、あるいは不可能にする。それも立派な『対抗手段』の一つである。

だからといって、四足の型はただ単に相手を足元から見上げる構えではないし、ゆっくり移動することが目的でもない。むしろこの構えは、単純な移動速度だけで言えば、天羽根流の他の技や構えの追隨を許さないものとなっている。

白井の持っていた金属矢が掻き消える。そして間もなく、甲高い音と立てて金属矢がコンクリートの床を噛む。白井がそれを確認したとき、彼女は廷兼郎の姿を見失っていた。

「ど、どこに!？」

声に出して当惑する暇もあればこそ、その隙を突くのは『対抗手段』において当然の礼儀である。

相手を見失った以上、この場に留まるのは悪手であると判断し、即座に移動する。

白井が移動した直後、鉄骨を拉ぐほどの踵落としが炸裂した。天井を支える鉄骨の一本が撓み、倉庫全体が鳴動する。あと数回繰り返すだけで倒壊するであろう蹴撃が、ただの人間の足から生み出された。

廷兼郎は歪んだ鉄骨の上に這い蹲り、四足を畳んでぐつと縮こまる。次の瞬間、鉄骨を伝って建物の壁へと向かった。

白井の目には捉えきれない、爆発的な速度で。

白井の視界の大外を回り、真横から近づく。まるで虫かヤモリが這う様を見ているようだが、人間が全速力で走ると変わらぬ速度で行なわれているのが、奇異と言えば奇異だ。

またも廷兼郎が消えたのを感じると同時に、白井は十一次元演算を開始する。そうしなければとてもではないが、回避が追いつかない。

何かが近づくか風切り音を聞きつつ、白井は空間を移動した。

白井のいた場所を通過した廷兼郎が、四つ足のまま着地する。彼の目の前、倉庫の端の方には、左の髪だけ結ってある女の子が立っていた。

右の髪は、さらりと下ろされていた。

白井が空間移動するほんの僅かな間に、廷兼郎の指が彼女の右の髪を結わえていた帯を掻き切っていた。

「空間移動中に割り込んだら、その部分を持っていかれるのかと思っただけ、違うんだなあ。」

あくまであなたが知覚できる領域しか移動しないのだから、見えも

しなかった僕の指など、移動できるはずが無いんですな」
勉強になるなあ、と感心したように廷兼郎が話しかける。

「それじゃあ、次は」

廷兼郎は白井を指差して、言った。

「左のリボンを頂きます」

白井は悪寒を必死に押さえ、自分に言い聞かせる。

あれは罠だ。ブラフだ。左を意識させるための方便だ。惑わされるな。聞く耳を持つな。

そうしてまたもひたひたと、廷兼郎は白井に近づく。

天羽根流、四足の型は、仕手の体を床に這い蹲るほど低くし、前面投影面積を限界まで狭めて攻撃を受け付けない、あるいは受ける攻撃を限定する、本来は守りの構えである。

それを廷兼郎は、四足獣の如き機動を以って、出入りの激しい遊撃の構えへと発展させていた。

そもそも現代の人間の構造は、四本足で動くことに適していない。それは二本足で歩くようになり、骨格や脳の容量が変化してきたことが大きい。勿論、数歩か数秒かならば素早く立ち回ることも出来るだろうが、二本足のときほど長くは続かない。

四足で走るには、人の体は歪に過ぎるのだ。

しかし廷兼郎は、人間の視界から瞬時に飛び出すほどの速度を維持したまま、天井の鉄骨まで駆け上がり、そこからまた同じ速度で下りてみせた。

それを可能としているのは、極限まで姿勢を正す99・9999999999999999《トウエルブナイン》を目指した『近似正中線』である。

人の重心のあるべき場所、重力が人を貫く唯一の線。立ってしようと座ってしようと、例えば地に這い蹲ってしようと、それは変わらず人体に存在する。

四足という不自然極まる姿勢でも精度の高い正中線を維持することで、廷兼郎は力の伝達に齟齬を発生させず、四本の足を十二分に活かした機動を可能とした。

四本の足を使った機動は、もはや二本足のときとは違う次元だった。

まず単純な力において、足と手の力がそのまま馬力となるのだから、速まることは間違いない。そして地に伏せたことで重心が低まり、二本足以上の安定性を生み出す。それは同時に旋回性能を向上させ、移動における運動の自由度を、二本足では到底追いつけない領域へと発展させている。

その分、二本足で立っているときほどの攻め手の多彩さには欠けるが、移動するという一点において、もはや天羽根流には四足の型以上に適した技も構えも存在しない。

本来は守りの構えだったものを遊撃の構えへと発展させたのは、廷兼郎一人の功績ではない。彼が従事した『対抗手段』の副産物である。

廷兼郎は幾多の模擬戦や訓練を経て、あらゆる武術の要素を取り入れ、それらを自らの血肉に少しずつ、確実に沁み込ませていた。それは同時に、彼が身に付けた天羽根流の中にも染み渡っていった。廷兼郎の体に染み渡っていた天羽根流と、新たに沁み込んできた『対抗手段』は、互いに密接に反応しあい、混然となって一つの器に納まる。その結果が四足の型の変化のように、目に見える形にまで発露し始めていた。

そういう意味では、『対抗手段』は最高級の触媒と言える。

武術とは人が編み出すものである以上、常に変化し、進化する。目的のために、より適した形へと。

進化した天羽根流が、空間移動能力者を追い立てる。

構ってレベル4? : 四

転送される金属矢の位置、白井の移動先まで予測し、駆け寄ってゆく。そこにはこれまでの、ある種示し合わせたような理知的な動きが見られない。四つ足にお似合いの餓狼の如き気迫と機動で、白井に食らいつこうとしている。

本当に獣のそれでありふり構わず攻めてくれるなら、いつそ楽だと白井は考えていた。

例え四足で獣の真似をしようと、それは明らかに人間だ。素手で能力者を倒すことにその身を費やしている人間なのだ。その動きの一つ一つが、『能力者を倒す』ということだけに集約されている。

白井黒子を倒すことが、今の廷兼郎の全てである。

獣のように単純に走り寄り、人間のように複雑に回避する。野生と科学を足し合わせ、勝利と言う答えを導こうとしている。

その答えを上回らなければ、つまり負ければ、廷兼郎と御坂が立ち合うことになる。

(嫌、嫌ッ！ 絶対に嫌ですのー！)

そんなことは許さない。許したくない。ここで倒す。ここで諦めさせる。

「何としても、ここで止まっていたいただきますのー！」

このまま滅多矢鱈に金属矢を投げつけても徒に消費し、攻め手を自ら放棄するようなものだ。この廃倉庫には、レポートによる遠距離攻撃を行うのに手頃な物体が無い。金属矢が切れれば、否が応でも接近戦を行わねばならない。

それは自殺行為だ。あの『対抗手段』に接近して戦うというのは、幾らレベル4の白井でも蛮勇と言わざるを得ない。そうやって勝てるのなら、とつくにそうしている。

(いや、まだありますの。わたくしの武器)

それは自分の体。白井のテレポルトは移動する物体が、移動後の空間を押しつけて行われる。それを利用して、理論上ながら、白井は単なる紙片にてダイヤモンドをも切断することが出来る。つまり白井のテレポルトは、物体の硬度も質量も関係なく切断、貫通することが出来る。

言わずもがな、人体を切断、貫通することも十分に可能である。ならば、自分自身をテレポルトする物質に例え、廷兼朗の体と同じ座標に現れれば、白井の体の分だけ、廷兼朗の体が押し退けられる。

「うっ、くはっ！」

こみ上げてきた吐き気を一喝し、目の前の廷兼朗に集中する。

能力で人を殺す。能力者にとっては最大の禁忌である。その行使を迫られるほど追い込まれて、気分を害さない能力者など居ないはずがない。それが分かっているからこそ、廷兼朗は攻勢に出ているのだろう。

廷兼朗には、白井が彼を殺せないことが分かっている。そしてそれは、まことに正鵠を射た理解だった。

別段、廷兼朗は白井の恋人でもない。単なる同僚で、単なる教導訓練官なだけだ。たったそれだけの関係だ。

それだけの関係で人を殺せるほど、白井の常識は破綻していない。知り合いを何の感慨もなく殺せるほど、白井は弱くない。

殺したくないし、殺されたくもない。それがごく自然の、そして白井の、たった一つの願いだった。

だが今、自分が廷兼朗を止めなければ、彼は御坂に戦いを挑む。

この苛烈さと実直さを、白井の大切な先輩に向ける気だ。そしてこの戦闘に対する余りにも厳格な姿勢を、自分にも、御坂にも強いことだろう。

己の命すら投げ出しかねない厳しさを、味方にも敵にも求める。だからこそ『対抗手段』は『対抗手段』足りえる、とも言える。

廷兼朗の指が、左側頭の際どいところを掠める。左の髪を貰うと言う約定を、律儀にも守っているらしい。無論、それさえもブラフやフェイントの類である可能性は大だが。

レポートを使って、ようやく五分五分の勝負。ならば、ものを言うのは体力か。

(まずいですわね)

体力云々で言えば、明らかに廷兼朗に分がある。勿論、白井のレポートが通常の運動よりもエネルギー効率が格段に素晴らしいのは確かだが、常に殺気を向けられながら動くと言うのは、単なる競技などとは違う次元で体力を消耗する。

攻撃は当たらない。長引けばこちらが不利。だとすれば、流れを変えるほかない。このギリ貧の状況を喝破するだけの、廷兼朗の力を持ってしても抗い難い流れを、彼にぶつける。

この手元にある金属矢などよりも大きいもので、廷兼朗の動きを止められれば最上だが、倉庫内にはそのような物質がない。むき出しの鉄骨に打ちっ放しのコンクリートがあるだけだ。

「余所見をするからッ」

鋭い声が届いたかと思ったときには、廷兼朗の影が白井の横を掠め、後方へと回り込んでいた。背筋には悪寒と共に、ふわりと垂れる髪の感触がある。

廷兼朗は約定通り、左の髪のリボンを貰っていったようだ。もう猶予はない。廷兼朗の指は、白井のすぐそこまで迫っている。

殺したくないし、殺されたくもない。だが事ここに至っては、『対抗手段』の厳しさに応えざるを得ない。

(やります。止めて、みせます！)

白井は廷兼朗と距離を取りながら、覚悟を新たにす。応えてや

る。レベル4として、空間移動能力者として、『対抗手段』に全力で応えてやる。白井は廷兼朗に、そう教えられてきた。

白井の動きが変わった。慌しくテレポートを繰り返すばかりではなく、落ち着いて廷兼朗を見定めている。

(何か、狙っているな)

釣りあがった口から見える白い歯から、猫科の獣が威嚇しているときのような小さな擦過音が聞こえる。落ち着きを取り戻した白井に合わせて、廷兼朗も躍動を抑え始める。ひたひたと指を這わせ、下から彼女を見上げる。殊更に嘗め回すような、生理的嫌悪を掻き立てる目つきで。

そんな視線に負けじと、白井も目にぐっと力を込める。もうそのような揺さぶりには動じないと言いたいらしい。

「いいぞ。見せてくれ。俺を止めてみせろ！」

叫び上げ、複雑にフェイントを掛けながら近づく。見れば見るほど幻惑され、追えば追うほど追いつかれる。その危険な錯綜を引き付けるだけ引き付け、白井は寸前でテレポートする。

廷兼朗は後方を取られたと思い、すぐさま向き直った。

しかし、そこに常盤台の制服はない。

相手の姿を見失ったと判断した瞬間、廷兼朗は倉庫の中央に躍り出た。空間移動能力者を相手にして、安全地帯という発想はまず在り得ない。自身も、そして武器さえも時間と距離や物質の硬度、質量さえ無視して行使してくる相手には、例え危険が増えようと、まずは広い視野を確保することが肝心である。四隅の一つに背を当ててしまうのは、運動の自由を自ら手放すようなものだ。

廷兼朗の頭上、梁のように通された鉄骨の上に、空間移動能力者は佇んでいた。両側で留められていた髪は下ろされ、淡いウェーブの髪が、肩の上で素直にうな垂れている。

「廷兼さん」

いつもと違う髪形のためか、その言葉は、中学生にしてはひどく大人びたものに聞こえた。

何か、覚悟を決めた強い瞳だ。元々整った顔立ちも相まって、白井の気配が凄絶さを帯びてゆく。大きく見開かれた瞳が、下に這い蹲るレベル0を眺める。その視線に如何なる感情が乗せられているのか、廷兼朗には掴めない。白井の瞳には、一切の揺らぎが見られない。

正されている。瞳に、体に、心に、覚悟に、一本の確かな筋が通っている。

「これがわたくしの、『対抗手段』です。どうぞ、受けてください」
白井が消えると同時に、廷兼朗の頭上に入り組んだ鉄骨が出現した。華奢な中学生が、瞬く間に無骨な鉄の塊と入れ替わってしまった。

鉄骨の群れの下にあつて、廷兼朗はなお、そこに留まっていた。恐怖に慄き、身が凍ってしまったのかも知れない。だがそれ以上に、廷兼朗は彼女に言わねばならないことがあつた。少なくとも彼は、そう感じていた。

「白井さん、美事みごとですッ！」

あの一瞬。会話を終えたあの一瞬で、白井は倉庫を支える鉄骨の近くへ移動し、廷兼朗の上に現す。それを計八回、自身のテレポートと鉄骨のテレポートを繰り返した。廷兼朗には一瞬と感じられる刹那の間に。

時間と距離を無視する能力。テレポートならではの早業であり、力技である。

建築用の鉄骨が八本、入り組んで落ち迫る。この距離、この位置、この範囲。単純に横へ飛んで逃げるには、あまりに絶望的な質量。

(逃げられない。ならば向かうまで！)

決断に逡巡はなく、挙動に齟齬はなく、当然のように鉄骨と鉄骨の隙間を廷兼朗は駆け上がる。

高く上がったことで倉庫の中を見渡す。白井の影はなく、気配も無い。

すなわち、いるとすれば倉庫の外。

逃げた？ 廷兼朗から？ 今更逃げてどうするのか？

否、そもそも逃げではない。

(狙いは、建物の倒壊！！)

飛び上がった数瞬の間にそれだけの判断を下せるのは、『対抗手段』の賜物と言えるだろう。だがその恩恵も万能と言うわけではない。それを廷兼朗は嫌と言うほど味わっている最中だった。

天井が、廷兼朗に向けて降り来る。鉄骨を上回る圧倒的な質量が、廷兼朗に覆い被さろうとする。まるで白い鯨の腹へ飛び込もうとしている気分だ。

「ぬがあああッ！」

せめて上げた対抗の勝鬨に、コンクリートの塊が軋轢を以って応えてくれた。

崩れゆく倉庫を、白井は眺めていた。最後に放たれた咆哮ごと、廷兼朗は飲み込まれていった。

「はあ、はあ、はあ……」

精密にして迅速を極めた八連続テレポート。自身のテレポートと

鉄骨のテレポートを分けるなら、十六連続にもなる。

乱れた息を整え、額に浮かんだ汗を拭く。ほぼ死亡が確実な状況だが、あの対能力者戦闘術開発者ならば、あるいは生きているかもしれない。

「いいえ、違いますわね」

必ず生きていると、白井は確信していた。それどころか、この倒壊を利用して身を隠し、攻撃の機会を伺っていると考えていた。このまま留まって静観すれば、今この場で御坂と廷兼郎が会うことを阻止できる。

言うまでもなく、それはこの場限りの対処療法である。廷兼郎が御坂と戦うことを諦めない限り、この問題は根本的な解決を見ないならばこそ、白井の解答は一つしか有り得ない。

テレポートを使わず、自分の足で倒壊した倉庫に近づく。靴音を大きく鳴らし、これみよがしに近づく。あえて敵に自分の存在を知らせる愚は、相手の攻め気を誘うための仕掛けである。

廷兼郎相手に易々と通じるとは思えないが、倒壊した建物の下敷きになつている以上、無傷ではいられない。その状態ならば、あるいは白井に襲い掛かる一瞬に隙を見せるかもしれない。

油断なく金属矢を握り締め、爆心地のように荒れた一角の真ん中を進む。僅かな物音や揺れを見逃すまいと、努めて呼吸を平静に保つ。今にも後ろから襲い掛かれそうな妄想を振り払い、気を静める。

空間から空間へ移動を得意とする、空間移動能力者の類稀なる空間把握感覚が、一帯に染み渡る。

微かな身じろぎも、息遣いも全く感じない。見事な気配の遮断である。人間は極めればこれほどのことが出来るのかと、白井は心の底から感心していた。

御坂のようなレベル5は、超能力という人間に潜在する能力を、極限まで引き出して突き詰めたものと言える。

だが、廷兼郎もある意味では、人間の潜在能力を限界まで引き出した存在と言える。正確には、引き出している最中だが。

いずれにしても、ここからはひたすら我慢比べだ。先に痺れを切らせたほうが負ける。

お姉さまのためにも、負けるわけにはいかない。動くわけにはいかない。

学区間を走るモノレールの中、廷兼郎は物憂げな表情で窓の外を眺めていた。その表情の通り、彼は憂鬱な気分だった。

(目の前の勝負に拘るなど、言っただけなんだけどなあ)

白井が廷兼郎を止めるため、鉄骨を彼の真上に転送しつつ、倉庫を倒壊させた。鉄骨で押し潰し、さらに建物の自重で圧殺する二段構えの戦略だったが、廷兼郎は瞬時にこの戦略の問題点を突いた。

それは仕手である白井が、受手である廷兼郎の姿を確認できないことである。建物を倒壊に巻き込むなど、確かに圧倒的で致命的な攻撃だが、それは完璧を意味しない。

倉庫の倒壊を感じ取った廷兼郎は天井を蹴って素早く前回り受身で着地し、同時に手近にあった窓を体当たりでぶち割って外へと転げ出た。

能力者の打倒を目指し、日々の鍛錬を怠らぬ者ならではの離れ業である。

廷兼郎の感性は、瞬時にこの状況を分析した。

白井の姿は見えない。幸いにも白井のいない場所に出れた。お互

いに相手の位置が分かっていない。

(ならば、やることは一つ)

一瞬の迷いもなく、廷兼朗は踵を返してその場から一目散に逃げ出した。物音一つ立てないその足で、廷兼朗は佐天と約束した待ち合わせ場所へと向かった。

廷兼朗の今の目的は、レベル5と戦うことである。レベル4の白井と戦うのも非常に楽しいのだが、今となっては御坂のほうに彼にとって魅力的だった。

なので白井との戦いに決着をつけず、たまたま抜けるのに丁度良い機会が巡ってきたので逃げてきたというわけだ。

我ながらずるいやり方だと、廷兼朗は自覚していた。武術はずるいものだと開き直るつもりはない。ただ面倒になってしまっただけだ。レベル5とレベル4を比べてしまっただけだ。

レベルの高低などに関わり無いと思っていた自分が、まさか他人をレベルの高低で判断しようとは。

学園都市の色に染まり始めていることを感じると、廷兼朗は憂鬱にならざるを得なかった。

携帯を取り出し、恨めしそうに画面を見る。未だに白井からの着信は無い。

あの倉庫跡から廷兼朗を探すとすれば、携帯に電話を掛けて鳴らすのがいいだろう。さて、それをいつ白井が思いつくかと、廷兼朗はある意味楽しみにしていた。

掛かってきたら勿論通話するつもりだ。それくらいは彼女の執念に免じて持て成してもいい。むしろそこは廷兼朗にとって退くに退けない一線だ。人として、武術家として、その礼を失するわけにはいかない。

「はあやくこいこい、ってか」

空間移動能力者に向かって早く来いも何もあつたものではないが、
廷兼郎は白井が来てくれることを願いつつ、御坂の許に向かうとい
う贅沢な二律背反を満喫していた。

暇無しレベル0? : 一

佐天は御坂といつものファミレスで待ち合わせており、そこへ向かう途中だった。

それが何故か、口と腕をガムテープで縛られ、ワンボックスカーに乗せられているのか、皆目見当が付かない。

過剰に金属をあしらった服装。毒々しいほどの極彩に染められた髪。そして交わされる下卑な会話。そういった要素が彼らの人種を決定付けていた。

こんな連中に絡まれる覚えも、ましてや拉致される謂れもない。自分が一体どうなるのか、先の見えない恐怖に、佐天は必死で抗っていた。

「日野浦、ホントにコイツ攫っちまってるのいいの?」

「構まねえよ。コイツ使って、あの無能力者を呼びたして、殺してやる」

日野浦と呼ばれた男は舌でも噛み切ったのか、少し変わった喋り方をしていた。その舌足らずな声が、むしろ迫力を増している。

程なく着いた廃ビルの一階は、什器の少ないただっ広い空間だった。

そこへ突き飛ばされ、佐天は床に這い蹲る。

男たちがにやにやと見下ろすなか、一人が佐天に近づいて言った。

「お前、アサオの知り合いたる」

「アザオ」と発音したいのだろうが、回らない口のせいで濁音が抜けてしまっていた。彼の言葉尻から察するに、どうやら目的は廷兼郎にあるようだ。

「あいつをここに呼へ」

有無を言わせない、危険な目つきである。断れば何をするのか、明確に予想できないのが怖い。

「とつととしる。俺はな、あいつに借り返さなくちゃ気が済まねえんだよ」

乱雑な手付きで佐天の長い黒髪が締め上げられる。頭皮を引っ張られる痛みで、佐天が悲鳴を上げる。

「んたよ？ その目は？ 喧嘩売ってんのか？」

それでも佐天は、彼らに屈していなかった。

レベルなんて関係ない。今出来ることを、自分が出れることをやるだけだ。

怖い。恐ろしい。泣いて喚いて許しを請うて、この場から逃げ出して、家の布団に包まって寝てしまいたい。

「……あんたたちなんか、あんたたちなんかッ！」

手近にあった棒を掴み、杖に見立てて佐天は一気に振り抜いた。これまで廷兼郎に習った杖術の成果が活き、見事な角度で日野浦の顎を横から打ち抜いた。

だが悲しいかな、女の子の力では、一撃で昏倒というわけにはいかず、佐天の髪がさらにきつく締め上げられる。

「ためえ、下手にててりゃいい気になりやかかって……」

あれで下手に出ているつもりだったのかと、佐天は心の中で毒づいた。

「焼き殺すそ、女」

佐天の髪を握っているほうとは反対の手に、ぼつと赤い火が灯る。バイロキネシスト発火能力者の生み出した火炎である。

「ごうごうと揺れる火が、ゆっくりと佐天の顔に近づいていく。自分の顔を滴るのが涙なのか汗なのか、もう分からないほどその火が熱い。」

「呼ぶことはない。ここにいるよ」

佐天の髪を握り締めていた手が、何かに弾かれた。

「あ？」

反射的に日野浦が見上げると、そこにはぬうつと黒い影が突っ立っていた。

「また会ったな。発火能力者」

影がそう喋るまで、日野浦はそれがG 1トーナメント優勝者だとは気が付かなかった。

日野浦の顔が歪む。驚きと同時に、先ほど弾かれた腕から激痛が発せられていた。よく見ればそれは弾かれたのではなく、叩き折られていたらしく、手首から先がこれでもかと言うくらい真下に垂れていた。

「あ、ああ……」

痛みと恐怖と威圧感で、日野浦はその場に尻餅をついた。いつそ廷兼郎が怒り狂って向かって来たなら、まだ余裕を持って迎えられただろう。

件の廷兼郎には、一見して怒りの色は無い。知り合いを誘拐され、あわや乱暴されるかもしれない状況にあつて、彼は普段と変わらず、するりとそこに立っていた。

平らか極まる心持ちで、日野浦を見下ろしていた。

「佐天さん、ごめんね」

やんわりと佐天の持つ杖に手を置き、ふわりと取り上げる。まるでよく懐いた生き物のように、杖はくるくると廷兼郎の体に纏わりつく。

「ごめんね。すぐ終わるから」

言うなり、杖が捻る。

一人の男の喉を突き終えたところまで佐天は理解したが、その反

対側にいた男まで倒れたのは、どういわけだか分からなかった。

廷兼朗は男の喉を突く前に、反対に位置していた男の脇を下から振り上げた。腋下神経を刺激され、男の体が異所性興奮を起こし、脳に過剰な信号が伝達され、身体がその機能を一時的に喪失した。喉を突かれた男も同様、喉にある神経に過剰な負荷が掛けられ、身を振る激痛のなかで昏倒した。

バトンのように目まぐるしく回転させながら、廷兼朗は残る二人へと歩み寄る。段々と風を切る音が高まり、長い杖が霞んで見えな

い。
棒を振り振り近づく無能力者を前に、不良能力者たちはどうすればいいのか、具体的な対策を講じられなかった。

先ほどの廷兼朗の一振りと一突きは彼らの目に留まることはなく、申し合わせた冗談にしか感じられなかった。では本当に冗談かと言えば、そんなわけはない。冗談で脇下と喉を差し出す人間はいない。では何故倒れたのかと言えば、目の前の無能力者がそうなるように叩いたからだ。

G 1トーナメントなんて、単なるお遊びの似非格闘技だと思っていた。無能力者が優勝してしまうくらい、程度の低い奴らの集まりなのだろうと、高を括っていた。

そうではなかった。まるで違った。分かっていたいなかった。戦うことに自信のある能力者たちを倒してのける無能力者が、日々を怠惰に過ごし、たまたま授かった能力を嵩に不良を働く自分たちに比べて弱いことは、果たして確定した事実だったのか。

「知り合いを攫ってまで立ち合いを臨む。僕も見習いたいよ。その覚悟を」

人道に悖るやり口だが、廷兼朗はそれほど気分を害していない。勿論、巻き込まれた佐天に対する謝罪の念は存在するが、その一方

で感心していることも事実だった。

自分もある意味で、人の道より武の道を優先する節があるので、そのことを不良たちに向かってとやかく言つつもりはなかった。

「だから真っ向、受けて立つ」

それだけの覚悟を見せられて、廷兼郎はおいそれと受け流すことが出来ない。そんな器用さを、彼は持ち合わせていない。

「……突かば、槍」

ずっと、廷兼郎が杖を引いた。円弧を描いて旋回していた杖が、いつの間にか横一線にぴたりと据えられていた。

目の前で相対していた男の鼻が、無くなっていた。正確には、軟骨が内部にめり込んでいた。鼻血が噴き出す前に、男の顔が床に突き刺さった。

旋回させていた動作の、どこに突く動作が混じっていたのか。端で見ていた男には分からない。

「払えば、薙刀」

男の当惑などお構いなしに、廷兼郎が杖を横に回転させて振り回し、反対側の先端が男の両膝を割った。

すっと勝手に腰が落ちてから、ようやく膝の痛みを知覚した。もう一度立つことはおろか、声も上げられない。自分の足が本当にまだ付いているのか、確かめるのが恐ろしい。

それでも彼は、廷兼郎から目を離さなかった。それは彼の胆力が素晴らしかったわけではない。

全身を駆け巡る灼熱の痛みを、冷まし冷やして凍てつかせる清涼な致命の気配が、彼の目を釘付けにしていた。

ゆっくりと見せ付けるように、廷兼郎が杖を振りかぶる。それが本当に遅いのか、実は速いのか、男には判断が付かない。

「持たば、太刀」

きちんと予告してから、廷兼郎は杖を振り下ろす。男の頭蓋から胴体まで、一直線に断ち割る軌道で。

杖を刀に見立て、血振るいの型を済ませ、そつと腰の横に戻す。杖を振り下ろされた男は、膝を付いたまま失神していた。

膝の痛みが許容を超えたのか、廷兼郎の振り下ろす杖が恐ろしかったのか、いずれにしてもこれで彼は、膝の痛みに悩まされることは当面ないだろう。

「さて、やろうか」

廷兼郎は日野浦に振り返り、そんなことを言った。

てつきり自分は勘定から外されていると思っていた日野浦は、尻の穴がぎゅつと窄むのを感じた。

能力者に能力を使わせることなく、何の遠慮も遊びもなく打ち据える。

あんな化け物相手に戦いを挑むなんて、考え無しの馬鹿の所業だ。そして日野浦は手首を折られ、仲間を打ち倒されるまではどうしようもない考え無しの馬鹿だった。

「や、やらない。もういい。分かった！俺が悪かった！」

手首の痛みで演算も俣ならず、炎など少しも生み出せない今の状態で戦うことなど、出来るわけがなかった。

自分から罪を認めて謝罪する。それは常識的に正しい判断だろう。だが、女の子を男数人で攫うという非常識を行なった後で、今更常識という傘の下に加えてもらうというのは、甚だ虫の良い行いだと言わざるを得ない。

「……そうかい。認めてしまうのかい。自分が、悪いと」

悲しそうに、ひたすら残念そうに、廷兼郎は呟いた。

「なら俺はあんたを、俺の大事な友達を襲った悪者として、扱わなければならぬんだなあ」

日野浦が疑問を呈する前に、廷兼郎の杖が唸りを上げる。

その動きは珍しく、日野浦の目でも捉えられるものだった。とっさに腕を上げて防御する日野浦の、その前腕部に杖が炸裂した。

素人の防御など、却って危険なことは言うまでもない。無駄に踏ん張り構えることで、効果的に衝撃を逃がせなかった前腕は、いっそ見事なくらい真つ二つに折れていた。

「おあがツ!？」

骨付き肉を捻ったときの音が、何故自分の体の中から聞こえるのか。日野浦は理解したくなかった。

杖が翻り、下段へ走る。今度は膝ではない。より細くて脆い脛骨である。

骨折にしては珍しく、比較的高い音を立てて脛骨は叩き折られた。為す術なく崩れ落ちる日野浦は、確かに見た。杖を器用に振り回す廷兼郎の、ぱかりと割れた半月の口を。

「大錬流合気柔術、長柄の段、五輪車ごりんぐるま」

高速で回転する杖が、日野浦を縦横無尽に引き裂いた。間断なく、容赦もなく、杖が日野浦を打ち続けた。

五輪車。大錬流合気柔術師範、錬公三國より授かった杖術である。予め決められた五種類の回転運動と、それに合わせた打撃軌道をなぞりながら、高速の振り打ちで相手が骸と化すまで打ち据える。

能力者とはいえ、只の街の不良が被るには勿体無い術理である。そしてその使い方も、至極勿体無いものだった。

本来ならば天倒てんとう、下昆かこん、霞、松風、水月、潜竜せんりゅう、甲利こうりなどの急所だけを狙撃する連環技だが、廷兼郎は敢えて一切の急所を外してい

た。

与えるのは失神でも、ましてや敗北でもない。それは恐怖、苦痛後悔といった不の要素である。自分の友達を傷つけたことに見合うだけの、一方的で排他的な屈服である。

かつて自分も上げたことのある、豚にも劣る悲鳴だ。苦痛のために自分の全てを擲って放つ、魂の懇願だ。それを聞くために今、廷兼郎は杖を、力を、技を揮う。誰に言われるでもなく、己自身の傲慢な顯示欲そのままに武を顕す。

それもまた、表裏為す武の形だった。

暇無しレベル0?：二

優に一分ほどは続いた連撃がようやく収まり、ずた袋と化した日野浦が床に突つ伏した。その頭を呵責なく蹴り上げ、もう動かないことを確認してから、廷兼郎は佐天に手を伸ばした。

「お待たせしました。佐天さん」

佐天は差し出された手を、すぐに取る事が出来なかった。その様子を見て、廷兼郎が自虐的に笑う。

「怖いでしょ」

怖かったでしょう、ではなく、断定であり、現在進行形だった。

「今の僕が悪い例、とは敢えて言いません。こういう要素も、武術は内包していますから」

「ただ、と前置きして、廷兼郎は佐天の腰を抱いて強引に立たせる。

「あなたには、こうなって欲しくない。こんな強さは、欲しくないですよ」

「またもきちんと、断定していた。」

廷兼郎は血の付いた杖を綺麗に袖で拭き、そっと床に置いた。

「それじゃ、病院に行きましょうか」

「私、怪我してませんよ」

「こんなことがあった直後です。軽く躁になっているんですよ。今はよくても、時間が経ったら精神的に不安定になってしまいます」

「でも、字緒さん。御坂さんとの約束が……」

佐天がそのことを言うと、廷兼郎の眉がみるみる釣り上がっていった。

「そんなことを言ってる場合じゃないでしょ！ 怪我がなくても、今日一日は安静にしてください」

きつく言い含めて、ようやく佐天は納得した。これから初春を呼んで付き添ってもらおうと、廷兼郎が携帯を取り出したとき、カッンと高い靴音が響き渡った。

その音の主を見たとき、廷兼郎は脳内が蒼白になったような感覚を味わった。

日本人にしては色素の薄い茶色の髪を肩の辺りで切り揃え、可愛らしい小さなワツペンで前髪を軽く纏めている。

そんな彼女の着ている制服は、常盤台中学のそれである。灰色のブリーツスカートに半袖のブラウス、上には袖無しのサマーセーター。その全てが、彼女が高位能力者であることを意味している。

否、そんな服がなくても、彼女は高位の能力者である。それも学園都市で七人しか確認されていない、能力者の最高峰。

『レールガン超電磁砲』、御坂美琴。

ドクンと、廷兼郎の体が跳ねた。そう錯覚するほどの何かが、彼の内側で弾けた。

ここで御坂が来てくれたのは幸いだ。彼女は佐天の友達だから、佐天を預けて自分はこの場の事後処理の掛かれる。

幸いだ。本当に、幸いだ。

「あんだ、佐天さんに何したのよ！」

友人である佐天すら怯えてしまうほどの、怒りの顕あな警告だった。周りには血を流して倒れる男たち。そしてか弱い乙女を捕まえている一人の男。この構図では、勘違いするなというほうが難しい。

その言葉を、廷兼郎は心のどこかで待っていた気がした。

誤解ですよ。僕は佐天さんを助けたんです。丁度良かった、御坂さん。佐天さんを病院に連れて行ってくれますか？ 万が一のこと

がありますし。僕は風紀委員と警備員ジャッジメントを呼んで、こここの事後処理に当たるので。

「この女、レベル5と知り合いつてのは、本当だったんだな」

口を突いて出た言葉は意味不明で、御坂の感情を逆撫でする意図しか含まれていなかった。

「あなた、佐天さんから離れなさいよ！」

「いいぜ。でも代わりに、あなたが相手してくれよ。超電磁砲レールガン」

廷兼郎を勘違いしたまま怒り狂う御坂と、その誤解を全く解こうとせず、むしろ焚きつける廷兼郎との間に挟まれ、佐天は展開の不可解さに着いていけず、おろおろと二人の間に視線を泳がせるばかりだった。

廷兼郎は分かりやすい悪人顔に歪み、いやらしい手付きで佐天を掻き抱く。だが当の佐天は不快な気分ではなかった。

むしろ言うなれば、不解である。

何故廷兼郎は誤解を解こうとしないのか？ 敢えて御坂を挑発し、喧嘩を売るような真似をするのか？

『こつという要素も、武術は内包していますから』
先ほどの廷兼郎の一言が、佐天の頭を過ぎる。

まさか彼が自分に武術を教えていたのは、このためだったのか。御坂に喧嘩を売るため、御坂と喧嘩をするため、あんなにも優しく丁寧に、親身になって武術を教えてくれたのか。

(そうなんですか？ 字緒さん)

聞こうにも、佐天には勇気が無かった。そうだと返されて返す言葉を受け止める強さを、まだ彼女は持っていなかった。

「離れろって、言ってるでしょうが！」

御坂の額から青白い雷光が迸る。

廷兼郎は咄嗟に佐天を突き飛ばし、自身も横飛びで回避する。

「待って、御坂さん！」

佐天の言葉よりも速く、廷兼郎は御坂に飛びかかっていた。とても声を掛けられる状況ではない。

そのまま言いあぐねていると、二人は目まぐるしく立ち位置を変えながら、建物の外へと走り去っていった。

あとに残された佐天は、呆然とその場に座り込む他なかった。

廷兼郎と御坂は、いつの間にか広い操車場へと雪崩れ込んでいた。電撃とうねる砂鉄で周囲を瓦解させる御坂が、その間をひらりひらりと交わす廷兼郎を追いかけているうちに、こんなことへ来てしまった。

砂鉄はまだ分かる。高周波振動を纏っているとはいえ、その黒い流れ自体に触れなければいいのだから。

だが、電撃すら掠りもしないのはどういうことだろうか。あのツンツン頭のレベル0にも届かなかったが、彼は真っ向から受け止めていた。厳密に御坂の電撃を避けたわけではない。

あのツンツン頭とは違うレベル0は、御坂の攻撃など一度も受け止めず、揺ら揺らとした気持ちの悪い動きで、砂鉄も電撃も等しく避けている。

恐らくはあの気持ち悪い動きが原因だと、御坂は考えていた。あの動きは、次の行動が全くといっていいほど分からない。だから当てずっぽうで放つても、そのときにはまるで違う方向に動かれている。

電撃を放つ前から、彼は御坂の狙いが分かっていると思えない。腕で振りかぶっているのがいけないのか？ なら額から出しているのも避けられるのは何故だろう？

戦っている最中の煩瑣な思案は、非常に危険である。レベル0であれ、レベル5であれ。

砂鉄の帯を掻い潜り、廷兼郎が真横から現れる。あと一步踏み込まれれば手が届くところまで、御坂は接近を許した。

絶好の機。心の隙を上手く突いた、空白の間を廷兼郎は見事に獲得した。

それでも、彼女はレベル5。廷兼郎が初めて体感する、未知の能力レベルである。

廷兼郎の動きが自分に捉えられないと本能的に悟った御坂は、咄嗟に全身から電気を放射した。

その全方位電撃を避けられないと判断した廷兼郎は、さらに前へと踏み込んだ。

吹き飛んだのは、御坂の方だった。だがダメージは、明らかに廷兼郎のほうが大きかった。

胸を殴りつけられた御坂は転がりながら態勢を整え、電撃を食らってその場に固まる廷兼郎目掛けて、またも電撃を放つ。

電撃よりも速く御坂の手から放たれる殺気を感じ取り、廷兼郎は真横に崩れ落ちる。

水が低きへ流れる動きで、その場から離脱する。異常なまでの直進性で、電撃の槍はコンテナをベニヤか何かのように幾重も撃ち抜く。

あんなものを食らったら灰も残らない。お葬式が寂しいものになるな。棺とか骨壺は要らないから、安く済むぞ。などと少し見当違いな心配をしながら、体はしっかりと御坂へと近づいていた。

益体の無い思考と勝つための行動を別に出来るのは、これまで学んできた訓練の成果である。

「このっ、何なのよ、あいつ」

廷兼郎から視線を外さず、御坂が立ち上がる。全速力で相手を追いつながら、砂鉄を操り、電撃を繰り返すことの繰り返し。そして突き飛ばされる程度とはいえ、殴られるほど接近されたことで、御坂は着実に消耗していた。

対する廷兼郎は、一度電撃を食らっているというのに平気な顔をしている。構えを取ることもない。元より御坂の間合いで戦おうとすれば、尋常な人間の構えなど無駄になるだけなのだろう。

（あたしの電撃が、効いてないの？）

そんなことは有り得ない。目の前の敵に、電撃を無効化する特殊な技術や能力は伺えないし、彼の装備にもこれといった特徴はない。単なるシャツとジャケット、それに普通のチノパンである。それはここまでの戦闘で、御坂にも理解できた。

むしろ効いている。体中を電気が走り抜け、皮膚には痛々しい電紋が現れている。それでもなお彼は御坂に拳を届かせ、今なお戦おうとしている。

「あんだ、確か黒子の知り合いの風紀委員よね」

御坂の問いかけに、廷兼郎は目線だけぴくりと動かすが、まだ何も答えようとはしない。

「何で佐天さんにあんなことしたのよ？ あの倒れてた不良たちは何？」

廷兼郎はふつと気の抜けるような笑いを漏らす。

ここまで人に攻撃を放っておいて、ようやく事情を聞くのか。人としてはどうかと思うが、こと戦いにおいては素晴らしい判断だと廷兼郎は感心した。

残念ながら廷兼郎には、御坂の質問に答える気が毛頭無い。何故なら正確に事情を伝えてしまうと、彼女は友達の友達を殺そうとした人格破綻者になってしまうからだ。

そんな惨いことは出来ない。だから彼は話さない。佐天のため、

御坂のため。

そして唯一人、己のために。

「『レディオノイズ量産能力者』計画。いや、『絶対能力進化《レベル6シフト》』計画と言ったほうが、適切でしょうか」

それ以上御坂が質問を重ねる前に、廷兼朗は話に割り込んだ。

御坂の体が、分かりやすいくらいに跳ね上がった。それは彼女にとつての忌み言葉。呪いに近い単語の羅列だ。

『量産能力者』計画。超能力者《レベル5》を生み出す遺伝子配列情報を解析・複製、そして量産し、偶発的に生まれる超能力者を確実に発生させることを目的とした計画である。

それは当初、御坂美琴のDNAマップで行なわれるはずだったが、ツリーダイアグラム樹形図の設計者の予測演算により、超能力者のDNAマップから量産能力者を生み出したとしても、その能力はオリジナルの僅か1%にも満たないという結果が出され、間もなく凍結と相成った。

しかしその企画は、思わぬ形で復活を遂げる。

『絶対能力進化』計画。学園都市の最終的な、そして至高の目的である絶対能力者《レベル6》を生み出すための計画である。

その計画内容は、人智を凌駕して余りあるものだった。

『超能力者と量産能力者を二万通りの戦闘環境で戦わせ、二万回殺害する』

それがこの計画の、そして学園都市の骨子を、忠実に表していた。合理的で、理的で、感情の入り込む余地の無い倫理が、その計画には存在していた。

被験者として選ばれた超能力者の第一位、『アクセラレータ一方通行』は、約半

分までその行程を消化したが、突如その計画は途中で打ち切られてしまう。

廷兼郎が今立っているこの操車場で、一方通行はとある一人の無能力者に敗北した。御坂はそれを間近で見守っていた。彼女の妹と共に。

御坂にとってここは妹が助かった場所で、妹が殺された場所でもある。

そんな場所で、絶対に聞きたいないことを、廷兼郎は話そうとしていた。

「二万通りの戦闘環境。あれは全て樹形図の設計者の演算結果ですが、コンピュータである以上、融通があまり利かないですよね」まるでグチでも語るように、廷兼郎は軽い調子で御坂に語りかける。

「そこでね、細かなところは人間が演算し直したんですよ。僕のように、戦闘行為への従事を義務付けられた人間が」

先ほどの悪人然とした野卑な喋りではない。高校一年生が話すには少し大仰な、だからこそ丁寧過ぎる喋り方だ。

「二万通りの戦闘環境を考えたのはこの僕、つてのは言いすぎですがね。正確には後半の一万回以降の戦闘環境の算出に、僕は関わっていたんです」

御坂はもう電撃を発してはいない。そんなことしている場合ではないのだろう。

「分かりにくかったかな？ つまりあなたのクローンがどう戦い、どう抗い、どう殺されるのか。それらを決めたのは、この僕だと言つて」

台詞の途中に、荒々しい爆裂音が割り込む。

青白く伸びる雷光の直下を潜る間は、さすがに廷兼郎も話しが出

来なかった。

これ以上目の前の無能力者が喋るのを、御坂は許容できなかった。「いい気迫だ。さすがはレベル5。これが14歳の女の子と言うのだから、堪らないな」

「黙れ」

さらに放たれる電撃が、空しくコンテナを蹴散らす。

「公共施設での危険な能力行使を発見。周辺地域への被害、拡大中。ただちに当該能力者を制圧・拘束します」

今更ながらわざとらしく、廷兼郎は風紀委員としての建前を持つてくる。それがさらに御坂の感情を刺激する。

「もう、喋るな」

「その能力者、危険な能力使用、及び器物損壊の現行犯で逮捕する！ 能力の行使を中止し、両手を頭の上に乗せてうつ伏せになちなさい！」

にんまり破顔しながらの警告は、廷兼郎と御坂の隔たりを如実に現す。

これで合法的に、レベル5と戦う口実は整った。あとは自分がこれまで積み上げてきたものを、彼女にぶつけるだけだ。

超能力《レベル5》への『カウンターメジャー対抗手段』を、顕現させるだけだ。

暇無しレベル0?…三

御坂の電撃は、廷兼郎にとっては意外にも避けやすい部類の攻撃だった。あの真伝天草式の魔術師、菊池との対戦がここで活かされていたのかもしれない。

能力者は自分の体の動きに、演算処理を組み合わせることが大きい。電撃を出すには、こう腕を振るったほうが良いということ、自然に頭で理解しているのだ。

だがそれは、折角の人智を超えた攻撃を、人間が察知できるものへと貶める行為でもある。腕を振り上げるのだから、何か攻撃してくるのだと事前に伝えてしまう。

廷兼郎の『心の速度』は、音速を突破したパンチや、間断の無いレポートさえ凌駕する。腕を振り上げて狙いをつけてからようやく放たれる攻撃では、たとえ光の速度を持っていたとしても関係ない。

振りかぶり、狙いをつけた時点で、廷兼郎は回避を終えているのだから。

それでなくとも目の動き、足の向きや立ち位置、姿勢及び正中線の歪みが次の行動や思惑まで教えてくれるし、御坂は『電撃使い』であるが故に、生体電位が非常に大きい。気の高ぶった戦闘時ではなおのことで、産毛などの微細な毛髪を分かりやすく刺激してくるため、それが避けやすさに繋がっている。

避けにくさで言えば、白井が廷兼郎の二の腕に行なった、渾身の体内転送のほうが勝っている。

さすがに全身からあらゆる方向に放たれるあの電撃は、接近した状態では避けられないが、それ以外ならば無能力者《レベル0》でも対処出来ることを、廷兼郎は証明してみせた。

出来れば通り名にもなっている『超電磁砲』も体感してみたいところだが、どうやら彼女はまだそれを撃つほどの脅威を、廷兼郎に感じていないらしい。

(もう少し、テンションを上げてもらおうかな)

『超電磁砲』を撃ちたくなるところまで、廷兼郎がエスコートしなければならぬ。年頃の女の子の心などまるで分らない廷兼郎だが、戦う人間の機微については、少しは勉強しているという自負を持っていた。

ただでさえテンションが駄々上りの御坂を、更に焚き付けられるだろうか。獣の上顎のように迫る砂鉄の波の下を潜りながら、さどしたものと廷兼郎は悩んでいた。そこへ一直線に、電撃が砂鉄の下を通り抜ける。

余裕を持って無足で旋回した廷兼郎の周りに、暗い影が落ちる。日の光が遮られ、涼しくなった首筋が、ちりちりと焼かれていく。

感じた悪寒に逆らわず、後ろに向かつて体を引っこ抜いた。目の前にコンテナの残骸が降り注ぎ、さらに熱く首筋が炙られる。

後ろに飛んだ勢いでコンテナを蹴りつけ、無理やり軌道を変える。足場にしたコンテナは、例の如く電撃に貫かれ、ひしゃげながら後方へと吹き飛ばされていった。

避けやすい類の攻撃とはいえ、砂鉄も、電撃も、廷兼郎にとって必殺のものであることには変わりない。その一撃を避けることに、魂を切り売りするような心地に晒される。これは突き詰めれば御坂との戦いというより、自分との戦いである。

少しでも気を抜けば恐れおののいて縮こまってしまう心と体と、何とか平衡に保とうとする自分との戦いである。一挙手一投足に間違いは許されない。そんな生半な回答を、あのレベル5が見逃してくれるはずが無い。油断して、気を抜いて、びびった瞬間、高周波振動を纏う砂鉄の群れに飲み込まれ、粉微塵に碎かれるか、電撃に体を貫かれ、数ミリ秒の内に体内の水分という水分が蒸発し、爆散

することだろう。

無論、そんな最後は御免被る。ならばこそ気を整え、心を鎮め、体を正さなければならぬ。今までやってきた通りのことを、今までやってきたように、平静な心地で行わねばならない。

(ならばここは、仕掛けてみるか)

このまま守勢を保っていても仕方が無い。相手により強力な攻撃を求めるのなら、それに見合うだけの威を示さねばならないだろう。そうでなければ、多くの人に迷惑をかけ、紆余曲折の果てにようやく叶った『超電磁砲』との立ち合いが、まるで意味を失ってしまう。それだけは絶対に駄目だ。このためだけに廷兼朗は佐天を利用し、白井を裏切り、御坂を怒らせてしまったのだ。背水の陣どころではない。自分の首筋には、とくにナイフが突きつけられている。他ならぬ自分の手によって。堅い刃は肉に食い込み、動脈を断ち切るのを今か今かを待ち構えているのだ。

ここで退いて首を切るくらいなら、レベル5の途方も無い力の奔流に身を委ねることにこそ、救いがある。

「うおおッ！」

咆哮一閃。己が心の震えを払い、コンテナ目掛けて突進した。そして御坂が新たに崩したコンテナの残骸の中へ、空かさず廷兼朗は飛び込んだ。

御坂は、廷兼朗がコンテナの中に隠れるのを見届けてから、その残骸ごと電撃で吹き飛ばす。元は何が入っていたのかさえ判然としないほど碎き終えて、御坂は一息置いた。

例え電撃自体が当たっていなくても、崩れたコンテナの壁で押し潰されているはずだ。

さらに打ち込むか、それとも生死を確かめるか。

逡巡した末、御坂はコンテナの残骸に向かって歩き出した。

御坂は人殺しがしたいわけではない。確かに廷兼郎の言ったことは許せる内容ではない。だからこそ、彼を生きたまま捕まえて、洗いざらい吐いてもらう必要があると考えていた。

鋭利な破片で肌を傷つけぬよう気遣いながら、残骸の上を具に観察して歩く。

人の気配はない。あるいは押し殺しているのかもしれないが、こんな残骸の下に埋もれながら、それでも電撃に先んじて致命的な攻撃が行なえるとは思えない。

何かを察知した瞬間、即座に全方位に電撃を放つ準備は出来ている。

全方位電撃で動きを止め、狙いすました電撃で戦闘能力を確実に奪う。残骸から出てきたときが、あの無能力者の最後だ。

周囲に漂う電磁波を自分の支配下に置き、察知能力を格段に高める。廷兼郎の生体電位察知に似ているが、御坂の場合は『電撃使用』により、常に体から電磁波が発せられている。そのため周囲で何か動きがあれば、電磁波の反射で即座に異常が分かる。

これならばあらゆる動きを、電磁波で明示的に察知することが出来るため、こちらのほうが性能の信頼性は高いだろう。

（そう、あたしの体からは電磁波がいつも放射されてる。おかげで動物は寄ってこれない。だからこそ、あたしには死角というものが存在しない）

動物を相手にするときには迷惑な能力だが、こういうときには役に立つ。と、御坂は確信していたが、それも段々と分からなくなっていた。

先ほどあの無能力者に殴られる直前、御坂は廷兼郎の接近を察知できなかった。もっと遠くにいると思っていたら、いつの間にか横

に立たれていた。距離が近まれば近まるほど、彼女の電磁波に死角は無くなるのに。

（電磁波を透過した？ ただの人間に出来るの？ 誘電力場か何かを生み出す装置を持つてるの？）

一体どうやって、廷兼郎が電磁波の網を潜り抜けたのかは分からないが、それでも御坂には、これ以上のレーダーを生み出す技術は無いし、これ以上のレーダーがあるとも思っていない。

ピツと、御坂の脳内にだけ響く、微かな反射波。

遅れて響く、カリツという僅かな物音。

「そこかッ！」

普通の人間よりも数段早い反応で、掌を向ける。電磁波レーダーはやはり十全に機能を果たしていた。

その瞬間、御坂には電撃で焼ける廷兼郎の姿まで、見えていた。だからこそ、自分の腹に何か当たったことを、数拍置いてから御坂は理解した。

「……がはッ！」

電撃を放ち終えて、御坂は肺の中の空気を根こそぎ吐き出した。

例え察知する能力が高くとも、肝心の意識が他へ向いていては、宝の持ち腐れだろう。とは言うものの、腐れたのはたった数瞬のことに過ぎないのだから、御坂が責められることではない。

それほど廷兼郎は素早く、しなやかに御坂の腹部を蹴り上げた。

（電磁波レーダーは完璧だった。悪かったのは）

腹の激痛の中で全方位電撃を放つが、既に廷兼郎はその有効範囲より離脱していた。

（まんまと注意を逸らした、あなたの心です）

「うげ、がは……」

蹲って腹痛に耐える超能力者を、シャッター一枚になった無能力者は

優しく見守っている。再び立ち上がるのを、大人しく待っている。

屈辱と恐怖が食道を競り上がり、いつそ思い切り吐き出したい衝動に駆られるが、御坂はぐっと飲み下して耐える。この程度の逆境、彼女にとつては初めてではない。

レベル5に至るまでの行程は、決して楽なものではなかった。それに比べればこの程度の痛みなど物の数ではない。

御坂がようやく片膝を立てるまで回復したのを見計らい、廷兼朗は話しかける。

「今のは天羽根流忍法の『土行燈』つちあんどんという、一応は土遁に属する技です。手近にある石で音を立て、相手の注意を逸らします。技というには稚拙なものでしょうが、御坂さんは気に入ってくれたみたいですね」

よかつたよかつたと、廷兼郎が好々爺とした笑みを浮かべる。「おっと、その前の技の説明がまだだった」とこれまたわざとらしく気が付き、得意げに話し始める。

「そもそも僕はコンテナに飛び込んでいないんです。上着のジャケットを投げ込んだだけなんですよ。いわゆる身代わりの術ってやつですな。ウチでは『拔身』はっしんと呼んでます」

この術のために天羽根流は、見た目では体を動かさずに服をずらし、一気に脱ぎ捨てる修行をするのだということまで、廷兼郎は御坂に説明した。

「僕の習った天羽根流は、天羽流柔術あせつと根来忍法ねらいを掛け合わせた流派なんですよ。だからこういうのも、場合によっては出来たりします」

腹の痛みに耐えていた御坂は、その説明を大人しく聞かざるを得なかった。

「得意げに語っちゃって。もう知っちゃったんだから、あんたの何とか忍法は通用しないわよ」

何とか忍法はひどいなあ、と言いながら、廷兼郎はくすくすと笑

う。勿論、御坂を、である。

「これだけで俺の忍法が通じなくなるなんて、さっすがだなあ！
やっぱレベル5は言うことが違うよ！」

まるで子供の外的な言葉を弄う大人のようで、物心などにつくについている御坂にはつらい笑われ方である。廷兼朗はますます調子に乗ったようで、御坂の周囲を歩きながら、値踏みするような視線を向けていた。

「そっかー。天羽根流はもう通じないのかー。残念だなー。もっと見て欲しかったのになー」

とっばいニーチャンが頬に指を当てながら可愛らしく悩む様など、とてもではないが見ていられない。

「それじゃどうしようかなあ。『カウンターメジャー 対抗手段』はもう見せたし、天羽根流はもう見たくないって言うし……」

左手を肩口からすっと伸ばし、右腕は臍の上へ。普段を変わらぬ構えを、ようやく廷兼郎が取った。

「『対抗手段』を取り入れた天羽根流、若しくは天羽根流の『対抗手段』で、持て成してみようかな」

いちいち自分が使用した技を解説し、勿体ぶって構える。およそ武術家らしからぬ振る舞いは、レベル5と立ち合ったことの喜びなのか。それとも女子中学生の精神をより狭窄させるための策略か。

冷ややかな気配。柔らかくも確固とした殺気が、芳しく廷兼郎から発せられる。御坂の熱く滾る怒気が吸い込まれ、より冷えた気として、廷兼朗から彼女へ返されてゆく。

しかしてこれにて、『カウンターメジャー 対抗手段』字緒廷兼郎と、『レールガン 超電磁砲』御坂美琴の戦いが始まった。

レベル5とレベル0?…

砂鉄だけでなく、コンテナの残骸までも支配下に置き、まるで念動力者のように投げつける。そこへさらに電撃も加わり、一人の無能力者を倒すには過剰な攻撃が続く。

光の速度で迫る電撃。緩やかに風を切って迫るコンテナの残骸。その中間の速さで迫る柔軟な砂鉄の群れ。

縦横無尽にして緩急自在。その圧倒的な質量の、一体どこに隙間を見出しているのか。気が付けばするりと、御坂の近くに廷兼郎は現れる。

はつきりと視線を外さず見ているのに、いつの間にか見失って、次の瞬間には幽霊のように立っている。全方位電撃を避けられるギリギリの位置に。

見失うほど速く、それでいて緩やかに動く敵に即応しながら、残骸や砂鉄を磁力で操り、電撃も放つ。近づいてきたら全方位への電撃で追い払う。

電力に関してはレベル5である以上、ほぼ無尽蔵と言って良い御坂だが、体力自体は女子中学生の域を出ない。相手の明確な殺気を受け止めつつ、相手に合わせて行動するのは、競技とはまた違った速度で体力を削る。

妹クロンに関わっていた男。妹クロンの死に様を決めた男。妹クロンを殺した男。殺意と呼んで構わないはずの感情が揃っているはずなのに、目の前の無能力者は、それ以上の感情をこちらにぶつけてくる。

街の不良にも、ツンツン頭の無能力者にも、こんなものは感じなかった。でも、あの無能力者からはひしひしと感じられる。

(あたしを、殺してやるって、思ってる)

低位能力者故の、レベル5への嫉妬? 能力者に痛い目に合わせ

れて、その八つ当たり？

そのどれでもない、御坂は思う。嫉妬でも恨みでもなく、あの無能力者は自分の前に立っている。穏やかに、清々とした顔をしながら、分かりやすいほどの殺気を向けてくる。

「あんだ、何であたしに突っかかるのよ！」

その重圧に堪らず、普段は自分から他人に突っかかることを棚に上げ、御坂は問う。

「あたしが憎いの？ それとも妬み？ みつともないわよ、そんなの！」

自分が今正に仕掛けておきながら、御坂は怒鳴りあげる。その声とは対照的に、廷兼郎は静かながらもよく通る低音で話す。

「……憎いもあるし、妬みもあるかもなあ」

地形が変わりかねないほどの衝撃と轟音の中、廷兼郎の呟きは確実に聞こえていた。

「でもそれって、愛情と尊敬の裏返しだと思っんです。だから、ちよつと違つかもなあ」

のんびりと話しながら、同じ調子で避けられるのだから、御坂にとっては堪ったものではないだろう。

「何故あなたと戦うか。一番の理由はやはり、あなたが大好きだからですよ。御坂さん」

「ほえッ！？」

何言い出すのこイツ！？ 不覚にも油断し、御坂の能力操作が目に見えて鈍り始める。

彼女の動揺などお構いなしに、廷兼郎は続ける。

「僕は多分、能力者を、愛しているのかもしれない」

どう受け取ったらいいのか分からない言葉に、御坂はやはり固まっってしまった。

「でも僕は、能力者になりたいわけじゃない。

能力者の方には『能力がある』ことの誇りがあるように、僕にも『能力がない』という誇りがあるんだと思う」

何の銜いもなく、思惑もない。ただ吐露しているだけなのに、妙な威圧が存在している。

「好きだから、ぶつきたいんです。自分を、能力者に」

さくりと砂利を踏んで、廷兼郎が近づく。攻撃の手が緩んでいたことに御坂が気付き、遠ざけようと躍起になる。

「そして僕は、これ以外の方法を知らない」

悠揚と歩み寄る動きだが、御坂に一切の油断は無い。もうこの男に、生半可な方法で攻撃を当てられないのは火を見るよりも明らかだ。無能力者だからと気を使っていては、こちらがやられる。

「いいわよ。あたしもあなたに、全部ぶつけてやるんだから！」

砂鉄と残骸の操作を放棄し、御坂は一直線に走り出した。女子中学生の、というよりは、レベル5の全速力で。

電磁的に加速しているのか、体に電気的な負荷を掛けて限界以上の脚力を引き出しているのかは分からないが、爆発的な疾走で御坂は廷兼郎に近づく。

御坂とて、これで廷兼郎を倒せるとは思っていない。むしろ見切られ、一撃を加えられるものと覚悟している。

だがその一触があれば、今度こそ電撃をぶち当ててみせるということも覚悟していた。

腕も同じように加速して放つ。人間にとって余りに速い掴みを見て、

「……おそっ」

廷兼郎は、軽く吹き出した。

これ以上の速度のパンチなら、廷兼郎はこのあいだ見切つて投げたばかりである。恐らく井上の攻撃を食らった荒涼でも、問題なく

対処できる速度だろう。

廷兼郎は余裕を持って膝の力を抜き、御坂の足元に蹲った。

「え!？」

高速で突進する御坂には、またも廷兼郎が消えたように見えたとだろう。人間の視界は横方向に広くとも、縦方向は意外に狭い。

突進の勢いを止められず、御坂は足元の廷兼郎につまづいた。気が付いたときには、自分の平衡が取り返しのつかないところまで崩れていた。

くるくると体を回転させながら、レベル5は無様に地面を転がっていく。その様子を、廷兼郎は追い討ちをかけるでもなく、満足げに眺めていた。

砂利の上に寝転がりながら、御坂は途方に暮れていた。

強すぎる。否、行動がいちいち的確過ぎる、と言ったほうがいい。あの無能力者は、普通の人間が行なえる動きの範囲で、それでいて超能力者を打倒できるほんの僅かな正解を見事に算出し、その悉くを実行に移してくる。

勝てないはずだ。能力を周囲に撒き散らすだけでは、届かないはずだ。

「ああいう強さも、あるんだ」

あの無能力者が強いのは認めよう。油断していたことも、舐めていたことも認めよう。

だからもう、迷わないで、一直線に、最短距離で、能力を撃ち出す。

自分の代名詞である、あの力を。

御坂は立ち上がる。手には一枚のコイン。右手の指で挟み、拳銃

のように突きつける。しかしそれは、拳銃などでは比べるのも馬鹿馬鹿しくなる威力を秘めた射出兵器である。

『超電磁砲』。御坂美琴の通り名にもなっている電磁誘導投射である。御坂の能力で強力な電位差を持つ磁場を発生させ、対象を引っ張り、あるいは押し出して投射する。

その威力たるやレベル5に相応しく、途方も無いものである。

「砲弾初速、秒速千三メートル。連発能力、毎分八発。着弾分布、十八・九ミリ。そんなものを、撃つ気ですか？」

「何？ いまさらビビったの？」

たった一枚のコインとはいえその条件で発射されれば、コンテナの五、六十個は軽くぶち抜き、余波だけで遠方のビルにヒビを入れるだろう。人間など、木端にもならないほど綺麗に消し飛ばしてくれるはずだ。

御坂も言葉に「そうじゃなくて……」と廷兼郎は軽く首を振る。

「そんな加減したものを、俺に撃つ気なのかって聞いたのさ」

廷兼郎が述べたデータは、御坂の期末能力測定記録である。

今の学園都市の技術では、御坂の全力を測定するに耐えうる機材が存在しない。そのため測定の場合においても、彼女は本気の力を出した試しがない。

しかもそのときは、プールの水を緩衝材に使った上での測定である。そんなデータでは、確かに加減と言われても仕方がないが、無能力者に咎められるようなことでもない。

「いいわ。理論上は際限なく速度を上げられるから、かなり全力で撃つてやるわよ。もう恨もうが喚こうが、絶対に止めないからね！」
「ふうん。ところで、御坂さん」

レベル5の威嚇を軽くないし、廷兼郎は『超電磁砲』に丁度良いであろう射程を見計らって立ち止まる。

「撃つのは、一発だけ？」

その瞬間、毎分十六発のオレンジ色の輝線が、操車場を蹂躪しつくした。

「うああああああッッッ！！」

番えては撃ち、撃っては番え、太陽光を凝縮したような明るい光が、暴虐なまでに地面を抉り、大気を昂然と揺さぶる。直接『超電磁砲』が当たっていないコンテナは、掬い上げる衝撃波で病藁わくしほ同然に拉げて吹き上がる。

衝撃波と共にやってくる熱波で溶解し、無様に中身を巻き散らしながら、トラックで運ばれるはずのコンテナが落ち葉のようにひらひらと舞う。

吹き上げられたコンテナが全て落ち、キツチリ一分立ったところで、御坂はもうポケットにコインが無いことに気が付いた。

その惨状は、とてもコインが通った跡には見えない。隕石が落ちたと言うほうがまだ自然である。

その場所に、無能力者の姿は無い。

「は、はは……」

勝った。死んだのか、まだ生きているのかは分からない。でもこれで勝ったのは間違いない。これで圧倒出来ない無能力者など、いるはずがない。

「これが、レベル5の力よ。あんたが見たいって言った、超能力よ！」

御坂は高らかに宣言する。これこそ自分の力だ。レベル5の超能力だ。

もはや友達の友達に能力を向けたことも、自分の妹クローンに関わることも忘れて、今はただこの瞬間の勝利を喜ぶ。

それだけあの無能力者が強かったということであり、御坂はそのさらに上を行ったという、何よりの証明だった。

「……これが、超能力か。やはり、直接に味わって、よかった……」
むくりと、爆心地のような跡で、僅かに何か蠢いた。

瓦礫の下から、あの無能力者が覗いていた。

「……ッ……ッ……ッ……」

すぐさまポケットを弄るが、何も手に当たらない。仕方なく御坂は足元の砂利を掬い上げ、砂鉄でコーティングする。そうして伝導率を高め、コインと同じように打ち出すことを可能にする、はずだった。

瓦礫の隙間から飛び出した廷兼郎は四つん這いのまま、恐ろしい速度で御坂に向かって疾駆する。

その特徴的な体捌きは、天羽根流の四足の型である。

お前はチーターかと突っ込みたくなる速さで近づくと廷兼郎に、真正面から御坂は照準を合わせる。砂鉄を十分に纏わりつかせ、磁場を形成し終えたとき、今度こそあの無能力者は跡形もなく消え去ってくれる。

そんな幻想が、殊の外甲高い、何かが弾ける音によって微塵に碎かれた。音を受けた右手が、痺れるように痛い。

真つ黒になつた石と一緒に、銀色の棒が御坂の眼前で揺れている。

「黒、子」

それは御坂のルームメイトが好んで使う、金属の矢だった。

白井に撃ち込まれた金属矢で、発射されそうだった石を弾き、まんと廷兼郎は御坂の懐に潜り込む。

鍛え抜いた平手を僅かに撓め、抜き手の形を作り、それを一直線に、御坂の可愛らしいほど細い喉へ向かわせる。

(これで、終わりか)

存外やるせないものだなあ、と廷兼郎が感慨に耽っていたが、いつまで経ってもその指は御坂の喉に突き立てられなかった。

それどころか、どんどん遠ざかってゆく。自分の体が、自分の意思とは関係無しに斜めにぶっ倒れてゆく。

頬を抉る硬い感触が、心地よく廷兼郎の頭蓋を歪ませる。

(何だ、これは?)

ローファアの硬いつま先が、廷兼郎を頭からコンテナの壁に突っ込ませた。

レベル5とレベル0? : 二

操車場に突如として現れた三人目の人影は、自分のものだった銀色の棒を拾い上げ、太ももに巻かれた革ベルトに仕舞った。

「黒子、あんた……」

さらりと流れる茶色の髪を靡かせ、白井は今しがた蹴り飛ばした無能力者を見据えていた。空間移動からの見事な奇襲を当てておいて、彼女に微塵の余裕もない。

「ぐう、かはあ……」

目に見えてダメージを抱え、廷兼郎はコンテナの壁を背にしながら立ち上がる。その格好は、とても見れたものではなかった。

上半身裸だが、全身泥と煤に塗れ、裂傷も激しい。そして電気が体表面を通過したときに見られる特徴的な火傷、電紋がびつしりと体を覆っている。チノパンの右足部分は大きく破れ、火傷で赤くなつた脚がむき出しになっている。

十六発の超電磁砲に晒されて、まだ人の形を保ち、さらには一撃を加えようとしたのだから、これは恐らく称賛に値するのだろう。

先ほどの立ち合い。超電磁砲の初弾に合わせて、廷兼郎はもう一度『抜身』を行なっていた。激しく動く服を囫に、緩やかな体捌きで反対方向へ離脱する。しかしそれだけでは、溶岩のように致命的なコインは避けられても、その生み出すコーン状の衝撃波からは逃げられない。

重力の流れに逆らわない『無足』の動きから、そのまま四足の型へと移行する。前面投影面積を減らし、機敏な移動を可能とするこの構えで、廷兼郎は絨毯爆撃に等しい一分間を生き延びた。

そしてただ一撃、超能力者を討ち取る力を、必死の思いで守り通した。

あの渾身の抜き手を放った時点で、廷兼郎の体は限界を迎えてい

た。もう女の子一人打ち倒せないほど、体中が軋みを上げていた。そしてまた、廷兼郎は体を持ち上げる。

これほどボロボロになって。死にそうな目にあつて。それでも、廷兼郎は立ち上がる。

まだ生きているから。生きている限り、諦めないから。諦めたら、心がまた、自分の中から出ていってしまうから。

疲れたから。弱っているから。怪我をしたから。そんなことは今更言い出すことではない。廷兼郎は無能力者であり、御坂は超能力者なのだから。

端から絶望的な戦力差を承知して挑んだのだ。多少の不利に目くじらを立てても仕方ないだろう。

「廷兼、さん」

白井が呼びかけて、ようやく廷兼郎は彼女の存在に気がついた。

「……白井、さん」

愕然とした表情を、廷兼郎が見せる。常盤台が誇る、レベル5とレベル4のコンビ。この二人を相手取ってなお勝てると夢想するほど、今の廷兼郎に余裕は無い。

しかし廷兼郎は、震えながら左手を前に出し、右手を臍の上に置いて、普段どおりに構えを取った。

取らなければ、ならなかった。

左手は御坂、視線は白井に向けて、油断なく近寄る。そこにはこれまで、流れるような身体運用は見る影も無い。

「廷兼さん。もう、終わりですよ」

白井も油断無く金属矢を構えながら、廷兼郎に近づいていく。

廷兼郎は嫌々と、顔をくしゃくしゃにしながら首を振る。まだだと、決着は着いていないと言いたいのには、口が震えて言葉を為さない。

「……まだ、だよ。まだ、俺は、レベル5に、勝ってないよ。負け

ても、いない。だから、退いてくれ、白井さん」

「退きません。私は、お姉さまの前から退きません」

「なら、ば……」

いつも通り、押し通る。ただそれだけだ。

右腕をゆつくりと振り上げ、ぺたりと、白井の頬に押し当てた。

渾身の、『喉断ち』だった。

あの模擬戦や、倉庫での戦いとは、まるで別人のようだった。

遅い。弱い。拙い。効かない。それは廷兼郎こそが、よく理解していた。

白井の頬に掌を当て、発勁を行なおうとするが、ぺたぺたと頬を押しことを繰り返すだけで、一向に力が伝わらない。

「く、そ。ちく、しょう……」

大の男が歯を食いしばり、必死に女子中学生の頬を触る様子を、御坂はじつと眺めていた。傍目からはシールドにすら見えるそれに、圧倒されて言葉も出ない。

「もう、いいんですのよ」

ふと柔らかい感触が、廷兼郎を包み込んだ。白井はいつの間にか、廷兼郎の懐まで踏み込み、両手を後ろに回して、ぼんと優しく叩いてくれた。

「廷兼さん。あなたの勝ちですわ」

不意に、涙が溢れる。

どうすればいいのか、廷兼郎は分からない。

他人がこの勝負に口を出すのか。そんな言葉に幾ばくの価値があるのか。はいそうですかと、受け入れると言っのか。

そんな理由が、澎湃ほうはいと流れる水と一緒に、彼の中から抜け落ちてゆく。

「あなたは、勝ちました。レベル5に、勝ったんですよ。だから

もう、いいんです」

そんな言葉なんて、聞きたくない。意味も無い。受け入れたくない。

なのに、この体の奥から広がってゆく安寧の心地は、どうすればいいの。

「あなたは、勝ちましたよ」

涙で満足に見えない眼で、廷兼郎は御坂を見つめた。

自分が勝った超能力者の顔を、その眼に焼き付けて、廷兼郎は力尽きた。

「ほんつとーに申し訳御座いませんでしたツツツ!!」

待ち合わせ場所に来るなり、廷兼郎のジャンピング土下座が決まった。額の厚い骨を全身のバネを使って地面に打ち付け、固いコンクリートに同心円状のヒビが広がる。

その絶大な破壊音が自分たちの知り合いのせいだとばれる前に、白井と御坂、それに佐天と初春は脱兎の如くその場から走り去った。無論、白井はそのはた迷惑な同僚の首根っこを掴んで空間移動することを忘れない。

「あれが人に謝る態度ですよ!？」

「我が天羽根流謝罪術の一、変じ手、『黒金突き』です。他にも熱い鉄板の上で十秒間伏せるバージョンもありますよ。最上級の礼の尽くし方です。そちらのほうが良かったですか？」

「そんな無駄な解説などいりませんわ!」

ギヤアギヤアと言いつつ合いながら空間移動を繰り返していると、あつという間に目的のお店の前に到着した。

スペイン料理を扱うファミリーストラン『オリヤ・ポドリーダ』である。

佐天が襲撃された一件や、御坂との立ち合いに責を感じた廷兼郎は、皆に謝りたいと言つて、食事に誘つていた。

「お会計は廷兼さん持ちでよろしんですわよね」

「もちのろんですよ。それくらいはさせていただきます。それに、うまくやれば『カウンターメジャー対抗手段』の経費で落ちますし」

サボボボボボ！ サボボボボボ！

何かよく分からない音に白井が驚く中、平然と廷兼郎は携帯を取り出した。

「はいはい、字緒でございますよ。何ですか？ 網丘さん」

「あんた今ファミレスの前にいるでしょ。経費で食つたらただじゃおかないわよ」

プッ！ プー、プー、プー……。

「バレてるうつつうつつッッ！」

こうして彼は育ち盛りの女の子四人の食事代に、身銭を切らねばならなくなった。

「ご注文、ありがとうございました！」

かわいらしいフリルの付いた制服のウェイトレスが、これまたかわいらしい笑顔で厨房へと走り去つていった。

これがウェイターだったら、廷兼郎の自制は恐らく効かなかったことだろう。この疼く右手がその首を捻じ切らなかつたことを感謝して欲しいものだと、廷兼郎は何やら厚かましいことを考えていた。「一回ここ来てみたかつたんですよ。字緒さん、ありがとうございました」

「佐天さん、別に感謝する必要なんて無いんですよ。わたくしたちは、廷兼さんの我俣に付き合わされたのですから」

「言いすぎよ、黒子。折角おごつてくれるっていうんだから、あり

がたく受け取るうじやないの。ま、あたしとしてはいい肩慣らしになつたから助かつたけど」

「何が肩慣らしですか？ わたくしがあそこで廷兼さんを蹴り飛ばしていなければ、どうなっていたことか。ただでさえ電池切れの一步手間だったと言うのに」

「あ、すいませ〜ん。この『セレブ御用達！ イチゴのスペシャルパフェ』と『お姫様のフルーツ盛り合わせ』下さい！」

「初春、またそんなの頼んでるの？」

「いいじゃないですか！ おいしそうだったんですもん！」

女三人寄れば何とやら。四人ではなおさらということが。

まだ最初の料理も届いていないのにデザートを頼んでいる気がするが、しかもそれはこの件にあまり関わっていない人だった気もするが、廷兼郎は平静を装うことに精一杯だったので、そんなことには気が付かなかった。

（まさか、これほどとは……）

比較的同年代の女性と食事するなどという経験が皆無の廷兼郎には、彼女たちの姿がどう映っただろうか。

（奢られるというのに、全く遠慮が見られない！）

それはある意味尊敬される姿勢だろう。貰える物は貰う。それも徹底的に。

そのアグレッシブな姿勢を是非とも見習いとか、若干アブない思考が駆け巡っている辺り、廷兼郎の追い詰められ加減は尋常ではなかった。

（オリア・ポドリーダのオリア・ポドリーダ《ごった煮》とか言うややこしいのが二つに、頭の悪くなりそうなほど甘ったるいパフェが四つ。そしてスペインなのにピザ！ しかも無駄にデカイ。あと絶対に創作としか思えない変てこパスタが三つ。そしてさらに飲み物と食後のデザートが！）

フードファイターのお昼のような充実振りである。こういうのは食べ放題の店に行ってやればいいと思うのは、男性の身勝手な感覚だという謗りを免れないだろう。

男の金を使つてご飯を食べる。それに一切の幻想や見栄を抱かない女性が、果たしているだろうか。

ならば奢るといふ男の意気込みを汲み、真つ向から受けて立つほか無い。そこに手心を加えるのは却つて礼を失することを、この四人は的確に察知していた。

「廷兼さん、顔色が優れませんが、大丈夫ですか？」

「はははっ。何をおっしゃられるやら。……ちよつとお手洗に行つてきます」

「窓から逃げようなんて思わないでくださいませ」

「僕は玄人バイミンですか!？」

軽い冗談で往なしつつ、廷兼郎はいそいそとトイレへ駆け込んだ。

「……酒飲んで、紅へにでも塗つてくれば良かったなあ」

トイレで鏡を見た廷兼郎は、白井の言ったとおり顔色が優れないことを確認した。

当然だ。レベル5《超能力者》御坂美琴との戦いから、数日と経つていない。爛れた右足には未だに包帯が巻かれていて、強力な電撃を幾度も浴びたことで発生した電紋は、まだ腫れ上がっている。それに頭痛、眩暈、吐き気に手足の痺れなどの症状が慢性的に廷兼郎を苛んでいる。

これで顔色が抜群に良かったら、それこそ人間ではない。

「落ち込んでる場合じゃない。謝ることは、きちんと謝らんと」

頬を張つて気合いを入れて、ぐつと顔を引き締める。今更こんな

レベル0《無能力者》の空っぽな頭を下げたところで何が起るとも思えないが、それは廷兼郎が彼女らに謝罪しなくてもよい理由にはならない。

そこから先は、彼女らに判断を仰ぐことにしよう。残念ながら自分は、年下である彼女ら以上に、そうした機微にはとんと疎い。

「武家の商法、ということか」

武家と言うほどに字緒の名が立派だとは夢想だにしていなくても、武道から些か外れた事柄を不得手とするのは確実だ。増してや年頃の女の子の心根など、まるで扱いが分からない。

あのくらいの年頃の、妹がいたというのに。

そう。いたのだ。廷兼郎には、妹がいた。それは覆しようの無い事実だ。嘘だ違つと今更喚くようなことはしない。

しないが。

蛇口を捻り、勢い良く飛び出した冷水を掬い上げ、顔面にぶつける。良からぬ考えを、体の外へと払うように。

妹のことは考えたくない。なるべくなら、思い出したくもない。

あの鮮烈な敗北。信仰も矜持も実力も、粉微塵に砕いた相手のことなど、忌んで然るべきだ。それは偽らざる廷兼郎の本心だろう。

しかして本心というものが、屹立した一本の柱のように揺るぎなく、唯一無二のものというわけではない。

廷兼郎がひたすらに一本気の、竹を割ったような性質で構成されていたら、あるいは自身を騙しおうせていたのかもしれない。

考えたくないから考えないでいられるほど、人は単純ではられない。考えたくない。思い出さなくないと願うたびに、考え、思い出しているのだ。

自分のトラウマと正対し、克服しようという思惑もあるだろう。

それは怖いもの見たさだ。自分の恥ずかしく、醜く、弱い部分を把握しておきたいのだ。まるで小さな愛玩用の鼠を手取るように、四方八方から睨め回し、具に観察して、ああ恥ずかしい、ああ醜い、ああ弱いのだと一層に確信を深める。

トラウマの克服？ 弱さと向き合う？ そんな綺麗な言葉で括ることにこそ、人の不可解さが透けて見える。まるでそれは影女だ。障子の向こうにはくつきりと透けて見えるくせに、いざ戸を開けば掻き消える。

むしろ、そのように修飾しなければ内面を覗くことさえも覚束ない、自分の性質こそ不埒なのだろう。今回の一件も、恐らくはその辺りに起因する。

何と恥ずかしい。何と醜い。何と弱い。自分よりも若輩の彼女らに、迷惑を掛けてしまったのも当然だ。

自分では、幸運が先々から転がり込んで、それをさも上手く乗りこなしたかのように思っていたが、何のことは無い。まるで何も分かっていなかったのだ。ただ状況に流されて、自分こそがごろごろと転がり続けていたのだ。

「『対抗手段』が、聞いて呆れる」

結局は、そこに集約される。そんな肩書きを持ち出したところで何の意味も無いのだが、それでも言わないと、廷兼郎は心の平衡を保てそうになかった。

レベル5とレベル0?…三

一頻り顔を洗い、気を落ち着かせてから、廷兼郎は男性トイレの戸を開けて通路に出た。久方ぶりに妹のことを考えた頭を正常に戻し、これまたいそいそと席に戻ろうとする。

その歩みが、トイレに続く細い通路の途中で止まった。

背を壁に凭れ、一見して道を明け渡しておきながら、その目には、確実に廷兼郎を逃がすまいとした強い光が込められていた。

「洗いざらい、話して。全部聞くから」

何ら前置くこと無く、御坂は言い放った。

腕を軽く組みながら、油断なく廷兼郎を観察している。全部聞くというのは、彼女にとっては惨いであろう話を聞くという覚悟であり、全てを聞くまでは廷兼郎を許すことは無いという心象の表れだろう。

今にも額から青白い紫電を撒き散らさんばかりの雰囲気、御坂の中には凝っていた。

逃げられないし、逃げるわけにはいかない。同じく覚悟を決めた廷兼郎が、何ら了承を得ることなく、静かに話し始めた。

「まだ僕が、学園都市で暮らすようになって間もない頃です。前任者が他の仕事に着くということで、残り一万通りの戦闘状況のメンテナンスを、僕が担当することになりました」

御坂と同じように、前置きをせず、核心だけをつまみ出していくなるべく平坦な語り口になるよう、廷兼郎は努めて感情を押し殺し、機械によるアナウンスのように続ける。

「あれは、嫌な仕事だった。既に負けが決められた彼女たちに、こうやって死になさいと、言っていたのだから」

だがそれも、長くは続かない。やはりまだ、自分の妹のことを考

えた動揺が、頭の中に残っていたのかもしれない。

「僕は彼女たちに、『カウンターメジャー 対抗手段』を覚えてもらおうと思いましたが、却下されました。そんなバグは、実験を妨げるだけだと」

あまりに主観的な説明で、御坂も理解しづらいたらうと思いつつも、廷兼郎は止まらなかった。

「僕が直接『対抗手段』を教えたとして、彼女たちのことを、何も救えなかったかもしれない。ただ、自分の身につけた技術を、彼女たちの体を使って、『アクセラレータ 一方通行』に試したかっただけかもしれない」

一度言葉を切って、口に手を当てる、まるで吐き気を堪えるように、ぐつと頬を握り締める。

「でも、そんなことすら、そんな努力すら、僕は彼女たちに施すことが出来なかった。何も救えないし、変えられない。そもそも、何もしていないのだから」

吐き気を押さえた代わりに、握り締めた頬を水が伝う。どうやら今話していることは廷兼郎にとって、嗚咽を漏らすに足りる事柄らしい。

身勝手に、自分よがりで、利己的な独白。それだけに廷兼郎の言葉は、彼にとつての洗いざらいだった。

「ごめんなさい。あなたを差し置いて僕が泣いていては、あべこべだ」

「……もういい」

詳しく言い直そうとした廷兼郎に二の句を告げさせず、御坂がばつさりと断ち切った。

「もういい、とは？」

「もう、救われたわよ」

ああ、と唸り、廷兼郎は思い至った。

「そうですね。『絶対能力進化《レベル6シフト》』は、もう終わっているから」

御坂の妹を実験材料に使っていたおぞましい計画は、既に瓦解している。廷兼郎が救うまでもなく、彼女たちは救われているのだらう。

「そんなことは、どうでもいい」

「またも画然とした、御坂の言葉。」

「あの子たちのことを思ってくれた。考えてくれた。苦しんでくれた。なら、もういいわよ。あたしが言うんだから、間違いない」
忌憚の無い言い方をすれば、廷兼郎は御坂の正気を疑った。

それは、自身のクローンを与り知らぬままに生み出され、二万人も量産され、その悉くを殺されるといふ実験に使われ、実際に一万人以上を殺された人間が、その実験に関わっていた人間に掛ける言葉とは思えなかった。

「……全く。御坂さんと言い白井さんと言い、常盤台の仕込みには、本当に感心するなあ」

腕まで伝った涙を払い、袖口で拭う。

強い。ただ一言、漏らした。能力云々ではない。人として、強い。これほど強い人間と戦えた事を、廷兼郎は改めて誇りに思った。

「また、やりたいな。あなたと」

「あんた、まだ懲りてないの？」

「一度で駄目なら、二度三度と、挑まねばならんでしょう」

「一回勝ったくらいじゃ、満足できないのね」

「あれは文字通り、白井さんに勝たせてもらったわけだから、少し違うんです」

肩をすくめて、軽い調子で言う。もうその顔に、さきほどまでの悲痛さは無い。

「といっても、また白井さんがうるさく言ってきたら、まだ先のことになるでしょうね」

「あたしは、いつでもいいわよ」

ともすれば逃げ口上のようなようだった廷兼郎の台詞に、御坂は雄雄しい答えを返す。

如何に女性との交遊が乏しい廷兼郎と言えども、このような答え方をされては、心をときめかせずにはいられなかった。

「白井さんが惚れるわけだ。こりゃあ、堪らんよ」

すいと気軽に、それでいて何気なく、まるで元からそこにあったかのように、廷兼郎は御坂の前に手を伸ばした。

「また、やりましょう」

「今度は、あたしの勝ちよ」

二人が笑い、手を握る。紫電も放たず、腕の逆も取らず、互いの手と、その強さを確かめる。

オリヤ・ポドリダを後にした御坂たちは、これから街で遊んでいくと言い出したが、白井はそれを辞して、第二学区の訓練場へ向かう廷兼郎に同行することにした。

「ごちそうさまでした。廷兼さん」

「いいえ。ご満足いただけただけのなら、幸いです。でも、皆さんと行かれなくてよかったのですか？」

勿論良くはないだろう。こんなとっぴい男の横などよりも、御坂お姉さまの横を歩くことにこそ、白井は喜びや安息を覚える。

なので白井が廷兼朗の横を歩いているのは、別段に安息を求めていることではない。

「何故あれほどまでに、お姉さまと戦いたかったのですか？」

それを問い質すべく、白井は廷兼郎に同行した。これを聞き、確かめ、納得しなければ、とてもではないが枕を高くして眠れない。

いつまた何時、この男が御坂に喧嘩を吹っかけるか、そして御坂

がそれに乗ってしまうか分かったものではない。今回とて殆ど手遅れというか、がっぷり四つにやり尽くしたところへ白井が漸^やう止めに入っただけなのだ。

あの先がもう再現されることは無いなどと、一体何処の誰が保障してくれるというのか。

「『対抗手段』の存在意義、そして僕が学園都市に來た理由。取り繕おうと思えば、幾らでも言うことは出来ますねえ」

そう前置きするということは、これから話す内容は、取り繕いのないことなのだろう。

「これは御坂さんにも言いましたが、僕は、能力者を愛しているんです」

「ど、ど、どという意味ですか？」

思わず身を引く白井に、廷兼郎は柔和に笑いかける。

「言葉どおりに取っていただいて構いません。僕は御坂さんも、荒涼さんも、井上さんも、白井さん、あなたのことも愛しているんです」

言葉どおりの意味なんかじゃない。ただ単に、愛し愛でることを指しているわけがない。

引き気味の白井に向けていた微笑みを翻し、廷兼郎はついと遠くへ目を向けた。

「僕の妹はね、能力者なんです」

「本当ですか？」

それは白井には初耳だった。というよりは恐らく、誰にも話してはいないのだろう。廷兼郎がそうしたことを妄りに吹聴する姿は、白井にとっては想像に難かった。

「はい。本当です。能力者であり、僕を凌ぐ武術家でもある」

「廷兼さん以上の？」

廷兼郎は、その性格や言葉遣いがやけに丁寧なため、ややもすれ

ば自分以外の人間を持ち上げすぎる嫌いがある。

今回もその類か、はたまた身内びいきかと推測し、白井は話し半分に聞いておくことにした。

「あの子は、本当に強い。ちゃんと立ち合ったのは一度だけだったけど、僕はまるで歯が立たなくてね。殺されるかと思いましたよ」

「殺され、かけたのですか？」

白井がそう尋ねると、廷兼郎は一言嬉しそうに、はい、とだけ返事した。

「まあ、ある意味では、もう死んでいるのですが」

白井が首を傾げていると、廷兼郎はそれを察したようで、無理やり話題を変えた。

「そのような背景があるのだろうとは、僕も思っています。全く以って関係がないとは、言い切れませんねえ」

「能力者の妹さんに負けたから、能力者に勝つために『対抗手段』の開発・協力を携わっているのですわね」

白井がそう言うのと、廷兼郎は頷くでもなく、がらんと空いた黒目を白井に向けていた。

「再戦を願って、力を蓄える。絵にはなるけど、それだけのために生きていけるほど、人は単純じゃない」

白井に顔が向いているのに、白井は廷兼郎からの視線を感じられなかった。

廷兼郎の目は、何も見ていない。その焦点は白井ではなく、自分に向けられている。

先ほどと言っていることがちぐはぐなのだが、廷兼郎は気にした風も無く続ける。

「僕はただ、生きているだけ。『対抗手段』も、ジャッジメント風紀委員も、長点上機も、あまばねりゅう天羽根流も、全ては僕が人生を謳歌するための、道具に過

ぎない」

人生を謳歌するんだと言いながら、廷兼朗の語り口は、ひたすらに平坦で、全くの抑揚を欠いていた。

さりげなくその両手が、手近にあった手摺に乗せられる。

「僕はもう、あの子のためには生きられない。生きたくない。生きていない」

手摺を握った手が、徐々に狭まってゆく。その割りに大して力を込めていないように見えるのは、廷兼朗自身も、力を込めている自覚が無いのdarou。

はつとした廷兼朗が、思わず手摺から手を離すと、そこにはくつきりとした手形が刻まれていた。

「これは、お見苦しいところを」

ばつの悪そうな顔をして鼻を搔く廷兼朗の目が、ようやく白井を捉える。それでもまだ目つきは胡乱なまま、「どうして、戦う、か」などと白井の質問を反芻した。

「まだ、僕には答えられないなあ。改めて問われると、こんなに困るとは思わなかった」

顔を緩ませながら、ほんわかと呟く廷兼朗からは、あの御坂美琴を追い詰めた苛烈さなど見る影も無い。

白井は我知らず、眉を顰めた。

納得いかない。そんな中途半端な覚悟で、御坂に喧嘩を売ったのか。その程度の倫理で、彼は無能力者でありながら能力者に挑んでいるのか。

「そんなことで、そんな曖昧なことで、あなたは命を擲つのですか？ 死んでも構わないのですか？」

まるで糾弾するような勢いで、白井は言い募る。その迫力に、思わず廷兼朗は鼻白んだ。

「すみません。上手く言葉に出来なくて……」

他に何か言い様は無かろうかと、廷兼朗はうんうん唸りながら考
え込んでいた。

ようやく口にした言葉も、甚だ自信なさげな調子だった。

「私はこうだから戦うんだと、きちんと言葉に出来ないなあ。言葉
に出来ないから、体でそれを表したくて、戦うのかなあ」

答えになつてないなあと、廷兼朗は申し訳無さそうに付け足した。

「何だか、本末転倒ですわね」

「そうですね……」

しみじみと漏らす廷兼朗を見ている間に、白井の苛立ちは治まっ
てしまった。

高校一年生にしては世間の、特に学園都市のことには子供のよう
に疎かったと思えば、若者らしい情熱と激情を剥き出しにしてぶつ
けてくる。かと思えば、諦観に囚われたかのように老成した態度を
見せることもある。

目の前にいるのに、まるで捉えどころが無くて、正対していると
思えば、するりと脇から通り抜けてゆく。

この男を把握することは、自分の問いに廷兼朗が答えるのと同じ
くらい、難しいことなのかもしれない。

「すみません。何の答えにもなっていないくて」

「いいえ、こちらこそ。体を資本とする人に、言葉を求めることが、
あまり良いことではないのかもしれないね」

「そんなあ。まるで僕が、脳みそ筋肉みたいじゃないですかあ」

「むしろ廷兼さんは、筋肉が脳みたいなものじゃありませんの？」

「それはまた、難しい例えですね」

気の抜けるような笑いを返して、廷兼朗は訓練場の中へと入って
いった。その姿を見送る白井は、複雑な心境だった。

廷兼郎が、またも御坂を襲わないとも限らない。白井は言葉だけ

でも、もう金輪際そんなことは致しませんという誓約が欲しかった。だが、そんなものを望んだところで、手に入れたところで、幾らの価値も無い。廷兼郎の曖昧さは、そんな縛りなどものともしないだろう。

所詮、言葉になんか出来ない。

またその時が来れば、自分が東奔西走すればいい。そしてあの男の顔を、また蹴り付けてやればいい。贅沢を言えば、より早い段階で。

そしてまたご飯を奢らせて、小言という小言を当り散らしてやればいい。これでもかと詰って、すつきりとすればいい。

流れのままに、身を任せればいい。それであの無能力者が死んだとて、それは彼の本望ということだろう。

それもまた、流れの一つと、割り切ってしまうればいい。

(割り切れるのでしょうか、私は……)

そればかりは、その時にならなければ分からない。そしてそんな決断など、もう来ては欲しくないと、白井はまたも切に願うことにした。

寮に戻った廷兼郎は、電気も着けぬまま押入れに向かい、布団を敷いて横になった。

G 1 トーナメントから間を置かず、レベル5 『超電磁砲^{レベルガン}』との戦闘。心も体も休まらず、それでいて退屈しない、最高の期間だった。

その上今日は奢りなどという慣れないことをしたせいで、とくに気持ち疲れてしまった。

「何故戦う、かあ」

分からないんじゃない。言葉で表したくないのだ。言葉にして、文字にして、形を与えてしまった瞬間、自分が思っているものとは

全くの別物になってしまいそうで、それが許せないから、口から出てきてくれないのだ。

戦うことは戦うことでしか表せないし、戦う理由は戦いの中にかない。

否、そうではない。もっと単純なことなのだ。

戦っているから、戦っているのだ。

白井に言われたとおり、本末転倒だ。まるで意味が無い。

「やっぱり、答えられないなあ」

それを答えるには、まだ自分は幼すぎて、弱すぎて、未熟すぎる。糜爛びらんな思考が湧け始め、体が深く沈んでゆく。眠ろうと考える頭まで、ふわりと霞んで消えていく。

(戦う。何故、どうして、戦う……)

水母くらげのように漂う頭のなかで、そんな言葉共がぐるぐると旋回し、ころころと転がっている。

そのままずると、どこかへ引き込まれていくような気がした。布団を突き抜け、寮の床を透し、何かの奥の、そのまた奥へと誘われていく。

それが自分の頭の中なのだと思い付いた頃、廷兼郎の思考は泥のように沈みきっていた。

レベル5とレベル0?…三(後書き)

第四章終了です。ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。

次章から字緒廷兼朗の過去編を投稿します。原作との関係が希薄なお話になりますが、その代わり、『二人の舞月の住む世界』の主人公、舞月外樹さんに登場していただくことになっています。お楽しみいただければ、幸いです。

天に羽、地に根：一

紀州和歌山は岩手市根来の、土仏峠を走る影があった。原生林の道なき道を猿と見紛う俊敏さで飛び交う。

時折バシツと、何かを打つ音が聞こえる。そしてパラパラと、白木の粉が舞い落ちる。

「ふう、はあ、ふう」

木々の間からようやく降り立ったのは、猿でもなく、ましてや妖怪の類でもなく、まだ顔に幼さの残る少年である。

天羽根流現当主、字緒廷兼郎。十五歳の姿だった。

廷兼郎が中学三年生になった折、彼は父であり師である字緒可解野から、天羽根流当主の座を譲り受けた。

別段、天羽根流には長子相続の伝統があるわけではない。ただ現在には門下も皆無で、天羽根流の技を継げるのが、十五になったばかりの廷兼郎ただ一人だったというだけである。

寛永の年、天羽流柔術の門弟だった後の天羽根流開祖、字緒廷兼は、天羽勘解由仲英に教えを拝受していたが、天羽流の印可を貰うことなく、修練の半ばにて道場を後にする。

その後、和歌山は根来の地で、彼は根来衆より、戦国の御代から受け継がれてきた根来忍法を授かる。

その二つの流派を字緒廷兼が組み合わせさせて出来たのが、天羽根流だと伝えられている。

現在、天羽根流はその門を開いておらず、血族間で細々と継承していた。

「廷兼郎。これよりそなたに、天羽根流の印可を授ける。その意味が分かるな」

「はい。可解野師匠」

父親を名前で、それも師匠を付けて呼ぶのは、ある意味で武術において当然の処置といえる。

武術を習わせるのに、父子の情を持つていては示しがつかない。それは技の習得を妨げ、戦闘の際には危険を増大させる。そのため、武の教えを請うに当たっては、父を父と思わず、子を子と思わず接するようになる。

「これからは天羽根流当主として、なおのこと精進を重ねていく所存であります」

毅然とした正座と、毅然とした言い様に、可解野は満足そうに頷いた。

「天羽根は、地の根より吹き昇る一羽ひしほなり。

烈き風に破られず。剛を以って捕らわれず。

自然の其法と合し、天上へと至れる正道なり」

初代当主、字緒延兼が提唱した、天羽根流の根幹を成す教義である。

自身を一枚の羽に例え、激しい風には靡くとも破かれぬ。強力しつりきには捕らわれず、囚われない。地から天へと昇る自然の氣に己を合一させ、武の正道を目指す。

天羽流も根来忍法も極められなかった廷兼が、苦悩し、奔走して、ついには至った境地がそこに顕されていた。

天羽根流は、関口流柔術の分派である天羽根流と、根来忍法を併せた、言わば柔術と忍法の合いの子の半端な戦闘術と言える。

名前なんて『天羽』と『根来』を併せた洒落でしかないし、あまり世間に吹聴していい流派ではないので格闘技の祭典にも参加せず、今では細々と受け継ぐだけで、その技を活かす場も限られている。

父親である可解野が天羽根流を使うのは、自身の稽古と廷兼郎と

の稽古、そして街で開いている護身術教室の場に限られている。

それでも廷兼郎は、天羽根流が大好きだった。名前も好きだし、技も好きだし、何より初代当主の名を、自分が受け継いでいるのが嬉しかった。

消えかけた流派でもいい。決して有名ではなく、正統な流派ではなくてもいい。そんなことは廷兼郎にとって、取るに足らない些細な事柄だった。

世間のことなど自分は興味が無い。天羽根流の強さ、自分の強さは、ただ己のみ、自分で信じていけば良い。

そして願わくば、自分の守りたいものを、一つだけ守ればそれでいい。

「いに。とつと。あそぼ！」

厳粛な道場の雰囲気、途端に和らげる朗らかな甘え声。その声の主は、廷兼郎の背中目掛けて思い切り抱きついた。

「こら、キコ。いには大事な話をしてるんだ。ちよつと待ってなさい」

キコと呼んだ女の子を、廷兼郎は優しい声で嗜める。しかしそれは聞くも恥ずかしい猫撫で声で、嗜める意味合いを含んでいなかった。

「やーだ。あそぼつよ。お絵かきするからクレヨン出してほしいの」

じゃれる二人を見て、可解野は気分を害するどころか、好々爺とした表情でほうと息を吐いた。

「廷兼郎、遊んでやれ」

「でも、印可の儀は？」

「もうお前は覚悟が出来ているし、天羽根のことは全て教えてあるだろう。ならば形など不要だ」

上座から立ち上がり、可解野がキコの頭を一撫ですると、キコはくすぐったそうに目を細めた。

字緒キコ。廷兼郎とは一つ違いの妹である。長子相続の伝統が無い天羽根流を継げる、数少ない人間でもある。

だが、キコは天羽根流を継ぐことは出来ない。そもそも彼女は、日常生活さえままならないのだから。

キコは生来から知恵遅れの気があり、十四となった今でも、振る舞いは三歳児に相当するものに留まっていた。

それを両親と廷兼郎は大いに憂い、まだ小さかったキコを色々な医者に見せたが、それでも原因は分からず、症状は快復の兆しを見せなかった。

ある医者は脳の障害かもしれないと言い、もしくは神経の病気だと言い、いずれにしてもキコの病の原因も、改善策も打ち出さずはくれなかった。

（治らないなら、守る）

廷兼郎が武術に打ち込むのは、そういった事情もある。いざとなれば見世物となって金を稼ぐだけの覚悟は出来ている。

妹を守る。そのため武。そのため自分。そのため天羽根流。キコのためなら死ぬ。廷兼郎は臆面もなく、そう思っている。

そのためなら、どんな振る舞いも出来る。どんな修行も耐えられる。誰とでも戦える。

くるり、くるりと、一枚のカードを弄ぶ。不思議な人に貰った不思議なカードを、廷兼郎は寝る前に持って眺めるのが日課になっていた。

そんなことをせずとも常に身に付けているのだが、何か連絡が来るかもしれないと思うと、やはり取り出しては眺め、ため息をつくことを繰り返した。

このカードを渡してくれた人は、ある約束をしてくれた。力にな

ると、その力強い声で、自信を持って言ってくれた。

我ながら女々しく、そして厚かましい。頼りに出来ると分かった途端、まるで犬のように懐いてしまう。しかし今は本人がいないので、形見のカードを大切に保管し、お守りのように懐へ忍ばせることしか出来ない。

早く返事が欲しい。妹を治してやるという、確証がもしもあるのなら、それがぜひ欲しい。

このままではカードを握りつぶしてしまいそうなので、ケースの中に仕舞い込む。

今更自分を取り繕えるほど、廷兼朗は器用ではない。妹の病気を治してくれるとなれば、何でもやれる。どんなことにでも耐えられる。自分の命で妹が助かるなどという簡単な図式があるとすれば、まさに電卓で答えを打つ容易さで差し出してしまっだろう。

「……外樹さん」

舞月外樹と名乗ったあの人。年齢不詳で、男でありながら女になつたり、変なカードを作つたりと、今から思えばかなり胡散臭い人物だった。しかし、あの立ち合いで感じたことと、掛けてくれた言葉は、廷兼朗にとっての真実だった。

「何だ？ 廷兼朗」

当人との邂逅を思い出していたところへ、唐突な返事が返ってきた。あまりに突然のことに、廷兼朗はしばらく声も出せずに口を開けながらカードを眺めていた。

「おい、廷兼朗？ あれ？ いないのか」

「が、外樹さん！」

「ッ！ こら、いきなり大声を出すな」

「すいません。でも、あの、その……」

言葉が喉につつかえて、上手く出せない。あれもこれも聞きたくて、何から話せばいいのか分らない。

「落ち着け。分かってる。妹さんのことだろう」

「はい。そうです」

「ばつちりと見抜かれると、さすがに恥ずかしい。しかし分かってもらえているということが安心でもある。」

「ようやく目途がついてな。妹さんを学園都市に連れてこないか？」

「学園、都市？」

「知らないのか？」

「すみません。そういうことには疎くて」

「ただでさえ都会の喧騒から離れた場所に住んでる上に、自分やキコに特段関わりのないことにはとことん興味を示さない気質の廷兼朗が、遠く関東にある巨大な教育機構のことなど知るはずもなかった。」

「ニュースや新聞で見聞きしていても、いちいち覚えてはいないのだろう。」

「学園都市と言うのはだな……。いや、実際に来てもらったほうが話が早い。要するに、科学技術が進んでいる都市だと思えばいい」

「技術が進んでる？ それってつまり、医学とかも……」

「ふふ、耳聡いな。でもその通りだ。医学だって格段に進歩してる。私が直接見てあげたいのだが、忙しくてね。かわりに医者を紹介しよう。今の段階での完治はさすがに約束できないが、症状が改善されるよう努力する」

「本当ですか！？ ありがとうございます！ 早速両親に話してみます！」

「都合のいい日が決まったら教えてくれ。事前に招待状を発行しないと、学園都市には入れないんだ」

「誰でも入れるわけではないんですか？ 街なのにな？」

「確かに。まあ、色々事情があるのさ。こっちに来れば、自ずと分かるだろう」

外樹との会話が切れると、廷兼朗は一目散に居間へと向かった。これから両親と妹に、大事な話をしなければならぬ。

外樹と出会ったときのことを話すのはさすがに気が滅入るが、それを上回る希望がどんどん湧いてくる。

妹が治る。それは字緒の家にとって最大の欣快だ。勿論兄である廷兼朗にとっても例外ではない。

妹を生涯掛けて守ると覚悟することは、妹の回復を諦めることではない。妹の利益になるもの全てを手に入れ、妹に害するもの全てを排除することを、如何なる手段を持ってしても行くと決めたに過ぎない。

別段、廷兼朗は外樹を利用したり、踏みにじったりする意図はない。そういう浅はかな行いは、あの御仁の前では霧散することを、手を合わせた廷兼朗はよく知っている。

妹を助ける代わりに、何か要求されるかもしれない。何か取られるかもしれない。その何かは全く分からないけれど、廷兼朗に一抹の不安も無い。

外樹という人が信用に値すること。そして廷兼朗の覚悟に一転の曇りもないことが、その自信の源だった。

天に羽、地に根：二

物々しい壁を守る物々しい警備を、外樹から渡された招待状を見せて通り過ぎる。その先に広がっていたのは、同じ日本とは思えない全くの別世界だった。

洗練された建物ばかりが立ち並び、まるでこちらを威嚇しているかのようだ。上から覗き込む巨人の群れの中にあつて、人々がそれに何の関心も払わないのが、危うい怖さを感じさせる。

慣れてしまえばどうということはないことでも、初めて体験する人にとつては十分に異様である。

生まれて初めて訪れる都会の様相に、字緒の一家は圧倒されっぱなしだった。

父である可解野は仕事のため来られず、今日は廷兼朗と母である美弥江みやえでキコを見ていなければならない。もはや一時でも目を離せばどこへ飛んでいくのか分からないので、常に二人でキコの手を握って離さなかった。

「ママ、あれなあに？　ねえ、なあにあれ？」

それでもキコは見るもの全てへの興味を抑え切れず、廷兼朗と美弥江の二人をぐいぐいと引っ張り回す。

「風車、よねえ。何で風車なんかあるのかしら？　廷兼朗、知ってる？」

「さあ？　粉でも挽いてるんじゃないの？」

「そうねえ。風車だからそのはずよねえ。案外と古めかしいこともやってるのかしら」

勿論、三十年は先に行く学園都市に設置された風車が粉など挽いているはずも無く、内蔵されたモーターによって電力を捻出していることは言つまでも無い。

「にしても、外樹さん遅いなあ……」

迷わないよう、入り口付近まで迎えを寄越すことになっていたのだが、当の外樹の姿は一向に見えない。

まさか変装でもしているのだろうか？ と疑い始めた廷兼朗に向かつて、徐に一人の女性が近づいてきた。

「字緒廷兼朗くんね。こんにちわ」

「あなたは？」

「あみおかようれん網丘楊漣です。外樹さんの部下よ。外樹さんは忙しくて、今日は私が学園都市を案内するわ」

「そうなんですか。今日はよろしくおねがいします。僕の母と、妹のキコです」

「廷兼朗の母で、美弥江と言います。この度はお世話になります。

本当にありがとうございます。これはつまらないものですが、皆さんで召し上がってくださいまし」

「わざわざありがとうございます。おいしくいただきます」

つっか恙無く挨拶を済ませ、いただいた地酒と漬物をトランクに置き、

網丘は恭しく車のドアを開いた。

「それでは行きましょうか。まずは病院までお送りします」

「わーい」

学園都市に来てから興奮しっぱなしのキコが、いの一歩に車内へ飛び込む。

「広い。ふかふかー」

「こらキコ。はしゃがないの」

近未来的な車の中には、見た目の小ささが嘘のようにゆったりとした空間が広がっていた。キコに付き添うために美弥江は後部座席へ、廷兼朗は助手席へと乗り込む。

緩やかに流れる車窓に、キコは身を乗り出す勢いで釘付けになっていた。見るもの全てが新鮮で、いちいち声を上げてはしゃいでい

た。

これから彼女を、この学園都市の医者に診てもらえる。そう思うと、廷兼朗には親しみの無い近未来的な雰囲気、途端に頼もしいものに思えてきた。

「本当に、ありがとうございます」

運転する網丘に、廷兼朗は改めて礼を言う。

「そんな恩に着ることは無いわ。あなたを呼んだのには、それなりに理由があつてのことなの」

「理由、ですか？」

「外樹さんに聞いたわ。中学生とは思えない、格闘家だつて」

「いや、そんなことは……」

外樹にそう言ってもらえたと思うと、つい顔が綻んでしまう。

「私や外樹さんが進めている計画があるのだけど、その関係で、色々な格闘術の収集をしているのだが……」

柔和だった気配が少し抑えられ、口調も少し固くなる。どうやら、真面目で重要な話なのだろう。

「君の天羽根流に興味がある。その研究のために、協力してくれないか？」

「はい。妹を、助けてくれるなら」

間髪入れず、廷兼朗は答えた。逡巡する隙間なんて、まるで必要の無い申し出だった。

「そう構えることはない。ただ、天羽根流の技を見せてくれればいい」

「はい。お安い御用です」

スムーズに減速し、病院の駐車場に到着する。聳え立つ白磁の塔は、キコの病気くらい、難なく引き受けてくれそんな大きさを有していた。

「なるほど。ふむ、確かにこれは外の技術レベルでは対応し切れませんな」

キコを一通り診察して開口一番、医者はそんなことを言った。

それはつまり、外とは違う技術レベルを持つ学園都市ならば対応できることを暗に示していた。

「あのう、キコの病気というのは？」

「『能力痛』の一種ですね。成長痛の超能力バージョンとでも言いましょうか。一般的に能力の発現に対して、脳や体が未成熟、あるいは不適切である場合に起きます。しかし、このように顕著な発症の仕方は珍しい。私も初めて扱う症例です」

「初めて？　だ、大丈夫なのですか？」

嘘偽りの無い語り口が不安を煽るが、それを払うように、医師は嘘偽りの無い声で言った。

「ご心配には及びません。完治までは時間が掛かりそうですが、通常のQOLクオリティ・オブ・ライフは保障できます」

「はあ、ああ……」

安心のあまり、美弥江はその場に崩れ落ちる。これほど確実な言葉でキコの治療が約束されたのは、初めてのことだった。

「ありがとうございます。ありがとうございます」

ともすれば洩れ出てしまいそうな嗚咽を手で抑え、必死にお礼の言葉を繰り返す。美弥江の肩を抱く廷兼朗もまた、滴る涙に耐えていた。

その二人を、キコは不思議そうに眺めていた。

「では早速、専門の研究所にて治療を行うことにしましょう。招待状はこちらのほうで書いておきます。今日からでも入院できますが、どうしますか？」

「ぜひ！　ぜひお願いします！　キコを治してやってください。お

願います！」

「分かりました。大丈夫です。必ず治してみせます。ご安心ください」

美弥江の手を握り返し、医師は画然とした態度でそれを正面から受け止めてくれた。

妹が治る。普通の人並みの生活が出来る。そんな希望が突如として目の前に現れれば、その眩さに目を焼かれ、ひたすら涙することしか思いつかなかった。

「在野にて発生した能力者。原石かどうかは定かではないが、今のところ三人しか確認されていない^{メタモルフォーゼ}肉体変化能力か」

キコの診察を終えた医師は、そのカルテを眺めながら神妙な面持ちで考え込む。

肉体変化能力者とは、自身の肉体を変化させる能力者である。現在学園都市で確認されているのはたった三人しかいない、希少な種類の能力である。

能力レベルは低いものの、今しがた診察を受けたキコは、正にその希少な能力に該当していた。

医師は徐に携帯端末を取り出し、どこぞに連絡を取り始めた。

「私だ。ああ、実は君の研究分野に該当する能力者が見つかったね。いや、学生ではない。未成年ではあるが、外の……、原石、と言つてよいのだろうか？ ^{メタモルフォーゼ}肉体変化の枠に該当するから、そういう希少さではないのかもしれないな。まあ、そんなことはどうでもいい。そそられないか？ ……愚問だったな。

うむ、表向きは治療と言うことにすればいい。学籍？ 実は、少し特殊な環境で育ったらしくてね。まあ、これからそちらに向かわせる。かなり都合のいい人材のはずだ。色々な意味で、気に入ると思つぞ。それでは、礼のほうも忘れずに。頼んだよ」

色好い返事でも貰えたのか、機嫌の良くなった医師はキコのカルテを封筒に仕舞い、とある研究所への紹介状を認め始めた。

「良かったわね。妹さん、治りそうで」

「はい。これから入院することになりました、母が付き添うそうです」

赤くなつた目を隠そうともせず、年相応の無邪気な顔で廷兼朗は笑った。彼は物心ついて、妹が病気であることを知った時から、自分が兄であるということを明確に意識した時から、子供であることや自分であることに制限を付けてしまっていたのかもしれない。

無論、廷兼朗が兄で、キコが妹であることは天地が逆さになつても覆らないのだが、キコが人並みになつてくれれば、また違つた未来が訪れる。ただ守り守られるだけの日々ではない。互いを尊重し、一人の人間として認め合い、きちんと向き合える未来が待っている。「それじゃあ、今度はこちらのほうに付き合ってもらえるか」

「はい。勿論です」

睫毛に付いた水滴を払い、強く目を瞑る。清まつた視界で網丘を見上げる。

網丘は構えなくていいと言ってくれたが、廷兼朗としてはそういうわけにいかない。妹を助けてくれた人の申し出を、構えずに取り組むことは出来ない。

天羽根流が見たいと言ふのなら、是非も無い。全て包み隠さず、余るところ無く見せる。

それこそが、妹を守ると言ふことだ。

天に羽、地に根：三

第二学区の訓練場に着いた網丘は、一も二もなく廷兼朗をホールへと連れて行き、そこで天羽根流あまはねりゅう柔術の型稽古をするように頼んだ。ゆるゆると淀みなく繰り出される型を見て、果たして網丘から漏れ出したのは感嘆の息だった。

「これが、天羽根流……」

古今東西、あらゆる格闘技や武術を見知ってきたつもりで網丘をして、それは十分驚嘆に値する光景だった。

特徴的な当身『喉断ち』や、忍術を交えた独創的な技の数々に目を奪われがちだが、その根本には身体への正しい理解、とりわけ正中線に重点を置いた弛まぬ修練が伺える。

そして驚くべきは、人体の急所を容赦なく突き、挫き、折る、その実戦性。およそ現在の格闘スポーツでは受け入れられないような攻撃の数々が、天羽根流には残されていた。

人間の髪や耳、鼻などの突起物を掴む動作を攻撃に直結させるのは、卑怯卑劣の謗りを免れない人道に悖る攻撃方法だが、能力者に対して非常に有効であることも事実であった。

「欲しいな、これ……」

これ以上なく破顔し、網丘が呟く。

魅力的なものに出会って微笑むのは、人として当然の生理現象だが、顔がビスクドールのように整っている網丘のそれは、あまりに凄絶なものだった。

(もしかしたら、いけるかもしれない)

「廷兼朗くん。次は実際に戦ってみようか」

これほどのものを見せられて、網丘も舞い上がっていた。まだ見たい。もっと見たい。

(見せてみる。君の力を)

「実際？」

廷兼朗が戸惑っていると、後ろのドアが開き、中から一人の男が出てきた。

「スパークシグナル迎電部隊、スパークシグナルと言っても分からないか。まあ、結構腕の立つ人だから、少し戦ってみてくれ」

そんな言葉は、もう廷兼朗には届いていなかった。男が発している雰囲気は、少し戦う、などという軽い調子ではない。

成熟した体に厚い筋肉の鎧を纏っている。単なる徒手格闘技者ではない。頑強でいて重量のある装備の数々を搭載しながら、スムーズに作戦を行うことを想定した体つきだ。

格闘の専門家ではない。というよりは、格闘も出来ると言うべきだろう。一中学生に過ぎない廷兼朗が、のうのうと惚けていられる相手ではない。

廷兼朗は、すかさず相手の左斜めに動きながら構える。右手を拳げてぐるりと顔の前で巻き込むように捻り、左手は相手に隠れるほど後ろに退いて、拳を腰の横に置く。

天羽根流、毫拳の構え。寸毫の間に一打を加えて戦闘を決着させる、一撃必殺の構えである。

大人と子供では、どうしても体力に差がある。長丁場にまず勝機は無い。一触、一合の間に、一手を放ち、一撃にて決する。

廷兼朗の動きに合わせて、迎電部隊の男も動く。二人は回り込みながら、徐々にその円を狭めてゆく。

男が軽いジャブを放つ。射程は子供の廷兼朗などとは比べ物にならない。

その左拳を、右の腕刀が強かに弾く。窮屈そうに曲げられた腕が

一気に伸展し、ジャブに負けない速さで迎撃する。

急いで戻されるジャブと同時して、廷兼朗が一気に踏み込む。引き手と変わらぬ速度で懐に飛び込み、左の拳を男の水月目掛けて突き出した。

一撃必倒の打突が、男の腹の僅か横を掠めてゆく。廷兼朗が踏み込むのと同じくして、男も身を捻って避ける準備をしていた。

あれほど分かりやすい一撃必殺の構えを取ったのだから、こうなることはある意味必然だった。

外れた左腕を戻さず、そのまま廷兼朗が男の腰に組み付いたのも、当然の結果だった。

飛び込む勢いを止めず、近すぎる間合いで左の膝を男の股間に突き上げる。男は咄嗟に腰を引くが、それに合わせて廷兼朗が男の体重を引っこ抜いた。

高くは上げない。位置エネルギーではなく、速度と姿勢で相手を破壊する。

高速で巻き込まれてゆく男の顔が、後ろに引っ張られて跳ね上がる。地面に到達する僅かな間に、それは致命的なほど脆い姿勢となっていた。

「ぐっっ」

終始落ち着いていた男の首から不穏な音が聞こえ、ようやく彼は声を上げた。

毫拳を防がせて、まんまと組み付く。金的した膝で相手の体を持ち上げ、背に回した手で髪を引っ張り、首を不安定にさせたところで顔を地面に突き刺し、全体重による負荷を頸椎に集中させて破壊する。

天羽根流投撃『逆剥落とし』。馬を逆剥さかはぎにして突き落とす、スサノオの故事に肖った容赦ない必殺の投げである。

「いい。いいぞ！ これだ！」

堪らず網丘が叫んだ。その笑みのほどは、先と比べるべくもない。

体力において相手が有利と見るや、一撃に賭けると見せかけて腰に組み付く状況の判断。相手に意図を悟らせず、こちらの意図を淀みなく遂行する技術の運用。それを支える健全な身体。そして一切の呵責なく、初対面の人間に致命的な攻撃を行える冠絶した精神。全てを高い水準で備えつつ、廷兼朗は未だ伸び代を持つ未成年である。

欲しい。絶対に欲しい。他には渡さない。絶対に手に入れる。そして私が、『カウンターメジャー対抗手段』を完成させる。

「お疲れさま！ 上がっていいわよ！」

興奮気味にテストの終了を伝え、網丘は自作のスポーツドリンクを一気に飲み干した。

これは外樹に幾ら感謝しても足りないだろう。これほどの逸材を紹介してくれる上司を持って、網丘は自分の運命とやらに柄にも無く感謝していた。

ホールにまで下りてきた網丘が、廷兼朗の肩を叩いて労った。

「少しは、お役に立てたでしょうか？」

「少しだなんてとんでもない。予想以上だったぞ。すごいものだ、天羽根流と言うのは」

いつのまにか男言葉になっている網丘が興奮しながら褒めてくれる。こんなに喜んでもらえれば、廷兼朗も嬉しくなってくると言うものだ。

「それで、改めて相談なんだけど、私に協力してくれないか？」

廷兼朗を気圧しつつ、網丘は立て板に水の勢いで話しかけてくる。「『対抗手段』計画に参加してくれれば、長点上機学園への入学を約束する。いい高校だ。学園都市でも屈指の名門校だよ。学費だけじゃない。生活費までこちらが諸々面倒を見る。悪い話ではないはずだ」

悪い話どころではない。学費や生活費まで面倒を見てもらえば、字緒の家に何の負担も掛けずに高校に行ける。願ってもいない好条件だ。

「せっかくのお話ですが、すみません。今はまだ、協力は出来ません」

だからこそ、廷兼朗はそれを飲むわけにはいかなかった。

「妹を置いて、僕だけそんないい思いをするわけにはいきません。」

あいつのことに目途が立つまでは、お返事できません」

ある意味で外樹や網丘を裏切るような言葉だが、やはり廷兼朗は妹を置いて自分だけいい目を見ると言うのは、どこかで気が咎めるといふより、そんな自分を見過ごすことが出来ない。

出来ることなら今すぐ受けたい。差し出された手を喜んで握り返したい。それこそ通すべき人情と言うものだろう。

しかし、それを許さない自分がいる。自分や周りの思いに全力で応えたいと思う自分と、何を置いても妹のことを思う自分とでは、端から勝負になりもしない。

「こちらこそ、いきなりこんな話をしてすまなかった。無理強いはいしない。準備が出来たら、いつでも連絡してきてくれ」

「すみません。こんなに良くしていただけなのに、さらに気を使わせてしまって」

「気にしなくていい。君には、その価値がある」

「買いかぶり過ぎです。僕なんてとても……」

「特殊部隊の人間を一蹴しておいて、よく言うよ」
網丘の嫌味に苦笑いしながら、廷兼朗はひたすら恐縮するばかりだった。

キコが学園都市の病院に入院してから、一週間が経過しようとしていた。

最初に診察した病院から、専門的な研究所に移され、そこで集中的な治療を受けることになったと、医師からの連絡を受けた。

残念ながらそこは面会謝絶で、あれ以来キコとは会えなくなってしまうたが、研究所からキコの経過報告が届いたので、廷兼朗はそれを何度も何度も読み返しては、キコとまた会える時を心待ちにしていた。

たった一冊の経過報告書を見るだけでも、キコの回復の程は瞭然だった。やはり学園都市はすごい。こちらの医師が全く手を付けられなかったのに、それがたったの一週間で成果を挙げている。

外樹に会えたこと、そして喧嘩を吹っつけたことは決して無駄ではなかったと、廷兼朗は改めて感じ入っていた。

経過報告書を眺めていると、けたたましく電話が鳴り響いた。

字緒の家は未だに黒電話を置いている。廷兼朗が取り上げると、チーンと可愛らしい鐘の音を上げて着信音が止まった。

「もしもし、字緒です」

「お兄ちゃん。私、キコよ」

「ほへ？」

我ながら素っ頓狂だとは思いつつも、そんな阿呆のような声がつい口からもれ出てしまうほど、廷兼朗は驚き呆けてしまった。

あの自分に甘えきった声そのままに、キコの明朗な喋りが耳元を

くすぐる。廷兼朗は恍惚とその感触に聞き入りながらも、競りあがる衝動を急いで言語化した。

「……キコ？ お前、言葉が……。もう治ったのか？ 大丈夫なのか？ えっと、あと、それから……。研究所の生活には慣れたか？ いじめられたりしてないか？ ご飯ちゃんと食べてるか？ 野菜残すんじゃないぞ。お前は昔から好き嫌い多いからな。他の患者さんに迷惑かけてないか？ えっと、えっとそれから……」

「落ち着いて、兄さん。私は平気よ。治療で大方の症状は治ってるの。もう殆ど大丈夫よ」

以前のキコだったら決して口にしない難しい単語が、流れるように飛び出す。言葉使いだけでなく、声すらも大人びて聞こえる。年相応の声だ。これが本当の、自分の妹の声だ。

「よかった。本当に、よかった」

妹との通話中にも憚ることなく、廷兼朗はその場で泣き崩れた。押し寄せる感情の渦が、自分の与り知らない場所から濛々と立ち昇ってくる。それに耐え切れるはずもなく、口元を手で押さえて嗚咽が漏れるのを隠そうとするばかりだった。

「それでね、お兄ちゃん。私、学園都市で暮らすことにしたの」
「……え？」

突然の申し出に、廷兼朗の頭は全く付いていかなかった。ただでさえキコの回復の程に驚いて、ほかの事に反応する頭は残されていなかったらしい。

「暮らすってお前、お金は？ 勉強とか、住む家だっけどうするんだ？」

「研究所の人が都合してくれるって。今まで学校に通ったことがないから、まずは研究所の中で勉強を教えてもらうの」

「そ、そうなのか。そこまでしてくれるのか、学園都市ってのは」

「うん。私にはそれだけの価値があるんだって」
そういえば、廷兼朗も網丘に同じようなことを言われたのを思い出した。価値あると見れば、それに見合うものを惜しみなく提供するの、学園都市を貫く雰囲気なのだろうか、廷兼朗はぼんやり思い浮かべた。

嬉しそうに語るキコの言葉に、廷兼朗の心まで温まる。

知恵を取り戻して初めて味わうことの連続に、彼女は恐れることなく向き合おうとしているのがありありと分かる。同じ血の流れる者なのだから、その共感の程は常人の互するところではない。

その勇気を、まさか自分が止められるはずも無い。

「ずっと面倒見てやるつもりだったのに、まさか先を越されちゃうとはなあ」

「ありがとう。でも、私は大丈夫。だからお兄ちゃんも、がんばって」

まさかキコに励まされる日が来ようとは、思ってもみなかった。

こうなつてほしいと願ってはいたものの、いざ達成されると、軽い喪失感が襲う。

そして、それを大いに埋め尽くす喜びが、この体を包み込んでくれる。

「お前だつて、がんばれよ。もうそこに俺や父さんも母さんもいないが、大丈夫なんだな？」

「そんなこと言わないで。揺らいじゃうから」

「帰りたくなつたら、いつでも帰って来い。俺が家を継ぐから、お前は、好きにしていいいぞ」

「うん。そうする。じゃあ、またね」

案外と素っ気無く、キコのほうから電話を切った。それでもしばらく、廷兼朗は受話器を置くことが出来なかった。

もう彼女に自分の守りは必要ない。彼女のために生きること無

いいし、耐えることも無い。

(それでも、俺は)

キコのために生きる。そのために生きてきた。ならばこれからも、それは変わらない。例え自分が要らなくても、遠く離れていても、その覚悟は揺らがない。

キコのため。だからこそ廷兼郎は心から、彼女のことを応援していた。もう彼女をこの手で直接守れないけど、廷兼郎は今でも、彼女の兄だった。

それに、このままキコが人並みの生活を営めるようになれば、廷兼郎は何の気負いも無く、網丘の期待に応えることが出来る。

網丘の世話になれば、学園都市で暮らすことになる。何とか兄妹二人で暮らせるようにしてもらおう。学校も同じにってもらえるだろうか？ もしそうならば、これほど楽しいことはない。

キコの完治と、二人での生活。その微笑ましい未来が手の届くところまで来ている。

「よし」

今すぐこの思いを発散させなければ、とてもではないが落ち着けない。すぐさま道着に着替え、廷兼郎は道場へと急いで向かった。

鬼子、吼ゆる：一

「いぎゃああがががッ!」

聞くに堪えない悲鳴を、外れそうになるほど口角を開いて吐き出す。自分の体がみしみしと、軋んでいくのが実感できる。

でも、耐えなくちゃ。でないと、私の病気は治らない。

「ぐ、が、が、ががぎげがが……ッ!」

壊れたラジオを、上から覗く目がある。どこが壊れているのか、どこから壊れるのか、どう壊れるのか、じっくりとじっくり見定める、
怜悯な観察。

学園都市に来て、キコは確かに脳の活動が以前よりも改善され、
知恵遅れの症状が見る間に見る間に解消されていった。

今行われている拷問こそ、キコを治してくれた治療である。

字緒キコの能力の種類は、メタモルフォーゼ肉体変化に該当していた。それは学園都市で三人しか確認されていない、希少な種類の能力である。

キコは四人目の肉体変化能力者として、治療も兼ねてとある研究所へと招かれた。

しかしそれは、表立ってのことではない。何故ならキコには、未だ学籍がなかった。

実際に学校へ通っていないとも、学園都市の学生は何らかの教育機関に所属し、学籍を取得している。それは学園都市においての学籍が、市民権にも相当する権利だからである。

学園都市において学籍の無い未成年は、建前上は新生児くらいなものである。それはつまり、彼女が新生児並かそれ以上に、法的に無防備であることを示している。

多少の知恵がついてきたとはいえ、意図的に情報を遮断されたキコには、そのようなことさえ知る機会も与えられなかった。法的に

限りなく弱者であり、一般常識など皆無で、かつ希少な能力者。研究者にとつては、非常に魅力的な人材だった。

そしてキコは、治療と言う名の実験を受けることと相成った。

知恵がついたとしても、キコはまだ十四である。それもこれまで学校にも行かず、家族の中でしか育てられていない。そんな彼女が、他人から明確な悪意を感じ取ったとしても、おいそれと対応できるはずはなかった。

物々しい機材から毎日のように被る痛みを、せめて自分のためなのだと言い聞かせて、愚直に耐えるしかなかった。

それが非人道的な実験だと分かるほどの知識を、彼女は持ち合わせていなかったのである。

そんなキコの頭の中を満たすのは、なけなしの思い出だけだった。
『お前だつて、がんばれよ』

痛みごと、体ごと包み込む、優しい波長。それを思い出すだけで、キコの体に力が漲る。今の苦痛に耐えうる、強い力が。

『帰りたくなつたら、帰って来いよ』

そしてまたも、兄の声が脳髓に響き渡る。

(だめだ！ それだけは、だめ！)

まだ完全に、キコは治つてない。まだ帰るわけにはいかない。帰ったら、またあの頃の自分に戻つてしまう。両親と兄に囲まれて、ただ守られるだけの自分に戻つてしまう。

(私は、大丈夫だよ。お兄ちゃん……)

無限の苦痛の中、刹那の慰安を見出し、それを無数に重ねて耐える。磨耗して擦り切れる、その日まで。

「0603号の調子はどうかね？」

白髪交じりの頭をした壮年の男が、モニターに齧りついて離れない若い研究者に声を掛ける。

「芳しくありません。肉体変化といっても、自身の体細胞をミクロ単位で操作するだけに留まっています。これでは相変わらず、レベル0判定ですね」

キコの治療はともかく、実験の成果は遅々として進みがなかった。新たな肉体変化能力者。しかも学籍も何も無い法的最弱者。格別の成果を上げて名を売ろうとする研究者にとっては、まさに垂涎の的だ。

そう意気込んで多額の機材を投入してはみたものの、その成果がレベル0だというのは、最早笑い話にもならない。

若い研究者の言うとおり、キコの能力は、それはそれは慎ましかななものだった。

自身の体細胞ならば、如何なるものでも操ることが可能で、血流やリンパ流の速度や量を調節したり、内臓の位置や形状を変えてみたり、体内成分を恣意的に発生させてみたり、果ては脳や内臓の分泌物質の量まで操作できるのだが、それはまさにミクロ単位、酷いものではマイクロ単位で計測しなければ変化が分からないほどのものだった。

こんなもの、極論すれば普通の人間だってやっている。自律神経が勝手に操作して、なるべく自身を健康に保とうとする動きと、ほぼ変わらなかつた。

単に体を『最適化』オプティマイゼーションする程度のことなんぞ、能力と認定することすら烏賊がましい。こんなものを、我が研究所の成果として発表するなど、自らの恥部を露出して練り歩くようなものだ。

壮年の研究者が、そのような考えに至るのは、至極当然の仕儀と言えた。

「これは、破棄だな」

「え？ 破棄、ですか。勿体無い」

「今すぐでなくていい。取れるだけデータを取っておけという意味だ」

ああ、と若い研究者は頷き、それではと言いつつ、前々から考えていた実験内容を吟味し始めた。

頭が割れる。爆ぜる。脳漿が飛び散って、神経がばら撒かれ、自分の肉という肉が裏返る　はずだった。

それが未だ人間の形をしているのが、自分の事ながら信じられない。

これが自分か？　この痛みというには余りにも膨大すぎる塊の下に組み敷かれているのは、本当に自分なのか？

キコには果たして確信が持てない。出来れば持ちたくもない。

（嫌ッ！　もう、嫌だ！）

脳細胞の一つ一つが火花になって頭蓋を焼く。燃える神経が全身に回り、野火の如く駆け巡る。いっそのまま焼けて蕩けて、灰も残らず滅消してしまいたい。

（嫌だ！　それも、嫌だ！）

焼け死にたい？　灰も残らず消えたい？　そんなわけがない。死にたくなんかない。

生きていたい。もつともつと生きたい。勉強したい。遊びたい。

もつと知って、もつと変わって、今度こそ根来の家に帰りたい。

兄に会いたい。またあの声で、名前を呼んでもらいたい。撫でてもらいたい。お絵かきもして、抱っこしてもらって、いっぱい遊んでもらって。

目映いライトに精一杯伸ばした手が、ぼとりとキコの胸の上に落ちた。

「被検体0603号。反応ありません」

助手の報告を受けて、主任らしき男が画面上に映されたデータを走査する。

そして、特に感慨も無さそうに言った。

「そうか。ではこれまでのデータをまとめておいてくれ」

了解、と乾いた声で助手が答え、相も変わらずパソコンのキーボードを叩いていた。そこに映るグラフの一部は、何かの沈黙を表すように平坦な線となっていた。

ふわり、ふわりと、漂う感覚だけしか、キコには感じられない。

他の感覚がないというわけではないのだが、その浮遊感が如何にも鮮烈過ぎて、他に何も感じられない。

「キコ、ほら起きろ、キコ」

水の中を響くように、どろりとした声が聞こえる。重く、重く響いて、いつまでも体の中に残る波長。

声が、暖かい。起きないで、このまま眠っていたい。

「もうご飯だよ。早く席に座りなさい」

いつものご飯。帰ってきたかった、根来の家だ。

「こらキコ。俺のところにはうれん草、置くなって言ってるだろ。

ちゃんと食べなさい」

食べたい。いくらでも食べたい。囲まれて、皆と一緒に、食べた
い。

「天羽根は、地の根より吹き昇る一羽なり。

烈き風に破られず。剛を以って捕らわれず。

自然の其法と合し、天上へと至れる正道なり」

あの優しい兄の顔が、ぐっと強ばる。でも怖くない。強くて、柔
らかくて、丈夫な力で私を守ってくれる。

高く飛んで、速く走って、目くるめく繰り出される技は、まるで

万華鏡。

天羽根の技。兄が身につけた、私も身につけるはずだった流派。私と遊んでいないとき、兄はいつも天羽根流を練習していた。山の中で、川の辺で、木の上で。

父と組み打ち、森を駆け、体を揮う。そこに息づく、天羽根。自分を守る、優しき技。

強く、優しく、気高く、雄雄しく、正しい。

頼もしい。羨ましい。

私も、兄のようにになりたい。同じように、強くなりたい。強くなつて、立派になって、皆に心配をかけないほどに変わって、兄に会いたい。

生きたい！ 死にたくない！ 強くなりたい！

「にいにッ！」

キコの心と、体と、天羽根流の技。ばらばらに引き裂かれていたそれらが、ある力によって結合される。

心と身体の隙間を埋め、身体と技術を直結させ、技術と心が一致する。

心技体の全てを合一せしめる、第四の要素。それは神ならぬ身で天上へと辿り着くための、力を超えた力。キコだけに託された、キコだけの力。

能力が、キコの体に満ちてゆく。

「はああ。ねむ……」

データを粗方まとめ終わった助手の男は、盛大に欠伸をした。すでに上司はこの部屋を後にしており、管制室には男一人。実験室には女の子が一人。

「少しくらい、バチは当たらないよな」

既にこの区画の監視カメラは切つてある。元より映像として残す

ような実験ではない。

つまり、ここで起きることを、外部に察知される心配は皆無だ。実験室へのドアを開け、居並ぶカプセル状のベットの中に横たわる、女の子の傍らに立つ。

先ほどまで歪みきっていた顔が嘘のように整えられ、ぴたりと行儀よく目を閉じている。脳波計の沈黙から、まだ十分と立っていない。その体はまだ人並みの熱を持ち、硬直もしていない。

言わば死に立てはやはやである。

「十四の割には、いい体つきだ」

思わず舌なめずりしてしまう。だが憚ることは無い。我ながら下衆な行いも、バレなければそれでいいのだから。

胸に置かれた右手をどけて、その下の手術衣へと手を伸ばしたとき、ひたりと彼の手の上に、何かが重なる。

白魚のように瑞々しい、女の子の手。完全に伸び切り、大人になるのを待つばかりの、花も恥らう乙女の手。もう動かないはずの、死体の手。

悲鳴さえ上げられぬ混乱の中では、耳に届く言葉も、やはり彼にとつては意味不明だった。

「天羽根流逆捕、挟越」

キコの脚が、男の視界の大外を回って伸び上がる。

この技は、相手の腕を決めながら足を首に巻きつかせ、挟み込んでから鋭い腰の捻転で拉ぐ、天羽根流の関節技である。

兄がそうやって父親に教わるのを、キコはその目でしかと見ていた。

自分の体重を浴びせかけ、後方に倒れると同時に腰を入れれば、運動不足の研究者の首など、枯れ枝よりも手早く折れる。

丁寧に左肘も破壊され、助手の男は外部に一切知られずに落命した。

がたがたと、キコの体が震える。実験の後遺症か、あるいは人間を手にかけた重圧か。

それらの理由ではない。今、彼女の体を駆け巡るのは、そんな否定的なものではない。

愉悦。欣快。悦楽。明らかに肯定的な感情が、脳漿と言わず内臓と言わず、筋肉や骨にさえ充ち満ちていく。

「これが、私の、力……」

暴力的で、繊細で、荒々しいのに清涼な奔流。それが自分の体から生み出された。生み出すことが出来た。

「私は、知恵遅れじゃない。鬼子^{おにこ}じゃ、ないんだ」

これが自分とは思えない。しかし明らかに自分でもある。その差異を、一体どうやって埋めればいいのか。

「ウオオオアアアツツ!!」

あらん限りの声を上げて、キコは哭いた。

己の存在を歓喜し、己の存在を喚起する。それは産声だ。自分は変わったのだと、遠く離れた根来にまで響くように、彼女は吼え上げた。

変わったよ。私は変わった。これで胸を張って、家に帰れる。兄に会える。

帰らなくちゃ。見てもらわなくちゃ。もう兄も、両親もいなくても大丈夫な私を、みんなに見てもらわなくちゃ。

今しがた助手の男が開けたドアから、するりとした身のこなしで外へ出る。

ゆらり、ゆらりと、覚束ない足取りでキコは管制室から抜け出した。実験のダメージと変革の衝撃で、まだ心も体も浮ついた状態だ

った。

だからこそ彼女は、天も昇るような心地で揺蕩う。力感と言うものが全く欠如したその動きは、正しく歩法『無足』のそれであった。

廊下に出たキコは、早速にして二人の研究者と目が合った。

「ちよつと君、何をしているんだ」

被検体が一人でうろろしているのを見かねた二人の研究者が、キコのことを取り囲む。

「0603。例の肉体変化能力者か。ほら、こつちへ来なさい」

二の腕を乱雑に掴み、引いていこうとした男に対して、キコはぐわりと微笑みかけた。

そして、左の腕が掻き消える。すると男は、かくんと何かにつまづいたように動きを止めた。

傍で見ていた男が、おや？ と思う間もなく、彼の頭部がぼろりと首から離れてしまった。ゆっくりと血が糸を引きながら、喉が割れていく様子まで、男には鮮明に見えていた。

「ひっ……」

あまりの光景に悲鳴を上げようとしたが、もう一人の男が出すのを許されたのは、最初の部分のみだった。そこから先は、弦を弾くような涼しい音によって、文字通り断ち切られていた。

キコがぴんと腕を振って血を振るい、ようやくごとりと二つの塊が床に落ちた。そうして仲良く、二人の研究員の頭がキコの足元を揃って転がる。

天羽根流の基本の当身技『喉断ち』である。もっともこの場合は首まで刎ねているのだから、全く別の技として扱うべきかも知れない。

僅かな返り血も浴びることなく、キコは人を求めて進む。技を放つべき的を求めて、徘徊する。

もっと自分の能力を、天羽根流を精錬したい。打って、蹴って、

突いて、抉って、絞めて、拉いで、挫いて、砕いて、殺す。もつと変わって、強くなつて、天羽根の技を身に付けてから、根来の家に戻りたい。兄に会いたい。兄に見てもらいたい。

別段、キコにこの研究所を恨むような気持ちは無い。そんなものを持ち合わせるほど、まだキコの精神は成長していない。

天羽根の技を揮いたい。たったそれだけの誠実な心を胸に抱いて、彼女は体のいい的を探している。

それで壊れるのは、相手の勝手な脆さに過ぎない。

鬼子、吼ゆる：二

「何事だ!？」

連絡を受け、研究所内の生活スペースで眠りにつこうとしていた所長は、慌しく駆け回る所員たちを一喝した。

「披験体0603号が、暴走したようです」

「この前預けられた、あの肉体変化能力者か」
メタモルフォーゼ

うるたえ気味の所員が映した液晶画面を見て、白衣を着付けていた手が止まる。

「な、何だ、これは……」

それは研究所に設置されている、監視カメラの映像だった。最新の映像技術に比べて劣る性能だが、人間の目には十分鮮明に映る画質である。

それでも所長には、映像が何を意味しているのか、中々理解することが出来なかった。

廊下を一面真っ赤に染める、所員たちの血。ある者は輪切りにされた首から流し、ある者は谷折りにされて割れた胴体から漏らし、またある者は四散した体躯から搾り出されていた。

「彼女は肉体変化の無能力者《レベル0》だろう。こんな現象は有り得ないはずだが……」

所長は生娘のように息を吞んで失神することはなく、努めて冷静にその状況を観察していた。

この研究所で行なわれているのは、科学の発展のために、どれほど人間はその身を捧げられるか、という競争である。ただし、捧げるのは徹底して他人である。

神ならぬ身で天上へと辿り着くには、幾重もの人身御供を捧げ奉らなければならぬ。そこへ自分自身を捧げるなど、愚の骨頂も甚だしい。

ましてや人の形が多少崩れてしまつのも無理からぬ事と、この
研究員たちはきちんと心得ているし、所長とて人の中身が漏れ出し
た程度で取り乱す神経は、とうの昔に忘れてしまっている。

「何やら格闘技のようなものを使っているようでして、研究員に近
づいたと思つたら……」

次の瞬間には、血の海が広がっていたと言う。まるで要領を得な
い回答に、初老に差し掛かって余りある所長は、顔を高潮させて声
を張り上げた。

「だとしても、これは異常だ！」

すぐさまに携帯端末を取り出し、苛立ち紛れにパネルを叩いて呼
び出しを掛ける。

「まさか、警備員アシチスキルに連絡を！？」

もしや所長がこの研究所へ警備員を呼ぶ気かと思い、怯えるよう
な声を出して所員が質す。

「馬鹿者！ そんなことが出来るか！」

そんな妄想を一喝し、通話を終えた携帯端末をポケットの中に投
げ入れた。

「研究所の部隊を総動員した。緘口令を敷き、0603号の居る範
囲を封鎖しろ。何としても内々に事を済ませるんだ」

ガタガタと物々しい音を立てて、真つ黒な塊がぞろぞろとキコを
取り囲む。三方に伸びるT字路の付け根で、キコは数え十五人の男
たちと相對していた。

正面に五人。左右に五人ずつ。プレートを仕込んだいかつい防護
スーツに、コンパクトに切り詰め、室内での操作性を向上させた短
距離制圧《CQB》仕様のオモチャの兵隊。トイ・ソルジャー

特殊部隊顔負けの武装である。勿論そんなことは、キコの関知す

るところではない。彼女にとっては、ただただ練習する機会が増えてよかった、というくらいの認識だった。

「その君、大人しく投降しなさい」

強力なゴムスタン弾を十二分に装填してある機関銃を計十五丁突きつけて、ようやく一人の男が話しかけてきた。

投降するというのが、一体何を意味するのか分からないキコは、とりあえず声の主に向かって歩き出した。ふんわりとして揺らぎない、歩法『無足』である。

その動きを、観念して投降するものだ判断した男は、キコがついと出した右手を思わず握り返してしまった。

ゆらりと体を傾け、キコが身を相手の懐に入れる。

右手を下げながら引き、相手の体をさらに近づけ、思い切り肩口を胸郭に叩きつける。天羽根流では珍しい肩による当身、『壹戦甲』いっせんこうである。

「げべっ！」

男が後ろに控えていた仲間を押し倒し、派手に咯血する。食道が傷付いたと言うことは、その前面に展開する肺腑は、言わずもがなである。

すかさずキコは捻った体を一気に伸ばし、左足を上げて跳躍する。吹き飛ばされた男たちは、追い討ちを察して咄嗟に身を庇い、あるいは銃口を突きつける。

飛び蹴りかと思われた跳躍が一転、すくと気が抜けるほど勢いを無くして落ちる。さらに左足を這うように低空へ伸び、横で片膝をついていた隊員の脇腹へとめり込んだ。防護服の隙間である関節、脇腹につま先を捻じ込む。キコの白くて可愛らしい素足が、足首の辺りまで沈み込んでいた。

脇の下に通る太い神経をこれでもかと刺激され、さらに横から肺腑を圧迫され、そして脇の動脈が筋肉ごと断裁され、隊員は瞬時に異所性興奮と失血性のショックで心停止に陥った。

上から下への目まぐるしい転換を、天羽根流では『錨座』^{いかりざ}と言つ。そして放たれた蹴りは、天羽根流腿術『綿刈』^{わたかり}である。

二人の隊員が戦闘不能になつた前方のチームは、ようやくゴムスタン弾の掃射を開始した。三メートルと開かない間に、銃口を突きつける。その空間を満たすには十全過ぎる数であり、必要以上の制圧力である。

銃弾は確かに強く、堅く、何より速い。一度狙いを付けられ、引き金を引かれれば、如何なキコでも避けることは叶わない。

だが、その重い物体を両腕で抱え、目線の高さまで持つてきて照星を重ね、指を絞る動作は、決して銃弾ほど速くはない。

ばら撒かれるゴムスタン弾を潜り、足元に滑り込み、そこから目が覚めるほどの跳躍。さらに首への足刀を飛び上がり様、中空、降り来る最中に行なう。『錨座』とは対になる、下から上への体位の入れ替え、『山形』^{やまなり}である。

的確に延髄を蹴撃され、首から下への信号が完全に阻害された隊員たちは、やはりなす術も無く蹲る。その後は、滞つた血流が完全に停止するのを待つばかりであつた。

その僅かな間に上げた叫び声に銃声の断絶も重なり、左右に展開していたチームが押っ取り刀で殺到する。

けたたましい靴音と共に、男達の敵意が反響する。押し潰し、踏みにじり、噛み砕く意思の波。こんなチャチなゴム鞣よりも熱く体を貫く精神の棘を、キコの敏感な感性はひしひしと受け取る。

自然と、キコは構えていた。

背筋をピンと伸ばし、右足を後ろにした半身。左手の高さは鳩尾の辺り、それでいて前に出し、右手は心臓に置く。正中線を守る両手を前に出して懐を深く取り、顔の前に手を置かず、視界を広く取つた余裕のある構え。

天羽根流『天日てんびの型』。基本の構えの一つである。キコと廷兼郎の父、字緒可解野かげやが好んだ構えでもあった。

父の天羽根流も、兄の天羽根流も、キコは生まれたときからずっと観察してきた。その純粋な眼差しは、余すところ無く天羽根流を彼女の中に取り込んでくれた。

だがキコは見ていただけである。見ているだけで一度も練習していないことを自身の体に応用して顕現させるといふのは、恐るべき才能と言うべきか、あるいはそれこそ能力者だと言うべきか。

所狭しと並べられた銃口を前に、キコはあくまでゆったりと、左手を下段に走らせた。

非致死性のゴムスタン弾とはいえ、十挺のカービン銃で集中して命中させれば、十分に人間を殺傷する能力を持つ。ましてや年端もいかぬ女子を制圧するには、幾ら能力者が相手と言えども、過剰防衛の誇りを免れない。

それでも命令ならば仕方ない。それになぜかは分からないが、前方に展開していたチームが既に壊滅させられている。その時点で、隊員たちの行動は完全に規定されていた。

弾力を持つゴムが殺到し、強かに肉を打つ。通路全体にばら撒かれたそれに、逃げ場など無い。

しかし残念なことに、それはただの一発たりともキコに届いてはいなかった。

何故ならキコの前に、息絶えた仲間が立ちはだかっていたからだ。「何ッ!？」

驚愕に顔を歪ませつつも制圧射撃を緩めなかったのは、さすがは研究所の警備隊として訓練してきた人間たちである。

その見事な対応に思わず心を揮わせて、キコは彼等に向かって走

り寄る。そして既に胸郭を破壊され、死んでいる仲間が猛然と突進してくる。

人間というのは、その生死を問わなければ、非常に優れた防護壁と言える。柔らかく丈夫な肉の塊は、銃弾や爆破の衝撃さえ吸収してしまう。肉体の後ろにいるものには、それらの攻撃を届かせない。死に体とはいえ、それはキコにとって銃弾を防ぐのに十分な役割を果たしていた。

「くそっ」

ゴムスタン弾を無力化されたことを瞬時に悟り、隊員の一人が銃身の下に備え付けられたグレネードランチャーに手を掛け、装填してあるスタン・グレネードを発射した。

スタン・グレネードは、起爆と同時に閃光と爆音をばら撒き、近くにいる人間を行動不能に陥らせる榴弾のことである。隊員たちが装備し、今正に放ったそれは、学園都市において研究開発された特殊なスタン・グレネードである。

これは発射されてから周囲を策敵し、相手にもっともダメージを与えるため、爆音と閃光にある程度の指向性を持たせるのだという。全方位に広がるはずのエネルギーを集約することで、さらに高い制圧能力を獲得している。

その代わり多少初速が遅くなったり、単価が高くなっているが、それを食らう人間には関わりの無いことである。

勿論キコはそんなことなど分らないし、興味も無い。ただ分っているのは、天羽根流における飛び道具への処し方一つである。

小さな円筒の横腹を、死体の後ろから伸ばした白い手が掴んでいた。

如何様にして人間が榴弾を捕らえたのか、見ていた者は皆無だった。

た。元よりそんな事態は全く想定していなかった上に、最初から手に持っていたように、榴弾は大人しくキコの手の中に納まってしまっていた。

策敵し、指向性爆破のために形状を変化させる数分の一秒。発射された軌道をなぞるように、榴弾が隊員たちに向かって投げ込まれる。

天羽根流投擲術の初步にして奥義『返し矢』である。自分に向かって放たれた飛び道具を捕獲し、同じ軌道で相手に投げ返す。ほぼ一挙動にて防御と攻撃を兼ねる妙技である。

その驚きで防御体勢を取ることも出来ず、収束した閃光と爆音が隊員たちに叩きつけられた。

それは爆音というより、衝撃だった。ヘルメットや防護プレートを突きぬけ、耳どころか体中が激しく揺さぶられる。そして閃光は、目を背ける程度では全く問題にならない力強さで、彼らの脳髓を真っ白に焼き尽くす。

そんな光に埋め尽くされ、音さえも届かない世界では、突然襲い来る致命的な激痛だけが、自分の存在を確かなものにしてくれる。

しかしそれを被むるということは、自分の存在が霧散するということに他ならなかった。

屈強な警備隊を十五人、一人も逃すことなく、僅かな瑕疵も負うことなく、キコは殺傷せしめた。

スタン・グレネードを握った右手が僅かに爛れたが、キコが意識を集中すると、その赤みが見る間に引いていき、下から肌色の艶が浮かび上がる。

肉体変化能力の応用で、体内の治癒能力を右掌に集中させ、肉体再生と見紛う速度で火傷を治療する。

完全に能力を支配化に置いている。その副産物か、自分の肉体に隅々にまで、自分の意識が行き渡っていることが確信となってキコ

には感じられる。

「にいに、私、強いよ。強くなったよ」

今正に強くなつていく。より自分が優れていく感覚を、キコは存分に味わっていた。肉を打つ重み、痛みに呻く声、流れる血の一滴一滴が、キコを砥いでゆく。鋭く堅く、強く。

魔鬼相見：一

学園都市治安維持局長として、あるいは学園都市特殊派遣研究員として、その他諸々の役職に追われ、外樹は目まぐるしい日々を送っていた。

そんな仕事の大波がしばし鳴りを潜めたが、僅かな休息でも執務室にて過ごさなければいけないほど、それは慎ましいものでしかなかった。

「そう言えば、廷兼朗の妹さんは、どうなったんだい？」

「え？ 外樹さん、知らないんですか？ 自分で招待したくせに」
秘書のように付き添っている網丘は、今正に今後の外樹の予定を調整している最中だった。

「忙しくて、それどころではなかったんだ。君が把握してくれているものとはかり思っていたぞ」

「人任せはよくないですね」

「それは君だろうに……」

有能なことは認めるが、この高慢以外の何者でもない態度だけは、外樹も頭を痛めてしまう網丘の欠点だった。

「しかし、だとすると少し心配だな」

「それはどうでしょうか。字緒の家に回復経過が定期的に送られているようです」

「しかし、私達が妹さんの詳しい事情を把握していないと言うのは、廷兼朗に申し訳が立たん」

「調べようと思えば、いつでも把握できることでしょう。外樹さんとして、すべき仕事はこなしてもらえねば困ります。『対抗手段』計画の準備だつて滞つてるのに」

「分かつているさ。そんなことくらい」

そんなとき、執務室のプライベート回線が鳴り響く。僅かとはい

えこの休息の時間に割り込むのは、よほどのイレギュラーか、外樹を上回る権限からの新たな下知か。

「私だ」

「やつほー、外樹。元気にや？」

「土御門か。どうした？」

「いやあ、別に大した用事じゃないんだが」

「じゃあ切るぞ」

「ちよい待ち！ 相変わらず他人の冗談には厳しい奴だにやー。まあいい。『ジョーカー』に対する要請だ」

「ということは、統治理事会の？」

『ジョーカー』。それは外樹が抱える数多くの役職の一つに過ぎない。学園都市統括理事会の直属部隊。極めて高い隠密性と殲滅力を有する、学園都市でも屈指の、そして異例の単独編成部隊である。「理事長肝入りの研究所で能力者が暴走したらしい。警備員が来る前に、内々に処理するようにとのことだ」

「簡単に言ってくれる。私は便利屋ではないぞ」

「俺に言われても困るにやー。じゃあそいうことだから頼んだじえ。情報を送ったら十分で現場に向かつてくれよな」

「相変わらず杜撰な頼み方だ。そろそろ滅入るぞ」

理事長権限は、今抱えている仕事よりも上位に位置している。逆らうという選択肢は、浅薄というものだろう。

果たして土御門から送られた情報は、研究所の位置情報だけだった。向かうのに必要な情報しか与えないつもりらしい。若しくは、それ以上の情報が把握できていないのかもしれない。

「あの研究所か。あまり良い噂を聞かないな」

「噂だなんて、思っていないでしょう」

「当然だ」

理事会肝入りの研究施設。それはつまり、学園都市の存在意義を色濃く表しているとも言える。

そこに反吐を催さないでいられるのは、魔女の釜を混ぜる当人達ばかりだろう。傍から見れば、あれほど醜悪極まる儀式はない。

「網丘、諸事を頼む」

「はい。ご武運を」

力強く頷き、外樹は執務室の窓から飛び降りた。

地上五階からの風を受け、外樹のシャツとコートがはためく。その背中から、何かが爆ぜて漏れ出る。

それは翼だった。縦に十メートル、横は二十メートルの、巨大な両翼が外樹の体から広がっていく。

外樹の体が、羽ばたきによって引き抜かれる。地上を破壊しかねないソニックウェーブを魔術で常に相殺しつつ、十分もかけずに学園都市を横断する。

夜闇に紛れ、一人の魔術師が飛ぶ。自分の意思とは関係無しに、彼が会いたがっていた探し人の許へと急いで行く。

口の字型に建てられた研究所の真ん中に、堂々と外樹は降り立った。いちいち建物の中を確認しなくても、彼にはここで何が起こったのか分かっていた。

目の前に広がる血の群れ。それを吐き出す塊たち。そして悠然と立つ一人の少女が、何よりの答えだった。

「君が、やったのか」

我ながら聞くまでも無いことだとは思えども、外樹はとりあえず確認する。

暴走したとはいえ、一応は能力者。学園都市の大事な財産である。無闇に失わせるなどというのが統治理事会の意向である以上、通す建前というものはどうしても存在する。

「何を？」

そんな建前に、少女は義理堅く反応してくれた。多分に間の抜けた対応だが、応えるのならば情状酌量の余地はあるかもしれない。

「この惨状のことだ」

「さんじょう？ ごめんなさい。難しい言葉は、まだ分らないの」

「とにかく、もうやめる。大人しく投降したほうがいいぞ」

「とうこう？ この人達も、そんなこと言ってたような……」

そう言っただけ、少女は一人で悩む様子を見せた。『とうこう』という言葉の意味を、必死で推測しようとしていた。

しかし、敵を前にしてそのような言動は、舐めきっていると取られても仕方の無いものだろう。

「断っておくが、私をここの警備隊と同じだとは思わないでくれ」
惨状という言葉が分らない少女だったが、その男の言い回しが、自身の強さに裏打ちされたものだということは、すぐに感づいた。

「どう違うの？ 見せて、ねえ」

最後の「ねえ」という発音が、外樹の耳元で発せられた。

「むっ！？」

真横から振るわれる手刀と、ピアノ線が交差する。互いに僅か服を掠めるのみに留まり、弾けるように距離を取った。

外樹の隙を見事に突いた少女も少女なら、『喉断ち』を回避しながらピアノ線を射出してみせる外樹も、尋常とは言い難い。

「ハッ！」

放たれたピアノ線が中空に漂い、そのまま食指を伸ばしてきた。

ピアノ線がうねり、生き物のような挙動で少女に絡みつく。魔術によってその軌道を操り、自在に体を縛り上げる。

「さあ、もう抵抗するな。動けば膾に切れてしまうぞ」

外樹は、服は切れども肉を切らぬ寸前でピアノ線の操作を止めていた。ただ変幻にくねらせるのみでなく、極細の糸への力の入れ様さえ精妙に至っている。

「ナマズ？ ナマズをこの糸で切るの？ おかしな人ね」

上半身を頑強なピアノ線で拘束されつつ、少女はにこやかに笑った。もそもそと体を揺らし、僅かに腕を抜く隙間を作っているらしい。

「こんな糸を使わなくても、あんなの、手で切れるんじゃないの？」
窮屈そうに腰の横から振り上げた腕を、まるで行司のように振り下ろし、それを合図にして、ピアノ線が音を立てて断ち切られた。

言ったとおり、少女は手で、それを切ってみせた。

天羽根流刀剣術『狭隘』きょうあい。狭い場所での抜刀を目的とした剣術である。腰に差した刀を真上に引き抜き、そこから振り下ろす。両側を壁で挟まれたような状況で、素早く抜刀するための術理だ。

自身の攻撃手段を喝破され、少なからず外樹が動揺する。

如何に抜刀の技術とはいえ、少女はそれを素手に応用したに過ぎない。刀剣の技を素手で行ったとしても、どれほど速く強く人間の手を振り下ろそうとも、炭素を焼結させて作つてあるピアノ線は、そう簡単に断ち切れるものではない。

「それが、君の能力か」

当然その不可思議な現象は、人の枠を超えた理に因る力、超能力だと推察できる。

「そうみたい。肉体変化能力者なんだって」

「ほう。それは、珍しい」

話しかけながら、外樹は少女との間合いを計っている。既にコートの裏には新たなピアノ線が装填されている。

「素手にてピアノ線を切る。体を硬化させるのか」

外樹の推測に、少女は大げさに首を振って否定した。

「さあ？ よく知らないわ。ただピアノ線を切るために、体を『変えた』の」

「……なるほど、『最適化』ということか」

「そうそう、それ。研究所の人が言ってた。それが私の能力だって自分で振っておきながら、いまいち要領を得ない回答だったが、外樹は気にしていない。この会話は、あくまで相手の隙を見出すために行われる牽制なのだ。」

ピアノ線の間合いには十分。あとはタイミングのみ。

「まだ私の能力は、名前が無いのよね。お兄さん、いえ、お姉さんかしら。どちらか分からないけれど、よかったら名前を考えて」少女の問いかけも空しく、音も立てずに五条の筋が撃ち出される。弾丸のように、それでいて弾丸よりも細く鋭い白線が彼女に向けて殺到する。

その線に、同じくらいの白さを持った何かが絡みついた。

「さつきから、こればかり。よほど好きなのね」

高速で射出されたピアノ線を右手で握り締め、少女は静かに言った。

相手との間合いを計っていたのは、外樹ばかりではなかった。外樹が攻撃するタイミングを探していたように、少女は防御するタイミングを探していた。

ピアノ線を持ったまま、少女の体が沈み込む。傾けた容器から水が落ちる流麗さで、十メートルの距離を縮め始めた。

まだ子供と形容していい人間が行う身体操作とは思えない、見事な『無足』だった。

手強い。外樹は率直にそう感じた。まだ子供だとか、そんなことは何も関係ない。今、相對しているこの脅威だけが真実だ。

ピアノ線による攻撃だけでは、とても抑えられない。だからといって魔術か、あるいはあの力を出すべき相手なのか。

僅かな逡巡の間に、少女は容赦なく間合いを埋める。これ以上近づかれてはピアノ線射出のアドバンテージが無くなり、至近距離での戦闘になる。

「シッ！」

余った左腕からまたもピアノ線を撃ち出す。これを防がれたとしても両腕が塞がる。接近戦を優位に進められる。

既に計三回、同じ技を繰り返す。その意味を真に捉えていたのは、果たしてどちらだったか。

白線に重なる白線。外樹の放つ直線のそれに対して、少女が描き出したのは緩やかな曲線だった。

右手で握り締めていたそれで、今度は外樹が放ったピアノ線を巻き取る。両腕で放ったピアノ線が絡み合い、用を為さなくなる。

もはや使い途のないピアノ線を手放した少女は、ここへきて更に加速し、外樹の腰目掛けて一直線に迫る。

対し、外樹もまたピアノ線を根本で裁断し、その操作を既に放棄していた。

(早い、が、正直過ぎる！)

目付け、体捌き、勘。どれを取っても第一流に属するが、まだ虚実を織り交ぜる強さは持ち合わせていない。その証拠に、少女の目は外樹の腰に釘付けた。他の部分には目もくれていない。

すかさず左の膝を突き上げる。少女の顎へ斜め下から、堅い膝頭が掬い上げる。

意識の埒外からの膝蹴りを、少女は体位を入れ替えながら、腕刀で横から叩いた。腕で受けつつ、手首を膝の裏に差し込む。そして踏み込んだ左足だけは、相手の足の前に残しておく。

天羽根流投撃『裏膝蓋』うらしつがい。相手の蹴りを受け、横に体を逃がしながら足を巻き込むように刈る。

少女は攻撃の手を緩めず、さらに畳み掛ける。

受けた膝を抱え、相手に背中を合わせるように回転して後頭部に肘を打ち下ろす。それで相手が死ねば良し。そうでなければ余った

左足で首を挟み、相手に体重を浴びせかけて押さえ込む。

倒れこんだ時には、えび反りの形で相手は固められている。投げと当身を複合した逆捕『万力牢』^{まんりきろう}である。

膝蹴りが外される。たったそれだけの動作が、これだけ複雑な関節技へと発展する。

強かではないなど、とんだ誤解だった。虚実を織り交ぜることをせずとも、相手の動きに合わせる巧みさを持ち合わせていた。

極めたら、折る。そこに間断も逡巡も必要ない。

少女のお尻がぴったりと外樹の首の後ろに付く。つまり、そこに少女の力点が集約される。

弓形に沿っていた体が、徐々に谷折りへと近づいてゆく。

外樹の左足は、とつくに顔の横に添えられている。しかし少女はまだ止まらず、どんどん外樹の体に向かって沈み込んでくる。

十四になるかならないかほどの少女に、このまま押しつぶされてしまう。

呻き声を上げようにも、脹脛がびたりと顔面に張り付き、呼吸を阻害している。息をするため、あるいは足から首を抜くために僅かでも動かせば、即座に捻転して拉げてしまうだろう。

まさに肉体による牢獄だ。一度その中に閉じ込められれば、死ぬまで開放されることは無い。

首が折れぬように耐えていても窒息か、もしくは背骨から折られるかの違いでしかない。

「あ！　そういえば忘れてた」

まるで出掛ける際に鍵でも忘れたような気軽さで、少女は余った左手で外樹の髪の毛を掴んだ。

引っ張られる毛穴から染み込む冷気を、外樹は確かに感じ取っていた。

「本当は髪の毛を引つ張って、首を折るんだっただわ。すっかり忘れてた。ごめんなさいね」

てへっ、と少しだけ舌を出してから、少女は外樹の長い銀髪を筆れるほどに掴みあげた。当然、引つ張られた首は筋肉による防御が行えない、非常に不安定な状態に陥る。

「アアアアアアッ!!!」

首がこれまで味わったことの無い角度で曲がる前に、外樹は吼えた。その声に呼応して、彼の中に宿る異形が外へ向けて爆ぜる。

「ッ!!!」

金色に瞬く軟泥が外樹の体から広がり、少女を飲み込もうとする。その動きに先んじて外樹を開放し、目映い濁流を避けるようにして素早く距離を取った。

少女が離れてみれば、外樹の周囲に、金に光るタールが纏わり付いていた。

人の手や目玉だらけの犬などがどろどろと蕩けながら、生物のように活き活きと動き回る様は、尋常な現象ではない。

常識を持った人間にとっては異常極まる光景だが、少女の並外れた世間知らずの感覚は、それを異常として処理せず、ありのまま受け入れることにした。

「何それ？　すごい。かつこいい。最初からそれを出してくれたら良かったのに」

「そんなのは、私の勝手だろう」

「ちよつと言ってみただけ。そんなにむきにならないで」

軽く受け流し、少女が構える。左手を水月、右手を喉の前に置く。

天羽根流、天日てんびの型である。

「殺す気はないが、いちいち構いはしないぞ。四肢を失くす覚悟はあるな」

「素敵な言葉をありがとう。殺す気のない攻めって、楽しみ」

声音は楽しそうに、動きは慎重に、少しずつ間合いを詰めていく。

「誰が近づいて良いと言ったかッ!」

外樹の一喝で、金の泥が少女との間合いを隔絶する。

「これだけ礼を失したのだ。もはや拝顔奉ることも叶わぬと知れ」

魔王たる本性が、徐々に顕わになってゆく。少女の『武』が、外樹の『魔』を今宵の月光の元に曝け出した。

まさかこのような小娘を取って食らうほど、外樹は恥知らずではない。少しばかり間、身じろぎするのも億劫になるほど体を痛めるだけだ。

能力者とはいえ、このような使い手がいること、そしてその相手と戦えることに、魔王の食指がようやく動く。

魔鬼相見：二

泥が形を変え、剣や犬、人の手を象っていく。単なる液状よりも明確な敵意を漲らせ、少女の小さな体を付け狙う。

明らかな敵意害意を放ちつつも、それは明らかに殺意ではない。むしろ優しささえ感じることが出来る。

自分をなるべく傷つけず、早々に勝負を終らせようという思いやりが、金の泥からひしひしと伝わる。

それはあの、女のような男の心なのだろう。不用意に傷つけるのを躊躇っていたが、今は多少ケガを負わせても、大人しくさせるのが最善だと判断したようだ。それもこれも、全て少女一人のことを考えてのことである。

見える。聞こえる。感じ取れる。優しく強く雄雄しく、そして正しい。少女の兄と似た強さだ。だからこそ、拳動の一つ一つからこれだけの情報を取り入れられる。

これまで味わったことの無い異質な攻撃の中で、少女は一切の不安や恐怖を感じていなかった。

勿論、その攻撃は常軌を逸する。コンクリートを容易に切り裂き、牛か馬ほどの大きさを持つ犬が俊敏に飛び交い、無数の手が四方八方から迫り来る。

だが、それら全てに、外樹の優しさが込められていた。厳しくも優しい攻めが、少女にとって心地よかった。

自分の事を考え、労わり、気遣って放たれる攻撃の、何と可愛らしいことか。その一打一撃を放たれるたびに、少女は自分自身の何かが高まってゆくのを感じていた。

研究所の中庭。天頂に達した月明かりが、金色のうねりと一人の少女を浮かび上がらせる。

無数の人の手。眼球を体中に纏う巨犬。鋭い切っ先を持つ槍や剣。

それらが蠢く只中を、薄着の少女が舞い踊る。

血の一滴も浴びていない真っ白な手術衣をはためかせ、月よりも光を放つ軍勢をあしらい、いなす。

その姿は正に羽。地より吹き上がる風に乗り、天へ至らんとする一枚の羽。

純粹にして純正の天羽根流を、少女はその体に顕した。

天羽根流奥伝が一つ、歩法『羽』^は。拳動を殺し、体重を殺し、勢いを殺し、己を一枚の羽の如くにして軽やかに戦場を駆け巡る。歩法とは言うものの、それは体全体を使った、総合的な身体操作の賜物である。

一直線に伸び来る槍を脇に通し、下から切り上げる剣の、その刀身に乗ったかのように軽々と跳躍する。無防備な空中にいる獲物へ、犬と腕が殺到する。

不定形の獣どもの敵意に、少女は軽く手を差し伸べる。子をあやす優しき手に、犬はその大きな口を開けて差し迫る。

そして少女の姿が、はらりと掻き消える。

歩法『羽』は、天羽根の文字の一つを掲げる絶招である。究極の弛緩から生まれる脱力によって、羽根のような軽やかさで身体を操作する、歩法『無足』を忠実に発展させた一つの到達点でもある。

だとしても、今少女が運用している技がその『羽』であるとは言い難い。何故なら天羽根流は、少女が今相對している化け物との戦闘を想定した武術ではない。このような化け物と戦う場合、天羽根流は必ずしも最善のアプローチではない。

それを十分に有効せしめているのは、偏に少女の能力。己の体をその状況において最適な形にミクロ、あるいはマイクロ単位で組み換える、^{メタモルフォーゼ}肉体変化能力。

「言つなれば、『^{オラティマスタイ}超最適化』か」

金の泥を従えている外樹が、苦々しく漏らす。既にその能力の程

は、彼の慧眼を以って看破されていた。

「あら？　それが名前かしら。どういう意味なの？」

「それは、後でたっぷり教えてやる。だから今は、大人しくしろ！」

外樹の手掌の指示を受け、さらに激しく不定形の獣達が踊り狂う。仰々しく風を裂き、地面を抉り上げて迫る金の怒涛に、小さな体が飲み込まれる。

そしてその後には、決まって獣達を掻き分け、少女が外樹に近づいてくる。

魔術ではない。少女に魔力反応は全く見られない。超能力を前提としつつも、それは紛れも無く少女の五体一つを条件として行われた現象である。

絶招歩法『羽』の運用には、究極の脱力と共に、絶対の眼付けが必要となる。人間ほど重い物体を、見た目だけでも羽のように軽やかに動かすには、相手の攻撃を絶妙に捉える目、すなわち訓練によって速められた『心の速度』と、幾千幾万の積み重ねられた回避行動の集積に支えられているからこそ、奥伝であり得る。

その膨大な集積へ一飛びに追い付き、むしろ追い越してみせる超能力は、驚くべき次元へと絶招を誘ってしまった。

当然ながら少女には、武術の経験と言うものが殆ど無い。研究所を制圧するまでの僅かな時間が、経験と言えば経験だが、彼女はあくまで、兄や父が見せてくれた天羽根流を自分なりになぞったに過ぎない。

修練無く、経験無く、『心の速度』も早まっていない少女が目をつけているのは、相手ではない。

相手と少女の間に確かに存在する。それは空気。そして風である。これだけの大質量が高速で移動する際、どうしても発生させてしまう大気の流動。

少女は羽となり、風を受けて漂っているに過ぎない。捕らえんと

する剛力が生み出す烈き風に破かれず、あくまで自然に吹き寄る風に靡かれ、頼りない舞踊を繰り返すばかりである。

その舞踊が至るのは、天上であり、武の正道。

ある意味で最も天羽根流らしい技となった絶招を以って、少女は外樹の許へ靡き至る。

まさか自分が守勢に回るなど、外樹は夢想だにしていなかった。

魔術でも超能力でもない、彼元来の力を持ってしても、その少女の歩みは止まる所を知らない。

金の軍勢で彼女を生きて捕えるのは、至難を極める。

(ならば、これでどうだ！)

外樹は袖の下に忍ばせていたピアノ線を再び放ち、巧みに操作して瞬時に幾何学模様を描き出す。それは明らかに、恣意を持つ魔術的配置だった。

少女を取り囲む形で四つの点が並ぶ。四は即ち四方。東西南北を表し、北に玄武。南に朱雀。東に青龍。西に白虎。それぞれを象つた文様が浮かび上がらせる。

そのピアノ線目掛け、外樹が自らの掌を強かに押し当てた。陣形にいちいち込められていた魔術的意味に、外樹の力が満ち満ちてゆく。

方角が自己の位置を明確にし、自己の有り様を規定する。方角の魔術とは突き詰めれば、定め、示し、導くことに他ならない。

己の世界と、他の世界を規定し得るのに、細やかな印象も、人に似た薬草も、仰々しい詠唱もいらぬ。ただ一線、己と他の間に引くことが出来れば、それで事は足りる。魔術的思惟を加えるのは、その後からでいい。

「^{たが}違い」

ピアノ線が燐光を帯びた瞬間、外樹の言葉に従い、模様の角から中心へと鎖が伸び来る。

それを受けてか、少女がその場でぴたりと動きを止めた。無機物であるはずの鎖が自ずから動き、自分に迫ると言う現象を前にして、戦く素振りすら見せはしない。

(まさか、見抜かれたか!?)

だとしても、既に彼女は魔術の有効範囲内にいる。多少に勘が良く、攻撃の気配を察知しても、単なる人間に魔なる技を見抜けるはずはない。

赤き鎖、青き鎖、黒き鎖、白き鎖。各々が意志持つ蛇の如く、複雑に絡み合つて模様の中心にいた少女を縛り上げる。

そうして間もなく、鎖に刻まれた魔力が固着し、敵を捕縛した状態を保存することだろう。その後は如何なる抵抗も意味を成さない。仕事は終わりだとばかりに息をついた外樹は、そこで異様な光景を目撃した。何も無い場所から鎖を生み出し、人を縛り上げておきながら、外樹には少女が行なっている行動の意味がまるで分からなかった。

何を思つたのか、まるで返事でもするかのように、少女は元気良く左の手を振り上げた。その手にぴたりと吸い付くように、左の足先が高々と上がる。

鎖が固着する寸前、少女はその場で四股を踏むため、勢い良く手と足を振り下ろした。

彼女の足元にある、陣形の中心に向かつて。

直後、外樹の体を雷鳴が貫いた。

天羽根流の震脚『遠雷』。高く振り上げた手と共に震脚し、正に遠雷の如き音声を響かせる。本来は打撃力を高めるための踏み込みを、体に覚えさせるための動作である。

「ぐう、あがつ」

地面に手を付いていた外樹が、そのまま崩れ落ちた。

体の中を危険な速度で進む魔力を、全力で落ち着かせることに精一杯で、堪らず呻いてしまう。

少女が震脚を行った瞬間。あの雷鳴のような踏み込みと同時に、彼女を束縛する鎖が爆散していた。数ミリ秒のうちに青、赤、白、黒の順で連鎖的に弾け、構成していた魔力を外樹の体内に突き返した。

そしてピアノ線に流されていた魔力が、外樹の体に逆流してきた。体内を走る魔力と言う魔力が乱される。魔術に失敗し、自分の魔力の跳ね返りを被るなど、初心者もいいところだ。

しかし、外樹が魔術の初心者かと言えば、それは早計というものだろう。むしろ逆流した魔力によって体が四散しないよう、細心の操作で抑え切った技術は、同じ魔術を嗜む者にしてみれば、冠絶していると評すべきものだった。

今しがた行なった魔術に、何ら過失は無かった。イメージ通りに配置を済ませ、イメージしたとおり、強靱な鎖によって少女の体は囚われていたはずだった。

それがただの一踏みによって解呪デイスベルされてしまうというのは、一体どういうことなのか。

外樹の動揺を他所に、少女の嗅覚は隙とも呼べぬ僅かな逡巡の間を、貪欲に捉える。

空気が帯電しているような静けさの中、するりと音も無く、少女の拳が外樹の腹にめり込んでいた。突かれてから、突かれたのだと気が付く。それは突くべくして突く、まさに因果の一撃。

拳を突き出すのに最適な構造となった少女が、最適な拳を、最適な速度で、最適な場所に放つ。

背中から破けて爆ぜる幻覚が見えるほど、少女の拳は強かに外樹を打ち貫いた。

納得いかない、理屈に合わない。道理が噛み合わない。

人を越え、超常を体現する身となった外樹でさえ混乱をきたす力が、その小さな少女には宿っていた。

ただ踏まれたからといって立ち消えるほど、外樹の魔術は柔ではない。それが消えた。魔の理を以ってしても容易には認めがたい現象である。

魔術ではない。ならば超能力か？ これもあの少女の言う『最適化』の結果なのか？ 魔術を押し潰すほどの力は、単なる超能力だけに由来するのか？

震脚による解呪現象。不可解ながらも、推測は僅かながら立てられる。

彼女を囲んでいたのが四神相応ならば、彼女が踏みつけたのは、正にその中心。

水の青龍、火の朱雀、木の白虎、金の玄武。それら四つの方角へ、さらに加えられるべき第五の要素が存在する。

それは土を司る瑞獣、麒麟である。

東西南北中央の五つに鎮座する瑞獣は、『五獣』とも呼ばれる。

あの踏み込みが新たなる五つ目、土の要素を生み出したとしたら、あの陣形は四神相応ではなく、五行説に則ってしまう。

生み出された麒麟が土ならば、青龍は水。五行説において土と水の関係は土剋水。土は水を濁し、あるいは積み上げて塞き止める。

その後は簡単である。水剋火、火剋金、金剋木となり、最後に木剋土で全ての方角に込められた魔術的思惟は瓦解する。

四つの要素で規定して縛り上げるはずが、五つの要素で互いを打ち消し合い、霧散させてしまうことになる。

否、それでもここまで綺麗に跡形もなく消し去ることは難しいだろう。

そもそも踏むと言う動作。例えば相撲の四股を踏む動作は、元は醜しじを踏むと読み、入場や取り組み開始の前に四股を踏むのは、地中に住まう悪しき諸々を踏み鎮めるといふ、立派な呪的儀式の名残である。

正に外樹の魔力は、地から昇る悪しき力として、遠雷の音声と共に掻き消されてしまったのだろう。

(まさか、知っていたのか!?)

投降の意味さえ知らないくせに、方違えや四神相応に『五獣』、四股の意味など知るはずが無い。

ただ単に彼女は、陣の真ん中を踏んだだけに過ぎない。しかしそんな行動でも、時と場所、そしてタイミングを逸すること無ければ、斯様な現象を世界に現す。

魔術は、正確に魔術師一人を由来とするものは、厳密には存在しない。

それは森羅万象、大気、水は言うに及ばず、天地を巡る膨大な気の流れの影響を受け、ときに利用し、ときに邪魔され、魔術師は超常の理を顕現せしめる。

それら魔術に影響を与える存在に対して影響を与えれば、間接的ながらも魔術に干渉することは可能である。

例えば中国の道教で言うところの龍脈、あるいはポリネシア・メラネシア圏に伝わるマナ・オドの概念。科学の最先端に行く学園都市も、『魔王』の名を冠する魔術師も、今この地球に満ちるそれらの影響を確実に受けている。

正に地球の脈というべきその奔流に、然るべきタイミングで、然るべきベクトルを向かわせれば、あるいは物理的衝撃によって魔力の流れに干渉することは可能かもしれない。

特異点、とでも言うべきだろうか。その一点をあの手壇場で、即座に見出したというのか。

だがそれは、何の説明にもなつてはいない。そのような現象が何故、この少女に許されているのが分からなければ、何の意味もない。

「お前は、お前は一体何なんだ！」

これまで幾度も自分が浴びせられた言葉で、彼は問いかけずにはいられなかった。

「私は、字緒キコ。あなたは、何てお名前？」

すんとという、気の抜けた音が聞こえた。

この区切られた四角い空間だけ、世界から抜け落ちてしまったようだ。

『アザオ』という音を聞いた瞬間、外樹の体の中から、周囲という概念がころりと転び出て行ってしまった。

「君はまさか、字緒の、廷兼朗の……」

さらに怪訝な顔になり、無然とキコは答える。

「お兄ちゃんのことまで知ってるの？ あなた、何なの？」

外樹の体が震えだす。混乱、恐怖、後悔。それらが血に成り代わり、新たに体の中へと沁み込んでいく。

廷兼朗が言っていた知恵遅れの妹。学園都市の医者を紹介してくれと言われ、外樹が段取りを整えてやったのを覚えている。その後の詳細は、殊更気にも留めていなかった。よもやこのような研究所で、学籍も与えられず飼育殺されていたなどは。

そのツケが、今更になつて唐突に突き付けられる。治してやるだの、安心して任せろだのと嘯いた責任を、当人が図らずも取り立てに来てくれた。

寒々と凍えてひび割れていく心に反して、動悸が熱く早まってく。

魔術とは武術と同じか、若しくはそれ以上に、心の在り様にその運用を左右される。今の外樹の心理状態は、決して魔術を行なうに

適しているとは言いがたいものだ。

（何故だ！？ 何故、こんなことに！？）

自分でも、何をしているのか分からない。こんな年端もいかない少女に這い蹲らされることか。それとも自分が至らぬばかりに、廷兼郎の妹を学園都市の闇にとっぷりと漬けてしまったことか。

（私は、私は一体……）

魔王だなんだと粹がり、その威を振るえども、人として肝心なこととは、容赦なくその掌から零れ落ちてゆく。もはや己は人ではないと嘯いてみたところで、この自責の念が、廷兼郎への贖いの念が消えてくれることはない。

外樹から戦意が失せたことに戸惑いつつも、キコはしっかりと外樹の背後を取ってから近づいていた。

「どうしたの？ ぼんぼん痛いのか？」

勿論、単に腹痛を心配しての言葉ではない。動けない理由が腹痛なのかどうかを確認しただけである。頷こうと頷くまいと、隙を見せた瞬間、ほっそりとした指によって頂から切り抉られることを分かっている、外樹は動けなかった。

首を差し出す、などという殊勝さではない。何を差し出せばいいのか。何を以ってこの勝負の決着とすればいいのか。何も思い至らないから、跪いて佇むことしか出来ない。

深く、深く息を吸い込む音が、背後から伝わる。今までそんなものを聞かせていなかったのに、殊更聞こえよがしに響かせる。

戯れではない。しっかりと息を吸い、しっかりと息を吐き、そして、しっかりと後頭部に渾身の打撃を打ち込む。それが礼儀であることを、キコは父や兄からしっかりと学び取っていた。

「シッ」

真後ろに伸ばした右腕が円弧を描き、真上から振り下ろされる。

伸展した腕による神速の振り打ち。天羽根流当身の基本『喉断ち』。

研究所の中庭に、再び雷鳴が響き渡った。

字緒の鬼、天羽根の子：一

ゆっくりと泡が浮き上げるように、外樹は時間をたっぷりかけて目蓋をこじ開ける。そしてまた、陽を受けて眩しそうに閉じてみる。

「……ああ、くそ。まだ頭が、痛む」

「外樹さん。大丈夫なんですか？」

傍らにいた網丘の心配を他所に、外樹は起き上がってすぐに病院のベットから降りる。

「今は、今は何時だ！？ あれからどれだけ経った！？ あの子は、廷兼郎の妹はどこに行った！？」

「あれから丸一日くらいです。妹さんの行方は、あの研究所から先は掴めていません。どうやら、外に出たようです」

これには外樹も、ぎくりと顔を強張らせる。

学園都市はその外縁に巨大な壁を張り巡らせ、特殊な訓練を受けた警備兵を常に配置している。

これは外からの脅威を排除すると共に、学園都市から超能力者が許可無く脱走することを防ぐ狙いからである。

外出許可は然るべき手続きを取れば取得可能だが、無論のこと、キコがそのような許可を取っているとは、外樹には思えなかった。

だとすれば、キコは自力にて学園都市を出たことになる。あの壁と、迎電部隊スーパーシグナルの包囲網を抜けて。

外に出たとすれば、あるいは好都合か。外樹はむしろそのように考え直し、ベットから起き上がる。

網丘が用意していた着替えを差し出し、受け取った服を空中に舞い上げ、瞬時に着替えを完了する。

「行かねば、私が行かねば」

「ど、何処へ行く気ですか？」

網丘の言葉に、外樹はほうと息を吐いた。

そんなことも分からないのか。あの娘が向かうところなど、火を見るよりも明らかだろうに。

「和歌山の、根来だ。彼女が向かうのは、この世でそこ以外に無いッ！」

そうだ。そこ以外に彼女の場所はないと確信できる。しかし、何故そこに行くのかという理由が分からない。

あるいは、分かっているにしても頭に浮かべたくもないことなのか。

「廷兼郎……」

祈るような思いで、通信術式に呼びかける。底なしに暗んだ無音のそれを抱いて、外樹は駆け出していた。

何だか異様に大きな壁をぶち抜いて、そこにやってきた人達を屠り、丸一日を駆けて走ると、そこは既に自分の見慣れた風景だった。しかし、キコに疲労の様子は見て取れない。それもこれも全て、彼女の能力の賜物である。

人智を超えた超能力によって、本来の人体では有り得ないほど最適化され、正しい状態へと変化するキコは、高さ五メートル、厚さ三メートルの壁を一撃にて粉碎し、異常を感知して駆けつけた迎電部隊を、病院の警備隊同様に壊滅に近い状態にすると、キコは急いで和歌山へ、とりあえず南西のほうへ走っていった。

一日以上走り続けても、まだキコには十分な体力が残っていた。走行に最適化された体は、その速度はもちろん、体力の消費さえも最小限に抑えられ、一日中走り回ろうと問題ない。

全ては肉体変化能力『オプティマスタイ超最適化』が生み出した現象である。

「すっ、はあ……」

空気一つ取っても、ここは学園都市などとは違う。森の濃い大気

を全身に浴び、ようやくキコは故郷に帰ってきた心地になった。

根来の町から山へ入り、土仏峠を登る。思えばこの道を一人で歩いたことなど無かった。町に行くにも、常に兄か母に付き添われていた。

寂しいようできて、どこか満たされた感觸を覚える。最早その隣に兄は居ないが、寂しくはあってもつらくはない。

十分に、耐えられる。十分に、強くなった。だからこそ、私は帰ってきた。

「ただいまー」

返事がない。どうやら出かけているようだ。キコは勝手知ったる我が家上がりこむ。

きいきいと沈みながら鳴る廊下。褪せた畳の匂い。何もかもが昔のままだ。全て覚えている。目を瞑れば、在りし日の思い出を忠実に再現できる。

ただ違うのは、自分自身。キコだけが変わってしまった。

家の中を一先ず見てまわり、離れの道場に向かう。

染み付いた汗と血の香りは、努力の証だ。自分の父と兄も積み重ねてきた、天羽根流の歴史だ。

ここにはキコの血も汗も沁み込んでいないけれど、今の彼女の体には、脈々と天羽根流が息づいている。

かたりと、道場の戸が鳴った。首だけそちらへ向けてみると、そこには懐かしい人が立っていてくれた。

キコの父。字緒かげや可解野である。

「キコ!? 何だ、帰ってくるなら電話の一つもしなさい」

驚いた様子で可解野はキコに寄り、やさしく頭を撫でる。鍛えに鍛え、骨と血管が浮かび上がった筋肉質の手が、少し強めに上から押す。その力加減は絶妙で、されるたびに得も言われぬ恍惚を感じたものだが、それは間を置いた今でも変わらず、キコは嬉しそうに目を細めた。

「お父さん」

そう呼ばれただけで、可解野は目を丸くした。今まで『とつと』
としか言わなかった娘に、いきなり大人びた口調で『お父さん』と
呼ばれることは、可解野を十分に混乱させた。

しかしそれは、心地の悪い混乱ではない。

「治ってきているとは聞いていたが、こんなにもとは……」

そこから先は言葉にならず、キコの肩を抱きながら、可解野はぐ
つと涙に耐えていた。

そんな父の姿を、無垢な瞳で、キコがじつと見つめている。大き
な黒目は、胡乱な穴でしかなく、自分をかき抱く父の姿はどう映っ
ているのか、窺うことはできない。

「お父さん。私ね、いっぱい、いっぱい変わったよ」

そう言つて、キコは父の背中に手を回し、その懐深くまで顔を埋
めた。

「そうだな。変わったよ。お前は立派に変わったよ」

「それでね、私」

キコはつま先を立て、背を伸ばして父の耳元まで顔を上げた。そ
して屈んだ父の首に両手で抱きつき、耳元まで口を近づけた。

「天羽根流を、覚えたよ」

それは自分の父に対する言葉にしては、官能的に過ぎる調子だっ
た。

キコの言葉に痺れたように、可解野はその場で膝付き、勢い良く
後ろへ倒れこんだ。どうと床で背中を打ち、ばしゃりと重たい水音
を立てる。

そして可解野の頭が、こつんとキコの足先に当たる。

恍惚に歪んだ表情のまま、可解野は自分の娘を見上げていた。も
はや焦点さえ合わせられないはずの目玉が、ぴたりとキコを捉えて

いる。

キコが覚えた天羽根流の基本当身『喉断ち』が、過たず可解野の首を裁断せしめた。他ならぬキコの手、キコの意思によって。

見事に天羽根流の技を行使したキコは、一度深く息を吸い、それを胃の内容物ごと、思い切り吐き出した。

胃液が喉を焼き、強い酸味が口の中に充満する。それがさらに吐き気を誘い、吐いてはえずき、また吐くを繰り返す。

「嫌……、嫌。いやあああああつ！！」

もう胃液と涎以外出すものが無くなつたとき、代わりに腹から昇ってきたのは、この身に収まりきららない、潔癖な拒絶の意思だった。

父が倒れ、自分が立っている。それはおかしい。理屈に合わない。納得がいかない。信じられない。

生涯を天羽根流に捧げてきた父と、まだ数日しか天羽根流を扱っていない自分とがぶつかったことの結果に、キコの体は耐えられなかった。

あんなに強かったのに。不意を打っただけなのに。ただ首を切り落としただけなのに。

何で死んじゃうの？ 天羽根流は強いのに、なんで負けちゃうの？

こんなに弱いわけがない。天羽根流は強い。父は強い。こんな弱さは嘘だ。あつけなさは幻だ。目の前に転がっている肉の塊は、父を騙った影に違いないんだ。

「キコ？ キコなの！？ どうしたの！？」

キコの悲鳴を聞き、母が慌てた様子で走ってくる。どうやら父と一緒に、母も帰ってきていたらしい。

その声、足音を聞くだけで、母がどんな気持ちで、どんな姿で、どうやってここにやってくるのか、キコには手に取るように分かつ

た。

自分が帰ってきてくれたのが嬉しくて、また逢えるのが嬉しくて、いっぱい話を聞きたくて、その悲痛な声が心配で。

自分の事を、本当に好きでいてくれる人が姿を見せた時、キコは思わず、正面から抱きついた。

そして静かに、自分に似て意外としつかりした腰に手を回し、その滑らかな黒髪を鷲づかみ、跳ね上がった顔を床板に突き刺した。顔の肉が潰れる音に混じって、くしゃりと紙を握りつぶすような慎ましい音を立てて、美弥江の頸椎は完璧に破壊された。

天羽根流投撃『逆剥落とし』。相手の髪を引っ張り、跳ね上がった顔を地面に叩きつける。

そのままキコに投げ捨てられた美弥江の体が、可解野の広げた血の海の中に転がり込んだ。

涼しげな薄青の着物が、毒々しい赤の池に沈み、じくじくとその色を吸い上げていった。

「何で、何でよ……。何でなのよおおおおッ！！」

二つの死体の側で、キコは慟して哭す。こんなはずではなかった。もっと強いはずだった。そう思っていたのに。

まるで手応えがない。戦ったという感触すらない。たったの一撃、たったの一合で、何もかもが終ってしまった。可解野と美弥江が積み重ねてきたものを、キコは一瞬で崩してしまった。

父と母が修めていたのは天羽根流で、父と母を殺したのも、同じ天羽根流で

キコは確かめたかっただけだ。知りたかっただけだ。この目で見なかっただけだ。

自分がどれだけ強くなったのか。どれだけ変わったのか。それを天羽根流で確かめたかっただけなのに、この手の中に残っているの

は、命をもらいだ淡い気配だけ。あの研究所で嫌と言うほど味わった、卵を割るような感触だけ。

あの勝手な脆さで、父と母は死んでしまった。天羽根流も何も身につけていない、あの卵たちと同じように、天羽根流を身につけた父と母が死んでしまった。

天羽根流は強い。それこそが、キコにとっての全てだった。唯一絶対の法則だった。だからこそ、キコは黄泉の坂を駆け上ってこの世に舞い戻った。

なのにそれが、目の前で覆ってしまった。他ならぬキコの手によって。

キコの考えていた世界と、今キコの世界は、あまりに違っていた。その隔絶に、心も体もついてきてくれない。

何でこんなことになったのか。何で自分が勝ったのか。キコには分からない。

知らなければならぬ。何故父と母が死に、自分が生きているのか。天羽根流は、本当に強いのか。確かめなければ、居ても立ってもいられない。

「キ、コ……」

震えた声が、後ろから届いた。それもまた、キコにとっては聞き慣れた声音だった。

「お兄、ちゃん」

兄の声を聞いた時、キコの中に満ちていた不快な矛盾が、引き潮のように治まっていった。

清涼な感覚のまま、キコは兄を見据える。あの拷問のような治療の中で、自分を慰めてくれた兄がいる。また胸の中に飛び込んで、だっこしてもらって、家に戻り、共に暮らしたかった兄が居る。

健康になった自分を喜び、家族は歓迎してくれるだろう。幸多き生活の中で夢を見つけ、やがて自立する。幾度も願ってきた暮らしが、目の前に佇んでいる。

「お前、お前……、何を、して」

キコと周囲の状況を鑑み、廷兼朗は間もなく震え出した。歯の根が合っていないのに、眉間にはしわが寄り、獣のように歯を剥いている。

「兄さん」

廷兼朗の動揺を鎮めるために、キコは努めて優しく、かつて廷兼朗が彼女に掛けた言葉の如く、労うように話しかける。

「父さんたち、弱かったよ」

キコはたったの一言で、この奇怪なる状況を十分に説明してみせた。そして自ら、安穩とした幻視をはずたに振り払ってみせた。

もう自分は変わった。だから、かつての生活にも、かつての夢にも、幾ばくの価値はない。

今欲しいのは、証。どう変わったか、どう強くなったのか、どう天羽根流を身につけたのか、という証明である。それ以外はキコにとって、何ら取りに足らないものになりつつある。

その価値観は、キコが変わってしまった証左の一つだった。

字緒の鬼、天羽根の子：二

キコが何を言っているのか。廷兼朗は完全に理解していなかった。父さんたちが、弱い。その短い文章から、全く何も読み取ることが出来ない。

「兄さんは、強いよね？　すごく、すごく、強いよね？　天羽根流あまはねりゅうは、強いはずだよね？」

さらに言い募るキコが、ゆっくりと廷兼朗に近づいてくる。

もうキコの声が聞こえない。聞きたくもない。いちいち細かいことが考えていられない。

帰ってきた妹へ、衝動のままに自分をぶつけなければ堪らない。

「キコオオオオオオオオオツツッ！！」

叫びそのままに、廷兼朗の体が弾ける。

左右の喉断ちから、下段の綿刈まで駆使して行われる怒涛の攻め。清流のように淀みなく、濁流のように荒々しく、キコを攻め立ててゆく。

言葉など理解しなくとも、廷兼朗はこの場で行うべきことを完璧に実践していた。

綿刈で後ろに下がらせ、蹴り足を前に残して大きく踏み込む。低空から進入し、肩口からまっすぐ、キコの腹目掛けて抜き手を打ち出す。

服越しに廷兼朗の指が、キコの柔らかな脇腹を押す。そのまま深く挟るはずだった手応えが、するりと遠くへ逃げて行ってしまった。

廷兼朗の指先が、その驚きのまま、如実に震える。

明らかに命中してからの回避を可能とする技術は、天羽根流において一つしかない。

天羽根流奥伝、絶招歩法「羽」。廷兼朗が父である可解野かげやから教えを賜り、未だに達していない境地である。

「お前、何でお前が、『羽』を使えるんだ!？」

天羽根流を継いだのは自分だけだ。だからそれは、いつか自分が使うはずだった技だ。それが何故、天羽根流など教えられなかった妹が使えるのか。

「だって兄さんが教わってるの、私、見てたもん」

「見るだけで出来るなら、苦労はしない」

「うん。だから私、苦労してない」

まるで重みのないキコの言葉が、いちいち廷兼朗の神経を逆撫でる。

「何で、何が理由でこんなことを」

「知りたかったの。私の強さを、天羽根流の強さを」

無垢であるからこそ、その言葉には真実味が宿っている。例えその調子が、度し難いほどに浅薄でも。

「それが、親の首をもぐ理由になるのか!？」

「なるんじゃない。なったのよ」

「言葉遊びをする気はない!」

「嘘でしょ。私といっぱい話したかったくせに」

あのキコの笑顔とは思えないほど、それは邪な雰囲気醸し出している。そんな顔をする女と自分に、血の繋がりがあると信じたくもない。

自分の妹がどうしようもないほど女であることも、計り知れないほど変わってしまったことも、引き返せないほど破綻していることも、この短いやり取りで廷兼朗は十二分に感受していた。

兄妹特有の共感とでも言うのだろうか、今はその聡い感覚が憎らしい。

「知りたいと、言ったな」

「うん。言ったよ」

擦じり上げた左腕を前に出し、右の拳を引き絞って深く腰を落と

す。毫拳の型である。

「なら、教えてやる」

「ありがとう。お兄ちゃん、大好き」

「俺も、好きだったよ」

対するキコは緩やかに左手を水月の前に出し、右手で喉を守りながら腰は高く、重心を中心に据える。天日の構えである。

「もう、訳は問わない。こういうやり方しか、俺は知らない」

「うん。私もこれしか知らないし、これ以外には興味もない」

言い終えると、キコは自分の言葉の何が可笑しかったのか、構えを解かずに口元だけ歪ませた。

「つくづく兄妹ね。私達」

「……キコ。お前、いい加減にしるよ」

地の底からにじり寄るような声を、自分でも驚くほどすんなりと、妹であるキコに向けることが出来た。

キコは兄の聞いたことのないような声を受けて、くすぐったそうに目を細めた。

その瞬間、廷兼朗が突っ込む。

自分より背の低い妹の、さらに腰の高さまで屈んで踏み込む。

下段、とはいっても廷兼朗の腹目掛け、つま先での蹴りで突き放そうとする。そんな一直線の蹴りを、廷兼朗の腕刀が横に弾く。

蹴りの威力が伝わりにくい、膝に近い部分を逸らし、左足を残したまま、右足で強かに蹴り出す。

コンパスのように円弧を描き、廷兼朗がキコの背面を取った。あとはその勢いのまま、背中から腎臓目掛けて拳を打ち込むのみ。

振り返りざま、キコの左肘が的確に右拳を打ち落とす。今度は廷兼朗が懐を取られた形となった。右腕が伸び、相手はその右側に体を置いている。

キコは体の捻りをそのままに、肩を振り下ろす。『いっせんこう 壹戦甲』であ

る。

『吉戦甲』は肩による当身だが、いわゆる体当たりとは一線を画く。膝を抜き、腰を屈める最中に、肩を斜めに振り下ろす。上段から刀を振り下ろす動きに、腕の動きを抜いたものと言えるだろう。

つまりは、ほぼ零距离で使用できる。

キコの左肩が、正確に胸郭を打ち据え、廷兼朗がたたらを踏んで後ろに下がる。

しかし、キコは追えない。彼女もまた足が覚束ず、その場に留まっていた。

『吉戦甲』は基本的に振り下ろす動きであるため、下からの攻撃に弱い。廷兼朗は肩が当たる寸前、左の掌底でキコの顎を突き上げた。

振り下ろす動きを途中で邪魔できれば、肩での当身の威力も減衰する。驚くべきは、それでもなお廷兼朗を突き飛ばす威力を保っていたことだ。

廷兼朗は後ろに下がった体を撓め、ばねの如く飛び出す。道場の壁を足場に跳躍し、キコの頭上斜め上から襲い掛かる。

左腕を跳ね上げ、キコが迎撃する。

だが、むしろそれを迎えにいったのは、廷兼朗の方だった。

右で弾き、左で捕らえる。キコの左腕に二つの腕が上下から噛み、キコを通り過ぎる形で落ちてゆく。自然、腕は逆に極められてゆく。

天羽根流逆捕『飛燕啄』てんねんのつばひ。相手の上方から襲い、飛びついて腕や首を極め、落ちる勢いで破壊する。

腕の捻りに逆らわず、キコは沈み込み、落ちてゆく廷兼朗のさらに下を潜った。

そのおかげで、腕は逆から開放される。

キコが腕を捻りながらしゃがんだように、廷兼朗も体を捻り、既に着地していた。

しゃがんでいるキコに対して、廷兼朗は立っている。

キコの顔目掛け、まっすぐに膝が突き出される。高速の膝蹴りに押されるように、キコの体が逃げてゆく。歩法『羽』である。

廷兼朗は『羽』を使えずとも、『羽』を知っている。それに対する処し方は、既に施していた。

浮き上がるキコの体が途中で止まる。キコの左手は廷兼朗にがちりと捕獲されているためだ。

動きを止めたところで、二撃目の膝がキコの脇腹を突き上げた。今度は重く、内臓にまで響く手応えを有していた。

この立ち合い始まって以来の、そしてキコにとって生涯初めての、痛烈な有効打だった。

人生で初めて食らった本気の膝蹴りは、キコにとってどれほどの衝撃を持っていたのか。そしてそれが兄によってもたらされたことは、どのような意味を持っていたのか。

腰を折って下がったキコの頭へ、今度は正面から膝を蹴り上げる。

その足の付け根に、手が添えられる。蹴りの起点を見事に潰された。

さすがに三発目まで入れようというのは虫が良すぎたか。それに廷兼朗が気が付く間に、太ももに添えた手がするりと競り上がる。

獣の口のように、掌が下腹部をあんぐりと銜えていた。

天羽根流当身『虎口伝い』。親指と人差し指を目一杯広げた『虎口』という手の形を取り、それを相手に密着させ、満遍なく衝撃を伝達する。当身に類するとはいえ、身体の運用において他に類を見ない特殊な術理である。

『虎口伝い』は足から発生させた力を腰や背中を増幅させて掌から打ち出すのではない。全身の筋肉の収縮運動、いわゆる痙攣で発生した振動エネルギーを掌に集約し、相手の体へ流し込む。

そのため、踏み込んだり勢いをつける動作が要らず、掌さえ相手

に密着させることが出来れば、いかなる距離、いかなる体勢からでも発動することが出来る。

その掌が、腎臓の真上に当てられている。

廷兼朗はすかさず、キコの右腕を両手で握り締めた。

『虎口伝い』は放たれたが最後、このような防御方法しかない。

つまり急所に伝わる振動エネルギーを、他の部位に肩代わりさせるのである。

廷兼朗は耳にタコが出来るほど父に教えられ、内臓を攪拌されるような感覚を身をもって味わってきた。

この程度の攻防、天羽根流現当主である廷兼朗にしてみれば、当然の帰結だ。

そして彼の顎に、キコの小さな額が吸い込まれていったのも、当然の帰結だった。

『舌戦甲』を応用した頭突きは、上から切り落すように行われ、下顎を精密に狙撃してくれた。

血反吐が随分と後を引く。舌が上手く働かず、血を押し出すことが出来ない。そして歯が、全く噛み合わない。どうやらたったの一撃で、下顎を割られたらしい。

元より浮わ付いた顎骨と、運動している頑丈な額とがぶつかれば、結果は明白だ。

廷兼朗とキコの衝突の結果も、あるいは明白なことだったのかも知れない。自分よりも天羽流を極めた父を、そして母を無傷で仕留めてみせた人間に、継ぐ者がいないから仕方なく継いだだけの似非当主が敵うはずもなかったのかもしれない。

血みどろを吐き散らして後ろに下がる兄を、キコはくすぐったそうに目を細めながら眺めている。

追い討ちをかける気配など微塵もない。

「私は肋骨、お兄ちゃんは下顎。お互い、痛み分けね」

キコが、廷兼朗に膝を入れられた右の脇腹を晒すと、そこは確かに激しい内出血が見られ、赤黒い斑点が浮かび上がっていた。

見るからに痛々しいのだが、キコのにこやかな顔を見てみると、不覚にも廷兼朗は、顎の痛みさえ治まっていく気がした。

「でもね。私、お兄ちゃんとは少し違うのよ」

服をめくってお腹を恥ずかしげもなく、むしろ得意げに見せつけるキコが、なおにんまりと破顔する。

そうしている内に、腹部の赤みと腫れが見る間に引いてゆく。尋常な身体の運用ではない。もちろん武術でも、ましてや天羽根流でもない。

「超、能力……」

廷兼朗の呟きを聞き、キコの顔がこれ以上ないほどに歪む。まるでそのまま皮が破れ、中身が飛び出してしまいそうな、気味の悪い満面の笑みだ。

「これが、私の力よ！ あなたの妹の力よ！ あなたの妹は、こんなに強くなったのよ！ 父さんも母さんも、お兄ちゃんも、私は超えたのよ！」

何たる、何たる言い様か。超えただと？ つい先ごろまで他人の手無くしては食事も俣ならなかった童子に、このまま言いたいように言わせておくのか？

「ふざけるなよ！ 鬼子が、のたまうな！」

超えてなどいない。超えているはずが無い。そんなことはあつてはならない。自分を差し置いて父と母を超えたなどと、そんなことが起こるはずが無い。

「俺は、俺が、俺だけが！ 天羽根流を継いだんだ！」

精一杯の矜持をかき集め、砕けた顎からキコにぶつける。

「お前は、天羽根流じゃない。鬼子だ。厄を持ち込む、災禍の餓鬼だ！」

廷兼朗が歯を剥き、キコが笑う。似た顔立ちの二人は、奇しくも

同じような表情をして対峙していた。

「ここまででは同門の技比べ。そして私の能力も見せた。ならば、
武術も超能力も越えた境地を見せてあげる」

そう言つてキコは、自身の左手と左足を高々と挙げ、ゆらりと振り下ろした。

廷兼朗の体を、雷鳴が撃ち貫いた。

そう感じざるを得ない、見事な『遠雷』だった。天上より打ち下ろされた雷が、深く地の底までも叩き割らんとする、人間には甚だ許されざる一撃。

廷兼朗にも、父可解野にも母美弥江にも、不可能な『遠雷』だ。

否、人間にすら不可能だと思えるほどの圧倒的な『武』が、キコの一踏みには確かに宿っていた。

「ほら、立ちなさい。見せてよ、当主さん」
寿ぐように手を広げ、ゆったりと廷兼朗に近づく。それに呼応して、廷兼朗がするりと前に出る。

『無足』からの右逆突き。これだけ複雑に推移してきた状況の中で、その動揺を押し殺し、平時と変わらぬ調子で攻撃してみせたのは、廷兼朗とて武の申し子であることの証明だった。

しかし、その一撃が、廷兼朗の限界だった。

響いたのは打撃音ではない。肉や腱が可動限界を向かえ、張りを失う音だ。

「みぎゃあああああああああー!!」

そして廷兼朗の関節が限界を越えた音も、程なくして響いた。

天羽根流逆捕『合掌捻り《がっしょうびねり》』。相手の当身を中空で掴み、繰り出されている最中に擦じ上げる。

兄が渾身で繰り出した拳を、妹は柔らかく受け止め、天羽根流に従って破壊した。

右手を掴み、間合いを掌握したところで、下段に足を走らせる。天羽根流腿術『綿刈』。綿の花を刈るほど鋭く突き出す、本来は足関節を痛めつける技である。

本来の運用どおり、キコは『綿刈』で廷兼朗の膝を押しした。膝の裏が破れ、赤く濡れた骨が飛び出すほど強く、兄の膝を押しした。

「ひぎいいいいいいいい！！」

右拳を突き出した直後に右腕と左膝を破壊され、廷兼朗の意思とは関係なく、彼はその場に尻餅をついた。

それは果たして、廷兼朗の意思に反した行動だったのだろうか。廷兼朗は事ここに至ってまで、これだけのものを見せつけられて、それでもまだ戦う気概を保てたのだろうか。

それが分かったとき、廷兼朗は果たして、武人でいられたのだろうか。

足元でのたうつ兄を、キコは先ほどとは打って変わって苦々しい顔で睨みつけている。

「闘いなさい、兄さん。あなたは、天羽根流を継いだのでしょう」
少なくともキコにとって、まだ兄は十分に戦える状態らしい。対角線で体を破壊しておいて、それは卓越した凶太さだった。

「闘えと言っているのよ。痛がれと言った覚えはないわ」

廷兼朗がかるうじて挙げた顔を、キコは無造作に蹴り上げる。衝撃を後ろに逃がす器用さも無く、体が少し浮き上がり、後頭部から地面に落ちる。

「あ、あひ、ひぎ、いがあ……」

強烈に痛覚を刺激され、体中の神経が錯乱している。びくびくと体を震わせ、怯える子羊よりも弱々しく寝転がっている。

発作を起こしているかのように息も絶え絶えな様子を見ているうちに、キコは不思議な心地を覚え始めていた。

これまで他人の首を拉いだり、胸を砕いたり、腰を叩き折ったときに感じていたものである。父と母を殺したとき、腹の底から競り上がって来たものである。

強烈な吐き気と拒否反応を伴ったそれが、今はこんなにも清々とした感覚で受け取れる。今まで感じていた受け取り方が、自分の中で変化したと言っべきだろう。

苦渋に満ちた顔が、先ほどと同じ、破れるほどの笑みに移り変わってゆく。這い蹲る兄の姿が、キコをその顔にさせている。

ふと、キコには分かった。これが、自分なのだ。これが、天羽根流なのだ。これが、武なのだ。

これこそが力だということ、キコは実感を以って理解した。ことりという音が、キコの耳に届く。それは外から来る音ではない。自分の頭の中から、心の中から届く音である。

どこか身が軽くなったような感覚が、キコの中に満ちている。それが自然と顔に表れ、口元を綻ばせる。

まだ肉付きの薄い脛が、キコの頬にびたりと吸い付く。バレリーナに似た優美さで高々と足を上げ、それは廷兼朗の股座へと一直線に振り下ろされる。

『遠雷』ではない。単に、睾丸へ踵を落としたに過ぎない。いつそ馬鹿馬鹿しいほどの破裂音を聞いて、キコはますます楽しい気分になっていた。

血に混じって、白い液がキコの足を濡らす。股間から飛び散ったそれは、血と違ってねばねばと、いつまでも取り付いて離れない。

キコが股間から足を退けると、ピンクの液が糸を引いた。そうやって初めて、廷兼朗は三回目の悲鳴を捻出することが出来た。

しかしそれは、まるで声になっていなかった。痛みのみ、喉

が痺れてしまったのかもしれない。

「お、俺の負けだ、許してくれ!!」

代わりに喉が発したのは、敗北を受け入れる雄叫びだった。

「もう嫌だ! 殴らないでくれ! お前の勝ちだ! 許してくれ!」

廷兼朗が習った武術も、矜持も、何もかも投げ出して、高らかに自分の敗北を謳いあげる。

そうまでして回避すべき事態に、廷兼朗は陥っていた。そして陥らせたのは、彼の妹その人である。

自分が、兄を屈服させた。敗北させた。心も体も完膚なきまでに、正面から粉々に磨り潰して蹴散らした。矜持も技術も力づくで強奪し、この手で取り上げた。

キコは恍惚とした目で、とっくりと廷兼朗も見つめる。自分が碎いた顎、擦じり上げた右腕、突き破った左膝、潰した股間を、納得ゆくまで眺める。

自分の武の在り様を、彼女はその目に焼き付けた。

気の抜ける笑いを残し、キコは颯爽と身を翻した。兄の寂しげな視線など一顧だにせず、振り返りもせず、彼女は道場から姿を消した。

残されたのは二つの死体と、一人の重傷者だけだった。

字緒の鬼、天羽根の子：三

そうして、如何程の時間が立ったのだろうか。痛痒に埋もれ尽くした体が、何者かの手によって引き上げられる。

「廷兼朗！ 私が分かるか、廷兼朗！」

その声と、手の力強さが、僅かに廷兼朗を覚醒させる。

「外、樹、さん……」

「喋るな。大丈夫だ。大丈夫だから」

何がどう大丈夫なのか、さっぱり分からないのだが、そんな必死な声で言われると、本当に大丈夫な気がしてきてしまう。

再び意識を手放して、廷兼朗はその身を外樹の許に預けるように弛緩した。

再び廷兼朗の意識が浮上してきたのは、心の不安を掻き立てるほどに白い部屋の中だった。

「ここ、は？」

「学園都市だ。君の容態が逼迫していたので、勝手ながらこちらに移送させてもらった」

声の方に首を巡らせると、そこにはやはりというべきか、外樹の姿があった。

「ようだい？ ひっぱく？」

はて、何故そんな言葉を自分が、投げかけられるのか。廷兼朗にはほとんど思い当たるところが無かった。

「ああ、そうか。夢じゃ、なかったんだ」

察しの悪い廷兼朗は、ようやく自分の身に何が起こったのかを思い出した。廷兼朗の様子が落ち着くのを待ち、外樹がゆつくりと顔を覗き込んでくる。

「何があったのか。聞かせてくれないか？」

「知ってるんでしょう。外樹さんがここにいるのが、何よりの証拠だよ」

何を言っているんだとばかりに、廷兼朗が嘆息する。その不遜な物言いを、外樹も殊更に咎めようとはしなかった。

「聡いな、悲しいほど」

「あなたに誉められるのは、嫌いじゃありません」

「誉めていないよ。誉める言葉じゃ、ない」

「でしょうね。そういう顔だ」

嫌味を言うのにも疲れたのか、諦めを宿した顔を外樹に向ける。

「キコが、父と母を殺したようです。僕は現場を見ていないけど、多分、間違いない」

「そして君は、キコさんと戦った」

「そして、この様です」

そういって、廷兼朗は体に巻かれた包帯を、これ見よがしに晒す。右腕螺旋骨折。左膝開放性骨折。さらに下顎粉碎骨折と、鞏丸部破損。学園都市の医療技術によって、こうして喋れるまでに回復しているが、それも完全とは言い難い。

「今度は、外樹さんの話を、聞きたい」

一拍置いて、外樹は朗々と経緯を説明した。

出勤要請からキコとの戦闘。その後、回復した後の追跡。廷兼朗を発見後、学園都市へと移送して今に至るまでを、外樹は簡潔に廷兼朗に伝えた。

そして一言、廷兼朗はぼつりと漏らした。

「へえ。怖いなあ、学園都市って」

その言葉が、外樹の心に澱の如く積もってゆく。廷兼朗の仕草の一つ、言葉一つが苦々しくて、重苦しい。

「私が、キコくんを元に戻してみせる。それがせめてもの、責任の取り方だ」

「責任かあ。可愛らしい言い方ですな」

外樹の覚悟がこもった一言を、嘲るような調子で軽くないです。

「何が言いたい？」

応じてくれた外樹に、廷兼朗が体を向ける。これまでちらとしか視線を寄越さなかつたのが、目も姿勢も真っ直ぐにしている。

「外樹さん。あなたは、キコに負けていないんだよ。だからそんなおめでたいことを言えるのさ」

未だ満身創痍の体を持ち上げ、ぴんと背筋を立てて、廷兼朗は外樹を見据えていた。

「そして僕は、キコに負けたんだよ。だから俺が、キコに勝つんだ。あんたじゃない。俺だ！俺なんだよ！天羽根流を継いだ、俺がキコを殺すんだ！」

武術云々を抜きにすれば、大人しげでさえある気性の廷兼朗が、眉間にしわを寄せ、歯を剥き、外樹の喉元に食らい付くほどにじり寄る。

「お前なんか、お前なんかキコを任せられるか！俺なんだよ！天羽根流を継いだのも、あいつの兄なのも、あいつに負けたのも、全部、全部が俺なんだ！」

まるで支離滅裂で、見当違いで、的外れな言葉の数々が、的確に外樹を打ち据える。

それは今の外樹にとって、最適の攻撃だった。

「俺だけなんだ。俺だけが、キコを……」

廷兼朗の右腕が、ぼとりと重く落ちる。螺旋骨折の施術を終えたばかりの腕で、他人の胸倉を掴んでいれば当然そうなる。

右腕も、顎も、左膝も、股間も、熱く、熱くこの身を苛む。焼けて、蕩けて、焦げて、滅消してしまいたい。

（お前も、そうだったのか）

キコがくれた痛みに、問う。返ってくるのは痛み以外の何ものでもないが、今はそれで廷兼朗には十分だった。

熱い痛みを感じる度に、それとは違う熱さが、廷兼朗の中に醸成されていく。

それは滾る心である。ただし、決して快活なものではない。まるで爛れた傷口か、熟れすぎた果実のように不細工な熱。暗く熔けてねつとりと体の底を這う、醜い熱。およそ血の繋がった妹に向けるべきではない、背徳の熱。

「君が、キコくんを倒すのか」

廷兼朗の熱に、外樹が冷やかな水を差し向ける。

ぎつときつい視線を返すが、そのような脅しを受け取る外樹ではない。

「君に、キコくんを倒せるのか？」

もう一度右手に力がこもるが、びくりと肩が上がっただけで、それ以上動くことはなかった。

「無理だな。君では、キコくんは倒せない」

「今更、手心を加えるとも？」

「負けたのに手心とは、大した聖人君子だな」

今度は外樹のほう辛辣な言葉を掛ける。しかし正論であるため、廷兼朗が口を挟む猶予は無い。

「精神的なことは君次第だ。私が口出しすることではない。私が言えるのは、実質的な手段のことだ」

「実質的な、手段？」

「少し予定と違ったが、君がそういうつもりなら、好都合かもしれない……」

外樹の話に合わせたように、一人の女性が病室に入ってきた。

彼女はいつぞや学園都市を案内してくれた、網丘楊漣だった。

「そろそろ、私の話かな？」

「ああ。ちょうど話そうとしていたところだ」

入るなり網丘は、廷兼朗の傍らに座る。

「お久し振りね。廷兼朗くん。話は大方聞いたよ」

「それで、お話と言うのは？」

「飲み込みが早くて助かる。私が受け持っている計画『カウンターメジャー 対抗手段』に、参加してくれないか？」

突然のことで頭が働かないのか、廷兼朗はきよとんとした顔を網丘に向けていた。

「概要を説明しようか。『対抗手段』というのは」
書類を片手に話そうとした網丘を、廷兼朗は手をかざして制止した。

驚いた様子の網丘は、そのまま廷兼朗が口火を切るのを待っていた。

「細かなことはいいです。今の頭じゃ、まともに考えられない。だから、一つだけ答えて下さい」

自分でも頭が働いてないことを自覚しているようで、廷兼朗はとりあえず落ち着くため、深めに呼吸する。

そして一つだけ、網丘に尋ねた。
「強くなれますか？」

「それは、あなた次第よ」

網丘の毅然とした言葉に、廷兼朗はくつくつとした薄ら笑いを返した。

「当たり前前の答えだ。普通すぎて、つまらない」

一頻り笑い終えると、ふうと気が抜けるような声を上げた。

「だけど、正しい。どうしようもないくらい、正しいよ」

自分の言葉に感極まったのか、不意に廷兼朗の目から、涙が溢れて零れ出した。

「……強くなりたい。強くなって、またキコに会いたい。もっと、もっと強くなりたい。強く、なりたいよ」

一度流れてしまうと、それは止めることが出来ず、涙と一緒に、整えられる前の感情が噴出してくる。

「キコ、キコ、キコ……」

廷兼朗の、知恵遅れの妹。いつまでも子供で、手が掛かる妹。ずっと面倒を見て、守っていくはずだった妹。

何のことはない。廷兼朗こそが、キコに依存していたのだ。妹の自立を願っていたなどと、言える口ではなかったのだ。

キコの面倒を見る代わりに、自分はキコを見下しながら慈しみ、心の平衡を保っていたのだ。

何て、何て卑しい。兄だなんて、もう言える身分じゃない。

(そうだ。俺はもう、兄じゃない)

字緒キコの兄は、根来の家で死んだ。ここにいるのは、ただの字緒廷兼朗なんだ。

もう兄じゃない。妹でもない。ただ一人の人間として、字緒廷兼朗として、たった一人の字緒キコと向き合う。

それが妹への、対抗手段だ。

字緒の鬼、天羽根の子：三（後書き）

第四章終了です。ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。

次章のテーマは、『恋』です。こういう華やかなテーマも取り込んでいくべきかと思ったので、挑戦してみました。
お楽しみいただければ、幸いです。

逢瀬はワイカーの調べ：一

人の通りのある公園に、不似合いな打撃音が規則的に響く。見れば公園の木に、ひたすら足を打ち付けている人物がいた。よほどその木が憎いのか、同じ間隔で同じ場所を、何度も蹴っている。まるで自身も木になって根を下ろしたかのように、軸足はどっしりとして動くことがない。

時折物珍しそうに覗いてくる通行人も気にならないのか、ひたすら木の皮が捲れるまで蹴り、次の木を探してまた蹴る。

それは対能力者戦闘術の開発協力者にして教導訓練官を勤める、あさおていけんろう字緒廷兼朗だった。

彼が行っているのは、昔の空手家も行っていたと言われる、古式ゆかしい習練方法、立ち木打ちである。

よほど長い時間を費やしているのか、短く切り上げた髪から汗が飛び散り、ジャージの隙間からも滴っていた。

昼を回った頃、ようやく廷兼朗は立ち木打ちを終了した。脛に付けたレガースを外し、傍らに置いてあるスポーツドリンクを一気に飲み干す。二リットルあったペットボトルがものの数秒で空となったので、しかたなく彼は公園の水飲み場へ向かった。

いつもは第二区の訓練場で練習している廷兼朗だったが、今日は少し気分を変えるため、近くの公園で練習していた。

ここ最近ここは網丘あまはなに言われ、彼は主に上段と中段の蹴りの習練を行っていた。

上段や中段の蹴りというのは、日本の武道には少ない。無論のこと、柔術や忍術の流れを汲む天羽根流あまはねりゅうにも当てはまることである。それは例えば『揚げ足を取る』など、足を上げたりすることを不快に思う日本の精神性も影響しているのかもしれない。

それに高い蹴りと言うのは、金的への攻撃を行わないという約束事の中で発展したと言う側面を持つ。そうした制約が無い武術では、自然と股間を曝け出すような攻撃方法は、研鑽されることが少なかった。

そんなわけで、日本ではあまり発展しなかった高い蹴りを、廷兼朗も本格的に身に付けることになった。

その工夫が中々思うように付かず、こうして外に出たというわけだ。しかし練習場所を変えても、あまり効果があつたとは言いがたい。股間を晒すリスクはあるものの、強力な足の力で頭や腹を蹴撃することは非常に有効だ。それを何とか、『カウンターメジャー対抗手段』に沿った形に進化させると言うのが、網丘から出された課題だった。

能力者に通じる蹴り。その開発。ムエタイやテコンドーを元に足技を研究してみたが、そこから先の工夫において、廷兼朗は壁に当たっていた。

つまり、習った武術を『対抗手段』にするための工夫が、うまくいっていない。

「蹴り、かあ。嫌いじゃないけど、得意でもないんだよなあ……ジャツ」
廷兼朗は学生ながら、対能力者戦闘術の開発に協力したり、ジメント風紀委員や警備員への教導訓練を行っている。

教導訓練の仕事は、戦闘技術の教導や、仮想敵との演習などが主である。そして戦闘術の開発は、新たな戦闘技術の創意工夫。他には想定しえる戦闘環境のシミュレーション。その状況に応じた陣形やフォーメーションなども開発している。最近では警備員などに配備される装備や、それを使ったテストもやらされている。これがいい小遣い稼ぎになるらしいのだが、あくまで『対抗手段』計画への収入であり、廷兼朗には直接に還元されるわけではない。

その目まぐるしい仕事の中で、廷兼朗は新たな蹴り技の開発を課せられていた。

新たな蹴り技の開発といっても、それは容易ではない。上段、中段、下段蹴りや回し蹴り、体を一回転させる後ろ回し蹴り。引き付けた膝から先が変化するブラジリアンキックやマツハ蹴り。前蹴りと回し蹴りの中間の軌道を描く三日月蹴り。内から外へ捻るピットロチャギや、踵落としとして有名なネリヨチャギ。

他にもトーキックや足刀蹴りなど、蹴る部位によっても違ってくる。これほど研究され尽くした足技をさらに発展させるというのだから、中々に無茶な注文である。

網丘も別段、嫌がらせでそのようなことを課しているわけではない。『対抗手段』計画を取り巻く現状は、決して安穩としているものではない。常に結果を提示しなければ、すぐにも援助を切られてしまう。

厳しいと分かっているも、網丘は『対抗手段』の責任者として命じなければならなかった。

『対抗手段』計画の実情も分かる。網丘の苦悩も分かる。だからこそ、廷兼朗はその命令を承諾した。

しかし、結果がついてきてくれない。色々な打ち方を試しては見ただものの、能力者の打倒するに足りる蹴り技には至らない。

「……はあ」

大きく息を吐き、一休みする。こうしてうだうだ悩んでいても始まらない。果たして見つかるか分からないが、蹴って蹴って蹴りまくって、答えを探すほか無い。

そんな廷兼朗の耳に、聞き覚えのある笛の音が届いてきた。思わず立ち止まり、その音に耳を澄ます。

「これは、ワイクー？」

ワイクーとは、ムエタイの試合前に行う舞踊である。その昔、タイを侵略したミャンマー国王アユタヤは、その当時最も強かったムエタイ戦士、ナイカノムトム一人に対し、十人のミャンマー人とム

エタイの試合をさせた。

十人に勝てれば自由の身だが、負ければ首を切られると言われ、ナイカノムトムはひどく動揺してしまう。そこで彼は、気を落ち着かせる時間を稼ぐため、お祈りをする時間をくれるようアユタヤに頼む。

そうしてお祈りをする間にナイカノムトムは気を落ち着かせ、十人のミヤンマー人に勝ち、晴れて自由の身になれたという。そのときに上げたお祈りが、試合前に踊るワイクールの由来と言われている。

間違っても音楽に造詣など無い廷兼朗にも、見事な演奏だと分かる完成度だった。目を瞑るだけで、ルンピニースタジアムの情景が浮かぶようだ。といっても、ビデオで見ただけだが。

演奏に誘われ、廷兼朗が公園の外れへとやってくると、そこにはワイクールの演奏者がいた。

タイの伝統的な楽器で、『ピー』と呼ばれる縦笛を持った女の子が、芝生の上に跣坐していた。

「誰？」

振り返った顔を見て、廷兼朗は少し気圧された。浅黒く艶のある肌は、南方の出身を思わせる。そして顔立ちも、どこことなく日本的ではない気がする。

「えっと、とっても綺麗なワイクールだったから、つい聞き入っちゃって……」

「日本人なのに、ワイクールが分かるの？」

おべんちゃらでも言っていると思われたのか、じとりとした目でワイクール演奏者が見返してくる。しかも丁寧にワイクールの部分が、タイ語の正しい発音になっていた。

「ムエタイを少し習っていてね。それで聞いたことがあったんだ」
ムエタイでは、戦う前に選手がワイクールをリング上で踊る。その踊りの完成度も、選手的能力として評価されるのだ。

依然、一緒にムエタイの試合のビデオを見た先輩の荒涼が、試合前に選手が踊っている様を見て、踊りと武術に何の関係があるのか、と言い出したので、廷兼朗は滔々と、半日以上を掛けて武術と舞踊の間にある密接な、そして全世界的な関係を説いたものだった。

その次の日の教導は言うまでもなく、『舞踊に見る武術の起源（日本編）』に差し替えられていた。勿論これを履修した生徒にはもれなく、『仏教と武術の融合（中国編）』、『祭祀としての武術（中央アジア編）』、『迫害を逃れる武術（インド編）』と続き、主にアジア圏における武術の概略を嫌と言うほど叩き込まれる。

これらを全て履修した上で、『武術が異なる文化を取り入れ、変容していく事例を述べよ』という、A4用紙で二十五ページ以上のレポートを提出しなければならぬという、座学嫌いの生徒達にはかなり不評な課目を設定した。

訓練場のほうでも不評だったが、廷兼朗は『武術に限らず、技術の習得は暗黙知と形式知の二つで構成されている。我々教導訓練官は、個人の感覚に由来する、不確かな暗黙知の部分を、如何に公平な視点で、形式知的に伝達できるかが、重要な仕事の一つである。故に、武術を実際に嗜むばかりではなく、歴史的文化的アプローチによって、多角的に武術を観測することは、対能力者戦闘術を学ぶ上で非常に有意義な行為である』と講釈を打ち、網丘の後押しも相まって、そのような講義を受け持つことになった。

ちなみにサボリ屋の荒涼は、最初の講義の十分経過後に眠りこけ、次の講義で姿を消していた。

「ジーブンが、ムエタイ？ キックボクシングの間違いでしょう」
嫌味も顕に、ワイクー演奏者が言う。例え国や文化が異なっても、そうした意図を察する能力と言うのは、全世界で共通のものらしい。

「タイならムエタイで、日本ならキックボクシングか」

「あなた、ジーブンなのに失礼ね」

「先に失礼なことを言ったのは、君だろう。撤回してくれるなら、

僕も謝るよ。ジープンだからね」

挑発に挑発で返されたワイカー演奏者が、笛を置いて立ち上がる。

「なら、あなたが見せてよ。習ってるんでしょ、ムエイ・タイ」

タイ語独特のイントネーションで、正確に発音する。まるで廷兼朗の身に付けたものが『ムエイ・タイ』ではないとも言っようだ。「君は、ムエイ選手なのか？」

今は日本でもムエイが普及し、女性でもムエイを嗜む人が増えてきているが、目の前のワイカー演奏者が身に纏っている雰囲気は、決してシェイプアップやダイエットが目的ではないことを如実に伝えていた。

「違うわ。ムエイナックモエ戦士よ」

手を高く上げ、肩を顔の横まで上げる。ムエイの基本の構え。ターンガード・ムエイである。

見事に堂に入った構えである。失礼ながら、女性と言うことで若干期待していなかった廷兼朗だったが、それがまるで見当外れの心配であることを感じ取った。

ワイカー演奏者に影響され、廷兼朗も同じ構えを取る。というより廷兼朗は、ムエイでの構えはこれ以外に習っていなかった。

いつもと違う構えであるためか、僅かに落ち着かない。それとも彼女の構えが、廷兼朗の気を騒がしているのか。唐突とはいえ、このような展開は廷兼朗にとって非常に好ましいものだったため、少し心が舞い上がっているのかもしれない。

成り行きでムエイによる勝負をすることになったが、廷兼朗は一応ムエイを習ってはいるので、ルールは知っている。あとは相手の練度次第だ。

ムエイで習っているのは基本的なことだけだ。複雑な動きは出ない。ここは真っ向から行くしかない。

「シッ！」

廷兼朗は体勢を変えず、踏み込んで左の中段蹴り《テツサイ》をかました。事前の拳動を抑えた、牽制用の打ち方だ。

その足が、彼女に到達する寸前で停止する。

廷兼朗の足の付け根に、彼女の前蹴り《テイツプ》が突き刺さっていた。相手の蹴りに合わせて、足の付け根を押さえる、あるいは蹴るのは、ムエタイやキックボクシングに共通する高等技術である。クイックモーションとはいえ、弧を描くテツサイに対して、テイツプは一直線に突き出す。二つの軌道の差が、如実に出た結果だった。

しかし出された結果は、果たして軌道の差だけだったのか。蹴り《テツ》を見切る眼、即座に最適な攻撃を選択する熟練された対応。ナックモエを自称するだけのことはあるのだろう。

退く廷兼朗を、彼女が追う。突き放すため、廷兼朗は左のジャブを撒く。

「それは、ムエタイじゃない」

ジャブを捌き様、回り込みながらの肘打ち《パンソーク》で廷兼朗の顎が打ち抜かれる。

崩れ落ちる廷兼朗を、さらに下からの縦肘打ち《タツマラー》が突き上げる。

何とか肘と顎の間に右手を差し込み、タツマラーの直撃を防ぐ。

だが、一発目のパンソークで見事に脳を揺らされてしまった。

倒れるのを防ぐため、廷兼朗は彼女の首を両手で抱え込んだ。いわゆる首相撲モエバンの状態である。ムエタイの攻防では良く見られる光景だろう。

「くっっ」

痺れる足を叱咤し、膝蹴り《チャランポ》を打ち込む。回復するまではこの体勢で休ませてもらう算段だ。

「へたくソ」

廷兼朗のチャランポをもともせず、首相撲にも微動だにせず、彼女が耳打ちしてくる。

「チャランポはね、こう蹴るのよ」

囁きの直後、廷兼朗の胸で、何かが爆ぜる。

廷兼朗の体が、完全に浮き上がった。

「がひゅう」

胸郭を正確に打ち抜かれ、呼吸が止まる。痛みと息苦しさでどんな気が遠のいてゆく。

肋骨がたつぷりと、五センチ以上は沈み込んだことだろう。心臓マッサージとしては最適だが、この速さで行われれば危険極まりないのは、言うまでもない。

そこへさらに、彼女は左の膝を突き上げる。

廷兼朗は右足を前に出し、右膝蹴りの内側に体を入れた。そのまま巻き込むように、彼女の体を投げ捨てる。

膝蹴りに合わせて腰投げを行い、何とか廷兼朗は間合いを取り直す。

しかし廷兼朗は動けない。パンソークとチャランポのダメージが未だに抜け切らないためだ。

「やるわね。ジープンのくせに」

投げられた彼女には、目立ったダメージはない。腰投げにも上手く受身を取り、ダメージを最小限に抑えている。

さらに来ようとする彼女に向けて、廷兼朗は手をかざした。

「待つて。僕の、負けだ」

廷兼朗は苦々しい顔で、自身の負けを宣言した。

これまでの攻防で、ムエタイにおいて廷兼朗が彼女に劣っているのは、火を見るより明らかだろう。本来の戦い方ではなかった。得意とする武術ではなかった。などと言い訳することは、そのまま自

分自身を貶めることになる。

廷兼朗はムエタイ戦士ではない。だが彼なりに、ムエタイに対して真剣に向き合ってきたつもりだ。天羽根流には少ない蹴り技を補うために、ムエタイの存在は必須だったからだ。

彼女の行っていることは、間違いなくムエタイだった。ならば、自分の習っているものがムエタイではないと言われても、それは仕方無いことだろう。

負けは負けでしかなく、劣等は劣等でしかない。それ以上も以下もなく、それ以外でもない。

だが、そこから先は、本人次第である。

「僕に、ムエタイを教えてください！」

その場に座り込み、廷兼朗は深々と頭を下げ、地べたに擦り付けた。

タイ人と思われる彼女に、日本式の礼は通じないかもしれない。それでも廷兼朗には、これ以外の方法が思いつかなかった。

自分が習っていたのは、立ち技最強の誉れ高い、ムエタイではなかった。ならば今度こそ、ムエタイを習いたい。

負けを認めるや否や、頭を下げて教えを請う。プライドも何も無い、恥知らずの行動と思われるも、無理からぬことだろう。だが、廷兼朗は今更そのようにすることに頓着はしない。

超能力によって炎が飛び交い、雷が迸り、水がうねり、風が逆巻くこの都市で、そのようなプライドなど糞の役にも立ちほしくない。そんなものを振りかざし、目先の恥を忌避する行動こそ、最も恥ずべき行為である。

戦うという状況においてはプライドも、恥も、矜持も、あるいは信仰も容易に霧散する。非常に高い揮発性で、あつという間に見えなくなってしまう。

だからこそ、今この場で恥を受け入れ、飲み込むのである。もう

二度と自分の心が、自分から離れてしまわないように。
それこそ、敗北に対抗する手段だ。

「だめ。わたし、ムエタイを教えたことなんて、ない」
廷兼朗の頼みに、彼女はすげない声を返した。

「お、お願いします！ いきなりのごことで失礼とは思いますが、どうか、どうかお願いします！」

一度断られたくらいで引き下がるようでは、その覚悟を疑われる。
廷兼朗は執拗に、さらに深く頭を下げて平に願う。

するとワイクー演奏者は、土下座している廷兼朗に歩み寄り、むんずと髪の毛を掴んで無理やり立たせた。

驚く廷兼朗に構わず、彼女はそのままモエパンの体勢に移行した。
「立ちなさい。ムエタイは、立って戦うものよ」

近すぎる間合いで、また彼女が囁く。その後打ち込まれたチャランポが、何よりの答えだった。

「あなた、名前は？」

「字緒、廷兼朗」

「わたしはラタナ。ラタナチャイ・シングレック」

彼女、ラタナの名を聞き、廷兼朗が感嘆の声を上げる。

「いい名前だ。ラタナは『珠玉』、チャイは『勝利』、そしてシングレックは、『小さな獅子』」

「物知りね。さすがジーブン」

何がさすがなのか図りかねるだが、どうやら廷兼朗は、ムエタイを習うことが出来そうだった。

逢瀬はワイカーの調べ：二

「違う。そうじゃない！ だから、こう！」

見本とばかりにラタナは木を蹴り上げる。鞭のように長い足が撓り、木を巻き込むようにして満遍なく足を当てる。廷兼朗は彼女の蹴り《テツ》を、興味深そうに眺めていた。

ムエタイ戦士は、その膝や肘、足を硬いバナナの木に打ちつけ、骨を太くし、神経を殺し、強靱なものへと作り変えてゆく。その威力たるや、一撃で内臓を破裂させるほどである。

故に廷兼朗は、ムエタイの蹴りには重厚なイメージを抱いていたが、ラタナのそれは見事に違っていた。

しかしそれは、相手を攻撃すると言う点において優れているのは共通していた。

音もなくすり上げ、柔らかく、滑らかに振り上げる。ラタナ自身の柔軟な関節と、女性特有の柔らかかな筋肉が相まって、まるで鞭のように翻りながら迫る蹴りが生み出される。

そしてそれは、命中の瞬間、鋼へと変容する。

弛緩と緊張。その差異は多くの効果をもたらす。まず弛緩によって、僅かながら腱や筋肉が伸び、射程距離が増す。そして速度も増す。これは緊張して引つ張る筋肉が働いていないためである。

そして寸前での緊張。射程距離と速度を増した脚は、その軌道で得たベクトルを維持したまま、敵の肉に触れる一瞬だけ、緊張する。

弛緩による恩恵を保ったまま、脚を固め、鞭のしなやかさと鋼の硬さを有した蹴りが完成する。

スピーディーであり、スナッピーであり、ヘビーであり、ソリッドである。およそ打撃に求められる要素が、ラタナの体には内包されていた。

欲しい。この蹴りが、欲しい。

この蹴りの先に、廷兼朗の求めるものがある。そう確信させてくれるほどの完成度が、目の前に提示されている。

そうして廷兼朗は、空いた時間にラタナの指導を受けていた。

「もつとこうガツと！ グツと蹴るの！」

「シッ！ シッ！ シッ！」

「違う違う！ 全然違うの！ こうよ、こう！ 何で分かんないかな？ シュツと上げて、スパーンと蹴るの！」

聞かされた説明の変わるラタナの指導を、廷兼朗は辛抱強く聞き入り、あるいは見入っていた。

彼女の『ムエイタイを教えたことがない』発言は、謙遜でも何でもなかったことを、廷兼朗は噛み締めていた。ラタナの説明は、甚だ自身の感覚によるものばかりだった。

元より暗黙知の部分を形式的に伝えるのは困難だ。幾ら言葉を重ねたとしても、一回の体験で全て分かってしまう場合と言うのも確かに存在する。公平で明文化されていることが、必ずしも最良ではないのだ。

しかし、こと廷兼朗に限って言えば、それは非常にツライ習練だった。何せ、何も分からないのだから。

お世辞にも才能や天啓やギフトといった言葉から縁遠い存在の廷兼朗は、体のどこをどのように動かし、どこをどのように蹴るべきかをいちいち言葉にして指摘されなければ、蹴り技の一つも学ぶことが出来ない。

だが今は、そんな自分の非才を悔やむ時間はない。ひたすらこのナックモエからテツを習い続け、吸収するだけだ。

「シッ！ シッ！ シッ！」

ひたすらに、蹴る。一発一発に神経を充溢させ、精魂の限りを的

である木に注ぎ込む。それはまるで一介の木片から像を生み出す彫刻家に似て、己の魂全てを木に、あるいは蹴ると言う行為に費やし、跡形も無くしてしまおうと言わんばかりの気迫だった。

この蹴りこそが、絵描きの一筆であり、小説家の一文である。心を注ぎ、体を費やし、無駄に終るであろう工夫を幾つも施し、その内に一つ在るか無いかの良例を汲み上げ、痛みと苦悩の中、己の心、そして体の声にひたすら耳を傾け、無限に等しい作業を延々と積み重ねたその先にしか、完成は存在しない。

少なくとも廷兼朗にとって、それが『習う』という行為そのものだった。

そんな廷兼朗を、ラタナはひたすら見つめている。それは廷兼朗の蹴りが良くなってきたからか。あるいは、他のことに思案を巡らせているのか。

学園都市にある、窓の無いビル。一説には核攻撃などを想定し、一切に出入りが出来ないように締め切っていて、入出を空間移動能力者に依存しているという。

そのモノトーンにはあまり似合わない、派手なアロハシャツを着た金髪の大男が、虚空より現れる。

土御門元春。学園都市と必要悪の教会との、二重スパイを勤めている。ネセサリウス

「おい、アレイスター！」

土御門は怒りと呆れの混ざった声を闇の中に投げ込む。

黒く塗られていた部屋に、ぼんやりと淡い光が灯る。そこに浮かび上がる人間は、何故だか逆さになっている。

それに特段驚きを見せず、土御門は円筒の傍まで歩み寄る。

「一体、どういづつもりなんだ？」

抑え気味だからこそ、中に溜められた憤慨が滲んでくる。

しかしアレイスターは、それに何ら感じ入ることが無いようだった。

「魔術師が一人、侵入しただけだ」

「だから、どういづつもりかと聞いている」

「今回に関してはプランの変更は無い。というより、しないと云うべきか」

その言葉に、土御門が眉根をひそめる。

「俺達にも、介入するなと？」

「いや、それに関しては自由意志に則って動いてもらって構わない。文字通り、波風は立たないだろう」

アレイスターの口調には抑揚もなく、意図するところも掴めない。「シェリー・クロムウエルの時とは異なる。むしろアルレオイス・イザードや闇咲逢魔の事例に近い。ならば特段、君が憂慮する事態にはならない」

「……また、上条当麻に当てるつもりか」

土御門の問いかけには答えず、アレイスターは薄い笑いを返した。「プランの変更は無い。それだけだ」

悔し紛れに円筒を殴りつけ、土御門は迎えに来た空間移動能力者テレポートを伴って、この陰鬱な空間から姿を消した。

荒涼阿刀次こうりょうあとうじはその日、レスリングの練習に使うシューズを買い替えに来ていた。

宿敵、井上駿馬いのうえしゅんまと一緒に。

「ゴム底にしようか、革底にしようか」

井上もボクシングのシューズを買い替えるため、二人でスポーツ

シヨップをはしごしていた。

「お前は完全にアウトボクサーなんだから、革底一択だろうが」

「いつも革だからさあ、たまには変えてみようかなって」

他愛の無い話をしながら、店内を二人で冷やかす。

あのG 1トーナメント後、二人はこうしてよく会うようになった。別段に仲が悪かったわけではないが、お互いを意識しあうライバルということもあり、友達のように接することはなかった。

しかし、あの準決勝の戦いで、その蟠りが消えたらしい。そうなればお互いを、それこそ良く知る間柄だったので、親交を深めるのに長い時間は要さなかった。

「ねえねえ、これ可愛くない？」

「お？ いんじゃね。付けてみ。ぜってー似合ってる」

カップルでスポーツシヨップを見に来ているのだろう。いちいち女が甲高い嬌声を上げ、男がそれに応えている。まるで人目を憚らずに猫撫声で語り合う。

周りの客の迷惑も考えず喚くカップルに、近くを通りかかった店員を眉根をひそめた。仲の良いことはよろしいのだが、そう明け透けにされると、誰も多かれ少なかれ気分を害するものらしい。

「死ねばいいのに死ねばいいのに死ねばいいのに死ねばいいのに……」

ああいうカップルを見たら、とりあえず邪な念を送っておくのが荒涼の習慣だった。ああいう体験などこれまでにしたことのない荒涼にとつて、それは悪辣以外の何物でもない。

「おい荒涼。恥ずかしいからやめろよな」

井上は関係ござらんといった調子で、軽く荒涼を諷める。こちらは別段気にした風も無く、カップルのやかましさに無視を決め込んでいる。

「お前はいいよな。ファンの子取っかえ引っかえだもん！ 俺に

も分けるってんだ！」

「俺、今彼女いないよ」

「んな！？ もうあの子と別れたのかよ！？」

大声を張り上げる荒涼に対して、井上は露骨に嫌そうな顔を見せる。

「だって、『私とボクシング、どっちが大事なの？』とか言い出したからさ。本当のこと言ったら引っ叩かれた」

「確かに。そんなこと言う女にはジャーマンスープレックスだが」

「まずはジャーマン掛ける相手を探すんだな」

「貴様ア！ 殺す！ 必ず死なす！」

やまかしさではそのカップルとどっこいどっこいのくらいに、店内で人目も憚らずじゃれ合う。そんな二人の前に、良く見知った顔が現れた。

「あれ？ 荒涼さんと井上さんじゃないですか」

「おお。字……おおおいしいツツ！」

出会い頭、荒涼はいきなり吼え上げた。彼が驚くのも無理はない。廷兼朗の横には連れなのか、一人の少女が立っていた。

廷兼朗とその少女を見遣り、声を掛け様、荒涼は無足タツクルで廷兼朗の首根っこを掴み、がっちりヘッドロックの体勢に移行した。

「てめえ！ 何だそのアルカイツクスマイルな美少女は！ オリエンタルがヒスパニックでアンコールワットだぞこの野郎！」

何を言ってるかさっぱり分からないのに、何を言いたいのか分かってしまう台詞を吐きながら、荒涼が廷兼朗の頭を締め上げる。これまで女っけなどなかったはずの廷兼朗が、婦女子と連れ立って歩いているだけでも荒涼にとっては驚愕であった。それがしかも外人の、南方らしい浅黒の美人となれば、黙っていられはずもなかった。「ちよつと待って！ 荒涼さんの思ってるような人じゃないって。

僕のムエタイのお師匠ですよ」

「は？ 師匠？」

その一言で、荒涼だけでなく、井上の動きも固まった。

廷兼朗の師匠。G 1トーナメントで優勝した無能力者《レベル0》の師匠。ということは単純に考えて、このオリエンタルな少女は廷兼朗より強いわけで、つまりはG 1トーナメント準優勝者とベスト4よりも、強いわけで。

「へ、へえ。師匠、ねえ。ふうん……」

先ほどまでの勢いが一転し、荒涼はわずかに顔を青くする。

能力者に対抗する廷兼朗を上回る人間を前にして、荒涼の率直な感想としては、あまり関わりたくない、だった。同じく井上も、顔をひきつらせながら少し後退している。

廷兼朗の怖さを知る二人であればこそ、彼の師匠という肩書きの少女は持つ得体の知れなさ、そして恐ろしさ、実感を伴って理解を迫られる。

「アザオ、誰？」

内輪なじゃれあいに置いてけぼりだったラタナが、可愛らしく首を傾げて言う。ヘッドロックされたまま、廷兼朗が指差して二人を紹介した。

「僕の先輩。荒涼阿刀次さんと、井上駿馬さん」

「初めまして。ラタナチャイ・シングレックよ。よろしくね」

流暢な日本語で、ラタナは卒なく挨拶を済ませた。荒涼も井上も、ぎこちなく「よろしく」と返事する。

「おい、おい字緒。ちよつと来い」

来いもなにもヘッドロックで身動きが取れないので、廷兼朗は荒涼に引きずられる形でラタナから少し離れる。

「おかしいだろ。あの子明らかにおかしいだろ」

「え？ 何が？」

「何だよ、ラタナチャイ・シングレックって。どう考えてもリングネームじゃねえか。何で初対面でリングネーム名乗るんだよ！」

「タイでは日常茶飯事ですよ」

「へえーそっかー……っアホか！」

「ノリツツコミ下手……」

「うるせえ！ 何でリングゲームで『よろしくね』とか言われなきやなんねえんだよ！」

「別にいいじゃないですか。そのほうが通りがいいんですよ。芸能人だって芸名で名乗るでしょ。それと同じですよ」

「いや、それは違う気がするんだけど」

三者三様の主張が飛び交い、ああだこうだと話し合う様子を、ラタナはつまらなそうに眺めていた。

「ねえ、アザオ。早く行こうよ」

痺れを切らせ、ラタナが呼びかけると、廷兼朗はヘッドロックの間に手を差し込み、するりと拘束を解いて、とてととラタナの後ろについた。

「ごめんごめん。それじゃまた」

既にお買物を済ませていた廷兼朗は、そのままラタナを伴って店の外へと出て行った。

そんな二人が並び立って歩く様は、まさに荒涼が苦々しく思っているそれだった。

「ぬうう。先輩を差し置いて……。たださえ女っ気の多い第一七支部に顔出してるくせにいいいいいい！」

「でもあの子、字緒くんの師匠だぞ」

それを言われると、荒涼は神妙な顔つきで俯く。

「……確実に殺されるな」

「ああ。気持ちよく逝けるな」

何がどうなってそうなるかは分からないので、とりあえず二人はあのラタナなる女性には、これ以上近づかないことに決めていた。

抗いは聖なるかな：一

ラタナと一緒にレガースを買い、廷兼朗はにやにやしながら歩いていた。今日は木ではなく、ラタナと二人でキックだけのスパーリングをする約束をしていた。

それはつまり、廷兼朗の蹴りが少しだけ、ラタナのものに近づいてきたことを意味していた。

未だ『対抗手段』仕様の蹴りの工夫は付かないが、自分の蹴りの完成度がより高まったことが証明されるのは、やはり廷兼朗にとって喜ばしいことだった。

「んふ、んふふ」

「何笑ってるの？ 気持ち悪い」

いい加減、ラタナの罵倒にも廷兼朗は慣れてきた。

最初の頃は、日本語を良く知らないが故に誤用しているのかと思っていたが、それにしてもあまりに流暢で、使いどころが絶妙だったため、全くの誤用ではないことが分かってきた。

「アザオ、今日はどこに行くの？」

「今日はね、第七学区に行ってみようか」

自分の頼んだこととはいえ、こうして練習を見てもらえることに、廷兼朗は感謝していた。その代わりといって彼はラタナに、この学園都市を案内して回っていた。

廷兼朗とて学園都市に詳しいとは決して言えないので、事前に一生懸命に調べて、案内するコースと時間を決めて、まるで観光ガイドのように彼女を案内していた。

それもまた自分の勉強にもなるので、廷兼朗も楽しみながらラタナと学園都市を巡っていた。

「ここが第七学区。第二十三学区と同程度の広さを誇り、学校施設、療養施設、住居、外食や量販施設等が充実しており、多様な機能を

備えた学区となっっています」

観光ガイドというか、教師に近い口ぶりなのは、やはり職業柄なのだろう。

「二十三学区って？」

ラタナがきよとんと首を傾げ、早く答えるよう迫ってくる。

「え、えつと、第二十三学区は……」

事前に調べていなかったなので、廷兼朗はおぼろげながらにしか分からなかった。

「た、確か、飛行機を飛ばしたりとか、するようなところ、かな？」

「空港ってこと？」

「そうそう、それぞれ！」

正確には航空・宇宙分野の研究開発を専門に行う学区だが、空港施設も完備しているので、間違いではない。

ラタナの察しの良さに助けられながら、廷兼朗は第七学区を闊歩していった。

「ここが前に爆破事件があったデパートだよ」

「爆破？ 物騒ね」

「でもってここが『ケンカ通り』。ケンカしたくなったらここに来い！ っていう場所」

「アザオもよく行くの？」

「いやあ、この前同僚に見つかっちゃってさ。最近は行ってないんだ」

一応は風紀委員である廷兼朗は、進んでケンカをするなど本来は許されない。なので、ちょっと気晴らしに通りを覗いてみようとしたところを、たまたまパトロールしていた白井黒子に発見されてしまった。

「まあ、初犯だから今回は目を瞑りますが、このようなことはおやめください」

「大丈夫ですよ。風紀委員が風紀を乱すわけじゃないでしょうに」

ちなみに廷兼朗がケンカ通りを利用するのは、白井に見つかった

時が初めてではないのは、それこそ言うまでも無い。

しばらく歩いていると、ラタナは道の真ん中で徐に立ち止まってどこか一方を指差した。釣られて、廷兼朗もラタナのそばによって指差した方向を見遣る。

「アザオ。あれ、何？」

ラタナはそう言って、ぬうつと聳え立つビルらしきものを差していた。

窓の無いビル。窓や出入り口さえ存在せず、形からビルだと言われているものの、本当にビルの機能を果たしているのかも定かではない代物である。

「ううむ。色んな噂があるんだけど、結局何なのか分かんないんだよねえ」

正式な名前も、入っているテナントも、施設責任者も分からない。巨大な量感とは裏腹に、学園都市にぽっかりと開いた空洞のように虚ろな建物だ。

「ほら、次行こうよ」

廷兼朗が促しても、ラタナはその場を動かなかった。窓の無いビルに興味津々のようで、廷兼朗の言うことを全く無視して佇む。

「気になるの？」

「うん。気になる。少し見えていい？」

廷兼朗は早く練習したかったが、こんな風にラタナが頼んでくるのも初めてだった。

「いいよ。僕、そのベンチで休んでるから」

そういつて廷兼朗は近くにあったベンチに座り、ビルを眺めるラタナを眺めることにした。

そのまま、どれほど時間が経ったのだろう。そろそろ昼時に近づ

いてきた。これから外食店が混み始めるので、早めに店を探したくなつた廷兼朗が、ラタナに声を掛けようとした。

その何気ない言葉が、喉の淵まで来て一気に飲み下される。

人の気配が、不自然なほど希薄だ。むしろ、皆無と言つていい。

すぐに自分の位置を確認し、周囲に目を配る。繁華街のど真ん中、それも昼時だというのに、人影が伺えない。

ラタナも異常に気づいたのだろうか。廷兼朗の背に立ち、共に警戒する。

有り得ないほどに静まり返る街。元旦の早朝でもあるまいに、こんな現象がそうそう起きるはずがない。

まるで自分の周りだけ、世界から切り離されたような感覚だ。寂寞より先に、警戒が募つてゆく。

光学的技術を用いた錯覚ならば、作り物の映像独特の不自然さが現れるし、何より音や生体電位まではごまかせない。

催眠などの心理操作でも、これほど鮮やかに人間の全感覚を欺くことは不可能だ。レベル5の『心理掌握』ならば可能かもしれないが、考慮すべき優先順位としては低い。

これが攻撃だとすれば、何が目的か。そしてどこから来るのか。何が来るのか。

「アザオ、逃げよう」

ラタナの提案に、廷兼朗は頷く。例え敵意ある攻撃だったとして、馬鹿正直に留まっている必要はない。

今しがた来た道へ、廷兼朗とラタナは一目散に走り出した。だがそれも、十秒と続かなかつた。

疲れてしまったわけでも、何か攻撃されたわけでもない。目の前に、サングラスをかけた金髪の大男が立っていただけだ。

「ラタナチャイ・シングレックだな」

如何なる人間か判断する間さえ与えず、目の前の大男は、画然と

した口調で言った。

「用件は、言わなくてもいいよな」

ラタナのフルネームを予め把握していた男は、やはりラタナの方しか向いていなかった。ラタナの目も、その男だけを見つめている。そんな二人の間に、廷兼朗が割って入る。

「言ってくれないと、分からないですよ」

ずいとならぬ出て初めて、男は廷兼朗の存在に気がついたようだった。軽く舌打ちし、「木偶が……」と呟いたようだったが、廷兼朗にはつきりとは聞こえなかった。

「お前、字緒廷兼朗だろ」

ラタナしか見ていなかったことを見ると、自分はいでなのだろう。名を呼ぶ口調は如何にもぞんざいだ。

「知ってるよ。お前のことも、大体はな」

「それはそれは、光栄、なのかな？」

軽薄な男の調子に合わせて、廷兼朗も軽口を叩いてみせる。

「ああ、光栄だろうぜ。お前のファンも来てるからよ」

ファンという言葉に、廷兼朗は幾分か顔を顰める。こんな状況でなければ、小躍りしそうな台詞だ。

大男の後ろから、かあんと高い靴音が響く。そこに現れたのは長身の女性だった。

穿いているジーンズの半分を足の付け根で引き裂き、白いシャツを胸の下で結び、引き締まった腹を見せつけている。

妙齢の女性にしては大胆に過ぎる格好だと思っるのは、果たして廷兼朗の嗜好なのか。そして何より目を引くのは、腰に差した二メートル近い黒鞘である。

自分のファンとやらを、廷兼朗は平静に観察した。その服装や雰囲気をも総合した気配に、廷兼朗は既視感を覚えた。

「天草式、十字淒教……」

日本における十字教の一派。先ごろ廷兼朗が出会った、魔術集団でもある。

その名をぼつりと呟くと、女性はくんと軽く顎を上げた。

「聡いですね。建宮に聞いていたとおりです」

あの建宮齋示のことを知っている。目の前の女性は確実に、天草式の関係者だ。

「元天草式プリエステス十字淒教女教皇、神裂かんざきかおり火織です」

関係者どころか、元教主だったらしい。そういえば、建宮にそんな話をしてもらっていたのを廷兼朗は思い出した。

「字緒廷兼朗さんに、相違ございませんね」

聞いているのに、それは有無を言わせない威圧を含んでいた。神裂と名乗った女性は、長大な黒鞘を腰に佩き、ブーツなのに器用な摺り足で近づいてくる。

「菊池が、お世話になりました。今日は是非、そのお礼をさせていただきます。ただたく、馳せ参じた次第です」

菊池の名を聞いただけで、廷兼朗は神裂の用件を大方理解していた。

天草式と自分を繋げることとなれば、やはり菊池を抜きでは語れないだろう。何かしら関わってくると思ったが、これほど直截な手段を取ってくれるとは。

そのように近づかれては、廷兼朗は体を向けて対応するより他無かった。

「ラタナ、逃げる」

「うん。そうする」

少しだけ、「がんばってね」とか「私も残るわ」とかいうやり取りを体験してみたかったが、いざとなれば鬱陶しいだけだと思いき、遠ざかるラタナを庇うように神裂の前に立つ。

しかし逃げてゆくラタナを大男が追うのには、廷兼朗は顔を向けることすら出来なかった。神裂の気配が、そんな行動さえ許しては

くれなかつた。

「お相手、仕ります」

左手をゆるりと掲げ、右手は臍の前に置く。いつもの構えで、
兼朗は女教皇と対峙した。 廷

抗いは聖なるかな：二

神裂は相対してから、あからさまな立居合の構えを続けている。しかし彼女が差しているのは二メートル近い、末青江すえのあおえに迫ろうかという長刀である。まともに考えれば、一回で抜き放つことはおろか、まともに振り回すことすら不可能である。

では、立居合の構えはブラフか。それにしては、あまりにも気配がゴツ過ぎる。

刃囲に入るもの一切を、たちどころに切り捨てるという確信が、神裂の間合いからは伝わってくる。

「菊池は、強かったですか？」

不意に、神裂はそんな問いを廷兼朗に投げかけた。

「はい。一度目は、負けました」

思わず正直に、廷兼朗は答えてしまった。

何故あの大男にラタナが狙われるのか、そして何故目の前の女教皇は、そんなことを聞いてくるのか。分からないことが多すぎる。

だからこそ今は、身に迫る脅威に身を委ねたい。

冷やかな致命的気配が、不謹慎ながらに心地よい。今にも首か胸に、冷たい鋼がずぶりと入り込んでくる幻覚が久しくて、廷兼朗は少し身を震わせる。

その幻覚へと、廷兼朗は臆せず踏み込んでゆく。彼に合わせて、神裂の右手が掻き消え、鏗鳴りの音が高く響く。

「七閃」

不穏な気配を察知して止まった廷兼朗の足元で、コンクリートがいとも容易く断ち割れる。彼の震脚によるものではない。その割れ方は、あまりに鋭利に過ぎる。

抜刀の瞬間も、納刀の瞬間も見せないたったの一閃が、数え七つ

の斬撃を生み出した。

廷兼朗の左腕が、僅かに裂かれている。彼にとっての被害は、その浅い裂傷のみだった。

それでも微動だにせず、廷兼朗は構えを解かない。どうやら加減されたようだ。皮一枚を裂くに留めてもらっただけらしい。

一刀にて七閃。皮一枚で済んだのは、幸運なのだろう。さすがは一教派の教主を勤めたことのある御仁だ。斬撃一つ、いや七つを取っても、慈悲の心が行き届いている。

その御心を余すところ無く感じ取り、廷兼朗の体が打ち震える。卑しい普通人の自分は、同じ地の上に立つことすらおこがましい。せめて地に頭を打ち付けるほどに平伏し、眩い拝顔を見上げ奉るしかないだろう。

天羽根流、四足の型を取り、低く、低く構える。その奇異な姿を見て、神裂の顔が僅かに曇る。

廷兼朗が前触れ無く、神裂の左へ一気に動く。それを嫌がり、神裂が左足を引いて廷兼朗に体を向ける。

右利きの居合いの死角は、刀を差している左半身である。斬撃の起点となる左半身こそ、唯一の安全地帯だ。

そこへ執拗に、廷兼朗が回りこむ。神裂が体位を入れ替える度に、廷兼朗が左へ左へと食らい付く。

「七閃」

またも神裂が眩き、長刀が振るわれる。数え七つの斬撃が、真横にいる廷兼朗に襲い掛かり、背なのジャケットが四散する。厚い背筋が裂かれ、ぴりぴりと血の滴が飛ぶ。

今度は廷兼朗は止まらず、斬撃の合間にしゃがみこんで体をねじ込み、神裂の白く縊れた腹部に肉薄した。

既に、彼の腕が届く距離にまで、間合いが詰まっている。

「せいッ！」

そうして廷兼朗は、神裂の可愛らしい小さなお臍に、右の中指を刺し入れた。そのまま指を基点に神裂の背後に回り、刀を掴んでいる右腕に逆に決める。

臍に刺した中指を鉤状にして肉へ食い込ませ、右腕も捻り上げる。ようやく神裂が、僅かに呻き声を上げる。

「あんだ、舐めてんのか？」

ややもすれば大人しげで、他人のことを悪し様に言うことは殆どない廷兼朗だったが、この場では、神裂に言わねばならなかった。

「抜刀するフリしてワイヤーって、あんだ、舐めてんのか？」

廷兼朗の慧眼は、神裂の抜刀が全くの嘘であることも、その指使いに紛れて、まるで七回斬ったようにワイヤーで見せていたことも見抜いていた。

元より、刀の鞘の真横まで回り込んだ敵を、抜刀で切りつけることは構造として不可能である。ならばそれは、刀以外の手段による斬撃だと、発想して然るべきである。

しかし廷兼朗はそのことを指して、『舐めているのか』と言ったわけではない。自分自身がしがないレベル0であり、自分よりも格が二段も三段も上の高位能力者を相手にしてきた廷兼朗にとって、自分が舐められることは不快ではなく、むしろ重要な戦略である。

自分が舐められるのはどうでもいい。だが、この女教皇は、事前に菊池の名を出した。それを以って、立ち合う理由とした。

菊池の名で開かれた決闘に、抜刀のフリだの、それに紛れさせてのワイヤーなどといった、ある意味で狡い技をいきなり持ち出してきた女教皇に、廷兼朗は義憤の念を禁じえなかった。

「菊池さんは、そんなことはしなかったぞ！」

彼は真つ向から、全身全霊で、自分を打ち倒してくれた。その菊池の名を持ち出した人間が、このような策を取ることが、廷兼朗は我慢ならなかった。

「貴方が、菊池の何を知っているのですか？」

臍に指を刺され、腕を極められながら、神裂が問う。まるで廷兼朗の技など取るに足らないといったふうには、平静な声だった。

「菊池さんの強さを、俺は知ってる。あの人に負けて、そして、勝つたんだから」

廷兼朗の言葉を聞き、神裂は、ほうと一息ついた。

「そうですか。菊池は、強かったですか」

直後、神裂の体から力が抜ける。それは危険なほどに滑らかだった。

神裂が危険なのではない。腕を極めている廷兼朗が、危険なのがある。

ほんの僅か沈んだ神裂の背中が、正面から廷兼朗に迫る。背中に
よる体当たり。八極拳の套路にある鉄山靠てつざんかうに似ている。

防御した腕を突き抜け、衝撃が廷兼朗の体を通り過ぎ、ぐんと後ろへ押しやられる。

勢いに流され、僅かに宙を浮く間。廷兼朗の横には、あの女教皇がいた。

廷兼朗が吹き飛ぶよりも早く、神裂が鞘を逆手に振るう。

かろうじて反応した廷兼朗が、両手を鞘へ伸ばす。事前に軌道を逸らし、直撃を免れるためだ。

相手の攻撃に、あえて手を出してみせる。巧妙にして勇猛たる回避を、神裂の鞘が、文字通りに畳み込む。巧妙に軌道を変えて逸らしに掛かる腕のほうに、むしろ押し潰されて軌道を変えていく。

（受け、流せない!?）

廷兼朗の受けなど物ともせず、鞘が力づくでめり込んでくる。受けた前腕ごと、廷兼朗の体が真上に引っこ抜かれた。ビルの三階の窓ガラスに直撃し、そのまま中へと雪崩れ込む。

咄嗟に自分の臍を見るように体を縮め、痺れる腕を後頭部に回す。

ガラスの破片が何個か皮膚に食い込む感触があったものの、今の廷兼朗を襲う驚愕は、それどころではなかった。

密着した、完全な零距离から放たれた靠撃。そして吹き飛んだ相手に追いつく反応速度と脚力。激しく運動する相手を的確に打ち据える狙撃精度。

そんなものは、正に物の数ではない。

力。力。力。尋常ならざる、許されざる、度し難いほど単純な力。

あらゆる意味で、この世の力ではない。人間一人に搭載すべき力の許容を遙かに越えて、神裂のそれは遠く彼方へすっ飛んでしまっている。

超能力による力の奔流とは、明らかに一線を画す力。力に対する、異なるアプローチからの解答。

「そうだった。忘れてたよ。天草式なんだから、当然だよな」

魔術。それは、廷兼朗も一端を味わったことがあった。超能力を持たない人間が、超能力と同じような現象を生み出し、対抗しようという試み。あの天草式の老人、諫早にそう廷兼朗は教えられた。

如何なる脚力か、神裂が地上三階建ての窓からするりと入り、廷兼朗の前に立つ。

「あんたも、魔術師なんだな。あんな狡い手を使うから、戸惑っちゃった」

廷兼朗にしては珍しく、敵を前にして泣き言の一つも言いたい気分だった。

その弱音を、神裂は毅然とした言い様で切り捨てる。

「今のは、魔術ではありません。鞘で殴った。ただそれだけです」
言つところの意を全く得ていない廷兼朗に、神裂は無謬な仕草で語りかける。

「私は、聖人なのですよ」

廷兼朗はその言葉の意味を、完全なまでに理解できなかった。

聖人？ 聖なる人。十字教において卓越した活躍をした人物に与えられる称号を、何故眼前の敵は、鬼の首でも取ったかのようにこの場で掲げるのか？

聖人だから、何なのか？ だから強いとでも言うのか？

何れにしる、自分のことを聖人と嘯いて憚らないその神経は、やはり尋常ではない。

「何か、勘違いをされているようですね」

廷兼朗の疑心が伝わったようで、またも馬鹿正直に、神裂は廷兼朗の勘違いを正してくれた。

「聖人とは、身体的、あるいは魔術的記号によって、神の力を身に宿した人物を指します」

「それは、強いんですか？」

「今しがた、見せた通りです。といっても、ほんの一端ですが」

あれをほんの一端と言う神裂の表情に、虚勢の色は窺えない。神の力などという胡散臭いものも、彼女の率直な顔を見ればあながち冗談ではないのだと感ぜられる。

「あらかじめ言わせてもらいますと、私はあなたに魔術を使いません。聖人としての力も、殆ど使いません」

今しがた使ったのは、一端に過ぎないから神裂としては許容範囲なのだろう。それでも、廷兼朗にとっては肯定的な条件に違いない。とは言うものの、既に状況が否定的過ぎて、いつそ懐かしさまで覚えるくらいだ。

「あなたは、私の仲間を殺した。しかし私は、あなたを殺しません。刀を使いやすいようにするためか、神裂は鞘で机や椅子を殴り、周囲の空間を広くする。そんな粗雑な使い方をすれば、鞘の中の刀が曲がるか、がたがたに刃零れしてしまうものだが、彼女は全く頓着していない。」

そのような些事など、聖人たる彼女の与り知るところではないの
だろう。

「体を殺さず、心を殺すとしても、言いたげですな」

「そう思っていただいて構いません。そのために、私はあなたの前
に現れました」

廷兼朗の茶化しを真つ向から受け止め、神裂が構える。相も変わ
らず、形ばかりの居合いの姿勢だ。

「ちなみに、私の攻撃はワイヤーによる『七閃』だけではありませ
んの、悪しからず」

そんなことは、いちいち言わなくても分かっている。あの力を抜
刀という一動作に集約すれば、それだけで恐るべき攻撃になる。

いや、それは攻撃などと呼ぶのも憚られる、あるいは災害と呼ぶ
べきなのかもしれない。

どう転ぼうと、廷兼朗がその身に浴びていい代物ではないことは
明白である。

「ありがたくて、涙が止まりません」

廷兼朗は茶化しついでに、ぼつりと漏らした。

神裂は、廷兼朗が菊池を殺した罪を、精算しに来てくれたようだ。
その圧倒的な力は、まさに人を裁定する神に相応しいものだ。彼女
自身が神の力を受け継ぐ聖人なのだから、そう考えても何ら不都合
はないだろう。

骨の髄まで人間である廷兼朗は、大人しくその判決を待つしかな
い。

「殺すということは、僕も殺していい、と言うことですよね」

それでも、廷兼朗の口から滑り出たのは、挑発だった。

「可能ならば」

「承知の上です」

神裂の了承を得て、廷兼朗が立ち上がり、構える。間接的とはい

え、人を殺めた罪を前にして人は、己の行為を悔い改め、心の限り懺悔しながら胴と首を分かたれるべきなのかもしれない。もしくはその瞬間を、敬虔に待つべきなのかもしれない。

しかし、廷兼朗は待てなかった。羊に例えられるほど大人しい信徒のように、神の裁きを漫然と受け入れることが出来なかった。

胸の前に手を合わせる構えなど、誰にも教わらなかった。

人非人と蔑まれてもいい。鬼畜と貶められてもいい。殺人鬼と罵られてもいい。

元よりそのような批判は、受けて然るべきこの身だ。今更羊の皮を被って、群れに紛れて神の懐に抱かれようなどという、虫の良い行いが出来るはずもない。

せめて、せめて狼のまま、狼なのだと言じたまま、断罪の光に身を引き裂かれることにこそ、幾分かの救いがある。

左手は肩口から前に、右手は臍に添え、右足を僅かに退いた自然体。

廷兼朗は、この祈り方しか知らない。戦うことにこそ、廷兼朗の祈りが込められている。それは彼の『武』こそが、彼の信仰だからだ。

だから廷兼朗は、恐らく神を前にしても、そのような振る舞いしか出来ない。

繰り返す攻撃が、受け流す防御が、廷兼朗の祈りだ。強くなりたという、生きたいという、純然たる願いだ。

それを神に贈る方法を、廷兼朗は知っている。骨身に沁みて、理解している。

一步、廷兼朗は踏み出す。自分の足と、覚悟を確かめるように。

対抗の意思を表した以上、安寧に包まれた判決など望むべくもない。血と苦痛と絶望の汚泥に塗れ、身動き一つ取れなくなったとき

にだけ、彼女は首を刎ねてくれるだろう。
無論、可能ならばの話ではあるが。

抗いは聖なるかな：三

もう神裂は、いちいち抜刀の真似をしなかった。ただ正直に、七本のワイヤーをビルのテナントの中で解き放つ。

極細であるが故に不可視であり、重さなど無いに等しいために鋭敏な挙動を誇るワイヤーが、うねり猛つて一人の人間を襲う。

その真つ只中で、廷兼朗は微動だにしない。生き生きと躍動する七匹の蛇どもとは対照的な無機質さをその身に宿し、神裂の正面に居座る。

そして、一陣の風が通り過ぎた。

廷兼朗の後ろにあったブースが、微塵に切り裂かれて崩れ落ちる。その他に、足元、天井。どこを見ても、無傷である部分を探すのが難しい。

斬撃の風を受けて、廷兼朗は嫌悪も頭に顔を歪めた。

遍く切り捨てられたはずの空間で、廷兼朗のみがその風を回避していた。それが、彼の中の美德を刺激する。

神裂の攻撃は、またも形だけの真似事だった。それがたまらなく、廷兼朗に惨めな思いを残し、逆鱗を一層に逆撫でる。

廷兼朗の体の部分だけを綺麗に残し、ワイヤーによる斬撃を敢行した神裂。動けばむしろ身を裂いてしまう、寸での見切りで行われたそれを、廷兼朗は動かないことで避けてみせた。

廷兼朗には、ワイヤーの動きの一切が見えているわけではない。むしろ全く見えていない。彼が見ているのは、ワイヤーを操る神裂の手、その先の肩、そこに繋がる胸、腰。それらを総合した正中線である。

得物それ自体が見えなくとも、それを持ち、操る人間を見れば、

自ずとその軌道は知れる。御坂の磁力に操られた砂鉄の流れよりも、直接体を使っている分、正直な攻撃だった。

正直ではあったが、好ましいとは言い難い攻撃だった。

戦いには本来、戒律や規範などというものは存在しない。本能や倫理などという枷さえ取り外し、暗澹とした混沌に身を投じることこそ、戦いの本質がある。

戦いというのは、混沌としているのが前提だ。勝ちも負けも強弱も優劣も損得も、本来は存在し得ない。戦いを『戦い』と規定してしまうだけでも、戦いの純潔は容易に穢れ、消え失せてしまう。

それでも人は、戦いに規律を求める。相手にではない。自分に、である。戦いに勝ちと負けという概念を持ち込み、強弱と優劣と損得を査定する。その規律とは、自分の信仰そのものである。その人が何を信じ、そのために何を、どのように捧げてきたのか。それこそが、戦いの中で問われるべきなのだ。

決着の付くその瞬間まで、あるいは死ぬまで、それは問われ続ける。

ならば目の前の女は、この攻撃で、自身の信仰をどのように問いただのように問われたのだらう。相手のすれすれに刃を置いて、我慢しきれずに動いたら、自分から身を切ってしまう攻撃のどこに、彼女の信仰が込められているのだらう。

圧倒的な力を前提に、迂遠で非効率な方法で攻め立てる。確かにそれも戦略の一つだ。他人がとやかく言えることではない。

しかしそれでも、廷兼朗は嫌だった。理屈ではない。感情が、生理が、情念が、それを受け付けない。

せめて能力の限りを稼働させ、限界まで工夫し、最後まで退かず、怯えず、諦めないで、互いをむき出しにしてぶつけ合う。それこそ違えてほしくない、自分だけは違えたくない約定だ。

理想論に過ぎないが、それは廷兼朗が戦いに持ち込んだ、彼の信仰である。

その信仰が、今、脅かされている。聖人などというものに、踏み躪られようとしている。

尊い聖なる人の行うことであるからと、受け入れるべきなのだろうか。神の代理に逆らうべからずと、頭を垂れるべきなのだろうか。（ふざけるな、ふざけるなよ……）

聖人だろうと、神の代理だろうと、そんな形で自分の信仰を踏み躪り、戦いを蔑ろにする奴に、下げる頭などない。そんなことのために、鍛えてきたのではない。生きてきたのではない。戦ってきたのではない。

相手が能力者でも、魔術師でも、聖人でも、それは譲れない。自分の『武』は、もう誰にも穢させない。

「ふうつ」
「
噴き上がらんとする怒気を飲み込むためか、廷兼朗は深く息を吸う。

気を沈め、心を鎮め、体を静める。氣息を充溢せしめれば、自ずから心身和合し、己は自然と合一せん。

神裂の所業は、確かに廷兼朗の信仰とは一線を画く。だからといって気のままに、怒りのままに体を振るえば、万に一つも勝機はない。

その怒気さえも飲み下し、一枚の羽の如く軽やかな、平静にして過不足のない心地で臨まねばならない。さすればその身は、剛力を以ってしても捕らわれず、烈き風にも破かれない。

神裂がワイヤーを繰り、第二波の用意が整う。無論、廷兼朗の準備も、既に万端である。

風を切り、七方から囲い込むワイヤーの、唯一の逃げ場。それは、

操り主への道。

恐れず、怯まず、間を置かず、廷兼朗は正面から神裂に突進する。ぬるりと滑らかな動きでワイヤーを掻い潜り、神裂の元へと肉薄する。

よもやまたも避けるとは。それも、これほど真つ直ぐに。何ら臆する気配を見せずにやってくる廷兼朗に、神裂は幾分か気味の悪いものを感じたのか、すぐさま迎撃に移る。

逆手に握った鞘を、左腰から袈裟に振り抜く。真剣ではないにしろ、脇腹を下から突き上げられれば只ではすまない。

その軌道へ真つ直ぐ、内臓ごと自分を差し出すような勢いで廷兼朗が突つ込む。

このまま踏み込まれば、肋骨は確実に砕ける。さらに振り抜けば、肺腑に折れた骨が突き刺さる。

「くっ」

僅か、神裂の振りが鈍るのを、廷兼朗は見逃さなかった。

黒い鞘が廷兼朗を薙ぎ払い、目の前から彼の姿が消える。だが、神裂の手にそれらしい応えはない。

とん。軽い音が、上から響く。

そこに居るのは、四肢で一本の鞘を押さえ込む男。全身余すところなく鞘を押さえ、衝撃を逃がし、相手に薙ぎ払った手応えさえ残さず、その鞘に乗ってまんまと間合いの内に入る。

一瞬とはいえ、それは紛れも無く天羽根流の絶招歩法『羽』だった。

未だ至らぬ身なれど、限定された状況で、しかも一度くらいならば、実戦に耐え得る運用は可能である。

「ぎいつ！」

鞘を足場に、頭上から廷兼朗が向かい来る。

ほぼ真上から繰り出される、右の抜き手。狙いは目か、鼻。それに潜らせる形で、左の背刀。こちらの目標は喉。何れも殺意の充満した、最短距離の急所狙い。

神裂は右手を縦に掲げ、両手の攻撃を防ぐ。

防御する腕に絡みつく、ねっとりとした人肌。その暖かさが、全身に悪寒を募らせる。顔の急所狙いは先駆け。後詰は、防いだ右腕への逆捕。

手首と肘を逆に極め、廷兼朗は天井を蹴る。天羽根流柔術逆捕『ひえんのついはみ飛燕啄』である。腕を逆に極めたまま落下し、素早く関節を破壊する。

改心の技の入りを確信し、さらに加速して落下する廷兼朗の体が、ぴたりと静止する。

廷兼朗の体重が、神裂の右腕の腕力だけで支えられていた。それも、関節が不自然な方向に曲がっている右腕で。

逆を極められた状態で、人間一人を持ち上げる。人間の関節の可動域や耐久などまるで無視した、まさに神の御業である。

「ぬああッ！」

神裂が吼え上げ、大きく胸を広げる。まるで槍投げのような、大胆なフォームである。投げられるのは言わずもがな、廷兼朗だ。

腕にしがみついていた廷兼朗が、弾丸の如く射出される。少しでも腕に絡み付いたのは、微かな抵抗でしかなかった。

パーティションを幾重も薙ぎ倒し、パソコンや書類を押しつけて、ようやくその体は停止した。

片膝を立てて、深呼吸を繰り返す。投げられた直後に体を丸めたおかげで、致命的な衝撃は受けなかったが、それでも節々が痛む。

しかし廷兼朗は、慌てて立ち上がって構えるようなことはしなかった。それだけの余裕は、十分に持っていた。

廷兼朗に見守られながら、神裂が膝を屈して倒れこんだ。

関節技を、力で返す。力量に差がある場合、確かに有効だろう。しかしそれでも、曲がっている関節の方向や力を入れる方向は、きちんと見極めなければならない。

力とは必ずしも、粗雑さを伴うわけではないし、伴う必然性も皆無である。それを怠り、無理に投げに入った神裂が倒れたのは、当然の仕儀と言えた。

何せ彼女は自分の膂力で、後頭部を殴りつけたのだから。

あの投擲のフォームを形作る時間。廷兼朗は予め体勢を変え、投げられる勢いをそのままに、神裂の後頭部に膝を当てていた。

かなり変則的だが、一応は交叉法に則った攻撃である。相手の力を利用し、相手を打ち倒す。その理は、聖人であっても覆せないものだったらしい。

しかも体勢を変えることで神裂の腕はさらに捻られ、廷兼朗が余計な力を入れずとも、投げた直後に肩、肘、手首の関節が破断する感触を、彼はしっかり記憶していた。

倒れるのを確認してから、ゆっくりと廷兼朗は立ち上がり、机の上を歩いて神裂へ寄る。

これで動きそうになれば、すぐにでもラタナの元へ向かわねばならない。ラタナが廷兼朗より腕が立つとは言え、このような連中を相手にするなら、多人数で臨むのはむしろ基本的な前提だろう。

『カウンターメジャー 対抗手段』のコンセプトとはいえ、徹底して一人で対抗している廷兼朗こそが異端なのだ。

あと一つ、机を越えるだけというところで、廷兼朗は立ち止まる。彼の注意は、神裂の右腕に注がれていた。

腕が折れていない。可動域を超えて曲がってもいないし、腫れも赤みも確認できない。無事そのものの形で、神裂の体に繋がってい

る。

瞬間、廷兼朗は迷わず横に飛んだ。

その足元から、机の破片が湯気のように立ち昇る。下から競り上がって来たワイヤーによる切断である。

あのまま机の上に留まれば、一回目のワイヤーは避けられたとしても、乗っている机の脚を切り離され、足場を失くし、挙動の自由も失うところだった。

廷兼朗は、迂闊に机の上から近づいた愚を反省した。

通路に降り立った廷兼朗を、今度は神裂が襲う。折ったと思っていた右腕で、高々と鞘を掲げている。

大上段から振り下ろされる鞘を転がりながら避けると同時に、手近にあった机に手を掛け、脚を下から突き上げる。

それは正確に、神裂の喉へ命中した。しかし、廷兼朗の脚は曲がったままだった。

(打ち抜けない!?)

脚を基点とした全身の力が、神裂の首の力に抗えずにいた。

(聖人とは、これほどか)

関節技さえ跳ね返し、渾身の蹴りにさえ耐え得る、圧倒的な力。

国宝級、いや世界遺産に登録すべきだと思えるほどに感動的な力だ。強い。単純に、力が強い。

物理的に、抽象的に、精神的に、象徴的に、強い。

神は死んだなどと、昔どこかの学者がのたまっていたが、今のところは完全無欠にご健在のようだ。全く、息災で何よりである。

「よくぞ人の身で、ここまで練り上げたものです」

顔を蹴り上げられながら、神裂は意に介さず、廷兼朗を褒め称える。

「超能力者でもなく、魔術師でもない。ましてや聖人でも、魔人でもない。それでいて、これほど……」

菊池が不覚を取るのも、分かります。神妙な面持ちで、神裂は小さく呟いた。

「神の力も、贈り物も、魔なる術を持たずとも、人とは、これほど強いのですね」

脚を退き、体勢を整える廷兼朗を、神裂は涙に滲んだ目で見つめていた。

彼女の吐く言葉と涙が、またも廷兼朗の神経に障る。

その強さとやらを、今しがた踏みだしておいて、この女は何を言っているのだろうか？ その誉め言葉は、逆説的に自身の優位を確かめているだけなのに、無垢な顔で、まさに聖人のように澄み切った顔で、そんな戯言をのたまうのは、何故だろうか？

まるで、元からして強い自分は、弱い貴方が羨ましい、とでも言うかのようだ。

「……僕が強いと、言いましたね」

それは廷兼朗にとって、侮辱以外の何物でもない。人間の強さをいちいち論う。その行為にこそ、力を持った人間の傲慢が表されている。

人間は、強い。元からにして、強いのだ。それをいちいち指摘する神裂は、人の強さを分かっていない。それは翻ひるがえつて、人の弱さにも、思いを巡らせていないことを表している。

弱さと強さは表裏為す一枚であり、器に注がれて混ざる一滴である。一方を取り上げ弄つことの、何と愚かしいことか。

弱さが強さであり、強さが弱さである。どちらかに目を向ければ、それは両方を見失うことになる。弱さにも、強さにも、等しく目を配り、大きく包んで懐に抱けたのなら、その人は、自身の限界を極める。

「僕が強ければ、それを上回るあなたは、強いとも思っているのですか」

静かに、地の底から昇るように、廷兼朗が言う。

足首を内側に入れ、脚を外に回し、腰を落として腕を内側に回す。外に向けた手を、呼吸と共に、扉を押し開くように広げていく。こうすることによって主に背中の中の筋肉、最長筋、棘筋、腸筋などの脊柱起立筋と呼ばれる筋肉群を刺激し、体幹を屹立たせる。

空手で言うところの『三戦立ち』である。

余計な緊張も、過度な弛緩も無くなれば、体は本来の機能を取り戻す。血液やリンパ液が、体の隅々まで流動しているのが分かる。内臓がぜん動し、筋肉が脈動する。本来は知り得ない自分の体の動きが、明示的に把握できている。

体中から取り入れた気を丹田に凝らせて、ゆっくりと内転させて練ってゆく。その練気を全身に行き渡らせ、足の爪から髪の毛一本に至るまで自身を充たしてゆく。

トゥエルブ・サイン
近似正中線。 99.99999999999999%まで正された、理想的人間像。

「あなたに倣って、予め言っておこう」

背筋をこれ以上なく垂直に近づけながら、厳かな声音で廷兼朗が言った。

「今から行う技は、過剰殺人オーバーキルになるということで、禁止されていたんです」

穏やかな、平らか極まる声で、何やら不穏なことを言い始めた廷兼朗に、神裂は眉根を顰めてみせる。

「別に、出し惜しみしていたわけではないんです。これは起死回生の一手ではない。そういう都合のいいものじゃない。単に、人を殺すにしては過剰だという、それだけのことです」

「必殺技、ということですか」

神裂の反応が、余りにも的外れすぎて、廷兼朗はくすりと笑って

しまった。

「必殺などと、とても言えない。超能力で防げるし、魔術でも、防げるのかもしれないから、間違っても、必殺の文字は掲げられない」
言い終えると、廷兼朗は静かに両手を合わせ、指先を下に向けながら、臍の辺りに当てた。

そのまま、廷兼朗は一步ずつ、決して急ぐことなく踏み出してゆく。

祈りの手を逆さにし、腹に当てる構え。中段に手を置く構えというのは珍しくないが、祈るように合わせながら腹に密着させては、防御など臨むべくもないだろう。

落ち着きを払った静かな構えでありながら、防御を一切捨てた、尖鋭的な構えだ。己の攻めを成就させること以外の機能が、根こそぎ省かれている。

確かに、このような構えからしか行えない攻撃は、汎用性に欠けるだろう。いちいち相手とロシアンルーレットを行うようなものだ。無駄を省きすぎて、そのコンセプト自体が無駄へと堕した代物だ。

そんな唾棄すべき構えで、廷兼朗は神裂に近づく。

抗いは聖なるかな：四

彼は死ぬ気か！？ 神裂は真つ先に、廷兼朗の正気を疑った。

自分が鞘を振るう様を見なかったのか。ワイヤーを繰る様を忘れたのか。神の力の一端を浴びて、何故まだ彼は向かってくるのか。

建宮から、字緒廷兼朗なる人物と、その顛末を聞いたとき、神裂の胸に去来したのは、途方も無い悔恨の念だった。

自分が出奔した後に、新たな宗派を築き上げた菊池。頑ななまでに天草式を守ろうとする意志から、零れ落ちてしまった者たちを受け止めるための、受け皿たろうとした菊池。『救う』という信仰に、天草式とも、神裂とも違う手法を試みた菊池。

その彼を、素手にて打ち倒した人間が、字緒廷兼朗だった。その思いも、信仰も、矜持も、全てを薙ぎ倒した人間は、魔術師でも、超能力者でもなかった。

徹頭徹尾、只の人間だった。

全ては自分のせいだ。自分が天草式を抜けたが故に起こった災禍だ。自分の幸運が巡り巡って、呼び寄せた不運の塊だ。

菊池が天草式を抜けたのも、只の人間に殺されたのも、死んだのも、全ては自分の責任だ。

責は、取らねばならない。過ちは摘み取らねばならない。例えそのために、またも自分の身に幸運が襲いかかるうとも、退きはしない。恐れはしない。

会わなければならない。菊池を殺した、人間に。

その覚悟で、神裂はこの度学園都市を訪れた。

彼女の頑なさこそ、天草式のそれであり、菊池が忌避したものだ。つた。

体を正面に向けたまま、にじり寄る。今の廷兼朗の構えは、近似トルヒ正中線ルジラインの研究の中で生まれたものである。本来は正しい姿勢を身に付ける練習用の型であり、実戦の投入に耐え得るスペックを有していない、とされている。

実際それは的を射ている。この構えは近似正中線の維持以外に、殆ど機能を持たない。移動も攻撃も防御も行わず、ただ練習のための構えだからだ。

しかしそんなものでも、然るべき運用を行えば、きちんと機能するものだ。

そして今が、その然るべき時である。

薄氷に水を張り、細いガラスの筒を掲げ持っているような、危うい感覚。

重力の貫く軌道にして、人体が最も正された姿勢。正中線。それはつまり、人間が最も安定する状態でもある。

それを目指すことの、なんと不安定なことか。身に付けた瞬間、体も心もぴたりと正され、攻めるも受けるも完全となる。そんなものは、幻想でしかない。

正中線を身に付けたから、揺らがないのではない。揺らがないことで初めて、正中線を身に付ける準備が整うのだ。

『カウンターメジャー 対抗手段』 計画の成果でもって、十字教の聖人と対峙する。

その研究成果が、廷兼朗の体から神裂へと提示される。

人体の破壊という行為を、人間は長い時を掛け、あらゆる角度からアプローチしてきた。殴打、蹴撃、投落、曲折。武器を用いれば、破断、刺突、射撃など、近代兵器を含めればそれこそ枚挙に暇が無い。

それほど人体の破壊というのが、人間にとって魅力的なテーマだったという証左だろう。

そんな歴史と智慧を受け、廷兼朗と網丘が出した解答の一つが、今、提示されようとしている。

当たるか、当たらぬか。当たったところで、勝つ保障はない。だが当てねば、負けるしかない。

最初から、ワイヤーの間合い。今はもう、鞘の間合い。あるいは、刀の間合い。その致命的な間合いへ、廷兼朗は大きく踏み込んだ。

神裂がワイヤーを繰り、周囲ごと廷兼朗を破断しようとする。だが既に廷兼朗は知っている。

指。視線。重心。その全てが偽りで、単なるパフォーマンスに過ぎないことを、既に見抜いている。否、それどころか、この立ち合い自体が、既に茶番へと墮しているのかも知れない。

髪や服が弾け飛ぶが、まるで意に介さず、廷兼朗は進む。

そこへ、黒塗りの鞘が真横から襲う。

ワイヤーで逃げ道を限定されたのだから、絶妙なタイミングで迎撃されるのは当然である。

こめかみを殴打し、昏倒させるつもりなのだろう。とはいえ、この距離とタイミングでは、恐らく神裂自身でも加減が利かないことだろう。彼女の膂力で打ち抜けば、人間の頭蓋など容易に碎けてしまう。無論それは、当たればの話だ。

「くっっ」

神裂が苦虫を噛み潰すような顔になるのを、廷兼朗は見逃していなかった。

唸りを上げて迫る鞘が、もみ上げに触れるか触れないかの間で動きを止めた。

鞘を掲げたまま、神裂が静止する。何もかも止まってしまいそうな空気の中、神裂が小さく息の呑む音だけが聞こえた。

廷兼朗は喜ぶでもなく、慄くでもなく、失望するでもなく、馬鹿にするでもなく、ゆつたりと神裂の懐に入り込み、当然のように右の人差し指を、彼女の臍に差し入れた。

それが、『対抗手段』の解答だった。

神裂は臍に指を刺されても、それほど動揺していなかった。

確かに自分が決定的な隙を晒し、このような事態になったが、それでも廷兼朗の攻撃が決定的だとは言いがたい。

小さな臍へするりと攻撃を決めたのは見事だが、聖人ということ抜きにしても、それは過剰殺人には程遠いささやかな攻めだ。単に臍へ指を入れられた程度とさえ言えばそれまでである。多少の異物感に伴うが、この状況下では十分に我慢の利く代物だ。

鞘を構え直し、打ちつけようとしたとき、神裂の体内で、内臓が爆裂した。

直後、体の中から、堪らなくこみ上げてくるものがあつた。口と言わず鼻と言わず耳と言わず、それはどうしようもなく洩れ出ていってしまう。

血の混じった吐瀉物が、廷兼朗に浴びせられる。

神の恩恵を賜り、極めて強靱を誇る聖人の内臓が、ずたずたに傷つけられた。

そしてまたも、神裂の内臓が踊り狂う。まるで自分の体内が、直接に手で掻き混ぜられているような衝撃である。体の内から、殴られているような感覚だ。ただ臍に指を刺されているだけなのに、内臓の全てを驚づかみにされている。

声さえも上がらない。横隔膜も声帯も、衝撃の余波でとつくに麻痺してしまっている。四肢も同様だ。まるで毒が染み渡ったかのように、自分の体が言うことを受け付けない。今はそれどころではな

いのだと、神裂に訴えてくる。

人間の肉というのは、非常に優れた衝撃緩衝材である。時に固く、時に柔らかく、内臓などの重要器官を保護している。

つまり、人間の肉を通して内蔵を傷つけようとする試みは、必ずしも効率的ではない。それ故に、防護の薄い急所などを狙うわけだが、それすら最善とは言い難い。より完璧を期すのならば 内臓を直接打撃することが望ましい。

それを目指したのが、廷兼朗が行っている攻撃だった。

相手の穴に指を刺し込み、そこから衝撃を伝達する。より防護を排し、内臓に近い位置から体内を直接殴打する。

それを可能とするのは、精度の高い正中線による優れた衝撃伝導率と、丹田に溜めた気を如何なる場所からでも放つ、中国拳法で言うところの発勁の術理。

しかも指を刺した状態では、勢いを付けるだけの距離を確保できないので、微塵も体を動かさない暗勁を用いている。

それによって、打撃力を直接内臓に伝達することが可能となっている。

本来ならば一撃で、諸々の内臓を腹腔内で四散させてしまう。殆どそれで即死だが、万に一つ生き残ったとしても、内臓器官に重大な障害が残り、日常生活に支障をきたすのは確実である。

禁断の体内発勁。能力者とはいえ、学生に過ぎない者たちには、行うを憚る技である。

それを廷兼朗は全力で、何度も行っていた。

とつくにどの内臓も破裂し、絶命して然るべきなのに、神裂は気絶はおろか、闘志さえ失っていなかった。

なので廷兼朗としては、せめて彼女が倒れるまで、内臓を殴りつけるしかない。

それが廷兼朗から、神裂への返答だった。

もう幾度、指から発勁したことだろう。体の中に満ち満ちていた気が、右の中指からどンドン抜け出していくのが分かる。

それでも構わない。この途方も無く、力の底も見えない相手に、出し惜しむ余裕など廷兼朗は有していない。

だから例え、指が吹き飛ばうとも構わない。この女の腸が弾け飛んでくれるなら、喜んで指一本でも腕一本でも差し出してみせる。

もうそんな機会は、来ないかもしれないのだから。

鞘を頭部に向けられた時、廷兼朗はきちんと死を直感していた。

薄いこめかみの骨がガラス細工のように碎けて柔らかな脳漿に突き刺さり、そんなスタスタの前頭葉ごと、鞘が薙ぎ払ってくれると思っていた。

しかし一方で、それは有り得ないという思いも、廷兼朗の中には同居していた。

理由の如何は一切分からないが、この神裂と名乗る聖人は、自分から立ち合いを求めておきながら、こちらの命を取ることはないと公言していたし、事実、それを行動で示してくれた。

それを信じ、廷兼朗は無事に攻撃を決めることが出来た。

こんな真似をしなければ、攻めの一つもままなら無い自分を恥じるべきか。事此処に至っても、その主張に全くのブレを見せない神裂の信仰を誉めそやすべきか。

今するべきは、その何れでもない。目の前にいる聖人が動かなくなるまで、己の気を流し込むだけである。

またも指先から勁力を発した時、廷兼朗は足元から上る不穏な気配を察知し、指を素早く引き抜いてその場から転げるように退いた。

廷兼朗が後ろに倒れこむのと同時して、先ほどまでいた床がぱっくりと割れ、机や椅子が神裂諸共飲み込まれていった。

体内発勁は暗勁を用いている。見た目には体を微動だにしていなが、それは発生するエネルギーが小さかったり、抑えていたりするわけではない。むしろ外に向けられる余計なエネルギーの消費を控え、自身の体の中で効率よく伝達している。

その発勁が同じ場所で幾度も行われるのには、コンクリート作りの床も耐えかねたのだろう。

見事に碎け散った穴から覗くと、そこには瓦礫の上に転がる神裂の姿があった。今すぐ動き出す気配は無いが、胸が上下しているの
で、生きているのが分かる。

あれだけやってまだ死んでないのが、全くもって未恐ろしい。ここで首を頂きたいところだが、今の廷兼朗では、それも叶わない。既に気という気を根こそぎ吐きつくし、右手の中指は毛細血管が破裂し、真っ赤に膨れ上がっている。

「殺すに能わず、か」

あんな理不尽の塊は、この際放って置こう。今は、ラタナを追わなければ。

廷兼朗は踵を返すと、もう未練の欠片も無いように、テナントの出入り口へと走り去っていった。

祈りを鳴らして：ー

廷兼朗と別れてから、ラタナはひたすら走っていた。よほど広範囲に人払いの結界を敷いているのか、どこまで行っても、人がいない。

走るラタナの目の前で、ショーガラスが突然に断ち割れ、破片が歩道にばら撒かれる。それを大きく飛び越した時、彼女の黒髪がばさりと跳ね上がる。

肉の焦げるような匂いが、鼻を突き上げる。

必死に逃げるラタナとは裏腹に、落ち着きを払った所作でカートリッジを交換し、土御門はゆっくりと彼女を追い詰めていった。

とりあえずここまででは、想定通りに事は進んでいる。偶然ながら窓の無いビルの近くにまんまと現れたラタナを発見し、神裂に無理を言っ、彼女の不得手とする結界魔術を発動させてもらい、その中に閉じ込めることに成功した。

元より字緒廷兼朗と立ち合う目的で今回学園都市を訪れた神裂に、廷兼朗の足止めを行ってもらい、こちらは悠々と目標を補足できた。上手くいつている。偶然が重なり合い、こちらに優位な状況を作ってくれている。少し上手く行き過ぎている気がしないでもないが、今はこの状況を最大限利用するべきだ。

そろそろ結界の有効範囲ぎりぎりである。この先の公園にて仕留めるのが上策だろう。

「もう逃げるのはやめたのか？」

公園の真ん中。見晴らしの良い広場に、ラタナは佇んでいた。それを諦めと取ったのか、土御門が揶揄する。

「だって逃げたら、お前を殺せないから」

挑発に挑発を返し、ラタナが酷薄に笑う。それにはどこか、人を

人とも思わぬような、不快な色が現れていた。

「俺を、殺す？ あんたの目的は、俺だつてののか？」

訝しむ土御門を見て、ラタナの顔が軽蔑に歪む。

「全く、ジープン《日本人》ってのは、どいつもこいつも……」

そう吐き捨て、両腕を高く掲げて構える。ターンガード・ムエイだ。

「お前の持っている銃は飾りなの？ そうじゃなかったら、さっきみたいにぶっ放しなよ」

「その前に幾つか、答えてもらおうぞ」

くふつと、構えながらラタナはまた笑う。土御門の言い様が可笑しかったのというよりは、もう答えるのも面倒だと言わんばかりの失笑だった。

「あの男。字緒廷兼朗を、どうやって味方につけた？」

土御門の質問に答えず、ラタナはしゃがみながらくると腕を回し、大きく左肘を振り降ろす。その大げさな仕草は、ムエイの型であり、ワイクルーの動作でもある。

「学園都市に来た目的は何だ？」

右足を大きく上げ、降ろしながら右肘、左膝へと繋いでいく。そして今度は右肘をしゃがみながら振り下ろす。

「答えろ、ラタナチャイ・シングレック！」

土御門の苛立ちなど斟酌せず、ラタナは踊り続ける。一心不乱にワイクルーをこなし、神への祈りを捧げ続ける。その最中、ジープンの質問に答えることなど出来ない。

いい加減、情状酌量の余地は消えた。あとは体のどこかに銃弾を叩き込み、拘束してから聞き出すとしよう。

そう思い、引き金を絞るはずだった手が、ぴたりと固まった。

ラタナの舞いに合わせた音楽が、聞こえてくる。どこか懐かしい風情を持つ、タイの明るい民族音楽が、日本の学園都市の一角を満たしている。

楽器など、これっぽっちも見当たらないのに。

「何を、何をしゃがった!？」

狼狽を押し隠しながら、またも土御門は問う。そして今度こそ、ラタナはそれに答えてくれた。

「ジープンってのは、とろけそうなほど甘い」

踊りながら、ワイクルーを奏でながら、勇壮なムエタイの型を行う。

「ちょっと脅してやっただけで、攻めが鈍る。お前も、あの男も、ジープンってのは、どいつもこいつも馬鹿ばかりだ!」

さも嬉しそうに叫ぶと、ラタナは高く飛び上がり、回転を加えながら肘を振り上げた。

そんなモーシヨンの大きな攻撃など、正直に喰らってやる必要は無い。そんなものより、銃弾のほうが幾分も早く敵に到達する。

しかし今度も、土御門は引き金を絞れず、あまつさえその場から飛び退き、まんまと攻撃の機会を逸した。

そして公園の広場に、巨大なクレーターが出現していた。

あの一瞬、肘を振り下ろすラタナの後ろに、只ならぬ影が現れていた。巨大な丸太のようなものが土御門の居た場所に、真上から肘もろとも地面に突き刺さった。

「ようやく、馬脚を出したな」

あれが、ラタナの魔術なのだろう。自身の攻撃に何かを付随させ、撃滅する。一撃でコンクリートを断ち割ってみせたのを見ると、相当な突破力を秘めている。単独で学園都市に潜入してみせるくらいだから、そのような能力を見込まれたことなのだろう。

「そういう台詞は、足が震えてないときに言うことね」

「この程度で、震えるものかよ」

ぎりりと奥歯を噛み締め、膝立ちのまま両手で銃を構える。そして今度こそ、土御門は引き金を絞ることが出来た。

もう土御門に猶予は無い。確実に殺傷するべく、眉間と腹部に分

けて銃弾を殺到させる。

「兵は拙速を尊ぶって、この国の言葉じゃなかったかしら？」

銃撃を前にして、その態度こそ拙速とは程遠いものだった。

それでもラタナは、数え二十発の9mmパラベラム弾を、肘と膝で例外なく撃ち落してしまった。

「カーンクンクローン・インドラ《インドラ神の加護》」

金属音が空しく響く中、ラタナがぼつりと呟く。

発射された銃弾を弾くなど、如何なる人体の運用を以ってしても不可能だ。ならばそれは、魔術以外の何物でもないことになる。

事実、ラタナの背後にはうつすらと、褐色の巨体が滲んで見える。蜻蛉のように揺らめきながら、赤い髪が靡いている。そして手に金剛杵こんごうしを携えた姿に、土御門は驚愕の眼差しを向けていた。

「何だ、それは……」

背後霊のような影を見て、土御門がラタナに尋ねると、彼女は露骨に顔を歪め、侮蔑も顕に吐き捨てた。

「はあ？ インドラ様を知らないとか、マジ有り得ないんだけど。」

そんなこと聞くなんて、あんた恥ずかしくないわけ？ 聞くは一瞬の恥とか思ってるんでしょうけど、恥は恥よ。この恥さらしめ、それでよく陰陽博士などとのたまえるわね」

陰陽博士と呼ばれて、土御門が一層に目を剥く。

「俺のこと、知ってるのか？」

また質問を重ねられ、ラタナは苛立ちながら、青筋の浮くこめかみを労わるように手で押さえた。

「いい加減、あんたらジープンを相手にしていると、頭が痛くなってくる。恵まれて、満たされて、何もかも与えてもらえらると思ってる」

敵にさえ、あれやこれやと尋ねる。いい加減にしてほしいものかわ」

土御門に向かって言っているというよりは、単なる独白に近い言葉だった。だからこそ、そこにはラタナの本音が含まれているのか

もしれない。

構えをターンガード・ムエイに戻し、背後霊とともにラタナが前に出る。

事が上手く運んでいるなどと、とんだ誤解だった。どうしてかは分からないが、ラタナは二重スパイを務める自分の素性を理解している。ならば彼女は、既にこの学園都市の相当な部分まで知っているようだ。

ならばなおのこと、この女を逃がすわけにはいかなかった。

祈りを囁らして：二

土御門は己の迂闊さを呪ったが、それは今悔いるべきことではないということも、きちんと弁えている。

カートリッジを銃底に叩き込み、左手でスライドさせた時には、既に右手が相手の急所を捉えている。まさかこれで仕留められるとは、土御門も考えていない。銃撃はあくまで牽制。相手の気を削ぐ意味合いしかない。

土御門は乱射しながら、十メートルの距離を一気に縮める。ラタナの肘や膝と同期して振るわれるインドラ神の腕を掻い潜り、その足目掛けて飛び込む。

背後霊を使つて攻撃するのなら、その背後霊の間合いの中に入つてしまえばいい。

これで蹴りを放ってくれば、受け止めると同時に足首を折って終了だ。あとはイギリス清教に連れて行くなり、学園都市で監禁するなり、手段は幾らでもある。

ラタナが右足を振り上げる。予想通り土御門の接近を嫌って、蹴りで突き放しにきた。

土御門は防御を固め、蹴りを受ける体勢を整えていた。その十字に固めた腕を、予め決められていたかのように、ラタナの足が横から叩く。

「うぐっ」

備えてはいたものの、それは土御門の予想を上回る威力だった。かろうじて踏みとどまったものの、出足が僅かに鈍る。

だが、既に足は捕らえている。あとは足首を直角に曲げてしまえばいい。

間もなく、肉に包まれた骨が折れる、嫌な音がした。土御門の、左の耳元で。

ラタナの右肘が、土御門の鎖骨に突き刺さっていた。ただでさえ細い鎖骨に、飛び込みながら肘を振り下ろされたのだから、折れるどころか、その下にある肺にまで衝撃が奔る。

肉切り包丁に形容されるムエタイの肘が、陰陽博士の左肩をざっくりと斬り付けた。

鎖骨の保持を失った左腕が、がくりと下に落ち、右足の拘束が揺るむ。土御門は、それでも離すまいと右腕を絡めるが、引き戻される足の力には勝てず、むしろ引つ張られ、体勢を崩される。

そんな上半身を立て直すように、ラタナが左の膝で土御門の顔面を突き上げる。それは丁寧に、彼のサングラスを的確に捉えていた。サングラスの破片が突き刺さる痛みより、後頭部のほう痛みが痛む。膝の衝撃が、見事に貫通していったのだろう。

不意に、右手に衝撃が走る。そういえば拳銃を持っていたことを、土御門は今更ながらに思い出していた。しかしそれも、弾かれてしまったては意味が無い。

幸いにもサングラスの破片が刺さらなかった右目で、土御門はラタナを見据える。

蹴りで相手呼び込み、カウンターで肘を落とす。典型的なタックルへの処し方だ。それをまさか自分が、陰陽博士と呼ばれるまでになった自分が被るとは。

背後霊による攻撃が全てだと、勝手に決め付けた自分の落ち度だ。体術ならば必ず仕留められると高を括った、自分の失敗だ。

土御門はその性質上、魔術をあまり行使しない。二重スパイとして学園都市に潜入するため、彼は能力開発カリキュラムを受けていた。その影響で、本来相容れない魔術と超能力を一つの体に宿している。

その代償として、魔術を使えばいつ死んでもおかしくない体が、

彼に与えられた。魔術師でもあり、能力者でもある半端な体が、土御門の武器だ。

故に土御門は、魔術にも超能力にも拘らない。目的を遂行するためなら、今回のように拳銃なども使用するし、場合によっては他に助勢を求める。

それを卑怯卑劣と罵って、地に這い蹲る趣味を、土御門は持ち合わせていない。

だからこそ、彼は倒れない。ここで負けを認め、互いの健闘を讃え合おうとは、露ほども考えていない。

最後の最後まで、喰らいついてみせる。元より無傷でいられるとは思っていない。あの神裂を巻き込んでおいて、自分だけのうのうとしてはいられない。

「背中刺す刃。それが俺の魔法名だ」

「ふうん」

ラタナは別段気を取られることもなく、左足をすりりと前に出し、奥の右足を一直線に、土御門の首に叩き付けた。

既に左腕が上がらないうえに、左目を潰されていた土御門には、防ぐ術も、身構える間も与えられなかった。

いつそ気持ち良いくらいに、相手のことなど一顧だにしない蹴りだった。腹に喰らった時とは比べ物にならない衝撃で、土御門の意識は頭の外へと追いやられてしまった。

陰陽博士と呼ばれた男も、こうなっては形無しというものだろう。魔術も使えず、能力といえば無能力《レベル0》の肉体再生。なるほど体術や拳銃を用いるのは、致し方ないというものだ。

しかしその体術も、ラタナのムエタイの前では、些か目劣りする代物だったらしい。

土御門の金髪をぞんざいに掴み、ラタナは彼を引きずってゆく。この結果は当然だ。こんな恵まれて、満たされて、醜く肥え太った国に生まれた人間　日本人ジープンに負けるはずは無い。ムエタイでも、魔術でも、後れを取る理由が無い。

こんな情弱な人種に、珠玉の勝利を齎す小さな獅子は負けない。

殴られることも、蹴られることも、撃たれることも、まるで怖くない世界。そんな素晴らしい世界が、ラタナの住んでいた世界だ。そこで怖いのは、死ぬことだけだ。殴られず、蹴られず、撃たれず、働けず、食えず、戦えず、ゆつたりとした羽毛のように、死は覆いかぶさってくる。

それは柔らかくなくせに、大きく広がって、いくら跳ね返しても纏わりついて、弱った奴を真っ先に包み込む。

貧困や飢餓という言葉を知る頃には、体には骨と皮しか残っていないなくて、そんな大きなものを跳ね除ける力は、誰にも残されていないかった。

こんな世界から抜けるには、体を売るしかない。ムエタイという形か、身売りという形か。

彼女は物心ついたときから、バナナの木を蹴っていた。血の飛沫が飛んで、肉が削げ、骨が見えても、彼女は蹴り続けた。

だがそのうち、彼女は気が付く。蹴るためには、腹に食い物を入れなければならぬ。食い物を入れるためには、働かねばならない。働くには、ムエタイで強くならなければならない。ムエタイで強くなるためには、食べなければならない。

堂々巡りの矛盾は、彼女の気力を削ぐのに十分な役割を果たしてくれた。そうして力尽き這い蹲るまで、幾らも時間は要らなかった。

死にたくない。死にたくない。死にたくない。

殴られてもいい。蹴られてもいい。撃たれてもいい。働かせて。食べさせて。戦わせて。

私を、生かして。

最初、それは幻覚だと彼女は思った。幽霊か何かが、もうすぐ仲間になる自分の事を、からかいに来たのかと思った。

立派な鬘を生やした獅子の頭を持つ人間が、彼女を見下ろしている。

「ダスユよ」

呼びかけられ、顔を獅子頭に向ける。

ダスユ。彼女のいた村人が、他の村の者にそう呼ばれていたのを、彼女は覚えている。その蔑みを込めた目まで、ありありと思い出せる。

「何？」

獅子頭がしゃがみ、牙が間近に迫る。いつそ牙の一噛みで首をもいでくれたら、この苦しみから逃れられるだろうか。

「死ぬのか、ダスユよ」

死ぬのか、と獅子頭は聞いた。死にそんな目にあっている自分に、死ぬのかと聞いてきた。

「死に、たく、ない」

死にたいわけがない。死にたいから、死にかけているのではない。死は、死にたくないものにしかやってこない。死にたくもないのに、死はへそ曲がりだから、死にたくないものを死なせていく。

「死にたくない。私は、死にたくない。助けて、獅子の頭の化身^{ナラシンハ}」
動くこともままならない体で、精一杯に叫ぶ。

ナラシンハと呼ばれた獅子頭は、満足そうに頷き、厳かな声で言った。

「今よりお前は、ナラシンハの子だ。全ての精霊^{ヒト}はお前に従い、お前を助けるだろう」

かあつと大きな口を開けて、ナラシンハは宣言する。

「お前は、ピーと共に祈らねばならない。生けるとき、喰らうとき、戦うとき、お前はピーと共にナラシン八を祈り、ナラシン八と共にピーを祈らねばならない。お前はピーと共にあり、お前の魂は、お前のものではない」

正に肉食獣の如く響く声は、己の急所という急所を驚つかみにさ
れているような、致命的な感觸を伴って、ナラシン八の言葉を保障
する。

「祈りを止めたとき、私はお前を喰らうだろう。お前の腸で卜占を
行い、十の化身がお前を引き千切るだろう」

それでも、構わない。自分を救ってくれるなら、幾らでも祈って
やる。幾らでも捧げてやる。私を生かしてくれるなら、それが何で
あろうと構わない。

「私は、お前の子だ、ナラシン八！」

「祈りを欠かすな、我が子よ。珠玉の勝利を齎す小さな獅子よ」

ラタナチャイ・シングレック

忠告し、ナラシン八は哄笑を残してその場から消え失せた。

それから幾らの時間を経ず、彼女は目覚めた。骨に皮が張り付い
ていた体に、いつの間にかぎっしりと肉が詰められ、体の奥底から
力が湧き上がって来る。

こんな感覚は初めてだった。これほど満たされたのは、初めてだ
った。

外から、音楽が聞こえる。強く心を震わせ、腹を揺さぶる音に誘
われて、彼女は外に出た。

外は、精霊に満ちていた。

山のピー。川のピー。土のピー。鳥のピーに虫のピーも、兔のピ
ーや牛のピーも、世界に満ち溢れていた。

そんなピーの一つ一つが、音を奏でている。捧げるべき祈りの歌
が、彼女を包み込んでいる。

(祈らなくちゃ)

彼女はゆっくりりと、祈りを踊り始めた。これまで習ったムエタイ

の型を、ピー達に見せつけるように、ゆるやかに行なった。

ピーのワイクルーに合わせて、彼女がワイクルーを踊る。

そして彼女、ラタナチャイ・シングラックは、魔術師となった。

魔術師となったラタナは、程なくしてタイの修行者の集まりであるサンガに拾われる。そこでピーを使い、占いや祈祷を行なう傍ら、サンガに敵対する者の排除などを行わされた。

汚れ仕事でも、ラタナは泣き言一つ言わなかった。仕事があるだけで、金が貰え、腹が満たされるだけで、彼女は十分だった。

今回、学園都市に潜入し、アレイスター・クロウリーなる人物の居場所を探ることが、ラタナの仕事だった。それがサンガの目的なのか、それとも他の、より上流からの意思によるものかは、ラタナの知るところではない。

自分は、生かされている。そのために働くだけである。サンガのため、ピーのため、ナラシンハのため。そして何より、自分自身のために。

祈りを囁らして：三

公園の出入り口の辺りに来たところで、ラタナは土御門を引きずる手を離し、その場に留まった。

目の前には、土御門より少し背が低い程度の青年が立っていた。しかも見るところ、何やら鼻息荒くこちらを睨みつけている。

「お前、土御門に何しやがった!？」

いきなり現れ、何か叫び出した青年は、どうやら土御門のご学友らしい。てつきり人払いの結界を施してあると思っていたが、術者が未熟だったためか、このような不幸な闖入者を生み出してしまったようだ。

本当に、不幸だ。いや、幸運だろうか。こんなに沢山のピーに囲まれて死ねるのだから、幸運かもしれない。

土御門の頭を蹴って脇に除け、ラタナは軽く右肘を振るう。そうして呼び起こされたピーが、馬の姿を取って学生に突進する。

この跳ねる馬アーチャーハヨンに轢かれれば、その耳障りな叫び声も止むことだろう。

そう確信して生み出された馬のピーが、青年を前にして霧散した。一瞬の出来事に、ラタナは肘を振り抜いた姿勢のまま固まってしまった。

ラタナが姿を与えたピーをデイスベル解呪するなど、相当な実力を持つモンソン《呪術者》やコー・ピー《呪医》でなければ無理だ。しかしそれでも、触れるか触れないかの僅かな時間で行なえるものではない。ラタナの魔術、ピー《精霊》を基にしたアミニズム靈魂主義とは違う方法論なのだろうが、これほど見事に喝破されたのは初めてだった。

さすがは陰陽博士のご学友と言うべきだろうか。一癖も二癖もありそんな真似をしてくれる。

ラタナはその長い黒髪を放り出し、再びワイクルーを踊る。彼女の祈りを受け、ピーたちが音で応える。そうしてまたもこの場に、ワイクルーが響き渡る。

この踊り、この音こそ、ラタナとピーの絆だ。こうして祈るからこそ、ピーはラタナに力を貸してくれる。

学生に向かって中段蹴り《テッサイ》を繰り出し、今度は象のピーを向かわせる。

しかしその象さえも、彼が突き出した右手に触れた瞬間、大気に溶けてしまった。

思案げな表情を浮かべ、ラタナはその青年を観察する。

甚だ納得いかないが、このままピーを向かわせても、どうやら水面に石を投げ込むようなものらしい。底無しに飲み込まれるだけのまるで実りない作業だ。

ならばと、ラタナは少しだけ、前足への荷重を増やした。

右足で踏み込み、スイッチしながら左を奥足にして、思い切り勢いをつけて打ち出す。

象を打ち消されたあとに、今度は本当の蹴りを見舞う。

「くっッ！」

ぼんやり突き出された右手の下を掻い潜り、つま先を肝臓に捻じ込んでやる。

ラタナのつま先に、柔らかい布で包まれる感覚が訪れる。改心の蹴りで相手を打ち抜いたとき、決まってこの感覚が来る。硬い筋肉が衝撃に耐え切れず、だらりと弛緩し、内臓を差し出した瞬間だ。

そのまま二撃、三撃と、テッサイの応酬でラタナは学生の肝臓を揺すり続ける。水風船のようにぶるりと弾け、中身を腹腔にばら撒くまで。

「おご、があ、げは！」

打ち込むたびに身を擦って避けようとするのだが、そんなささやかな抵抗では、ラタナの間合いから逃れるには足りない。

事実、青年は近づいてきたラタナの猛攻をまるで防げずにいた。

漸う肝臓の前に肘を置けば、今度は右の腹が突き上げられる。体が大きく横にずらしながら腹を庇えば、すかさず垂れ下がった顔面を膝が跳ね上げる。

鼻血が綺麗に糸を引くなか、上を向いた顔のさらに真上から、つま先が一直線に落ちてくる。

高々角度から斬り落とすような蹴りで、青年は体ごと地面に叩きつけられた。

「もう嫌倒れかしら。ホント、ジープンって根性無しね」

呵責なく蹴りこんでおきながらそんなことをのうのうとほざき、ラタナは青年の髪を引っつかんで顔を向けさせる。

見たところ、やはり学生と思える年端だ。しかしラタナが探った情報の中に彼の顔は無かった。どうやら学園都市においてもそれほど重要ではない、もはや凡百と評してもいい低位能力者の一人に過ぎないのだろう。

捨て置いてもよいのだが、ならば殺してしまったところで、ラタナが何かの損を被ることもないだろう。

青年の顔を地面に固定し、その直上に肘を置く。如何に頭蓋骨が頑強とはいえ、このように衝撃の逃がし方がなければ、その耐久力を十全に発揮できない。

こうして見れば見るほど、青年はのほほんとした顔である。現代の日本の若者らしい無気力な、それでいて満たされて、ふっくらとした顔つきを見ていると、ラタナの胸に暗い炎が立ち上がる。

何不自由のない、平々凡々とした毎日を送っているのだろう。ラタナが日夜戦い続けていることも知らず、日本人は皆、こうして安穩と暮らしているのだろう。

確信が高まり、掲げた肘の先に宿る。万感こもったソークは決し

て拙速ではないものの、重く鋭いのは間違いない。

そのとき、肉を裂き、骨まで砕く肘に、何かがのしかかった。それは巧妙に絡みつき、ラタナの拳動を鈍らせる。

「離れる、死に損ないが！」

ラタナの肘にしがみついていたのは、土御門だった。もはや上がらぬ左腕まで使い、懸命にラタナの体を押さえ込もうとしている。

そんなことをしたとて、肘を下ろすのが僅か遅れるだけの話だ。何なら先に土御門に食らわせてしまってもいい。いずれにせよ、時間の問題だ。

そう、全ては、時間の問題だった。

「カミヤん、今だ！」

土御門の呼びかけに、倒れ伏せた青年が反応する。体中をぶるりと震わせて、残る力の全てをかき集めているらしい。その震えが、徐々に彼の右腕へと集結していく。

「いいぜ、お前がその気なら……」

「カミヤん早くして！ 正直もう保たないんよ！」

震える拳をしっかと握り、寝そべった形のまま、ゆるりと突き出される。その如何にも遅い一撃を見て、ラタナには鼻で笑うくらいの余裕があった。こんなもの、当たったところで撫でられる程度にしか感じないだろう。

「その幻想を、ぶち殺す！」

ふわりと、優しげとさえ言える感触が、ラタナの頬に当たった。

その瞬間、ラタナの体が雷撃を受けたかのようにびしりと揺れた。

「あ、があ、あがあああ！」

その一撃の持つ、物理的な威力ではない。名状し難い何かがラタナに入り込み、暴虐的なまでに消し去ってゆく。体が、脳が、精神が、不自然なほど漂白されていく感覚。

かろうじて残る理性で、ラタナは自身の迂闊を恥じた。既に先の戦いぶり、彼が尋常ならざる力を有していたのは確認していたの

に、その如何にも現代の若者然とした姿に、油断と憤懣を誘われてしまった。

触れるだけで魔術を無効にする超解呪力。そんなものに魔術師が直接触れられれば、一体どうなるのか。

自分の体さえ揮発してしまうと思えるほど、ラタナは自分の魔力の散逸を痛感していた。

幻想殺しに殺されて：一

重く疲弊した体で、廷兼朗は街を走っていた。

気味が悪いほど静まり返った街中だが、所々に銃創などが見られる。恐らくこれを辿れば、あの金髪の大男と、ラタナに会えるだろう。

やがてたどり着いたのは、学区の外れにある大きな公園だった。

廷兼朗がきたま練習する場所でもある。地理は完全に把握してあったので、彼はすぐさま搜索を開始した。

「あ、があ、あがあああ！」

遠くから、明らかな悲鳴が聞こえた。よもやここへ来て聞き間違えようがない。ラタナのものである。ラタナの叫びが、公園の中から届いたのだ。

「ラタナ！」

軋む体に鞭打って、廷兼朗は声のしたほうへと一気に走り出した。柵を飛び越え、木を飛び伝い、遊具をすり抜けて　公園の中央にある開けた場所に出る。

何も遮るものがないその情景が、廷兼朗の目に飛び込んできた。知らずのうちに、廷兼朗の瞳孔がぐわりと広がっていた。

暴れるラタナを押さえつける、二人の男。一人はあの金髪野郎。

もう一人は新手。ともにラタナの猛攻を受けたのだろう。肘で削ぎ切られたり、蹴りを叩き込まれたと思われる痕が幾つも窺える。

今から思うに、ラタナが金髪の大男に追われた時点で、廷兼朗の心は臨界だったらしい。だから、狂乱するラタナを押さえ込む男達を見たとき、廷兼朗の自制は、ものの見事に弾け飛んだ。

気が抜けきつたはずの体に再び、そして不自然に気が湧き上がり、体を満たしてゆく。

対抗手段計画において、見るからに感情を発露させて戦うことは、あまり推奨されていない。あまり、というのは、闘争心を否定してないということであり、そういった感情を持つこと自体を戒めているわけではない。だが、それを明け透けに晒す行為は、戦略上有効とは言い難い。

そのコンセプトに則り、感情を抑制し、気を静め、内に凝らせて丹田に変える習練を積んできた廷兼朗が、その全てを放棄してしまった。

おかしい。こんなのは自分じゃない。幾ら頭に血が上っても、こんな振る舞いはしない。そもそも自分には、頭に血を上らせて怒る余裕などないはずだ。この超能力者が溢れる都市で、いちいち腹を立てていては、無能力者《レベル0》の自分は瞬く間に敗北し、木っ端の如く振り払われてしまう。

そんな思想が、ラタナを目の前にして、空しく瓦解する。

(ラタナ、なのか?)

この原因は、ラタナにあるのか。確かにラタナのこと絡むと、廷兼朗の胸は俄かに騒ぎ出し、彼女の近くにいるだけで跳ね回りときたま自分の手に追えないときさえあった。

確かにラタナは素敵な女性だ。強く、美しく、逞しい。たまに、というか頻繁に廷兼朗を罵りはするが、それもまた魅力と言えば魅力だ。

廷兼朗は高く靴音を立て、これ見よがしに彼らの注意を引きながら近づいていく。

(そうか、僕は……)

ラタナのことか、好きなのか。だからこんなに、心揺れているのか。

廷兼朗は自らを嘲るが如くに、ふうつと薄く笑った。自分の気持ちを素直に認め、彼は清らしい心地で、その心を否定する。

それはない。確かに自分は男で、ラタナは女だ。それもムエタイの熟練者だ。ほっそりと、さながら刀剣の如く鍛え上げられた肢体。苛烈にして緻密な技巧。何者も恐れぬ闘争心。どれを取っても完璧だ。色々な意味でそそのものがある。しかしそれが、恋心になるはずがない。

何故なら、廷兼朗はもう、兄じゃないから。

男という属性が限りなく希薄な自分が、女性に対して、今更そんな感情を向けることなど有り得ない。

(有り得ない。そうだ。こんなことは有り得ない！)

有り得ないことが、今、廷兼朗の身に起こっている。自分では御しきれないほどの奔流が、自分の中から湧き上がって全てを飲み込もうとしている。敵も、味方も、心も、体も、技も、その流れに巻き込まうとしている。

息が苦しい。まるで溺れてしまいそうなほど、心と体に余裕がない。未だに損耗の抜けない体を、無理やりに動かそうとしているためだ。こんな状態では、技の冴えなど望むべくもないだろう。

何故こんなことをする。何故こんなことになる。悩む心を置き去りにして、体はとつと臨戦の体勢を整えていく。

心と体が、絶望的なまでに噛み合わない。このまま戦うべきじゃない。こんな無様な姿で、戦いたくない。こんなことをするために、頑張ってきたんじゃない。

これは、対抗手段じゃない！ 天羽根流じゃない！

心の制止も空しく、廷兼朗の体は一直線に土御門へと吸い込まれてゆく。

それを受けて土御門がラタナの体から離れるが、既に廷兼朗は彼の左横にびたりと寄り添っていた。

防御出来ない左腕を無視して、喉への右平拳。左手を目一杯伸ばし、土御門が廷兼朗の右手首を捕獲する。

そうして本当に防御を排してから、左フックで土御門の右目を打つ。あくまでサングラスを割り、破片を目に突き刺すだけなので、軽く、素早く、鞭のように叩く。

土御門の顔が仰け反っている間に、右手を掴んでいる左手に、左フックをかました左手を重ね、完全に固定する。

右腕の捻りを戻し、固定した土御門の手首を逆に決めつつ、半歩踏み込む。そして、極められた手首ごと、右掌を土御門の右胸に突き出した。

打撃した腕を敢えて捕らせ、それをさらにもう一方の手で固定し、逆に極めたまま、もう一度打つ。打撃の衝撃で極めた箇所を折りつつ殴り飛ばす一連の動きは、天羽根流逆捕『くだきして碎小手』である。

極めた状態ならば相手の拳動は不安定となり、合気上げと同じような状態を作れる。相手は身構えることも出来ず、無様に突き飛ばされるしかない。

右肺を押し潰さんばかりの衝撃が、土御門を三メートルほど後ろの木に激突させた。いっそ頭を打ってくれば気絶できたのだろうが、息苦しさでむしろ意識がはつきりする。

神裂が手加減したのか、道を譲ったのかは分からないが、どうあれあの聖人とやり合って、五体満足でいられるような相手なのだ。片腕の利かない状態では、些か不都合というものだ。

極めたまま、無理やり右腕を突き出されたことで、土御門の手首は、その衝撃で見事に外れていた。しかもご丁寧に、肘と肩の筋まで痛めているらしい。

まさに、打撃の速度で関節技を極める、精妙な技術だ。こんなも

のを能力者との戦いの最中、普遍的に繰り出せるとすれば、単独で無手の無能力者による超能力者の制圧というのも、あながち絵空事ではないのかもしれない。

(……って、何考えてんだ、俺は！)

今はそんな感慨に耽っている場合ではない。自分が倒された以上、次にあの男が狙うのは、上条当麻しかいない。

だめだ。それはだめだ。確かに上条当麻は強い。これまで幾人もの魔術師や能力者を前にして、一歩も退かずに戦ってきた。その力量は土御門も知るところだし、それに助けられたことさえある。

だからこそ、魔術師でも能力者でもない、あの男と戦わせてはいけない。あれと至近距離でやり合うのは、得策ではない。

「カミヤん、逃げ」

かろうじて視力の回復した左目で土御門が見たのは、廷兼朗の背中に押され、鉄柵まで吹っ飛んでゆく上条当麻の姿だった。

幻想殺しに殺されて：二

とりあえず邪魔な二人を、ラタナから引っぺがすことに成功した。こんなうら若き乙女を、二人掛かりで手籠めにしようなどと、許せるものではない。

ラタナのムエタイの実力は生半ではない。レベル2か3の能力者なら、問題なく対処できる。むしろラタナのほうが、事故で相手を殺してしまわないかというのを心配するべきだろう。

そこでふと、廷兼朗は疑念に駆られた。

ラタナの力量は、廷兼朗を軽く上回って地球を二周してから大気圏外に飛び出している。そして廷兼朗は 殊更に自分の習練の程をひけらかすのを嫌うが レベル5と相対しても十分に通じるものだと自負している。むしろそう思わなければ、せつかく勝たせてくれた白井や、これまで鍛えてくれた網丘に失礼である。

その廷兼朗を上回るラタナが、こんなチャライ金髪と、寝癖だかワックスを使ってるんだかも知れないツンツン頭のぬぼーとした学生に、果たして遅れを取るのだろうか。

（取らない。取ってほしくない。取らないといいなあ。取るとこ見たくないなあ）

最後の方は願望を通り越して現実逃避だが、ラタナが負ける姿を想像できないのは、廷兼朗なりの事実だった。

「……ほら、ラタナ。大丈夫かい？」

廷兼朗は息も切れ切れに、ラタナの肩を持つ。

神裂との戦闘後、銃声を頼りに全速力で走り続け、ようやく追いついたところで男二人を突き飛ばし、廷兼朗は自分の限界が迫りつつあるのを感じていた。

そんな力なく差し出された手が、勢いよく跳ね上がった。

丁度腫れ上がった右手の中指に命中し、声も上げられないまま、
廷兼朗がゆっくり跪いた。

「お、おおぅ……」

廷兼朗が訳の分からない呻きを上げている間に、ラタナは廷兼朗
の手を振り払い、どこかへ走り去ってしまった。

あまりの出来事に頭が追いつかず、廷兼朗は指の痛みも忘れ、ラ
タナの後姿を呆けたまま眺めていた。

「振られちまったな、字緒廷兼朗」

先程殴り飛ばした金髪が、さも可笑しいと言わんばかりの調子で
話しかけてくる。

「フルネームで呼ぶな。知り合いでもない人間に、そう何度も名を
呼ばれると、いい加減気分が悪くなる」

木を背につつかえて立ち上がった土御門に、廷兼朗はとどめを刺
すべく近づぐ。

努めて平静に呼吸を整え、赤く腫れた右の中指を隠して、左手の
握りしめる。そんな廷兼朗以上に満身創痕なはずの土御門が、にん
まりと笑いながら言った。

「お前、ラタナが好きなんだろ？」

土御門の薄い呟きが、廷兼朗の進みを制止した。それどころか、
呼吸まで止まってしまっそうな、体を驚づかみにされる感覚が、廷
兼朗を襲っていた。

「……そ、それが、どうした？」

精一杯に虚勢を集めて返してみるが、それはまるで威嚇する勢い
の無いものだった。

「どうして、好きなんだ？」

普通なら、他人に答えるようなことではない、と一蹴出来ただろ
うが、既に廷兼朗は土御門を見てはいない。

胡乱な眼窩は、まるで何も見ていない。その焦点は、自分の奥の

奥に合わされて、周囲の景色を見ることが出来ない。

「会って間もない、素性も知らない女を、お前は何故好きなんだ？」
一言一言が、耳孔から入って直接に廷兼朗の脳髓を殴りつける。

恋に時間も素性も関係ないと、嘯いてみせるのは容易だ。だがそれが、果たして自分の意思なのかと言われれば、廷兼朗には全く自信が無い。

まるで空中に投げ出されたことに、途中で気が付いたように不安定な感覚。自分も、自分の周りも、何もかもが緩やかに蕩けて、不確かな泥濘に浸かっているようだ。

自分で自分が、確信できない。ラタナに関することだけが、すっぽりと抜け落ちている。否、そうではない。ラタナに至るまでの道程が、すっぽり抜け落ちているのに、自分は今まで気が付かなかった。

気分が悪い。垣根無しに最悪の気分だ。いつもなら敵を前にすれば、こんなことにいちいち頓着しないのに。

「うげえ、げはっ！」

堪らず廷兼朗は、その場でえづいた。ただ『ラタナがどうして好きなのか』と問われただけなのに、体はどうしようもなくその問いを受け付けない。

両目と両腕を負傷した土御門が、ほぼ五体満足の廷兼朗を見下ろしている。

「何を、俺に、何をしやがった!？」

まるで見当違いだと言わんばかりに、土御門は廷兼朗の質問を鼻で笑った。

「やったのは、お前が大好きなラタナだよ。俺はそれを気づかせているだけだ」

まるで意味の分からない回答だった。ラタナが自分に何をしてくれたか。ムエタイを覚えてくれたに決まっている。それ以外に、ラタナと自分の間には何も存在しない。

なのにそれ以上の感情を、廷兼朗はラタナに向けている。その矛盾が、彼を苛んで止まない。

さくりと、草を踏む音がする。それは少しずつ、廷兼朗の後ろから近づいてくる。

「遅かったな、カミヤん」

土御門の言葉を聞かずとも、後ろにある気配を、廷兼朗は敏感に察していた。

鉄山靠を直撃させたはずだが、どうにか立ってきたらしい。靴音から察するに、引き摺ったりする様子は伺えない。それほどのダメージは無いようだ。

後門の虎、前門の狼と言ったところか。

こんな手負いが一人、ただの学生が一人ではまるで足りないが、構わない。この不可解な理不尽は、こいつらを悲鳴も上げられぬほど壊し尽くせば、少しは晴れていくだろう。

(違う、違う、違う！ 今は、戦っている場合じゃない！ そんなことをしている場合じゃない！)

戦う、戦う、戦う。今は、打ち倒す高揚に身を委ねたい。ラタナを傷つけたこいつらを、俺は、滅茶苦茶に壊したい。

(違う！ それは俺じゃない！ 『対抗手段』じゃない！ 天羽根流じゃない！ 字緒廷兼朗じゃない！)

「お前、名前は？」

地の底から昇るような低音を吐きながら、ゆっくりと廷兼朗は立ち上がる。

「俺は、上条当麻」

後ろの男が答える。

「土御門元春だ」

目の前の男も、間もなく答える。

「字緒、廷兼朗」

そして、廷兼朗自身も名乗りを上げた。

幻想殺しに殺されて…三

左手を土御門に、右手を上条に向け、構えを取った。廷兼朗の目は、何れにも向けられていなかった。

生体電位を最大限に発揮し、敵の動きを察知する構え。多人数戦闘であれば、そうした配慮は欠かせない。しかもこの二人は、あのラタナを制圧してみせたのだ。ならば用心し過ぎるということはないだろう。

「なあ、土御門。結局何なんだ？ 話についていけないんだけどさあ」

そんな今にも破裂してしまいそうな空気の中、ともすればのほほんとした口調で、廷兼朗の後ろにいる男が呟いた。こちらは神経を尖らせているというのに、切迫した様子が全く窺えない。それがまた、廷兼朗の神経を逆撫でする。

「こいつはな、操られてんのよ、カミヤん。さっき居たタイ人の女魔術師にな」

ラタナの名を聞いた瞬間、吐き気がこみ上げる。先程の話を聞いてから、どうも廷兼朗は身体の調子が優れない。それどころか時間を置くにつれ、自分の中の蟠りのようなものが大きさを増していく気がする。

それが内圧を高めて、吐き気として身体に現れているのだ。

廷兼朗はこみ上げてくるものをかろうじて抑え、土御門にきつい視線を向ける。

「何の話を、している……」

「お前の話さ。対抗手段」

カウンターメジャー

さも嬉しそうに、土御門の口が歪む。今度はコードネームで呼ばれてしまった。この男の口から聞くと、なおのこと気分が悪い。というより、この男に話しかけられること自体が、今の廷兼朗にとって不快なのだろう。

奴の言葉に耳を貸す必要は無い。こちらを惑わす妄言だ。ブラフの類だ。反応を促し、気を削ぐことだけが目的だ。

「ラタナが、魔術師だと？ 俺を、操ってる？」

そこまで分かっているながら、廷兼朗は先を促さずにはいられなかった。かろうじて残っている平静な部分が、どうしても聞きたがっているのだ。

「自覚があるのかい？ だったら、大したもんだよ」

砕けたサングラスから覗き込む目が、廷兼朗を見咎める。痛々しく欠片が刺さっているのに、ぬるりと肌を撫ぜ、生理的嫌悪を掻き立てる強さを持っている。

「どうだい？ その上条に、一発殴られてみないか？ スッキリするぜ」

くんと顎をしゃくり、廷兼朗の肩越しに上条を指して言った。どうやら今の廷兼朗の体調の悪さは、お見通しということらしい。それさえも彼の言うところの『魔術』なのだろうか。

土御門の言葉を聞き、くふりと自嘲気味に廷兼朗はにやけた。

「……いいぜ、殴ってくれよ。上条とやら」

構えを解き、くるりと足を入れ替え、廷兼朗は土御門に背を向けた。当然、今度は上条と正対することになる。

既に土御門の言わんとするところは、上条にきちんと言わっていた。それは言葉の通り、この男を殴って見せろということだ。

あの一瞬。手負いとはいえ土御門を瞬く間に打ち倒し、返す刀で自分を突き飛ばした手際を見れば、今まで上条が戦ってきた輩と同じように、一筋縄ではいかないのだろう。

目の前で相対する男は、本当に操られているのかと、上条は不安になった。

他人に自我を委ねているような危うさが、目の前の男からは感じ

られない。むしろゆらゆらと体を揺すって、獲物を狙う蛇の危うさ
とえば相応しい。

この男に、自分の右手は届いてくれるのか。

「いいぜ、殴つてやるよ。あんたを、俺の右手で！」

自分の言葉で自分を奮い立たせ、上条は腕を挙げて構えてみせる。
それで救えるのなら、助けられるのなら、戦いを終らせられるな
ら、届かせてみせる。この右手を、あの男に。今までやってきたこ
とと、そうは変わらない。相手の魔術や超能力は、この右手が掻き
消してくれる。だから自分は、安心して相手に近づけばいい。

それに今回は、土御門もいる。酷い怪我だが、いるだけで頼りに
なる。いざとなれば助けてくれる。そんな風に期待できるだけ、上
条の心は軽くなっていく。

自分は安心して、目の前の男に『幻想殺し』イマジンプレイカー
『』を叩き込めばいい。異能超能の区別無く消し去る力を、届かせ
ればいい。

上条の台詞を、廷兼朗はいい言葉だと感じた。殴つてやる。そん
な必死な顔で、そんなことを宣言されては、色々と堪らない。

(やめろ。違うんだ。これは俺の戦いじゃない！)

心の声を平然と無視して、廷兼朗は右手を臍の前、左手を肩から
真っ直ぐ突き出し、いつもの構えを取った。

「いくぞ！」

右手を届かせると宣言した通り、上条が唸りを上げて拳を振るう。
見たところ、何の工夫も無い。愚直に右腕を引き絞り、放つだけ
の動作のようだ。姿勢の正直さからも、それは窺える。人に拳を向
けるのに何の抵抗も見せないということは、それなりに場数を踏ん
でいるということだろう。曲がりなりにもラタナを制圧したとなれ
ば、その程度は備えてもらっていないと困る。

そんなことをつらつらと考えながら、廷兼朗は上条の腕を左手でするりと逸らし、開いた脇に尖らせた右手親指の第一関節を叩き込む。脇は大きな動脈や神経が皮膚に近い場所を走っており、非常に危険な急所である。

腋下神経に過度の衝撃が与えられ、反射的に上条の体がぶるりと震えて浮き上がる。そうして一気に不安定になった下半身を、まるごと刈るような右のテツ・ライン《下段回し蹴り》が振るわれる。当たった箇所が弾けるほどの音響を立てて、上条の両足が真横に吹き飛んでゆく。

右手を振るつたら、何故か体が痺れて、いつの間にか足が刈られて、なす術も無く地面に倒れこんでいた。まさに一瞬の手際に、上条の反応は追いつけていなかった。

「があッ！」

吼え上げた廷兼朗の右拳が、垂直に振り下ろされる。無様に寝転がる、上条の頭へと。

咄嗟に首を捻り、体を転がして逃げる上条に、全身を揺さぶるような振動が襲う。耳が潰れるような轟音が、間近で炸裂する。

外れた拳が公園の地面を叩き、周囲が鳴動していた。ぐらぐらと揺れる感触は、地面を転がっていく上条に余すところ無く伝わる。

地震と形容して問題ない揺れが、その拳によって発生していた。

手首の辺りまで地面に埋まっていた右手を引き抜き、悠然と廷兼朗は上条に向き直る。

大げさに転がりながら遠ざかった上条を、廷兼朗は慌てて追うようなことはしない。ゆっくりと立ち上がり、むしろ逃げる様を楽しむように顔を綻ばせる。

「そんな様で、僕を殴れるのかなあ？」

地を轟かす拳。無論、こんなことで上条はいちいち驚いたりしない。土御門がこの場に居る以上、もうこの空間は超能力だけでなく、魔術さえ容認された尋常ならざる場だということを、上条は既に理

解していた。

恐らくは魔術によって身体機能を向上させているのだろう。以前に知り合った天草式十字凄教が、それと同じことをしていたのを、上条は覚えていた。

「お前も、魔術師なんだな」

上条の言葉を受けて、廷兼朗は露骨に眉根をひそめる。

「魔術なんて、生まれてこの方、嗜んだことはないね」

今度は上条が目を剥く番だった。廷兼朗の言葉には、ごまかしを含む色はない。むしろ気分を害したといういらつきが見える。

「なら、超能力者か？」

恐らく来るであろうと予想していたのか、廷兼朗は肩を揺らし、くつくつと笑っていた。

「超能力者《レベル5》だなどと、嘘でも言えないな。僕は、無能力者《レベル0》だから」

それを聞き、上条がさらに驚いてみせた。上条の反応を受けて、やはり廷兼朗がむっとする。

「僕がレベル0じゃ、悪いのかい？」

「いや、ちよつと、信じられなかっただけで……」

「それなら、信じなくていい。僕も君を、信じないよ」

足元から寄り来る冷ややかな気と共に、廷兼朗が表情を削ぎ落としながら、するするにじり寄ってくる。

幻想殺しに殺されて：四

目が、声が、気配が、上条を冷たく拒絶している。ここからとつとと、尻尾を巻いて消え失せると、言外に伝えてきている。

思わず足が下がりそうになる。それを感じ、上条は無理に右足で踏み出した。

確かに、相当な威圧感だ。この本能に訴えかけるような一声は、根気を詰めて正対しないと知らず知らずのうちに体が勝手に下がってしまいそうだ。

それでも、上条は下がらない。下がれば、あの無能力者は容赦なく土御門にとどめを刺すだろう。それにどうやら彼を止めるには、この『幻想殺し《イマジンプレイカー》』で殴りつけなければならぬらしい。

魔術によつて操られているというのなら、惑わされているのなら、この右手で打ち碎かねばならないだろう。そのために上条はここにいるのだし、今までも、恐らくはそうしてきたはずだから。

「来るなら来い。来ないなら、とつとと失せるッ！」

腹の底から揺さぶってくる低音を受け、腰の辺りから震えが立ち昇ってくる。それを振り払うように、また一步、上条は前に出る。

「お前の幻想をぶち殺すまで、俺は下がらない！」

右手をこれでもかと握り締め、力強く誇示するかのように、廷兼朗に向けて突き出した。

「訳の分からんことを……」

気の抜けるような笑いを見せた直後、廷兼朗の右踵が翻り、上条の顔の辺りを通過した。

空気さえ焦げ付くような唸りに、さらに前に出て上条が応える。

「だらあッ！」

叫び上げる上条を見てか、廷兼朗の口がほんのり歪む。

声を上げて開いた顎に、右の膝が横殴りに叩きつけられた。

後ろ回し蹴りでわざと隙を見せ、前に出てきた敵に対して、右足を引き戻して膝のカウンターを入れる。そのシナリオに、上条はまんまと乗っかってくれた。

顎を開いた状態では、首の筋肉は固定できない。つまり効果的に脳を揺らせるため、脳震盪は確実である。

顔を突き飛ばされながら下がる上条を見て、廷兼朗が感心した声を上げた。

膝を食らう寸前、左手を挟み込んでいたらしい。よく防御が間に合ったものだと、廷兼朗は思わず誉めそうになってしまった。

上条という男。特段に格闘技に精通しているようには見えないが、かなりの場数を踏んでいるらしい。眼付けも勘も、相当な水準にある。

廷兼朗の受け持つ風紀委員の中にも、これだけの逸材は少ない。

(喧嘩屋の類ということか)

しかし如何せん、動きに無駄が多い。それに何故だか、右手を基点に戦いを組み立てようとしている感がある。

恐らくは右手から、能力の類を発動させる能力者なのだろう。ならばそれを前面に押し出すことは、決して悪手ではない。

だからこそ、『カウンターメジャー 対抗手段』はそこに付け込む。

下がる上条を、下から掬い上げるようなタックルで廷兼朗が追う。当然、それを嫌がって上条が突き放しに来る。もつとも自信のある、その右手を使って。

勘は悪くないのだが、ここで焦って手を出すあたりが、素人の限界だろう。

上から放たれる右拳の、さらに上から左手で叩いて下に引き寄せろ。その頃には、すでに廷兼朗の右腕が、上条の右肘に絡み付いている。

手首を曲げて押し込み、反射的に引きつった上条へ、更に極めた

右腕を押し付ける。

タツクルの体勢のまま肩でぶちかまし、右腕を極められ、痛みで浮き上がった腰を突き飛ばす。

上条の右腕を支点に回りこみ、倒れこんだ上条の脇腹に膝を乗せて動きを止めた。

右腕が最大の武器ならば、その戦闘能力を真つ先に奪うべきだ。それこそが『対抗手段』の思想である。

そして関節を極めたなら、素早く折って離脱する。だからと押さえ込んでいれたら、その能力が至近距離で発動する恐れがある。右腕を胸に押し付け、引き抜くように背を反る。関節は腕の力だけで折るのではない。ほんの数箇所の関節に、全身の力を集中させて折るのだ。

肘と肩を破断すべく締め付ける廷兼朗の右腕に、上条の右掌が添えられる。

その瞬間、廷兼朗の体を何かが進った。拙いと思ったときには、頭が蒼白になっていく感覚に陥ってしまった。

晴れてゆく。頭に掛かった靄が、瘡蓋のようにべりべりと引き剥がされてゆく。脳に痛覚は無いはずなのに、神経が爆ぜて頭蓋を痛めつけている気がする。

明鏡になっていく清しさと、心をもぎ取られる激痛が、同時に廷兼朗に襲い掛かる。

自分の心、記憶の一部が、この男の右手によって消されてしまう。ラタナの記憶が、もやもやとした心地と一緒にどこかへ消え去っていきこうとする。

やめる。やめてくれ。

「うおおああああッ！」

形振り構わず手を離し、弾けるように廷兼朗は上条から離れていた。まだ頭の中は、掻き回されたようにぐらぐらと揺れている。

心の平衡がものの見事に碎け散り、ただでさえ神裂との戦闘を経

ている廷兼朗の体力が、さらに削られてゆく。

今この瞬間にも、目の前にいる上条の姿が霞む。正面にある物体に焦点を合わせる事が、既に重労働なのだ。

上条が立ち上がるのを、廷兼朗はただ眺めているしかなかった。もうそれを阻止する力は、廷兼朗に残されていなかった。

乳酸が効果的に排出されず、手も足も鉛のように重い。思考さえも、泥のようにたゆたって冴え渡らない。

心技体の何れもが反目し合い、拒絶し合い、無様な齟齬をきたしている。学生一人を打ち倒せないもの、当然と言える。

「来い、よ。さあ、来いよ」

震える手をかざし、何とか構える。こんな喧嘩屋一人を相手に、『対抗手段』がこれほど後れを取る。いつそ笑えてくるほどに、自分が自分の言うことを聞いてくれない。

「歯ア食いしばれよ」

わざわざ大きく振りかぶり、大股で踏み込んで右腕を振るう。分かりやすいほどのテレフォンパンチだ。

廷兼朗が嫌いな類の攻撃だ。振りかぶり、大きく踏み込み、堅く拳を握ったところで、それが効果的だとは言えない。それが拳本来の機能を果たすために必要なことではない。

だがその拳は、真つ直ぐに、愚直に、廷兼朗へと突き出された。

大股で踏み込んだ上条に対して、半歩だけ廷兼朗が踏み込む。右腕の横に頬を当てるほど、懐に入って脇に腕を通す。

「ぬうつ」

踏み込んだ左足で上条の右足を払い、脇に通した右腕で上条の体を巻き込んでゆく。踏み込んだ勢いがまだ止まらない上条は、そのまま前に倒れこんでゆく。

廷兼朗が腰投げで上条を投げ飛ばし、地面に叩きつけると同時に右拳を引き絞る。

ここまで何とか、体が動いてくれた。だがそれも、いつまで続かない。これが最後だ。これが今の自分の、根限りだ。これで終わってくれ。これで死んでくれ。

そう願ひ、放たれるはずだった右腕が、何かに阻まれる。

「貴様ア！」

土御門が、右腕にしがみついている。折れた両腕を絡め、必死に抱え込んでいる。

それを振り払う力は、もう廷兼朗に残っていないかった。

「カミヤん、今だ！」

土御門の指示など受けるまでも無く、すでに右拳が廷兼朗目掛けて振るわれていた。

肩が地面につき、まるで力の入らないパンチが、廷兼朗の顔に当たる。

殴るといふよりは触ると称するべき攻撃が、廷兼朗の脳髓まで打ち貫いた。

頭が真っ白に痺れて、靄が全て振り払われてゆく。心技体の全てを阻んでいたものが、上条の右手に吸い取られていくようだ。

ラタナを愛しているなどという幻想が、完膚なきまでに殺され尽くした。

精霊の御名において：一

気づけばそこは、見知らぬ人の家らしかった。薄く饅えた匂いが、人の営みを感じさせる。どうやらここは、病院というわけではないらしい。

廷兼朗はすぐに体の調子を探る。体内発動を行なった指の腫れが酷くなっている。そして体は全体的に損耗している。特に足腰の疲労が激しい。

「万全ではない。だが、動けないほどではない。」

ゆっくりと首を振り、周囲を確認すると、上条ともう一人、真っ白な布地に金の刺繍を誂えた、まるで貴族の用いる茶器のように小ぢんまりとした女の子が、廷兼朗の間近に座っていた。

「起きたのか？」

近くに座ってるのではなく、座らざるを得ないのだろう。六畳一間のワンルーム。学生寮か何かだろうか。

何も答えぬまま、廷兼朗は体を起こした。

「もう動けるのか、あんた」

上条は心配そうに眉根をひそめて問いかけてくる。

とりあえず、この身に危険はないようだ。そもそも殺すつもりなら、気絶していた間にやりようはあった。それが無いということは、まだ廷兼朗に幾ばくかの運が残っていたのか、相手に何か別の意図があるに違いない。

「助けてくれて、ありがとうございます」

向き直り開口一番、廷兼朗は上条に向かってはつきり伝えた。

敵であれ、通す義理というものはある。気絶していたところを助けてもらったのだから、礼を言うのは当然だ。そうしていちいち割り切っていかなば、非情と無情の区別もなくなってしまふ。

廷兼朗が頭を下げる様を見て、上条は狐にでもつままれたように、

眉を起こして目をかつぴろげていた。

「そんなに驚くことかな？」

「てつきり、また襲い掛かってくると思ってたよ」

そう言われ、廷兼郎は苦笑した。「それも悪くはないんだけど、色々と腑に落ちないことが多すぎてねえ」と言いながら、いつのまにやら窓を背にして、上条の向かいにあぐらを掻いて座っていた。

「教えてくれないか？ あんたなら、答えてくれると思うんだが」

上条は困り顔になり、首を横に振る。

「俺もわかんねーよ。土御門が知ってるっぽかったけど」

「その土御門とやらは、今どこに？」

「事後処理がどうだのいって、行っちゃまったんだ」

廷兼郎はぐうと唸り、眉を八の字に曲げてしまった。そして胡坐を正座に直し、両手ですいと後ろに下がる。

「僕を押し付けられたってわけか。それはそれは……」

窓の戸に足が当たるまで引き下がると、廷兼郎は徐に頭を下げた。

「ありがとうございます」

もう一度礼を拝し、廷兼郎は気持ちを切り替えた。

「ところで、こちらは？」

そうしてようやく、廷兼郎はその置物のような修道女と目を合わせた。

正確を期すならば、布団から眺めたときにも目は合っていた。しかもその修道女は、ぎつと強い目でこちらを睨みつけていた。その視線に晒されながら、廷兼郎は平静に上条と言葉を交わしていた。

別段、廷兼郎に修道女を無視する性癖はない。ただ何となく、その月の光を編んだような銀色の髪や、円らであるこそ艶やかに照る緑青の瞳などを向けられるのに慣れていないだけである。

元より廷兼郎は、常日頃から気の強いほうではない。外人と見ると不自然に萎縮し、果ては無視してしまうこともある。

特に欧州、西欧などに見られる特徴はいけない。金の髪に白い肌

に青い目。今時この程度で驚いてはいけないと思えば思うほど、心が硬直してしまう。

だがそれもととうとう隠し切れなくなり、ついには自分から話しかけてしまふ辺りも、廷兼郎の性質の表れだろう。

廷兼郎に話を振られても、修道女は頑として彼を睨みつけるばかりだった。

「じ、自分は字緒廷兼郎と言います……」

そしてやはり、場に沈黙が降り積もる。ここは西欧風に“天使が通る”と表現すべきだろうか、などと廷兼郎は良からぬことに頭を巡らせていた。

その腑抜けた思考が、柔らかな、それでいて有無を言わせぬ力で遮断される。

修道女の両手が、がっしりと廷兼郎の顔を包み込んでいた。

「インデックス！」

上条が腰を上げたまま止まっている。恐らく様子を見ているのだろう。何かあれば、すぐに動ける状態だ。

同じく廷兼郎も動けない。何となれば簡単に振り払えるであろう女子の手が、廷兼郎を離さない。そしてあの緑青の瞳が、こちらを覗き込んで来る。

アジア系に見られる、光を吸い込む黒とは違う。光を取り入れ、なお跳ね返す緑。鏡のような瞳孔が、廷兼郎を映している。

(怖い)

純粹に、廷兼郎はそう思った。目の前に修道女が居て、自分のことを覗いてくるからではない。目の前の女子自体が、ひたすらに怖い。御坂とも白井とも違う。荒涼や井上とも違う。そうした、一見して分かりやすい怖さではない。

強いて言うなら、あの聖人のような。

「もう、大丈夫みたいだね」

修道女はそう呟くと、はたと廷兼郎から手を話し、元の座っ

た場所へと戻っていった。

「……日本語、お上手なんですな」

開放された廷兼郎は、そんなおべんちゃらぐらいしか言うことが思いつかなかった。

「もう魅惑チャームは解けたみたいだね」

その妙な単語には、廷兼朗も思い当たるところがあった。

「あの淫魔や吸血鬼が使う、あれですか？」

魅惑とは、その名のとおり、対象を魅せて惑わしてしまう魔術の総称である。古代史などのオカルティックなものを好む廷兼朗の知識の内にも、そのような魔術について載っていた。

「うん。良く知ってるね。その魅惑だよ。まあ、サキュバスやドラキュラも使うけど、他の悪魔も得意だよ」

そんなものが、自分に掛けられていたのか。掛けた相手は、今更問うまでもない。

そして修道女の言うとおり、その魅惑とやらは、既に心配する必要の無いものだ。

「まだ頭がぼややんでする？」

修道女は頭を軽く指差しながら、可愛らしく頭を傾けて訊ねてくれた。

「いえ、全く。上条さんに殴られてからは、晴れ渡った心地です」

「そうだね。とうまのは効くからね」

そうですかあ、と間延びして返しながら、廷兼郎は頷いた。

「その魅惑という魔術を、利かなくすることは出来ないんですか？」

修道女は「出来るよ」と何とも軽い感じで答えてくれた。

「去勢すればいいんだよ。そうすれば誘惑なんかされてもへっちゃらだよ。術の掛かりが浅くなるから、気をしっかり持っていれば大丈夫」

廷兼郎は「なるほど。そういえば昔は洗礼のときに去勢してたそうですね」などと真面目に返していた。

「……つて二人とも、何の話してんだよ！」

置いてけぼりだった上条は、悪魔だの去勢だのという不穏当な言葉の応酬に、さすがに一言挟む気になつたようだった。

「何つて、トーマがこの人連れてきたんでしょ。ていうかこの人誰？」

これは申し訳ございませんでした、などと時代がかった言い様で廷兼郎はまたも頭を下げた。

「私、字緒廷兼郎というものです。あなたのお名前を伺つてもよろしいですか？」

これはこれはご丁寧なんだよ、と丁寧なのかざつくばらんのかよく分からないことを言いながら、修道女が名乗り上げた。

「私はインデックス。Index - Librorum - Prohibitorium。よろしくなんだよ」

「……素敵な、お名前ですなぁ」

無論廷兼郎は、インデックスというのが一般的に『目次』を表す英単語であることも、それが例え外国であろうとも人に冠するには相応しくない名前であることも全て分かった上での、『素敵なお名前』であつた。

廷兼郎自身も、苗字も名前もあまり見られない珍しい名前であるため、他人の名前にくどくど文句を言うつもりなどまるで無いので、とりあえずおべんちゃらの一つでも言つて流すことにした。

「だから、そんな暢気に挨拶してる場合じゃ……つて電話か。もしもし？」

何か言おうとしたところを携帯電話に潰された上条だったが、数秒ほど通話していると、次第に顔つきが険しくなつていった。

「あんたにだつてよ。字緒」

いきなり携帯電話を渡された字緒は、若干あたふたしながらも何とか通話に成功した。

「はい。ただいま代わりました」

「よう。久しぶり、と言うわけにはいかんにゃー」

「……そうですね」

あの土御門とかいう金髪サングラスの大男の声は、例え電話を通して聞き間違いのように無いものだった。

「お前、何気にボケ殺しだな」

「気が急いでいるだけです。あなたなら、僕が聞きたい話を聞かせてくれる予感がするから」

「何だかぞつとしない言い方だじえ。この寮の下で待ってる。すぐに降りてきてくれ」

そそくさと用件だけ言い終えて、土御門はさっさと通話を切ってしまった。これからの行動指針が具体的でない廷兼郎は、今のところそれに従うしかない。

「土御門さんに、呼び出されてしまいました」

ありがとございますと携帯電話を上条に返し、これといった荷物も無かった廷兼郎は、自分の寝ていた布団を整え、すぐに玄関へ向かった。

「ちゃんとお話できなくてすみません。また日を改めてお礼に参りますので」

「いって。気にすんなよ」

「また来てね。あざお」

上条とインデックスの言葉に、はいとだけ答え、廷兼郎は上条の寮室を後にした。

精霊の御名において：二

寮の階段を下りると、そこから見える位置に土御門が待っていてくれた。早速土御門は後ろに控えていた黒いバンの中に入り、廷兼郎もそれに従う。

「さすが『カウンターメジャー対抗手段』。回復が早いにやー」

「お世辞は結構。用件だけお願いします」

いきなり交わされた世辞をまさに切り捨て、廷兼郎はバンの後部座席に身を預ける。

「あんたはまだ、あのラタナってのが好きかい？」

二人が座つたのを確認し、バンは緩やかに発進した。車内は走行音で満たされ、それが却って空漠な気配を助長する。

「正直、分かりません。好きでもないが、嫌いでもない」

「よかった。魅惑チャームは解けたようだな」

廷兼郎の曖昧な言い様に、土御門は寿ぐような拍手を返した。先ほどから訳知り顔で頷く土御門を見て、廷兼郎は諦め気味に嘆息した。

「同じことを、インデックスという人にも言われました」

「インデックスがそう言ったのか。それなら、間違いないだろう」

この話題は終わりだとばかりに、土御門は身を乗り出して廷兼郎の顔を覗き込む。

「それで、何から聞きたい？」

サングラスの下からでも、鈍く光る目が透けて見える。廷兼郎の口から何が出てくるのか、楽しみにしているようだ。

「どうやら、試されているらしい。ならば迂闊な発言は出来ない。」

廷兼郎はそのように感じ取った。

「ラタナの居場所を、聞きたい」

魅惑の魔術も、土御門や上条との争いも、全てはそこに起因する。

ラタナのことを解決しなければ、他を理解していても何の意味も無い。

「ラタナに会って、どうするつもりだ？」

「恩を、返すつもりです」

「恩？ あんた、魅惑のことは聞かなかったのか？」

廷兼朗はしつかと首を横に振った。

彼らの言い分は分かっている。どうやら自分は魅惑という手段で、何者かに意識を操作されていたらしい。そしてその何者かこそ、ラタナチャイ・シングレックだと言いたいのだろう。

それを否定する気は無い。上条という学生との戦闘を経てから、廷兼郎にとつてのラタナの存在が、明らかに変化したことは事実だ。「操られていたとはいえ、あなた方にした事は本当に申し訳ないと思っと思っています。出来れば、何かの形で返したい」

「俺たちに返すのか？」

「あなたたちにも、ラタナにも、返します」

ラタナに会うことが、皆への恩返しになる。そこに全てが収束している。廷兼郎の鈍い頭でも、それくらいは察しがついていた。

「あんたが加わってくれるのは心強いんだが、少し問題があつてな残念だけど、それは叶わん」

土御門は乗り出していた体を思い切り座席に預け、今度はふんぞり返って携帯端末の画面を確認し始めた。

「あんたには今回の一件で、スパイ容疑が掛けられている。それが晴れぬうちは いや晴れても、しばらくは派手に動けないだろう」

「なるほど。ラタナは、スパイだったのですね」

外の組織からのスパイならば、土御門が見せた初対面にして苛烈な対応も納得がいく。それにまんまと首を突っ込んだ、もとい巻き込まれてしまったというわけだ。

「魔術で操られていたのだから、情状酌量の余地はあるが、今はあんたに構っている場合じゃない、というのが正直なところだ。大人

しくしてもらえるとありがたい」

確かに、スパイ容疑の掛かった人間を幫助したわけだから、色々問題は発生するだろう。だが、そんなことは廷兼郎にとってどうでも良いことだ。

そのことで右往左往するのは、当事者である廷兼郎の役目ではない。廷兼郎の役目は、そんなことではない。

「話が分かりやすく、助かりました」

丁度第二学区の訓練場に着いたところで、廷兼郎はその場を辞するよう腰を上げた。

「もういいのか？」

土御門のしてみれば、重要そうなことは何一つ伝えていない。廷兼郎が本当に理解したのか、不安に思うのは当然だろう。

「もう十分です。これ以上聞くと、後が怖い」

あとは上条さんたちにも、伝えてあげてください。そう言い残し、廷兼郎は訓練場へと向かった。

確かに由々しい出来事がこの身に降りかかったが、だからといって鍛錬を怠る理由などない。むしろそういう心乱れるときにこそ、普段の修練の程を確認するべきなのだ。

さて今日は何をしようかと意気込んで踏み出した足が、ぴたりと地面に張り付いて動かない。

当然だ。廷兼郎の目の前には、直属の上司である網丘がいるのだから。

「字緒、ちよつと来い」

いつもながら女らしさなどから縁遠い網丘の声が、さらに低く、鋭くなっている。

（女らしくないからといって、魅力的ではない、というわけではないんだよねえ……）

などと不埒なことを考え、廷兼郎は網丘に首根っこを引っ張ってもらいながら、訓練場へと入っていった。

開口一番、網丘が切り出した。

「どういうことか、説明してもらおうか」

「網丘さんのほうでも、把握してるんじゃないですか？」

そう言った廷兼朗の頭を、網丘は分厚いレポートの束の角を容赦なく叩き落した。

「そういう生意気な台詞を吐ける立場か？ 君の口から伝えるのが責任というものだろうが」

「す、すみません……」

これですっかり勢いをなくした廷兼朗は、自分の知りうる限りのことを訥々と話し始めた。

「ラタナは、スパイだったようです。そして僕は、彼女に操られていた、ということになっています」

「ラタナというのは、君の友人か。交友関係にまでは口出しせんが、もう少し選んだほうがいいんじゃないのか？」

全く以って言うとおりである。廷兼朗に人を見る目が皆無であることが、今回の件で露呈されてしまった。

「不徳の致す限りでございます」

政治家のような弁明に、網丘は肩を竦める。

「いつから操られていた？」

「それは何とも。もしかしたら、最初に会った時、既に……」

ただでさえ操られていたということに実感が湧かないのだ。そうした確信が廷兼朗にあるはずもなかった。網丘はしばし黙考すると、独白するように語り掛けてきた。

「とりあえず、洗淨ロンダリングだな。きれいにしておこう」

「はい？ 何をですか？」

またも網丘は呆れ顔で廷兼朗を見遣った。

「君に決まっているだろう。要するに君はスパイ行為の幫助者なのだ。君に捜査の手が来ると、私の計画にまで類が及ぶかもしれない。

余計な詮索をされぬよう、色々と手を打っておいたほうがいい」

そのほうが警備員アンチスキルとしても、手間が省けていいだろう。

「ご迷惑をお掛けします」

廷兼朗が深々と頭を下げると、またも網丘のレポートが頭に飛んできた。

「やつと終ったみたいな顔をするな。まだまだ言っべきことはあるんだからな」

すでにロンダリングとやらを始めているのだろう。網丘が端末をいじりながら、ひたすら廷兼朗の日頃の行いがどれだけ杜撰かなどを洗い出し、ずけずけと問い詰めるという行為が丸一時間は続くことになった。

精霊の御名において…三

「し、死ぬかと思った……」

網丘の説教地獄を何とか切り抜け、忘我の体で道場の畳に転がり込んだ。

廷兼朗は今日の午前中、聖人を自称する女性と、何故か喧嘩慣れした二人の学生を相手に戦ってきた。その消耗の程は計り知れない。その上で一時間、みっちりぎっしり言葉で責め立てられ、最早少しでも気を抜けば魂ごと抜け出てしまいそうなほど、体の感覚が危うかった。

それでも、廷兼朗に網丘を恨めしく思う気持ちは、寸毫たりとも存在しない。

網丘は、廷兼朗にスパイ活動幫助の嫌疑が掛けられると知るや、廷兼朗が不利になりそうな懸案を内々に、そして可及的速やかに隠滅してくれたのだ。その心遣いを思えばこそ、網丘の説教を全身で受け止めることが出来る。

「字緒さん、暇なら練習見てくださいよ」

倒れて休んでいた字緒を、佐天が真上から覗き込む。

以前、独断で佐天にも手解きをしていた廷兼朗だったが、御坂との一件を経て、佐天が望む限り、本格的に対能力者戦闘術を教えたいと申し出て、網丘の計らいで佐天も風紀委員などと同じように、廷兼朗の教導を受けられるようにしてもらった。

自分の罪滅ぼしに、特例を作ってしまう。公私混同も甚だしいが、一応は廷兼朗が担当する教導の聴講生という形にしてもらい、他の教導には出られないということを手打ちとなった。

「早く構えてくださいよ。練習時間終わっちゃいます」

それ以降、ほぼ休みなく教導に出席している佐天は、特に杖術を

熱心に取り組んでいる。

練習を見るといつても、呆つと突っ立っている廷兼郎に、佐天がひたすら打ち込んでいるだけである。しかし、これまで一度たりとも佐天の杖は、廷兼郎の体を捉えたことがなかった。

こつなればもはや意地だと、佐天はより熱を入れて杖術に取り組んでいった。

それに伴ってか、佐天の廷兼郎に対する遠慮や気遣いといったものが、今ではすっかり消えてしまった。だがその分、振るわれる杖は澄み切っている。余計なしがらみや妄念なく、ただひたむきに、廷兼郎を打ちのめすべく攻め立ててくれる。

それだけで、十分だ。それ以上は、要らない。

(それにしても佐天さん、上手くなったなあ)

強いて言うなら、少し力み過ぎか。杖を振るうことだけでなく、振るわれる杖のことも考えてあげられたら、神経の行き渡った丁寧な拳動が出来るのだが

(一回くらい食らってあげてもいいか。しかしそれは、佐天さんのためにはならんなあ)

むしろわざと食らったということが、ばれてしまったときが怖い。今度こそ本当に、愛想を尽かされてしまうかもしれない。そしてまた白井に呼び出されるかもしれない。

廃墟で中学生と二人きり、などという刺激的な体験はもう御免被りたいし、大能力《レベル4》の空間移動能力者テレポーターとまたやりあうのもご勘弁願いたいというのが、廷兼郎の心情だった。

何だか、今日はもう疲れてしまった。そこに佐天の杖を避けるだけの簡単なお仕事は、単調な運動の積み重ねなので、言い方は悪いが眠気を誘う。

石突が畳みに刺さる。下段、それも足の指や甲を狙うエグい攻撃

だが、それだけに有効である。

「けやッ！」

床を石突で叩いた反動を利用して、今度は上段から振り下ろす。下と見せて上を打つ、素朴で丁寧な連環技だ。

最初の下段を、片足を上げて避けてしまった廷兼郎には、これ以上の拳動は難しい。無理に転がってもいいのだが、その後が詰まってしまう。

（これは、まずったなあ）

ぼんやりしているから、こうなるのだろう。ここで佐天に打たれてしまうのは、何だか嬉しいやら楽しいやらで、そんな気持ちさえぼんやりとふやけてしまって、上手く考えられない。

ぼんやりと、ゆるやかで、悪くない心地だ。

杖が、迫ってくる。

「え？」

会心の上段面打ちが、するりと抜けていく。佐天の手には、何の手応えもなかった。

間合いは近い。振り抜いたなら確実に当たっているはずの距離だ。しかし佐天の手には、相も変らぬ杖が握られて

自身が離さず持っていた杖を見て、佐天がぎよつと首を竦めた。

杖が、中ほどから断ち切られていた。それは疲労による破断にしてはあまりに鋭利で、さながら刀剣を以って切り落とせばこうなるであろうと、容易に想像させるものだった。

佐天が杖を見て呆けていれば、廷兼郎は自分が振り上げた左脚を、いつまでも眺めていた。

「は、はは……」

ゆっくり脚を戻すと、堰を切ったように廷兼郎は笑い出した。

「蹴った。蹴ったね。今、僕は、蹴っていたね」

蹴りか、ともう一度呟き、ほうと大きく息を吐いた。何の力みもなく、自然にするりと蹴りが飛び出していった。自分で意識するまでもなく、知覚するまでもなく、体がその蹴りを作り出し、選び出してくれた。

廷兼郎が蹴っていた。それくらいのは、佐天にも察しが付いた。問題は、この鋭利極まる切断面が、人間のつま先によって生み出されたものであると言うことだ。

「よし！ 今日も訓練を始めますよ」

快活さを取り戻した廷兼郎が声を張り上げ、着替えを終えた訓練生たちが畳みの上に正座する。

「神前に、礼ッ！」

「よろしくお願ひしますッ！」

ゆっくりその様子を見渡し、欠員が無いことを確認してから、廷兼郎は腹の底から出した声を皆にぶつけた。

次の日、早朝から蹴りの習得に勤しむ廷兼郎は、公園に打撃音を響かせていた。

やはり体が重い、練習をサボるわけにはいかない。それに、もう蹴りを教えてくれる人はいないのだ。一時でも休んでいる場合ではない。

ラタナの教えを懸命に思い出し、それ以外を頭の外に追いやって、無心のままに蹴り続ける。

(ラタナ……)

あのラタナが、スパイだったということを読み出し、廷兼郎は僅かに俯く。その上に魔術師などと、易々と受け入れられることではない。その片棒を自分が担がされた。そして神裂という自称聖人と、土御門に上条という学生と戦う羽目になった。

多少錯乱していたとはいえ、何も説明せずに事を構えたのは向こうも同じなので、戦うことになった状況自体に、それほど悔恨は感じていない。

ただ、謝意らしきものが浮かび上がってくるのも事実だった。一応、土御門と上条には実際に謝っている。

「だああっ！」

どうもいけない。要らないことばかり考えてしまう。頭が混乱している。あれだけのことがいきなり提示されたのだから、心が騒ぐのは仕方の無いことかもしれない。

頭を冷やすために水でも被ろうかと、廷兼郎が公園の水道へ歩き出したとき、前から来る人影があった。かつんと、ブーツがコンクリートを叩く音を立てながら、人影は朝靄を裂いて廷兼郎の前に現れる。

「少し、話をしてもいいですか」

膝ほどまで垂れた長い髪を後ろで結び、シャツを縛って臍を明け透けに晒し、黒鞘の長刀を携えている。昨日立ち会った、自称聖人

神裂火織である。

「申し訳ありませんが、練習中ですので」

現れた神裂を一顧だにせず、廷兼郎は彼女に背を向けて、またも木に足を打ちつけ始めた。

「辛辣ですね」

話す口は持たないとばかりに、廷兼郎は神裂の言葉を無視して一心に木を蹴る。

居た堪れなさそうに指を弄りながら、神裂き一人語りのように喋る。

「確かに私は迷ったまま、あなたの前に立ってしまいました。それは、詫びなければなりませんね」

その言葉を機に、ぴたりと廷兼郎は蹴りを止めた。そしてくるり

と振り返り、初めて神裂の顔を見た。

「……詫びる、ですって？」

この女は、どこまで自分の神経を逆撫ですれば気が済むのだろうか。

廷兼朗は苛立ちを隠さず、頬を引きつらせながら神裂を睨み付けた。そして片側の口の端を吊り上げ、気の抜けるような笑いを見せた。

「あなたは、お許しが欲しいのですか？ 聖人のあなたが、凡人の僕に謝るのですか？ では何ですか？ 僕はあなたの肩に優しく手を置いて、微笑みかければいいのでしょうか？ それとも一緒に泣いて、菊池さんの冥福を祈るべきでしょうか？」

喋り始めたと思ったら、皮肉を込めた言葉で捲くし立てる廷兼朗に、神裂は押されるように少し身を引いた。

神裂の様子を見て、廷兼朗はさらに口元を歪める。

「あなたがどんな心境で俺と戦おうと、僕には関係ないし、僕がそれに対して気分を害していても、あなたには関係ない。そしてもう死んでしまった菊池さんには、生きている僕達のことなど、まるで関係ないじゃないか」

「死者を省みるなどでも言うのですか！？」

会話らしい会話が出来て嬉しいのか、それとも神裂の言い様が可笑しいのか、廷兼朗が薄い失笑を返した。

「聖人様は、そのようにお考えなのか。いやはや勉強になりました」

「あなたが言い出したことでしょうか！？」

「死生観について議論していた覚えは、とんとありませんがねえ」

聖人様にはそう聞こえたらしい。口の端を上げたまま、廷兼朗はそんなことを漏らした。

「あなたが詫びることなんてないと僕は思っていますが、それさえも、あなたには関係ないのでしょね」

神裂が顔を青くするのも気にせず、廷兼郎は続ける。

「だから、ご自由するのがよろしいかと。そもそもあなたは僕を口実にして、菊池さんを憫びに来たのでは？」

今度こそ神裂は、頭を打ち据えられた気分だった。

そんなことは全く考えていなかったのだろう。それだけに予想外の角度からの意見を受けて、神裂がはつとする。

「違いますか？」

突然の指摘に体が付いて来れず、喉から何の音も出てくれない。

「今度はだんまりですか。全く、頭が下がります……」

罵られてる。呆れられている。しかし何故だか神裂は、この男を打ちのめす気にはなれない。もうそんなことは、昨日の内に試みたことだ。あれをもう一度繰り返すつもりは、神裂には無い。

それにここで逆上すれば、神裂の心根を表す良い証左となってしまう。この男のの言葉を、真実だと認めることになってしまう。

「最後に、もう一度聞かせてください」

今度は神裂が廷兼郎の言葉を無視し、質問を重ねる。

「菊池は、強かったですか？」

神裂のほうを気にする素振りさえ見せず、廷兼郎は蹴りの練習を再開した。

答えるまでも無い。既に回答は出されている。言葉だけではない。廷兼郎は全身全霊で、神裂に答えたはずだ。

それでもまだ分からないのなら、もう廷兼郎には回答を伝える手段がない。なので質問を黙殺するより、他に何もすることがない。

神裂が深く頭を下げ、その場を辞した後も、廷兼郎は公園の木を蹴り続けた。

悪いが今は、あの聖人の相手などしている場合ではない。一刻も早く、完全に、完璧に、あの蹴りを身につけなければならぬ。そうしなければ、蹴りのイメージが逃げていってしまう。間に合わない

くなくなってしまふ。

自分の体の動き、心の動き、気の動き。それらを幾度も、幾度も幾度も繰り返し、少しずつ変えてゆき、己の中に想起される幻影と照らし合わせる。気が遠くなるほど、そして気が遠くなることも、まるで気にならなくなるほど。

もうすぐ、ラタナに会える。はたして彼女は喜んでくれるだろうか。彼女にとってこの蹴りは、どんなふうに映るのだろうか。

その反応が、早く知りたい。早く見せたい。
早く、ラタナに会いたい。

精霊の御名において：四

第十学区。ストレンジと呼ばれる区画に、軽やかな笛の音が鳴り渡る。

寂れたマンションの一室の、砕けたコンクリートに腰掛け、ラタナチャイ・シングレックは静かに演奏していた。

ラタナが吹いているのは笛だけなのに、その空間には太鼓や鳴り物などの音が満ち満ちて、複雑に入り乱れていた。

ここにいると、無性に故郷の情景を思い出す。ラタナの生まれた村には、こんなに高い建物は無かったし、山間に囲まれていたはずなのだが、この頹落とした空気がどうしようもなく喚起させてくる。こんなに恵まれた場所は、故郷と似ても似つかないはずなのに。

笛を吹き終わると、他にワイクーを彩っていた音も掻き消えていった。そして体中に、ふつふつと力が満ちていく。

あの学生に殴られ、ピー《精霊》との繋がりを絶たれたときは動転したが、無事に祈りを捧げ、再びピーとの繋がりは取り戻せた。どうやらあの学生は、あらゆる魔的呪的現象を、その区別無く解説してしまつらしい。到底信じられない現象だが、とりあえずそれ以外に説明がつかない。

「全く、日本人てのは……」

一頻りこの国の人間を擲擄してから、ラタナはねぐらにしていたマンションを後にした。

前回は土御門に先手を打たれた形になってしまったが、残念ながらラタナはまだ生きている。サンガからも帰還命令は無いので、任務の続行に全く支障は無い。

しかし正体がばれているというのは、如何にも拙い。この分では情報源であり協力者だった字緒廷兼郎に対しても、既に手を打たれているだろう。これから接触するのは恐らく危険だ。

あの盲目的な格闘馬鹿という手駒を失ったのは、多少なりとも痛手だった。

まるで忠実な犬のように懐き、あれやこれやと言う事を聞いてくれた。それも当然だ。魔術師でもない人間一人を籠絡することなど、ピーの力を持つてすれば容易い。クワン《魂》の行き先を巧みに操作し、さも自分から思いつき、行動しているように見せかければ、傀儡として働いてくれる。

「く、くふふ」

自ずから笑けてくる。廷兼朗が自分を見る時の顔といったら、まるで初恋の相手を見るように恥ずかしいものだった。

恥ずかしい。他人に操られているとも知らないで、浮かれ、はしゃいで。

笑える。本当に笑える。何より、廷兼朗を操っている自分こそが、ピーに、そしてナラシン八に操られているというのが、底なしに笑えてくる。

奴隷が奴隷に鞭を打って悦に入る。これ以上の喜劇があるだろうか。

「アザオ……」

日本語は完璧に習得したつもりだったが、この発音だけは、何故か舌足らずになってしまう。

他の単語なら、流暢に話せるのに。

アザオなんて、言えるわけない。大体なんだアザオって。どういう意味かまるで分からない。人の名前かどうかさえ疑わしい。

どうせなら、そのことをアザオに言ってみればよかった。この鬱憤をあの顔に叩きつけてやれば、少しは溜飲も下がったのに。

アザオの顔ばかり浮かぶ。これではまるであべこべだ。操っているはずなのに、操る対象に振り回されている。操られてしまっている。

「日本人の、くせにッ!!!」

振り抜いた肘がレンガを削ぎ飛ばし、不自然に決れる。その程度で腹の中にある蟠りが収まるわけもなく、かといってこれ以上当り散らす気にもなれず、ぐつぐつと内側に溜めながら、ラタナは一層のこと鬱屈とした気分浸る。

誰でも良い。視界に入った日本人の首を、片端から肘で斬り飛ばしたい気分だ。もしくは膝で肋骨を根こそぎ砕いてしまいたい。

無論、ラタナとてそれを本当に実行に移そうとは思っていない。それだけの分別は獲得している。

やはりもう一度窓の無いビルに行くべきか。だとしても土産が足りない。またも手ぶらで参上というのは、ラタナの美德が許さない。何か取っ掛かりが欲しいところだ。やはりここは危険を承知で、アザオに接触を試みるのも有りだろうか。

色々と思索を重ねるラタナの耳に、甲高い靴音が届いた。山積する瓦礫を蹴散らし、まるで巨人が近づいてくるような幻視を覚えてしまう。

ラタナは躊躇うことなく、左足を前に残して相手に振り向いた。足の幅はほぼ肩幅と同じ。立ち技格闘技において、基本的な足運びを瞬時に選択した。

その耳に付く靴音には、聞き覚えがあった。高そうなソールを敷いて、丈夫な皮を張ったロンドンブーツ。あんなもの、ラタナは履いたことがない。履きたいとも思わない。

「よく来たね、聖人」

挨拶代わりとばかりに、聖人、神裂火織の顔目掛けて石をつま先で跳ね飛ばす。

それを返礼とばかりに、長く伸びた黒鞆が跳ね返す。

「あなた、字緒という青年に、魅惑を掛けていたそうですね」

「日本人は、外人が好きだからね。惚れるのも仕方ない」

ラタナの明らさまな挑発に、神裂も遠慮することなく、ぎりりと

歯を軋ませる。

「降伏しては、いただけませんか？」

「どうして？」

「戦力的には、私が優っています」

「だから？」

小生意気な子供と同じく揚げ足を取るラタナに対して、神裂は覚えの悪い生徒を相手にした教師のように、首を振りながらこれ見よがしに嘆息する。

「無用は争いは、互いの益にはなりませんよ」

「さすが聖人。尊いお言葉。私なんかとてもじゃないけど、口に出さないわ。そんな綺麗事」

「その綺麗事を貫き通してこそ、宗教家と言えるのでは？」

「あなたがそれを言っても、周りが白けるだけよ。聖人さん」

「分かっていますよ。そんなことは……」

神裂が、スタンスを広げる。ベタ足のままぐわりと前後に足を開き、左手で鞘を腰に当て、右手を柄に添える。

これが彼女なりの、立ち居合いの構えなのだろう。

「さあ、来なよジープン。私と、私のピーが、歓迎するわ」

「三人もいるけど、いいのかい？」

言うなり、神裂の後ろから金髪の男と、黒髪の男が顔を覗かせた。どれも昨日見た顔である。

ターンガード・ムエイを取り、ラタナはその顔に満面の喜色を見せた。

「三人だろうが一億だろうが、関係ないってさ！」

途端、ワイクルーの調べが、ラタナの体から爆発した。濁流のように荒々しい祈りの中で、神裂の斬撃がラタナのパンソークを迎え撃つ。

世界にも類を見ない硬度と切れ味を有した日本刀を、さらに神の御徴をその体に顕した聖人が繰れば、この地上で破断出来ない物質など存在しないだろう。

聖人の膂力で加速した切っ先が、人間の肘に打ちつけられ、そして静止していた。

肘と刀が、じりじりと噛み合う。幾度も鍛えた鉄の刃と、堅いとはいえ単なる肘関節が、鏝迫り合いの体を成すはずがない。

この理不尽極まる現象に、むしろ神裂は心地良ささえ感じ入ってしまう。

すなわち、魔術。

「インドラアアツッ！」

左の肘に巨大な独鈷を現出させ、コンパクトな肘打ちと同じ速度で振るわれる。

それに応じる形で神裂が刀を戻し、独鈷を下から弾き上げる。

肘を弾かれ間が空いたところへ、右のテッ・ラーンが絶妙に膝を叩く。肘を弾いた刀では、防御が追いつかない。

神裂が一手遅れてしまう。これは刀と拳足の間合いの違いか、それともまさか、神裂自身が遅いのか。

「ほうら聖人、もたもたするな！ 私のピーは風より速いぞ。さあ、お前のクワンを見せてみる！」

背後に現れるインドラの加護を嵩に取って、稲光のようにラタナは踏み出す。神裂が繰り出すワイヤーも、刀撃も、まるで意に介していない。

肘で、膝で、足先で、鋼を焼結させて鑄造したワイヤーの束が、糸くず同然に裁断されてゆく。

良く見ればそれは、ラタナの体によって生み出された現象ではないことが分かる。彼女の振るう肘や膝に、独鈷や何かの動物の牙や爪が見え隠れしている。

大気に普く存在する精霊あまねくを呼び、集め、従わせ、敵を討つ。精霊

に寄り添う者の面目躍如と言うところだろう。

産業革命後、人間は加速度的に科学技術を発展させ、自然の、そして精霊たちの居場所を狭めてきた。

そんな科学の総本山とでも言うべき学園都市の中で、これほど密に精霊と心を通わせ、物質世界に干渉出来るだけの質量を呼び集めることが可能な人間は、近年では珍しい。

「今日日、ここまで精霊に愛されている人間は、そういませんよ」
神裂は惜しめない賞賛のついでに、大上段からの斬り下ろしも浴びせる。右肘のカチ上げ、もとい独鉗の振り上げで刀身を防ぎ、思い切り溜めた奥足を跳ね上げる。

左手で鞘を掲げ、脇腹を守った姿勢のまま、神裂は後方にあったビルの壁に叩きつけられた。

鞘と左腕を通してさえ、ラタナの右足は神裂の胃を揺らしてきた。内臓を丸ごと突き上げるような蹴りだ。実際、それを狙ったことなのだろう。

だがしかし、この程度では聖人を倒すに至らない。

このような蹴撃、昨日立ち会った武術家の最後の攻撃に比べたら、まるでそよ風の如くささやかにすら感じる。あの体内に直接手を突っ込んで、滅多矢鱈に攪拌するような攻撃に比べたら、外から内臓を揺らす攻撃など物の数ではない。

こみ上げる酢酸に似た匂いを飲み下し、神裂は長い長い刀身を黒い鞘の中に収めた。『唯閃』を放つべく、細い鞘に気を凝らし、刀身の隅々に浸透させてゆく。

まるで冷たい鉄の刃が、己が身と同じく血を巡らせ、肉を躍動させ、熱を帯びていくような。

抜刀の瞬間は、神裂には分からない。知りたいとも思わない。

速く抜いてやる。綺麗に斬ってやる。上手く技を繰り出してやる。そう思えば思うほど血は濁り、肉は縮み、体は熱を失っていく。

そうした妄執を手放してこそ、刀は息吹を宿す。だから抜刀の瞬間など、神裂は知らない。抜刀の瞬間は、己が身の一部となった刀が決めてくれる。刃囿に侵入したものの一切を断ち切る唯一の一閃。魔術、体術、呪い、祝いの全てを詰め込み、一瞬、一撃 たったの一振りに託す一刀。

抜くとも、抜かざるとも思わず放たれる、無謬の斬撃。その刀身が、ラタナの胸板へと吸い込まれていく。空気などどつくに切り裂き、衝撃波さえ置き去りにして、刀は目標へ驀進する。

精霊の御名において：五

精霊ごとラタナを両断するかと思われた無謬の斬撃はその実、彼女の身体に到達するまでもなく停止した。またもラタナは自身の技で、神裂の刀を受け止めていた。

ラタナの右の肘と左の膝が、刀身に齧り付いている。空手と言うところの蹴り足挟み殺しに近い技だ。無論、肘と膝の先からは鋭独鉗が飛び出し、ぎちぎちと打ち鳴っている。

「ぐうっ」

すぐさま次の攻勢に出ようとする神裂だが、独鉗の湾曲する棘に阻まれ、刀を引き戻せない。だがラタナもまた片足立ちのところを引つ張られ、態勢を崩す。その隙を突くべく、神裂は刀を保持したまま左足をラタナの顔面へ振り抜いた。

しかしラタナは崩れた態勢を戻そうともせず、そのまま倒れるがままに任せて沈み込んだ。当然、聖人の繰り出した足蹴は風を巻いて空を切る。

今度はラタナがまんまと神裂の隙を突く。彼女のトイが独鉗ごと、神裂の頸動脈を叩く。顎や鼻や側頭ではなく、皮膚上面に浮き上がった頸動脈狙いの打撃からは、殺意以外の何物も感じ取れない。

左のトイが引つ込み、即座にティーソークが繰り出される。これは流石に神裂も鞘で打ち払う。

あのトイの直後に、さらに切れ味の良い肘を食らえば、さしもの聖人と言えど安穩と構えてはられない。ただでさえ既に左の首筋が熱いのだ。頸動脈は無事でも、周りの毛細血管は裂けているのかもしれない。

肘を打ち払った鞘を戻さず、そのまま脇下へ振り抜く。それをモロに受けながら、ラタナはなおも神裂に肉薄する。

くつつと神裂は奥歯を噛み締める。あの脇への打撃。あれを防がせて、頭を峰で打ち据える算段が見事に読まれていた。だからこそラタナは刀身を避けるべく、さらに前進してきたのだろう。

生半なことを、相手にも自分にも許さない。そして一度でも隙らしきものを見つければ、すぐさま付け入る。恥知らずで、美德を欠き、情緒の欠片も見出せない。

故に厳しく、正しく、容赦が無い。

倒す。殺す。勝つ。それだけのために全てを削ぎ落とし、全てを受け入れている。

自分には出来ない。それだけの苛烈さは、聖人だからこそ身に付け得ない。全てを持ち、恵まれ、授かっている自分には、そんなものは必要ない

(いけないッ!?)

良からぬ考えが、神裂に過ぎる。それは魔が差した、という程度の憤ましいものだったのだろう。つまりそれは、致命的な空漠が彼女に見舞われたと言うことだった。

神裂には、自分に近づいてくる魔術師が最早人の形には見えなかった。事実ラタナは、あらゆるピー《精霊》をその体に表し、まるごと神裂に向けて発散させた。

「ナラシンハ《十の化身》」

馬の突進を伴う左のテツサイが、神裂の右腕越しに肝臓をぐらりと揺らす。さらに右のテツライン、左右のトイからまたも左のテツサイ、右の上段ティーソークとほぼ同時に突き上げる右のチャランポなどに、虎の爪、牛の角、猪の牙が伴い、深々と神裂の体に衝撃を浸透させていく。

連撃はまだ止まらず、右膝を打って飛び上がった体勢から、脳天に打ち下ろす独鈷と左肘。がくりと神裂の体下がったところへ、左の膝が顎を突き上げる。

上半身に絡みつくラタナを振り払おうと、神裂が体を振るう。そ

の勢いを受け、ラタナの体が神裂の後ろへと流れていく。

むしろ悪寒を感じたのは、神裂だった。体が落ちる合間に、振り上げた右肘で背骨を狙撃。脊椎反射で無理やりに、神裂の体が起こされる。

そうして神裂に体重を浴びせられるように、ラタナが落ちてゆく。しかしそれさえも、彼女の技の内だった。

ラタナは体が落ちると同時に、天を仰ぐ神裂の顔面へ、右膝を垂直に突き立てていた。精霊の脚力に落下の勢いを上乘せし、かつ頭を抱え込んで衝撃を逃さぬよう配慮し、楔の如くに膝の一撃を頭部へ突き刺す。

まるでナラシンハの膝に乗せられて、腹を引き裂かれるヒラニヤカシプのように、神裂はだらりと身を投げ出して横たわった。

精霊を伴う猛攻が、聖人を見事に粉碎してみせた。

ナラシンハの十の化身を象った連撃の全てに、渾身の精霊を纏わせ、牽制から崩し、決めへと繋ぐ一切を打撃で構成した連環絶技。激しく移動しながら相手の間合いに入り、果ては組み合うような近間から肘を使って崩し、投げられた勢いを利用して膝を突き降ろす。

鞘を杖代わりに、神裂が立ち上がる。最後の膝蹴りを丈夫な額で受け、何とか意識は途切れなかったが、最初の遠間からの牽制打の時点で内臓を揺らされてしまっていた。

元より昨日の廷兼郎による体内発勁の損傷が尾を引き、うまく体が駆動しない。攻撃でも防御でも、ラタナに一手遅れてしまう。

だからこそ神裂単騎ではなく、あの二人にも来てもらったのだが、このままではあの二人の役目を全うさせることも出来なくなる。

立ち上がるしかない神裂を、ラタナは構えもせず、満足そうに眺

めていた。

「立つまで待つなんて、意外ですね」

「立っていない相手は打たない。それが例え聖人でも」

神裂の嫌味のような言葉を即座に切り捨て、ラタナは再び構える。

「私を動揺させる腹だろうけど、それであなたが調子を崩している。話に聞いてたけど、聖人て本当に、頭がどうかしてないといけないのね」

「な、何を……」

腹からこみ上げる不快感からか、神裂が顔色を無くす。

「だってそうじゃないの。わざと受けて弱い振りして、隙を見せたところにあの二人をけしかける算段なんですよ」

どうやらラタナは神裂の消耗の程を、演技と解釈したらしい。

「むしろ喜びなさい。いちいち指摘してあげてるのよ、あなたの勘違いを。ほら、聖句の一つでも詠って御覧なさいよ。“いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝なさい。神があなた方に望んでおられる” って」

「あなたが、それを口にするのですか……」

「嫌そうな声。だったら、することは分かっているでしょうに」

分かっている。分かっているが、神裂はそんなことをしなくてもいいように、土御門と上条の二人に付いてきてもらったのだ。

攻撃力と防御力に優れた聖人である神裂を前面に出し、土御門と上条は一先ず身を隠し、神裂が生み出した隙に、上条の幻想殺しを見舞う。

上条の一撫でが当たれば、その場で戦闘は終了するのだから、幻想殺しを切り札にするのは当然の戦略だろう。単純明快であるが故に、崩すのが難しい。だが肝心の聖人が崩されていては、戦略自体が成り立たない。

今も内臓が暴れているような感覚を負って、神裂は黒鞘に長刀を

収めた。

涼やかな鞘鳴りが、少しだけ吐き気を抑えてくれる。

「あなた、魔法名は？」

魔法名。それは本来魔術師が魔術を行なう際に名乗り上げる宣言である。それによって世界に対して己の目的を存在意義を確立し、恣意的に事象を捻じ曲げ、万象に干渉する。

「今時、そんなのいちいち持たないわよ」

己が魔法名を名乗り挙げようとした神裂に、すげなくラタナは言い捨てた。

「でも、私のは名前自体が、魔法名みたいなものだから……」

そう言うラタナの体中に、何かが凝る。大気中に存在するエーテルか、マナか、気か、如何様に形容すべきかも知れぬ何か、まるで惑星のように吸い込まれていく。

「ラタナチャイ・シングレック《珠玉の勝利を齎す、小さき獅子》」

「Salvare000《救われぬ者に救いの手を》」

ラタナの口から熱く、吐息が零れる。それは腹を空かせた獅子の口に似て、胃酸と涎の匂いがここまで漂ってくるかのような、熱く長い息だった。

「救うときか、聖人め！ よく抜け抜けと言えたものね。だったら救ってもらおうじゃないか。あんたの言う、救われない者とやらをッ！」

「ならばあなたは、珠玉の勝利を私から奪ってみせなさい！」

ラタナの足元が、爆ぜる。下から昇るワイヤーに先んじて、ラタナが馬の如き躍動でまたも神裂に接近する。

獅子のピーを伴う荒々しきティーソークが、神裂の斬撃に齧り付いた。

精霊の御名において：六

土御門と共にビルの陰に控えていた上条は、その戦いの様を、固唾を呑んで見守っていた。

「なあ、土御門」

少し震え気味に声を掛けるも、土御門は気の無さそうな顔を返すのみだった。

「俺が触れば、その場で終わりなんだよな」

「ああ。そうだにやー」

「でさ、どうやって触んの？」

詰まるところ、全ての問題はそれに帰結する。

超能力者にとっても、魔術師にとっても、楔となる能力 幻想殺し。それが異常な力の発露であるのなら、その強弱も特性も質量も問わずに、一切を滅消する。

例え神なるモノの力と言えども、例外ではない。

斯様な能力をその右手に宿した上条が、今は一歩たりともこのビルの隙間から身を乗り出したくないと願っていた。

「手どころか、銃さえ当たる気がしないんだけど……」

まるで人間が行なう運動に見えない。先人が苦難と天啓の果てにようやく見つけ出した物理現象を、幾つも足蹴にして打ち払って初めて可能な戦闘行為だ。

行けばどうにかなる。そう思っていた時もあった。確かにこれは、行けばどうにかなる。あの長刀も霞み、体躯も判然としない軌道の中に入って行けば、それだけで体がどうにかなってしまうのは、上条でも十分に理解できた。

聖人である神裂の動きが異常極まるのは、まだ許そう。だがあの女魔術師は、昨日この手で幻想殺しをぶち込んでやったはずだった。だから今度だって、あの浅黒い顔に右手を見舞ってやるものだと、

勝手に意気込んでいた。

その決意が、二人の戦闘を見るうちに霧散していつてしまう。

神の御徴をその身に表す神裂と互角か、圧倒しているようにさえ見える女魔術師は、果たして本当に自分が昨日倒してのけた相手なのか、上条の自信が右手と同じように揺らいでいた。

「大丈夫だにやー。銃くらいじゃ当たっても多分、何も起きない」
「ですよー。ていうか軽く手で払われそう」

上条の言葉を掻き消すように、彼らの目の前で何かが炸裂した。
「全く、勝手なこと言っていないでください……」

いつの間にか上条たちの所まで投げ飛ばされた神裂が、苦々しく諫める。

落ちてきた神裂の後を追って、女魔術師も降りてくる。五階建てのビルから落ちた衝撃などまるで無いかのように慎ましやかな着地は、魔術の力量と共に体術の練度も窺わせる。

「あら、こんなところにいたのね。たしか、カミージョ・トマ、だったかしら？」

あからさまに名を間違われても、上条は一言も言い返せなかった。代わりに、自分の右手をこれでもかと堅く握り締める。

その拳を庇うためか、地に臥せていた神裂が立ち上がる。しかしその足元が如何にも覚束ない。

上条から見てもそう感じ取れるのだ。敵の女魔術師が、そんなものを見逃すはずが無い。

「神裂ッ！」

もし呼びかけて神裂が振り向いたら、一体どうするつもりなのか。その危惧を感じつつも、上条は叫ばずにはいられなかった。

猪のものと思われる巨大な牙が、神裂の首に吸い込まれていった。

懐に深く入り込んだラタナが、神裂の首にぐるりと巻きつける。

首を捻られながらそれに抗おうとして、むしろ体の平衡が危うくなる。

受身を取ろうとしたときには、神裂の体はビルから落とされていた。腰投げを食らった勢いで、屋上にいるラタナが見る間に遠のいていく。

(この位置取り、いけない！)

気を取られ、受身も半端なまま炸裂弾のように派手な土煙を上げて、神裂が地面に着弾した。

しかも折り悪く、落下地点のすぐ後ろには上条と土御門が陣取っていた。これでせつかく散開したアドバンテージが無くなってしまった。

自分が招いた体たらくに、神裂が分かりやすいほど齒噛みして、思わず上条たちに怒鳴り散らした。そんなことをしても、まるで無駄だと分かっていたのに。

調子が出ない。肝心なところで一手遅れる。体が、足が、手が、思うように動いてくれない。

あの無能力者の攻撃による不調だと言うことは、もはや明白だろう。内臓をこれでもかと掻き回された衝撃は、たとえ聖人といえども、一日二日で完治できるものではないらしい。

しかも、人体の運用を根底から覆すような高速機動が生み出す高Gが、容赦なく内臓を揺さぶってくる。僅かでも気を抜けば、その場に体の中身をぶちまけてしまいそうだ。

この速さについてこいと言うのは、さすがの上条でも酷だろう。そして何より、この速度では細かな加減が効かない。もしも間に人が入ってきてても、万事が万事を無事で済ませられる自信が無い。

『殺すということは、僕も殺していい、と言うことですよね』

あの無能力者の言葉が過ぎる。あの厳しく非難するような、それでいて失望しているような視線も、ともに想起される。何を非難しているのか。何に失望しているのか。それを彼は、自分からは言わ

ないだろう。

そうして伝えることこそが正しい行為だと、彼は分かっている。だからこそ、伝えてはくれなかったのだろう。彼はそうしたことを、弁えている気がする。

そんなことは関係がないのだ。神裂には、関わりのないことだ。この考えさえ、あの無能力者には何の影響も与えないのだ。

致命的なまでに鋭い牙が、肘と同期して振るわれる。

(これはッ!?)

神裂の揺れる体が、前へと倒れこむ。その様にラタナがほくそ笑む。例えピーの牙は避けられても、既に肝心の抜刀が行える距離ではない。すでにラタナは二の太刀である膝を構えていた。

抜刀は無理。というよりそもそも追いつかない。

みしりと、肉がひしゃげる音がした。よく聞き慣れた音だ。高速の物体が人体を殴打し、筋肉も血管も骨もまとめて砕く音だ。

「ぐばあッ」

その音と共に昇ってきた液体を、ラタナは吐き散らしながら後方へ弾き飛ばされていった。

神裂はその中で、柄を上にして、諸手で真っ直ぐ突き出す形で静止していた。

一瞬、神裂が気を取られていた隙を見てラタナチャイ・シングレツクが大振りになったところを、彼女は見事に迎撃した。

抜刀では追いつかない。となれば、抜刀よりも近間で運用でき、かつ抜刀よりも動きの少なく速いものが理想的だ。

霞んでしまいそうな思考だった神裂が選択したのは、夢想神伝流居合で言うところの『山嵐』の内の一手『柄当て』だった。

これは抜刀すると見せかけて、突進してきた相手の胸板に柄頭を

叩き込む術利である。抜いて振るう抜刀に比べ、槍の如く柄を突き出すのみの拳動は、簡素にして拙速である。ラタナはここへきて、抜刀以外の動きに対応できなかったのだらう。交叉法の要領で自分の突進の勢いを利用され、鞠球の如く弾かれてビルの壁にめり込んでいった。

少しでもタイミングがずれていたら、あの肘で首を打たれていた。否、斬り飛ばされていたらどうか。

あの無能力者に気を囚われた隙が、結果的に神裂に有利へと導いた。

(救われた、のでしょうか?)

そうだとしても、礼を言う必要はない。彼は恐らく、そう言うはずだ。こちらに一瞥もくれずに、それともまた、呆れ気味に叱りつけてくれるのだろうか。

「ふふっ」

鞘を腰の位置に戻しながら、神裂は薄く笑みを浮かべる。

叱ったと、言って良いのだろうか。あれはそんな高圧的で、押し付けがましいものではなかった。もっと、下から這い上がってくるような、上へと捧げるような。

(そうか、あれは……)

祈りなんだ。彼は、祈っていたんだ。聖人である自分に向けて、荒々しく、仰々しく、苦々しく、祈ってくれていたんだ。

手を握っていないからといって、それが祈っていないなどと、誰が言えるのか。

違った。彼はちゃんと握っていたんだ。堅く、強く、拳を握り締めていたんだ。

今更、神裂はそんなことに気が付く。

こんな体で宗教家を名乗り、一教派の当主を務めていたのだから、呆れられるのも仕方が無い。

「神裂、神裂！」

上条が駆け寄ってくる。全く何て声だ。まるで自分が死に掛けているように悲壮な声だ。

「心配を、お掛けしました」

せめてそう返さねば、彼はいつまでもそんな声で自分の名を呼ぶことだろう。それに神裂が、いつまでも耐えられる自信は無い。

神裂の傍らに控える上条に対して、土御門は一目散に、ラタナが突き飛ばされたビルへと向かった。それでいい。今は勞ってもらう場合ではない。目的の達成を確認することが最優先だ。

程なくして搜索を終えたであろう土御門が、悄然と歩み戻ってくる。その様に、神裂の背筋が冷え冷えと固まっていく。

「奴は居ない。逃げられた」

予想はしていても聞きたくない言葉が、同僚の口から発せられた。

「あの深手で、これほど短時間に脱出できるはずがありません」

「ああ、俺もそう思う。だがもし……」

誰かが、助けたのだとしたら。土御門が、言外にそう指摘していた。

有り得ない。土御門や上条、そして神裂にも気配を悟らせずにあの戦闘を観察し、ラタナと神裂の距離が開いたのを見計らって連れ出したというのか。そんな人物が、この学園都市に。

顔をはたと上げた神裂に、土御門は頷きを返した。

「まさか、そんな……」

「それしか考えらん。奴以外にこんなことはする理由のある者はいないし、恐らく、出来るぞ」

そんな、まさかと反芻し、信じがたいと言った顔つきで神裂は固まっていた。

字緒廷兼郎が、ラタナチャイ・シングレックを助け出した。少なくとも土御門と神裂は同じ結論に達していた。

愛の拳、恋の蹴り：一

ストレンジに程近い第十学区の一画を、黒い影が走り抜ける。人目を避け、大きな通りを避け、監視カメラを避け、それはするりとした身のこなしで暗い路地を進んでいる。

見ればそれは二人組みだった。男が一人の女を背負っている。

「ありがとう、アザオ」

背負われている女が言った。浅黒い顔は青褪めており、言葉を搾り出す唇も僅かに震えている。

彼女の名はラタナチャイ・シングレック。学園都市に潜入してスパイ活動を行なっている魔術師である。相当なムエタイの実力と、今日日では珍しいほど精霊に愛される素質を兼ね備えた類稀なる魔術師の彼女だが、今現在の憔悴ぶりを見れば、それも疑わしく思えてしまうだろう。

それもそのはず、ほんの数分前までラタナは神裂火織という、世界に二十人といない聖人の一人と対峙し、見事打ち倒されてきたばかりなのだ。

「お礼なんていいよ。そんなつもりで助けたんじゃないんだ」

そんなラタナの苦労をねぎらうように、努めて柔らかい口調で男が答えた。彼女にアザオと呼ばれた男は、本名を字緒廷兼郎あさおていけんろうと言う。無手にて能力者を制圧する技術を開発するプロジェクト『カウンターメジャー対抗手段』の研究協力者である。

最近出会った二人は、互いにムエタイを教えたり、学園都市について教えたりと、見た目親密な関係を築きつつあった。そんな廷兼郎は、ラタナの窮地に素早く駆けつけ、彼女をその場から救い出したのだ。

あの聖人の一撃で肋骨を割られたラタナは痛みに堪えながら、振り落とされないようにしっかりと廷兼郎のジャケットを握り締めて

いた。彼女もまさかあのように絶妙なタイミングで、廷兼郎の助けが入ると思っていなかった。どうして？ と訝しく思うところもあつたが、その場では渡りに船と、一も二もなく廷兼郎の手を握り返した。

そして廷兼郎も何も言わずラタナを背負い、ストレンジの瓦礫に紛れてあの場から迅速に離脱した。

「本当に、礼を言うことじゃないさ」

廷兼郎の声を聞きながら、ラタナはやはりこの男を引き込んでおいてよかったと回想していた。元より学園都市の人間ではないラタナが効果的に諜報活動を行なうには、内部の協力者が不可欠だった。そこで彼女は笛の音に乗せて魅惑の魔術を振り撒き、のこのこと現れた廷兼郎を魔術的に支配して内部協力者に仕立て上げた。

ラタナに魅惑され、心酔した廷兼郎は、まるで自分で思い立っているかのように錯覚しながら、ラタナの諜報活動を幫助することになった。まるでデートのように学園都市を廷兼郎が案内したことで、もはや地理的情報は全てラタナもとい彼女の所属している組織に筒抜けである。

しかしそれも永遠には続かなかつた。学園都市の如何なる組織かまではラタナには分からないが、土御門と名乗る魔術師によってラタナは迎撃されてしまった。驚くべきは学園都市という科学の総本山にて同じ魔術師をけしかけられたことだったが、恐らくは自分と同じく学園都市に潜伏しているスパイなのだろうと推測していた。

科学と魔術は遠いからこそ、互いの動向には酷く敏感である。表向きには冷ややかな態度でも、中では活発に取引や交渉が行なわれているというのは国家間や企業間でもよくある話だ。その組織とラタナの利益とがぶつかり合い、今回のところラタナは排除されてしまった。

しかし、まだ望みはある。そもそも命を取られていないのだから、まだまだやりようは幾らでもあるのだ。それにラタナから見れば、

あの土御門の一派の行動はどうも判然とせず不徹底な感を否めない。何故なら自分の仲間かもしれない廷兼郎を始末せずに、こうして生かしているからだ。そのように爪の甘い連中ならば、出し抜くことも可能だろうと、ラタナは心のうちでほくそ笑んでいた。

可能性は残されている。それだけでも、ラタナにとっては収穫だった。

「少し、寝る。あとで、起こして」

「わかった。ぐっすり寝てな」

先の戦闘はいつにも増して過激だった。その中でどれだけのピーに助けられたことが。数えるのも億劫になってしまっただけの損耗が激しい。

今は次に備え、力を蓄えねばならない。

廷兼郎の背中に顔を埋めて、ラタナの意識はまどろみの中に消えていった。

夢も見ぬよな熟睡が、顔に浴びせられた冷や水で遮断された。

「起きろ、ラタナ。ほら、起きろ」

そして容赦ない平手打ちが、ラタナの意識を無理やりに覚醒させる。いきなりの衝撃にろくな反応も返せないまま、ラタナはぼうつと目の前の人物を見上げている。

「……アザオ」

「おはよう。寝顔も可愛いねえ」

いやらしいまでに口の端を吊り上げ、廷兼郎はラタナの見下ろしていた。

鑑みれば、ラタナは椅子に縛り付けられていた。いつの間にもこのようなことになっているのか、ラタナにはとんと覚えが無かった。廷兼郎の背中で寝ていて、次に目が覚めてみれば椅子に縛り付けられ、水を浴びせられて平手で打たれた。

激しい状況の推移に、寢覚めのラタナはまるで追いつけなかった。「君の始末は土御門さんたちに任せるつもりだったが、少し事情が変わってね」

未だ夢見心地のラタナに気を使うことなく、廷兼郎は言葉を羅列する。

「君に騙されていたとはいえ、学園都市の不利益になるスパイ行為を幫助してしまったから、その疑いを晴らさなきゃいけないんだ」
「分かった？」
「と言って覗き込んでくる廷兼郎の顔には、やはりいやらしい喜色が浮かんでいた。」

「タイ人には難しい話だったかな？」

「難しいわね。日本人は回りくどくていけない」

「いや全く、国民性丸出しで申し訳ない。それじゃあ、簡単な話をしようか」

そう言って廷兼郎は、胸元から小振りのナイフを取り出した。その刃の煌きをラタナの顔に当てて、にんまりと微笑む。

「戦って死ぬのと、戦わないで死ぬの、どっちがいい？」

先に宣言したとおり、起き抜けの人間にも分かりやすい話だった。その率直さは状況を理解するには不十分だったが、決断するには十分な強さを持っていた。

「それは、戦士ナックモエにする質問じゃない」

聞くなり、廷兼郎の持つナイフが翻る。それはラタナの体をなぞるようにして振るわれた。

張り詰めた縄が断ち切れ、途端、ラタナを椅子に縛り付けるものが何も無くなった。

「立ちなよ。座ってちゃ、ムエイタイは出来ないんだろ」

わざわざ『ムエイタイ』の部分で本来の発音で言う。その語尾の上げ具合から、その発言が廷兼郎からラタナへの意趣返しであることが窺える。

「もう始めるの？　ここだと、少し手狭だわ」
ラタナの言うとおり、そこは単なる一室だった。やり合つのに場所を選ばずとも、手狭なのは否めない。

移動しないならそれで良し。既に体の緊張は高まっている。いつ何時仕掛けられようとも応えられるし、いつ何時でも仕掛けられる。単にこれは、廷兼郎を試す言動に他ならない。

魅惑を掛けたはずの相手が、何故このような仕儀に打って出たのか。それを確かめる材料が、今は一つでも多く欲しい。

「じゃあ、移動しようか」

そう口にしたときには、既に廷兼郎は部屋の戸を開け放っていた。
(こいつ……)

今度は、ラタナが試されている。ここで仕掛けてくるか、あえて乗ってくるか。

「ええ、行きましようか」

あえて仕掛けに乗り、ラタナは部屋を出る廷兼郎の後ろに従った。

愛の拳、恋の蹴り：二

ラタナは廷兼郎に連れられて、大人しく真つ白なホールへと訪れた。事ここに至っては暴れてもしようがないと諦めているのか、それとも、自棄にならないでいられるだけの何かを有しているのか。

「で、いつ始めようか？」

「もう始まつてる」

ラタナの台詞に、廷兼郎は露骨な笑みを零した。

「骨身に沁みてナツクモエだなあ。殺すのが勿体無いよ」

今度はラタナが、獰猛に口を歪ませる。

「あなたに、あたしが殺せるの？」

肩で首を守るように腕を高く上げ、後ろの足に体重を残して、前の左足を少し浮かせる。

最早身に沁みて馴染んだ構え。ターンガード・ムエイである。

「ああ、ぶつ殺してあげるよ。安心しな」

ラタナの挑発に答え、廷兼郎は左手を肩口から前に出し、臍の前に右手を置いた。そういえば、ラタナの前でこの構えを取るのは初めてだと、廷兼郎は気が付いた。

以前はムエイで対抗していたが、今回にそのような制約はない。字緒廷兼郎の全身全霊で、ラタナチャイ・シングレックを迎えらるる。

ラタナは両腕を高く上げ、肩で顔をガードし、背をぴんと立てている。相変わらずのターンガード・ムエイだ。

するりと音も立てず、二人の右奥足が翻り、互いの脇腹を叩く。肉を打つ音で、決闘の幕が上がる。

テツサイ《中段蹴り》のダブルを狙うラタナに対して、廷兼郎は蹴った右足で踏み込みながら右鉤突きで間合いを詰める。蹴りが破壊力を発揮するのは、脛の中ほどから足先までである。それより近

づいてしまえば本来の破壊力は発揮されない。

相手の攻撃を殺しつつ、自分の攻撃有効範囲を確保する。戦闘という行為はある意味、このような陣地捕りに終始すると言える。極論すれば、相手が攻撃できない範囲を先んじて確保し、そこから一方的に攻撃できたのなら、勝ち是有り得ても負けは無い。

しかし、自分が攻撃できる位置というのは、得てして相手も攻撃できる位置であるということは珍しくない。

鉤突きを打ったはずの廷兼郎の頭が、右に傾いてゆく。踏み込んできた廷兼郎に対して、ラタナの右肘がきちんと迎え撃っていた。たまたま顔の近くに左腕を置いていなければ、こめかみがざつくりと抉られていたことだろう。

間髪入れず、ラタナが左の膝を突き上げる。遠中近の全てを打撃でカバーする技術は、立ち技最強の誉れ高いムエイタイならではの。ろつ。

しかし打撃というのは、根本的に内から外というベクトルである。その逆、外から内へ向けられる攻撃とは、宿命的に相性が悪い。

肘打ちを行なったラタナの、その右手首を掴み、左の手の甲で肘を上から押さえて引き込む。ラタナの右手は瞬時に伸展し、廷兼郎の右手と肩に挟まれて固定される。

肘を下げた左手を伸ばして、ラタナの肘を固めながら床に叩きつける。そして横になったラタナの腹を、つま先で蹴り上げた。

体をくの字に折りながら這い蹲るラタナは、未だに驚愕から冷めない。攻撃されたという感覚を与えられぬままに、押さえられたからだろう。それほど廷兼郎は柔らかく極め、しなやかに投げ、強かに蹴ってみせた。

どう考えてもムエイタイじゃない。こんな技は、ムエイタイには無い。

「それが、あんたの正体だったのね」

「ごめんね。ナックモエじゃなくて」

何ら悪びれることもなく、廷兼朗はラタナを上から見下ろしている。

あの公園での邂逅では、ムエタイで相対するという縛りを設けたが、今回はそのような制約は無い。

ありのままの廷兼朗で、ラタナチャイ・シングレックを迎え撃つことが出来る。ありとあらゆる手段を講じて、彼女を歓迎することが出来る。

「さあ、続けよう。お前のムエタイ、全部見せてくれ」

再び同じ構えを取り、廷兼朗が進み出る。それに応えるように、ラタナも立ち上がった構え。

踏み込んでくる廷兼朗を、ラタナのトイ《拳》と左のテ・ライン《下段蹴り》が止める。ほぼ同時に上下を打撃され、出足が鈍る。

左のテ・ラインから右のパンソーク。左下から右上という対角線コンビネーションは、打撃格闘技の基本である。対角線の離れた場所を攻撃することで注意の薄れた部分を打撃し、敵の防御を揺さぶり、命中率を高める。

打撃格闘技の基本中の基本であるコンビネーションを、廷兼朗も慣れた手付きで捌いていく。パンソークの下を手刀で掬って潜り、右の掌底で鳩尾を強かに押す。

そのまま掌底を戻さず、左周りに円を描きながら脇腹に鉄槌を打ち付ける。そうしてさらにラタナの右に回りこみ、今度は背中に向けて左の鉄槌を振るう。

腎臓を抉るような一撃に、こめかみを削ぎ飛ばすような一撃が被せられる。

テイスーク・トロン《後ろ回し肘打ち》が決まり、廷兼朗の頭から血が飛び散る。

下がる廷兼朗に対して、回転を殺さずラタナの右のトイとテッサイが襲う。

左の防御に構わず叩きつけられ、堪らず廷兼朗が大きく吹き飛ば

どくどくと流れる血を拭い、廷兼朗は傷の程を確認する。咄嗟に首を振って僅かに逃げたため、こめかみの骨を砕かれることはなかった。それに打点が奥へと移動したため、出血が目に入る心配も無い。

こちらの損傷は存外と軽微だ。恐らくラタナのダメージの方が深大だろう。回転肘打ちと鉄槌脾臓打ちの応酬の中、廷兼朗は確かに骨を砕く感触を味わっていた。

あともう少し打ち抜けたなら、確実に浮動肋骨を脾臓に突き刺すことが出来たのだが、それでもダメージは確かにある。

先程の右のトイとテッサイは、これまでのように標的をしなやかに打つタイミングも、衝撃を中まで通す貫通力も欠いていた。砕かれた浮動肋骨で背中肉が引きつり、打撃が縮こまった証拠である。それでなくとも、既にラタナは神裂の柄当てをモロに食らい、胸郭を砕かれている。ここに至っても内転する動きである肘打ちが衰えていないことこそが異常なのだ。

しかし少なくとも、ラタナの右半身は死んだ。これ以上ない収穫だ。

じりじり飄つてみるのも楽しそうだが、そういう戦い方を廷兼朗は生憎学んだことが無い。ここはセオリー通り、右から侵入して丁寧に破壊してあげよう。

ラタナに回復の間を与えないよう、廷兼朗は右へ回り込みながら前進する。

回り込むのを嫌がるなら、左に逃げるか、右の攻撃で止めるだろう。逃げるなら追うまでだし、右を振ってくるなら、それをむしる迎え撃つ。背中痛みを無視して繰り出す攻撃を迎撃し、背の引きつりを思い出させてしまえばいい。

そんな思惑を、廷兼朗の直下から立ち昇る斬撃がすっぱりと断ち切った。

愛の拳、恋の蹴り：三

ラタナは左の回転肘打ちを、体を捻って無理やり縦に振ってきた。鼻先がぱっくりと割れ、血が垂れる。あと少し体を起こすのが遅れていたら、代わりに下顎が真つ二つに断ち割れていただろう。

こういう肘の打ち方もあるのか。改めてムエイタイの奥深さを味わい、廷兼朗は感動を覚えた。

伸び上がる肘打ちの動きが、そのまま膝蹴り《チャランポ》へ移行する。仰け反ったところを突き上げられ、廷兼朗の体がくの字に折れ曲がる。

ラタナの繰り出す技の一つ一つ。激しく交換するやり取りの一つ一つに、廷兼朗は打ち震える思いだった。その度に、ラタナに応えねばならないという思いが滾々と湧き上がり、体を満たし、心を速めていく。

（何だ、どうしたって、俺は……）

魅惑だの魔術だのが、例え有ろうと無かろうと、廷兼朗はラタナが好きなのだ。恋しいのだ。愛おしくて堪らないのだ。

その証拠に、ラタナの前に立つだけで、とても興奮する。その一挙手一投足を見ているだけで、息が上がり、心の臓が早鐘を打ち、臍の辺りに燃える気が凝ってゆく。

ラタナに技を繰り出すだけで、より強く、より速く、よりしなやかに、より緩やかに、より無駄なく、より精妙へと引き締まってゆく。もっとカッコいい自分を見て欲しくて、図らずも己を高めてしまふ。

ラタナに打たれる度に、体が熱く滾ってしまふ。まるで互いの体温を交換しているかのように、蹴られた肩が焼ける。脇腹が焦げる。太ももが爆ぜる。内臓が沸騰し、脳髓が蒸発する。

ラタナを打つ度に、自分の体温がラタナの中に吸い込まれてゆく。

自分という存在が、確実にラタナの体に刻まれてゆく。

腕を挫き、足を払い、腹を突き上げ、頭を打つほど、ラタナの肉の奥にある、芯のようなものを感じる。攻めるたびに少しずつ、その芯へと近づいていく気がする。そして攻められることに、自分の芯にラタナが近づいてくれる気がする。

その芯が折れたとき、負けてしまうのだろうと、廷兼朗はぼんやりながら想像していた。無論、折るのは自分である。ラタナの一番奥を砕くのは、自分を置いて他にいない。手前勝手にそう思えることこそ、自分がラタナを好いている何よりの証左ではないだろうか。

廷兼朗がラタナを始末しなければならなかったのは、確かに諸々の事情が存在する。だが、そんなものは二次的なことに過ぎない。そんな事情が発生する前から、廷兼朗はラタナの討伐を申し出ていた。それは果たして、土御門や上条への恩義だけに支えられていたのだろうか。そんな実直さも、実は自身の奔放を覆い隠す、副次的な要因に過ぎないのではないだろうか。

学園都市を連れまわしたり、練習を見てもらったりと、何を迂遠なことをしていたのだろうか。今更ながら廷兼朗は、自分の晩熟おくてぶりに腹が立った。

そんな一見して真つ当な恋愛行為で、自分を伝えられるのか。楽しそうな場所に訪れ、美味しそうな食事に誘い、共通の話題をさも嬉しそうに話し、それらを延々と積み重ねることのどこに、自分が必要なのだろうか。

まるで必要ない。そんなことを行う必然性など、廷兼朗の中には寸毫たりとも存在していない。

(初めから、こうすればよかったんだ！)

とつくに答えは出されていたのだ。あの日、ワイカーの音に釣られて出会ったその日その時に、やることは決まっていたのだ。

戦う。争う。殺しあう。それ以外の選択肢など、最初から選べる

はずもなかったのだ。それ以外の方法では、廷兼朗は何も伝えられない。それは白井との会話で立証済みである。

” どうして、戦うのですか？ ”

そんなことは言葉に出来ない。戦う理由は、戦いの中でしか分からない。だから戦うことでしか、それは伝えられない。

だから伝える。拳で、掌で、肘で、肩で、腰で、膝で、脛で、つま先で、思いの丈をぶつけるのだ。

(だから、見てくれ。俺の、この蹴りを！)

今度は跳躍し、上から下へとラタナが肘を振り下ろす。オーバーアクションだ。こんなもの、食らうはずがない。

落ち着いて距離を外し、着地したラタナに空かさず蹴りを放つ。思い切り膝を引き付け、腰を返しながら、つま先を打ち出す。

回し蹴りだと警戒し、ラタナが横に防御を置く。

その防御を避けるように、つま先は何故か真っ直ぐに、ラタナの顔を打ち貫いた。

衝撃が吸収できない。受け流せない。蹴られておきながら、蹴られたという実感が湧かない。

虚を突かれた、ということもある。完全に膝を引き付けての、空手の回し蹴りの体勢だった。なのに何故か、その足は真っ直ぐに突き出された。

まるで、槍のように。

蹴られたとき、人間の足の感触は無かった。硬く、細く、鋭い、槍の穂先に刺されたような感触しかなかった

余りにも直進性と貫通性の高い蹴りを顔に被ったラタナは、まるで頭から引っこ抜かれるかのように、後方へとすっ飛んでいった。

そのまま寝そべっていると、ラタナは左目の視界が僅かにずれていることに気が付いた。手で触ってあげると、頬の辺りに指がずぶ

りと沈み、それを機に顔面を激痛が走り回った。

頬骨の上　眼底が砕かれている。これでは眼球を上手く保持できず、下に垂れ下がってしまう。そしてじきに内出血で腫れ上がった頬が、左目を覆い隠すだろう。

これだけ戦って、ラタナは左眼底骨折に背部浮動肋骨の粉碎骨折そして先の戦闘で胸郭骨折まで負っている。対して廷兼郎は、側頭を切られただけに留まっている。

あの聖人との戦闘の後とはいえ、これほど明瞭な形で実力が示されるなどは、ラタナには思いもよらなかった。たかだか日本人の格闘技者一人に、自分のムエタイが後れを取るはずもないと、精霊もろくに集めず立ち会った結果がこれだ。

「ありがとう、ラタナ。君のおかげで、僕の蹴りが完成した」

倒れ伏せるラタナへ向けて、廷兼郎は涼やか極まる声音で語りかける。

「……蹴り？　今の、が？」

顔面で雀躍する痛みの中、途切れ途切れに発したラタナの言葉を、廷兼郎は嬉しそうに受け取った。

「天羽根流の、そして『カウンターメジャー対抗手段』の新しい腿術。……そうだな。君の名を取って、『ししきうがっ獅子穿』とでも名付けようか」

獅子穿。ラタナは心の中で、その言葉を反芻した。

回し蹴りのように腰を返しながら、前蹴りの軌道で放たれる蹴り。連発は利かないようだが、高い直進性と貫通力が生み出す破壊力は、精霊に守られた魔術師の頬骨を割る程度のものだった。

前蹴りの軌道であるため、同じタイミングで放たれた回し蹴りよりも速く届く。そして腰をしっかり返しているため威力は十分。さらに、前蹴りの軌道を描くため、腰を返しながら複雑に足を捻転させねばならず、そのせいで衝撃が螺旋状に足を伝い、貫通力を飛躍的に高めている。

中段回し蹴り《テッサイ》と前蹴り《ティップ》の中間。あるい

はテツサイとティップの合いの子か。たったそれだけで蹴りが成ったと思われるのは、ラタナにとって少しばかり癪であった。

ゆっくりと歩み寄る廷兼郎に向かって、ラタナが跳ね起きた。全身をバネの如く撓らせて、その勢いのままテツサイを放つ。

廷兼郎から見て左にステツプインしながら、右のテツサイ。相手の右足から逃げながら、左に近づいて蹴りの間合いを潰し、自分は右奥足の間合いを確保する。

愛の拳、恋の蹴り：四

骨を強かに打つ感触と、顎を揺さぶられる感覚が、同時にラタナを襲った。

廷兼郎の左のつま先が翻り、ぐにやりと抜けてラタナの顎に突き刺さっている。

ピットロチャギ。内から外へと捻転して蹴り上げる、テコンドーの蹴りの一種である。

余裕を持って脇腹を左腕で防御し、まんまと空いた顎につま先を叩き込んだ。防ぎながらであるため体重の乗りは良くないが、機先を制するには十分である。

驚愕と脳震盪とで足を揺らしながら、ラタナはたたらを踏む。そこへ追い討ちとばかりに、廷兼郎が右足を振り上げた。

即座に腿術『獅子穿』と見て取ったラタナは横に飛ぶ。最短距離をなぞる一直線の蹴り。而してそれは、横へ動けばまるで意味を成さない。

そのくらいのはことは、揺れる足でもやってのける。捌き様に懐に入り、肘を見舞おうとしたラタナは、肋骨が冷え冷えと固まっていたのを感じた。

戦闘中に目を逸らす。あつてはならないと思いつつ、ラタナは視線を自分の右腹に差し向けた。

横に逃れ、捌いたはずの蹴りが、自分を追ってくる。足の甲が、自分を追ってくる。

(前蹴り《ティップ》じゃ、ない!?)

あの直線的な動きが、どこから回し蹴りに変化したのか、横に蹴り飛ばされながらも、ラタナには一向に理解し難いことだった。

腿術『獅子穿』が恐ろしいのは、その直進性と貫通力だけではない。前蹴りの軌道だからといって、前蹴りのように捌けば、空かさ

ず横から衝撃が放たれる。

ロシア系の総合格闘家が使った高等技術の中に、横に叩きつけるストレートパンチというものがある。これは見た目上ストレートなのだが、相手が横に逃げたと見るや、その軌道のまま横に叩きつけるというものだ。

捻転しながら突き出すストレートの動きを、途中でフックの動きに変換するのである。そうして人差し指の第一関節の辺りで横から叩くのだ。上半身、特に肩回りや上腕の発達が著しく、ロシアンフックなどの豪快なパンチを得意とするロシア人の骨格を活かした攻撃方法である。

『獅子穿』は、これと全く同じ拳動を可能とする。前蹴りだと思つて横に逃げたなら、捻転する動きで今度は回し蹴りへと変化し、相手を追い打つ。

連打は利かないものの、軌道を自在に変えて襲い来る。膝に引き付けるため、そこから上中下に打ち変えてもいい。さらに放った後で、回し蹴りにも前蹴りにも変化する。

なるほどアザオが蹴りを教えてくれといったのはこのためだったのかと、ラタナは今更ながらに頷いた。

いつそ罵倒したい気分だったが、その蹴りを詰るほど、ラタナは落ちぶれてはいなかった。

むしろ『獅子穿』は、理想的な中段蹴り《テッサイ》と言えるかもしれない。ムエイタイの蹴りは、空手の蹴りのように膝に引き付けず、足先から目標まで最短距離を描き、一直線に打ち抜く。

膝に引き付けてはいるものの、そこから先の軌道は目標まで一直線。それでいながら、回し蹴りとしての属性も獲得している。

最短距離での回し蹴り。その理想に対してこのようなアプローチがあるとは。

「私の蹴りを、よくも改悪してくれたわね」

悪辣の限りを込めた嫌味も、今の廷兼朗には届かないらしく、熱

に浮かされたような瞳をラタナに向けるばかりだ。

「そいつは悪かったよ。お詫びに、たらふく馳走してやるう」
かあつと熱い息を吐き、廷兼朗がまたも右から侵入する。

先のラタナの奇襲。回転肘打ち《ティーク・トロン》は不発だった。今度こそ当たる、などとは思えない。ここはやはりセオリ通り、右のテッサイで正面に誘導する。

そうとなれば背中への痛みなど意に介さない。いつも通り木をへし折るように、相手の腹を叩くだけだ。

右へ動く廷兼朗へ向かう形で、右のテッサイが放たれる。そのテッサイに『獅子穿』が向けられる。

ばちんと、何か断ち切れる音が響いた。耳の外からではない。体の奥から、耳の内側に向けて放たれた音だ。

そしてラタナのテッサイが、空しく空を切っていた。

廷兼朗の『獅子穿』は、ラタナのテッサイを下から持ち上げていた。まるでクロスカウンターのように足が交錯し、廷兼朗のつま先だけがラタナの股座を直撃していた。

まさにそれは交叉法である。相手の攻撃の内側から攻撃し、相手の攻めを排しながら己のみが攻めを成立させる。

捻転しながら打ち出される『獅子穿』ならではの高等技術である。一気に血の気の引いたラタナは、貧血を感じながらその場に崩れ落ちる。股座の急所、『会隠』を痛打され、動脈を断裂されたのだから、それも無理からぬことだ。むしろ急激な血圧低下によるショック死を免れただけでも幸いである。

まるで尻の穴から生氣という生氣が抜け落ちていくような感覚だ。股間の熱さとは裏腹に、体は空気の抜けた風船よろしく熱を吐き出してくれる。

「立たないのかい？ 立たないと、ムエイタイは出来ないよ」
股から夥しい出血を被っている女性に対し、廷兼朗はそんな言葉

を掛けてきた。まるで立たないラタナのほづがおかしいと言わんばかりの口調である。

珠玉の勝利：一

その言葉を受けて、ラタナが膝を突いて立ち上がる。少しでも気を抜けば、腰も一緒にすくと抜け落ちてしまいたいそうだが。

それでも、ラタナは立ち上がる。この日本人の言葉ジープンに伝えるわけではない。かといって、ムエイタイの素晴らしさを伝えたいというでもない。理由など分かりきっていて、至極明快なものだ。

この男を蹴り殺さなければ、気が済まない。ずたずたに四肢を引き裂いて、その股間を切り取って目の前で握り潰し、ついでに腸が揃っているか数えさせてやる。そうして空洞になった腹に見える背の裏の肉から背骨をもぎ取り、長虫のように頭を釣り上げてやる。

たったそれだけのために、ラタナは立ち上がる。生まれたての小鹿のように頼りなく、二つの足がかるうじて体を支える。

「とどめ、刺さないの？」

既に急所を突かれた身で、太々しくラタナは言う。

何をか言わんや。廷兼朗は肩を竦めて答えた。

「君はもう、とどめを刺されているよ」

廷兼朗の含みある物言いに、満身創痍のラタナが不服そうに声を上げる。

「こんな傷くらいで、私が死ぬとも思っているようね」

魔術を以ってすれば、このような傷などあるうが無かるうが関係ない。精霊ヒトの力を借りれば人間一人など、ほんの一瞬で残滓も残さず消し飛ばしてやれる。

廷兼朗は手を振って否定しようとしたが、途中でそれをやめてしまった。

「そういうことではないんだが……。まあ、何かやり様があるなら見たいなあ。そのために君を連れてきたんだし」

くふりと、ラタナが底意地悪く微笑む。その手には、廷兼朗と会った時に奏でていた笛が握られていた。

「やっぱり、ジープンは愚鈍だ」

そう言つて静かに、ラタナは笛の先に口をつけた。

砕かれた胸郭のことなど意に介さず、その口は軽やかな音を生み出す。間を置かず、笛のみだったワイクーに、いつの間にか他の音が加わっていた。

「うわあ……」

ワイクーを奏でるラタナを襲う素振りさえ見せず、廷兼朗はワイクーに聞き入っていた。

タイの音楽でありながら、どこか郷愁に駆られるその音色に、深々と心を傾けているようであった。

ラタナが笛から手を離しても、ワイクーはいつまでも止まず、ホールの中で反響を繰り返しながら鳴り渡っていた。

「これが、君の魔術かい？」

廷兼朗の言葉を聞いて、ラタナが眉を上げて驚きを表した。

「驚かないのね。鼠のようにみつともなく走り回るものだと思つていたわ」

そりゃあ鼠に失礼だなあと返し、廷兼朗は鼻で笑う。

「土御門の名は出したんだ。そこから察してもらいたいな」

廷兼朗は、魔術を知っている。無論、ラタナもその程度の推測は立てていた。ただ、廷兼朗自身には全くの魔術的記号や意味も見出せなかったため、魔術師でもない只の日本人がこのような状況に陥れば、取り乱して然るべきだとラタナが勝手に想像していたまでのことだ。

「負けを認めるなら、今のうちよ。泣いて喚いて床に頭を打ち下ろすなら、命だけは残るかもしれないわね」

それはまるで虚勢ではない。単なる事実である。このジープンが恥も外聞も捨てて自分に跪くのなら、もしかしたら命だけは助けて

いいかもしれないと心変わりするかもしれない。

ワイクーによってピーに祈りを捧げたラタナは、文字通り森羅万象を味方に行っていると行っても過言ではない。木火土金水、陰陽は言うに及ばず、あらゆる物質に宿るピーが、今やラタナに力を添えている。

ジープンの格闘マニアに向けるには大人げが無さ過ぎるために躊躇っていたが、今はそんな矜持より、廷兼朗の醜態が見たくて堪らない。

「あははっ。そんな口上をしてしまったら、君こそ逃げられないじゃないか」

嬉しそうに手を叩きながら、廷兼朗は忌憚無く笑っていた。

「あなたは、魔術というものが分かっていないようね」

「ああ、さっぱり分かん。超能力と同じで、まるで見当が付かない。僕のような凡人は、全くの蚊帳の外だ」

ラタナの嫌味に、廷兼朗は間髪いれず返事した。相も変わらず、その顔には微笑みが貼り付いている。

「だから、この哀れで卑しいジープンに、教えを授けてくださいませ」

そこまでが、廷兼朗の我慢の限界だったのだろう。大げさな礼から顔を上げると、背を仰け反らせるほどに哄笑を上げた。

ワイクーに負けぬ笑い声が、ホールの中にぐわんぐわんと反響して、祈りの歌と緋い交ぜになってゆく。

「なんてな。全く、超能力者も魔術師も、可愛いらしいっただらないぜ。どいつもこいつも、さも自分は世界に選ばれたとも言わんばかりの態度だ。恥ずかしくって見てられないよ」

「何が、言いたい？」

「君たちは、君たちが思っているほど、人の道から外れていないということだよ。もうどうしようもないくらい、人間なのさ。そうして本当に哀れな獲物を見るような態度でいることが、何よりの証拠

じゃないか」

獲物は、君のほうだというのに。廷兼郎は、小さくそう付け加えた。

まるで不遜な物言いは、魔術も超能力も身につけぬが故の無知か、それとも、魔術も超能力も身につけぬ独特な観点からの、新たな示唆なのか。

「相手が人間なら、如何に超能力を持つと、魔術を操ろうと、對抗する手段はある。魔術に対して、人はどれだけ抗えるのか。君に実験してもらいたいなあ」

どうやらこの男、魔術を操るラタナに、本気で對抗するつもりらしい。しかもその無謀な振る舞いを実験と称している。

無知は無常の幸福とは、よく言ったものだ。せめてその幸多き誤解を抱いて、無様に四散してくれるとありがたい。

「かあッ」

地面から一直線に目標へ向かう中段蹴り《テツサイ》。膝に引きつけずに打つムエイタイ独特の蹴りだ。

しかし廷兼郎は落ち着いて後ろに下がり、蹴りの距離を外す。

(馬鹿がッ！)

やはりこの男、まるで魔術というものを理解していない。魔術とは人の理を超えた理。足先が届かない程度で、攻撃が止むなどと言うことはあり得ない。

まるでラタナの脚に惹きつけられたように、茶色の滑らかな毛並みをした馬が、ぬるりと地面から這い出てくる。馬はそのまま蹴りを追うように、廷兼郎に向かって飛び掛かった。

物質世界に干渉するほど濃密な精霊。それをたったの一動作で、さらには格闘と同期して行なう妙技が、ラタナチャイ・シングレットクの魔術である。

実際の馬と殆ど変わらぬ馬のピーによる突進を食らえば、無事で

はすまない。鳩尾をど突かれてのたうちまわり、蹄で踏みしだいてやる。

そうなるであろうと確信していたラタナの目が、同じくらいに強い瞳を捉える。今正に馬に轢かれんとしている、あのジープンの目だ。

まるで諦めていない。馬の頭が間近に迫っているのに、ラタナから視線を一切外そうとしない。警戒しているのだ。馬と同時に仕掛けてこないよう、ラタナを見張っているのだ。

まるで馬のことなど見ていない。それを正に主張するように、廷兼郎は馬の左に入り身して、その首に左の手を優しく添えた。

廷兼郎の右目が、ラタナの姿を映し出す。

逸れてゆく馬の首を、右の掌が優しく、それでいて高々と掬い上げる。目標を失ったものの勢いだけは衰えず、後ろ足で空を掻きながら、馬が天井を仰ぐ。

そして首を掴む右手に、人一人分の荷重がのし掛かる。

二人を、茶色い塊が寸断した。それは何かが弾けるような音を立てながら、無様に赤い液を吐き散らす。

珠玉の勝利：二

廷兼郎とラタナの間には、首の捻じくれた一頭の馬だけが残された。既に馬の必殺を確信してか、落ち着いた様子で廷兼郎は喉輪に極めていた右手を離れた。

「ふうん。精霊なんて言うからもっと仰々しいのを想像していたが、生きてる馬と変わらんね」

そう言つと、痙攣を繰り返していた馬の体が希薄になり、まるで大気に溶け入るようにして消えてしまった。

「あれまあ。生きた馬より弱いねえ。堪え性が無い」

そして窺うような目をラタナに向ける。ざっくりと感情の起伏が削ぎ落とされた、無謬の顔が廷兼郎に返される。

「ピー《精霊》を、殺すつもりなのね」

廷兼郎は一も二もなく頷いた。それを見て、ラタナがこれ見よがしに肩を竦める。

「水面に石を投げ込んで、映る月を消そうとするようなものだわ」

「うわあ。如何にも和風な表現だ。まるで日本人だな」

青筋を浮かせるラタナを尻目に、廷兼郎はさらに彼女から遠のき、手招きさえしていた。

「ほら、投げ込めよ。俺はまだ消えていないぜ」

「格好つけるな、ジーブン。ピーの一匹殺したくらいで」

一匹くらいとは、豪気なものだなあ。廷兼郎は快活に笑い、これ見よがしに誉めそやす。

「そうだね。格好をつけることじゃないね。でも俺には、こういうやり方しか残っていないんだよ」

「銃でも爆弾でも使えばいいじゃない」

「ああ。それなら俺が死んだ後に、嫌と言つほどしてもらえるよ」
さらりとそんなことを言われては、さしものラタナも二の句を告

げられなかった。

「まあとにかく、水面に石が投げられるなら、月はひたすら映し写すほかないんだよね。自分の姿をさ」

「……うまいこと言ったつもり？」

「君の表現に合わせたら、こうなっただんだよ」

もう待っていていられないとばかりに再び構え、廷兼郎はうずうずと体を揺する。

「一匹ぐらい、なのだろう。十や二十投げ込んだって、バチは当たらないぞ」

「調子に乗るなど、言っただろうがッ！」

振りかぶった右の肘に、虎の爪が宿る。ラタナの肩の辺りから虎の前肢がうつすらと生え、五指をぐわりと広げて振るわれる。

真横から首を薙ごうとする虎の腕に、廷兼郎の左手が絡みつく。

そして空かさず右手が、下から虎の手首を逆に押す。

左手がさらに虎の手を引き込み、肘を放ったラタナのほうがつんのめる。

大錬流合気柔術『転閻魔』。閻魔の形に手首を決め、相手を地面に転ばせて制する。言うまでもなく、人对人という状況下で生み出された立ち関節の傑作であるものの、対魔術師、対虎を見越して創案されたものではない。

だがしかし、その技の術理、理念、さらには研鑽の程が、単なる種類の違いによって蔑ろされるなどと、誰が決められよう。

己が身に宿した技に信を置き、油断、呵責、憐憫、猶予の一切を心の内から払拭し、体躯にそれらを顕す。

さすれば人、魔術師、虎の違いなど、瑣末。

人のように拉げてゆく虎の腕へ一気に荷重を増やし、床に叩きつける。手首の外側から肉と骨が漏れ出て、血が飛沫を散らす前に虎の腕が立ち消えていった。

「くあッ」

虎の腕を極められ、転がったラタナの頭に腿術『獅子穿』を見舞う。間一髪、腕の力で跳ね飛んだ彼女の眼下で、廷兼郎の足先が白い床をごっそりと捲る。

空中に浮いたラタナが、突如として真横へ逃げる。何の足がかりも無い場所での旋回は、明らかに魔術。

風のピーで体を包み、空気を足場にした異常極まる拳動で、ラタナが廷兼郎の左斜め頭上より蹴りを入れる。

その蹴りを見て、廷兼郎は少しだけ顔を歪めた。眉の端を僅かに下げつつも、ラタナの脚に向かって飛び上がる。

高位置からの逆捕『飛燕啄』ひえんのつばみ変じ手。『二輪掛け』ふたわ。まるで燕が中空に描く二輪のように、くるくると旋回しながら関節を捻じ切り、然る後に地面へ落とす。隙の大きい飛び技への返し技である。

ラタナの足首に腕を巻きつけ、体全体を捻りながら左足全体を絡め取る。足首、膝、股の関節を極めてからも激しく全身を螺旋に回し、ラタナを『二輪掛け』に巻き込んでゆく。

「キヒエイッ！」

怪鳥の如き嘶きを上げて、ラタナが左腕を振るう。それはソークでもなければ、トイでもない。ただぞんざいなだけの平手。

だがその手に宿るのは、猛々しく伸びる猪の牙。象牙もかくやという白磁の棘が、廷兼郎を抉り上げようとしている。

その精霊の一撃に向けて、廷兼郎は恐るべき拳動を実施した。

『二輪掛け』を、ラタナの脚から猪の牙へと変更した。

飛び移ると言うよりは、相手の体を這い回るような短距離だが、それだけに猶予は余りに少ない。

関節を破断させるほど急激に身を擦る『二輪掛け』の途中で、他の余計な動きをすれば言わずもがな、擦じ割れるのは己の体である。その危険極まりない回転運動を、慎重に、精妙に、大胆に操作し、ラタナの脚からラタナの牙へと飛び移る。

出来る。やれる。可能だ。何故なら。

今のラタナは、まるで怖くない。

恐れず、怖気ず、臆せず、まず左手が滑らかな牙の表面を伝い、突き入れる先端を捉える。徐々に体重を牙へと移し、梃子の原理で牙の方向を変えてゆく。

まるで本物の肉を捻るような、みちみちと心地よい感触。それを存分に味わい尽くし、廷兼郎は左の足でラタナの胸板を蹴りつけた。同時に、背筋をこれでもかと反らし、抱えていた牙をラタナの左腕からぶっこ抜く。

『二輪掛け』を半端なところで止め、後宙して両足で着地する。対してラタナは、左腕を庇いながら無様なまでに体を床に打ちつけていた。

ラタナは自分で、ムエイタイは『立つて行なう』ものだと言っていた。それは何も、物理的に立っている状態だけを指しているのではない。それなのに、自ら立つことを放棄した戦士^{ナックモエ}など、例え魔術を繰ろつが獣を呼ぼうが精霊を纏おうが、恐れ戦くに能わない。

己の技、己の体、己の心に拠って立つことをやめ、魔なる術を恃み、人ならぬ獣を恃み、精髓を司る靈魂を恃む。その行為の何処に己が在ると言うのか。

それはもう、己ではない。人ならぬ業を垂れ流すだけの、単なる装置だ。意志を捨てた魂の家畜だ。そんなモノを、何故に人間が恐れなければならぬのだろうか。

捨て、投げ、恃み、絶る。そうして得た業は強すぎて、そうして得た心は弱すぎる。その狭間にある体はどちらにも寄り添えず、がたがたに崩れている。

あの薄気味悪い獣の霊が飛び出すたびに、そんな性根が透けて見える。

「さあ、立てよ。立てよ。立てよ！ 魔術がどうした？ 精霊が何だ？」

気炎を吐いて叩きつける廷兼郎を、ラタナが見上げる。

「そんなものと遊んでる暇があるなら、俺を打てよ。俺を蹴れよ。突いて、裂いて、カチ上げて、砕いてみせろよ！ 愚にも付かない幻想を並べ立てるのは、その後だろうがッ！」

怒気を孕んだ一声に、ラタナの体が弾かれる。否、自ら飛び、体勢を整えたのだ。

ラタナの顔に、猫科の猛獣に似た笑みが再び現れる。廷兼郎の口上がよほどに面白かったのか、面の皮が破けてしまいそうなほど、口の端が頬を引きつらせる。

珠玉の勝利・三

もう、何も感じない。目の前の日本人に対して感じ入ることは、とうに打ち止めていた。

精霊に対しての関節技。確かに、物質世界に干渉するほどの精霊は、逆に物理的干渉をその身に許してしまう。故に理論上、人間の生み出す物理的衝撃を精霊に伝達することは可能である。

だからといって、本当にそれを行なおうとする人間がいるだろうか。森羅万象に宿り、世界の精髓を司る存在を、殴り、挫き、殺すことが何故出来ようか。もはや手段の問題ではない。それを為そうと考える自我、根拠、信仰こそが問題である。

何たる不信心者。何たる不心得者。神をも恐れぬその所業。心ある人間ならばまず行なえまい。

ムエイタイを貶め、魔術を嘲り、精霊を踏みじる。この日本人、この男と、何故自分は未だに相對しているのだろうか。

もういい。もうどうでもいい。もうとつとと終わりにしたい。目の前の男の死を以って。

「十の化身」
ナラシンハ

自らの父と仰いだ神の御名で口訣を結び、その身にまたも精霊を宿す。ワイクーとナラシンハとの契約による、複数精霊の並列憑依それが可能とするのは、同時十体の精霊を伴う打撃連環。

この満身創痍の状態では、どれほどの完成度で行なえるか定かではない。早く精霊たちに治してもらいたいが、体の回復に魔力を費やした瞬間を、果たしてあの日本人はのほほんと見守ってくれるだろうか。

ラタナの周囲が、陽炎のように擦じくれる。今にも物質世界に現れようとしている精霊たちの影が、光の屈折を歪めているのだ。そ

れはむしろ彼女自身の鬪気の具現に近しい印象である。

みしりと、ラタナは一步を踏みしめる。既にその右足には鋭い虎の爪が生え、床に力強い掻き傷を表している。そして左足には馬の蹄を現し、かあんと高い音を立てる。

ラタナは急がない。ゆつたりと、自分が現す精霊をこの世界に馴染ませるように、廷兼郎との間合いを潰していく。そして廷兼郎は急がないどころか、その場から一步とて動けずにいた。

左手を肩口から真つ直ぐ突き出し、右手は臍の上に乗せ、左足を前に置く。しかしよく見れば、いつもと若干ながら構えが異なっている。足運びは肩口ほどこしか開いておらず、少し狭い。左手の位置は変わらないが、右手は臍のすぐ上ではなく、鳩尾の辺りまで上がっており、なおじりじりと上へ向かっている。

露骨なまでの蹴り狙い。足運びを狭く取っているのは、左足を踏み込んで右足を振り上げるストロークを確保するため。右手を上上げるのも同様、蹴る際に後ろへ振りぬくことで振り子の原理で右足の勢いを向上させるためだ。

恐らくはこれまで幾度も放たれた足蹴ししきうがっ『獅子穿』だろう。あれを使われると、明らかに戦いの流れが廷兼郎に向かつていつてしまっている。今のところラタナは、この蹴り技を防ぐ術を持っていない。だがこうなっては、蹴り技一つなど関係ない。複数召喚した精霊で圧倒してしまえばいいのだから。

いよいよ間合いが詰まり始める。一足一刀、いや一足一蹴の間合いである。既にラタナの中には、シナリオを描き終えている。

とりあえず獅子穿を先に打たせ、外してから中段蹴り《テツサイ》を打つ。同時に撃てば先に届くのは獅子穿であり、悪くすれば股間を割られたときのようにカウンターをもらうことになる。ならば、こちらが後の先を取るより他はない。

獅子穿が放たれた瞬間に小さくバックステップし、外しながら勢

いを付けて蹴り上げる。ここはさずがに精霊の力を借りられない。精霊が代わりに避けてくれるわけではないのだから、単純に自身の見切り一つの問題である。

見切れる。見切ってみせる。ラタナは唱えるように言い聞かせ、自らを奮い立たせる。そう何度も同じ蹴り技を被るのは、戦士としての自信が許さない。それに何度も食らっているからこそ、タイミングが否応にも体に刻み込まれている。

そうしてラタナが、最後の一步を踏み出そうとした瞬間、廷兼郎の右手が消え失せた。

ラタナが足を上げたときには左足で踏み込んでおり、半歩進んだか否かというときには右足が翻っていた。絶妙な見切りに、しかしラタナは感心など寄せはしない。日本人にそんな感情を向けることを許さない自我もそうだが、そもそもそんな時間的余裕が今の彼女には存在しない。

既に体重が踏み出した足に乗りかけていたのを無理やり戻し、僅かに下がる。彼女の体を追って、廷兼郎の足が伸びきった。

その様を見て、ラタナは僅かに動揺する。彼女が想定していたのは中段への獅子穿だったが、いざ放たれたのは単なる基本的過ぎるほど丁寧な右上段回し蹴りであった。

顔前を掠める足先が、空気を焦げ付かせるような唸りを上げていく。それを聞けば、威力のほどは自ずと知れる。しかしもはや何の脅威でもない。既に廷兼郎の足先は、ラタナの顔を過ぎ去ろうとしている。

ここへきて通常の回し蹴りを選択してきた意図の程は知れないが、今まさにラタナの目の前に廷兼郎の足があるのが、事象の全てである。

ラタナはむしろ倦厭の情を浮かばせて、廷兼郎の足を避ける形で再び踏み込んだ。

そこにはやはりというべきか、廷兼郎の無様に股間が晒されている

る。それも当然だ。右の上段回し蹴りを放ち、かつ外されたのだから

実戦にて蹴りを放つ場合、必ず注意せねばならないのが股間の隙である。特に中段上段の蹴りは、急所である股間をこれ見よがしに晒し、まるで打ってくれと言わんばかりである。であるからこそ仕手は、股間への攻撃が来ないよう細心の注意を払って然るべきである。

その備えを怠ったならば、後の道は一つ　股間を強かに打たれて、のたうちまわるのが相応だ。

右足を高々と上げて股を晒している廷兼郎に、ラタナはテッサイを突き上げる。無論狙いは股間。男性器は神経の集中した急所である。擦る程度の刺激にも敏感に反応する感覚器官が、高速で突き上げる足の甲を食らえば、如何様になるか。

果たして廷兼郎の股座に、ラタナのテッサイが炸裂した。片足立ちである廷兼郎の体が、蹴りの勢いで浮き上がる。しかしラタナは何故だが背筋を寒くしていた。

手応えが、おかしい。こんな感触は有り得ない。男性器の感触が、足の甲に返ってこない。

「アザオ、お前!？」

目を剥いたラタナの動揺を見抜いているように、股間を打たれながらも廷兼郎は口の端を引きつらせた。否、それだけではない。

ラタナの視界が、右へ一気にずれる。廷兼郎の掌打が、ラタナの側頭に届いていた。

交差の勢いで食らった一撃は片足では支え難く、ラタナのバランスを崩してつんのめる。だが相手は、廷兼郎は既に股間を破砕された身。こちら同様か、それ以上に動くことの叶わぬ身。そのはずなのに

さらにラタナは、自身の右耳に異常を感じた。ちいさな耳の穴にずぶりと、何か差し込まれる。

耳に襲う異物感。ひたすらに不快で、熱く這い寄りながら脳髓を寒からしめる。聖人の内臓を攪拌した一撃が、ラタナの耳に侵入する。耳孔から伝う振動破は数秒もかけず三半規管を爆裂させ、骨を辿って漿液に浮かぶ脳へ震盪を及ぼす。

くも膜を走る血管が、高まった内圧で自壊し、その薄い膜と膜の間を血を満たす。

珠玉の勝利：四

単なる指から伝う単なる振動が、ラタナを攪拌する。

『体内発勁』。技としては同じと言えど、神裂に放ったときは大きく異なる点がある。それは、廷兼朗が姿勢を正しきれていないことだ。

アンダーイヤ
耳裏打の詰めとして放った耳孔への一本抜き。そこからさらに繋ぐ体内発勁。

ラタナの攻撃の隙と動揺に付け込んではいるものの、神裂に放ったような完全なる体内発勁を放つには時間、距離ともに万全ではない。

しかしその不完全な当たりでも、より敵の急所に近い場所ならば、話は違ってくる。

体内発勁は正に必殺。神裂のときのよう完全な威力での連打を想定しなければ、不完全な当たりで一撃だけと心得ているなら、抜手からの繋ぎとしても十分使用に耐える。

そして不完全な当たりでも、より脳髓に近い位置ならば、敵を必殺せしめるエネルギーは節約できる。到達までの距離が短いのだから、当然発生する抵抗も少なくなり、エネルギーはより欠損なく目標に到達する。

脳は非常にデリケートな器官である。極論するならば、血管が一本でもズレたり、切れたり詰まったりしただけで生涯患う重度の障害、あるいは死亡する可能性がある。

不完全でも、一撃だけでも、位置さえ違うことなければ、それは必殺と成り得る。

「ぐ、ぬあ……」

そこまでが、廷兼郎の限界だった。血に塗れた中指が耳から滑り

落ち、後を追うように膝が床に付く。

体内発勁は、天羽根流当身『虎口伝い』を、これまで廷兼郎が体得した多くの武術を元にして解き、再構築した、非常に難儀な術理である。本来ならば自分の気をそのまま相手の流し込むような渾身からの当身であるため、精魂を根こそぎ持つていかれる。それだけでなく、度重なる戦闘の困憊も治らぬままの体には、ただの一撃の不完全な運用でも相当に堪える。股座に関してはそれほど心配はいらないが、やはり立ってはいられない。

ラタナのほうはといえば、両の足できちんと立っている。しかし無抵抗の廷兼郎に追い討ちをかける様子はない。それも当然だ。耳孔からの体内発勁は、ラタナの脳に甚大な障害を与えたことは必至である。それさえも魔術ないし精霊の力とやらでどうにでも出来るならば話は別だが、およそ戦闘を継続する能力を有する状態ではない。

ようやくとラタナの体が、ぐらりと揺れる。後方へ倒れこもうとするのを、廷兼郎は素早く立ち上がって受け止めた。

脳に障害を被った以上、絶対安静にてすぐにも手術を行なう必要がある。僅かな衝撃が取り返しのつかない事態へと発展しかねないのだから、頭を打ち付けるようなことは当然回避すべきである。

受け止めたラタナの体は、その細やかさに反してずしりと重かった。今の廷兼郎に体力が残っていないこともあるだろうが、そもそも厳しい鍛錬を行なって高密度に発達した筋肉が、まるで比重の高い金属のような感触でもって彼の腕の中で心地よく沈み込む。

「ラタナ……」

ぐったりと弛緩したラタナの顔は、見る間に青褪めていく。それをもたらしたのが自分であることを思うと、廷兼郎は誇らしくもあり、憤ろしくもあった。単に勝利の快活を味わうというには程遠い心理状態である。

「終わったようだな」

後方より声が響く。振り返れば、金髪の大男　土御門が歩み寄ってきいてた。

囁めていた顔を元に戻し、廷兼郎は「よっこいしょ」といちいち声を上げてラタナを抱えたまま立ち上がった。

今ここに土御門がいることは、何ら不可思議ではない。既にラタナを第二学区の訓練場へ運び込んだ時点で、彼からの連絡が入っていた。

ラタナの身柄を引き渡せ。土御門の要求は、実に簡素であった。それに対し廷兼郎は、自分で拘束したのちに引き渡すと伝えた。引き渡しに土御門が直接立ち会つということを手打ちとなり、彼は廷兼郎とラタナの戦いを観戦することとなった。

「約定の通り、ラタナチャイ・シングレックの身柄をにお引渡し致します」

ずいと差し出されたラタナを、土御門はすぐに受け取るうとはせず、しげしげとサングラス越しに見つめている。そして一言、軽い調子で廷兼郎に問いかけた。

「殺したのか？」

「殺してもよろしいので？」

間髪入れず答えられ、土御門は「いや、これでいい」と言ってようやくラタナの身柄を受け取った。

これから土御門がラタナをどう扱おうが、廷兼郎には関係ない。スパイ行為幫助の嫌疑も、直接制圧したことで見た目取り返せばずだ。

「お前、股は平気なのか？」

探るような角度から覗き、土御門が問ってくる。どうやら彼は、股座を蹴り上げられながらなお抵抗した廷兼郎のことが訝しいようだ。確かに男であるならば、気にせずにはいられないだろう。股を、つまりは睾丸に刺激を被るといふのは、内臓を直接打撃されるに等

しい衝撃である。それほど男性器には神経が集中している。

どう答えたものかと廷兼郎は逡巡したが、露骨に曝け出すのは憚られるような気がした。それに正直に話すほど、土御門に借りや恩があるわけでもない。

「あまり、聞かんでください。人に話すことじゃない」

さらに探るような視線を向けたのも僅か、もはや用は済んだとばかりに土御門は踵を返して歩み去っていく。

呼び止めたい気持ちも無くは無。これが恋愛小説ならば、後も先も考えず、形振りも構わずにラタナと駆け落ち紛いの逃避行へと洒落込むのだろう。しかし残念ながら、廷兼郎はそのような行為に及ぼうという気は寸毫もない。

ラタナに興味関心がないわけではない。しかし廷兼郎は、ラタナと恋愛行為に及ぶということに興味がない。男としてあるまじいほどにラタナ というよりはラタナの女性という属性ないし女性を前提とした際のラタナに、廷兼郎は何もそられない。

それでもいい。誰に迷惑をかけるものでもないし、それ自体は憚るようなことでもない。最近の若者の間では結婚や交際といった言葉が廃れ始め、男女の付き合いをする率というのが下がってきているらしい。ならばその流れに廷兼郎一人が乗りかかって、誰も困らないだろう。

「なあ、『カウンターメジャー対抗手段』」

不意に呼ばれ、廷兼郎が顔を上げた。土御門は立ち止まり、肩越しに視線を寄越してくる。

「お前、ホントに魅惑《チャーム》は解けたのか？」

張り付くにやけ顔が、そんな言葉を口にした。またも答えに窮する問いだったが、やはり廷兼郎はまともに答える気などありはしなかった。

「女は宿命的に、暗示的なのだそうです」

「人口楽園か。笑えん」

「僕は、笑えます」

土御門が受け流そうとするのを、廷兼郎が毅然と立ち向かう。

「特等席で見せてあげたのに、そんな質問をするあなたは、本当に笑えます」

珍しく顔から色を失う土御門だったが、繕うように頭を振るうとまたいつものにやけ面に戻っていた。

「神裂が嫌がるわけだ。手厳しいね」

「似たようなこと、あの聖人さまも言っていましたよ」

「らしいな。聞いたよ。あの後凹んでたぜ」

「へえ。それは、見たかったなあ」

「ネーちゃんはああ見えて、繊細なトコもある。あんまりイジめんでくれよ」

「また会えたなら、憶えておきます」

そうしてくれ。肩越しに言って、土御門は訓練場を後にした。それを静かに見送った廷兼郎は、満足そうに嘆息してもう一度床に座り込んだ。

珠玉の勝利・四（後書き）

第六章終了です。ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。

次回からは廷兼郎のことをもう少し掘り下げてみたいと思います。お楽しみいただければ幸いです。

練習：一

その日も廷兼郎は、朝からロードワークに勤しんでいた。昨日ラタナチャイ・シングレックという魔術師を倒し、彼自身のスパイ疑惑が一先ずの決着を見たばかりである。

確かにラタナとの対決は、廷兼郎の戦歴の中でも苛烈な部類に入る。だからこそ、廷兼郎は日々の習練を怠るわけにはいかなかった。勝ったのなら、また戦える。また練習できる。次の戦いに備えることが出来る。

こつした日々の積み重ねが、自身を形作る。体を鍛え、心を鍛えて、自信を養い、万事に備えるのは当然の仕儀である。というのはあくまで表層の、取り繕った外面でしかない。

ラタナとの尋常なる勝負、その後の勝利がもたらしたのは、廷兼郎独自の蹴り技『獅子穿ししをうがっ』の習熟と、度し難いほどの空漠であった。改めて彼はラタナが占めていた箇所の大さに慄き、欠落を欠落として逍遙と受け入れるほかなかった。例え騙され、操られていたのだとしても、過日の思い出は自分を潤わせたのだと気がつく。自分にとってのラタナの価値とは即ちムエタイの力量と魔術の実力以外にないという確信は、空威張りに過ぎなかったのかもしれない。

だったら、どうだというのか。遅きに失した今になって、ラタナを助け出せとでも言うのか。

そんな恥知らずな真似を、廷兼郎は行なえない。行なえるだけの器量がない。そんなことのために振るう拳を、彼は持たない。結果、どちらともつかず、漫然と続けてきた訓練に身を投じるしかなくなる。日々の訓練は自分を裏切らない。得体の知れない煩悶よりも、安らかに心身を預けることが出来る。

「よう、字緒」

気さくに話しかけてきたのは、荒涼阿刀次だ。彼は廷兼郎の通う

長点上機においての先輩であり、レベル3の身体再生能力者である。最近の廷兼郎は荒涼、そして井上とロードワークを共にすることが多い。三人で公園にランニングがてら集合し、ミット打ちや軽い寸止めのスパーリング　マスなど、一人では出来ない練習を多く取り入れている。

「新技思いついたんだよ。早く行ってやろうぜ」

荒涼とはレスリングをよくやっている。関節技だけの極めっこだ。

「新技で……どうせ飛びつきの十字とかでしょ」

「ちげーよ。膝十字だよ」

「あんなもん、余程のことがないと極まりませんて」

「だからそこでヒールホールドに移行するんだ」

「その前に頭蹴られて終わりですよ」

にべもなく荒涼に言い放つてから、何か不快な視線を感じる。それは探すまでもなく、先輩である荒涼の視線であった。

「お前、やつぱ何かあっただろ？」

後輩の身を案じるような、深刻な目つきではない。廷兼郎が巻き込まれたであろう騒動に邪推を巡らし、悦に入っている目だ。

「何だ？　振られてもしたか？」

「荒涼さんじゃあるまいし、んなわけないでしょう」

「あのラタナチャイって子か。どうだ、凶星だろ」

本当に凶星を突かれたが廷兼郎は動揺というより素直に驚いていた。こういうことは他人に伝わってしまうものなのだなあ、などと他人事のように感心した。人同士の機微に疎い廷兼郎は、ラタナと自分の関係がまさか恋人のように見えているなどとは露ほども考えていなかったのだ。

「荒涼さんには敵わないなあ」

「まあ、一度振られたくらいで諦めんな。嫌よ嫌よも好きのうちだ。たった一回で諦めたら、それこそ本当に嫌われちまうよ」

荒涼の誠実の助言に、廷兼郎は目を白黒させていた。「一回で、

か……」などと呟いたきり、無然と物思いに没頭してしまふ。

「おい、どした？」

声をかけても「うん、まあ……」と億劫そうに頷くだけで、あまり荒涼に関心がなさそうに廷兼郎は走っている。彼のロードワークは通常のそれとは異なり、壁や塀を飛び跳ねながら行なわれるのだが、今やそのような余裕さえないらしい。

それも当然であった。荒涼の何気ない助言は、廷兼郎に新たな視点を与えてくれたのだ。新鮮な価値観を吟味するには、廷兼郎は体を落ち着けるしかなかった。

一度くらい諦めるな。分かっていたはずだった。勝負事とはその一回ごとが決着である。だからこそ、その一回こつきりに精魂を込め、己の限りを尽くすのだ。しかし、命ある限り人は戦い続ける。事切れるそのときまで、廷兼郎は戦い続けたいと思っている。

まだラタナとは一勝一敗。一度負けて、雪辱しただけにすぎない。もしかすれば土御門はラタナを生かしているかも知れないし、言わずもがな廷兼郎は生きている。つまり、また戦えるではないか。またラタナの蹴りを味わえるではないか。ラタナの頭を殴れるではないか。

また諦めず、戦えばいい。そのときこそ今抱える煩悶ごと、ラタナにぶつければいい。重苦しく判然としない感情すらも糧として、強くなればいいのだ。

先に公園へ来ていた井上が、芝生の上でシャドーボクシングを行っていた。風力操作は使っていないらしく、ステップスピードもハンドスピードも抑えられている。

しかしそれら一つ一つが、非常に高い精度で行なわれているのが一目で分かる。

井上はかつて廷兼郎とG 1トーナメントという大会で対戦し、

敗北していた。その経験から、能力レベル向上だけでなくボクシング技術の向上を目指すことにした。

かつての井上の戦い方は、風力操作による常識外のスピードに物を言わせた超常のボクシングであった。しかしボクシング自体の技術は、本来ボクシングは専門外である廷兼郎にさえ打ち負ける程度のものでしかなかった。

能力に頼った雑なボクシングの限界を感じた井上は、自身のボクシングを根底から組み直すことにした。ロードワーク、スキップ、グ、シャドーボクシング、パンチングボールなど、基礎であり初歩的な練習に重点を置いていた。

これまでは能力を十全に発揮するため、試合カンを養うスパarringなどが中心だった。しかし今は殆ど行なわず、地味な反復練習を繰り返している。

その効果が、ようやく井上の動きに現れ始めていた。ある種舞のような優雅さで立ち回る井上は、確実にボクシングの地盤が固まってきた。

「字緒くん、スパ―してくれよ」

公園について早々、廷兼郎は上着を脱ぎ、グローブを付けた。ミット打ちのような薄いパンチンググローブだ。マスとはいえ一応怪我を残さないよう、こうした用心も欠かさない。

「そんじゃ、始め！」

荒涼の一声で、マスボクシングが開始された。早速グローブを合わせた二人が、弾けるように後方へ退く。廷兼郎は腕を顎の高まで上げ、アップライトに構える。井上は左利きであるため、サウスポ―のアップライトに構える。目算にして三メートルほど離れたまま、二人は間合いを維持しつつ左右に体を揺する。

スパ―をするとしても、井上は能力を使わない。純粋にボクシング技術を向上させるためには、能力の使用は極力控えたほうが良いと考えたためだ。確かにレベル4の風力操作は、それだけで甚大な

力を発揮するだろう。しかし井上は、それだけでは満足できなかった。ただ能力を垂れ流す存在に、自分が成ってしまうということが、たまらなく屈辱だったのだ。かつてそのようにして、井上は廷兼郎に敗れたのだから。

能力だけではない。自分自身 井上駿馬自身の人間力とでも言うべきものを底上げする必要がある。そうしなければ井上は、たまさか授かった能力を発揮するだけで満足するという、彼に言わせれば凡庸な能力者に成り下がってしまう。そして井上自身を底上げするには、ボクシングという手段しか見当たらなかった。

マスが始まって五秒ほど。井上のジャブ二発が放たれる。一発目は外したが、二発目が廷兼郎の左のガードを叩く。これは練習なのだから、試合のときのような様子見は必要ない。試せることを試し、己の糧としなければならぬのだ。

空かさず放たれる左ストレートに、廷兼郎がパリングを被せて止め、受け手を戻さずにそのまま右を打つ。

廷兼郎は軽く右に回りこみながらステップインしたため、スウエーするには深すぎる。しかし井上は斜め気味のスウエーバックをしながら廷兼郎の右から逃げるようにバックステップする。

スウエーからの強いストレートで前進を止め、連打を被せる。あくまでマスなので打ち抜きはしない。ガードの上から叩く程度に留める。しかしそれでも廷兼郎は捌ききれず、巻き込まれるのを嫌がって後ろへ下がった。

風力操作を伴わないというのに、素晴らしいハンドスピードである。井上の仕上りの程に、廷兼郎は感嘆を抱いた。

元より井上には相当な技術もスピードも備わっていた。だが能力に傾倒する余り、そうした長所を自分で理解できず、もつと能力を高めてなければならぬという強迫観念に囚われていた節があった。なまじ超能力を身につけていたために、井上本来の力がそこで成長

を止めてしまっていたのである。

廷兼郎に負けたあとは、そのような観念などかなぐり捨てて、殊勝にーからボクシングを習い始めた。それだけでなく自身を打ち負かした廷兼郎にさえ教えを請い、強くなるための手段を講じた。敗北の辛苦を味わわした張本人など、廷兼郎であれば平静に接するのも難しい。しかし井上はそれを押し忍び、己が血肉へと変えてきた。その成果は、確実に現れ始めている。

ジャブの差し合いが続く。オーソドックスとサウスポーなので、互いにジャブでジャブを潰しあう空中戦を制さなければ、間合いもリズムも自分のものには出来ない。いつもならば体格の劣る廷兼郎は身を屈めてガードを固め、ぐいぐいと前に出るのだが、今回は井上と同じくアウトボックスに終始している。

非常に精練された、スマートなボクシングの展開である。ジャブを基点に組み上げられる近代ボクシングの手本のようなやり取りだ。どうやら廷兼郎は、いつもと違う戦い方でいくらしい。

不意に大きく飛び込んで放たれた右のストレートを、井上はバックステップし、さらにスウエーバックして避ける。それほどに廷兼郎は深く踏み込み、さらにパンチを伸ばしてきていた。

廷兼郎の拳が井上の鼻面で止まる。高速で交換されるパンチが眼前まで届いたとなれば怖気を禁じえない光景だが、その近さはむしろ井上の意図するところだった。

スウエーでかわしたパンチの引き手に合わせて体を戻し、カウンターとしてパンチを放つ。ロック・アウエーと呼ばれる高等技術だ。しかし井上は体を戻したところで、パンチを放つのを躊躇してしまった。放たれた右ストレートが、戻されない。まるで目隠しのように、井上の眼前に留まっている。

「うお!？」

咄嗟に右わき腹を肘で庇う。テンブルやジョー狙いなら、首を巡

らせて避けられる。だが腹部はそうはいかない。

案の定、井上の体を浮き上がらせる肝臓打ち《リバーブロー》が、下方から競り上がってきた。予想はしていたというのに、それは井上を睜目させるほどの貫通力を持っていた。

以前、G-1トーナメントで食らったそれよりも、速く鋭い。こんなものをまともに食らえば、肋骨など碎けて当然だ。

「くっ」

しかし井上もただではやられない。肝臓打ちの勢いを利用してむしろ後退し、踏み込んでくる廷兼郎に弾幕を形成して止める。

体格や射程距離、そしてスピードや手数まで井上が上回っているのだが、あと一步のところまでペースを掴ませてもらえない。

井上のミスブローが増えてきた代わりに、廷兼郎が井上のガードを叩く。先ほどの肝臓打ちのように、まとめて入りはしないものの要所要所で井上の動きの基点を潰している。

練習：二

繰り返される連打をパリングで打ち落としながら、左へステップしていく。パンチを出している井上も、手が伸びきる前に打ち落とされているため、距離やリズムがいまいち掴めない。ここで焦って大きいのを放り込めば、パリングがそのままカウンターとなって飛んで来る。

今はパリングさせて前進を止めているが、それだけにパンチのバリエーションが少ない。本当は下や横にも散らして揺さぶらねばならないのだが、距離を詰めるのが怖い。とはいえこのまま同じパンチを繰り返すのもまずい。軌道やタイミングを覚えられたら、今度はパリングではなくスリッピングやウエービングを用いられる。そうなれば踏み込まれるのは時間の問題だ。

左ストレートをブロックしながらステップインして右のストレート。大砲の交換で井上が後ろに下がらされる。先にブロックキングして踏み込んだ分、勢いは廷兼郎のほうが上回っていた。

(踏み込まれる！)

身構えた井上の両腕が弾ける。今度は廷兼郎がジャブの連打で井上を押さえ込む。そのままジャブとストレート。ワンツーなどの基本的なコンビネーションを繰り返す。マスボクシングを開始してから二分。しかし廷兼郎が踏み込んでくる気配は無い。あくまでジャブとストレートの差し合いに終始している。

(なるほど、見せてくれてるってわけだ)

どうやら今日の廷兼郎は、アウトボックスを見せてくれてるようだ。しかしそれであれば、射程距離の長い井上に分がある。

バックステップしながら井上がジャブを放ち、廷兼郎がブロックキングする。しかし廷兼郎のジャブは届かない。

(この距離か)

何度も戦っている廷兼郎のパンチを見切り始めた井上が、廷兼郎の射程外からパンチを放り始める。こうなればあとは安全策でしかない。自分だけが届いて相手が届かないのだから、踏み込む動きだけを警戒していれば事足りるのだ。

無論、簡単に踏み込ませる井上ではない。常にサイドステップで遷移を繰り返しながら、相対的に廷兼郎を釘付けにする。ボクシングにおいてはパンチ力や射程距離などに加え、彼我との距離差を正確に計れる空間感覚が重要となる。自分に有利で相手に不利な位置を常に選択して占有する才能は、ボクシングという限定的な闘争下では十二分に発揮される。

サウスポーなので反時計回りにステップしながらジャブを繰り返す。上から見れば綺麗なサークルとなっているだろう。リングは丸く使えとはよく言われるが、井上はそれを地で行っている。

もはや残り三十秒。今回のところは判定勝ちか。井上はそのように考え、欲を搔かずに右ジャブだけを放つ。大きいのを放る必要は無い。KOだけがボクシングではないのだ。

ジャブとサイドステップの単調な繰り返しの中、不意に廷兼郎が踏み込んできた。ジャブをブロッキングしながらの無理やりなステップインである。そのような踏み込みこそ、井上の想定内だ。そういうのを逸らすために常にサイドステップで遷移していたのである。

案の定、廷兼郎が遠ざかり　井上の膝が、折れる。

「え!？」

むしろ倒れた井上が声を上げていた。単に足がもつれたのだと思いい、すぐに立ち上がるうとするのだが、やはりうまくはいかなかった。脳震盪のような痺れからくるものではない。まるで腹部に鉄でも仕込んだかのように、自分の与り知らぬ重さを感じる。

「はい終了だ。おつかれさん」

時間を計っていた荒涼が告げてから、ようやく井上は自分の足で立つことが出来た。

「字緒くん、俺、何食らったんだ？」

突然のダウンに、井上は何の推測も立てられない様子だった。よしんば腹部の重さからボディブローだと察しはつくのだが、ではそれをいつ、どのように打たれたかが完全に記憶に無い。

「さっき肝臓打たれてだろ。気づかなかったのか？」

「いつだよそれ」

「だから、お前が倒れるすぐ前だよ」

荒涼に言われて思い返してみても、心当たりが見当たらない。それほど強く打たれたならば、必ず何か感じるはずだ。

「あんまり強く打たなかつたから、もしかしたら気がつかなかつたのかもしれないね」

見かねた廷兼郎が、助け舟を出す。

「相手のサイドステップと同時にボディを打てば、じつはそれほど力を入れなくても効いちゃうんですよ」

「サイドステップと、同時？ あのととき出してたのかよ」

廷兼郎が無理に踏み込んできたのに合わせてサイドステップで逃げたまさにその瞬間、井上は腹部を打たれていたらしい。そこまで言われれば、井上にも合点がいった。

相手のサイドステップを誘い、その軌道にパンチを置いていく。相手の腹筋が緩み、かつ勢いがついた瞬間を見切って相手を倒す、一種のカウンターに近い。

「デラホーヤみたいだな、まるで。勉強になるよ、君の戦い方は」

「いやあ、必死でしたよ。スピードも技術も前とは桁違いだ。これで能力まで使われたら、正直抑えきれません」

「んじゃ、次は俺とだ」

反省を交わす暇も無く、時間を計りながらストレッチしていた荒涼が、徐に上着をはだけた。すでに体のアップは終わっている。

身長こそ廷兼郎より二、三センチほど大きいだけが、体の厚みは三倍近い。廷兼郎とて鍛え抜いて引き締まった体躯を持つが、荒涼

の前では一般人に見えてしまう。

G 1 トーナメントを経て、さらに筋トレに励んだ体は見事にビルドアップされ、隆々とした筋肉を脈動させている。それはただ体積を増したのではなくより鋭角に研ぎ抜かれ、もはや人体というよりはそれを模した鎧具足を纏っているかのようだ。

廷兼郎と荒涼はいつもの通り、互いに背中合わせの状態から、井上の合図で弾けるように離れた。これが試合開始のルールである。

荒涼とは基本的にレスリングで勝負する。打撃なしの極め合いだ。そして井上と違い派手な能力ではない荒涼は、練習であろうと能力を惜しまない。

身体再生は、自分の体が傷ついてからでないで発揮されない。なので一般人である廷兼郎と戦う際に使用しても、傍目有利不利が少ないのだ。

お互い中腰で手を軽く伸ばす。指さえ触れることのない遠間なのだが、まるで互いの体をまさぐり合うような激しいやり取りが続く。実際、触れずとも触れているのだ。相手の注意が充満している域。制空圏を確かめ合っている。そしてその隙を見つければ、濃密なフェイントと探りがやり取りとなつて現れている。

鏡写しのように手を同じ位置に置いたかと思えば、一方がゆらりと体ごと前に出る。それを受けて右に流れたかと思えば、ぬうつと右手が長く伸ばされる。

荒涼はリズムを取って忙しく体を揺すっているが、廷兼郎は腰は落としているものの踵を付けたベタ足で、リズムを取る動きすらない。

廷兼郎は人と比べると不器用なところが多いが、だからといってリズム感が皆無なわけではない。楽器を演奏することは出来ないが、体内の律動と相手のリズムとを照らし合わせるくらいは出来る。

既に彼の中で自分のリズムは確立されている。あえて体を動かさずとも、それは確たるものとして廷兼郎の中にある。とはいえリズム

ムというのは、皆誰にでもある。彼はそれを確認するための動作を省いているだけのことに過ぎない。

リズムはある。動かなくとも、動いている。

廷兼郎相手は、本当にやりづらい。相対しながらふとそんな考えが、荒涼の頭を過ぎる。

敵しすぎるのだ。遊びの要素が少なすぎるのだ。だが、これはこれで楽しい。今まさに、自分が試されているという実感。これが学校のテストだと拒否反応のごとくに嫌がってみせるのだが、レスリングともなれば話は違う。

緩やかに進むかと思われた展開が、一気に動いた。

僅か指先が触れ合う程度に近づいていた間合いを、廷兼郎が詰めたのだ。するりと音も無く、精度の高い『無足』で滑り込むように荒涼の左方へと進みながら、彼の左手を自分のほうへと引き込む。左手首を押し上げられ、肘が上向きになり、荒涼の体も追従して浮き上がる。

柔術で言うところの横固めへの入りである。

「うおお!？」

浮き上がった肘に手刀が入る寸前、荒涼は体を右へ捻った。すると必定、取られている左手は引つ張られ、無理な角度になりかけていた肘が伸ばされて正常に戻る。

こうした咄嗟の判断は、普段より人相手に技を掛け、また掛けられる練習を積まねば出てこない。技の入りから崩し、掛け、そして抜けへと続く一連は混沌として複雑な踊りのようにも見えるが、実のところ単純なルーチンの積み重ねにすぎない。

実際に自由気ままに行なってもいいのだが、そこに待っているのは関節を極められ、固められると言う不自由な未来だ。本質的に混沌である闘争の只中から、有効性、実行性、機会、速度やリスクなど諸々の条件を当てはめて真に行なうべき動作を取捨選択することと、闘争の自由そのものだ。

そして荒涼の取った行動は、単なる脱出を意味していない。右に体を捻ると言うことは、当たり前のようなのだが体を多少右前方に出し、右腕もまた前に出すと言うことだ。

つまり右腕が、敵に近くなる。

もはや条件反射、昆虫などと同じくらいに一律的反應で、荒涼は右腕を廷兼郎の首へ振るった。首に腕を絡め、チョークスリーパー

へと移行するためだ。首を狙う動作を清廉した結果、複雑な判断の短絡として技術を繰り出す。

腕ひしぎ逆十字固めや三角締めと並んで総合格闘では多用されているチョークスリーパー、あるいはバックチョークは、一度極められれば脱出が困難だ。相手は自分の背面にぴたりと貼り付き、こちらの動きを制限してくる。よほどの力量差、体重差が無ければ、抜け出すことは出来ない。

だがそれは同時に、まず相手の後方へと回りこむという段階を踏まねばならないことを意味している。無論、そのようなことを易々と受け入れる廷兼郎ではない。荒涼が右に回りこんだのと同じく、廷兼郎も右に回りこんで荒涼の右腕から離れようとする。さらには捉えていた左腕の手首を返し、肘関節を上に向けたまま下から押すようにして固める。

「ぬ!？」

一瞬、荒涼の動きが止まる。左腕の逆を取った状態では筋肉は引っ張られ、体を捻る動作が行なえない。必定、右腕の前進もそこで止まるはずだった。

しかし廷兼郎は、後頭部に暖かな感触を憶えた。首が無造作に抱えられている。

その手に力が込められる前に、廷兼郎は荒涼の左腕を離し、首を屈めながら後ろへと下がった。あと少し欲張っていたら、右腕だけで首を押さえ込まれるところだった。

荒涼の筋量は、廷兼郎を遙かに上回っている。片腕だけでも十分に首を拘束し、絞め落とすだけの力があるため、この激しい攻防のなか、一手でも読み違えれば廷兼郎は荒涼の膨大な筋肉と真っ向から力勝負をせねばならない状況に陥ってしまう。如何に廷兼郎が武術を嗜んでいようと、物理的限界を云々できるわけがない。超能力者であるならばその辺りのことにある程度無頓着でも済むのだろうが、ただの無能力でしかない廷兼郎は、自分の物理的限界に対して

過敏にならざるを得ない。

「おいおい、エグくねえか？ 初っ端からよう」

「ファーストコンタクトが大事だって、いつも言ってるじゃないですか」

軽口の言い合いで仕切りなおし、今度は荒涼から前に出る。これも廷兼郎と同じ、『無足』によるタツクルだった。

G-1トーナメントにて『無足』タツクルを体得した荒涼は、さらに廷兼郎から手解きを受け、今では七、八割方の高い確率で『無足』を行なえるようになっていた。しかしそれはまだ、これと決めたタツクルぐらいにしか活かせておらず、磐石とは言い難かった。

『無足』の利点は筋肉による踏ん張りを必要としないことである。自分の体重を自分の筋肉で押し出すのではなく、重力によって倒れる動作に筋肉を追従させるのだ。落下の位置エネルギーを利用する分だけ筋肉に楽をさせていると解釈しても良い。そしてその分だけ筋肉にさらなるパフォーマンスを期待しても良いだろう。

僅か体が傾いたかと思われた瞬間、荒涼の体が廷兼郎に向かって突き出された。それはまるで槍。落下エネルギーで浮いた分を全て推進力に変えたように、爆発的な速度で廷兼郎の腰へと接近する。

ただでさえ筋量の多い荒涼が『無足』を憶えれば、このような仕様と相成る。単純な速度だけで言えば、明らかに廷兼郎のそれさえ上回っていた。

しかしこのタツクルを、廷兼郎はまるで恐れていない。来ているな、ぐらいの感慨でもって迎え撃とうとしている。

既に廷兼郎は、荒涼のタツクルを見切っていた。これまで練習に付き合ったことにも起因するのだろうが、そもそも荒涼が『無足』をタツクルにしか使わない時点で、自ずと技の出所や機は窺い知れてしまう。

『無足』は筋肉による踏ん張りを行なわない。それは単にエネルギーの節約、有効活用の域に留まらない。筋肉による踏ん張りがないということは、体を動かさないということだ。つまり動きの兆し

を少なく出来るため、相手に自分の行動を悟られる危険を減らすことが出来る。

だが荒涼は、『無足』を決め打ちして使っている。つまり動きの兆しを云々する以前に、気配で行くぞ、行くぞと伝えてしまっているのだ。

そこまでお膳立てされたなら、廷兼郎としてはセオリー通りにタックルを切り、がぶって上から潰すだけである。そのまま後方に回ってバツクチョークに移行しようとするが、荒涼もそれを嫌がつて転がり避ける。しかし一度体が接触しているため、そう簡単には逃れられない。横転がりて逃げる荒涼に覆いかぶさり、腹の上に腰を乗せて動きを制限する。

丁度マウントポジションと呼ばれる状態となる。そこまで至って廷兼郎は、展開の易さに疑問を浮かべた。

案の定と言うべきか、組み敷かれた荒涼は実に落ち着きを払い、にやにやと笑っている。今この状況が、自分の想定どおりだと言わんばかりだ。

「お前、マウント苦手だろ」

指摘されたが、廷兼郎は頷くでもなくただマウントを維持する。

しかし仕掛けるには至らなかった。

天羽根流にも寝た状態での逆捕は存在するが、いわゆるマウントポジションというものは想定していない。そして『カウンターメジャー対抗手段』自体も、マウントポジションからの制圧というのを実は重視していない。

能力者のマウントを取る。それはつまり、身動きできない状態で能力者に接近することを意味する。ただでさえ危険な能力者を相手に、それは無謀というものだろう。最強のエレクトロマスターである御坂美琴などのように、マウントどころか接近すら控えるべき手合いが殆どだ。勿論、能力によっては有効な場合もある。例えば荒涼のような身体再生者を制圧する場合であれば、むしろ率先すべき

だろう。しかし習得の優先度で言えば、やはり低いことに変わりはない。

「バレちゃいましたか。それじゃあ、やれるだけやりましょうか」どこか他人事のような風に、廷兼郎の荒涼の左手首を押さえにいった。そのまま左腕全体を包むようにして上半身で覆いかぶさる。

そのまま先ほどと同じく肘関節に腕を差し込んで逆に決めようとする。V1アームロック。かなりピュラーなサブミッションだ。

しかしその動きが、目に見えて鈍る。

V1アームロックへの移行とともに足を引き抜いていた荒涼は、ガードポジションで自由になった両足で廷兼郎の腹を挟み込んでいた。

シザーホールド。足の力を使って相手の腹部を挟み込む。相手の体を制御しながら内臓を圧迫し、スタミナを奪う。単体で試合を決めるわけではない地味な技だが、マウント・ガードポジションの攻防では非常に重要な技術である。

しかしそれが、身体再生能力者として日々筋肉トレーニングを欠かさない荒涼が行えば、話は違ってくる。みし、みしと、まるで丈夫な木材が重量に負け、繊維を徐々に破いていくかのように不安な音が公園に響く。

肋骨の防御が失せた下腹に、荒涼の膝が食い込んでいる。既に足の太さの半分ほどまで廷兼郎の腰が細ってしまった。中の筋肉や内臓が競りあがり、廷兼郎の胸の辺りがいつも以上の膨らんでいる。

荒涼ほどのフィジカルであれば、ただのシザーホールドでさえ試合を決め得る。腰を挟まれているのでそれ以上体を捻ることが出来ず、体位を移行させられないので逃げることにすら叶わない。そしてそのまま内臓を圧迫されて息も出来ず、スタミナは加速度的に奪われる。そうなればもう、筋肉を緊張させて防御することすら危うくなる。

荒涼に残された仕事は足の緊張を緩めず、廷兼郎の拳動に注意するだけである。もし手を伸ばしてきてもガードポジションなので廷兼郎は大きく伸ばさねばならず、体重が乗せにくい。つまり容易に捕獲することが可能であり、そのまま三角締めに移行しても良い自由を荒涼は持っている。

そのまま一分ほど経過しても、廷兼郎に動きはなかった。手を出せば取られるであろうことが確実な状態ではあるが、状況を動かさなければならぬのは廷兼郎のほうであるのもまた事実だ。何かしなければ負ける以上、例え不利だとわかっていてもそこに飛び込む勇気もときには必要だ。

そのようなことは既に弁えているはずの廷兼郎だが、ただシザーホールドに耐えているだけで、何をすることもない。

そこでようやく荒涼は、展開の不可解さに思い至る。

何故耐えられる？ もはや膝が深く入り込んで、腹部の内臓は不自然に圧迫されている。胃や肝臓がみしみしと音を立てて、窮屈がつて硬直し、横隔膜まで麻痺させているはずなのだ。

廷兼郎の上半身ばかりに行っていた注意を、ここで腹部に戻す。そして足へさらなる力を込めてみるが、それ以上膝が入り込むことがなかった。

廷兼郎の腹筋が、荒涼の足に耐えている。単なる力勝負であれば、荒涼の勝利は確実なはずなのに 否、よく見れば、むしろ押し返されている。

「ふうふう、ふうふう」

静かに深く、神妙な息遣い。まるで寝息のように微かで落ち着いたそれは、廷兼郎の口から届いている。その一呼吸の度に廷兼郎の腹筋が盛り上がり、荒涼のシザーホールドを跳ね返してくる。

「シッ
」

「くっ！」

足の拘束が緩んだ瞬間を見逃さず、シザーホールドを行なってい

た右足を取り、廷兼郎はヒールホールドへ即座に移行する。対応して荒涼もシザーホールドをすっぱり諦め、こちらも廷兼郎の足を取ってアキレス腱固めを行なう。互いの足首が抱えられ、異常な方向へと曲がり、あるいは限界以上に筋を伸ばされて

「はい、終わりだよ」

ぼんと、二人の方が叩かれる。時間を計っていた井上が時計をこれ見よがしに示していた。

練習：四

「やっとか。ああ、絞めすぎて股が痛え」

立ち上がった荒涼は緊張しっぱなしだった股の辺りの筋肉を揉んで解す。廷兼郎は逆に締められていた腹部を痛そうに揉み解していた。

「すげえパワーだな。単純な力比べなら勝てると思ったんだが」

実際、あのシザーホールドの掛かり具合で荒涼は勝利を確信していた。しかし途中から荒涼の膝は廷兼郎の腹筋に押し返されてしまった。単純な筋量でいえば大きく上回っているはずなのにと、今も納得できないでいた。

「いいえ。単純な力比べなら、荒涼さんの勝ちですよ」

そんな荒涼の言い分を飄々と、軽やかに肯定してみせる廷兼郎。そこには何の気負いも見出せない。じゃあ、どうしてと荒涼がまたも疑問を呈するのに、廷兼郎は先回りする。

「強いて言えば、バランスとタイミングですね。とはいえ、僕も人の受け売りですけど」

そう言っただけを正し、携帯電話で時間を確認すると、廷兼郎は朗々と目の前の本を読み上げるように説明を始めてしまった。

体の均衡、力を発する機会。それらを統合し、自分の力を最大効率で運用する。言うに易いが、行なうは難い。それを可能とするのが近似正中線であり、それらをこなせてこそ、ようやく近似正中線を運用できる。

学園都市の機器を用いて正確に算出できる正中線の精度は、およそ0のマイナス十乗までである。廷兼郎が参加協力している『対抗手段』カウンター計画の発案者である網丘が提唱している近似正中線とは、99.99999999999999%までの精度を持つ正中線を意味している。これによって人間の予め備わっている能力を、限りなく百パー

セントに近い状態まで引き出し、恒常的に発揮することが出来るようにするのが、近似正中線トゥエルフナインの目的である。

しかしそれは、一桁精度を上げるだけでも途方も無い辛苦が伴う。日常生活からして鍛錬とせねばすぐにでも身体は歪み、精神は傾き、技は自ずから早ならざりける。

廷兼郎の現在の正中線精度は、言うなればファイブナイン程度。これは十秒近く同じ状態を維持できるという定義の上での数字だ。より時間を短くすれば数字も上がるだろうが、それでは揺らぎの中でたまさか出た数字と変わらない。

正中線は、恒常化・常態化せねばならない。本来は朝起きたとき、学校に行くとき、授業を受けて、級友と遊び、部活に励み、風紀委員ジャッジメンの仕事をこなし、家に帰り、夕飯を食べ、風呂に入り寝るそのときまで維持できてこそその近似正中線である。

その鍛錬は決して単なる姿勢の制御に留まらない。正中線が高まれば、身体のパフォーマンスは加速度的に向上する。単なるトルクは言うに及ばず、動体視力や視認記憶力などの視能力や内臓器官の活動、新陳代謝までもが活発となる。

それは精神とて同じである。肉体の負荷を限りなく減少させて、重圧の無くなつた精神は軽妙さと柔軟さを宿し、よりの確な状況判断力を獲得する。

技については言わずもがな、正された精神によって打つべき機、打つべき所を過たず、正された体でそれらを逃さず発揮できることになる。

しかしそれらは、正中線を保つてからの話である。そして正中線というのは、その『保つ』ということが困難なものでもある。

何の刺激も無い、ただひたすらに平坦な地平の上ならば、殆どの人が高い正中線を保てるだろう。しかし対抗手段は、そのような状況をおよそ想定していない。

急な斜面と腐葉土を敷き詰めた山肌。足を取られるほど沈み込む

砂地。その他屋外では完全な水平^{レベル}など望むべくも無い。さらに室内では人体の可動すら制限される事態が想定される。パーティションで区切られ、デスクの敷き詰められたオフィス。展示物が多く並ぶ百貨店のテナント等々。

そして当然ながら、敵性の存在を加味しなければならぬ。自身を害しようとする行動してくる者と相対しながら常に正中線を維持するのは、さながらもう一つの戦いである。

「相変わらず正中線か。重要なのは分かるけどよ、もっと何かこう、手っ取り早く強くなる方法があるんじゃないか？」

「はい。ありますよ」

てつきり食い下がると思っていた荒涼がぼかんと口を開けてしまふほど、すんなりと認めてしまった。確かにてつとり早く強くなる方法はごまんとある。超能力を持っているならそれを使うのもいい。武器を持つてもいい。仲間を集めてもいい。畏にはめてもいい。寝込みを襲うのも立派な兵法であり戦略だ。それだけのことが出来る戦略眼と度胸は強さと定義して申し分ない。

そこには今の廷兼郎が行なっているような習練を必要としないものもある。その場の度胸と工夫さえ整えればいくらでも手っ取り早く強くなれる。

「こう言っては身も蓋もないけれど、要はこだわりの問題です。どんな自分を許せるのか、許せないのか。他人のことを度外視して、自分が納得できるかどうか」

廷兼郎は別段、そうした事に関してはあまり関心がない。自分自身の手段が既に確立してしまっているので、他の人間がどのような手段を取ろうとそれは自分の至り知るところではないと弁えている。むしろ彼の関心は、そういった手段に対抗する方法だけである。

廷兼郎は、そういうこだわりを求めている。より実践的な技を多く覚えることのほうが強くなるには手っ取り早いのかもしれない。そうしたことを突き詰めていくこともまた武の真理なのかもしれない。

い。

しかし廷兼郎は、それを選ばなかった。ただ手段を突き詰めるなら、もはや五体だけの使用すること自体ナンセンスである。火器兵器を用いたほうがよほど習練も軽く済み、現実に即した力を手に入られる。

残念ながら、それでは駄目なのだ。そんなことは、廷兼郎のメンタリテイが許さない。武器は使えど火器兵器には手を出さない。否、出せないと言うべきか。彼生来の不器用さは、今や精密機械と化した学園都市の兵器類を受け付けない。

そうした即物的な問題もあるが、本当のところは廷兼郎自身もよく分かっていない。無手による超能力者の制圧方法を確立し、無能力の一般人が能力に脅かされるリスクを減らすというお題目に惚れ込んだようにも思えるし、超能力という怪異極まる存在に自分自身をぶつけ、己の価値を見極めたいという衝動もなくはない。

はたまた自分を負かした妹に拳で勝ちたいという、幼稚で浅薄な誇りを振りかざしているだけなのかもしれない。

ひとしきりしゃべり終わるとすっかり陽が上がり、公園の中にも会社や学校に向かう通行人が増えてきた。

「おっと、そろそろ時間ですね」

芝居染みた口調で言うと、廷兼郎はそそくさと荷物をまとめてしまった。

「それじゃ井上さん、また明日」

「ああ、それじゃあね」

廷兼郎と荒涼は同じ長点上機学園に通っているため、一緒に第十学区へ向かう。井上は第二十学区の学校に通っているため、ここで別れるのが通例だった。ここから井上は走って学校へ向かい、さらに部活でボクシングに励む。彼が通っているのはスポーツ工学系の学校で、授業も殆どもスポーツに関連するもので埋め尽くされているらしい。

マスを一ラウンドこなしたくらいではまだまだスタミナに余裕があるらしく、井上が元気に走り去っていくなか、廷兼郎と荒涼は学区間巡行バスの乗り場へと歩いていった。

学校：二

久しぶりに校舎に來た廷兼郎は荒涼と分かれ、自分の教室へと向かった。

廷兼郎の通う長点上機学園は、学園都市有数のエリート校として名高い。能力開発のみに傾倒し、能力者の生徒以外の受け入れを行わない学校施設が横行する昨今、長点上機学園では無能力者の受け入れを積極的に行なっている。

ただしそれは、ある条件を満たした場合に限られる。ある特定分野において第一線の活躍を期待、あるいは確立している者のみが、無能力者であっても入校を許される。

無能力者である廷兼郎も、その手合いである。彼は『カウンターメジャー対抗手段』計画の責任者である網丘の紹介で長点上機学園から推薦を貰い、在籍することとなった。

しかしせっかく入った学校でも、彼が長点上機に赴くのは週に二、三回程度のことであった。

長点上機学園のカリキュラムは、殆どあつてないが如きである。何十人かの単位でもって教える授業形態など、とてもではないが行なえないのだ。各分野で大いに活躍できる天才の卵たちに、今さらそのような教育をさせることは学校側にとつても負担が大きい。

突出した才能をとことん伸ばすためには、それ専用のカリキュラムを組まねばならず、おのずと組や学年といった概念は他の学校施設よりも希薄にならざるを得ない。

とはいえ、一応はクラスといった分け方は存在する。だがそれは通常の学校施設に見られるような一元的なものではない。むしろ大卒学などのように多元的・選択的に授業を選ぶようになっていて、そこでは自ずと、なるべく同じ程度の学力を持った生徒が集まり、かろつじて長点上機においてクラスと呼べる形態を取っている。

「おはようございます」

からりと開けた教室には、既にかんりの生徒が座っていた。廷兼郎が選んだ今日の一限目は英語である。やはり基本的な教科であるため、生徒の人気も高い。

和歌山の田舎から出てきた廷兼郎が真つ先に受けたと思ったのも、この英語の授業であつた。別段、彼は英語が好きなのではない。単に学園都市という時代の最先端にある街の中で、さらにエリート校として有名な長点上機学園で習える英語というものにとつてもなく垢抜けた印象を受けたのだ。

そしてその英語を習えたら、自分も垢抜けることが出来るのではと期待したのだ。その甲斐あつて今では、日常会話程度を難なくこなせるくらいの英語力を身に付けている。

しかし残念ながら、彼の田舎根性というか性情は、英会話を身に着けた程度では払拭されなかつた。意思の疎通は出来ても、やはり外国人というのは無条件で怖い。日本人の教師となら流暢に英語を話せるのだが、たまに教師が連れてくる非常勤講師の外国人との英会話が苦手であつた。

今日は確か座学が主だったので、外国人の非常勤講師は来ないはずである。その分ストレスは少なくて済むので、廷兼郎は自分の席に座つてまずは大きく伸びをした。

「字緒さん、久しぶりですね」

後ろから話しかけてくれた男子生徒は、長点上機学園で同じく風紀委員を務めている福武四重ふくたけしじゅうだつた。長点上機ではただでさえ少ない風紀委員であり、しかも同じ一年生なので、廷兼郎にとっては荒涼と並んで貴重な友人である。

廷兼郎は長点上機学園がある第十八学区の担当ではなく、特例で第七学区で活動している。福武は勿論第十八学区の担当であるため、長点上機学園と風紀委員の訓練でしか会う機会がなかつた。

「やっと予定が開きましたよ。せっかく学校に所属してるのに、足

が遠のくばかりだ」

「その分、訓練はしてるんでしょう。最近どうです？」

「最近は蹴りの研究をやらされましてね、ようやく新技が開発出来たんですよ」

「へえ。勿論僕らにも教えてくれるんですよ」

「ぜひそうしたいんですけどねえ。必修で教えるよりは選択のほうがいいかなあと」

「字緒さんが考えた蹴りでしょ？ 難しそうですもん。必修はきついでしょう」

「そんなことないですよ。むしろ基本に忠実な蹴りです」

「ちなみにどんな蹴りなんです？」

「えっと、要は膝を内転させながら真つ直ぐ突き出すんです」

「突き出す？ じゃあ前蹴りですか？」

「そうですね。使い方は主に前蹴りと同じです。ただ回し蹴りにも派生は出来るんで」

「前蹴りで回し蹴りに派生？ その時点で普通じゃないですよ」

福武もまた格闘技に造詣があり、廷兼郎の格闘技談義にも着いて来てくれる意味でも貴重な友人であった。

「そういえば字緒さん、最近風紀委員は忙しくないですか？」

「いいえ、別段変わりませんけど、どうかしました？」

「実は第十学区では、スキルアウトの活動が活発になってまして」
スキルアウトとは、主に武装した無能力者の集団を指す。いわゆる不良と呼ばれるに相応しい者たちの集まりだ。

学園都市は、街全体で超能力の開発という目的を掲げており、教育活動もそれに倣う。そのために排他的な能力至上主義が横行し、能力の如何で人間を計ろうとする傾向が強い。

しかし、能力は努力で全て解決するものではない。発現しないものに、とことん発現しないのだ。

無能力で通っている廷兼郎は、それを身近なこととして理解でき

る。そこからあぶれてしまふ心情にも、能力者よりは切実に思いを寄せられる。

「活発に、ですか？ いきなり数が増えたんでしょうか？」

「活発というよりは、危険が増大したという感じでしょうか。検挙率に殆ど変化は無いんです。ただ、凶悪な犯罪にスキルアウトが関わるケースが増えたんです。警備員でさえもてあます場合もあるくらいで」

「それは、また……」

剣呑なことだと、廷兼郎は他人事のように呟いた。しかし同じ街の中の事。明日は我が身と言えなくも無い。

場合によっては最新の火器兵器さえ装備できる警備員が不覚を取るなど、よほどの事態である。それを単なるスキルアウトが生み出していると言うのか。

「以前にあった、何でしたっけ……」

「幻想御手事件」

「それです。あのおときも警備員が撃退させられたって聞きました。あれに近いことが起こったと？」

幻想御手事件。その全容は未だに解明されていないが、風紀委員として活動している廷兼郎にも、幾らか事情は伝わっている。とはいえ噂と違わない次元だ。

事件の首謀者である木山春生なる人物は、驚くべきことに多元能力デュアルスの持ち主であり、その力を使って警備員を単体で制圧せしめたのだと言う。

警備員は学園都市内の治安維持機関として最大のものである。その警備員が不覚を取ると言うことは、建前上、学園都市内では起きてはいけない事態なのだ。治安を維持できない行政に、高度な社会的活動など行なえるはずがないのだから。

とはいえ、それが本当に建前に過ぎないと言うことを弁える程度には、廷兼郎は成熟している。

「いえ、実はですね……」

如何にも内緒話をするように、福武は身を屈めて顔を近づけてきた。

「学園都市の研究機関が、スキルアウトに最新兵器を横流ししてるんだそうです。スキルアウトを使って兵器の試験を行ってるとか噂する者もいます」

「なるほど、穏やかじゃありませんね」

内緒話にするのも無理はない。最新兵器の横流しなど、勿論許されることではない。しかもそれを未成年に渡すというのは、あえて火種を撒き散らす反社会的行為だ。

しかしそのような倫理観を抜きにして思索を進めれば、なるほど通る理もあるような気がする。

兵器に限らず製品と言うのは、作ればそれで終わりと言うわけではない。作られたのならそれが性能を満たしているかどうか、安全か否か、極限状態の運用に耐えられるか。場合によっては仕様に反した使い方をした場合の安全率など、徹底的に検証される。

開発研究、製造生産、試験と、そこには多くの時間と費用がかかる。研究施設とて成果を上げねば取り潰されてしまう。より早く、より安く、より高性能にしなければ市場原理によって淘汰されていく。

そこへいくとスキルアウトへの兵器横流しは、試験の時間と費用の節約に觀面だろう。ただ渡しただけで、勝手に彼らは色々な状況で運用してくれる。あとはそのデータを回収すればいいのだ。

考えれば考えるほど、学園都市の研究機関が思いつきそうなことだと、廷兼朗は確信を深めていた。

「それですね、字緒さん……」

不穏な話題にふさわしく、神妙な顔つきで福武は耳打ちする。

「今度、スキルアウトが根城にしている倉庫に強制捜査を書けようと言うことになったんです。それに是非字緒さんも参加していただきたいんですよ」

「強制捜査、ねえ。大量検挙、というよりはその噂の尻尾を掴もう
ということですか」

廷兼朗の返事を受けて、我が意を得たりとばかりに福武がにやり
と笑う。

「ええ。実はこれまでに捕まえたスキルアウトから相当な証言を得
ているんですが、やはり決め手となる証拠が必要なんです」

それさえ掴めば研究施設を検挙出来る。スキルアウトへの兵器横
流しが途絶えれば、凶悪な犯罪も自ずと減少するという寸法だ。

「こちらにも能力者とはいえ、皆が皆荒事をこなせるわけじゃない。

字緒さんほどの戦闘経験のある人がいてくれると助かるのですが」
そこまで誉めそやされるとさすがに照れくさく、廷兼朗は軽く瞼
の辺りを気だるげに手で押さえた。

確かに廷兼朗は普通の学生よりもこと戦闘に従事している。風紀
委員として活動しているのも、その戦闘行為への従事、そして戦闘
経験の獲得が目的だ。

福武を助ける意味でも、経験値を稼ぐ意味でも、その申し出は廷
兼朗の利害と合致した。

「分かりました。あちらの風紀委員の方にも相談して、日取りを決
めましょう」

その辺の対応は恐らく話せば通るだろう。前向きに検討したい旨
を伝えると、福武も謝辞を述べ、自分の席へと戻っていった。

学校：二

一、二時限目の英語が終わると、廷兼郎はそそくさと教室を後にして、学区内巡回バスに乗って第二学区へと向かった。

まさか学校をサボタージユしたわけではない。次の授業は第二学区の訓練場で行なわれるのだ。

『対抗手段』計画は長点上機学園と単位の共有を行なっており、そのおかげで廷兼郎は訓練に集中しながら学校生活を謳歌できている。かわりに大覇星祭では、長点上機学園優勝のための工作をさせられたりと妙なことに巻き込まれもする。しかし彼の場合、それさえも修行の内だと受け入れて行なうことが出来るだけの大らかさを有していた。

そうして積み重ねる一手一手が、自分を強め、高めてくれる。そう考えれば大概のことは二つ返事で受けることが出来る。

そうした献身こそ、捧げ物なのだ。超能力も魔術も身に付けられない自分が捧げられるのは、この身に宿した武ただ一つ。

それを顕すこと以外で、廷兼郎は自分を表現できない。他人を感じ得ない。

根拠のない思考に一人、自らを嘲るが如くに薄く笑う。それほど真に迫った武を身に付けていられたら、身に付けるのだと覚悟できたら、どれほど幸せだろうか。

ただ強くなる。己の武を高めると言うのなら、今すぐ俗世との縁を切るべきだ。今自分が持っている何もかもを擲ってこそ、全てを賭けるという行為なのではないか。

だとすれば廷兼郎は、何も賭けてなどいない。潰しが利くように色々なことを習い、円満な社会生活を営むために他人との仲を保ち妹への復讐を、心に誓っている。

「う、くう」

途端、廷兼郎の肺が狭まる。そう感じるほどの動悸。自律神経の失調は、心に掛けられた重圧の残滓。それを受け入れず、捨て切れず、どちらともつかない体が不調をきたす。

理屈でいかに否定しようと、それだけ心を欺こうと、廷兼郎は未だに妹のことを想っているのだ。そして、そのことに目を逸らし、瞑りたいと思う弱さも、廷兼郎の偽らざる本性であった。

鮮烈にして純然たる敗北。誇りも志も、両親さえも奪っていったのは、他でもない彼の肉親だった。

字緒キコ。一歳違いの、廷兼郎の妹。レベル0相当の肉体変化能力『超最適化』オプティミスターを有する。

『超最適化』は正式な名称ではない。キコを研究していた施設は、既に彼女の手によって壊滅させられていた。残っていた資料を調査していた網丘によって名付けられたに過ぎない。

『超最適化』は、レベル0相当の能力である。その発現は非常に微細であり、特別な測定機器を持ち込まねば観測し得ない。しかし、それがもたらす効果はレベル0の常識を覆して余りあるものだった。ただ単に体内物質や血流、骨格、筋肉をミクロ・マイクロ単位で最適な状態に変化させるだけの力で、キコは研究施設を壊滅させ、単身で学園都市より許可なく脱出するという快挙を成し遂げた。今やキコは、学園都市外で活動する数少ない能力者の一人である。

そんなキコと戦うべく、廷兼郎は学園都市に移り住み、『対抗手段』計画に参加した。

キコのことなど忘れ、ただ平凡に暮らしていくことも、全てを武に捧げつくすことも出来たのだろうか、端からそのような選択肢は彼の中に存在しなかったのかもしれない。

だからといって、キコのために学園都市に来たのだと嘯けるほど、明確な目標があったわけではない。

強くなりたい。そのために、廷兼郎はやってきた。

だが最近は、その動機に陰りが見える。御坂美琴、神裂火織、ラ

タナチヤイ・シングレックと、女性と戦うことの多かったことが、妹のことをどうしようもなく想起させるきっかけとなっていた。

妹のために、習練を行なっているわけではない。では会いたいのか？ 自分を敗残せしめた相手に、好き好んで会いたいのか？ 会ったところで勝算はあるのか？

連綿と続く思考は止め処なく、自制を受け付けない。

バスを降り、訓練場に入った廷兼朗は、まず更室で道着に着替え、まずはデイスカッションルームへと向かった。

今日はどうやらまたも新しい技術の開発を行なうらしく、『対抗手段』計画の責任者である網丘と数人のスタッフ、それに廷兼朗とでその技術開発案を会議に掛けるのだ。

要するに新技の開発なのだが、ここでは通常の武芸者のような閃きの代物ではない。新たな格闘技術や戦略戦術こそ、言ってしまうは『対抗手段』計画における商品なのだ。

より良い商品を作るのなら、需要と供給、市場の動向をきちんと把握したマネジメント。それを前提とした大胆でいて合理的な企画立案。構想を確実に具現化する生産技術などが必要となってくる。

ここで言う市場とは、警備員や風紀委員、さらには学園都市の上部構造からの意向であり、企画立案は言うまでもなく網丘が担当する。廷兼朗は、言わば商品開発の下流にある製造生産に相当する。

部屋に入ると、すでに網丘以下研究者が一同に介していた。皆が皆判を押したように白衣を着ているというのに、見分けるのに些かの苦労も無いのは、彼らもまた世界最高の研究機関である学園都市の科学者であるが故だろうか。

廷兼朗が席に座ると、上手の網丘は早速話を始めた。

「廷兼朗、以前に開発した体内発勁の使い心地はどうかしら？」

網丘はよく、こういう聞き方をする。技術を商品として扱っているため、技と人とを乖離して捉えている。

「威力は十分以上です。ただ……」

「当てづらい。そこが難点ね」

「しかも相手の間近で行なう。その間僕の体は動かさせません」

「そう。威力はともかくとして、不確定な上に危険すぎる。より汎用性を高めないと」

否定しておきながら、口の端を上げる網丘。彼女のこういう笑顔を見ると、廷兼郎は安心に包まれる。

しかしそれは網丘に母性的な何かを感じてのことではない。むしろその逆と言うべきだろうが、意外と性情に幼稚さが残る彼女は、隠し玉を持っているとどうしても嬉しくなってしまう。

「打撃と同じ速度で、『虎口伝い』を行なえるかしら？」

「どういうことですか？」

「あまり変わらないわ。衝撃を流し込み、相手の中に置いておく貫通力の高い打撃に、『虎口伝い』の振動を加えればいい」

虎口伝いは、全身を痙攣させた力を一箇所に集約、相手に流し込む荒業である。局所に発生した振動は人間の丈夫な肉さえ揺すり、中の構造をずたずたに引き裂く。

それと打撃を合わせると、網丘は提案していた。それはつまり、取り組むよう命令されているのと同義であった。

しかし廷兼郎は何の不平も抱いていない。彼としても新たな技の開発には心躍るものを感じる。

「要するに、体内発動の下位互換と思ってくればいいわ。威力を犠牲にしてより汎用性を高める」

「なるほど。むしろ『虎口伝い』を維持したまま殴る、ということでしょうか？」

「あなたなりの解釈で構わないわ。どうかしら？」

確認の意味しか持たない詰問は、もはや茶番に墮している。しかしそれを殊更に論うのは浅薄と言うものだろう。学校で新しいことを習った子供が、鬼の首でも取ったかのようにひけらかすのと同じ

だ。

それを思い留まれるだけの情緒は、廷兼郎の中にあつたらしい。「やれます。やらせてください」

その一言が、自分を妹へと近づける。根拠はない。自信もない。保障もない。それでも、人は歩き出せる。見たくも無いものに目を瞑って、それがどんなに愚かしくて危うい行為だとしても、人は走り出せてしまう。

学校・三

「それで、具体的にはどうすればいいんでしょうか？」

早速新技術の開発に取り掛かった廷兼郎は、訓練場のホールに道着で立っていた。

「まずは振動を調整してみましよう」

「はい？」

返事をしつつも、廷兼郎は網丘の言わんとするところの意味を掴めずにいた。振動を調整するとは、一体どういうことなのか。

「ビツカーというのを知ってるかしら？」

「ええ知ってます。プリズムメモリ使うやつでしょ」

「何を言ってるのかさっぱり分からないけど多分違いわ。工事現場で使う機械よ。尖らせた先端を振動させることによって硬い岩盤に幾度も打ちつけて削岩するの」

「へえー。それもビツカーって言うんですか」

「それ“を”ビツカーと言うのよ。同じことをあなたの手で行なってもらいわ」

振動させて何度も打ち付ける。ここまで聞けば廷兼郎にもおぼろげながらに理解できた。

「貫通力の高い打撃を振動させて、何度も殴るのか」

「分かったところで練習よ。ターゲットを出すわね」

さっそく向かいの扉が開き、網丘の言うターゲットが現れる。それはほぼ灰色に塗られた警備員アンチスキル所有の装甲車であった。

「人ではないんですね」

「能力者の中には戦車装甲以上に頑丈なものもあるわ。そろそろ装甲車の鋼板くらい打ち抜けるようになってもらわないと、これからつらいわよ」

鋼板くらい、と廷兼郎は反駁する。警備員の使う装甲車は、その役職上危険な能力行使にも耐えられるよう設計されている。場所に

よって装甲厚は100ミリ以上に達し、戦車並みの防弾性能を誇り、能力者だけでなく学園都市の兵器にも対応できるようになっている。

それに素手で打ち抜いてみせると、網丘は言っているのだ。これからの能力者との戦闘を見越して。

確かに能力者は、強力な異能で我が身を守り、かつ敵を屠ってみせる。その際には勿論、相手との間合いや呼吸を盗む目付けも必要だ。しかしそれだけでは、能力者は倒せない。例えば学園都市最強を誇る第一位『一方通行』^{アクセラレイタ}は、あらゆるベクトルを操作することが出来ると言う。それによって如何なる攻撃も受け付けず、理論上は核攻撃も無意味とされている。

ここまで顕著な例も能力者の中では珍しいが、それ以外にも防衛に転用できる能力をもった学生は幾らでもいる。彼らが本気で守勢に回り、異能によって我が身の生存を最優先にした状態であっても、打ち崩せるようにならねばならない。そこにはまず単純な威力が必要となる。鉄も貫く威力を前提として、技を行使しなければならぬ。

装甲車の正面に立った廷兼郎は、とりあえず前面装甲を幾らか殴る。感触を確かめるようにこつこつと軽く、打った後の音に聞き入る。

練習なのでせつかくなら一番装甲の厚い正面を叩くべきだと判断し、その中でも特に防護の厚い運転席周りに絞る。ことと定めた場所に左の手を置き、ゆっくりと右腕を引き絞る。まずは普通の掌底を一発入れてみる。

「セイツ
」
「ごぐんと、鈍い音がホールに響く。車体がぐらりと揺らぎ、すぐに納まった。

廷兼郎の打ち付けた場所には、彼の掌底の形がくつきりと浮かんでいた。100ミリ近い合金装甲が、深いところで二センチ近く沈

んでいる。

そして廷兼郎は驚いたように自分の掌を省みていた。その掌底部は、赤く内出血を起こしていた。しかし彼が驚いたのはそこではない。装甲車を殴った際の感触が彼にとつて瞠目に値するものだった。これが単なる鋼板だったなら、おそらくもつと深い凹みを付けられただろう。しかしその衝撃は、装甲車のシャーシによって分散されていたのだ。その感触は、むしろ人体を殴ったときを髣髴とさせ

なるほど単に装甲を厚くしただけではないらしい。自動車としての機能を残しつつ、衝撃を効果的に逃がすように設計されたシャーシは、装甲車全体の剛性を飛躍的に高めている。

僅かばかりでも打ち抜けるのではと期待していた打撃が、しかし不発に終わっても、廷兼郎はそれほど気落ちしていなかった。これは練習に過ぎないのだから、できなくても問題はない。これからできるようになればいいのだ。

「それじゃあ、いきます」

ぶるりと右腕を震わせる。全身の痙攣エネルギーを集中させ『虎口伝い』を準備する。震える右腕を腰に据え、新たに定めた箇所へと一気に突き出した。

「セイヤツ」

打撃音が連続し、虎口伝いの痙攣によって、打撃が幾度も打ち付けられる。車体は先ほどよりも激しく揺すられ、僅かにタイヤが横にずれていった。二階の窓から観察していたブース内の研究者たちが、感嘆の声を上げる。

「あぐっ」

堪らず廷兼郎は右腕を庇う。抱えるようにしている右手からは、血が滴っていた。

「大丈夫？ 字緒」

「はい。骨まではいってません。皮が破れただけです」

握っては開くを繰り返し、調子を確かめる。動かせば多少痛むが、動かすのに支障はない。

『虎口伝い』の振動を用いて何度も打ち付ける新技で、掌底が破れてしまったらしい。最初なので加減が分からず遠慮なしだったため、已む無いことだろう。だが同時に、調整次第では使えると言う確信も生まれていた。その証拠に、鋼板の凹みは先ほどの打った場所よりも深くて広いものになっている。

鋼板の破壊は、あくまで第一段階に過ぎない。これからより耐久性の高いもので順次試験を行なっていく必要がある。そしてその度に、廷兼郎の威力は向上していく。否、していかねばならない。

これを身に付けられたならば、自分の力はさらに高まる。能力者をより確実に、安全に、完全に制圧できる。能力者に、勝つことが出来る。

(キコ)

静かに、心の中だけで呼ばれる。その心境の変化は、近づけた確信ゆえか。この掌をいつか打ち込む日を夢想しながら、廷兼郎は掌底を鉄に叩き付けた。いざ近づけると分かれば、すぐに思い出せる。あの純粹な敗北が、体に蘇る。今まで都合よく忘れてばかりだったと言つのに

「っつ」

自戒に心が痛む。だが意に介さない。そんなものよりも確かで激しい痛みが、掌に返ってくる。今打ち付けている鉄こそ、鉄を打ち付けている掌こそ現実であり肝要であり全てなのだ。他はとりあえず後回しに出来る。目を瞑ってしまえる。都合の良い鈍感という自分の短所すら無視して、廷兼郎は掌を突き出した。

学校：四

それより数日、廷兼郎は新たな打撃の練習に没頭した。だが、その結果は芳しくなかった。

「ふう、ふう」

感覚がなくなるほど打ち付けた両の掌は黒ずんでいる。ここ数日の練習で内出血が常態化し、色素が沈着してしまったのだ。新たな打撃は振動によって何度も掌を打ち付けるため、如何に気をつけても仕手側の負担は普通の打撃よりも大きくなってしまふ。

それさえも自身の未熟だと言われればぐうの音も出ない。そして実際、廷兼郎は何も言わずに練習を続けていた。幾度も打ち付けた装甲車の鋼板は、廷兼郎の赤い手形が至る所に確認できる。しかしどれ一つとして中まで打ち貫いたものはなかった。

気持ちに、結果がついてきてくれない。氣勢を込めて幾度も放った掌底を、装甲車はぐらぐらと揺れるばかりで取り合う素振りも見せない。ようやく取っ掛かりが、妹に届くかもしれない手掛かりとなり得る力を手に入れられると思ったのに

「字緒、ちよつといいかしら？」

呼ばわれた廷兼郎は悄然と頷き、ホールを後にした。

「うん、いい仕上がりね」

会った直後、網丘から気軽にそう言われ、廷兼郎はすぐには返事が出来なかった。

「どうしたの？」

「いえ、あの、自分としては、悪い結果だと……」

おずおずと自分の悪し様を露呈し、廷兼郎は強く目を伏せる。何だか皆を騙しているような気分で、悪い結果が出る以上に心が落ち着かない。

「どうしてそう思うの？」

「だってまだ、打ち抜けてないですよ」

「ああ、そのことを気にしていたの」

まるで些細なことだと言わんばかりの軽々しい口調で、網丘は続ける。

「言い方が悪かったわね。これはただの仕込みよ。今はその振動エネルギーの扱いに慣れてもらうだけでいい。対戦車ライフル並みの威力を求めるのは、それからだ」

「でも！」

なお反駁する廷兼郎に、網丘は怜悯な視線を向ける。見下げるでも見下すでもなく、およそ人に向けるにしては空虚な瞳が無遠慮にねめつける。

「まだ不満があるのなら、それはあなたの心当たりでしょう？」

ぎくりと、廷兼郎の背が跳ねる。凶星を見事に射抜かれた気がして、しばらく声さえ上げられないような気がした。

「もっと、もっと強くなりたいです。早く強くないとだめでしょう。こんな調子じゃ、間に合いません」

廷兼郎の言い分を泰然と聞き入っていた網丘の瞳が、途端にゆらりと歪む。

「……妹さんね」

今度は背中どころか、足腰さえぶるりと震える。

この賢しすぎる上司を、やはり廷兼郎は苦手としている。確かにその有能さに助けられることもしばしばだが、それがもし向けられれば、斯様な仕儀と相成る。

「いや、違つと、思います」

かろつじて吐き出した言葉は、いかにも言い訳じみていた。

「あなた、最初のときは『妹に会いたい』って言ってたわよね？」

今は違つもの？」

続けて浴びせられる冷水のような指摘が、さらに廷兼郎の口を淀

ませる。

「……分かりません。僕は結構、妹のことを忘れながら過ごしてたので。それでいて、凄く充実した生活でした」

学園都市に来て、友達がいっぱい出来た。ライバルもたくさんいる。かわいい後輩も、頼もしい先輩もいる。これほど充実した学生生活を送っていないながら、行方不明の妹が心配だなどとの口が言えようか。

「妹さんと同じくらい、学園都市での生活が大切なのね」

「はい。どちらも大切なんです。比べることなんて出来ない」

それは同時に、キコによってもたらされた敗北すら、今の生活の前では霞むのだと認めているに等しかった。あの衝撃的な敗北すら忘れてしまえる自分の性情が、廷兼郎は許しがたかった。

しかしもし、それが許せるのならば

「妹さんに会うのは、何も今すぐではなくていいのでしょうか？」
「え？」

またも軽々しく、廷兼郎にとっては衝撃的な言葉を網丘は吐いた。十年、二十年……。もう勝てる。今度こそ勝てる。そう確信してから、探せばいいじゃない。今すぐに答えを求める必要なんて、どこにもないのよ。あなた、まだ十六なのだから

言われてみれば当然で、考えてみれば自然なことに思えたが、不思議とそのことに廷兼郎は思い至ることが無かった。

「何でも出来るわ。今からなら、何でも」

「網丘さんは、僕を実験台ぐらいにしか思っていないのかと」

「対抗手段から見れば、その通りよ。でもあなた個人を見れば、そうじゃない。あなたはまだ、何も始まってはいないのよ」

「つまり、奨んで身を捧げると言うことですね」

「誰のせいにも出来ないということよ。厳しい言い方だけど、あなたをあまり子供扱いできない。私にも状況にも、余裕が無いから」

「そして、僕にも無い」

「気まずそうな沈黙が、二人に降りる。分かりきったことをさも自慢げに言ってしまった恥ずかしさで、先に廷兼郎が耐えかねた。

「もっとロジカルな話をされると思っていました」

廷兼郎の言い様に、網丘は力なく笑った。本当はそのロジカルな話をしたかったのだろうが、そればかりが通じないということも理解しているのだろう。

「さっきの話だけだね。余裕が無いとは言っても、急いでもらおうとは思っていない。こればかりは時間をかけないと」

「それほどのことですか」

「それほどのことよ。素手で戦車装甲を抜くということは」

確かに相当なことである。歩兵が戦車と相對すること自体が無謀であるというのが軍事戦略的な常識であるにも関わらず、非武装で装甲を貫通させる能力を一個人に搭載しようというのだから。そのように鑑みると、今さら廷兼郎は腹の底に震えを感じた。超能力だなんだと言うのが彼にとってのありふれた日常になり、その中で戦いを重ねて、まるで自分も超能力者のように強くなった気でいたのかもしれない。

しかしそれは悲しいほど浅薄で、致命的な誤解だ。戦車装甲云々ではなく、そんな精神状態だった自分が恐ろしい。まるで妹に手が届きそうな幻想を恥ずかしげも無く信じきって、さらには焦りだす始末。

そんな劇的な力が　超能力のように明瞭で強力で理不尽な力が、自分に宿っているとでも言うのか。

宿っていない。全ては妹に持っていかれた。だから廷兼郎は持っていない。持ちたいとも、思わない。彼が用いるのは、元来人に備わっている能力だけである。みんなが出来ることをとことん突き詰めて、突きつけることしか出来ないはずだったのに

勝利は人を鈍らせる。超能力者、聖人、精霊術師を相手に辛くも

生き残ってきた経験は廷兼郎の技と体を磨き、心に澱を沈ませることになったらしい。余裕などなくとも、人は性懲りも無く油断し、誤解できる。弱い自分が、強いかもしれないと、思い込める。

「分かりました。急ぎません。それが、一番早い」

「私もそう思う。急いだところで、あなたは超能力者に追いつかないんだから、のんびり行こう」

無手にて超能力者を制圧する。その道程は決して一朝一夕のものではない。極端な話、廷兼郎や網丘の存命中に確立するかどうかも怪しい。そういう見通しを、急がず進み続けなければならないのだ。元よりそういうものなのだ。不確かで保証無く、何もかも分からないのが当然なのだ。超能力のような明白さなど、物事に望むべくも無い。そういう戦いを、自分は続けてきたはずなのだ。

だからこれからも続ければいい。超能力者よりも遅い歩みで、確かに積み重ねていけばいい。

打ち疲れ、赤黒くなった掌をじっと見遣る。これは恥ではない。廷兼郎が正常である証だ。この体に異能の欠片も宿っていないただの無能であるという確かな証だ。少しずつでも前に進んで、近づいているという足跡だ。

訓練：一

そこは、狭かった。六畳あるかどうかという部屋の中央に、廷兼郎は立っている。部屋の四隅に点された白色LEDに照らされて、彼の足元には影一つ見当たらない。

何も無い空間に、廷兼郎が拳を突き出す。まるで豆腐を箸で持ったように遅く慎重な動作である。ただ右の拳を前に伸ばすだけで、たつぷり一分は経過していた。

次に右腕を引きながら、左の足を出す。こちらもゆっくりと緩慢な動きであり、廷兼郎は細心の注意で体重を移動させながら、ようやく下段を蹴る。

左足を戻し、そのままびたりと構え、塑像のように固まる。身動きどころか揺らぎ一つ見えない。微かな呼吸音と胸の上下だけを残して、廷兼郎の中身が肉ではない何かに挿げ変わってしまったかのようにだ。

そうしてどれだけの時間が経過したのだろうか。白色LEDのみで窓も無く時計も置いていないその部屋では、正確な時間など計れない。つと廷兼郎の頭部から汗が滴り始めたころ、ばしゅうという大げさな排気音と共に彼の後方の壁が横にずれ、一人の女性の姿が浮かび上がった。

「ごくろうさん。ミーティングやるわよ」

直属の上司である網丘の声で廷兼郎は構えを解き、今開いた扉をくぐって外に出た。

外といっても、結局は廷兼郎が常に利用している訓練場のは地下であり、白すぎる床をこれまた白いLEDが照らし、過剰な清潔感を煽り立てている。その中をのたくる、色とりどりの配線の波。波濤を再現するようなうねりが廷兼郎のいた部屋を取り巻いていた。

それらに触れたりしないよう注意しながら歩くと、その先はパー

テイションで区切られたブースがずらりと並んでいた。どうやらそこは元々ホールだったのを改造し、オフィス風に仕立てているらしかった。中心にあるのは、先ほど廷兼郎がいた部屋である。

部屋の壁から伸びる配線は結束バンドや配線モールに整えられ、パーテイションで区切られたそれぞれのオフィスへと届けられている。

そこに備えられているのは、学園都市でも有数の完成度を誇る計測機器の数々だと、網丘が自慢げに教えてくれたのを廷兼郎は憶えていた。

『対抗手段』計画の予算を叩いて設えたオフィスの名は、近似正中線製作室。その名の通り近似正中線 人体の姿勢が99.9999999%まで整えられた状態を作り出すことを目的とした場所であるが、誰もそんな堅苦しい名で呼ばわりはしない。高純度の洒落を込めて、オフィスの中心にある部屋ともどもゾーンメルトと呼ばれるている。高純度鉄の製法に肖っているのだ。

勿論そこで行なわれるのは鉄《廷兼郎》の浮遊帯溶融精製だ。鉄中の不純物をひたすら分離させるように、あの部屋の中では廷兼郎を構成する不純なものが取り除かれる。精神的なものも、身体的なものも、技術的なものも含めて、まっさらにしてくれるのだ。

ここ最近高新技术の習得に力を入れていた廷兼郎だが、そんな事情があっても いや、だからこそ、普段の訓練を疎かにするわけにはいかない。近似正中線の体得は『対抗手段』の、もしくは廷兼郎の生涯を貫く目標となりつつあるのだ。今開発に勤しんでいる新技术さえ、近似正中線の体得をある程度見越してのものと言える。

ゾーンメルトの内壁には、非接触型の感圧センサーと高精度の電磁波計測器、赤外線サーモグラフィに超高感度の集音マイクとカメラなどが搭載してある。それらを通して廷兼郎の状態をマイクロ・マイクロレベルで感知し、その揺らぎを適宜修正していくのだ。

人間という不定形を、データによってはじき出した鋳型に流し込

む作業と言い換えてもいい。

心に澱の如く積もる怠惰、焦慮、欲などの感情。筋肉や骨格、あるいは内臓器官の自立運動。技を身に付ける間に付いた僅かな癖や感覚の齟齬。それら心技体の揺らぎを、ゾーンメルトで遊離させてしまふ。自ずから廷兼郎は定まり、近似正中線の実現へと近づく。

この部屋　ゾーンメルトを、廷兼郎は好いていた。その中は、まるで神社仏閣が醸し出す神域にも等しい荘厳さを有しているからだ。

そこに入った廷兼郎は、もはや廷兼郎ではない。より厳格で緻密で、純粹な構築物として存在する。ただ『武』を顕す現象それ自体になれるかのような妄想が、彼一人の人格を容易に押しつぶし、抹消し尽くしてしまう。

むしろ、それがいい。自分の何もかもを投げ出し、自分に明け渡す感覚。幽体離脱にも匹敵する陶醉感。呪的とさえ言える整然とした昂揚。訓練というよりは、まるで人として、あるいは廷兼郎として、予め決められた高みへと昇っていくような

そう思わせてくれるだけでも、廷兼郎にとっては十分だった。例えその中身が数千数万に及ぶセンサー類の塊に過ぎないとしても、廷兼郎が感じる霊験に不足はない。例えそれが木の塊だろうと、学園都市が誇る最新鋭の技術の結晶であろうと、同じように妄信して有り難がるだけの愚直さを彼は持っている。

ゾーンメルトの隣のブースには、さらに情報を統合するサーバーが存在し、そこに表示されたデータを網丘が解説するのが常だった。初めの数列は99・9867391721。もう一つは99・9990139802。最後に98・9093041457。他にもグライフや英語が並んでいるが、注目すべきはこの三つの数列だった。「アベレージがフォウナインに近くなったわね。マキシマムはファイブナインによく到達した。代わりにミニマムがシングルナインになってしまった」

一番最初の数字が近似正中線の平均値。二番目が最大値。最後に最小値を指す。極論すれば、これが廷兼郎の戦力である。

「アベレージ伸びたけど、ミニマムが下がっちゃいましたね」

「そううまくはいかない。多少の浮き沈みは想定している」

研究者らしいすっぱりとした言い方で、新たに三つのデータを呼び出した。そのどれもがゾーンメルト内の廷兼郎の姿を象っている。黄色や赤や青などの色を滲ませているのがサーモグラフィ。部位ごとに注釈が伸ばされ、そこに並んだ数字を刻々と変化させているのが体重移動計測。そして最後は高感度カメラによる室内の映像。

「腸の辺りが冷えてるわね。そのせいで腹直筋の動きが鈍い」

「あれ？ 身長伸びたかな、これ」

などと言いながら先ほどの廷兼郎を、その本人も交え、三つの映像を重ねたりばらしたりを繰り返して、網丘たちは検討する。

サーモグラフィが表示するのは温度である。とりわけ二人が注目するのは内臓器官と筋肉の温度だ。医療機関でも多く採用されているこの機材はつまり、人体の状態を把握するには最適ということだ。網丘が言ったとおり、廷兼郎の下腹部の辺り、腸のところには赤と僅かな紫が混じっている。青みがかるといことは、その温度が周囲よりも低いということだ。およそ四十度から二十度を計測するように作られたサーモグラフィが言うところの、10のマイナス三乗分の一度である。

そしてデータの通り、温度の低下に廷兼郎の腹直筋が引つ張られ、わずかに猫背となっている。ちょうど廷兼郎の首筋辺りから伸ばされた注釈に表示されている十二桁の内の後ろから七桁が激しく上下する。

高感度カメラだけでは分からないが二つを見比べれば、数字の変動と共に廷兼郎の体が揺れているのを窺い知ることが出来る。距離に換算して、10のマイナス三乗から五乗分の一ミリを行きつ戻りつつしているらしい。

よく見ればその動きに付随して、他の部分の数値も変動を繰り返している。そしてその分だけ、近似正中線の平均値、最大値、最小値が緩やかに浮き沈みを繰り返す。

注釈を伸ばした映像　体重移動計測は、天井、壁、床に埋め込まれた感圧センサーと電磁波計測器によるものだ。床面のは廷兼郎の足裏を最大0.00001ミリ四方に分割し、そこに掛かっている圧力を計測する。この床面センサーが、最も重要な計測器と言えるだろう。壁面や天井には、廷兼郎の僅かな動きによって動いた気流や電磁界を計り、そこから姿勢の揺らぎを割り出す。

例え高感度カメラには見えなくても、電磁界の量を測れば体の揺れなど一目瞭然である。まるで自分の知らないところまで詳らかにされるような映像と数列の数々を、廷兼郎は恍惚とした表情で見入っている。

ゾーンメルト然り、廷兼郎はこのデータも好いていた。これは要するに、自分の成績表なのだ。しかもそれが得意分野で、かつ成長が窺えるとすれば、機嫌が上向きになるのも当然である。

訓練：二

今回の定期測定は、凡そ上々と言える。こうしたデータは網丘によつてまとめられ、学園都市統括理事会へと提出される。それが廷兼郎の、そして『対抗手段』計画の成績となる。こうしたデータを元に来期の予算や方針を決定するのだ。

近似正中線値を重視するのは、それが『対抗手段』計画においてもっとも分かりやすく戦闘を左右する値だからである。

単純なパンチ力と言えば、廷兼郎が出せる最大値のファイブナインの状態でおよそ四百五十キロ。ヘビー級ボクサーの平均的なパンチ力を叩き出すことが可能である。

廷兼郎の体重は現在七十八キロ。ボクシングで言えばライトヘビーに当たることを鑑みれば、十分にハードパンチャーとして通用するだろう。

しかし平均値であるスリーナインでは半分ちかくの二百キロまで落ちる。そして最低値のシングルナインでは百キロ以下となる。

最大値はあくまで瞬間的な最大値に過ぎず、全身を99・999%まで正し、体重移動も非常にスムーズに行なったという前提の、言わば理想値である。実際には相手の体格、位置関係などの条件をさらに加味して変動する。

さらに近似正中線値は、9が一つ増えることに戦闘能力が大きく変動する。動体視力などの視能力。筋肉、骨格、臓器、果ては体液の流動まで把握して行なわれる身体操作と体重移動。過不足ない身体に宿るストレス無き柔軟な精神状態と、それによつて加速と複雑化を得る思考。最大効率で動かされる身体は、余分なエネルギーのロスがなく、持ち前の体力を十二分に発揮できるようになる。

それは姿勢という根本的な部分を司る値であるが故に、あらゆる事項に反映されてしまうのだ。特に姿勢が乱れれば、体重移動もス

ムーズに行なわれず、効果的に自身のエネルギーを相手に伝達することは出来ない。

この戦闘能力の均一化もまた、『対抗手段』計画の課題の一つである。常に同じ成果を出せるように力を均し、戦力の計算をより単純化する。

当然、廷兼郎は未だその境地に至っていない。自分の潜在能力を彼は最大で99.999%しか引き出せないのだ。

ただ、それを引き出した結果としてどのようなことが起きるのか、ということは理解していた。近似正中線の理想的運用を、彼は既に知っていた。

それこそが、廷兼郎の妹 字緒キコだった。彼女の持つレベル0相当の能力『オフティマスタ超最適化』によって99.999999999999%に近いところまで正された人体の運用を、彼は目撃していた。

キコが学園都市から脱走した夜に発生した、舞月外樹との交戦記録が、その分析を可能としてくれた。あまり鮮明には残されていないため、正確な近似正中線値は出せないという前提のもと、網丘はキコの正中線を、トゥエルブラインに非常に近いものであると結論付けた。

人体をマイクロ・マイクロ単位で最適化するだけの、目に見えないような能力。それがもたらすのは、得体の知れない魔術師にさえ拮抗する膨大な武力。人体が到達すべき黄金比。武の正道へと至る、天の羽。

そこへ廷兼郎は、向かっている。妹の跡を追って。

「それじゃ、今日は帰ります」

測定も終わり、時刻は午後七時。夕飯時なのでそろそろ廷兼郎は帰らねばならない。

「待って。その前に少し仕事の話しよう。また依頼が入っている」

網丘はデータを解析しながら、片手間に打ち出したプリントを廷兼郎に押し付けた。

「何です？ また新兵器の評価試験とかですか」

「近いかもしれない。兵器開発を行なっている研究所からの内密の依頼だ」

「内密つて、きな臭いな」

「だが好きだろう？」

「はい。実入りが多そうなので」

一頻り軽口を叩いて、廷兼郎はプリントに目を通した。

曰く、『我が研究所の権益確保』云々、『利害関係者の選別』云

スキルアウト

ステークホルダー

々、『武装無能力集団による悪質な恐喝、重犯罪への発展』云々と

堅苦しい言葉が立て続けに並んでいる。学生の廷兼郎には甚だ読み解きづらい。

「要するに、スキルアウトの壊滅させる、とかですか」

「少し違うわね。研究所の権益を守るために、利害関係者だったスキルアウトを除外することなのだけど」

「何だかピンときません」

「ふむ……」

一旦データの入力をやめた網丘は、他の職員が少ないのを見計らつて、小声で話しかける。

「つまり兵器の横流しだ。噂くらい聞いていないか？」

「へえ。本当だったんですか、その噂」

「そのもみ消しをしるというのさ」

「もみ消し、ですか？」

ぐうつと唸り、廷兼郎は思案する。

もみ消し。洗淨。研究所が金銭目的か、それとも実験目的かは知らないが、兵器を横流ししていた。その証拠を消して欲しいということだ。

しかし廷兼郎は、お世辞にも電子機器に通じているとは言いがたい。未だパソコンの扱いすら危ういのだ。電子的にハッキングしてデータを消すといった手妻を期待されても困る。

相手もそれを承知しているだろう。その上で頼んできているということは、廷兼郎の出来る範囲でのみ消しを期待しているということだ。

「スキルアウトを皆殺し、ということですかねえ？」

のんびりと不穏なことをのたまう廷兼郎は、如何にも乗り気ではない。無能力の学生の集団となると、正直に言って廷兼郎の食指が動かないのだ。

それに風紀委員としての制圧ならまだいいのだが、もみ消すために皆殺しというのは、さすがに良心が痛む。

「だとすれば一大事だな。依頼されているのは口止めだよ」

「口止め？」

「そう、口止め。適度に痛めつけろ、ということ。それだけで彼らの口は鈍る」

ああ、と廷兼郎は呆れた声で呟いた。

もしかすれば横流しされているスキルアウトと研究所の間で、仲違いでも起きたのだろう。その制裁をしるということらしい。警察機構ではなく、不法な権力でもって。

そこで超能力者ほど強力ではなく、かつ隠密裏に動かせる『対抗手段』の廷兼郎に白羽の矢が立ったのだろう。

甚だ不本意で不快だが、文句の言える立場ではない。『対抗手段』計画はそれほど有名な計画でもなく、予算配分も多くはない。こうしたアルバイトで稼がねば、施設の運営や機材の購入に差し支えてしまう。

「僕らをヤクザか何かと勘違いしているんですかね？」

「体のいい使い走りだよ」

「むう、色々と舐められていますねえ。僕といい、スキルアウトとい

い

「そもそもスキルアウトに証拠を渡すような手落ちはしてないだろう。でなければもっと徹底するよ」

「あくまで余興、遊興の域を出ないのか」

「やる気が失せた？」

廷兼郎はこくりと頷き、報告書を網丘に返した。

「そりゃあ、まあ……。これで奮起する奴って、心が歪んでますよ」とはいえ依頼を受けたから、果たしてちょうだい。報告によると銃火器ぐらいしか与えてないって」

「本当かなあ？ スペックは教えてもらえるんですよね」

「全部つてわけにはいかない。表向きは開発中の製品だから。そういう絡みもあるから、見つけたら壊しといて」

「注文が多いですね。それで、如何ほどいただけるの？」

「キャツシユで六百万」

「……嘘でしょう」

神妙に聞き入る廷兼郎を他所に、網丘は話を続ける。

「そのかわり、やはり条件が多いわよ。覚悟しといてね」

「いいえ、少しやる気が出ましたよ。ちょうど買いたいトレーニング器具とか本があったんで」

「明日またミーティングするから、そのときに細かいところを詰めよう。引き止めて悪かったわね」

「それじゃ、失礼します」

新たな任務に期待と落胆をない交ぜに感じながら、廷兼郎は訓練場を後にした。

訓練：三

訓練やミーティングを終えた廷兼郎が家に帰ってきたときには、九時を過ぎていた。いつもならこれから一時間ほどロードワークをするのだが、普段よりも疲れが堪っていたため、彼は早々に寝ることにした。

学園都市での廷兼朗の住まいは学生寮ではなく、『対抗手段』計画名義で網丘が賃貸したマンションの一室だった。

学生一人が住むには広すぎる2LDKの部屋を賃貸したのは、勿論トレーニングを考えてのことである。リビングとウォークインクローゼットを改装し、そこにトレーニング器具や測定器が持ち込まれ、廷兼郎が家で一人でも効果的な訓練が出来るように設定してある。

キッチンを通り過ぎ、寝室に入る。本当の意味で廷兼郎の部屋と言えるのは、ここだけだ。

そこには机と、本棚だけが置いてある。パソコンも一応は置いてあるが、それはこの部屋に置いてある測定器やトレーニング機器のサーバー用なので、廷兼郎の私物ではない。それに彼は元より機械の扱いが絶望的なので、自分でもパソコンを買ってみようという気が起きず、ある種禁欲的な内装となっている。

荷物を置き、今日の授業と訓練の復習をしていると、あつという間に十時近くになってしまっていた。

廷兼郎は押入れから布団を取り出し、フローリングの上に敷いた服も着替えて寝る準備を整えると、本棚から一冊抜き取り、そのまま布団の中に潜り込んだ。

網丘に揃えてもらったものが大半を占めるこの部屋で、本棚とその中身だけは、廷兼郎自身が買い揃えたものだった。

彼の唯一の趣味である古代史趣味を満たしてくれる蔵書を、こうして寝る前に読み進めるのが彼の楽しみだ。

最近では日本のもだけでなく外国の書物にも手を出し始め、翻訳前の歴史小説や新書を和英辞書で訳しながら読み解いている。

今読んでいるのはジェームス・デイレイ著『雄牛の国、アトランティス』である。アトランティス愛好家、いわゆるアトラントローグの間で話題になっていくる学術書ということで、網丘の伝手を頼って取り寄せてもらったものだ。

枕元のライトに照らされる文章を、廷兼郎は自然とにやけながら眺めている。

アトランティスが雄牛を崇めていたことを示唆し、地中海周辺地域に残る雄牛信仰の名残から、アトランティスの存在を浮き彫りにしたその著作は、読んでいくだけで古代のダイナミズムの中に自分を引き込んでくれる。下手な冒険小説よりも余程にスリリングでそそられる。

こうしている時間だけが、戦いから隔離されているような気になる。そしてそれは、廷兼郎の精神の均衡を保つのに絶大な効果を發揮してくれる。

常に戦いの中に身を置けるほど、廷兼郎の精神は堅剛ではない。時にはそこから離れ、休息を取らねばならない。

そして、不安を募らせる。戦っていない自分を鑑みて、廷兼郎は不安を増長させる。戦いから離れらるほど、彼は強くなかった。半端で未熟な精神を入念に整備し、ようやく廷兼郎は戦うことが出来る。

今日は特に、その整備を怠ることは出来ない。明日の夜には、また新しい任務を行なうことになる。

いよいよ文字を追うのがつらくなってきたころ、自然と廷兼郎は眠りについた。

心地よい夜気を口から思い切り吸い込み、それきり顔を黒い布で覆う。

第十学区にある打ち捨てられた倉庫群が、今回の作戦区域である。そこを見て廷兼朗は、以前に白井と戦った廃倉庫を思い出して、今回も似たような状況かもしれない。中には廷兼朗の敵がいて、今からそこに乗り込もうとしている。違うのは準備だけだ。

すでに廷兼朗は心の準備を万端済ませているが、相手はその限りではないだろう。

壁の窓から覗いてみると、多くの若者が屯しているのが伺えた。見えているだけで百人弱。あまり頭を出して覗けないが、おそらく見えていないところにもいるだろう。スキルアウトとしては中々の規模である。だからこそ、廷兼朗は仕事にありつけるのだろう。

危険なス不良グループ スキルアウト 武装無能力者集団の鎮圧。それが今回の仕事である。廷兼朗が風紀委員 ジャジメント であることを鑑みれば至極真つ当な仕事のようにも思えるが、これは風紀委員の業務とはかけ離れたところからの依頼である。

こうして成長したスキルアウトは組織だった行動を取るようになり、学園都市にある研究所から危険な兵器類などを強奪するようになった。それによって超能力者に対抗する力をつけようというのだ。当然、それは強奪行為であるから許すわけにはいかない。風紀委員のほうにも警備員 アンチスキル にも、そのような通達は届いている。

しかし、今回そうした事情はあまり関係ない。単に不良たちに盗まれた兵器を使われるなら、管理不行き届きだけで済むこともあるだろうが、これが研究所から卸されていた場合、話は全く違ってしまふ。その証拠や証言があったりすれば、なおさらだ。意図的に反社会的な行為を補助したとして、警備員ないしそれよりも上流の管理機関によって研究所ごと罰せられる。

そして残念なことに実験という名目で、スキルアウトを利用する研究所というのは存在する。要するに実験費を浮かせられるのだから、その分をさらなる研究に当てられる、と安易に考える研究者が主導となつて兵器の譲渡を行っているのだろう。

無論、それは安易にして浅薄であるため、往々にして何らかの物的証拠が存在する場合もある。今回の廷兼朗の仕事は、研究所がスキルアウトに協力しているという証拠の隠滅、それに伴ったスキルアウトの壊滅が主である。

別段、廷兼朗は研究所の行いを咎める気はない。学園都市の研究機関に、およそまともな人権意識や遵法精神を求めることのほうがおかしいのだと、最近になつて彼も薄々感づき始めていた。

許すつもりもないが、やむを得ないという事情もあるのだろう。ならばこそ証拠を残すような真似はするべきではない。仮にも犯罪行為なのだから、細心の注意を払つて慎重に行うべき事だ。

恐らくは、他の研究所でもやっているからウチが今更初めてもばれやしないだろう、ぐらいの意識だったのかもしれない。そういう甘い考えの尻拭いをさせられるのが、廷兼朗の意識に引つかかる。

仕事に感情を持ち込むのもそれこそ甘いと言われて然るべきなのだろうが、まだ学生であることを鑑みて、棚に上げてもいいだろう。さらには仕事の成功基準が曖昧であることも憂鬱の種だ。

スキルアウトの壊滅と一言に言うが、それは一体どのような状況を指すのだろうか？ 分かりやすく、所属する人間を皆殺しにするのか？ それは厳しいから五割ほどだろうか？ そもそも殺すほどのことだろうか？

今回の場合に研究所が要求しているのは、スキルアウトの運営に差し支える、ないしは現在と比べて相当に弱体化した状態と言い換えられるだろう。

要は不良をやめさせればいいわけだ。そう考えれば、またも真つ

当な仕事に見えてくる。

少し脅してやればいい気もするが、そう易々と廷兼朗の意図が伝わると思えない。ましてや彼らはいわゆる不良である。不良と呼ばれているからといって十把一絡げに悪いのだと決めつけるのは失礼だが、人の言うことを大人しく、そして素直に聞いてくれる人種とは思えない。ましてやこの場合の非は彼らばかりではない。思慮浅く危険な兵器をばらまいた研究所の責もある以上、彼らを一方的に責めるようなこの状況こそが異常なのだ。

珍しく義憤に駆られる廷兼朗だが、一方でそんな自分をさめた心地で見つめてもいる。既に依頼はなされたのだから、廷兼朗にそれを拒む権利はない。

スキルアウト：一

現在は夜の十一時を回ったところだ。しかし倉庫ではまだ若者たちの騒ぎ声が響いている。網丘が調べたところによれば、今日は不良グループの集会というのが開かれているらしい。そうした集まりや決まりを、意外なほど律儀に彼らは守っているのだそうだ。

ある種、社会に反抗しているはずの彼らが自分たちの社会を形成し、それによって自分たちを規定していくのは非常に面白い矛盾だ。縛られたくなくて飛び出したのに、また群れて自らの形を周りとの兼ね合いの中で見つけようとする。

所詮は社会に反旗を翻したのではなく、自分たちに都合の良い環境がほしいのだ。たまたま彼らは社会の本流から外れたところにそれを見つけたただけだ。故に“良からず”などと呼ばれるのだ。

些細な違いだが、確かな違いだ。

「字緒、そろそろ時間よ」

耳に掛けた携帯電話から通信が届く。作戦時間まで待っている間に、どうやら益体のないところまで思考が転がってしまったらしい。

「準備はいい？」

「はい。大人数を非殺傷で制圧ですので、一応は武器を持っていきました」

今回廷兼朗が持参したのは、いわゆる握り短寸武器だった。

腰のベルトに差しておいた短棒を引き抜き、感触を確かめる。杉の木を切り出した棒は、いつもの通り手に吸い付くようにして馴染む。

武器は必ずしも殺傷を目的とした道具ではない。非殺傷で迅速かつ効果的に制圧するために、武器を使用することも時には必要である。『対抗手段』計画は基本的に素手での対応を想定しているが、決して武器の使用を禁止しているわけではない。

「では、開始します」

ちょうど時計の針が十一時半を差したところで、廷兼朗は倉庫の窓を短棒で威勢良く突き破った。

落ちて割れる硝子の欠片がBGMとなり、廷兼朗の登場を彩る。甲高い音響の連続に、さしもの不良たちも呆気を取られてしまっている。

ゆったりと破片を踏み割り、二階の通路に出る。体育館のように両端を囲む形で二階に当たる場所に通路があり、実に広々とした空間である。そこにぎっしりとコンテナが敷き詰められ、不良たちは思い思いの場所に屯っていた。

ケレン味が過ぎる登場だが、注意を引きつけるためには仕方がない。今回は夜陰に紛れての闇討ちとは趣が異なるのだ。

柵を越えて下のコンテナに着地すると、丁度その端に座っていた男がおもむろに立ち上がった。

「おい、何だてめえは！」

他はまだ遠巻きに眺めているのが殆どだ。むしろ状況をよく理解できず、腑に落ちないだけの者も多いだろう。

「がなりたてようとすする男を手で制し、横合いからもう一人現れる。それで、何しにきたんだ？ あんたは」

今の廷兼朗と負けず劣らず黒尽くめの男は、いかにも親しげな軽い調子で尋ねてくる。

「いきなりで悪いんだけど、解散してくれないかな？」

「誰からの命令だ？ 風紀委員や警備員ジャケットじゃないだろう？」

確かに風紀委員や警備員の正式な活動ならば、一人で行動することはない。この時点で廷兼朗が風紀委員や警備員の管理下で動いている可能性はなくなると察したのだろう。

なかなか話の通じる相手が出てきてくれて、廷兼朗はとりあえず一息ついた。

「まあ、似たようなものかな」

廷兼朗の視線を男が辿る。

「なるほど。あんたも大変だな」

「君らほどじゃないさ」

その言葉が終わるか終わらぬかの内に、銀光が暗闇に跳ねる。

バタフライナイフが開く前に、廷兼朗が男の右腕を左手で押さえ、残った右拳を胸へまっすぐに叩き込んだ。手首を返してナイフをきつちり奪い、男をそのままコンテナの上に伸べる。

静かに、そして短く、戦端は切って落とされた。

「ふざけんなコラア！」

先ほど話しかけてきた男が、拳を大きく振りかぶる。その腰に軽く前蹴りをかますと、男はくるりと回りながら後ろに下がっていく。振りかぶったまさにその瞬間、後ろに荷重の掛かった状態で前から押されれば、重心がさらに後ろへ傾くのは道理である。男はそのままコンテナの端でバランスを保てず、落ちていつてしまった。

頭から落ちてはしないかと廷兼朗が心配していると、視界の端で何かが掠めた。廷兼朗はそちらに顔を向けもせず、しゃがみ込みながら水面蹴りで相手の足を刈る。

「あだっ！」

痛がっている間に廷兼朗は男の背中に足を当てがい、持ち上げるようにしてコンテナから押し出した。肩口から落ちたのを見て、とりあえず安心する。コンテナの高さはせいぜい二、三メートルだ。頭から落ちなければそう大した怪我にはならない。

もう一人が廷兼朗の後ろから飛びかかろうと走ってくる。このまま避ければ勢い余って、頭からコンクリートの床に落ちてしまう。かといって何もしなければ押さえられてしまう。

廷兼朗は男の胸板を蹴り付けると、そのまま高々と放物線を描いて飛び上がった。男の突進を止め、かつ勢いを利用して通路を挟んだ向こう側のコンテナまで飛び退さる。

人間を足場にした絶妙の回避を見て、ようやく彼らは自分たちがどのような人間を相手にしているのかということに思いを巡らせるようになった。

「ぶ、武器だ！ あれ出せ！」

ようやく慌てだした不良たちが、いそいそと近くのコンテナを漁る。恐らくは研究所から譲渡された兵器だろう。

がちゃがちゃとかまびすしい音を立てて取り出されたのは、二挺で一組のライフルである。

コードネーム『玩具箱』トイボックス。オモチャの兵隊トイソルジャーのカスタム案の一つである。トイソルジャー二挺の連結と組み換えによって、あらゆる状況に対応することを想定した実験兵器。

二挺そのまま並べれば制圧射撃。前後に連結させ、銃身を延長すれば精密射撃。銃身と機関部を組み替えれば散弾銃や榴弾砲としての運用も可能とする、

一人当たり二挺のカービン銃を向けられて、廷兼郎は大人しくコンテナの後ろへ下がった。

「この野郎！」

それでも不良たちは威嚇とばかりに引き金を引く。土砂降りの雨に見舞われたような大音響のなか、廷兼郎は困った思いで肩を竦めた。このような密室で幾つもの銃を放てば、おのずと結果は見えてくるというのに

「うぎゃあああああ！」

程なく、劈く悲鳴が倉庫を渡り、銃声は示し合わせたようにぴたりと静まった。

コンテナのような固い物に銃口を向けるのだから、跳弾は当然想定するべきであるのだが、そのような気遣いをスキルアウトの彼らに求めるのは酷だったのだろう。

撃たれた方も撃った方もかわいそうだが、そこに付け入るのも

カウンターメジャー
『対抗手段』の基本戦略である。

コンテナの脇から飛び出した際の一瞥で銃器を所持している者たちの位置関係を把握。おおよそ一列に並んでいた彼らの左側から襲い掛かる。

すぐさま最寄の男の顎を右平拳で打ち抜き、トイボックスをその手から奪り取る。ストックを握り、こちらに気がついた女の頭に叩きつける。

寸前にかざされたトイボックスごと、その女を薙ぎ払う。

「左だ、こつちだ！」

「早くぶつ殺せ！」

気がついた彼らが続々と殺到するものの、ほぼ一列に並んでいたために、前の人間が邪魔で射撃が出来ずにいた。

スキルアウトたちがてこずっている間に、廷兼郎は一人一人相手にしていく。

「うおおおお」

何か自身を奮い立たせるように叫びながら向けられた銃口を、ゆるりとダッキングして避け、一拍遅れて下を向いた男の顔を、伸び上がりざまの右フックで真横に突き飛ばす。

いかに学園都市の最新技術の粋を凝らしても、使い人間がその扱いを心得ていなければ、あまり脅威とはなり得ない。逆に無手でもその扱いを心得ているならば、出し抜くことも不可能ではない。

スキルアウト：二

ゆったりと首を巡らせて辺りを窺うと、立っている人間はいなかった。意識のあるなしが違っただけでもスキルアウトの面々は一様に倉庫の冷たい床に寝転がっている。

一先ず呼吸を置いて、廷兼郎は調息する。

銃を持ち出されたときは冷や汗をかいたが、それを覗けば至極安全に事は運んだ。命に関わる重傷者は皆無。この人数を相手にして、それは奇跡的な数字である。

ギネスに登録されてもいいくらいだと得意になっている廷兼郎は、壊し忘れのトイボックスを踏み砕いて回る。

それが終われば、このまま居座る理由も無い。とりあえず救急車と警備員へ連絡するために、廷兼郎は携帯を耳にかけながら倉庫の引き戸に手を掛け、そこで動きを止めた。

首筋の悪寒に逆らわず、即座に右の踵を跳ね上げた。廷兼郎の耳元を、何かが力強く通り過ぎる。

踵にぐつと堅いものが当たり、そのまま薙ぎ倒す。しかし手応えとしては腕で防御されたものだった。廷兼郎は僅かに下がって体勢を整えて構える。

微かな月明かりを頼りに気配を探ると、そこには最初に殴り倒したはずの黒尽くめの男が立っていた。

「死んだふりか。すっかりだまされたよ」

わざと飄げた口で言うのと、男はふつと軽く笑った。
「きつちり後ろ回し叩き込んでおいて、よく言うぜ」

男の廷兼郎に劣らず、軽い調子であった。その最中につつと、暖かに耳を伝う。確かめるまでもなく、それは血であった。廷兼郎はそれを拭い、ちろりと舌で舐めあげた

どうやら男が後ろ手に隠しているのは、刃物の類か。

先ほどの体捌きを見る分には、相当体術に自信があるとみていいだろう。最初に殴り倒されたことは、三味線を弾いていたらしいので当てにならない。

右手に持った短棒を中段に置き、足運びを右構えにする。

互いに機先を制しかねて、じりじりと僅かに立ち位置を変えるばかりの膠着が続く。男は常に武器を後ろに隠し、廷兼朗の短棒はびたりと男に正中に据えられている。

決め手無し、となれば、動かねば状況を制することはできない。

すつと床を舐めるような足運びで、廷兼朗が前に出る。男はその動きに目を見張るが、すでに間合いは短棒のもの。下からの払い打ちで男の顔面を狙う。

そのとき、廷兼朗の脇腹が頭より、心よりも迅速に反応した。びくりと縮こまった腕は短棒を外し、二人の腕が錯綜する。

短棒の影になる位置から、男は左手を突き出していた。その掌には、いつの間にか持ち変えたのか、先ほど廷兼朗の側頭を掠めた得物が握られていた。

互いに会心の一撃を外し、即座に後ろへ下がる。二人とも動揺を隠せなかったが、その程度を論ずれば、廷兼朗の方が上であった。

男が持っていた武器は、最初に持ち出していたバタフライナイフとは似ても似つかない代物であった。鏃のように尖った刃と、柄には羽根が三カ所から生えていた。

掌に収まる槍。投擲にて放つ矢。日本が生み出した握り短寸武器の傑作。

「打根、とはな。恐れ入る」

正直な感想が、廷兼朗の口から漏れていた。

男も、自分の武器を言い当てられようとは思わなかったのだろう。僅か上擦った声で答える。

「勉強してるな。こんなの、普通は分からんぜ」

「それを言うなら、普通は使わないだろ」

男はまた打根を後ろ手に隠し、牽制するように左手を突き出す。廷兼朗はその手を短棒で払いに行く。

男は左手を引きながら踏み込んで、右脚を跳ね上げる。上足蹴りが低まった廷兼朗の頭を掠めるが、構わず踏み込んだ。狙いは当然、ちよと目の高さにある股間である。

間もなく左の掌底をまっすぐ突き出し、柔らかな鞞丸を掌が押しつぶし、男が苦悶の声を上げて倒れ込んだ。

しかしそれは、廷兼朗も同じであった。

その左肩には、大振りのダーツのようなもの　　打根が突き刺さっていた。

しゃがんだ態勢だったので把握できなかったが、恐らくは右の蹴りで体を回し、相手を下段に誘うと同時に遠心をつけて近距離から打根を投げ放っていたのだろう。

「ぐ、ぬあ！」

服を通してさえ返しまで深く刺さった打根を、周りの肉ごと抉り取る。金属光に反応して左肩を窄めたので、顔面に刺さることがなかっただけでも幸いである。肉のこびりついた打根を上着にしまい込み、廷兼朗は男の様子を確認するために近づく。

鞞丸を押しただけなので死んではいないだろう。問題は、すぐに立ち上がってこれるかどうかだ。

スキルアウトに所属しているものには、武器兵器に精通しているものが少なくない。超能力に対抗するには、やはりそうしたものを頼むのが安全であり、手っとり早い。だが、まさか打根などという武器まで扱えるとは、廷兼朗も考えさえしなかった。

彼だけが特別なのか、それともスキルアウトでそうしたものが流っているのかは分からないが、率直に言ってこんな武器で超能力者に立ち向かうなど正気の沙汰ではない。

「俺が言えることでも、ないか」

血の溢れ出す肩の傷を、とりあえずは布で縛る。ぬめる血を払いながら男の顔がのぞき込めるほどまで近づいたとき、廷兼郎の顔面を何かが射貫いた。

「はっ！」

遅れて響いたかけ声とともに、激しく床を滑り、廷兼郎が後方へ退く。

すかさず廷兼郎がいた位置に、誰かが降り立つ。着物を着崩したような前衛的服装が、狭い窓から入る月光で僅かに輪郭を浮かび上がらせる。街中であつたなら、目は引くものの近づきたくはない類の人種だ。

「半蔵様、大丈夫ですか？」

廷兼郎は、自分の手に握られたものをしげしげと見つめる。それは毬栗いぐりを扁平に裁断したような形をした、いわゆる車手裏剣と呼ばれる投擲武器である。

打根に手裏剣と、妙に時代がかった武器の登場に、廷兼郎は訝しい思いを禁じえなかった。

「勝手に出てくるな。郭」

忌みしくつぶやいた半蔵の手には、またも打根が握られていた。

郭が手裏剣を放っていないければ、かわりにこちらが廷兼郎に放たれていたことだろう。

「ていうか、何なんですか？ この男」

「研究所からの回し者だ。今さら俺たちが邪魔になつたらしい」

何なんだというは、廷兼郎も問いたいところである。目の前の男女が放つ雰囲気は、若者が有するものとは一戦を画しているような気がする。

暗がりでも分かるほどの恨めしい視線が、廷兼郎に向けられている。そこには廷兼郎にも分かりかねるほど感情が込められていた。むしろそのおかげで、先ほどの手裏剣打ちを防ぎ得たと言えるだろ

う。明確な殺気に掛け声もつけてくれるなら、この暗がりでも比較的容易に回避できる。

「スキルアウトを潰す気でしようけど、そうはいきませんからね」

「ここで息巻かれても困るな。俺は依頼されただけだから。研究所に一矢報いたいのなら、相手は俺じゃない」

「なら、見逃してくれるのか？」

「そうだな。見逃そう。だから俺に背中を見せる」

当然、二人は背中など見せもせず、得物を取って構える。廷兼朗も避けたときの姿勢のまま、ゆっくりと地に伏せていく。

四足の型。天羽根流の中では最速を誇る遊撃の構えである。

「あんだ、半蔵っていうのか？」

「……それが、どうした？」

若干気に触ったのか、軽薄な調子が少しばかり影を潜める。それを弄うように、廷兼朗は低まった体をゆっくりと巡らし、暗がりへと逃げていく。

「いやなに、俺も忍術を少し齧っていてねえ。半蔵なんて聞くと…

…なあ？ 期待しちまうのが、人情じゃないか」

「知るか。勝手に言ってる」

「そうかい。ぜひとも見たいねえ、服部半蔵の槍捌き。」

徳川殿は良い人持ちよ。服部半蔵、鬼半蔵。渡部半蔵、槍半蔵。

渥美源吾は首切源吾ってか」

戯れ歌の終わる頃、廷兼朗のすっかり闇の中へと姿を隠しきっていた。

「さあさ、鬼半蔵。得物が打根でも槍となれば十分だろう。それとも六尺槍じゃないと不満かい？」

「ぐだぐだ抜かしてねえで、仕掛けたらどうなんだ？」

「それじゃあお言葉に甘えて、忍術合戦といこうじゃないか」

さも嬉しそうな声が、暗い帳に木霊する。不良たちの呻きを満たした倉庫のなかで、再び戦端が開かれていった。

スキルアウト：三

最初の一撃で決めるつもりでいた半蔵だったが、外した時点で離脱する機会を失っていた。今のところ相手に超能力らしいもの行使は見られないが、逃がす素振りも感じられない。郭が時間を稼いでくれたおかげで金的のダメージは抜けてきているが、若干鈍るの
は否めない。

彼を追い返すか、ここから逃げるためには、郭と二人で追いつめていく戦法が吉か。しかし得物を持った人間二人を相手に、この落ち着きようが不気味と言えれば不気味だ。

忍術と、彼は言っていた。そのうえ自分も忍者だと名乗り、忍術合戦をしようなどのたまった。

とにかく得体が知れない。研究所から派遣されたらしいということ以外、何も知れていない。より情報が欲しいところだが、それは前に出ない限りは得られない。

そうこう考えているうちに、男の体はコンテナの影に溶け込んでいく。夜戦使用と思われる黒基調の服装で、さらに低く屈まれてはたまらない。

半蔵は郭に目配せすると、心得た彼女は横に流れて大きく回り込もうとする。そして半蔵も構えを崩さず、男との間合いを詰めに掛かる。

かつんと、硬い何かか聞こえた。

瞬間、身を竦ませた半蔵はとにかく後ろへ下がった。その目の前を、空間ごと削ぐような勢いで黒い物体が通り過ぎる。

あまりの速度に確認が困難だったが、どうやら真下から蹴りを放たれたらしい。

飛び上がり様の二段蹴りが、額を熱く焼く。

最初に小石か何かで音を立て、気を逸らしてから奇襲。確かに

忍術の中にはこのような術理も存在する。そこに思い至り、単に何かを投げた音なのだと気づかなければ、確実に顎を割られていた。忍術合戦を所望したのは、どうやらでまかせではなかったらしい。

僅かに削がれた額から滴る血を拭う暇などない。まだ相手の体が空中に残っているうちに、半蔵は打根を突き出して体ごとぶつかった。足がかりのない空中で受ければ、当然態勢を崩す。打ち根の刃が外れても、不安定な状態で落とせばその後の展開を優位に進められる。

そのような思惑が、再び競りあがる男の脛によって妨害された。

てつきり腕で防ぎに来るものと思っていた半蔵は、この時点で動揺を呈した。

男は二段蹴りを放った後で、さらに足を持ち上げ、半蔵の右腕を体の外へと追いやってしまった。

類稀なる平衡感覚と、全身をバネ仕掛けの如くに操作しなければ、このような所業は行なえない。

左脛で弾かれた右腕は即座に左手で捕獲さえ、そこでようやく落下し始めた男の体に、半蔵が引き込まれる形となった。

男の背が床に突いた瞬間、左足が半蔵の右脇を蹴り上げた。引き込まれ、態勢が前のめりになったところへ、さらに重心をぐらつかせる衝撃に、とうとう半蔵の足は床から離れる。

それでもなお、手はある。

右手を防がれた時点で、染み付いた癖が半蔵の手にさらなる打根を握らせていた。捉えられているのは右手のみである。引き込まれる態勢で不安定だが、だからこそ上から刃を押し付けることが出来る。

「ぬう！」

自由な左手に打根を携え、男の顔面の真上にかざす。

互いの顔が、目が、重なる。突き刺そうとしている半蔵のことと、

下から見上げている。

その顔が、衝撃に眩む。

男の右膝が、半蔵の顔面に突き刺さっていた。男の足はそれに留まらず、更に伸展して半蔵の体に宛がうと、そのまま巴投げの要領で投げ飛ばしてしまった。

「半蔵様！」

そこへ運悪く居合わせた郭が、半蔵の体を受け止めきれずにくずおれた。二人折り重なるようにして倒れながら、半蔵は一種、感動にも似た心地を味わっていた。

二段蹴りを放たれてからの数秒ほどの攻防は、これまでのものに増して濃密なものであった。それがどこか爽快な気をもたらす。

打根による突き刺しを遮った膝蹴りは、明らかに半蔵の攻めに反応してのものであった。あの技の最中にさえ、相手が攻撃する隙を目敏く見出していたのである。

そのうえ投げた先には、郭がいた。ほぼ背後の死角であったというのに、そこにまで気を巡らす余裕があったということか。

いや、そもそも二段蹴りの隙を突かせて引き込み、投げ落とすその技術。恐らく本来ならばあそこで投げず、腕を引き込んだ時点で捻じ折り、押えながら首を拉ぐなりするのだろう。

情けを掛けられている。現れたときから、それは察せられた。誰も重傷を負わぬように留め、銃を持ち出されてさえ殺さずに制している。研究所からの依頼がそのようなものなだろう。単なる示威行為に留めるようにと。

そのような不利や縛りを被って、この男はやってきたのだと思うと、敵ながらに同情さずにいられなくなる。

それでもこちらに負けてやる事情はない。半蔵とて、スキルアウトをまとめあげるといふ使命を自身に課した。それを叶えるためなら、目の前の男を踏みにじってもいいと思える。

だがそれは、相手とて同じなのだ。彼とて譲れぬところを押し付

けて、ここへやってきているのだ。情けは掛けても、同情はしない。ぶち殺すのではなく、ぶちのめす。それも、徹底的に。

尻餅をついている郭の肩ごと、斧のような下段回し蹴りで薙ぎ払う。攻撃自体はテレフォンであったため郭も防御の姿勢は取っていたが、まるで問題にならない勢いで引っこ抜かれ、頭からコンテナの壁へと激突した。

今しがた半蔵の上を通り過ぎた足が、高く翻って突き立てられる。その一瞬、半蔵は堪らなくこの男の名を問いたくなったが、すぐに口を噤み、顔面を腕で覆った。

この男と交わすべきことは、馴れ合うことではないし、自分がすべきことは、ただ生き残ることだ。スキルアウトのために高角度からの踵落としが、半蔵の腹部を直撃した。

ゆっくりと息吹いて残心し、廷兼郎は半蔵を見下ろす。

一応は加減していたが、うまい具合に気絶してくれた。郭と呼ばれていた女性も、動き出す様子はない。

打根なんぞを持ち出したり、半蔵などと呼ばれたときには驚きはしたが、だからといって何もやることは変わらない。まさか廷兼郎も本当に忍術合戦を繰り広げようなどと思っていたわけではない。強いて言えば、そのように言ってみせることが忍術だった。

五車の術といい、人間の喜怒哀楽に恐怖を足した五つの感情を操るという忍術である。

多少は忍術とやらを考慮させ、動きを鈍らせたならそれで十分である。言葉だけで相手の動きが一秒の何分の一でも止まれば、それは値千金の空白となる。

しかし、これでよかったのだろうか。全員を打ち倒してもなお、廷兼郎は思い悩んでいた。

不良とはいえ、彼らはまだ未成年だ。確かに危険な兵器を運用していたのだろうが、それでも更正の道を示すのが、学業というものではないのか。子供が学ぶべきことを学ばせるのは、大人の義務だ。受け取らない子供が悪いのではない。受け取らせない大人の怠慢でしかないのだ。

心の中で吐き出す正論を、また違う部分が冷めた心地で聞いている。

人を殺せる力を持ったなら、子供であろうが大人であろうが、殺されて然るべきだ。ましてやそれを他人に向けたなら、何をどうされようと文句は言えないし、聞く必要もない。

実際に幾つもの銃を向けられた廷兼郎には、それがよく分かる。だがそれでも、同じ年頃の人間を打ちのめしていくのは、必ずしも心地よいことばかりではない。

それを言うなら、さながら蠱毒を作るための毒虫のように未成年同士を戦わせ、飼慣らす学園都市という機構自体が

「情けない。このくらいで、動揺して……」

後味の悪い仕事に、辟易したのは認める。だがそれをいつまでも引きずるのはあまりに女々しい上、見るに堪えない。

仕置きは完了し、横流しされた兵器も壊しつくした。給料分はこなししてみせた。身分も割れていない。もはやこのように陰鬱な場所に陣取っている必要もない。

廷兼郎は今度こそ倉庫の引き戸を開け、淀みない夜気を大きく吸い込んだ。夜戦使用の黒服のまま深呼吸をすると、影ごと自分の中に入ってきて、そのまま何もかも黒く、虚ろになっていく気がする。そこへ押し寄せる、低く地を這うようにして唸る音。すんと鼻を鳴らし、廷兼郎は音のほうを見遣る。

廷兼郎の神経が、全身を冷ややかに伝わっていく。まだ戦いの火照りを残した体が、確かめるまでもなく教えてくれる。

何かが、来る。

もはや唸りだけではない。コンクリートの床が悲鳴を上げるほどの地響きが届いてくる。

我知らず、廷兼郎は笑みを零していた。実際、笑けてくるような状況かもしれない。自分の頭上を遙かに越える人形が、こちらを覗きこんでいるのだから

にやついた目で、月夜に生える白い人形を眇める。

目算、約四メートル。恐らくは駆動鎧パワードスーツの一種。通常の着装するタイプではなく、搭乗型の可能性が高い。外装は少なく、所々に駆動系の内部が見える。

一步踏みしめるたびに、心地よく腹を揺する。駆動音が驚くほど滑らかだ。余計な武装を省き、純粹に駆動するためだけの体はやはりというべきか、人体に驚くほど近い。

「ようやく、ようやくなんだ、スキルアウトを、立て直せるんだ」
オープンになっているマイクから、声が聞こえる。やはり搭乗型のような。その口ぶりから察するにスキルアウトの仕留め残したのか。そしてこの、駆動鎧は

「邪魔……邪魔、するなよおお！」

振りかぶった拳が、廷兼郎の目の前に突き刺さる。彼が立っている部分まで、同心円上のひびが走り回る。

十中八九、研究所の試作機。エイミングさえまともにも出来ていない。とはいえそれは、中のスキルアウトに由来するのもかもしれない。もはやそんなことは、どうでもよかった。ただここに、このタイミングで現れてくれたことが、嬉しかった。

「そうだな、そうだよなあ。俺も、もう……」

とつくに、学園都市の一員だったんだ。

その法外な馬力で、何もかもを浚って欲しい。動揺も、憤慨も、憐憫も、欣快も、全部一緒くたにして薙ぎ払ってしまっただけで欲しい。

そうすれば、何も考えずに、戦っていられる。加減なんかしてい

られない。正真の戦いに浸れる。

スキルアウト：四

さらに振るわれる腕を下がって避け、廷兼朗は駆動鎧パワードスーツと距離を取る。大型車両が通れるよう広めに取られた車道が、灰色の体に塞がれている。中身の見えている関節部以外はのつぺりとした灰色の皮膚に覆われ、遠目にはボディスーツに身を包んだ人間としか見えな
い。

顔面には、磨き上げられた半透明の仮面が張られ、その奥では電子機器らしき煌めきが伺える。

二発目を放つてから、巨像は鳴りを潜めていた。先ほどの豪快なある意味で稚拙な殴打を鑑みると、まだ操縦者の習熟が完了していないのだろう。

それも当然といえば当然だ。あの特徴的な外観は、兵器開発に関しては殆ど門外漢の廷兼朗でも、実用重視ではないことが見て取れる。非合法的な横流し行為に、習熟訓練などのアフターサービスまで研究所が用意しているなどと、今さら夢想するにも値しない。むしろデータ収集と並行して習熟に必要な訓練内容を考える、くらいの心構えなのだろう。

中身が素人であるなら、あるいはことのほか早々に片づけられるかも知れない。いつまでもアクチュエーターを唸らせるばかりの相手に痺れを切らし、廷兼朗は全速力で無造作に間合いを詰めに行く。廷兼朗の動きに反応してか、駆動鎧の体がびくりと跳ねる。しかしその動きはぎこちなく、各部位の連携さえまともに機能していないことが窺えた。

懐を取れる。そう確信した廷兼朗の耳が、突然なにかに貫かれた。思わず立ち止まり、はっと顔を押しさえるほどの衝撃。その後には届いたのは、体ごと押し返す熱気にも似た風圧。

視界が灰色一色に染まり、脳髓が限界まで引き絞られる。

「おおあつ！」

懐から短棒を抜きざま、眼前を払いつつ体を右横に逃がす。短棒ごと左腕が持つていかれる激痛も束の間、さらなる轟音が廷兼朗の体を吹き飛ばした。

音響、衝撃、浮遊感。それぞれを別個に感じるほどの切迫。いずれもまだ自分が生きていることの証だが、それを喜ぶ意識は、叩きつけられた壁によってどこかに放り出されてしまった。

たゆたう感覚だけがある。体は、とろけてしまったみたいに危うい。すり潰され、引き伸ばされた心が浮いている。

不良相手、遊興程度と侮り、あまつさえ戦いに浸るなどと嘯いた結果がこれだ。

こんな様で、超能力者など倒せるものか。妹を、殺せるものか。ただのつまらない人間にしか過ぎなくせに、武術を鼻にかけ、他人をあしらって悦に入る。

「違う！」

反響する言葉に怒罵を浴びせかけても、それは跳ね返って自身が被る。徹頭徹尾、ここは己の頭の中なのだ。

つまり違うのは自分自身。自分の行い、考えが、違ってしまったているのだ。

違う。違う。違う。自分の声が自分に返り、染み渡って通り過ぎる。とにかく違うのに、何が違うのかわからない。それが間違っているのかも、自分には知れない。

だが、声の一つ一つが、己の輪郭を露とする。体を過ぎるたびに心の在り様が浮かび上がる。

明らかにしなければならぬ。超能力者を倒せるのか、妹を殺せるのか、何もかも明らかにするには

目を見開いたとき、廷兼朗は息も出来なかった。ただ、自分の体の隅々へと神経を張り巡らす。

時間にして数瞬に過ぎなくても、感覚の失せていた当人にとっては無限に等しい空漠からの帰還である。

その間、体が弛緩の限りを尽くしていたことに、廷兼朗の心胆は縮み上がっていた。そしてとっさに左腕を確かめる。形を残しているどころか、短棒も健在である。しかしその感覚は危うく、未だに左腕が付いているのかと、目で見ても重ねて訊ねたくなる。

とりあえずは痺れきった左腕から短棒を受け取り、右腕に持ち変える。

目の前には、駆動鎧の背中が見えている。その巨体が頭から倉庫のシャッターに突っ込んで横たわっていた。そのまま燃料を使い果たしたように、身じろぎひとつ起こさない。だが雌伏する獣に似た唸りが、その体から発せられている。

今も耳鳴りを起こしている耳孔を押さえ、最初に被ったものを思い出していた。

最初に廷兼朗の襲ったのは、このモーター音だった。限界までスロットルを絞られたモーターは怪鳥の嘶きを上げ、彼の耳を貫いていた。

その後には襲った衝撃にはさすがに気づき、即座に駆動鎧の体を短棒の抜き付けで弾くもそのまま掠められ、煽られた拍子に後頭部を倉庫の壁へ強かに打ちつける羽目になった。

動揺も憤慨も、何もかも浚ってほしいなどと、戯れ言も甚だしい。余裕など、端からなかったのだ。たった一機の不出来な人形を持ち出されただけで揺らぐ、それが廷兼朗の武なのだ。

いっそ、ここで思い切り喘いでみせたい。何より自分が、喘ぎ嘆く自分を見てやりたい。

だが、そんなことは叶わない。誰も廷兼朗に、そんな暇を与えてはくれない。

寝そべっていた駆動鎧が、その体勢のまま飛び上がる。人間で言うところの背筋を使い、跳ねてみせたのだ。

体を捻転させ、着地した駆動鎧は四つん這いとなっていた。股関節が異常なほど広がり、センサー類を搭載した能面が、廷兼朗と同じ目線になつてのぞき込んでくる。

いびつに歪んだ五体は、それが人体を大きく逸脱しつつあることを伝える。一応は手足一揃いの見た目を裏切つて、古代生物が蘇つたような威容。

ありあまるトルクを完全に運用しようとなれば、二足である必要など皆無。そして攻撃はそのトルクを集中しての突進で事足りる。マニピレーターに拘る必要もない。

動源の嘶きが、さらに高まる。雷鳴を直近に落とされた爆音に、廷兼郎の体が包まれる。

「うおおおおあああああつー！」

甲高く引き裂くような響きに呼応してか、廷兼郎もまた猛り叫ぶ自分を押し潰そうとする駆動鎧というよりは、押し潰されようとしている自分自身を、むしろこちらで叩き潰そうとする危うい果敢さ。その勢いを湛えた体が、矢のごとく駆動鎧の顔面へと突っ込んだ。車に跳ねつけられた石の軽さで、廷兼郎の体は上方へ飛ばされてしまった。

またも駆動鎧が別の倉庫の壁を砕く中、夜空に飛ぶ廷兼郎が激しく回転する。その体が立ち並ぶ倉庫の一つに激突すると思われたそのとき、ふわりと、たおやかとさえ言えそうな速度でその身が沈み、屋根の上へとへばり付いていた。

やがて面を上げ、眼下の駆動鎧を窺う。そしてゆっくりと、自身の手足の所在を確かめる。

二度目は、ない。既に駆動の予兆としてのモーター音は体で覚えさせられた。それさえ捉えれば先ほどに倍する速度で事前に動ける。

あの駆動鎧を避け、さらには打とうと言つのなら、こちらも四足を付いて這うよりほかない。

天羽根流、四足の型。奇しくも同じ格好をすることになった一人と一体は、倉庫の上と下に分かれて這いずる。

むしろ見下ろす形の廷兼郎だが、既に生きた心地というものが体から抜け落ちていた。

突撃するや否や体を反転させ、人体でも丈夫な背面を使つてのいなしを敢行。鏡のように磨き上げられた駆動鎧の顔面は摩擦係数が少なく、上手く角度をつけたことで空中へと投げ出してもらえた。

しかし全くの無傷などと、虫のいい話は戦いの最中に落ちてはいない。僅かでも突入角度が狂えば体を微塵に引き裂かれるという確信のものとで行なわれた回避は、心魂の限りを絞りつくす結果となった。そして曲がりなりにも自動車の衝突事故にも等しい衝撃を受けた背中からは、擦過されたときの摩擦熱が伝わり、じりじりとも皮膚を炙っている。

二度いなしただけでこの削がれ様。勝てる気がしない。打てる機がない。逃げる足がない。抑える力がない。

絶望の聲が、体中を血に変わって巡り巡る。その度に、何かが熱く滾る。

倒したい。殴りたい。蹴りたい。挫きたい。投げ落したい。殺し壊してしまいたい。

(そうだ、そうだ……)

出来はしない。届きはしない。そう思うたびに、確信し、もっともらしいことを並べ立てるごとに、武は漲る。

こういふものと対するために、こういふものを制するために、俺の武はある。そう確信できるだけの戦いを持つことが出来たのならば、あとは揮うのみだと腑に落とせる。

駆動鎧：一

モーター音が高まり、パワードスーツ駆動鎧の体が飛び上がる。三階建てほどもある倉庫を越え、廷兼朗の視界から月光を覆い隠した。

四肢を広げて飛びかかるばかりの駆動鎧を、こちらも四肢を一拳に伸展させて後方に体を引き抜く。

屋根を拉ぎながら駆動鎧がしがみつくと、てっきり屋根をぶち抜いて沈むものと思っていたが、廷兼朗の予想よりも駆動鎧の質量は軽いのかも知れない。

機と見た廷兼朗は駆動鎧ののっぺりとした顔面に近づくと、四肢を使って飛び上がり、低空で回転しながら右の足裏を叩きつけた。疾走の姿勢と殆ど変わらぬ高さでの飛び蹴りは、勢いを減衰させず相手に伝達する。

人間一人の運動エネルギーを足裏一つに集約されて被った駆動鎧の顔面が、もがき苦しむようにして明滅する。今さら払うような腕を、顔面をさらに蹴って廷兼朗が避ける。その時点で支えを少なくした駆動鎧は、とうとう屋根をぶち抜いて倉庫の中へと沈んでいった。

コンテナにでも叩きつけられたのだろう。鉄骨の押し潰される耳障りな音が長い間鳴り止まずにいた。

それを聞き届けることなく、廷兼朗は隣の倉庫に飛び移っていた。一拍ほど置いて、大穴を空けた屋根がさらに破られ、中からはやはりというべきか、灰色の巨像が這い出てくる。

動きはこれまでに輪をかけてぎこちなく、あまり出力の出ている様子なのに、アクチュエーターの駆動音が甲高く鳴り渡る。

「お前、何なんだ、お前！」

オーブンスピーカーからがなり立てる若い声に、廷兼朗は立ち上がり、如何にも余裕を称えた微笑を返した。学園都市で開発されたカメラアイなら、高解像度で彼の表情を搭乗者に見せつけてくれる

ことだろう。

搭乗者の有り余る激情に比例するのか、我が身を引き裂かんばかりに関節が震え上がる。

「ビッグスパイダーがなくなって、ようやく、ようやく立て直せるところだったんだ」

「へえ、そうかい。残念ですねえ。研究所の使い走りをやらされて、要らなくなったら捨てられる」

「お前だって、使い走りだろうが！」

「いやいや、君らは気高い野良犬だけど、私は卑しい学園都市の犬なんだ。一緒にされるのは心外だろう？」

「ざけんな！ くそが！ ふざけんなよ！ マジぶっ殺してやんぞてめえ！」

「チンピラの台詞つてのは、ほんと一本調子だよな。そういうのは喚くんじゃないんだ。耳元で囁かないと」

「うっせえ！ てめえ、丸腰のくせに粹がつてんじゃねえぞ」

「だからさあ、そういうのは、俺に触ってから言え。というか丸腰じゃない。棒が一本あるよ」

「うっせえ。うっせえよ。何なんだよ、くそ、くそが、ちくしょうがああああああああ！」

びくりと、廷兼郎は顔を顰める。これまでの脅しとは一線を画する音程。有体に言えば、発している本人の心身を疑りたくもなるような垣根なしの悲鳴である。

「あが、が、がぐあああああ！ があああ、ああああ、あああががああ！」

明らかに正常な人間の発声ではない。発していると言うよりは、絞り出されていると形容すべき逼迫した叫びだ。

もしかすればこの駆動鎧の操作方式が、精神や脳に影響を与える類の構造なのかもしれない。

(だとすれば、作戦を見誤ったか?)

この駆動鎧の操縦者にさらなるストレスを与えれば、あの拙い操縦技術のまま、これまでよりも見境なく暴れまわる可能性がある。

体よく言えば、暴走だ。

(いや、むしろそのほうが都合がいいか? 逃げてるだけで相手は自滅だ。動きは恐らく単調になる。凌ぐのはそれほど苦じゃない。問題は警備員なんか来て大取物になって、俺まで拘束されることだ)

学生、しかも風紀委員が捕まるとなれば、ことは単純では済まないだろう。最悪の場合、退学だ。そんなリスクはとてでもないが犯せない。

例え暴走したとしても、中の人間がへばってしまえばそれで終わりだ。そうでなければ有人操縦にすること自体がナンセンスである。研究所の連中が人工知能を組み込んでいる可能性も否めないが、本的には畑違いである。優先順位としては低いだろう。

後遺症が残る可能性も否めないが、他人の脳と自分の将来では比べるべくもない。それが顔も知らない相手となればなおさらだ。

見捨てる。煽れ。怒らせる。もつとだ。もつとだ。今まで能力者たちにやってきたように、心を衝け。冷静さを押し出して、自分を捻じ込め。他の何も考えられず、猪のように相手の心を走らせればいい。

「ぐ、ごろず、ごろじで、ぎえじまえ!」

何とか聞き取れるだけの声を発するだけの自我が戻ってきたところで煽りの一つでも言っただろうとしたとき、より大きな声がかから被さってきた

「タメゾウ! お前、何してんだ!」

目をやると、そこには先ほど倒したはずの半蔵が立っていた。他の連中に比べて念入りに痛めつけたはずだが、存外に体力が豊富だったらしい。

「そいつはやばいって言ったじゃねえか。早く降りやがれ！」

怒鳴り散らす半蔵のほうへと、駆動鎧の注意が逸れる。廷兼郎の足型がくつきちと残った顔面で、下にいる半蔵を覗き込んでいる。

その仕草に、廷兼郎の神経が漫ろ立つ。

倉庫の軋み、関節の方向、曲がり具合、重心の位置。そこから察せられる行動は明確であった。

「ギイギガアアアアア！」

劈くモーター音を上回る叫びは、およそ人のそれを逸脱したものだった。それを向けられているのは廷兼郎ではない。今しがた倉庫から満身創痍の様子で出てきた、半蔵である。

人とは思えぬ人の叫びを聞きながら、廷兼郎はぼんやりと思いを巡らせていた。

その叫びには、自分も聞き覚えがあった。というより、自分の口から発せられたものによく似ていた。

妹に完膚なきまでに体を壊され、心を踏みにじられたとき、自分の口から飛び出したものと同じような気がした。魂の支柱が折れるときの、拉げの音。

彼の中の決定的な何かが、砕け散ってしまった音。

耳に苦しく、心を潤わせる音。

「だらああ！」

短く叫ぶと、廷兼郎の体は既にその場から飛んでいた。半蔵へ向かう駆動鎧と交差する形で

(俺の質量でズラせるか?)

分からない。それでも行くしかない。

こんな声を聞いていいのは、こんな音を聞いていいのは、それを覚悟した奴だけだ。出したことのある奴だけだ。魂ごと折れ曲がってしまいそうなほど戦うことを誓った奴だけが、相手にその声を吐かせることが出来るんだ。

この不良連中は、何も覚悟なんてしていない。ただまんぜんと、

まんじりと、なんとなく、成り行きに任せてふらふらと事態に立ち入ってしまった只の人間だ。

そんな奴らに、そんな奴らに

「くあっ！」

前転気味に突き出された右の踵が、首と付け根へ命中する。

「おらあああ！」

そのまま右足で相手に体重を預け、そこを軸足にしてさらに左の後ろ回し蹴りを叩き込む。

刹那に繰り出される二連の蹴りで、ようやく駆動鎧の首が傾ぐ。

その後は首の方向に体が沿い、半蔵の二、三メートル横を通り過ぎた。

遅れて、半蔵の目の前に廷兼郎が落ちて来る。どたりと背中であてから転がる様に、受身を取るような素振りは見られない。

「お、おい、あんた！ 大丈夫かよ」

半蔵の呼びかけにも、廷兼郎は答えられない。およそ三階の高さから自分で加速をつけて落ち、さらにその僅かな時間のうちに巨大な駆動鎧をずらすほどの二連蹴りを放ったところで、彼の神経は受身に回せるほど残されていなかった。

「あんた、こそ、大丈夫か？ 忍者さんよう……」

立ち上がりながら、半蔵の様子を窺う。やはり廷兼郎がつけた怪我以外に見当たらない。

「あの駆動鎧のスペック、知ってるか？」

「え？ いや、凡そにしか……」

「構わない。教えてくれ」

「倒すつもりなのか？ 駆動鎧を」

徹底的に痛めつけたためか、その声は弱々しいため、どこか廷兼郎を心配するようなものになっている。

「人間一人であんなのを壊すのは、別に珍しくないさ」

「でも、それは武装した警備員とか、能力者の話だろう」

「ぐだぐだと。中に乗ってるのがどうなってもいいのか？」

顔を向けもせず、厳しい口調で言う。いちいち優しく対応できるほどの余裕は既に失せている。

しかし半蔵のほうは、つと何かを思いついたように言葉を継いだ。

「もしかして、助けてくれるのか？」

「……助ける？」

一瞬、何のことを指しているのか分からなかった廷兼郎は、僅かに顔を向けて言った。

「それは、引きずり出してから考えようか」

「とりあえず逃げるぞ」

言うに早いか、廷兼朗は半蔵の腰に肩を当てるようにぶつかり、そのまま彼の体をひよいと掬い上げた。打たれた腹部が痛むのだから、若干呻きはしたものの、半蔵は大人しく担がれている。

倉庫から出てきたときの様子から窺うに、歩くことさえ億劫だと分かる。連れ回すよりは担いでしまったほうが話は早い。

「それで、あれは何だ？ 何でもいいから教えてくれ」

突然担がれたことに驚いたのも束の間、そんな余裕などないことを悟った半蔵は、努めて冷静に廷兼朗の問いに答える。

「あれは駆動機制御の実験機だって言ってたんだ。だから武装はされてない。でも操縦方式が独自で、神経を繋いじまうらしいぜ」

「なるほど、大方は思った通りか。網丘さん！」

「聞こえてるわよ」

繋ぎっぱなしだった無線から声が返ってくる。

「五分くれ。もう調べてるから」

「一分です。人を抱えてるんだ。逃げ切れない」

本来なら一分でさえ長すぎる。それでも何とか持ちこたえてみせるといふ覚悟が、切迫した声となって網丘に届く。ならば網丘としても五分などと甘ったれたことは言えない。

「分かった。死ぬなよ」

言われるまでもなく、廷兼朗に死ぬ気はない。こんなところで捨てる命ならば、彼はとっくに生きることが投げ出している。

しかし、そんな覚悟や事情とは関係なくもぎ取られるのもまた、命というものだ。

さっそく駆動鎧が追走に入る。二車線を塞ぐ四つん這いの巨体が、

明らかに廷兼朗を狙い定めている。後ろ目に様子を窺っていた彼は、すぐに横の道へ飛び込んだ。

遅れて、隣の倉庫が轟音とともに揺さぶられる。考えなしに突っ込んだ駆動鎧が壁にぶち当たったのだろう。まさか一撃で分厚いコンクリートの壁を通り抜けることは出来まい。これだけで十分な時間稼ぎになる。

「お待たせ、字緒」

早速返ってきた網丘の声を、廷兼朗は無言で促す。その間も倉庫から遠ざかりつつ、目を切らさず注意している。

「アクチュエーター・コントロール・エグゼミネーション。コードネーム『ACE』。こいつで当たりでしょう」

「スペックは？」

「アクチュエーターが、人工筋肉で統一されてる」

「人工筋肉？」

「人工といっても、筋肉繊維自体は動物から取ったものだ。鯨やイルカの筋肉に処置を施して組み込んでいる。調査捕鯨とかで捨てるはずのを買い取って」

動物の筋肉を使っているとすれば、なるほど機械的部品があまり見られないのも納得である。

「動物保護団体が黙ってませんね」

「でもエネルギー効率は無類よ。モーターだの油圧だのなんて、まるで目じゃないだろう」

「そんなものを、あの大きさまで詰め込んだのか」

「操作方式が独自って話だけど、電位接続方式を用いてるみたい。神経の電位を直接読み取って、そのまま駆動鎧の運動に反映させる。習熟すれば、これまでの駆動鎧よりも直感的な操作が可能らしい」

それは実際に見てきた廷兼朗も納得するところである。操作の習熟は済んでいないものの、人間らしく、かつ駆動鎧という概念から逸脱しつつある流麗な挙動は目に焼きついている。

「それに人口筋肉は有機物だから、処理が楽だ。微生物で分解すればいい」

「……ってことは！」

網丘も廷兼朗と同じ結論に至っているらしく、先回りして答えてくれる。

「保険として微生物による自壊剤が仕込まれている、ってところまでは調べたけど、場所が不明だ。それに分かったとしても、相当な衝撃を内部に貫通させないと誤作動は期待出来ない」

衝撃を貫通といっても、先ほどの二連蹴りの感触から言えば、それは難しい。動物の筋肉を満載させた駆動鎧のアクチュエーターは、それ自体が優れた装甲であり衝撃緩衝材なのだ。しかも科学的な処置によって無理やり筋密度を高められているのだろう。相当な筋量を誇る荒涼の体を打ち抜いたときは比べ物にならないほどの堅牢さと柔軟さを有していた。

単純な打撃であれを崩すのは難しい。だからといって、ここで諦めるほど廷兼郎は潔くない。

「人工とはいえ、筋肉なんでしょう」

ふと気がついたように反駁する廷兼郎の声音が、その場においては異様に軽く、どこか上擦っているように聞こえた。

「色々、試したいこともある。何より網丘さん。こういう手合いのために、あの特訓をさせたのでは？」

最近になって取り組み始めた、装甲車の破壊訓練。分厚い鉄板を拳や掌底によつて破壊、かつ内部へと衝撃を浸透させる打撃方法の習練。その試みは、人間よりも駆動鎧のような手合いにこそ有効である。

「自信のほどは？」

「皆無ですね」

間髪入れず答える廷兼郎の声に、陰りは全くない。元より廷兼郎が自信を持って臨める戦いなど、少なくとも学園都市内には存在し

ない。機械と肉の半ばで作られた巨人を前にして、磐石と言い果せるのは高位の能力者くらいのものだ。普通人に過ぎない自分が口にすることではないと、彼は心得ている。

「元より選択の余地はないな。一応は警備員アンチスキルに連絡しておく」

「今さら、野暮いこと言わんでください。僕は一人で楽しむ性質なんです」

「五分だ。それから通報する。現場に到着するまでおおよそ十分。だから」

「最大で十五分、いただけるとはですね」

再び確認するようにして、廷兼朗が呟く。必要十分か、はたまた過多か。彼は特に感想もなく受け入れる。そして何を言うでもなく、廷兼朗は半蔵を降ろした。

「悪いな。聞くことは聞いた。もう用はない」

突き放す言い様に、むしろ半蔵は後ろ髪引かれる思いを抱く。

自分やその仲間を好きなだけ殴りつけ、昏倒させた男を前にして、半蔵は不思議と怨み辛みを抱こうとは思わなかった。単に状況がそれを許さないほど切迫しているということもあるだろう。

「あんた、どうすんだよ」

「どうしてほしい？」

弄うような言葉は、まともに受け答える気がないことを言外に告げていた。

「本当にタメゾウを助けてくれんのか？」

「そつだ、と言えば、満足かい？」

何とも嫌味たらしい返事に煽られて、半蔵が顔をしかめる。その直後、二人のすぐ横にある壁が打ち鳴り、ぶるりと震えた。奥から破城鎚のごとき拳が規則的に打ち込まれているのだろう。耳を聳する打撃音の中に、段々とひび割れる硬く脆い音が混ざる。

「人の心配してる暇はないぞ。あんただって、逃げられんかもしれ

ないなあ」

廷兼郎の軽口に被さって、とうとうコンクリートの壁が耐久限度を超えた。破片が対となる倉庫に当たるなか、砕かれた壁からはずるりと灰色の手が伸びる。

「おお、ぐおおお、おああああ！」

肘まで突き出た腕がもがき、コンクリートの壁を引き搔く。その間、一方の拳でも壁を叩き続けている。

「そう暴れるなよ。もう逃げない。仕切り直すのはこれで終わりだ」
巨大な駆動鎧の腕に向かって、噛んで含めるような優しい口調で話す。しかもその内容は、まるでこれから駆動鎧を真っ向から受けて立つという内容だ。

半蔵は半ば青ざめた心地を引き摺って、今さら後ろへ下がる。だが、逃げ切れない。心が、興味が、彼を半端な位置に留めている。タメゾウが本当に助かるのか見届けたいというのもある。しかし何より、目の前の男が如何にして駆動鎧を制圧せしめる心積もりなのか。それが知りたかった。

それが妄想による実現不可能なものだと分かっているならば、そのようには思わなかっただろう。だが自分を救ったあの蹴りは妄想の産物などではなく、一人の人間が研鑽した技術と、練磨した精神とが為せる離れ業であることが見て取れた。

この男なら、あるいは

武器も用いず、超能力も身に付けず、真っ向から駆動鎧を無力化できるのではないか。とうとう壁を破って躍り出た駆動鎧を見据えている男の背中を見遣りながら、半蔵は一つの決心を固め、その場から一目散に離脱した。

駆動鎧『ACE』は路地に挟まり、もがき続けている。その隙に廷兼朗はACEの顔面に飛びかかり、無防備な後頭部へと移動した。ふりほどこうと暴れるACEの動きなど関せず、ぴたりと体に張り付いている。

「こおおお」

ACEの呻きに隠れて、廷兼朗は静かに調息する。その間も激しく揺れ動くACEの背を巧みに乗りこなしている。波間を泳ぐ小船のように吸い付き、それでいて姿勢の一切に怪しいところは見られない。

太極拳で言うところの粘沾連随の教え。相手から離れず付き添い、内懐にて勝機を見出す一連の動きである。しかしこの教えは、あくまで人間を想定したものである。貼りつくとはいえ、人間対人間の距離感を逸脱するほどではない。

しかし対抗手段では、人間対人間で考えられるような距離感以外の射程も視野に入れている。遠隔より恣意性の高い攻撃を行なう能力者や、そも体躯が人間を凌駕する者などを相手取ることこそ、対抗手段におけるスタンダードと言えるだろう。

今回のように巨大な相手には、通常の貼り付き方ではむしろ危険である。足元にいたとて蹴られれば致命傷であり、ただ張り付くだけでは掴まえられるのを待つばかりだ。ならばこそ、内懐を取るこのの先を行かねばならない。

その一つの解答が、いま廷兼朗が実践している技術であった。相手に貼り付き、内懐を取るだけではない。相手の体そのものを足場と考へ、そこに手足をついて攻防を行なうというものだ。

常に遷移し流動する相手の動きを読み取り、こちらの足場を確保することは容易ではない。とはいえこれが行なえれば、体躯のハンデをほぼ帳消しに出来る。

今はまだ限定的な運用しか行なえないが、最終的な理想形としては駆動鎧のような相手だけでなく、人間大の相手にさえ応用出来ることである。だが今は、ただ乗りこなすだけで事足りる。

渾身の一撃を放つべく右腕を腰の横まで引く。ACEが完全に倉庫を破壊し、運動の自由度を広げる前に行なわねばならない。

「せいっ！」

ACEの首を大きく踏みしめ、後頭部に右掌を叩き込む。釣り鐘を打ったような音が響き、波紋のように広がる音波に同期してACEの体が痙攣する。

空気の弾ける音が後に続き、まもなく焦げ臭さが周囲に漂い始める。

後ろに回った廷兼郎からも、ACEの顔面を覆うポリカーボネートのカバー裏に焦げ付きが見える。どうやら先の一撃はACEのセンサー部に短絡を起こさせたようだ。しかしそれ以外で変化は見られない。自壊剤の誤作動は起きていないのだろう。動きそれ自体は元気そのものだ。

全身を壁から抜き出したACEは激しく身を振るって廷兼朗を落としかかる。さすがにこれには耐えきれず、彼は腕で払われる前に飛び退き、またも広い車道へと出た。

特に気落ちしたふうもなく、あっさりと離れた廷兼郎は、センサー類が潰されて一時的にこちらを見失ったACEの様子を観察している。

先の打撃が通用しないということは、廷兼朗も半ば確信していた。とりあえず装甲車を凹ませることは出来るようになったものの、ACEの人工筋肉を打ち抜くにはまた違った技術が必要となる。単なる破壊力だけでなく、それを如何に減衰させず目標へ伝達するかという能力が高くなければ、靱性の高い人工筋肉の奥まで衝撃を送り届けるには至らない。

未だ至らぬ身でも願った結果が得られるなどと、どうして夢想し得るのか。たかが装甲車の一部を歪ませる程度で、駆動鎧を停止できるといふのはあまりに虫のいい妄想である。

しかし、それを弁えていることが、必ずしも優良とは言い難い。ある意味、そうした消極的思考が打撃を鈍らせていると言い捨てられても仕方はないだろう。それに弁えていたところで、対抗する手段が見つからないのは事実なのだ。

賢しく斜に構えたところで、何も変わりはない。自分も、相手も

まだ足りない。右腕の痺れは廷兼朗が放った衝撃が跳ね返ってきていることを伝えている。もっと、もっとと伝導率を上げ、こちらに何の手応えも戻らないほど衝撃を流し込まなければ駆動鎧の装甲は砕けず、内部を破壊するには至らない。

この土壇場で、行なわねばならない。

すでに一分が経過したものの、打開の策はない。ものの数分で湧き出るものなら、そもこのような苦境には立たされていないだろう。しかし如何に泣き言を並べ立てようとも、今まさに直面している致命の気配だけが真実だ。

自分は今、死にかけている。あの太い指が高速で撫ぜ過ぎるだけでも内蔵が破れ、まともに食らえばトマトの水煮よろしく赤い液をぶちまけて果てる。

死にそうだ。死んでしまふ。だからこそ、生きたい。

否、それさえも、思い込みに過ぎないのだろう。背水の陣、死中に活を得るといった日本人的嗜好が、擬似的な窮地に酔っているのかも知れない。

いざとなれば、何もかも振り払って逃げてしまえばいい。全てを忘れて、諦めて、布団にもぐってしまえばいい。そのような余地が残されている時点で、それは仮想なのだ。

では、自分の行いは虚しいのだろうか。とうとう路地から這い出てきたACEが腕を振りかぶったのを確認しながら、廷兼郎は茫洋と思想を巡らせる。

大人一人を包めそうな掌が振り下ろされるのを、何となれば漠然と受け入れてもいいのだ。対抗手段も、天羽根流も、全て忘れてさばり、諦めてもいいのだ。誰かにその行いを止めてもらえるほど、廷兼郎に猶予はない。

必然性や義務さえ、目を瞑ってもいい。しなければいけないことを置き去りにするのはよくあることだ。別に放棄したところで自分ひとりが責め立てられる謂れはない。義務とて相対的な尺度ではない。時と場所によって移ろう物事で、人間が移ろうのをどうして止められるのか。

何も無い。どこにもない。そう、だからこそ

覆い潰そうとするACEの掌を、僅かに身を引き、掠らせるほどの微妙な位置で見切る。そうして目の前を過ぎる指の一本に、廷兼郎は手を添える。

テーブルクロス引きの隠し芸のように、一気に自らの懐へ引き込む。

巨大な手が地面に着くまでの僅かな間。廷兼郎の手元を基点にしてACEの腕がとてつもない勢いで捻転する。平衡を失うなどという程度ではない。まるで自らのトルクをそのまま被ったように、抗い難い力の奔流に巻き込まれていく。

手よりも先に肩口が落ち、転げる背がまたも倉庫の壁を打つ。ひっくり返って窮屈そうにしているACEに胸に飛びつき、すかさず調息、練気、震脚、打突。

胸部と腹部の両方が大きく凹み、人体を模したACEの体が歪に撓む。ACEどころか道路や倉庫にまで衝撃が徹り、ごろごろと獣が喉を鳴らすような音が響いた。

「くそっ！」

たったの一撃で身を翻し、ACEから降りる。先の打突でも目立った効果は現れていない。しかしその前の技法は十分に通用した。

機械とはいえ人体に近い構造を持つ以上、そこに柔法の介在する余地は存在する。アクチュエーターが人工筋肉だからと言って、中に入っているフレームを動物の骨にする必要はない。恐らく骨格に当たる部分にはロボットらしく剛性の高い合金類を使用しているはずだ。そして人工筋肉を無用に断絶させないよう、可動域を人間のそれに準拠する必要がある。ならば廷兼郎の人体、そして柔法への理解が宛然と適応されるのは道理である。

だが、これだけで致命的な衝撃を与えるのは難しい。むしろこれは廷兼郎にとって回避である。

人工筋肉で覆われながらも泣き叫ぶ関節を動かし、ACEは器用に体を起こす。段々とその動きには無駄がなくなってきたのが分かる。感覚的な操作を要求する分、慣れてしまえば早期に習熟が行なわれるのかもしれない。

決死の覚悟で行なった柔で捻出した時間は、たったの一撃分。その一撃すら不発に終わった。残り三分ほどの間、自分はあと何回避けて、何回打突し、無駄に終わらせればいいのか。廷兼郎はこれまでのやり取りから算出しようとしたが、途中で止めてしまった。

皮算用と分かりきったことを考えるのは、相手を煽るときだけで十分だ。今はただ、敵を打ち続け、活路を見出すのみである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1558k/>

とある武術の対抗手段（カウンターメジャー）

2011年10月9日03時18分発行